

Osanai, Kaoru
Osanai kaoru zenshu

Ea

CARD (please type)

NO. OF COPIES

Kaoru

Kaoru zenshu
小山内薫全集

vols.

PL
835
S27
1929
v.1-8

EM NO. Letter of Feb. 6 '70

No. 54/846 Cdn. $300.30

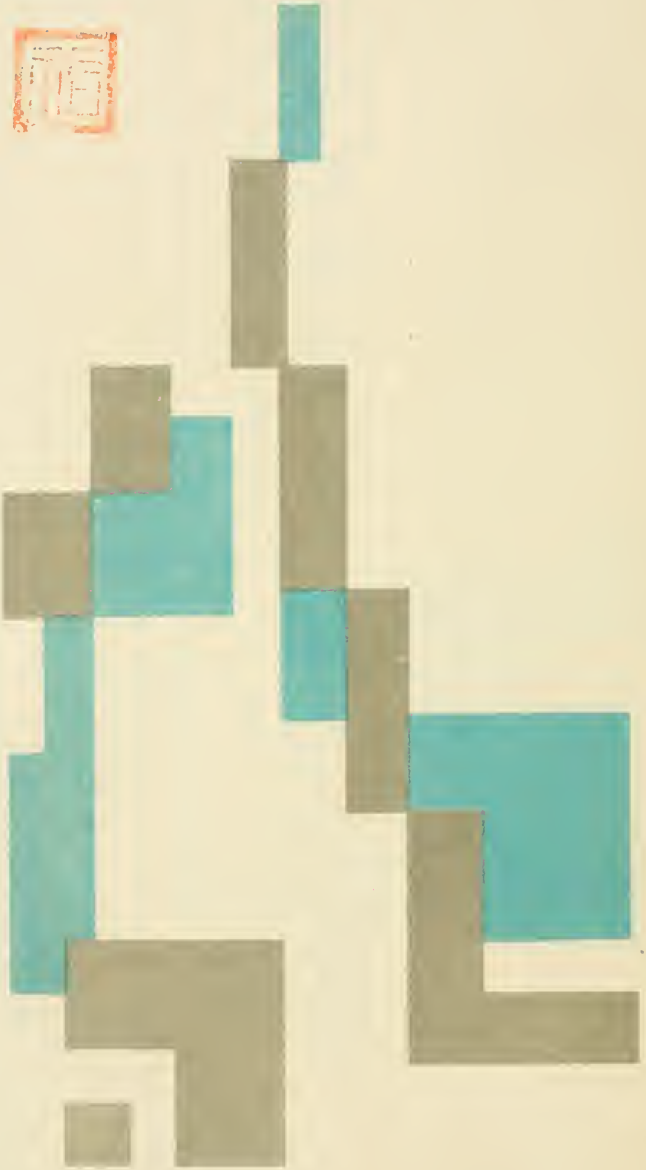
PRICE

LOCATION

EAS

D BY Raymond W. Ch

COUNTER SIGNED BY



苐壹巻

小山内薫全集

春陽堂



1　微笑める先生



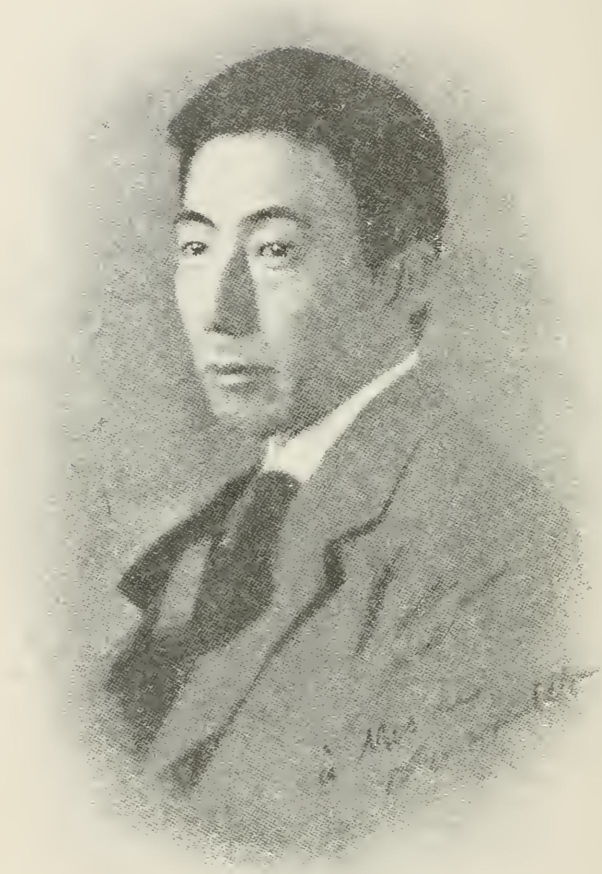
2　大學生時代



3　「小野のわかれ」の後



4　自由劇場初演の時



5　莫斯科にて



6　赤坂田町の書齋



7　同じく



8　大正六年頃



9　四谷坂町にて



10　馬上の先生



11　　ある日の禮装



12　テエブル スピイチ



13　四谷南寺町にて



14　築地小劇場主事室にて



15　展覽會場にて



16　最後の書斎

小山内薫全集 第一巻 目次

I

II

寫眞目次

1 微笑める先生。――大正十五年頃。

2 大學生時代。――明治三十八年頃、「帝國文學」編輯委員當時。前列中央が先生。

3 「小野のわかれ」の後。――明治三十九年頃。

4 自由劇場初演の時。――明治四十二年十二月二十八日。この毛織帽を「ボルクマン」が冠つた。

5 莫斯科にて。――大正二年春。當時の總領事川上俊彦氏の撮影印畫。

6 赤坂田町の書齋。――大正三年頃。

7 同じく。――大正四年頃、長男徹を抱きて。

8 大正六年頃。

9 四谷坂町にて。――大正十年頃。抱けるは三男喬。

10 馬上の先生。――大正十年夏、蒲田で。

11 ある日の禮裝。――大正十一年頃。

12 テエブル・スピイチ。――大正十三年、大阪假寓時代。

13 四谷南寺町にて。――大正十三年十一月歸京匆々。

14 築地小劇場主事室にて。――昭和二年。

15 展覽會場にて。――昭和二年夫人令息と共に。

16 最後の書齋。――先生在りし日のままに飾つたもの。

十三年

追憶の一。

授業が終へると鞄と草履を抱へて小學校の門を出た。二三人の友達と道草を食ひながら歸る。午後三時。

招魂社の馬場を突つ切つて……馬場のまはりの土手には枳殼(からたち)の花が白く咲いてゐた……富士見軒の横町へはひると、琴の音がする――僕の家だ。

また琴の會だなと思ふ――だらだら坂を降りると三階家がある。これが僕の家だ――琴の音は止んだ。

家へはひると、直ぐづか〳〵とお座敷へ通つて、お母さんに「只今。」と挨拶する。お客樣にもお辭儀をする――お客樣の中に僕の好きな吉野のをばさんがゐる。

今一曲濟んだところと見えて、一つ一つ爪をはづしてる人がある。乾いた手拭に絃の先を卷きつけて絃を締め直してる人がある。琴唄の本をあつちこつちと明けてゐる人がある。細い可愛い烟管で烟

草を飲んでる人がある——吉野のをばさんはお菓子を二つ三つ半紙に載せて僕にくれた。

僕は直ぐ自分の部屋へ引つ込んでしまつた。その時分僕は賑かなとこの嫌ひな、口數を利かぬ、おとなしい、妙に物寂しい子だつた。毎日部屋へ閉ぢ籠つて本ばかり讀んでゐる……けふも「鐵假面」の續を讀み出した。

奧では又琴の合奏が始まつた——誰だか一人調子つ外れな聲を出して唄ふ人がある。

その時分僕の家は中の上といつた階級の婦人連の一種の倶樂部であつた。家に用のない夫人連が每日のやうに集まつて來ては何かしらして遊んだものだ。僕の母も家に用のない夫人の一人だつた——僕の父は僕が五歲の時、少からぬ遺産を殘して死んだ。

琴が濟むと、三味線が始まつた。三味線もひとしきり段物を彈くと、新内の流しだの、芝居で覺えて來た三寶の立廻りだのといふものが研究される。それが濟むと何か食べるのであらう、ぱつたり靜になつた。

下女がお茶とお壽司を僕の部屋へ持つて來た——お裾分だ。僕は海苔卷を丸ごと頰張りながら尙「鐵假面」に讀み耽る。

やがて奧では話が始まつたらしい。さかんに笑聲が聞える。誰か便所に立つたと見えて手洗水の音がする。

追憶の二。

僕の家に妙な寫眞がある。僕の母を初として十人あまりの夫人が、よそゆきの著物に態とお揃に黒繻子の襟をかけてお揃に黑繻子の帶を締めて、お揃に帶の上に細い時計の鎖を見せて、お揃に紙で出來た櫻の大きな花簪を差して映つてゐる。裏を見ると、母の若い時の手で「明治廿四年四月寫」としてある。寫眞屋は淺草公園の江崎禮二、お花見の歸りにとつたものらしい——僕の好きな吉野のをばさんも氣取つて映つてゐる——印畫には一面に星が出てゐる。

十人あまりの內、一人はその頃帝國大學の教授をしてゐた或英吉利人の外妾だ。一人は當時亞米利加公使館の書記官をしてゐた人の內緣の妻だ。一人は陸軍監督の夫人だ。一人は軍吏の夫人だ。一人は非職騎兵中佐の夫人だ。吉野のをばさんはその頃鳴らした政治家の奧さんだ。僕の母は陸軍々醫の寡婦……

又その頃の寫眞で、母が僕の姉の著物を著て、吉野のをばさんが僕の妹の著物を著て、髮もおのおのその年頃の形に結つて、二人向ひ合つて橫を撮つたのがある——假裝は當時の流行だつた。

又もう一枚、母と吉野のをばさんとが、いづれも意氣な縮緬浴衣を著て、二人とも後向きで、吉野のをばさんは島田、母は銀杏返し、今にも水の垂りさうな出來たての髮を撮したのがある。

母はその頃卅二三であつた。吉野のをばさんも——母よりは年下であつたが——大方似合の年恰好

であつた。母は年相應に老けて見えたが、吉野のをばさんは年よりはずつと若く見えた。

「番町のおばけ」とは吉野のをばさんの綽名であつた。吉野のをばさんが束髪に結つて歩くと、年が分からぬといふ噂であつた――をばさんは五番町に住んでゐた。それで「番町の」と言はれたのだ。

それから更にもう一枚、吉野のをばさんが一人で映つてゐる手札形の寫眞がある。これは一番町の武林でとつたものだが、少しも星が出てゐない。十五六年前の吉野のをばさんの姿は髣髴として一枚のP、O、Pに刻みつけられてゐる。

この寫眞の吉野のをばさんは、前の二枚の寫眞の吉野のをばさんとはまるで風が違つてゐる――をばさんは洋服を著てゐる。黒いセルカンとかの洋服を著て、肱掛椅子に腰かけてゐる。襟から胸の前へかけて、黒天鵞絨の飾がしてある。兩方の袖口を折り返したところにも同じ黒の天鵞絨が用ひてある――天鵞絨の艶と柔みとがよく寫眞にとれてゐる。黒の手袋をはめて、手袋の上から腕環を嵌めてゐる。右の手に細いのを二つ、左の手に巾の廣いのを一つ。胸の中程から左へ斜に、時計の金の鎖が二筋垂れてゐる。鎖の先は左の手に隱れて見えぬ。鎖には小さな金の寫眞入が附いてゐる。

頭は油氣なしと見えて、毛が一筋々々あざやかに撮れてゐる。束髪は頭のてつぺんに平に丸くパンの形のあるやうに捩つてある。前髪は剪つたのを廣く房々と下げてゐる。束髪の左に小さな薔薇の生花を一輪差してゐる。

をばさんの顔は美しいといふ方ではないのだが、何となく人の氣を引きつける。頬は瘦せて少し貧相だが、眼がぱつちりしてゐる、眉毛が濃い、口に愛嬌がある。何よりも人の氣を引くのは、その活活した、利口さうな、隙のない、眼の働きだ――それは寫眞にも見える。

をばさんは丈の高い、恰格の好い、立派な女だつた。

僕の家へ集まつた連中の中で、洋服を著たのはをばさん一人だつた。あつちの人の世話になつてゐた人もゐたが、さういふ人は却つてみんな極々日本式の女で、洋服など著て見ようとする者さへなかつた。をばさんは英語をよく話した。これも連中の中に一人しきやない。なんでも下六番町の或耶蘇教の學校を卒業したのだとか聞いた。

追憶三。

僕が始めて吉野のをばさんの家へ遊びに行つたのは、なんでも六月頃の或土曜日の晝だ。その日はをばさんの家に何か會があつた。けれども僕の母や僕の家に集まる夫人連は誰も來てゐなかつた。僕の家に集まる連中の會とはまるで性質の違ふものらしい。

お座敷の障子を取り外して、緣側にまで多くの男女が居こぼれてゐた。床の間の前に紺青の天鵞絨をかけた大きな机が置いてあつた――その天鵞絨に「神者愛也（かみはあいなり）」と黄いろく刺繡がしてあつた。

顎にも鼻の下にも髯の生えた、肥つた、色の黒い、フロツクコオトを著た男の人が、机の側に立つて兩手を高く擧げると、座敷から緣側に居流れてゐる總ての人が手を額へ當てて俯向いた。

僕は庭のブランコに腰をかけてこれを見てゐたが、みんながやるので、自分も訣は分からず、見やう見眞似に額に手を當てゝ俯向いた。

その髯の人は、暫く低い聲で何だかごとごと言つてゐた――ちつとも聞えない。

その內に「アアメン。」と言つて止めた。座敷に溢れてゐた男女も「アアメン。」と言つて頭を上げた……僕も「アアメン。」と眞似をして頭を上げた。

をばさんの家の庭には山もない、池もない、たひらな廣い地面に一ぱい梅の樹が植ゑてある。まだ礫ほどの青い梅の實が鈴なりになつてゐた。

書生がサブレエを半紙に捻つて、庭まで持つて來てくれた――「奥さんからですよ。」と訛のある詞で言つた。

この書生は名を田丸といふ、非常に眼の近い、面皰だらけな男だつた。

追憶の四。

吉野のをばさんが出たとかいふ下六番町の耶蘇の女學校に、何かの慈善會があつた事がある。

吉野のをばさんはかういふ種類の會のためには、いつも率先して切符を賣つて廻る――その賣り方が又巧いので、まるで知らない人のやる會までが賴みに來る。それが今度は自分の出た學校の事である。をばさんは十日ばかりといふものは、今まで每日のやうに來た僕の家へも顏を見せずに奔走してゐた。

當日になつた。

僕の母は芝居や演藝會へは好きでよく出かけたが、さういつた會はあまり好きの方でなかつたものだから、義理で買つた一枚の入場券は僕にくれてしまつた。

僕はそれを持つて得意で出かけた。

學校でをばさんに會つたら、「よく一人で來てくれたのね。」と言つて、大變喜んでくれた。自分の用などはそつち除けにしてしまつて、僕の側を離れない。僕も知らない人ばかりゐる所で、をばさんが側にゐてくれるのは、どんなに心强かつたらう――僕は嬉しいと思つた。

をばさんは僕を學校の一番高いところ――屋根の上の運動場のやうなところへ――連れて行つてくれた。市ケ谷の士官學校の馬場で陸軍の生徒が五六人馬を稽古してるのが、人形のやうに小さくはつきり見えた。

をばさんは又、僕をバザァへ連れて行つてくれた。綺麗な著物を著た綺麗な人の手から、西洋の繪

本を二册買つてくれた。僕は本が好きだつたから、非常に喜んだ。僕の喜ぶ顔を見て、をばさんも喜んだらしい。

　この二册の本の内、一册の表紙には英吉利の水兵の繪が色刷になつてゐた。もう一册の表紙には、赤い三角帽を冠つた厚い外套を著た、白い髯の生えたサンタ・クロオスが雪の積つてゐる煉瓦の塀を今あつちからこつちへ越えるところで、塀の上に左の片肱をかけ、右の手頸をかけて、躰を丁度肩まで出したところである――その眼を細くしてにこにこ笑つてゐる顔は今でもはつきりと覺えてゐる――中にはどんな繪があつたか、もうすつかり忘れてしまつた。

　僕はその本の匂を嗅いだ。生れてから今まで一度も嗅いだ事のない匂だと思つた。僕はこの時からこの匂が好きになつた――西洋の本の匂を始めて嗅がせてくれたのは吉野のをばさんだと、それは今でもさう思つてゐる。

　餘興が始まつた。

　春の野原のやうなところに、綺麗な女の子が大勢手を鎖いで歌を唱つて遊んでゐる。その綺麗な女の子の中に、たつた一人みなりの汚い女の子がゐる。なんでもどうかしてその著物の汚い女の子が野原の眞中にたつた一人殘されてしまふのだ。すると遠くの森で――舞臺の後で――「ララ。」と呼ぶ聲がする。又違つた方角で「ララ。」と聲がする。又何處かで、「ララ。」と呼ぶ聲がする。その「ララ。」「ラ

ラ。」と呼ぶ聲が悲しく尾を引いて、何となく胸の底に沁み渡る。僕は寂しい處へ引き入れられるやうな氣がした。寂しい野原の夕暮の朧の中へ自分の體が消えてしまふやうな感じがした――をばさんはもう僕の側にゐなかつた。

ララといふのは、取り殘された女の子の名らしい。その後の筋はどうであつたか、もう少しも覺えてゐない。

この會に僕がおとなしくしてゐたといふので、その後をばさんは僕を、かういふ會のある度に、紅葉館(こうえふくわん)だの鹿鳴館(ろくめいくわん)だのへ連れて行つてくれた。

追憶の五。

僕の家に假裝會があつた事がある。

吉野のをばさんは二三人の夫人連と一緒に、髮の毛の先を剪つて、大髻(おほたぶさ)に結つて、草鞋を穿いて、手古舞姿で庭から乘り込んだ――何處で覺えたのか、どうとかかうとかして「……藤の花」などといふ木遣(きやり)を節廻し上手に歌ひながら。

その時分僕の家に食客をしてゐた非職看護卒の顏中髯だらけな叔父さんは、赤毛布を頭からすつぽり被つて、達磨になつて出迎をした。

手古舞姿の連中が緣側へずらりと腰をかけて、御馳走を喰べたり、笑つたりしてゐる内に、僕の家では僕の家の方の趣向がすつかり出來上がつてしまつた。

手古舞姿の連中が吉野のをばさんの家へ引き上げるのを、僕の家では一同で態と送つて行つた――僕も澁々連れて行かれた。

十五六臺の人力車が勢よく吉野のをばさんの家の門に著いた。

手古舞姿の連中が草鞋の儘づかづかお座敷へ通つて、一休みしてゐる内に、僕の家の連中は早速の假裝をし濟まして、勢猛にお座敷へ押し寄せ、手古舞の連中を驚かした。

中にも僕のもう一人の叔父さん――これは軍醫、當時三等軍醫――は、カイゼル髭のある顏へ白粉をつけて、女の著物を著て、その上へ叉簑を著て、菅笠を冠つて、緋縮緬の扱帶を碁盤の足へ結びつけて、品をしながら引き出した。碁盤の上には將棋が五つ六つ乘つてゐた。

何が始まるのだらうと、一同は暫く鳴を靜めて見てゐた。

叔父さんは芝居でするやうな女の聲色を使つた。「紅葉のあるのに雪が降る、さぞ寒う――」と切つて、「ごばんしやうぎ」と言ひながら、碁盤と將棋を指さした――大喝采。

僕はその晩始めて吉野のをばさんのとこへ泊つた。をばさんは疲れた體を橫たへて僕と一緒に寢た。

追憶の六。

吉野のをばさんは遊び好きも遊び好きだが、贅澤も隨分贅澤だ、といふ話を聞いた事がある。嘗て箱根の湯本に逗留してる間に、二日に一度宛東京から氣に入りの髮結を汽車で呼び寄せて頭を結はした事がある。

寫眞の話は『追憶の二』にも書いた。吉野のをばさんが寫眞を撮しに行つて、決して一枚で歸つて來た事はない。必ず横向とか後向とか、色々な位置で幾枚もとらせる……

をばさんは僕の家へ繁々來るやうになつてから、耶蘇敎の方の會へは餘り出なくなつたらしい。併し日曜だけは義務的に會堂へ行つたものと見えて『神のことば』の書いてある小さな綺麗なカアドを時々僕に持つて來てくれた。

洋服も餘り著なくなつたらしい。初の內は芝居だけはつきあはなかつたものが、それも終にはあつちから誘ひに來るやうになつたらしい。

僕の母の方の連中はみんな芝居好きだつた。歌舞伎座新富座へは替り目每に團十郎菊五郎の芝居を見に出かけた。中にも好きな二三人は、姿を俏（やつ）して緞帳芝居の立見にまで出かけた。

吉野のをばさんはかういふ連中の一人でありながら、また眞面目な宗敎の方の交際社會にも一と言つて二と下らぬ地位を得てゐたのだ。

吉野のをばさんは立派な宗教界の貴婦人だ。
吉野のをばさんは藝者のやうな人だ。
この二つの考へは子供の僕の頭の中にも始終ごつちやになつてゐた。

追憶の七。

とある春の日曜の晝僕は吉野のをぢさんに始めて會つた。
をぢさんは代議士たる傍、或大きな新聞の社長をしてゐた。中々忙しい人であるから、つい今までに會つた事はなかつた――同じ家にゐるをばさんでさへ一週間に一度會ふか會はない位ださうだ。
その日はをぢさんの書齋に澤山學生が集まつて、珈琲やお菓子の御馳走になりながら、なんだか大きな聲で話をしてゐた――をばさんに連れられて、僕は始めてをぢさんの書齋といふところへはひつた。
をぢさんの書齋は西洋風の書棚が三方の壁を埋めてゐて、窓のあるのは一方だけだ。窓から庭の梅の若葉が見える――書棚には英語の本が一ぱい詰まつてゐた。
をぢさんは鼻の下にだけ髭のある、小兵な、すばしつこさうな人だ。始終にこにこしてるので『惠比須樣』だの、『大黒樣』だのといふ綽名がある。をばさんが僕を紹介すると「好い子だ。」と言つて、

菓子を挾んでくれ、「そこへお掛け。」と安樂椅子を指してくれた。僕は小さくなつて隅つこの小さな古い椅子へ腰をかけた。

をばさんは僕を書齋へ置くと、直ぐ何處か外へ出て行つた。

學生達は僕などには眼くもれず、しきりに「内閣が……」とか「豫算が……」とかいふ話をしてゐる。

をぢさんは僕がはひつて來てから話題を變へたやうな樣子で、洋行をした時の失敗談、額にして書齋にかけてあるナイアガラの瀧の寫眞に就いて、その實見談などをしてみんなに聞かせた。

學生の一人は早稻田の專門學校へ通つてゐて、新聞記者を將來の目的としてゐる人だつた、名を村瀨といふ。一人は高等商業の生徒で、名を三橋といつた。一人は法科大學の學生で、森といふ人だ。この三人は中にも吉野のをぢさんの眷顧を得て、始終吉野のをぢさんのところへ出入をしてゐるのだ。

村瀨さんは佛蘭西人のやうな髭が自慢だ。年が若いのに頭が禿けてゐる。常に『天下の大勢』を論じてゐて、人生問題などに頭を苦しめた事はない。交際家。樂天家。

三橋さんは髭のない柔和な顏、別に大きな野心も抱いてゐない。算盤上手の番頭氣質。

森さんは三人の内で一番好男子。學問は出來るのださうだが、氣が小さいので口頭試驗にいつも失敗する。僕が會つた時は、二年級だつたが、一年級に二年ゐて、二年級を一度遣り損つたその二度目

の二年級だつた。どういふ訣か「あやめ」といふ女のやうな號を自分につけてゐる。そして小さな人形に菖蒲の花の模樣のある著物を著せて、硝子の箱に入れて、自分の机の上に始終載せてゐた。をばさんが外を遊んで歩いてゐる時、をぢさんはいつもかういふ學生達を話相手にしてゐた。併し、をばさんは學生達を可愛がつた。學生達も亦をばさんを慕つてゐた。

この口僕は學生の一人から、をぢさんとをばさんとは子供の時からの許嫁で、同じ家に同じ乳を飲んで育つたものだといふ事を聞いた。

追憶の八。

僕は繁々吉野のをばさんのところへ泊りに行つた。自分から泊りに行つたのではない。をばさんに連れて行かれるのだ。

をばさんは僕の家へ遊びに來て、夜になると、きつと「今夜も借りてきますよ。」と母に斷つて、僕の手を引いて歸る。僕もをばさんが好きだから、默つて附いて行く。

一體僕は子供の時からよそへ泊るのが大好きだつた。「僕にはお父さんがないのだ。」といふ事を自覺してから、なんだか男つ氣のない自分の家が家のやうな氣がしない。何處へ行つても可愛がつてさへくれれば、そこが自分の家のやうな氣がするのだ。だから氣に向いたところなら、何處へでも泊

る。何處へ泊つてもよく睡る。それは今でもさうだ。

僕は吉野のをばさんのところへ毎晩のやうに泊りに行つた。けれども、ついぞをぢさんに會つた事がない。をぢさんは忙しくて僕が寢る時分には、いつでもまだ歸つて來ないのだ。僕が朝歸る時分にはきつとをぢさんはまだ寢てゐるのだ。

僕は吉野のをばさんのところへ泊りに行くと、九時にはきつと一人で先へ寢てしまふ。をばさんはをぢさんの歸るまで田丸と二人きりで起きてゐて、をぢさんが歸ると、をぢさんを寢かして、そして自分は僕の側へ來て寢る――をぢさんの寢る所と僕達の寢る所とは大變離れてゐた。

をばさんは子がない。そして子のないのを始終嘆いてゐた。或時人に勸められて、多摩川の方から八つばかりになる女の子を養女に貰つた。田舍風の女の子ではあつたが、眼の大きな、可愛い子だつた。僕は直ぐ仲好しになつた。

をばさんは自分に子がないから、それで僕を可愛がるのだと今まで僕は思つてゐた。ところが多摩川から女の兒が來てからも、やつぱり僕を連れて來ては泊らせる。そして女の子とは一緒に寢ないでやつぱり僕と一緒に寢る。

をばさんは僕と女の子と仲を好くするのさへ、餘り好まなかつたらしい。

或夏の夜中に雨がひどく降つて、非常に雷の鳴つた事がある。僕は眼が覺めた。隣の部屋で女の子

が恐がつて泣いてゐる。僕が起きて行かうとすると、をばさんはどうしても遣つてくれない……

間もなく女の子は里へ歸された。

追憶の九。

これも夏の晩である。

ふと夜中に僕は眼が覺めた。見ると、僕の眼の直ぐ前に、をばさんの白い足が寢卷を外れてゐる。をかしいなと思つて眼を擦つて、よく見ると、僕は倒に寢てゐたのだ。そこでまつすぐに寢直した。をばさんは口の所へ白い手を當てて、微に鼾を立てて、よく寢てゐた。

追憶の十。

これも夏の事だ。夏の事ばかり思ひ出すところを見ると、一番しけしけ泊りに行つたのは夏らしい。

何だか恐い夢を見て眼が覺めると、側に寢てゐた筈のをばさんがゐない。はてなと思つてゐると、暗い遠くの部屋で誰と誰とだか物爭ひをしてゐるやうな聲が聞える……

やがて臺所の方から、燈もつけずに、暗い廊下をばたばた歩いて來る人がある。やがて、僕の寢て

ゐる蚊帳の外に、女が手桶を重たさうに提げて行く影が黒く見える。廊下を踏む足の音と廊下にこぼれる水の音とが暗闇に響いて凄い――女の影は右の方へ消えた。

どうも今のはをばさんらしい。をばさんに違ひない。一體どうしたんだらうと思ひながら、ついうとうとと眠つてしまつた。

朝起きると、をばさんは僕の側でよく寢てゐる。僕は一旦家へ歸つて、それから學校へ行くのを常としてゐたから、そつと一人で起きて、廣い臺所で顏を洗ひながら、それとなくゆうべの不思議を女中に訊いて見た。

女中の言ふところに依ると、をぢさんはゆうべ餘程おそく歸つて來たらしい。おそく歸つて來て、寢間へはひると、間もなくをばさんと喧嘩を始めた。をばさんは癇癪を起して、床の間の花瓶を柱に叩きつけた。そのかけらがをぢさんの眉間にぶつかつて、血が出た。をばさんもこれには驚いて、自分で臺所まで來て、自分で水を汲んで行つて、自分でをぢさんの傷を冷したのださうだ。

どうして喧嘩をしたのか、それは分からなかつた。家へ歸つて母に話したら「困つたねえ。」と言つたきりで、何が困つたのか僕には分からなかつた。

それから後といふものは、吉野のをばさんも餘り僕を連れに來なくなつたし、母も僕に泊りに行けといふ事を餘り言はなくなつた。

その時分から早稻田の村瀨さんだの、商業の三橋さんだの法科大學の森さんだのが僕の家へみんな遊びに來るやうになつた。夫人連の會の外に、時々かういふ學生連を御馳走する會が出來た。その中の一つで、僕が今でも覺えてゐるのは、幾皿でもお代りお構ひなしといふライスカレヱ會。
吉野のをばさんのとこへは、なぜかみんな遊びに行かなくなつた。
けれども、僕はをばさんが好きなのだ。時々みんなの眼を竊んでは遊びに行く。けれども、遊びに行つて見ると、なぜか前のやうに面白くない。
女中や何かが餘り構ひつけてくれぬ。をばさんも何か内證で僕を接待してゐるやうだ――をぢさんは始終家にゐる。

追憶の十一。
これは秋の事だと覺えてゐる――なんでも單衣が薄ら寒くなつた頃の事だ。
僕の母のところへ一通の封書が屆いた。僕は母のところへ郵便をよこす人は大抵知つてゐる。ところが、この封書は『川路きみ』といふ聞き馴れぬ女の人から來たのだ。
そこで僕は母に訊いて見た。母は「お前の知らない人だよ。」と言つて敎へてくれぬ。
その時分、吉野のをばさんはどうしたのか、ぱつたり僕の家へ來なくなつてしまつた。

僕はをばさんに會ひに行きたいと始終さう思つてゐたけれども、「今行つてはいけませんよ。」と母が嚴しく言ふので……

追憶の十二。

『川路きみ』といふ女の人からの手紙は、その後しげしげ母のところへ來た。

僕はその手紙を見つける度に、母にせがんで、その誰であるかを訊いた。

「よう、誰ですつたら、よう。よう、お母さん。」

「煩さいねえ。子供の聞く事ぢやありません。」

度々こんな事を繰り返した揚句、

「煩さいねえ、吉野のをばさんだよ。」

と、母は終に實を告げてしまつた。

『川路きみ』といふのは、僕の好きな吉野のをばさんだ。をばさんが『きみ』といふ名だつた事は始めて知つたが、なぜ苗字を『吉野』といはないで『川路』といふのだらう。

僕は又母にせがんでその訣を訊いた。

母は「子供の聞く事ぢやありません。」の一點張で、容易にその實を明かさなかつたが、餘り僕が煩

さく訊くので終に、
「御離緣になつたのだよ。」
と、怒つた聲で言つた。
併し『御離緣』といふ事は、當時の僕にはまだはつきり分からなかつた。兎に角『追ひ出された事』だとは思つた。『追ひ出される』といふ事は子供にもあるし、子供が恐い事の一つでもある――僕は僕の好きな吉野のなばさんが『追ひ出された』と聞いて悲しくなつた。自分の母でも奪はれたやうに心細くて心細くて、二三日は好きな本も手につかなかつた。

追憶の十三。
僕は吉野のなばさんがなぜ『御離緣』になつたのかと、研究し始めた。
どうしても分からない。
なばさんは僕を可愛がつてくれた。爲になる事を澤山敎へてくれた。あんな好い人はないと思つてゐる。なぜあんな好いをばさんを、をぢさんは追ひ出したんだらう。
多摩川から來た女の子を可愛がらなかつたからかしら。をぢさんに怪我をさせたからかしら。併し『それつぱつちな事』で追ひ出すのはひどい。

また母に煩く訊いた。

母は、

「あんまり贅澤をしたからです。」

と言つた。成程、贅澤は隨分贅澤だつた。月々大層なお金が入るといふ事は、前から度々耳にしてゐた。成程、贅澤な爲に追ひ出されたのかも知れない。

併し『贅澤』では母もお仲間であつた事を思ふと、母が自分でさう言ふのはをかしい。きつとまだ他に訣がある。

追憶の十四。

早稻田の村瀨さんに聞いて漸く分かつた。

面皰(にきび)だらけの書生の田丸と吉野のをばさんは惡い事をしたのだ。『惡い事』といふのも、當時の僕にははつきり分からなかつたが、夫のある女が他の男と仲よくする事だといふだけはぼんやり分かつてゐた。

田丸も同時に吉野さんから追ひ出されたのださうだ。

吉野さんにも書生は澤山出入りしたが、田丸は居つきの書生でゐながら、最も人の眼につかぬ、つ

まらない男だつた。僕もこれまでは然程注意しなかつた。

この事を聞いてから、俄にその態度容貌擧動などを想ひ起して見たが、どうも利口な吉野のをばさんの氣を惹く程の男とはどうしても思へない。

嘘だ。嘘に違ひない。と僕は幾度もさう思つた。

併し、村瀬さんは現に敎會裁判にまで臨んだといふ話をした。敎會裁判といふのは、どういふ事をするのかよく知らぬが、村瀬さんの話によると、吉野さんの家族が行きつけの會堂で、特に或日信者の古顏を牧師が集め、吉野のをばさんと田丸とを說敎壇の上に列んで立たせて、この二人は惡い事をしたのだから、今日限り破門をすると言つたさうだ。をばさんと田丸とは、默つて、青い顏をして、壇を降りて、二人別々に會堂の裏口から外へ出たさうだ。

さうして見ると、本當かしら。

それにしても會堂といふところは、酷い事をするところだと、僕は口惜しく思つた。

追憶の十五。

吉野さんの家を出たをばさんと田丸とは、會堂で別れたきり、もう永久に會はなかつたらしい――だから、僕はいまだに村瀬さんの言つた事が本當だとは思へぬ。

をばさん……川路のをばさんは、吉野さんを出て、暫く京橋の方の下宿にゐたらしい。その後、淺草の或金持の家庭教師になつた。

家庭教師をしてゐる時分、一度僕の家を訪ねてくれた事がある――これが僕のをばさんに會つた最後だと思ふ。

をばさんは粗末な風をして來た。顏も何處か物寂しくなつたやうだ。をばさんが僕の家でまづいお惣菜をみんなと一緒の食卓で、贅澤も言はずに喰べるのをぢつと見て、僕は思はず涙をこぼした。

をばさんは二三日僕の家に泊つた。著物は大抵母のを借りて著てゐた。

夜になると、僕が學校で習つて來た英語をさらつてくれた――英語を習ふやうになつたのだから、僕は十一か十二になつたのだ。

をばさんは自分の教へてゐる淺草の家の二人の子の出來なくて困るのをこぼして、そして僕は大層出來ると褒めてくれた――僕は嬉しかつた。

僕はその時をばさんから Soldier といふ英語を始めて教はつた。

英語の復習が終へると、僕はをばさんと一緒に僕の部屋に寢た。

追憶の十六。

暫く行方を失つてゐた田丸から、僕の家へ宛てゝ栃木の方から田舍新聞を一枚送つて來た。明けて見ると、田丸が續き物の小說を書いてゐる。題を「慘又慘」と言つた。どういふ事が書いてあつたか、もう覺えてをらぬ。

追憶の十七。

吉野の……川路のをばさんは、その後或私立法律學校を出た人のとこへ嫁いだ。この人は學校を出てから每年高等文官試驗を受けて、もう五度も落第してゐるのださうだ。「まことに意氣地のない人で困ります。」とは、をばさんから母へ宛てて來た手紙にも書いてあつたさうだ。

それでも、をばさんは、自分の著物や何かを賣つて、試驗料をこしらへては、試驗のある度に夫を勸めて受けさせた。

けれども、餘程出來ない人と見えて、どうしても及第が出來ない。

たうとうをばさんも失望して、この力のない夫を連れて、越後の高田へ落ちたといふ事を聞いた。

高田へ行くと、をばさんは「琴曲指南(きんきよくしなん)」の看板をかけたさうだ——をばさんは山田流の奧許しを取つてゐる。

をばさんは第二の夫の力を借りて、も一度世の中に出たかつたのだ(?)。それだから一所懸命にな

つて、あの懶惰な夫の尻押もしたのだ。ああ併し、それも今は空頼みに終つてしまつた。

僕は今でも、冬になつて雪の降る度に思ひ出す。ああ、あの寒い國で、凍る三本の指に琴爪をはめて、吉野の……否、川路の……否、今は苗字も分からぬをばさんは、あの愚圖な、爲すところのない夫を養つてゐるのであらう……

追憶の十八。

吉野のをぢさんは、その後また美しい奧さんを貰つて——間もなく可愛い子が出來た。

併し、往來などで逢つて、僕がぴたりと立ち止つて、行儀よくお辭儀をしても、をぢさんはもう知らない人のやうに見向いてもくれない。

村瀬さんも三橋さんも學校を卒業した。村瀬さんは望み通り新聞記者になつた。三橋さんは香港の或商會へ雇はれて行つた。森さんだけはどうしても口頭試驗が惡いので、たうとう學校を退學して、遞信省の外國爲替課へはひつた。

やがて日清戰爭が始まつた。初花をやつた僕の叔父さんも佐倉の二聯隊に附いて金州半島へ向つた——達摩をやつた叔父さんも、職に復して東京衛戍病院へ出るやうになつた。母の連中は赤十字社の恤兵部の運動で忙しかつた。

千載一遇の邦家の大事に、眇たる『僕の好きなをばさん』はたうとうみんなに忘られてしまつた。母の連中も、をばさんをあの儘にして置くのは、隨分酷いぢやないかと僕は屢さう思つた。

僕は今でもをばさんを忘れない。どんなに年をとつた、どんなに窶れたをばさんに、どんな不思議なところで逢はうとも僕はきつと今のをばさんの眼の内に、昔のをばさんを見つけずには置かぬ。をばさんの消息は、もう十三年からない。

追憶の十九。

これは追憶と言つても、つい二三年前の事だ。

僕の家――その後牛込の矢來へ越した――僕の家へ、むかし母や吉野のをばさんが贔屓にした髪結が訪ねて來た。

吉野のをばさんのありかを聞きに來たのだ。ありかさへ分かれば、以前の御恩返しに出來るだけのお世話がして上げたいと言ふのだ。

感心な髪結だ。

併し、悲しいかな、をばさんのありかは分からぬ。

髪結はもうすつかり白毛になつてゐた。僕の顔なども、もうすつかり忘れてゐた。

父の否定

私には父が無い。無いのは死んだからだ。死んだとすれば前には有つたのだ。有つたものが無くなつたのだ……と、かう思へばそれまでだが、私にはどうもさう思はれない。

私は常にかう思つてゐる。私には初つから父が無いんだ。私には一度も父が無かつたんだ。私は父なしに生れて來たんだと。

さう思つて、私は常に何とも言はれぬ寂しい感じにうたれる。私は世間の人と同じ權利を持つことが出來ないんだ。私は世間の除け者だ。私には世間の人と終に一致することの出來ない感情があるんだ。私は一種の不具だ。

私がこんな感じを始終持つやうになつたのは、一つは餘り早く父に別れたからだらうと思ふ。併し、そればかりが原因とは思へない。私の友達で、私よりもつと早く父に別れた人が一人ある。けれどもその人は父の有つた事をいまだに確信してゐて、命日命日の墓參を怠らぬのみか、常に墓に向つて生ける人に對するが如く物を言ふ。然るに、私は物心ついてから、父の墓へ一人で墓參といふものをし

たことがない。私は父の墓に對しても、一向父に會つたやうな感じがしないのだ。

尤も、東京にあるのは假の墓で、髮の毛が何かが葬つてあるだけだ。それを知つてゐるから、それで墓を見ても無意味な感じがするのかとも思ふが、先年十一年祭をしに、父がそこの軍隊に在勤中死んだといふ中國の或町へ行つて、本當の墓といふのを見た時もやはり無意味な感じのするのは同じだつた。成程、墓は東京のよりも立派だつた。墓地の景色も東京のよりは好かつた。父を昔知つてゐるといふ人も、東京よりは大勢ゐて、一人一人墓に向つて熱心な參拜をした。けれども、私にはやつぱり父が有つたやうな氣がしなかつた。墓も、墓地も、集まつた大勢の人も、みんな私を欺すのだと思つた。私は墓の碑文の終に「孝子重太郎掩涙建之」とあるのを見て、誰がこんな噓を書いたのだらうと、悲しく思つた。

私には初から父が無いのだ。それを世間の人はむかし有つたやうに言つて、そして無くなつて惜しい事をした、悲しいだらう、泣け、と言ふのだ。成程、有つたものが無くなつたのなら悲しくもあらう。併し私の父は初から無いのだ。だから何も悲しい事はない。泣く事もない。私は寂しいんだ、ただ寂しいんだ。

私はいつつの時に父に別れたといふ話だ。母もさう言ふ。親類もさう言ふ。戸籍にもさう書いてある。けれども、私にはそれからして信じられぬ。

或晩、私は藥局のやうなところで、書生と一緒に遊んでゐた。すると、家から馬丁が迎ひに來た。家へ歸つて見ると、綺麗な夜具が廣い座敷の眞ん中に敷いてあつて、その中に誰だか寢てゐる。その周圍に大勢人が坐つてゐて、燭臺が澤山ついてゐた……綺麗だなあと思つた。これが私のこの世に生れて來てからの最初の記憶である。母はこれが父の死んだ時だと言ふが、私にはさうは思はれぬ。さう思はれる證據は一つも無い。ただこの景色がどうしていまだに頭腦を離れないのか、それだけが不思議でならぬ。

或晝間、私が神主の着るやうな着物を着て、車に乘つて、ぬかるみの坂道を登つて行くと、車の側に乳母が歩いて附いてゐる。時々手を出しては私の手を握つた……これが私が生れてからの第二の記憶である。母はそれが父の葬式の時だと言ふ。けれども私にはそれを信ずるだけの確な印象は無い。母は毎年虫干の度に、これがその時お前の着た喪服だと言つて、神主の着るやうな着物と烏帽子見たいなものを出して見せて呉れるが、それは今日の私にはとても着られぬやうな小さな物だ。果してそんな物を着たものだらうか。甚だ疑はしい。

私には初から父が無いのだ。死にもしないのだ。だから葬式などのあつた筈はない。母はあんな事を言つて私に安心させるのだ――私は虫干の度にかう思つた。

私は父の顏は知らぬ、全く知らぬ。尤も家の神棚のお宮の中には軍服を着た父の寫眞がはひつてゐる

る。母はこれがお前のおとつさんだよと言つて、屢々その寫眞を見せて呉れた。けれども、私は本當に父に會つたことがないのだから、その眞僞は少しも分からぬ。

房々とした頭の毛を綺麗に二つに分けてゐる。鼻の下には濃い立派な八字髯が生えてゐる。顏は細面だが、鋭い眼尻はきりきりと上つてゐる。鼻も高い。私のやうな、こんな眼尻の下がつた、口にしまりの無い、鼻の低い顏ではない。それに、母から聞けば、父は小男だつたさうだが、私は六尺に近い大男だ。父と子なら少しは似てゐよう。父の寫眞と稱するものは一向私に似てゐない。寫眞があつても私は父の營つてゐた事を信ずることは出來ぬ。

父は道具が好きだつたさうだ。父の愛した道具だとか稱するものは澤山私の家にあつた。併し、そんな物を見たところで父のゐた事を信ずることは出來ぬ。

でも、遺産があると母は言ふ。この遺産は、父が三十八で亡くなるまでに一生懸命に稼いで貯蓄したものださうだ。併し、金があつたと言つて、父が有つたといふ事を信じなければならぬ理由はない。父は金ではない。父は人間だ。

私は世間へ出て、何か苦しい事が少しでもあると、「これもおとつさんが無いからだ。」と、いつでもきつとさう思ふ。或女と別れた時もさう思つた。或親友に捨てられた時もさう思つた。

私はどんなに人と仲を好くしてゐても、終にはきつと喧嘩をして別れてしまふ。それも言ひ合ひか、

擲り合ひでもして絶交するなら、まだ好い。きつと兩方で胸の中に何か含み合つて別れてしまふのだ。だから、いつまで立つても氣持が惡い。男の場合もさうだが、女の場合が殊にさうだ。捨てるとか捨てられたとかいふ事がはつきり分かつてるなら悲しくてもまだ心持が好い、いつもぐづぐづに別れてしまふのだ。うらみを含み合つて別れてしまふのだ。

さういふ事のある度に私はさう思ふ。私はどんなに人と仲が好くなつても、最後にどうしても人と一致する事の出來ない神祕を持つてるから駄目なのだ。その神祕は即ち父の無い事だ——初つから父の無い事だ。

初から父の無いものは天下に私たつた一人だ。私はこの私一人しか持つてゐない運命の爲に、如何に私を愛する女にも最後には嫌はれるのだ。はじめ私の孤獨なのに同情を寄せて近づいて來た女でも、交際の深くなるに連れて、私の孤獨が普通の孤獨ではなく、絶對的の孤獨だといふ事が分かると、恐ろしくなつて逃げてしまふのだ。

私はかういふ悲しいことのある度に、「ああおとつさんが欲しい。」と思ふ。一度有つたのだが、無くなつたのだ、などといふ事が若し私に信じられたら、私は斯かる場合に、悲痛の餘りきつと狂人になつてしまつたらうと思ふ。併しながら、幸にも私は父の有つた事を信じない。初つから無いものだと思つてゐる。そして、ただ自分の運命の不思議なのを怪しんでゐるばかりだ。悲しいとは少しも思

はず、ただ寂しいと思つてゐるばかりだ。

一體私は八歳位までは、何處の家にも父といふものの存在を認めてゐなかつた。何處の家でもおつかさんばかりだと思つてゐた。始めて、よその家にはおとつさんといふものがあるといふ事を知つた時の悲しさは非常だつた。今思ひ出しても暗闇に身を引き入れられるやうだ。

神樣が世界中の子供殘らずに一つ宛同じ綺麗な菓子を與れたのに、私一人はそれが貰へなかつたやうな氣がした。私は寂しい暗い情ない氣持がして、三日三晩泣きもせず、笑ひもせず、口も利かずに暮らした事を覺えてゐる。

私は段々世間に對して僻を起し始めた。何か自分が惡い事をして、それで人に虐められても、「これもおとつさんが無いからだ。おとつさんさへあれば、決して虐められはしないんだ。」などと思ふやうになつた。

けれども、私はそれを自分の僻ばかりだと思ふ事はいまだに出來ぬ。世間の人も隨分無情だと思つてゐる。例へば、私が何か一つ惡い事をしたとする。すると世間の人がそれを攻擊する。攻擊して與れるのは有難いが、攻擊するつきりだから情ない。責めて責めて責め拔いても、決して許すといふ事がないんだから悲しい。さもなくば、全然知らん顏だ。私が惡い事をして、その爲に私がどんな苦しい破目に陷らうが、そんな事は一向お構ひなしだ。

「叱つて許す人。」これは世間にはない。「惡い事をした者が甘えて行ける人。」これは世間にはない。かかる人は父より他にはない。肉親の父より他にはない。私の父が欲しいと思ふのも、さういふ父が欲しいのだ。惡い事をしても甘えて行ける父が欲しいのだ。散々私を叱つて、そして私のした惡い事の始末をつけて呉れる父が欲しいのだ。ああ私は父に擲たれたい。ああ私は父に叱られたい。けれども私には父が無い、初から父が無い。だから私は少しでも惡い事をすると、直ぐみんなに虐められる。私は人の足を一寸踏んでも世界中の人から睨みつけられるやうな氣がする。

父の存在を否定する私でも、父の閲歴談は隨分母から聞かせられた。父は十五の時に單身國から東京へ飛び出して來て、獨力で醫者になつた。まだ年若で軍醫の高い地位を得た。田舍にゐたことが多かつたから、軍醫をしながら土地の人の病氣を見た。醫者がうまかつたから隨分患者が多かつた。それで金が出來たのださうだ。隨分遊びもし、酒も飲んだが、決して家の生活費に影響を及ぼすやうな事はなかつた。遊ぶ方の金は別口で銀行へ預けて置いて、どんなに金が入つても、その方で融通をつけてゐたからだ。かういふ話を繰り返し繰り返し聞かせられたけれども、それは一向私に父の存在を確める證據にはならなかつた。

殊に母の話でいつも私を苦しめるのは父の素性である。父は全體私の姓の家へ養子に來たのだ。ところが養母が大層邪險なので、辛抱がしきれず、それで十五の時に一人で東京へ逃げ出して來たんだ。

父の實父實母は一體誰なのだらう。それが分からない、いまだに分からない。母は父がそんなに早く死ぬとは思はなかつたから、養子といふ事は知つてゐたが、實家のことはつひ聞かないでしまつたさうだ。名古屋にゐる時に、或日或老人が訪ねて來て、凡そ半日も父と一室で何か話して歸つたが、若しやあれが實の父では無かつたかしらと母はいつでもさう言ふが、そんなぼんやりした事がなんでその證據にならう。父の養母といふ人も今では死んでしまつた。父方の親戚といふ者で私の家と交通のある者は一人も無い。父の生家はとこしへの祕密だ。もう探る術も盡きた。

私はこの事を思ふと、いつでも暗い頼りのない感じにうたれる。人間は塵だといふが、成程塵だ。私の父などは塵の内の塵だ。何處から生れて來て何處へ死んで行つたのだか分からない。

世間の家にはみんな立派に系圖がある。現に私の母の家などは德川幕府の旗本として小祿ながら立派に連綿たる血統をひいてをる。然るに、私の家にはそれが無い。私は自分の祖父や祖母がどんな人だつたか、見る事は勿論のこと、傳へ聞くことさへ出來ないのだ。ああやつぱり私には父か無いのだ、初つから父が無いのだ。私は父なしに生れて來たんだ。父の有つた者に祖父の分からぬ筈はない。

基督敎では基督を父と呼ぶ。基督敎の所謂「父」は確に私の思つてゐるやうな「叱つて許す人」だ、「殺して活かす人」だ。私は餘りの寂しさに、この宗敎に身を投じて、基督を「父よ。」と呼んで見た。基督は果して私の要求する通りの父であつた。私は基督を信じて、生れて始めて父を得たやうな

氣がした。始めて汚れた體と汚れた魂をその儘、何等の蔽なしに縋ることの出來る人を得たやうな氣がした。併しながら、五六年立つと、私はこれにも不滿足を感じて來た。

基督の心は今在るが、基督の肉は今無い、心の父は基督にあるけれども、肉の父は基督には無い。聖書はしきりに基督の肉體の復活を說くけれども、まだ實體を見せて吳れぬ。麵麭が何で父の肉であらう。葡萄酒が何で父の血であらう。私は父の顏が見たいのだ。父の手が握りたいのだ。父の詞は畢竟ただ詞である。父の敎は畢竟ただ敎である。詞は父ではない。敎は父ではない。私は紙の破れる程聖書を繰り返して見たが、終にこれから暖い父の息を感ずることは出來なかつた。

私は一度得たと思つた父を又失つて了つた。失つたのではない。父でもない者を父だと思つたのだ。父でない者が父でなくなるのに何の不思議があらう。それでも私は悲しかつた。

私は又もとの父の無い子に歸つた。私にはやつぱり父が無いのだ、初から父が無いのだ。

母が父の存在の證據にする遺產も、もう五六年前にすつかり無くなつてしまつた。道具も大抵賣り拂つてしまつた。父が盡力して出世させたといふ親類の者達からもぱつたり消息が無くなつてしまつた。私の否定は益々强められるばかりだ。母は親類を不人情だと言ふが、私はさうは思はぬ。親類は今まで私を欺してゐたんだ。私には元から父が無かつたのに、親類は父が有つて、その世話になつたといふやうな顏をしてゐたのだ。消息をしなくなつたのは、私に父の無いといふ實を告げて吳れたの

だ。私は寧ろ親類に感謝する。

父の形見と稱するものが段々無くなるに連れて、母の父に對する追憶も段々ぼんやりになつて來た。母も近頃では一向父の事を言はなくなつた。もう初から父の無かつたやうな顏をするやうになつた。

物質上からも精神上からも、斯く總ての周圍が父の存在を否定するに連れて、私の內心の否定は愈愈堅い根據を得て來た。愈々豐富な養分を得て來た。「父の否定」といふ暗い根の暗い幹の暗い葉の樹は、私の暗い胸一ぱいに生ひ繁つた……

私の父の祥月命日は二月廿六日ださうだ。この月この日には每年私の家で父の祭といふものをする。私の子供の時分には中々盛だつたが、私の大きくなるに從つて、祭は段々儉約された。一つは家道の衰退にも原因はあつたが、一つには私が「亡父」といふものを否定するからでもあつた。母が老病になり、私が自分でこの祭をするやうになつてからは、殆ど義理一遍の儀式になつてしまつた。私は爲來りの通り、床の間に父の寫眞と稱せらるるものを飾つて、野菜だの魚だの菓子だのを三寶に載せてその前に飾る限りだ。飾つてから拍手一つ打つではない、御辭儀一つするではない。私はそんな事をしても、決して父を思出しはせぬからだ。父の無い者が父の有る者の眞似をしてるのだとしか思はれぬからだ。

私は私の一家にとつて一番重大な日を斯くまで無意味に思つてゐる。無意味に思ふのは不人情だか

らだと人は言ふ。併し、私にいくら人情があつたところで、實際ゐなかつた人に人情を寄せる事は出來ぬ。私には父が無いのだ。初から父が無いのだ。無い父に人情を寄せろと言つてもそれは無理だ。私の祭はむしろ母の爲――母の命令の爲――にする祭で、決して父の爲にする祭ぢやない。だから無意味だといふのだ。無意味だ。無意味だ。總て無意味だ。

今から四年前だ。私が未だ大學へ行つてる時分だ。丁度父の廿年に相當した年の二月廿六日だつた。老病の母は田舍へ避寒に行つてゐた。妹も姉もそれに附いて行つてゐて、家は私一人で留守居をしてゐた。

私は每年きつと父の祥月命日を忘れる。母はそれを知つてゐるから、その二三日前に避寒地から手紙をよこして、廿六日は忘れずにお祭をして吳れと言つて來た。

私は下女に命じて、每年の例の通り、床の間に古い寫眞を飾つて、野菜や魚や菓子の三寶をその前に列べた。

寫眞の父は何年立つても年を取らぬ。却つて每年見る度に若くなるやうな氣がする。相變らず、髮の毛が濃く、髭が濃く、眉毛が濃く、銳い眼できつと私を睨んでゐる。それが如何にも、「貴樣は不埒な奴だ、おとつさんがかうやつて現在ゐるのに、俺には昔から父が無いなどと一人で極めて、大事な祭さへ澁々する奴だ。」と言つてるやうに見える。けれども私は怖いとは思はなかつた。「だつて私は

おとつさんを一度も見た事がないんですもの。見たことのないものを有ると思へと言つたつて、それは無理だ。」といつたやうな反抗的な氣持になつて、きつと寫眞を睨み返したが、如何したのかその途端に涙がほろほろと頰を流れた。

晩になると、私は寫眞の前に蠟燭をつけた。寫眞は火の蔭から益々私を睨むやうだ。私は自分の部屋へはひつて、机に凭りかかつて、そして父自分には父が無い、初から無いといふ誰にも解釋の出來ぬ思ひに沈んだ。

人氣のない夜の家は死んだやうに靜であつた。全宇宙は悉く口を噤んで、何者も私に父の祕密を語るまいとするやうである。私は絕えず父の存在を否定しながら、絕えず見ぬ父に慕れてゐるのだ。若し何者かが父の存在をはつきり見せて吳れたら、どんなに嬉しからうと、さう思はぬ時は一刻も無いのだ。然るに總ては今默つてゐる、總ては今死んだやうである……私は旣に今死刑の宣告を受けた。もう誰も辯護して吳れるものはない、滿庭悉く口を噤んでゐる……ああ恐ろしい沈默。

途端に障子が明いて、下女が一封の手紙を持つてはひつて來た。私は慄へながらそれを受取つた。下女は怪訝な顏をして出て行つた。

見ると價格表記の大きな封筒だ。金五圓也と書いてある。宛名は確に私だが、差出人は全く私の知らぬ人だ。私に角明けて見た。

手紙の文言（もんごん）は簡單だつた。今日は御亡父樣の御命日だから、失禮ながらこれを御靈前に供へて呉れとより書いてない。そして最後に「無名」としてある。宛名は「重太郎樣」と親しげであつた。中には五圓の新しい紙幣が一枚はひつてゐた。

一體誰だらう。字を見ると男のやうであるが、また女のやうでもある。中々しつかりした手だが、何處かに優しいところがある。價格表記だから、差出人住所氏名といふ所にところも名も書いてはあるが、中に無名とあるところを見れば、これは人のを借りたものか、然なくば好い加減に拵へたものだらう。その書いてある名前も男のやうでもあるが、また女のやうでもある。一體誰だらう。

私は紫の封緘紙（ふうかんし）に捺してある印形の字を讀まうとしたが、それは複雜した篆書（てんしよ）で迚も讀めなかつた。消印を見たが、郵便の出た所は確に表に書いてある所だ。だが、一向見當はつかぬ。

併し、私は嬉しかつた。父が死んだといはれる時からもう廿年になるが、嘗て一度もこんな事をして來た人はなかつた――私は非常に嬉しかつた。この誰から來たとも分からぬ手紙は、やがて、私に父の存在が確められる先驅（さきがけ）ではあるまいかとさへ思つた。

私は早速それを父の寫眞の前へ供へた。そして當所（あてど）もなく、手紙の主を想像して見た。父の寫眞は相變らず鋭い眼つきをして、「それは御前には分からぬ。いくら考へても分からぬ。俺の存在を否定するやうな奴に、何が分かるもんか。」と私を叱つてゐるやうに見えた。

明くる日、早速事の由を母のゐる田舍へさう言つて遣つて、心當りはないかと訊いて見た。母からも一向心當りはないと言つて來た。何處とかにゐた時、これこれの患者があつたが、それではないかと思ふといふやうな事も書いてあつたが、それも何か好い加減な推測らしかつた。いくら考へても誰だか分からない――分かる筈はない。そこで私は思ひ切つて、價格表記の封筒に書いてある住所氏名へ宛てて構はず禮狀を出して見た。そして、どうか本當の名を教へて呉れと賴んで見た。

すると、直ぐ返事が來た。手紙は確に見た。あの名は私が知人のを借りたのだ、私の名ではない。私の名は仔細あつて今申し上げる事は出來ぬ。あの名で手紙は屆くから、折々文通はして呉れ。といふやうな事が書いてあつて、終には矢張「無名」としてあつた。

三月廿六日になると、又價格表記で五圓送つて來て、また亡父の靈前へ供へて呉れと言つて來た。私の家はもうその頃餘程困つてゐた。母の避寒費も悉く借金だつた。私は留守居をしながら自分の月謝を自分で稼がなければならなかつた。さういふ風だつたから、五圓の金でも、中々疎には出來なかつた。私はいつもその一部で父への供物を買ひ、殘りは母のところへ送つたり、入用な本を買つたりした。

併し、それが何處から來るのか分からないのは何となく不安だ。私は又例の宛名で手紙を出して、

熱誠の籠つた文句で、どうか名を明かして呉れと言つて遣つた。

また直ぐ返事が來た。「……二十年昔の今日に相成突然御便り致し定めし御不審の事と存じ候へども、先日より番町を御尋ね申候所一向相分かり不申、今日まで打すぎ居候所、此間御住所相わかり、早速御便り致し候やうな次第、實は私御伺申候て、御父上様にも御目にかかり度存じ候へ共、只今鳥渡参り候わけに參り不申候。」といふやうな事が書いてある。番町は私が五つの時から十九の春まで育つた所だ。それから家は東京中方々流浪して歩いたのだ。

無名の人が何處からか手紙をよこすやうになつてから、父の存在に對する私の否定は餘程薄らいで來た。随分確な證據らしいものがあつたのに、それには一向動かされなかつた私が、どうしてこんな頼りのない何處の誰から來るのだか分かりもせぬ手紙で動かされたのだらう。それは分からぬ。それは分からぬが、この無名の人の手紙には字にも文にも何となく權威がある。犯し難い權威がある。現にこの手紙などにも、率直に「御父上様にも御目にかかり度」と書いてある。父の靈に會ひたいと言ふのではない、父の寫眞が見たいと言ふのではない、父その者に會ひたいと言ふのだ。私は生れてからこの方、私の父に對してこれ程確な詞を聞いた事はない。

「父當年六月御前様御目出度御卒業遊ばし候上にて、御母上様にも是非御目に掛り度と存じ候。その節私の名は御あかし申候。しかし萬一御心得ちがひ遊ばし候事も御座候へばこの儘御目には掛り不申

候。私は決して御心配遊ばし候やうな者では御座なく、冥土より父上様の御使に參り候者と御承知被下度候。」手紙は又かう書き續けてゐる。「父上様の御使」といふ詞にも何となく力がある。私は恐ろしいやうな氣がした。併し、その使にも六月學校を卒業さへすれば會へるのだ。「心得ちがひ」といふのは落第の事だらう。落第さへしなければ會へるのだ。私は恐ろしいやうな嬉しいやうな氣がした。手紙は尙書き續けて、「私は子供の時より不幸續きにてろく／＼手習も致し不申、又手紙の認めやうも存じ不申候間さぞ／＼失禮な事も認めて御座候と存じ候へ共、右の次第に御座候間、此事は幾重にも御許し被下度、必らず／＼御心にかけ遊ばされぬやう御願申上候。六月を樂しみに祈り申居候。」とある。私はまたこの無名の人の人となりを徒らに想像して見た。

四月になると、母も東京へ歸つて來た。母は私のところへ來た手紙を悉く見たが、一向當りが附かぬと言つた。但し男ではない、女だといふ事は斷定して吳れた。

四月の廿六日にも亦五圓送つて來た。やはり無名である。

私は相變らず時々父の存在を否定する病氣に取りつかれて苦しむ。私には父が無いのだ、初から父が無いのだ。世間の人が總て持つてゐる權利を私一人は持つ事が出來ないのだ。私は到底世間と一致は出來ない人間だ。私は世間の除け者だ。と思つて、死んだ者のやうになつてしまふ。

さういふ時に、私がきつと思ひ出すのは、この無名の人だ。何處の誰だらう。一刻も早く會ひたい。

この人に會つたら、きつと父の存在が確められるに違ひない、ああ一分時も早く會ひたい…………
五月廿六日になると、また五圓無名の人から送つて來た。そしてもう試驗も近づいたらうから十分勉强して立派に卒業しろと言つて來た。その文句とその字とは相變らず權威あるものだつた。
私はその頃生活上の苦しみから少し自棄氣味になつて、學校の爲事は大分うつちやり放しにしてあつたのだが、無名の人に會へるといふ樂しみから、急に又勉强する氣になつた。
試驗は六月になると直ぐ始まつた。筆記の檢閲も濟んだ。筆記の足りぬ分の口頭試驗も濟んだ。愈愈四月に出した論文の結果の分かる時が來た。
私の論文は生活に追はれてゐる中で書いたのだから、級の內で一番短いものだつた。內容も極めて貧しかつた。それでも尻の方で及第した。
私は早速論文の成績を無名の人のところへ知らせた。
すると、直ぐ返事が來て、論文が及第で誠に嬉しい、もう安心だ。就いては今月の廿六日に某所で先づあなたに會ひたいから、どうか來て呉れ。と書いてある。その某所といふのは上野に近い或靜な所の料理屋だつた。
廿日過ぎに愈々公然卒業といふ事が發表された。私は又、その趣を無名の人に知らせて遣ると、それでは約束通り廿六日に會ふから、朝十時頃から此間言つた所へ遣つて來て呉れ。と言つて來た。

愈廿六日の朝になつた。私は「運命」に會ひに行くやうな氣がして、胸をどきどきさせながら家を出た。

行く道々も考へた。一體どんな人だらう。女の人には違ひないが、一體どんな女の人だらう。何しろ廿年前のことを知つてる人だから、若い人ではない。私にあんなしつかりした手紙をよこす人だから、きつと恐い人に違ひない。いいや優しい人だらう。却つて母より優しい人かも知れぬ。それにしてもどういふ事をしてる人だらう。料理屋へ呼ぶのは、何か自分の家では都合の惡い事のある人だ。よその妻君かしら。それとも一人者かな。私は色々に考へてゐる内に、いつかその料理屋の前に來てしまつた。

料理屋の門を見ると、また私の胸は轟いた。私の一生の運命はこの門を通る間に極まるのだ。私の心臟に深く彫りつけられた「否」といふ字が、永久に拭ひ消されるか、消されぬか、それはこの門をはひる瞬間に極まるのだ。

女中に私の名を告ぐると、『先程からお待ちで入らつしやいます。』と言ふ。待つてゐると聞いて、私は又胸を轟かせた。

私は夢中で二階へ案内された。女中の指さす部屋へ這入ると、紋附を着た女が一人で烟草を呑んでゐた。

その女の人は私を見ると、烟管を輕くトンとはたいて、笑ひながら挨拶をした。三十五六の品の好い婦人だ。額が廣く、眼が可愛い。樣子に何處かあだつぽいところがある。

私が「運命」その者のやうに、尊敬もし恐れもしてゐた人は、存外平凡な婦人だつた。私は少し拍子拔けがした。

併し、私は何處かでこの女の人に會つたやうな氣がした。私が部屋へ一足はひつた時に、にこつと笑つた顏は、決して私の知らない顏ではなかつた。私はそのにこつと笑つた顏を一目見た時に、昔大變親しくしてゐた人の顏を見るやうな氣がした。私は頻に記憶を辿つて見たが、どうしても思ひ出せない。

無名の人は先づ名を告げなかつた無禮を詫びて、始めて名を告げた。それから段々と身の上話をし始めた。世馴れた巧い口の利きやうだ。

この女の人は藝者だつた。父が昔愛した藝者だつた。私は先づ無名氏の素性の意外なのに驚いた。父の死んだ頃、この人は今父の墓のあるその中國の或町にゐた。初は大層父を嫌つたが、やがて父と親しんだ。父はこの人の血の斯かる商賣に適しないのを知つて、やがて商賣を廢めさせ、養女として家へ引き取るつもりにしてゐた。東京へ連れて行つて、學校へ入れて、それから嫁に遣るつもりだつたといふ。その途端に父が死んだ。その時この人は十六だつたさうだ。

この人は中國筋の或士族の娘であつた。父の酒と兄の放埒とが少からぬ家産を無しにしてしまつたので、娘は已むなく身を賣つたのである。ただ器量だけで身を賣つたのだから、藝は何一つ出來なかつたさうだ。父はそれを可哀さうに思つたらしい。父は死ぬ間際までこの人のことを心配してゐたさうだ。この人のおつかさんが臨終の時父の枕元へ擦り寄つたら、父はその顏をぢつと見て頻に唇を動かしたが、もう口は利けなかつた。それはこの人の將來を案じて呉れたのだと、この人はいまだにさう信じてゐる。

だから再びこの商賣になつては濟まぬと思つたが、どうしてもさうならずにはゐられぬ事情になつた。

この人は私の父が死ぬと、直ぐ私の家へ引き取られた。これはかうするやうに父が總てして置いたのだ。併し父がゐれば、東京へ行つて、學校へ遣られる筈の人が、今は私だの私の姉だの私の妹だのの守として附いて行かなければならぬ事になつた。私の母も當時は年が若かつたから、多少嫉妬もあつたらうし、夫に急に死なれた悲しさに常識も多少亂れてゐたらしい。かういふ無情な宣告を平氣でしたさうだ。

この人はそれは厭だと言つた。侮辱されたやうに感じたからだ。母は、それが厭なら出て行つて貰はうと言つて、僅か十圓呉れたさうだ。この女の人は今さら元の藝者屋へ歸ることも出來ず、と言つ

て十圓ではどうすることも出來ないから、已むを得ず又他の藝者屋へ身を賣つた。それから五六年して東京へ出て來てから、卅七歳の今日までの苦闘史は悉く血である、悉く涙である——併し、今はそれを說く時ではない。

この人は廿年の間寢た間も父のことは忘れぬさうだ。東京へ來てからも私のことは始終心配してゐたさうだ。併し、自分が一人前の人間になるまでは決して私の家へ名宣つては出まいと決心してゐた。今日ではまあ一軒の家の主人(あるじ)にもなつた。どうかして私に會ひたい、私に會ひたいと思つたが、どうしても住居が知れぬ。ところが去年計らず何處とかの料理屋で私の叔父に會つた。叔父から私の所も聞き、その後の私の家の歴史も聞いた。直ぐに會はせて吳れと賴んだが、叔父は私の卒業まで待てと言つた。それで今日まで待つたのだ、と言ふ。

この人は猶詳(つぶさ)に父の臨終の有樣を語つた。父は東京へ榮轉をする送別會の酒を飲んで歩いてゐる內に、急病になつて、家へ歸ると直ぐ死んだのだ。

この女の人が急報に接して、私の家へ驅けつけて來ると、途中で家の馬丁(べつとう)に會つた。その頃私の家の雇人は奥樣組とこの女の人の組と二つに分かれてゐたさうだ。私の乳母は奥樣組だつた。馬丁はこの女の人の組だつた。

馬丁は息を切つて、『もういけない。』と言つた。この一言を聞いた時、この女の人はぺたりと往來

へ坐つてしまつて、物の十分ばかりは默つて馬丁の顏を見詰めてゐたさうだ。

それから漸く私の家へ來ると、私が一人で緣側で遊んでゐた。『坊さん、お父さんは。』と、この人が訊いたら、『寢てるよ。』と私が答へたさうだ。

父の死顏を見ると、この人は直ぐ自分の家へ引き取つたが、小さい胸にも悲しさが一杯で、寢るにも寢られず、火燵にあたつて昏々してゐた。すると、誰だか自分の名を呼ぶものがある。ふと首を上げると、欄間の小さい障子がすうつと明いて、白い着物を着た父が顏を出した。思はずあれつと叫んで火燵へ突つ伏すと、家の者がみんな出て來て、どうしたんだどうしたんだと訊く。明日の朝までは決して言はないと言つて、まあその晩は無事に寢たが、明くる朝ゆうべ火燵のあつた部屋へ行つて見ると、締めてあつた筈の欄間の障子が明いてゐた

この人はまだ父に就いて色々今まで私の耳にした事もないやうな話をして吳れた。父は非常な艶飾家だつた。顏を洗ふのに每朝三十分はきつと掛かつた。冬の晝間でも日に燒けるといつて蝙蝠傘をさして步いた。一つの茶屋から又他の茶屋へ飮み直しに行くのに、決して同じ着物では行かなかつた。尤も、これは癇症だつたからでもあるさうだ。

酒は嫌ひでゐながら隨分飮んだ。女にも隨分多く關係した。私の兄弟に亡くなつたのが多いのは、みんな父が亂暴をしてゐた時分に出來た子だからださうだ。

死ぬ時分にもこの人の外に未だ二人とか女があつた。現にその一人はあなたも知つてる筈だと、名を言はれて私は驚いた。それは昔の知人として、いまだに親類のやうに交際してゐる或堅氣の婦人だ。無名の人は父の「最後に動かした唇」を恩として、今日まで一刻も父のことは忘れないと言つた。いまだにこの商賣の廢められないのは、不運の爲すところとは言ひながら、父に對しては始終申譯がないと思つてゐると言つた。

私の永年の考は一時に覆された――私には父が有つたのだ、父が有つて亡くなつたのだ。私は始めてかう思つた。

かういふ人の口から父の人間らしい罪惡史を聞いて、私は始めて父の存在を認めるやうになつたのだ――やつぱり私には父が有つたのだ、有つて亡くなつたのだ。

私は始めて父の死に遭遇したやうな氣がして、何とも言はれぬ悲しい感じにうたれた。

女の人は別れに臨んでかう言つた。自分ももう三年立つて四十になれば藝者は廢める。今更藝者屋を廢める訣には行かぬから、それは續けてやるが、自分だけは別に住むから、さうしたら遊びに來て呉れ、あなたは決して自分達の社會へは足を踏み入れて呉れるな………

私は喜び勇んで家へ歸つた。私は始めて普通の人間になつたやうな氣がした。私は始めて世間の人と同じ權利を持つ事が出來たやうな氣がした。

併し、私はその日の會合に就いて餘り詳しく母に話さなかつた――なんだか母に話すのが厭だつたのだ。ただその人の名と、その人の現今の境遇とを告げたきりだつた。

母は成程そんな人も有つたよと冷淡に言つて、知れて見たら存外詰まらなかつたといふ顏色をした。私はその後一二度母に内證でその人に會つた。その人に會ふ度に、私は父の肉の匂を嗅ぐやうな氣がして、生れてこの方一度も味はつたことのない嬉しさを味はつた。

無論手紙の往來は始終あつた。

ところが、私の家は私が學校を出ると益々いけなくなつた。家には私が一日に稼ぐ金の百倍千倍した借金が出來てしまつた。私は自棄になつて酒を飲む事を覺えた。酒を飲めば惡友も出來る。私は友達に引張られてあの女の人の社會は勿論、それよりもつと下等な社會、更にもつともつと下等な社會にさへ出はひりをするやうになつた。

父の存在を肯定してから始めての祥月命日を、私は酒に醉ひ潰れて忘れてしまつた――しかもその時は、例の女の人と二人で墓參りに行く約束がしてあつたのだ。

私の不行狀は忽ち女の人の耳にはひつたものと見える。消息が段々遠のいて來て、終にはつたり無くなつてしまつた。

私は又父の存在を否定するやうになつた。この位な不行狀で私を咎めるやうな人なら、やつぱり父

の存在を證據立てる人ではなかつたのだ。私は自分が惡いとは思はぬ。私には父が無いのだ、初から父が無いのだ。たださう思ふだけだ。

私は毎日毎日酒ばかり飮んでゐる。借金を濟すつもりで隨分稼ぎも稼ぐ。だが、金の顏を見ると、つひ酒が飮みたくなる。

もう父の存在などを無理に證據立てて貰はなくても好い。證據立てて貰つた所で、やつぱり死んでゐないのだ。

私には父が無いのだ、初から父が無いのだ――かう思つて諦めてゐる。諦めてはゐるが、寂しいには寂しい。寂しいといつては又酒を飮む。酒を飮んでる間は、あの女の人に會ふことは出來ない。

ああ私はやつぱり一人なんだ。一人だといふ感じをどうかして鈍らせようと思つて酒を飮むんだ。感情を荒らさなければ情ない事ばかり考へて爲方がない。だから下等な女を相手に下等な事をしに行くんだ。

あの人からはもう全く消息がない。あれからもう四年になるが、もう藝者は廢めたかしら……あ、もうそんな人の事はどうでも好い。

私は一人なんだ。絕對に一人なんだ。一人で生れて來たんだ。一人で死んで行くんだ。時々父の存在を證據立てるやうなものも出て來るが。それはみんな空だ、みんな嘘だ。

私は父の否定の内に一生を葬らすべき運命を持つてゐるんだ。
母はあつても、姉はあつても、妹はあつても――それは女だ。父の無い子は孤獨だ。初めから父の無い子は……救ひ難い孤獨だ。
私は寂しい。寂しい。寂しい。寂しい……

騎兵士官

夢といふものは無意味なものだ。その無意味なものが幾日か幾月か幾年か經つと一寸意味ありげになつて來る事がある。併し、意味ありげになるのは一寸で、暫く立つとまた素の無意味に歸つてしまふのが常だ。――この話も丁度さうだ。

私は七つか八つの時分、短い不思議な夢を見た。なんでも一番町邊の――その頃私は富士見町に居た――小さな古い會堂の前だ。眞ん中の、人の足を踏むところだけ凹んだ人造石の石段を二三段上がると、淺葱色のペンキの剝げ落ちた扉がある。扉の左には黑板が懸けてあつて、之に「日曜日午前九時說敎」とか「水曜日午後六時祈禱會」とか書いてある。扉の右には窓があつて、窓硝子が一枚なしに壞れて居る。窓の前には丈の低い茨の垣根がある。その垣根は埃だらけで、窓から投られたらしい紙屑が澤山引つかかつて居る。虫の巢が刺から刺へ懸かつて居る……と、扉の白い把手がぐる〳〵つと廻つたかと思ふと、戶が中へ明いて、古びた背廣の服を着て、緣の廣い山の高い眞黑な帽子を冠つて、汚いはんけちで襟卷をした、額の廣い、眉毛の濃いい、髭のぼう〳〵生えた、眼の落ち込んだ、

瘠せた、丈の高い、恐い顏の男がひよいと首を出した……おう恐いと思つて眼を塞いだ。又眼を明いたら……夢が醒めた。

それからといふものはその男の顏が始終眼先にちらついてゐて、恐くて〳〵堪らない。どうかして忘れたい、どうか忘れたいものだと、思へば思ふ程はつきりして來る。思ひ出しては一日の內に何度ぞつとしたか分からない。

それから五年ばかり立つた。やつぱり眞黑な帽子を冠つた恐い顏の人が、時々出で來ては私を惱ます。

私が十三の時、從姉のお粂さんといふのが、騎兵の中尉の瀨川さんといふ人のとこへ嫁いた。嫁いたと云ふ話は聞いて居たが、まだ瀨川さんはどんな人か、私は一向知らなかつた。

或日母が——母はお粂さんの嫁入に就いて萬端の世話をしたのだ——今日は瀨川さんのとこへ連れてつて遣らうと言ふ。私は軍人志願であつたから——殊に騎兵のなりが好きだつたから——喜んで一緒に出かけた。

會つて見ると驚いた。瀨川さんといふ人は瘠せてゐる、丈が高い、額が廣い、眉毛が濃い、眼が

落ち込んでゐる、髭がぼうぼう生えてゐる……小さい時見た夢の中の人そつくりだ。

私はぞつとして、母の後に隱れた。母は、何を男の癖に恥にかむのだと言つて私を叱つた。お粂さんは可愛い顔をして恐い人の隣りに坐つてゐた――お粂さんは實際可愛い顔をして居た。眼つきが可愛いのだ。笑ふと何とも言へぬ愛嬌がある。色は白くて綺麗だつたが、如何にも柄の小さい人だつた。

段々話をして見ると、案外瀬川さんはやさしい人だ。私が軍人志願だと聞いて、士官學校を卒業した時卒業生全體でとつた寫眞だの、自分が馬へ乘つてるところを友達がとつて呉れたとかいふ寫眞だのを見せて呉れる。

やがて瀬川さんはお粂さんの方を振り向いて、

「何か御馳走がして上げたいが、繁さんは何が好きかね。」

と訊く。

「繁さん。繁さんのお好きなものは………」

と言ひかけて、お粂さんは可愛い眼つきをして私の顔を見る――それから母の顔を見る。私は疊を向いてしまふ。母は聲を呑んでくつくつと笑ふ。

「何だ。」

と、瀬川さんはやはり眞面目に訊いてゐる。

「お…しーるー粉。」

と、お粂さんはゆつくり言つて、

「さうねえ。」

と、又私の顏を見る。

「お汁粉。そりや妙だ、僕も汁粉ほど甘いものはないと思つてる――早速そいつて遣れ。」

と、やはり生眞面目である。お粂さんはびつくりしたといふ風に眼を見張つて、

「まあ、貴方も。」

「實はまだ內證にしといたのだが……あれ程好きなものはないんだ。」

「へえ。」

と母も驚いた。――併し、私は嬉しかつた。

やがてお汁粉が來た。瀨川さんと私とは逸早く椀の蓋を取る。お粂さんも母も、人の事を笑ひながら、やつぱりおいしさうに喰べ始めた。私は、瀨川さんが恐い顏の相好を崩して、にこにこしながらお汁粉を喰べるところが如何にも氣に入つた。お粂さんも可愛い人だが、要するに顏だけだ。瀨川さんは顏は恐いが、する事が如何にも可愛い。始めて見た時はこんな恐い人のところへ、よくもお粂さんのやうな可愛い人が來た事だと思つたが、今考へて見ると、瀨川さんの方が遙に可愛い――男はや

つぱり男が好い。
私はこの一度の會見で、すつかり瀬川さんが好きになつてしまつた――夢の中の恐い人が、いつか現の好きな人になつてしまつた。

歸り道に私は母から瀬川さんの事をいろいろ聞いた。非常に學問の出來る人だといふ事、殊に數學と獨逸語が得意だといふ事、馬の名人だといふ事。部下に優しいといふ事――陸軍大學へはひるのが志望で今その勉强中だといふ事。

馬の名人だといふ事が、一番私の胸を躍らせた。その時分私は馬が大好きだつた。小學校へ行く前、きつと一時間か二時間、叔父さんの――叔父さんは軍醫だ――馬の出かけるばかりになつてるのを借りては、毎朝近所を驅けて歩く。時々「引つかけられ」ては馬丁の助けを呼んだものだ。

その年の軍旗祭の時、私は瀬川さんの出てゐた騎兵聯隊へ行つて、始めて瀬川さんの手並を見た。馬見所には聯隊長なる某宮殿下がお出でになる。その左右には將官佐官尉官の上下もなく今日の賓客が大勢居流れてゐる。その下の馬場で瀬川さんは曲乘をして見せた。

私はその時「瀬川さんは馬に乘つて生れて來たのではないか」と思つた。實に馬と仲が好い。どん

な事をしても馬は怒らない。どんな事をしても馬は瀬川さんを離れない。和服を着てお汁粉を喰べてる瀬川さんは可愛いには可愛いが、今思ふと、まだどうもほんとの瀬川さんではなかつたやうだ。金釦の三行に列んだ軍服――この時分はまだカアキイ色ではなかつた――を着て、緋羅紗に縁の太い筋のはひつた、股の邊がだぶ〳〵して居て膝から先の急に細くなつてる洋袴(ずぼん)を穿いて、從卒が念入りに磨いた黑の長靴の拍車(はくしや)を日の光に輝かして、栗毛の逸物に乘つたところを見ると、「これこそほんとの瀬川さんだ」といつた心持の好い感じがする。私は瀬川さんの軍人振を見て、お汁粉の瀬川さんより猶好きになつた。

お粂さんと瀬川さんとは仲が好かつた。殊に瀬川さんはお粂さんを可愛がつた。母もこれなら世話甲斐があつたと大層喜んでゐた。毎日夕方になると、きつと瀬川さんはお粂さんを連れて散歩に出る――どう云ふ訣か散歩に出る時、いつも瀬川さんは絣の着物を着て出る、お粂さんはいつも縞の着物を着て出る。お粂さんは丈が低い。瀬川さんは丈が高い。この散歩は親類中の一つ話で、「まるで根つけだ。」と笑ふ人があれば、「片假名のトの字だ。」などと惡口を言ふのがある。瀬川さんはそれが厭なのか、ずん〳〵早足で緣日の中などを歩く。お粂さんの小股では中々追つつけない、せい〳〵云つて追つ

かける、半分走け出して追掛ける。それで瀨川さん散步が厭なのかと思ふと、さうでもないらしい。やつぱり夕方になると、每日出かける。お粂さんの話では、人込みへ來ると早足になつて、人のゐない處へ來ると、立ち留まつて、にこにこして、お粂さんの追ひつくのを待つてるさうだ。一度などは瀨川さん人込みを通り拔ける時に、餘り忙てて日和下駄を片足脫ぎ捨ててしまつた。それでも構はずに跛引き引き人のゐないとこへ出てしまつた後から、お粂さんが日和下駄を片つぽぶら下げて、駈けてやうやう追つついたといふ珍談がある。

お粂さんが嫁いた明くる年、日淸戰爭が始まつた。瀨川さんは某師團の參謀部に附いて出征する事になつた——陸軍大學へはひる間際だつたので、非常にそれを殘念がつてゐたとか聞いた。お粂さんは別れに臨んで取り亂す計りに泣いたさうだ。

戰地からお粂さんへは殆ど每日消息があつた。併し、いつも端書へ「無事戰鬪參加」と六字書いて來るばかりだ。日附と處——不都合な場合には處も書かない——が變るばかりで、「無事戰鬪參加」の一點張りにはお粂さんも流石に驚いたさうだ。

やがて戰爭も濟んだ。瀨川さんも無事に凱旋した。大尉に昇進して、金鵄勳章を賜はつた。もう大尉になると陸軍大學へははひれないのださうだが、戰爭があつたのだから爲方がないと云ふので、一般に許された。今度こそはと瀨川さんは一生懸命に勉強を始めた――ところが、又急に臺灣へ遣られる事になつた。

瀨川さんは非常に失望した。けれども、臺灣はほんの一年ばかりの事だし、特別を以て、歸つてから學校へ入れて遣るといふ許可が出たので、兵書、數學書、語學書などを軍用行李へ一ぱい詰込んで、瀨川さんは臺灣へ立つた――この時もお粂さんは大層泣いたさうだ。

臺灣へ行つてから、暫くは消息があつたが、半年ばかり立つとぱつたりなくなつてしまつた――お粂さんのところへも、何處へもなくなつてしまつた。どうしたのだらうと思つて、心配してると、臺北の衞戍病院から、瀨川騎兵大尉は精神病になられたといふ通知が來た。

この通知に少し遲れて、從卒の有田といふのが歸つて來たので、始めて瀨川さんの詳しい消息を聞く事が出來た。

瀨川さんは勉強をし過ぎた、勉強をし過ぎて氣が違つたのだ。それに妻君の事を始終思つてゐたらしい、非常にお粂さんを戀しがつて、同僚の士官に始終笑はれたさうだ、氣が違つてからも始終お粂

さんの事を言ひ續けださうだ…………

「はじめはどんな風だつたの。」

私の母は有田に訊いた。

「はじめはその…………」

と言ひかけて、有田はお粂さんの顔を見る。

「どんな風だつたの。」

と、又母は繰り返す。有田は咳拂ひをして、

「夜、寢臺の上に起立されて「お粂、お粂、お粂、お粂」と早口で何でも二十遍ばかり言はれるのです。變だなと思つてをりますと、寢臺の直ぐ側の羽目に拇指程の節穴があるのです、その節穴を一生懸命に覗かれて「いよう、驅け足、驅け足ッ！」と又早口で言はれるのです。――私はびつくりして軍醫のところへ駈けつけました。」

「その前に何か變な事はありませんでしたか。」

「はい。唯その二週間ばかり前から、すつかり默つてしまはれまして、何も命令をなさらんです。私の方からかう致しませうかとか、ああ致して宜しいですかと伺ひますと、唯ふん、ふんと鼻で返事をされるばかりでした。」

「あなたがこつちへ來る時分はどうでした。」

「はい。私がこつちへ參ります時分は、もうすつかりおとなしくなられて、唯時々大きな嘆息を吐いてをられました――一體極靜な性質の精神病なのださうであります。」

「あなたがこつちへ來るのを知つてゐましたか。」

「はい。「大尉殿、私はこれから東京へ參ります。御先へ行つて待つてをりますよ。」と申し上げたら、やつぱり唯笑つて、ふんと鼻で返事をされました。「もうぢき奧樣のとこへ御連れ申しますよ。」と申し上げたら、「いや、駄目だ、もう大學へははひれん。」と、悲しさうに言はれました。」

有田の物語の內、お粂さんは唯默つて下を向いて泣いてゐた。私も好きな瀨川さんの氣違ひになつたのを悲しんだ。

母ももう有田には何も尋ねなかつた。

白い患者の服を着て、前よりは一層痩せた瀨川さんが新橋へ着いた時、お粂さんは迎の人の內にゐなかつた――お粂さんは狂氣の夫を捨てて行方も知らず家出をしてしまつたのだ。

瀨川さんはお粂さんのゐないのにも氣が附かぬらしい――平氣な顏をしてゐる。迎の人々の顏を珍

しさうに見廻して、にこ〳〵にこ〳〵笑つてゐる。

家へ歸つてからも、お粂さんの事は何とも言ひ出さない。母は氣の毒になつたか、眼に涙を浮べて、

「ねえ、瀨川さん。」

と、白い服の肩を叩いた。

「ふん。」

と、成程有田の言つたやうに鼻で返事をする。

「お粂がねえ………」

と言ひ掛けると、瀨川さんは俄に悲しさうな聲を出して、

「お粂は逃げて了ひました。」

母は驚いた。私も驚いた。瀨川さんはお粂さんが戀しくて氣違ひになつたのぢやない、お粂さんが逃げたから氣違ひになつたのぢやないかと思ふ。併し、それにしては時が前後する――が、氣違ひには時が前後するのかも知れない。だがそれにしても不思議だ。

それから瀨川さんは從卒の有田と御飯焚と三人暮らしをする事になつた。間もなく休職の辭令が下

つた。有田は名殘を惜しみながら隊へ歸つた。その後は御飯焚の婆さんとたつた二人きりになつてしまつた——お粂さんの消息は更に知れない。

母もお粂さんの不人情を怒つたが、行方の知れない者を探して歩いたつてしやうがない、ただ瀨川さんが可哀さうだ〳〵と言ひ續けて、時々見舞に行つた——母の行く時は私もきつと附いて行く。

氣が違つて歸つてから瀨川さんは毎日外出する——たつた一人で外出をする。外出をする時は、きつと袴羽織か大禮服だ——休職だから憲兵も咎める事が出來ない。

何處へ行くのか分からないけれども、一日外へ出てゐては、夕方になると歸つて來る——歸つて來る時、きつと五六冊本を抱へて來る。家へ歸つてからは、やつぱり默つてばかりゐて、時々はあつ、はあつと嘆息を吐くばかりださうだ。

或日私が小川町を通ると、その頃あすこにあつた陸軍の御用書肆八尾の店先に、瀨川さんが袴羽織で腰をかけて、しきりと番頭に何か話してゐる。私がつと側へ歩いて行つて、帽子をとつて挨拶すると、瀨川さんは知らん顏をしてゐる、人の顏をぢつと見ながら知らん顏をしてゐる。番頭や小僧が私の顏をじろじろ見るので、却つて私の方できまりが惡くなつて、また帽子を冠つて、眞紅になつて、逃げ出した事がある。——それにしても番頭と何を話してゐたのであらう。

私はこの頃になつても、小さい時に見た夢の中の恐い人を時々思ひ出した。瀬川さんに始めて會つた時から、その恐い人が大變やさしい人になつたのだが……又この頃恐くなつて來た。併し、瀬川さんはやつぱり好きなのだ、夢の中の人だけ恐くなつたのだ――初め夢の中の人と瀬川さんとは全く別だつたのだが、瀬川さんのにこにこした顔を始めて見てから一時一つになつて、瀬川さんが氣違ひになつてから又二つが別になつてしまつたのだ。

八尾で瀬川さんに會つた後、私は或日偕行社の紀念祭へ叔父さんに連れて行かれた事がある。向うへ行くと叔父さんは自分の友達の方へ行つてしまつて、私に一人で見てゐろと言ふ。

偕行社のお祭には毎年兩國の大相撲が來て相撲をとる――その日も私が行つた時は幕下の取組最中であつた。私が芝山を降りて土俵場へ行かうとすると、直ぐ傍の天幕から丈の高い騎兵の士官が大禮服で出て來た。見ると、髭ぼうぼうと生やした瀬川さんだ。

「や、繁さん。」

今日はにここにこして私の名を呼ぶ。私も何だか嬉しくなつて、

「なぢさん、來たんですか。」

と、言つて見た。瀬川さんは人の詞などは耳にもかけず、衣兜から懐中鏡を出して、自分の顔を寫して見、

「繁さん。いよう映るぞ、映るぞ、僕の髭が映るぞ……は、は、は、は、お粂が髭の中から顔を出しとるぞ。」

お粂と云ふ名を聞いて、私は氣の毒になつて、默つて瀬川さんの側を離れた。側を離れて、遠くで様子を見てゐると、瀬川さんは澄まして鏡を納つて、土俵場の方へ大股で歩いて行つたかと思ふと、みんなの後から丈延びをして、一心に相撲を見てゐた。

その日だつたかその晩だつたかの宴會に、瀬川さんは元自分の聯隊長をしてをられた某宮殿下のお席の隣りへ平氣で腰を掛けて、衣兜から例の懐中鏡とそれからチックの新しいのを出して、鏡を見い見い髭の化粧を始めたさうだ――宮殿下のお髭は美しかつた。

この日を手初めとして、その後瀬川さんはあらゆる陸軍士官の會合へきつと出席した――いつも大禮服を着て。

誰が知らすのでもない、新聞を讀むでもない。だがどうして知るのかきつと出て來る。出て來たつ

て誰も話をする者はない、自分も誰に話し掛けようといふのでもない。ただみんなの中へはひつて嬉しさうににこにこしてゐるばかりだ。稀に地方から來た年少士官などが顏を知らないから、眞面目な態度で、「大尉殿は健康を害してをられますか。」

などと訊くと、瀨川さんは得意の色を面に浮べて、

「陸軍大學の入學試驗は唯記憶力ばかりを見るのぢやない。腦を見るのぢや、腦の働きを見るのぢや、卽ち鏡を見るのぢや。」

と言つて例の鏡を出す。年少士官はびつくりする。そこへ瀨川さんを元から知つてる士官が來て年少士官に訣を話す。年少士官は始めて肯いて、淸い若い同情の眼を潤ませて、ぢつと瀨川大尉を見るのが常ださうだ。

私が偕行社で會つてから一二ヶ月立つと、瀨川さんから私の母のところへ手紙が來た。氣違ひの字ではあるが元能書家であるから直ぐそれと分かつた。何を言つて來たのだらうと開封して見ると、中々長い手紙で、和文めいた女めいた文章が長々と書いてある。手紙の文句は、其時分の私には分からなかつた事が多いし、分かつた處も大方忘れてしまつたが、要するに「秋の夜の閨寂しいから、妻を

一人周旋して吳れ」といふやうな文意だつた。

世話好の母もこれには弱つて、暫くうつちやつて置いたところが、間もなく瀨川さんがお上さんを貰つたといふ噂をする者があつた。驚いて母が訪ねて見ると、成程ほんとに來てゐた。鐵漿をつけた、色の黑い、瀨川さんよりは年上らしい女が來てゐて、頻に世話を燒いてゐたさうだ。誰の世話で來たのだらう。氣違ひと知つて來たのだらうか、氣違ひと知つて一身を犧牲にする覺悟で遣つて來たのだらうか。それとも何も知らずに唯夢中で來たのだらうか——是等は親類中の疑問になつた。が、解決は終に與へられなかつた。

其女が來てから、母も段々疎遠になり、親類の誰彼も漸く不沙汰になつた。

其後間もなく子が出來たといふ話を聞いたが、どんな兒だらうといふ問題が一時親戚間に喧しかつたきりで、又直ぐ忘れられてしまつた。

私が商業學校へはひつてからの事で——體が弱いので軍人はやめたのだ——或年の五月の靖國神社の大祭に參拜した歸り道、富士見町の通りを九段坂の方へ步いて來ると、ふと瀨川さんに會つた——久しぶりで會つた。瀨川さんは不相變——だがもう餘程汚くなつた羽織袴で、胸には金鵄勳章と赤十字社の會員章と日淸戰爭の從軍徽章とを下げてゐる。と見ると、筒つぽを着た五六歲のぼんやりした肥つた男の子の手を引いてゐる——これがあの妻君との間に出來た子に違ひない。

私が立ち留まつて挨拶をすると、例の通り知らん顔をして行つてしまつた。——往來の人は私が勳章に敬禮をしたのだと思つたらう。

これが私の瀨川さんに會つた最後だ。その後私は神戸や横濱の商館廻りばかりしてゐるので、東京にゐる事が少なかつた。併し、東京に隱居をして居る母に訊いて見ても、やつぱりその後どうしたか分からないと言つてゐる——お粂さんの消息も不相變知れない。

私に於ける瀨川さんは初め夢の中の人だつた——それから實在の人だつた——最後に狂人だつた。併し、夢の中の瀨川さんに似た恐い顏の人が、なぜ會堂の戸を明けて外を覗いたのだか、それは今だに解らない。

熊次の家族

一

父が死ぬと間もなく、私の母は今まで廣く使つてゐた大きな屋敷を、大工に頼んで二軒にして貰つて、小さな汚い方に自分達が住み、大きい綺麗な方を人に貸す事にした――家は番町の御厩谷である。もと〳〵一軒の家を二軒にしたのだから、兩家の境と言つたら、間に細い道が一つあるきりで、殆ど區劃と云ふものがない――隣りの通用門は即ち私の家の正門である。隣りの中の口は私の家の玄關と相對してゐる。井戸も一つのを二軒で使ふのだ。風呂場も一棟のを二軒で使ふのだ。裏の空地に至つては殆ど何處から何處までが隣りので、何處から何處までが私の家のか更に區別が立たなかつた。

母は或學校の破しの木を買つて、この空地に厩を一棟建てた――亡父が陸軍の人であつたから、自然知合の軍人などが借り手にならうからといふ思ひつきである。

厩は梅林と小さな菜畠との間に出來た。間口一間奥行二間の板敷、半坪の土間、天井は可なり高かつた。馬丁の住居は土間から右へ上がると六疊一間、それに小さな臺所、出窓は入口と同じ方角へ向

いて明いてゐた――私の部屋は私の家の一番奥だつたから、掃き出しの窓を明けると斜右に厩がよく見える。

母の思ひつきは効が有つた。厩があるといふので、直ぐ知合の砲兵少佐が借りに來た。

少佐は五年越し使ひ馴れた馬丁に流行病で死なれて、丁度新しい馬丁を探してゐるところだつた。引越の時は從卒が馬を引いて來て、五六日新しい――併し木は古い――厩に一人で泊つてゐたが、やがて新しい馬丁が家族を連れて遣つて來た――從卒は隊へ歸つた。

六疊一間の新宅に一家を擧げて引越して來た馬丁は名を熊次と言つた。土佐の者である。縣知事が東京の本邸へ歸られるのを幸に、その供をして上京したところが、間もなく知事に亡くなられて、危く路頭に迷はうとしてゐたところを、或人の世話で少佐に仕へる事になつたのだ。

熊次の家族は、父の鐵次、女房のおすま、長女のかめじ、次男の勝次、三男の菊彌、自分を併せて都合六人。長男の寅次は既に或蹄鐵屋へ年期奉公に出てゐた。

何れも生粹の土佐人で、その鼻へかかつた訛、男らしいはきはきした口の利きやうは、東京つ子ばかりの私の家の者には可笑しくもあつた、珍しくもあつた。

熊次は顴骨の出た、眉根の迫つた、鼻の小さい、口元の締まつた、赤ら顔の男である。凹んではゐるが眼が鋭い。いつも髮を短く刈つてゐる――柄は大きくないが、如何にも締まつた働けさうな男だ。

父　鐵次は熊次に好く似てゐる。熊次の顏と額と頰とに深い皺を三筋四筋入れれば、直ぐと鐵次の顏になる。但し頭は禿げてゐる。顏色が熊次より赤い――これは酒毒だといふ事だ。骨格は悴に劣らぬ程頑丈だ。

女房のおすまは馬鹿に顏の長い女だ。頰ぺたが弛んでゐる。眼尻が下つてゐる。着物なども始終だらしがない。それに菊彌といふ乳吞を抱へてゐるから、殆ど乳を納つてゐたのを見た事がない――菊彌は母に似て顏が長い、眼尻が下がつてゐる。

長女のかめじは父の熊次に似たから、思ひ切つた不女だ。併し男らしい締まつた顏だ。頭は一向働かぬ。教育もない。當時十二歲。

次男の勝次は熊次の子供の中では、總ての點に於いて一番出來が好かつた。顏は父と母との中を行つて、男らしい內にやさしみがあつた。柄も父の締まり過ぎたのと母のだらしのないのとの中を行つて、剛骨性と柔軟性とを等分に持つてゐた。當時まだ七歲の小兒ではあつたが、頭も好く働く、物覺えも好い。寡言沈默、しかも一旦自分がすると言ひ出した事はどんな事でも遣り通す。

或時勝次は梅の樹へ登つた。その時私が下に立つてゐると、勝次は上から、「小便すつぞ。」と息張つて言つた。「出來るならして見ろ。」と私が言ふと、「すつとも、好いか。」と念を押すのだ。「好いとも。」と私が答へると、勝次は言下に勢よく遣つた。眞逆と思つて佇んでゐた私は、覺えずそこを飛び

のいた――勝次は樹の上で愉快さうに笑つた。

梅林の側に器械體操の鐵棒があつた。或時私は勝次とこの鐵棒で振り飛びの遣りつこをした事がある。勝次は私より躰が小さいものだから、幾度遣つても私より先へ飛べぬ。終に口惜しがつて、振れるだけ躰を振つてうつちやるやうに手を放すと、漸く私より先へは飛べたが、尻を打つて氣絶をしてしまつた――皆に介抱されて氣がつくと、平氣な顔をして私を見て、「若様より先へ飛んだけん。」と得意さうに言つた。

熊次は克明に働いた。朝は早く起きて、直ぐとバケツに水を汲んで來て、寢藁を一摑み摑んで、しいしい言ひながら一しきり馬の足を洗つて遣る。それから、きのふ刻んで置いた飼葉を當てがつて置いて、直ぐと馬具を磨きにかかる。馬具が磨き上がると、直ぐ鞍を馬の背に置いて、自分は法被(はつぴ)を着る。それから飯を喰べて、少佐のお出かけを待つ。

少佐を隊まで送つて歸つて來ると、直ぐ法被を爲事着に着替へて、廐の板敷を洗ひ出す。寢藁を外の地面へ搔き出して天日に晒す。それから齒の大きな押切を持ち出して、梅の樹の下でざくりざくり飼葉を刻み始める。

晝飯が終ると、心持よく乾いた寢藁を又板敷へ搔き入れる。さつき刻んだ飼葉の一部分を綱のついた桶へ入れる。これが濟むと、少佐の迎に行く時間までは稍閑である――この間に熊次は犬を食ふ。

熊次は犬の肉が好きだ。夜中になると毎晩のやうに、私の家の書生の木山といふのと連れだつて、牛込見附へ犬殺しに出かける。その時分、牛込見附は寂しいとこだつたから、二人の行く時分にはもう人通りはない。大抵一晩に一疋の獲物はきつとあつたやうだ。

悪い事だとは二人も知つてゐたから、好い肉を取つたあとの死骸は、畠の隅に埋めてしまふのを常とした。併し、何にするつもりか、皮だけは一々剝ぎ取つて厩の羽目にぶら下げてあつた。

熊次は自分の一日の爲事を毎日嚴に守ると共に、また日課のやうに犬を煮て食ふ事を忘れなかつた——熊次と木山はやがて躰中に腫物が出來た。

木山を相手に犬を喰べてしまふと、また法被を着て少佐の迎に行く。夕方歸つて來ると、鞍を外して、馬の躰をしいしいと言ひながら洗つて遣り、それから飼葉を食はして寢かして遣る。自分も一度は早く寢るが、十一時頃に又起きて、木山と一緒に牛込見附へ出かける。

毎日毎日少しも變らぬ生活を續けてゐた——但し犬殺しだけは間もなく止めた。牛込見附ばかりにもさう犬が出て來ないので、段々大膽になつて、近所の犬をやり始めた。亂暴にも隣りの下宿屋の犬は赤だからうまからうといふのでやつたのは好かつたが、例に依つて、剝いだ皮を厩にぶら下げて置いたところが、下宿の女房が梅の實を貰ひに來た時に、ふとこれを見つけて、大に怒つた。結局御主人に知れて、熊次は少佐に叱られた。木山も私の母に叱られた。斯くして二人は漸く犬の肉を食ふ事

な止めたのである。

熊次の父の鐵次も悴に負けずに働いた。畠を耕したり、兩家の使に出步いたりして、少しも冗に時を費さなかつた。鐵次は至つて正直者である。二錢三錢の買物に行つても、使ならきつと受取を貰つて來る。私の家で釘を一錢買ひに遣つたら、その受取書を貰つて來て、みんなに笑はれた事がある。鐵次は往來で私どもに會ふと、きつと土下座をして挨拶をする。今時そんな事をする者があるものかと言ふ人もあるか知らぬが、鐵次は實際それをしたのだ。人通りの盛な往來で時々これを遣られて、こちらが顏を赤くした事も度々である。

女房のおすまも風(ふう)はだらしがなかつたが、やつぱり働き者だつた。兩家は勿論、近所の人の洗濯物をして、朝から晚まで手を濡らしてゐた——娘のかめじはその間菊彌の守をしてゐるのだ。何の束縛もなく、いつも勝手に遊んでゐるのは勝次一人だつた。

二

熊次の御主人は古い少佐である。もう頭には白毛が澤山あつた。

少佐は軍人に似合はぬ優しい人で、十七になる一人の娘を天にも地にも代へ難く愛してゐた——夫人は病身で終始青い顏をしてゐた。

或年の紀元節に、學校の式から歸つて來ると、お孃さんは寒氣がすると言つて、蒲團を敷いて貰つて寢た。間もなく大熱が出て來て、その明くる日の明くる日、譫言をいひながら息を引き取つてしまつた。

父の少佐は他の見る目も氣の毒な位に泣いた。

初七日が濟むと、陸軍省へ屆を出して職を辭した――間もなく病身の夫人と二人で、娘の墓のある青山の墓地の近所へ小さな家を建てて、そこへ引移つた。

熊次は雇を解かれた。馬は少佐の知合に賣られた。

熊次の家族は途方に暮れて、馬のゐない廐に暫く日を暮らしてゐた――氣の毒だから、また御主人の出來るまでは廐に住んでゐても好いと、私の母が言つたのだ。

朝、夕、夜、馬が板敷や羽目を蹴る音を、始終自分の馴で聞きつけてゐた私は、それがこの頃ぱつたり聞こえなくなつたので、何となく寂しい寂しい氣持に襲はれた。

勝次も一向元氣がなくなつた。

三

熊次は御主人に行かれてしまつて、二三日は塞いでゐたが、直ぐとまた氣を取り直して、それから

毎日のやうに外を出歩いた――女房が稼ぐし、父親が小遣ぐらひは取つて來るので、主人をなくしても、行きなり困るやうな事はなかつたのだ。それに三度三度お總菜は私の家から貰へたのだから。

熊次は朝出るとは晩に歸つて來る。時によると、晝飯に歸つて來るが、飯が濟むと、直ぐ又出て行く。

時々洋服を着た色の黑い男を引つ張つて來ては、六疊の座敷で酒を飮みながら、兩方とも土佐辯で盛に何か話をしてゐた。

或時そこへ私がはひつて行くと、熊次は洋服の男を指さして、「若樣、わしも今にこんなに立派になるけん、驚いちやいかんぜ。」

と、言つた――息が酒臭い。

勝次は廐の板敷で一人でメンコを玩弄にしてゐた。

四

それから間もない或日の事。

熊次の父の鐵次は用ありげに臺所口から私の母を訪ねて來た。

母が肥つた身體を勝手口まで運ぶと、鐵次は土間に膝を突いて、お辭儀をした。

「まだ還るんだねえ、堅い人だよ。およしと言つたら。」

母はいつもの通りかう言つた。鐵次は漸く膝を立てて――それでもまだしやがんでゐるのだ――少しも遠慮のない土佐辯で、今度忰の熊次が亞米利加へ行く事になつたといふ話をした。そして自分達は巣鴨の或大きな金持の屋敷の庭掃除に雇はれたから、そのお屋敷の長家へ引越すつもりだ。就いては忰の出發まで、それから後片附の濟むまで、二三日のところはまだ御厄介にならなければならぬから、何分宜しく賴むと言ふのだ。

それが中々母にも分からない。問ひ返し、問ひ返し、物の三十分もかかつて漸くその意味が取れると、

「好いともさ。いつまででも都合の好い時までゐるが好いやね。だけど、熊次は亞米利加へ何しに行くんだえ。勞働とかをしに行くのかい。欺されなければ好いがねえ。」

と、言つた。

「大丈夫でござりまする。國の者が遣つてゐる組合へ參るのでござりまするから。」

と、鐵次は信ずるところあるらしく言つた。

五

二三日立つと、細い茶辨慶の背廣を着て、赤い襟飾をした熊次が暇乞に來た。

上品には見えぬが、洋服は存外似合つた。頭の毛はいつの間にか長く延ばして、綺麗に分けてゐた。

その明くる日、熊次は横濱へ立つ事になつた――長男の寅次も厩へ別れに來た。これが又熊次に生寫しといふ程よく似てゐる。

一同は厩の六疊で酒汲み交して別れを告げた。鐵次も泣いた。おすまも泣いた。寅次も泣いた。かめじも泣いた。熊次も誘はれて少しは泣いた。泣かなかつたのは勝次と赤んぼの菊彌だけだつた。

暫くすると、熊次を一緒に連れて行くといふ例の同國人が遣つて來て、引つ立てるやうに熊次を連れて行つてしまつた。

六

一週間ばかりすると、熊次の一家は引き連れて、巣鴨へ越して行つてしまつた――厩は愈々寂しくなつた。

熊次が立つてから丁度五十日目に、亞米利加から手紙が二通届いた。いづれも熊次からで、一通は私の母に、一通は自分の父の鐵次に宛ててある。

私の家へ來たのを明けて見ると、ペンではあるが、拙なからぬ筆で、文章もなだらかに書いてある――先づ無事に米國へ着いた事、直ぐとカリフオルニア州のサクラメントといふところへ來て、同國

人の合宿所に宿つてゐるといふ事、勞働の手初めに薪割を始めたが、薪割りでも一日に一弗は取れるといふ事などが細々と書いてあつた――代筆に違ひない。熊次は全くの無筆である。

手紙が着いたからといふ事を知らして遣ると、鐵次は巣鴨から飛んで來た。これが又無筆なのだから、封を切つて私の母に讀んで貰つたのだが、文意は私の家へ來たのと大した變りがなかつた。唯この分では直に金が溜まるから、金の溜まり次第纏めて送るやうにしよう。日本にゐる間は不自由もしなかつたのが、外國へ來て見て始めて文盲では駄目だと氣がついた。どうか子供の教育をくれぐれも頼む。私も亞米利加へ來てから、日本字をいろはから習ひ始めたと書いてあつた――これだけは私の家へ來た手紙には書いてなかつた。

手紙の中には向うの宛名を横文字で書いた封筒が二三枚はひつて居た。鐵次はその内一枚を家の書生の木山に預けて、どうかお暇に幾枚でも上書を書いて呉れと言つて、西洋封筒を近所で買つて置いて歸つた。

この日の鐵次の話に依ると、鐵次は毎日お屋敷の草取をして金を貰ふ。おすまは相變らず洗濯物をして金を取る。かめじは或髮結の梳手に住み込む。勝次は駒込の製本屋へ年期奉公をする。一家はばらばらに別れたが、別れた爲に存外鐵次は苦まずに濟んでゐる――菊彌も漸く母の乳を離れたさうである。

五六日立つと又熊次のとこから手紙が着いた。知らせると、又鐵次が巣鴨から遣つて來た――いつもの通り素足に草鞋で、手製の大根の泥のついた儘を五六本土産に括げて。

この日は私が手紙を讀んで遣つた――私ももうその頃は高等二年生だつた――無事に暮らしてるから安心して呉れ、目に見るものが一々新しくて面白い、日本人はみな親切にして呉れる、などといふ事の外別に變つた事も書いてなかつた――やはり代筆だが前便とは字が違ふ。

「金の事は書いてござりませぬか。」と鐵次が訊くから、「いんえ、ちつともそんな事は書いてないよ。」と言ふと、鐵次は失望したらしい顏をして、「それでは若様、誠に恐れ入りまするが、返事を書いてやつて遣はさりませ。」と言ふから、「書いてやらう。なんて書くんだい。」と訊くと、どうか金を早く送つて呉れ、子供を三人も抱へてゐては中々自分の稼ぎぐらゐでは遣り切れぬから、と書いて呉れと言ふ。

「だつてそりやお前嘘だらう。」

と、私か言ふと、

「嘘でも宜しうござりまする――さうでも言つて遣りませねば、あいつ中々送つてはよこしませんけに。」

と言ふ。それからその通り書いて、讀んで聞かして遣ると、喜んで、臺所の土間へ又土下座をしてお辭儀をして歸つて行つた。

一週間ばかりすると、今度は家の書生の木山へ宛てて熊次から手紙が來た――その手紙の中に、寄席藝人の踊り子だか歌ひ手だかの女の半裸體の寫眞の、臺紙の裏を薄くなるまで剝ぎ取つたのがはひつてゐた。そして、その剝ぎ取つたざらざらしてる臺紙の裏へ、ペンで怪しい平假名が書いてあつた――いろはを始めたといふ熊次の自筆らしい。「これをみるとやりきれない。」とある。

鐵次は默つてゐても一週間に一度は息子の消息があつたかどうか聞きに來る。消息があればきつと金の事が書いてあるかと訊く――鐵次は巣鴨のお屋敷を出されたさうで、その時は大分困つて居るやうだ。

熊次が亞米利加へ立つてから三月目に、始めて五十弗金が屆いた。鐵次は躍り上がつて喜んだ。何でも手續の都合で横濱まで取りに行かなければならなかつたが、鐵次は一晩私の家に宿つて、明くる朝夜の明けぬ内に、例の素足に草鞋で、てくてく歩いて横濱まで出かけた。

夕方首尾よく金は取つて來たが、私の家へ歸つた來た時、その內幾分はもう減つてゐた――鐵次は酒が好きだ、それに買食が好きだ、往來を歩きながらも口を動かしてゐなければ氣が濟まぬといふ爺だ。

七

その後熊次から消息は始終あつたが、金は一向送つて來なかつた。その癖葡萄を摘む事を覺えたか

ら、この頃は薪割をしてゐた時より好い手間が取れるとはいつてよこしてある。
鐵次は消息はないか消息はないかと煩さいやうに訪ねて來る——消息があれば伜の安否より金の來るか來ないかを第一に訊く。
鐵次は亞米利加から來た手紙を讀んで貰つて、その返事と封筒の上書とを人に書いて貰つて、十錢の切手を貼つて出して、また手紙が來ると讀んで貰つて、返事を書いて貰つて、高い切手を貼つて出して——同じ事を一年か二年繰り返してゐた。
熊次からは一度つきり更に金が來ない。催促をして遣ると、この間送らうと思つて用意して置いたところが、友人に貸して吳れと泣きつかれて已むを得ず貸したところが、そいつが腹の黑い奴で、その儘行方知れずになつてしまつたから、もう一月待つて吳れとか、送らうと思つて郵便局まで持つて行く途中で掏摸にとられてしまつたとか、今度サクラメントから三十里ばかり北の方へ出稼ぎに行くので、その旅費がかかるからもう少し待つて吳れ、いづれ先方へ行けば成功の見込があるからとか、いつも言譯を言つて來る。
鐵次は當時西丸町の百軒長屋に住んで、おすまの洗濯と自分の草取などで僅に生活を立ててゐた。
亞米利加からの賴りない手紙を種に、私の母もちよくちよく金を借りられた。
おすまはめつたに訪ねて來ない。

八

熊次が日本を出てからもう五年になつた。

消息は段々少くなる。居所も諸所方々と變るやうだ。金は一向送つて來ない。

二男の勝次は小僧ながら一かどの職人になつて、帝國大學の製本所へ勤める事になつた。

長女のかめじも一ぱしの髮結になつたが、染井の植木屋の職人と出來て、やがてこれと世帶を持つた。だが、一向祖父さんやお母さんの世話はせぬさうである。

鐵次は終に辻待の車夫になつた。車夫になつたが、俥は汚なし、挽く人の腰は曲がつてるし、餘り乘手はない。唯無暗と安いのが取柄で、これには他の車夫も多少影響を受けたらしい。稀に上野などへ出かけて行つても、みんな知つてゐて、又あの安いのが來たから駄目だと言つて、若い車屋達はさつさと逃げて行くさうである。

かういふ風だから、まるつきり立前にならぬといふ訣でもなかつたのだが、例の買喰が好きだから堪らない。大抵齒代を漸く持つて歸る位なものだ。甚しい時は襤褸を質に置いて、齒代を拂ふ事がある。

おすまも百軒長屋へ越してからは、洗濯物の賴み手もないので、内職に麻を撚る事を始めたが、どうも思ふやうな手間も取れぬ。

この苦しい中で、大學の製本所へ出てゐる勝次が腸チフスに罹つた――大學の方の世話で、病院の施療室へは入れて呉れたが、やはり何かと經費がかかる。鐵次もおすまも懸命に働いたが、迚も追つくものではない。

鐵次は屢々私の母のところへ無心に來た。勝次は私も母も大好きな子だつたから、一圓二圓の事ではあるし、大抵は言ふ通りに貸して遣つた。

勝次は二ヶ月わづらつて終に死んだ――行年十三歳である。

死ぬ少し前に大分快くなつた。醫者もこの分なら大丈夫だと言つた。勝次も痩せ細つた躰を寢臺の上に起して、硝子窓の外を往來する學生の影を見て、「俺も早くああやつて外が歩きたいなあ。」と言つたさうだ。熱の出てゐる盛りは始終亞米利加のお父さんの事を言ひ續けに言つてゐたさうだ、が、この日は鐵次にお父さんから消息はあるかと一言訊いたきりだつたさうだ。

その明くる日の午後四時、俄に病が革つて、勝次はその頬のこけた顏に硝子窓から映す夕日の光を一ぱいに浴びた儘、とこしへに眼を閉ぢてしまつた。

九

私はおろ〳〵聲で鐵次が物語る孫の臨終の有樣を聞いて、靜に泣いた――

それから、勝次の死んだ事を亞米利加へ知らして遣つたけれども、手紙が一通來たきりで相變らず金は送つて來ない――勝次のささやかな葬式も私の母の志で出來たのである。

そろ〳〵熊次の評判が惡くなつて來た。五年も六年も金を送らないのはあんまり酷い。あつちで媳でも貰つたんだらう。いや女でも出來たんだらう。それにしても子供の可愛くないといふ法はない、きつと惡者の仲間入でもして、もう國の事などは忘れてしまつたんだらう……おすまも、かめじも、奉公に行つてる寅次も皆熊次に愛想を盡かしてしまつた――菊彌はお父さんは初めからないものだと思つてゐる。

唯一人鐵次は、根氣よく亞米利加へ手紙を出した。今の稼ぎでは十錢の郵便賃も決して安くはない。けれども、鐵次は買喰を儉約しても、郵便だけは一月に二度きつと出す――返事は一向に來ない。

十

斯くして又四年は過ぎた。

熊次が立つ時三つだつた菊彌も、もう十二歳の少年になつた――やつぱり顏の長い、眼尻の下がつた子である。時々祖父さんの供をしては、私の家へ遣つて來る。

鐵次は何處をどう便を求めたか、外務省に賴んで亞米利加に於ける熊次の生死を尋ねて貰つた。三

ヶ月ばかりすると、あつちの領事館から確に生きてはゐると言つて來た。金を送つて貰ふやうに話しては呉れぬかと頼んで、本省ではさういふ世話までは燒けぬと叱られて歸つて來た。

その頃鐵次は車夫をやめて、巣鴨の或店に雇はれて、鼻緒を積んだ荷車を日に一回淺草まで運んでゐた。閑があると私の家へ來て庭の草を取つたり畠を耕したりして、母から幾らか宛貰つて歸つた。

やがて、長男の寅次が年期に禮奉公まで首尾よく勤め上げて、蹄鐵屋から歸つて來た。

鐵次は愁眉を開いた。もう亞米利加などは恃にしない、これからは寅次の手傳ひをして稼ぐのだと嬉しさうに吹聽して歩いた――鐵次はもう六十歳である。

寅次は或金主を見つけて、同じ巣鴨の庚申塚に蹄鐵所を開いた。當分は菊彌が鞴を押したり、鐵次が馬の足を曲げて持つたりしてゐたが、やがて下職も二三人はひつて來た。

鐵次はこの有樣を自慢した手紙を亞米利加へ出した――そこにゐるかどうだか分からないものを、古い所書で出したのである。

十一

ところが、その明くる年寅次は徴兵に取られてしまつた――甲種合格で野戰砲兵に編入された。

鐵次はがつかりしたが、僅三年の事だからと寅次の言ふのに氣を取り直して、それぢやあ店は立派

に留守居をするから、躰を丈夫にして無事で歸つて來て吳れと賴んだ。

滿期除隊にならうといふ年に、日露戰爭が始まつた。寅次は庚申塚へ二十分間暇乞に來たきりで滿州へ行つてしまつたが――間もなく南山で名譽の戰死を遂げたといふ通知があつた。

鐵次は又私の家へ泣きに來た。そして又目的もなく亞米利加へ手紙を出した。

十二

蹄鐵屋の職人も一人減り二人逃げて、今では元の通り祖父と嫁と孫との三人になつてしまつた。一寸した爲事は菊彌がうろ覺えながら遣るけれども、もう賴みに來る人もない。得意はすつかり西ヶ原の蹄鐵屋に取られてしまつた。

鐵次は又鼻緒運びを始めた。

おすまも亦洗濯物を始めた――蹄鐵所の裏の馬を繫ぐ空地は好い物干場になつた。

十三

暫くすると、おすまは子を産んだ――夫が亞米利加へ行つて十年から留守なのに、おすまは子を産んだ。

蹄鐵所にゐた職人との中に出來たといふのが近所の評判ださうだが――中に舅の鐵次との間に出來たのだと言ひ出した人がある。

「おすまは前から舅の鐵次と通じてゐたのだ。熊次はそれを知つて亞米利加へ行つたのだ。それだから金も送つて來なければ、消息もしなくなつたのだ。」と言ふ人がある。

けれども、この眞僞は私には分からぬ。

おすまはその後赤坊を抱いて、平氣な顏をして私の家を訪ねて來た。

かめじは亭主と一緒に高崎の方へ行つてしまつたといふ事である。

鐵次は今も相變らず鼻緒運びを遣つてゐる――毎日夕方になると、板橋街道を駒込の方へ、鼻緒屋のしるしのある弓張提灯を下げて、六十何歲になる赤ら顏の爺が、山のやうに鼻緒を積んだ荷車を、うんうん言ひながら曳いて行く、その後から顏の長い、ぼんやりした男の子がぼんやり後押しをして行くのを、あすこいらの人はきつと見る筈だ。

熊次からは年に一度、年始狀が來るばかりになつてしまつた……

ヂブラルタルの貝

大な貝が二つある。
一つは子安貝の大いのから幾本も角の生えたやうな貝だ。薄桃色に灰に黄の加はつた美しい肌の色は、この貝の取れるあたりの女を思はせる。
一つは帆立貝の舟の方を二つ合せたやうな貝だ。併し、帆立貝よりずつと大い、肉もずつと厚い、溝もずつと深い、色もずツと白い。ベエスボオルの球の縫ひ目のやうな形をして、齒と齒とがしつくり食ひ合つてをる。
この二つの貝を見る度に、私は眞鍋のをぢさんを思ひ出す、眞鍋のをばさんを思ひ出す、眞鍋のお高さんとお品さんを思ひ出す。
この二つの貝は、眞鍋のをぢさんが洋行から歸つて來た時に、ヂブラルタルの海峽で取れたんだと言つて私にお土產に持つて來て呉れた物だ。その時私は九つだつた。
眞鍋のをぢさんは、私の親父と同じに、陸軍の監督だつた。私の親父は東北人で色の白い、肥つた

小男だつたが、眞鍋のをぢさんは鹿兒島人で、赤ら顔の瘦せぎすな、丈の高い人だつた。それでゐて、親父は眞鍋のをぢさんと非常に仲が好かつた。親父は北の人間でありながら、常に闊達斧放な南方の人を慕つてゐた。

眞鍋のをばさんも鹿兒島の人だつた。酒の好きな、でぶ〳〵肥つた、聲の美しい人だつた。男のやうに『遊び』が大好で、女の癖に時々一人で藝者買に出かけた。

お高さんとお品さんとは、この二人の間に出來た一つ違ひの姉妹であつた。人形のやうに美しい、そして人形のやうに取り澄ました、姉妹だつた。姉のお高さんは私より二つ下だつた、從つて妹のお品さんは、私より三つ下だつた。

親父が生きてゐた時分の事は、ちツとも記憶に殘つてゐない。親父が任地で死んだので、母と一緒に東京の屋敷へ歸つて來た。その時、眞鍋の一家も丁度坂一つ向うに住んでゐた。私の住んでゐた町は、非常に坂が多かつた。追憶はその時分から始まる。

これは七つの春だつたと覺えてゐる。

私は眞鍋のをぢさんに連れられて、千住の羅紗會社へ行つた。をぢさんは工場を一つ〳〵案內して

色々な器械を見せて呉れた。歸りに會社の顧問をしてゐる西洋人の家へ寄つた。西洋人は會社の中の社宅に住んでゐた。

美しい厚い絨氈の敷いてある部屋だつた。塗の美しいピアノが一臺据ゑてあつた。うまい紅茶を幾杯も飲ませて呉れた。

眞鍋のをぢさんは、カイゼル式の髭を捻りながら、西洋の詞で、頻に西洋人と何か話してゐた。西洋人は、怪しい日本語で、私の洋服姿を褒めて呉れた。「立派です、立派です。」と鸚鵡のやうに繰り返して言つた。

それから、私を大きな膝の上に乘せて、ピアノの蓋を明けると、毛むくじやらな、雀斑のある大きな手を、私の小さな手に持ち添へて、私に『君が代』を彈かせて呉れた。

眞鍋のをぢさんは、金歯を出して笑つてゐた。

これはその明くる年の春かと思ふ。

眞鍋のをばさんと私の母と、それから、眞鍋のをぢさんの下役をしてゐた軍吏の妻君と、お母さん連から三人に、お高さん、お品さん、私、その軍吏の男の子と、斯う四人子供が腰巾着に附いて、根津の溫泉へ一日遊びに行つた事があつた。

眞鍋のをばさんは、お酒に醉つて、歌を唄つた。内の母は三味線を借りて、それを彈いた。軍吏の妻君は何か喰べてばかりゐた。

子供連は、玄關の廣い板の間に集まつた。そこは日あたりが好くて、暖だつた。

丁度外を酸漿屋が通つた。

丹波酸漿を四つ女中に買はせた。

お高さんも好く鳴らした。お品さんも好く鳴らした。その軍吏の子も男の癖に鳴らすのが巧かつた。

私一人はどうしても巧く鳴らす事が出來なかつた。

「坊ちやんのは酸漿を召し上がつてゐるやうですわ。」と、女中が言つた。

私は、幾らくちや〳〵遣つても鳴らないので、たうとう癇癪を起して泣き出した。

軍吏の子は女のやうな口の利き方をする子だつた。いやに女の機嫌をとるのが上手な子だつた……

溫泉はもう無い。今は病院になつてるやうだ。

その次に思ひ出すのは、眞鍋のをぢさんが洋行をする時の送別會だ。

送別會は眞鍋のをぢさんの屋敷であつた。

八月の末の月の好い晩だつた。

客は十疊の座敷にはひり切れずに、緣側へまで居こぼれてゐた。柱を背中にして膝を抱へてゐる人もあつた。緣側から足をぶら下げて、月を眺めてゐる人もあつた。

客の内に薩摩琵琶の名人がゐた。この人は凛々しい顏をした八字髭の生えた人だつた。酒に弱い人と見えて眞赤な顏をしてゐた。

送別の一曲を所望されて、快く承知はしたが、さて彈くべき琵琶がなかつた。近所の琉球屋敷へ使を出して見たが、そこにもなかつた。

それではと、柴笛を吹く事になつた、柴笛でも有名な人だつた。

誰かが庭から橙の葉を二三枚とつて來た。柴笛の名家はその内で一番厚さうな葉を一枚とつて、それを茶碗の中の水に浸した。

やがて、その葉の雫を切つて口へ當てると、音階を試すやうに低い音から段々に高い音を吹いた。高い音から段々に低い音を吹いた。それから、高い音と低い音とを色々に交錯して吹いて見た。

一座は鳴を鎭めて、『松前追分』の數曲を聽いた。

厚い木の葉の細い纖維の内に隱れてゐた在らゆる音色が、この人の息の力に誘はれて、思はず月夜の空に漂ひ出たやうであつた。

曲譜だけを聽く樣な氣は少もしなかつた。歌の詞をあり／＼と聽くやうな氣がした。

をぢさんの留守中に女連の假裝會があつた。

眞鍋のをばさんは、大森鬘を冠つて、大小霰の上下を着けて、昔のお婿さんを眞似た。或歩兵中佐の夫人は金糸の縫のある裲襠を着て、綿帽子を冠つて、そのお嫁さんになつた。例の軍吏の細君は、旦那樣の軍服を着て、丸髷の上へ軍帽を冠つて、火口で髭を生やした。お高さんはどうしてゐたか忘れてしまつた。お品さんは、紫繻子に金糸で縫紋のしてある肩衣をつけて、手品師のやうな風をしてゐた。

私が學校の歸りに寄つた時、會はもう酒に亂れてゐた。丁度これから寫眞を寫すといふところだつたが、お嫁さんが醉ひ倒れてしまつたので、何も假裝をして來なかつた私の母が、お嫁さんの衣裳をその儘着て、代理を勤めた。

庭の木にはみんな霜除がしてあつた。

眞鍋のをばさんはお高さんとお品さんに踊を習はせた。踊の師匠は下町から教へに來た。男のやうな聲を出す、顏のてら〳〵した女だつた。

これもをぢさんの留守中だつたらう。一度その師匠の踊の浚が下町の或料理屋であつた。私も母に連れられて見に行つた。

お品さんは『玉兎』とか何とかいふ簡單なものを踊つた。お高さんは一番終に『將門』の光國を踊つた。その下膨れな顏は男に適してゐた。「嵯峨や御室の花ざかり、浮氣な蝶も色かせぐ」といふ文句を、私はその時始めて覺えた。

「眞鍋たか子」「眞鍋しな子」と二人の名の附いてゐる、簪だの手拭だの菓子だのを貰つて歸つた。

それから間もなくをぢさんが西洋から歸つて來た。そして、ヂブラルタルの貝を私に呉れた。私はその貝の exotic な味を大層喜んだ。

それから八九年の間の記憶は全くない。

ただ眞鍋の一家がその後東京にゐなくなつた事だけ覺えてゐる。

十一の夏に、私は母に連れられて、親父の墓詣りに行つた。親父の墓は、その死んだ任地の陸軍埋葬地にある。

その時眞鍋の一家は、役目でその町に來てゐた。私はちつともそれを知らなかつたが、母は前から知つてゐたらしかつた。

親父の祭を濟ますと、或暑い日の午後、母は私を連れて眞鍋のをぢさんの所を訪ねた。

をぢさんは留守だつた。をぢさんの部屋には眞鍮の柱の寢臺が置いてあつて、白いレエスの蚊帳が微風に動いてゐた。寢臺の下に露西亞絹更紗のクションが落ちてゐた。

眞鍋のをばさんは、胸をはだけて、團扇を使ひながら、土地の藝者の噂をした。今でも自分一人で時々遊びに行くといふ話もした。

夕方になると、何處からかお高さんとお品さんが歸つて來た。お高さんはもう十六だつた。お品さんももう十五だつた。

私はもうそろ〳〵母、伯母、姉、妹以外に女の存在を認める年頃だつた。

私はお高さんの下膨れな、つんとした顏付よりも、お品さんの細面な、敏捷らしい顏つきを好んだ。殊にお品さんの方は眼が活きてゐた。

眞鍋のをばさんは、私と母に船料理を御馳走しようと言ひ出した。

お高さんも、お品さんも連れて、五人で家を出た。

母と小母さんとはどん〳〵先へ歩いた。私はお高さんとお品さんの間へはひつて歩いたが、三人の内で誰も口を利く者は無かつた。

私は一人で子供の時の事を考へてゐた。

川は賑だつた。二階のある船が澤山浮んでゐた。二階にも下にも赤い提灯が並んで點いてゐた。提灯の火が川に映つて、碎けたり丸くなつたりしてゐた。

五人は棧橋を渡つて、ある船料理へはひつた。眞鍋のをばさんの御馴染だと見えて、取扱が極めて好い。

お高さんとお品さんは、お母さんに引附いて坐つて、何か恐いものでも見るやうに、時々私の顏を偸見してゐた。

やがて私はお高さんとお品さんの間に坐らせられて、母とをばさんとが並んでゐるのに對した。

「若い者は若い者で一緒にならにやいかん。」と、をばさんが言つた。

酒が出た。鰻が出た。

お高さんもお品さんも私も、一杯づつ飲まされた。みんな直ぐ眞赤になつた。

をばさんと母とは、昔話が大分跳んだ。子供連の方は一向話がなかつた。三人は互に初めて會つた人のやうに、きまりを惡がつてゐた。

その晩、をばさんは家へ泊れと言つて吳れた。

併し、私は何となく厭だつた。私はそれを母に囁いた。

船料理から上ると、母は體よく辭退して宿へ歸つた。

二三日立つと、私は無上に眞鍋の家が戀しくなつた。一晩どうしても泊りに行きたくなつた。で、母にせがむと、こなひだ折角泊れと言つて呉れた時に泊らないで、此方の勝手な時に泊りに行くなんて、そんな我儘な事は出來ないと叱られた。

でも、私はせがんで止まなかつた。

爲方なしに、その晩、母は私を連れて宿を出た。

眞鍋のをぢさんは矢張留守だつた。をばさんも今何處かへ出かけるところだとか言つて、忙しさうにしてゐた。お高さんもお品さんもゐなかつた。

母は私だけ置いて、自分は宿へ歸つてしまつた。

その晩、私は十一時半頃まで、みんなの歸るのを待つてゐたが、たうとう誰も歸つて來なかつた。

爲方なしに、女中の敷いて呉れた床へはひつて、一人で寢てしまつた。

床へはひつた途端に、私は何だか非常に心細いやうな氣がして來た。で、暫く蒲團を冠つて泣いてゐた。

明くる朝起きると、をばさんも、をぢさんも、お高さんも、お品さんも、みんな寢てゐた。をばさんの枕元には銅盥と手拭とが置いてあつた。

私は誰も起さないやうに、そつと顏を洗つて、女中にあとを賴んで、眞鍋の屋敷を出た。宿へ歸つて、母の顏を見ると、涙が眼へさしぐんで來た。併し、泣かなかつた。そして、ゆうべは面白かつたとも充らなかつたとも言はなかつた。

その明くる明くる年、眞鍋の小父さんは、更に或師團の所在地たる西の方の市へ轉任した。

その年の夏、私は一人旅をして、その眞鍋のをぢさんのゐる町へも立寄つた。町へ着くと、私は直ぐ眞鍋のをぢさんを訪ねた。まだ轉任したてで、をぢさんは町外れの或寺を借りてゐた。

名前を言ふと、直ぐ小坊主が本堂へ案內して吳れた。そこにはをぢさんが戰爭の時持つて歸つたらしい支那の色々な道具が飾つてあつた。

私は冷々とする薄暗い空氣の內に一人坐つて待つてゐた。

やがてお品さんが出て來た。一昨年見た時よりは一層大きくなつた。顏にぶつ〳〵何か出來てゐた。をぢさんも留守、をばさんも留守、お高さんも留守だつた。

お高さんは近い內に陸軍中尉をお婿さんに貰ふのだといふ話をお品さんがした。

私はお品さんと二人きりで話をしてゐるのが極が惡くて、直ぐと暇乞をした。

それから十年經つた。

お品さんももう嫁に行つたさうだ。

先達、私が青山まで用があつて行くと、眞鍋のをぢさんに好く似た人が背廣服を着て電車に乘つてゐた。その隣にやはり鹿兒島出身で、死んだ親父なども世話になつた或大將がやはり背廣服を着て乘つてゐた。大將はもう役を引いてゐる人だ。眞鍋のをぢさんも、もう役を引いたのだらう。をぢさんも氣がつかないらしかつた。私も氣がつかないやうな顏をしてゐた。

もう昔知つてゐた人で私と交通のある人は一人もない。母ももうゐない。屋敷ももうない。私はそれからそれと始終流浪をしてをる。

それでも、眞鍋のをぢさんに貰つたヂブラルタルの貝だけは、不思議に何かの荷物の中に殘つてゐて、今も倚座右にある。

私はいつまでも昔を忘れる事が出來ない。…………

青泊君

第一高等學校の文科一年生へ入學した時、青泊君は名前の奇妙なので、先づみんなの注意を引いた。青泊君は北海道天鹽の人であるとのみで、中學は何處でやつて來たのか、小學は何處でやつたのか、知る人は絕えてない——人間といふ者は、悲しかつたにつけ、嬉しかつたにつけ、新しい知人に自分の前生涯の話をして、それを何か得意とする本能を持つてゐるものと見えて、かうして新しい學校へはひつて、新しい同窓を得ると、直ぐ自分はもと何處の學校で停學を何度食つたとか、かういふ好きな先生がゐて、自分を可愛がつて吳れたとか、人が聞かないでも自分の履歴話を喋々するものだが、青泊君は決してさういふ話をした事がない——青泊君は自分の事といつたら、年の幾つであるかをさへ打明けなかつた。

學校へ出した届によると、青泊君はその時廿四歲だつた——高等學校の一年生にしては大分ふけてゐる。併し、顏立は如何にも子供らしい。頭は丸くて稍大きい、髮の毛はいつも五分位に延びてゐる——いつ刈るのか知らぬが、刈り立てといふのを見た事がない、いつも五六分ばかりにぼや〳〵と延

びてゐるのである——しよつちう度の極めて強い近眼鏡をかけてゐるが、その目が又なく可愛い。目だけ見てゐると、いつでも「笑つてる」やうだ。然るに口はといふと、脣が蛸の樣にそつくり返つてゐる。口だけ見ると、いつでも「怒つてる」やうだ……赤と青とを混ぜると紫になる……青泊君の顔は、遠くから見るといつでも「泣いてる」やうだつた。

洋服は體操の時の外、決して着て來た事がない。又その制服を着て木馬を飛ぶ恰好の可笑しさ、みんなが笑ふと、例の、口が怒つて目が笑ふ——それは〳〵悲しさうな顔をする。

青泊君はぼんやりしてるやうで中々記憶が好かつた。German Course の時間に、いつも先生の難問に答へるのは青泊君だつた——

「The book lies on the table. 澤田さん獨逸に譯して。」

「Das Buch liegt auf dem Tische.」

「机は何格(なんかく)です。」

「Dative.」

「なぜですか。」

「rest を言ひ表してをりますから。」

「さうです。動詞がレストを言ひ表してをるからです。宜しい。ええ松野さん、He put the book on

the table. 譯して。」

「彼は机の上に本を置いた。」

「日本でなく、獨逸に譯して。」

「Er……Er legte……Er legte das Buch auf dem Tische.」

「いけません。次ぎの方。」

「………」

「次ぎ。」

「………」

「青泊さん。」

先生はかういふ時、いつでも青泊君の名を呼ぶ。

「Er legte das Buch auf den Tisch.」

「宜しい。松野さん分かりましたか。」

「分かりました。」

「机は何格です。」

「Accusative。」

「さうです。四格でなければならないんです。なぜですか。」
「知りません。」
「次ぎの方。」
「……分かりません」
「次ぎ。」
「………。」
「青泊さん。」
「Because the verb expresses here motion towards the book.」
青泊君はすら〳〵と英語で答へる。
「さうです。動詞がモォションを表してるからです。」
先生は左手に鰡を捻りながら、右手に持つた鉛筆で縦に長い、分の薄い、平常點の扣簿に何か好い印をつける。かういふ時に生徒の二三人はきつと振り向いて青泊君の方を見る、青泊君は得意な顔色更になしで、ぼんやり黒板を眺めてゐる——
その他の科目に於いても決して襤褸を出した事はない。一体、誰も答へる事の出來ない問に答へるのが、この人天性の愉快の一つと見えて、教場ばかりではない、寄宿でも度々次ぎのやうな事がある——

電氣がつく時分、銜(くは)へ楊枝か何かで、調子つ外れな寮歌を唱ひながら、食堂から歸つて來る者、食堂から浴場へ廻つて箸箱と濡手拭を一緒くたに摑んで歸つて來る者、これらが追々部屋へ集まると、腰を掛けるもののないやうに、窓へ腰をかけたり、机へ腰をかけたりして、世間知らずの氣焔を吐き合つたり、どら聲の合唱をやつたりするのが寮の夕の常であるが、文科の生徒のゐる部屋には、さすがにおとなしいのが一人はゐるので、竹刀(しなひ)で紙屑入の罐を叩きながら、「夜襲(ストオム)」の演習をするやうな事はない。

青泊君の部屋には、青泊君の外に文科の生徒が二人ゐた。一人は「身躰が弱いから」文科へ來たのだと稱する丈の低い、爺さんらしい、顔の大きな松野君。一人は繪が大好きなのだけれども、自分にはどうしてもかけぬと諦めて、せめては美學、美術史を專攻して繪畫の批評家たらうと云ふ抱負ではひつて來た、ひよろ〳〵と丈の高い、その癖手の頑丈な――何樣繪筆は執れさうもない――澤田君。

或日の夕方で、食堂から部屋へ歸ると、澤田君は椅子に腰をかけて、机の引き出しから何かアアトタイプの一枚刷を取出して、之を本立へ立てかけて、つくづくと眺めながら、

「おい松野氏、僕はきのふから考へてるんだがどうも分からんよ。」

「何が。」

「この繪がよ。」

「繪。繪にも分からないのがあるかい。」

「生意氣云ふな。まあこれを見ろ。」

「なに。Love and Life. By G. F. Watts. 分かつてるぢや無いか。」

「だから字の方が繪より餘つ程分かるといふんだ。」

「なぜ。」

「何故。まあ此繪を。見給へ、繪を。ほら、眞つ黒な男が岩山の上に立つてるだらう。すると美しい裸體の女がこれに縋つて歩いてるだらう。」

「分かつてらあ。」

「それは分かつてるさ。分からないのは黒い方が愛(ラヴ)か、白い方が人生(ライフ)か、或は白い方が愛(ラヴ)か、黒い方が人生(ライフ)かだ。」

「そんな事はどうでも好いぢやないか。愛(ラヴ)と人生(ライフ)と云ふ題でかういふ繪がかけてると思つてりや、それで澤山ぢやないか。」

「あれだ。だから君は硏究心が乏しいといふんだ。一體ウォッツといふのは誰だか知つてるかい。」

「繪かきだらう。」

「呆れるな。繪かきにやあ極まつてらあね。」

「だつて君がその極まつてる事を聞くんだもの。」

二人の會話はいつでもかうだ。この間だるつこい會話を、青泊君は傍に立つてにやにや笑ひながら聞いてゐたが、

「澤田君、それはね、黑い方がラヴで白い方がライフなんだ。」

松野君は、一言青泊君の詞を聞くと、「有難い。交代が來たぞ。」と言はぬばかりの顏色して、もう澤田君の方は見も返らず、平氣で新聞を讀みにかかる。

澤田君は、この難問に答へた青泊君の顏を、一種尊敬の目で仰ぎ見ながら、

「けれども僕は、白い美しい方がラヴらしいと思ふがね。」

「このラヴは Divine Love の意味で、人の戀ではない、神の愛だ――神の愛に縋らなければ人生の道は一步も辿れぬといふ寓意なのさ。」

「なある程。豪い思想だね。そしてこの岩の上に咲いてる菫はどういふわけなんだ。」

「知らないつ。」

といふかと思ふと、古びた麥藁帽子を冠つてついと部屋の外へ出てしまふ……

澤田君は一寸その後姿を見守つたが、立ち上がらうともせず、も一度反り返つて、繪をつくづくと見て、ほつと一息ついたが、稍暫しして、

「青泊君は實に何でも知つてるねえ。」

と、さも〳〵感心したやうに言ふ。

松野君はもうすつかり新聞に夢中である——讀んでるのは第六ペエジ、卽ち廣告欄。

「ねえ松野氏。」

松野氏は健腦丸の能書を繰り返し默讀してゐる。默讀してるのではない、一つ一つの活字の上に順繰りに眼を注いでゐるだけである……健腦丸は實業家、官吏、神經家、投機家、學生、僧侶、その外常に腦髓を勞する人、持藥として少量宛を用ひ賜へば………

「おい松野君。」

……胃を健康にし、腦を强壯ならしめ、血液の循環を………

「松野つたら。」

「え。何。」

と、何か面白い小說でも讀んでゐたのを妨げられでもしたやうに、澁々首を上げる。

「靑泊君は學者だね。」

「さうかい。」

と言つたきり、又廣告を續けて讀む……能くす、殊に大酒家には缺くべからざる藥にして婦人の逆上………

澤田君はあまりの張合なさに、給をしまふが早いか、扉をがたぴしと廊下へ出て、やけに大きな聲で何か歌ひながら、隣りの部屋へ遊びに行く…………

この時青泊君は、駒込梅月の奥の座敷で、闇の青葉の囁きを聞きながら、ひとりで美さうに「栗鹿の子」を喰べてゐた。

一學年は事もなく過ぎてしまつた。

新入生案内の役目として誰か後へ殘らなければならない規則でもあるやうに、一年級にはきつと落第生がある。この物語に出た人物は各々相當な成績で――青泊君も際立つて優等の成績ではなかつた――二年級へ進んだ。教室が變る、教師が變る、皆の顏も少し一高面になつて來た。

新學年の教室で、先つ一番盛なのは暑中休暇中の手柄話た。躑躅の病葉を喰べて三日間凌いだり、着物を頭へ結へつけて出水の川を裸で渡つたりした冒險家もあつた。故鄕の養家で極めた嫁を斷つた爲に、これから苦學生の境涯にはひらなければならぬやうになつたと喞つ詩人もあつた。「アンナ・カレニナ」と「戰爭と平和」を卒業したと自慢するトルストイ好きの小說家もあつた。澤田君はラスキンのかいた水彩畫を物の本で見てから、奮激一番木炭紙のスケッチブックと一圓なにがしの西洋給具を東京から國へ取り寄せて、大に例の頑丈な手で給筆を振はうとしたところが、着くと直ぐ弟に取ら

れてしまつたから、又例の諦めて、木の葉一つかかなかつたと云ふ龍頭蛇尾な話をする。松野君は國へも歸らず、暑中と云へばいづれもがんがらがんな本郷の下宿に、たつた一人で居て、寢て、起きて、喰べる外なんにもせずに六十日暮らしたといふ話だ――これなどは一寸人に出來ぬ事で、隨分誇るに足るべき材料なのだが、松野君は相變らず何も彼も面倒臭さうで我から自分の話をする事などは更にない。

青泊君も相變らず、難問に對して突如と答をさしはさむ外は全く沈默を守つてゐる――國へは歸らなかつたさうだ、歸省の費用で悉く本を買つてしまつたんで、歸りたくも歸れなかつたのださうだ――休暇の少し前に丸善へ行つて素敵に本を買ひ込んでるところを同窓の一人が見たといふ話だ。拂ひをする處を見たら、「總計百四十圓也」本は獨逸、英吉利の高尙な哲學書ばかりで、居合はせた同窓の學生は哲學に趣味を持たぬ者ではあつたし、名を聞いた事もないものばかりであつたから、何だつたか覺えてもをらぬといふ事だ――あんなに書籍を讀んぢやあ頭が堪るまいと誰やらが言ひ出した。本も好いが、あんな難しい、わからない本を無理に讀んぢや頭が堪らないやと又誰かが言つた……

今度の學年も青泊君は寄宿した。今度は文科の同窓ばかりで、新築の寮の明かるい部屋を占領した。

同室の顏觸れは撃劍の達人で、教育を志とする、體格精神共に健全な房州男兒岸野君。默々として西洋史を研究してるかと思ふと、時々百姓聲を發しては「ああ人生の曙に」とかいふ出鱈目歌を唱ひ

出す水戸の藩士、ゼ・グレイトとかデル・グロオセとか言へば全校知らぬ者なき大男の年岡君。それから獨逸の讀本で何かの火事の條に、"Feuer jo！" とあつたのを、始めから終まで、ホエルヨォ〳〵と讀んでみんなを笑はしてから、たうとうホエルヨォと云ふ綽名を取つてしまつた、額の脫け上がつた好人物、埼玉縣人塚原君。もう一人は肺が少し惡いので、始終悲觀的な顏をして、悲觀的な本を讀んで、悲觀的な歌を唄つてる薩藩の兵兒下村君——この人の愛讀は「逍遙遺稿」と「若菜集」とショオペンハウエルと大西博士の「西洋哲學史」である。

岸野君は生眞面目である、從つて運動の外には文學にも哲學にもあまり趣味を持つてゐない。デル・グロオセ君は西洋歷史一點張だ。ホエルヨォ君は絕えず嬉さうににこ〳〵笑つてるばかりで、賄の牛肉はどうも犬らしいとか、寄宿の湯の上り湯は熱くて火傷をしさうだとかいふ話の外には全く話のない男だ。同室で青泊君の話相手になるのは、下村君一人であつた。

寄宿から敎場へ出る時は、青泊君きつと下村君と一緒だつた——途中の話はいつも大西博士、ショオペンハウエル、ニイチエ、ワグネル……

その頃登張文學士は「帝國文學」で盛にニイチエを唱へてゐた。けれども青泊君は決して文學士の書いたものを讀まない。原書の全集を取り寄せて每晚更闌くるまで讀み耽つてゐた——果して分かつたらうか、恐らく分かりはしなかつたらうが、兎に角一心に讀んでゐたには違ひない。人が登張文學

士の說はどうだねと聞くと、

「ニイチエは氣違ひで死んだ――氣違ひになつて死ぬやうでなければまだほんとの崇拜とは言へない」いつもかう答へては、例の、目で笑つて口で怒つた。

青泊君はこの學年になつてから、ちよい／＼醫科の動物學の時間に傍聽に出かけるといふ評判である――時々倫理漢文などの時間を休む。

動物へ出るのぢやない、帽子を冠つて外へ出るのだ。社會の解剖にでも行くんだらうとちやかす人もあつた。社會ぢやあるまい、人間だらう。いや人間ぢやあるまい、女だらう、こなひだ先生の書籍の間に女學生の寫眞がはひつてゐたぜと、とりどりの蒼說はあつたが、秋冬は事もなく過ぎて、やがて花の春となつた。

或日體操の時間といふので、揃ひも揃つて恰好の惡い、色の褪めた、釦の數の不完全な、しかも文科の生徒はふだん着ないで行李か何かに押し込んどくのが多いから、大概皺くちやになつた制服を着たのが運動場の一隅に集まつた。肋骨が茶になつて、地が靑になつた陸軍の古服を着た、禿頭の體操教師は、「あぢゆまれ。」とお國訛りで號令をかける。第一番がデル・グロオセ、其次ぎが擊劍の教育家、以下段々と整列する。やがて教師が出缺をつける、その名前の讀みやうが大方間違つてるので、その

度にみんなくすくす笑ふけれども、先生は一向平氣だ。呼び終る。青泊君たつた一人缺席だ。

「下村。下村をらぬがあ。」

と、先生の仰せである。

後の方から小さい聲で、

「をいます、何ですか。」

「青泊どうしだ。」

先生も二人の仲の好い事は御存じと見える。

「知いません。」

「知らん。知らん事があるものか。」

「動物へでも出てるんでせう。」

「動物。動物たあ何ぢゆや。」

と、ホエルヨオ先生眞面目な顔をして口を出す。

「動物學です。」

「齒科(いくわ)のか。」

先生は如何いふ道樂か、無闇と清音に濁りを打つ。

「はあ。」

「怪しからん。あの男はちと木馬を稽古せにやならんのに。」

何を下らんといふ風で、もう相手になる生徒はない。

「ゐたゐた。」

と、俄に頓狂な聲を出す者がある——澤田君だ。

「ゐだ。どこに。」

先生はさらぬ方を見る。

「先生、あすこにゐます。石炭の中に。」

「ナニ。石炭のなが。」

一同澤田君が頑丈な手で指さす方向を見ると……成程ゐた。機關室の側に石炭が山のやうに積んである、その上にしやがんで一心に何か爲てゐるのは、確に青泊君だ。

「何をしどるのぢやらう。」

先生は口の中で自分に號令をかけて、斷足の姿勢を整へ、青泊君の方へ駈けて行つたが、間もなく石炭の山に着いた。

「おい何をしどる。」

俯向いた儘で返事がない。
「おい青泊、何をしどる。」
「え。」
とやうやう首を上げる。
「さ、體操ぢや。制服まで着とつて何をくじぐじしどるのぢや。」
青泊君は悠然と立ち上がつて、のそり〱みんなの方へ歩いて來た――先生は呆氣に取られてその後にくつついて來る。
ホエルヨォは青泊君の姿を見ると、
「おい、君、何してゐたんだ。」
「なに。僕か。」と例の怒つた口つきをして「石炭には色々な形があるね、全く同じ形の奴が二つあるかと思つて探してゐたんだが中々ないよ。」
「當り前よ、馬鹿々々しい。」
と、誰だか愚痴をいふ。青泊君は目で笑つて默つてしまふ。
やがて體操は始まつた――相變らず青泊君は木馬をしくじつて、幾度も先生に「やりなほじ。」を食はせられる。

花が散つて、若葉青葉となる――双眼鏡で遠くを見る時、初めはぼうつとしてゐたものが、度を合はせるに從つて段々とはつきりして來るやうに、初めはぼうつとただ淡綠の烟のやうだつたのが、日一日と角を持ち、線を持つて、はつきりした葉の形を備へて來る。運動場の草も俄に萌えて來た、蒲公英も一齊に咲き出した――青い羅紗の上に眞鍮の釦を散らしたやうだ。木といふ木の、枝と枝と交はる處、木の葉と木の葉茂り合ふ隈には初夏の氣といふやうなものが、こんもりと籠つてゐて、人がその側を通ると、そのむつとするやうな溫氣が出て來て、人の顏をふうはりと包む、包まれると一寸息が跳んで、浮いたやうな、沈んだやうな、變な氣持になる…………

青泊君は一週間ばかり全く敎場へ出て來ない。下村君の話に依ると、每日每日朝から晩まで便所の後で蚯蚓の解剖をやつてるのだ。

ホエルヨオ先生は友達思ひの好人物だから、日每に便所の後を訪問しては、青泊君に忠告をする。或日の朝、例の通り敎場へ出がけに、一寸この野天の解剖室へ立ち寄つて、怒らせないやうにといふ優しい氣持からか、小さい聲で、

「青泊君、ちつと學校へ出給へ。」

「え。何。」

と言つた儘、錆びた小刀で眞紅な蚯蚓を突つついて居る。

「學校へちと出給へよ。少しは勉强しないと、學年試驗も近いからね。」

「なに。勉强。勉强とは面白い筈のものだらう。學校は面白くないから行かない。」

と言つて、やつぱり俯向いた儘蚯蚓を突つついてゐる。

「そりや君いけないよ。面白くなくても勉强は勉强ぢやないか。」

「馬鹿を言ひ給へ。眞の勉强、否、眞の研究といふものはその研究する人に取つて面白いものでなければならない。學校は何だ、面白くないものを無理に遣らせる處だ。あれは勉强させるのでもなければ、研究させるのでもない、人を奴隷的に使ふのだ――學校の生徒とは給金を主人に拂つて、これに役仕する下男を言ふか。アハハハハハ。」

笑つた時、一寸ホエルヨオを仰いだが、又俯向いて解剖を續ける。

「そんなら蚯蚓は面白いかい。」

「面白いとも。天下にこの位面白いものはない――これこそ眞の研究さ。」

「成程初は面白いかも知れない。併し、毎日やつたら倦きるだらう。君は蚯蚓ばかりもう一週間もやつてるぢやないか。醫科ぢやもう蛞蝓だとさ。」

「醫科は醫科なり。我は我なりさ。まあこれを見給へ。」

と泥の上に置いたノオトを指すから、ペエジを繰つて見ると、青赤の鉛筆で何だかわけの分からぬ蚯蚓の解剖圖が二十も三十も書いてある。

「けれども蚯蚓で人生は分かるまい。」

と、だしぬけに便所の窓から叫ぶ者がある――見れば、西洋史のデル・グロオセだ。先生便所の中で例の「ああ人生の」でも唸つてゐたのであらう。

青泊君は右手に小刀、左手に半分裂いた蚯蚓を握つた儘、恐い顔をして立ち上がつたが、ぢつと年岡君の顔を見詰めて、

「分かるか、分からないか、これで覗いて見ろ。」

と言ひざま、左手に掴んでゐた半解剖の蚯蚓を、年岡君の目と鼻の間へ叩きつけた。

「わつ。」

と言つて、首を引つ込ます。ホエルヨオは青くなつて逃げ出した。

青泊君の目は可愛くて、始終笑つてるやうだと言つた。青泊君の口は尖つてゐて、始終怒つてるやうだと言つたが、この朝から、その目は釣上がつて恐くなつた。口はきつと締まつて、どうやら物凄くなつた……

その晩靑泊君は下村君と二人で外出したが、門限後に歸つて來た。下村君は何か怒つてるやうだ。靑泊君も何か怒つてるやうだ。一緒にはひつて來たがお互に口も利かない。部屋は撃劍とホエルヨオの二人きりで西洋史はもう寢たのかゐない。

と見ると、ホエルヨオは下村君に向つて、

「よう、お歸り。何處へ行つたんだね。」

「いや、一寸靑泊君の友達の處へ。」

「何處へ行つても好いぢやないか……大西博士は亡くなつたんだ。」

と、靑泊君はつかん處でつかん事を言ふ。

「おう、さういへば今朝「萬朝」に書いてあつた――下村君は嘸失望したらうな。」

と、撃劍は心から同情を寄せる。

「うう。」

と、下村君は氣のない返事をする。

「ふむ。三位一體か……三位一體……ああ寐よう寐よう。」

と、大きな聲で獨語を言ひながら、人に構はず靑泊君は二階へ上がつて行く。

「どうしたんだ一体。」

ホエルヨオが心配さうに聞く。下村君はさつき部屋へはひつたきり、まだ椅子にも腰かけず、自分の机に倚りかかつた儘でゐたが、

「いや、實は少し議論をしたのだが、議論が合はないので歸つて來たのだ……大西さんが死んだとい ふ事も二人の頭を大分掻き亂してをるのでね。」

「それに今朝の蚯蚓もあるからね。」

「蚯蚓。」

「グロォセがぶつけられた一件さ。」

電氣が消えかかる………

ホエルヨオはそれにも搆はず、夢中になつて今朝の珍事を話し始める――撃劍はいつの間にか寢室へ行つてしまつた。

下村君は小さな咳を一つして、

「ふう、そんな事があつたのか。」と少し考へて、「少し變だね。少し變ぢやないか。」

「さう、變と言へば變だが、一体變人だからね。」

「そりやさうだね。ハハハハ。」

と、力のない笑ひやうをする。

電氣は全く消えた。月が無いから部屋は眞暗だ。

ホエルヨオは燐寸で西洋蠟燭の新しいのに火をつけてこれを手に持つた。

「さあ。寢よう。」

下村君も西洋蠟燭の半分ばかりたつた奴を引き出しから出して、火をつけたが、直ぐ倒にして、机の上に白い蠟をポタ〳〵と垂らして、その上に立てた。

「まあ、お先きへ。」

「まだ寢ないのか。」

「なんだか寢たくないから。」

「又考へ事か。」

「なあに。」

と、言つて俯向いてる。

「ぢや失敬。」

と言つて、何も考へず、ホエルヨオは二階へ上がつてしまつた。

青泊君はその明くる日、一日口を利かなかつた。蚯蚓の解剖も止めたらしい。ただ寄宿の廊下を往

つたり來たりしてゐた。

晩になると、先生つと部屋へはひつて來た。相變らず默つてゐる。部屋の中を縱横(たてよこ)に行つたり來たりする。

やがて擊劍とグロオセの向ひ合つてる机の廻りをぐる／＼ぐる／＼と廻り始めた。

グロオセは大きな胸のどき／＼と騷ぐのを、兩手で押さへて、一生懸命にプッツゲルの歷史地圖のWürttemberg 1788 とある處を見詰めてゐる。擊劍氏は一種威嚴のある眼で、ぢつと青泊君の擧動を睨んでゐる。

青泊君は誰にも目を注がない。ただ絕えず自分の前を見てゐるばかりだ――暫くぐる／＼廻つてゐたが、軈てグロオセ氏の後へ來るとその背中へカッと唾をした――もう一廻りしてその後へ來ると、又カッと唾をした――グロオセは兩手を胸から放して頭を抱へた。決して後は振り向かない。

「何をするか。」

擊劍氏は竹刀(しなひ)を取つて立つた。

青泊君はこれには目も注がず、今度は下村君とホエルヨオ君との廻りを廻り始めた――ホエルヨオ先生はもうさつきから青くなつて、ぶる／＼慄へてる。下村君は大西さんの哲學史を一心に讀んでゐる。全く一心に讀んでゐるので、青泊君に氣がつかないのか、わざと平氣を裝つてるのか、それは

分からない………

青泊君は懐から小刀を出して鞘を拂つた――錆びた小刀だ――蚯蚓の解剖に使つた奴だらう。「えいつ、えいつ。」と聲をかけながら、何か切るものでもあるやうに、その小刀で空を切りつつ歩き始めた。

暫くすると、下村君の後へ廻つて、背中を突かうとする。ホエルヨォが驚いて立ち上がると、止めて又空を切りながら、机の廻りを廻り始める――下村君は知つてか知らずか、相變らず端然として書見をしてゐる。

撃劍氏は思ひ切つた聲音で、

「さあ諸君、部屋を出給へ、危險だから。」

と言ひながら、尙ぐる〳〵廻らうとする青泊君の肩を無手と押さへて、小刀を持つた右手を力に任せてぐツと握つた。押さへられた青泊君は機械が螺旋で止まるやうにぴたりと運動を止める――

ホエルヨォは先づ下村君に「逃げろ」と勸めた。書見をしてゐたと筈の下村君は泣いてゐたのだ。淚に濡れた顏を振り上げて、青泊君をぢつと見た目は如何にも悲しさうだつたが、やがて立ち上がつて、尙頭を抱へてるグロォセの後へ行つて、肩を叩いた。グロォセは驚いて飛び上がつた、これも顏が青い。

二人が無事に外へ出たのを見ると、撃劍氏は青泊君から手を放して、悠然と外へ出た。

青泊君はみんなの後を追はうともしない。機械が又動き始めたやうに、一人で又机を廻り始めた。

間もなく電氣は消えた。靑泊君は眞暗闇で、小刀を振り廻しながら机の周圍をぐる〳〵廻つてゐた。
その晩四人は他の寮に泊つた。

明くる日歸つて見ると、靑泊君の姿が見えない。舍監へ屆も出して諸方を探したが、かいくれ行方が知れない。ベイスボールのグラウンドの眞中に"Contra Wagner"といふ本が一冊棄ててあつた。その他の靑泊藏書は、靑泊君と一緒に姿を隱してしまつた。
部屋へはひつて見るとめちやくちやになつてる。椅子が引つ繰りかへしてある。引き出しがおつぽり出してある。同室四人の本はそこら中に投げ散らしてある。本は大概小刀で切り刻んである。グロオセのプッツゲルも縱橫に切つてあつた。下村君の西洋哲學史もめちやくちやに刀傷を受けてゐた。これにはそここの餘白に鉛筆で落書がしてあつた。文句は切れ〳〵で意をなしてをらぬが、一ペエジから段々に繰つて見ると、先づ、

ヴント泣ク…………

と大きく書いてある。第二ペエジには、

下村泣カズ、理性泣ケリ、然レドモ聲ナシ…………

とある。其次のペエジには隅の方に小さく、

ゴツト眼ヲ蔽フ、バイブルハ佛國ヨリ來ル、但シ圖入…………

とある二三ペエジ繰ると、

余ハ汝ヲ刺サン…………

と大きく書いてあつて、このペイジが殊更刀傷を澤山受けてゐる。

それからは、毎ペエジの餘白に、或は小さく、或は大きく次のやうな事が書いてあつた。順に寫して見ると

大道哲學
獸哲學　｝三位一體………
犬哲學

世界一ノ大星學者、大預言者、大僞善者、人生ト獸トヲ誤解セル大科學者ニ謝ス、實ニ汝ハ此無限ナル宇宙ヲ離レタリ、余ハ汝ニ謝ス………

寫眞ヨリ美ナリ、如何ニトナレバ寫眞體ノ自然科學ニシテ、美學ハ情ヲ以テ解セラレ得ベケレバナリ………

余ハ汝ヲ信ゼン、但シ一瞬間ノミ………

ニーチエ狂セリ、大西狂セズ、下村狂セズ(セリ)、三位一體ナレバナリ………

余ハ故ヴント、ヂエームス、チッチヤー氏ノ爲メニ善ム、卽チ自然科學的心理學ナレバナリ……

洗禮トハ如何、曰ク大西ニ聞ケ……

日月星、但シ三位一體ナリ……

男、獸、女……

天國ハ近ケリ……

ニーチエ生ル――ニーチエ死ス……

大西生ル――大西死ス……

大西――人――獸――三位一體……

泥ニナラザレ泥ニナレ

人體ノ美、カノ女泣ケリ……

下村君は最後の一句を讀むと、はら／＼と涙をこぼしたが、誰にも何とも言はなかつた。下村君は「あの晩」の事をその後一度も口にしなかつた――一体あの晩どこへ行つたんだらう。どこへ行つて何を議論したのだらう。

その後半月ばかり立つと、靑泊君は又飄然寄宿へやつて來た。自分のゐた部屋へはひると、元の自

分の机の處へ行つて、誰かが飲み棄てた水藥の古いのが置いてあつたのを、キルクを拔いて一息に飲み干し、

「どら飯でも食つて來ようか。」

と獨語を言つて出て行つた。下村君も擊劍君もホエルヨオ氏もグロオセ氏も此時部屋にゐたのだが、靑泊君は目にもかけない樣子だつた。

暫くすると、靑泊君、楊枝を使ひながら歸つて來た。今度はみんなの顏をずつと見渡して、

「あゝ腹が張つた。どら、散歩でもして來ようか。」

と言ひながら、壁にかけてあつた擊劍氏の冬帽を外して、濟まして冠つて出て行つた――それツきり靑泊君はどつかへ行つて了つた。

病　友

一

「好い天氣だね。」
「好い天氣だ……君と僕と散歩する時はいつでも好い天氣だ。」
「天は僕等二人を、この暖い日光とこの朗な空氣で看護して呉れるんだね――有難いなあ。」
「看護して呉れるのも天だが、病氣にして呉れたのも天だ……」
「…………」
「…………」
「……どうだい君、樫の新綠が白く光つて綺麗ちやないか。」
「どうして白く光つてるのだらう。」
「空を見給へ、空を。」
「成程、白い雲が走つてるねえ。」

「今朝の雨で濡れた葉へ天が映るのさ。」
「自然は何時見ても生々してるね……人間は駄目だ。」
「人間だつて生々してるさ。」
「君や僕は駄目ぢやないか。」
「僕等は出來損なんだから仕方がない。」
「出來損？」
「畫家が繪を畫いて、自分の氣に入らなければ破つて棄てちまひたくなるだらう？」
「そりや然うだらう。」
「造物主だつて人間を造つて、これは出來損だと見れば直ぐ毀して了ひたくなるだらうサ――君や僕はその出來損なのだ、天の思召に適はない人間なのだ。」
「何處が出來損なんだらう。」
「畫家の心は繪には解らないさ。」
「では默つて破かれて了ふのか。」
「まァ然うさね。」
「反抗したら如何だらう。」

「反抗は出來ないサ。」

「繪の如き無生物には出來なからうが、吾々人間には出來る――人間には意志があるもの。」

「在るのではあるまい、貰つたのだらう――繪之具は繪のものぢやない、畫家のものだ。」

「して見ると造物主の前では吾々人間も其邊の草や木も同じものなのか。」

「恐らく然うだらう――君は枯ッ葉の落ちるのを見て、馬鹿な奴だ、反抗すれば可いのにと思ふか。」

「然うは思はんサ、」

「だらう。僕等は枯ッ葉だ――風に逢へば落ちるより外は無いのさ。」

「………風は何時吹いて來るか分らない………吾々は風が吹いて來るのを待つてる爲に生きてるやうなもんだね。」

「………」

「枯ッ葉は地面へ落ちて、それから如何するのだらう。」

「箒で掃き集められて、焚かれるか、掃溜へ捨てられるさ。」

「けれども森や林ぢやァ掃く人もあるまい、樹の根に堆高く積るだらう。」

「それは腐つて土に混つて樹の滋養分になると云ふ話だ。」

「して見ると吾々も死んで他人の滋養分になるのかしら？」

「あんまりなりさうも無いねえ。ハハハハ。」

「君は來世は在ると信じてるんだね。」

「あゝ信じてるよ。」

「僕には如何しても分らん。君は如何して然う信じるのだ。」

「然う信じなくちや生きて居られんもの。」

「では必要上信じてるのか——意志の力で無理に然う信じて居るのか。」

「無理に信ずると云ふ事は出來ないサ。智も情も意も悉皆滿足しなければ信にはならないサ。」

「ぢや君のは三つとも滿足してるのか。」

「あゝ滿足してるよ。」

「如何云ふ風に滿足してるんだ。」

「僕がいつか英吉利の詩を讀んだ處が、斯う云ふ事が書いてあつた——鳥が空を高く向ふへ飛んで行く、初は翼を動かしてるのが明く見える——。」

「ふーん？」

「その鳥が漸々小さくなる——漸々小さくなつて終に黑い點になつて了ふ——」

「ふーん？」

「とう〳〵見えなくなつて了ふ――」
「ふん？」
「然し見えなくなつても鳥は居ないのぢやない、鳥は尚且空を向ふへ飛んでるのだ！」
「成程。」
「僕の來世觀は即是さ――僕は今の詩を唯一の慰藉にしてるのサ。」
「羨しいなア………僕も早く然う云ふ信仰が得たいものだ。」
「おなかの中さへ清淨にすれば、いつでも信じられるぢやないか。」
「腹の中？　不幸にして僕の肺は腐つてる…………」
「…………。」

………………………

「今行つたのは佛法（佛蘭西法科の略名）の人だつてね。」
「二人で歩いてるといつでも此處で會ふね。」
「壯健さうな人だ。」
「見給へ、あの後姿！」
「肥つてるね、立派な男だ！」

「いつでも賛歌を唱つてるね。」

「あの聲の力のあること……いつ聞いても、かう、何だか愉快で愉快で堪らなさうだね。」

「どうだい、あの太い洋杖を振廻しながら、橋を渡つて行く風の愉快さうだこと！」

「活動の權化だ！」

「この空と、この光と、この新綠とに、如何にも美く調和してる……」

「あゝ壯健な人は好いなア。」

「ほんとに……壯健な人は好い……」

「……」

「……」

…………

「もう避病院だ――別れよう。」

「腦病院から避病院まで――僕はいつでもさう思ふよ、病人に是程調和してる道路は無い……」

「君は今佛法の人に調和してると云つたぢやないか。」

「彼人は避病院から田端の停車場まで歩くんだ、病院を離れて活動世界に向ふのだ……僕等の道は何方を如何歩いても病院から病院だ……」

「途中に寺が無いだけ未だ好いのかも知れない。」
「ハハハハ…………ぢや失敬。」
「また明日。」

二

「僕はとう〳〵古道具屋を追出されたよ。」
「ふーむ、如何して？」
「やつぱり病氣を厭はれたんだらう。」
「さうか………で、如何した。」
「淺嘉町の下宿屋へ移つた。」
「あんな汚い家より下宿の方が清潔して氣持が好いだらう。」
「氣持は好いが、どうも調和しない。」
「何故。」
「僕は人間の廢物だらう。古道具屋の二階が非常に好く調和して居たのさ。」
「……つまらん……さう云へば君んところの店の正面の柱にボン〳〵時計の古いのが下つてたね。」

「うん、あるよ。」
「僕はあの時計が不思議でならないのだ。」
「ふーん、如何して。」
「君の處へ遊びに行く度に彼の時計の針のある處が異つてる。それでいつでも留つてるのだから怪しい。一昨日三時の處に留つてるかと思ふと、昨日は十一時半の處に留つてる、と思ふと今日は又六時廿分の處で留つてる………」
「うん、あれかい。あれには理由があるのさ。」
「へえ？　如何云ふ………」
「何も不思議な事は無いのさ。客が來て「あの時計を」と云ふだらう、すると老爺二つ三つ螺旋をかけて動かして見せる、客が買はずに歸ると其儘放棄つとく。素より怪しい器械なんだから直ぐ留つて了ふのさ。翌日又客が來る、又動かして見せる、客が買はずに歸る、又留つて了ふのさ。だから每日異つた處で留つてるんだ。」
「成程。然云ふ理由か――些とも氣がつかなかつた。」
「恰度僕等の身躰と同じ事さ。少し何か爲ようと思つてコツ〳〵コツ〳〵始めると直ぐ倦怠になつて了ふ――少し動き出すかと思ふと直ぐ留つて了ふんだ！」

「永久に留ると、それが死か。」
「さうさ。ハハハハ。」
「麥がすッかり大きくなつたね。」
「青々して眼が覺めるやうだ…………おゝ吃驚した……何だと思つた。」
「麥の中に下りて居たんだね――澤山な雀だなァ。」
「二人の足音に驚いたんだね。」
「どうだい、あのパァーッと飛び立つ時の勢の好いこと！」
「一羽一羽の翼一枚一枚に活動の氣が充ち滿ちて居るねえ。」
「病人はつまらんねえ…………」
「全くつまらん…………」

……………………………

「面白い事を發見したぞ。」
「何だ。」
「ほら、此邊は左が麥畑で右が葱畑だらう、それから其先は左が葱畑で右が大根畑だらう、又其先は左が大根畑で右が麥畑だらう――百姓は色の調和を考へて畑の區劃をするのか知らん……や、また

佛法の人が遣つて來た。」

「不相變歌を唱つてるねえ――力のある聲だなァ。」

「自然の生氣と調和してるねえ。」

「壯健な人は好いなァ。」

「ほんとに壯健な人は好い………」

…………………

「隨分足の早い人だねえ――最うあんな處へ行つて了つた。」

「長いコムパスを開いて、トットットットットッと歩いてく處を見ると、まるで軍人の樣だねえ。」

「軍人？　吾々は迚も軍人にはなれんねえ。」

「當然ぢやないか。」

「いや、赤い帽子を冠る軍人になれんのは無論の事だ……人生の戰に出る軍人になれんと云ふのさ。」

「そりや全くだ――僕等は『人生』の豫備校に入らうとして體格試驗に落第したのさ。」

「殘念だなァ。」

「一躰僕等は何の爲に學問をしてるのだらう。」

「死ぬまでの時間潰しさ――停車場で呉服屋の廣告を讀んでるのと同じだ。」

「もうもう止さう、そんな話は…………や、避病院へ患者が這入るね…………」
「追々暑くなると此院（ここ）は又……繁昌だ。」
「大層咳をするね、坂を上（あが）るのは餘程辛（つら）いか。」
「大變近頃………また……弱つた。」
「大切（だいじ）にし給へ………餘り勉强しちや不可（いかん）ぜ。」
「勉强はしないよ――時間潰しに過ぎんと思つてるのだから。」
「…………地藏様の涎衣（よだれかけ）が新しくなつたな………」
「ほオヽ成程。」
「ぢや失敬。」
「明日學校で會はう。」
「今度の下宿へ遊びに來給へ、吉祥館と云ふ家だ、知つてるだらう。」
「吉祥館？………烟草屋の路次を這入つた處だらう。」
「然う、然う。」
「ぢや何れ行く。失敬。」
「失敬。」

三

「久し振だねえ一緒に歩くのは………著くなつたねえ。」
「著くなつた。」
「もう全然（すつかり）快いのかい。」
「風邪はすつかり除（と）れた、然し………。」
「?」
「とう／＼宣告を下された!」
「何て。」
「喉頭結核!」
「………然うか………實は僕も食つたよ。」
「?」
「非常に惡性な肺尖加答兒!」
「肺尖なら好い………」
「何が好いものか。斷頭臺と絞首臺とのプレフアランスだあね。」

「僕は寢て居る中に、いろ／＼來世に就て考へて見たが如何しても分らない。」

「あれを讀んだか。」

「君の呉れた聖書か。全躰讀んだ。成程君の云ふ通り來世に對する信仰が無ければ、聖書の過半は無意味なものだ。」

「然うだらう。」

「復活が無ければ基督の生涯は斷篇に終つたのだと云ふ說も釋つた。」

「然うだらう。」

「けれども僕は肝心の基督に對する信仰が無いのだから駄目だ。」

「つまり今迄の僕の生涯が餘りに單調で、餘りに無事だつたんだねえ。泣いて神の裾に縋ると云ふ様な經驗が無いんだ――折角送つて呉れた書も慰藉にはなつたが力にはならなかつた！」

「然れども力になつて夫から信ずるのぢやあるまい、信じて始めて力になるんだらう。」

「然し眼に見えないものを綺麗だと賞める事は出來んだらう。」

「君はピリポだ。」

「然うだ、ピリポだ。『主よ我儕に父を示し給へ、然らば足れり。』だ。」

「基督の答を讀んだか。」

「讀んだ。」

「滿足出來ないか。」

「出來ない！」

「…………」

…………………

「然し僕は、其代り或新しい希望を得た。」

「ほォ？　如何云ふ………」

「僕が死ぬと同時に全世界の生物が悉皆死ぬ――斯う云ふ希望だ。」

「そりや病的だ！。」

「或は病的かも知れない――然し僕にとつては堅固な慰藉だ。」

「そんな事は在り得べからざる事だ。」

「と同時に、在り得べき事だ――僕と一緒に必と萬物死ぬ――必と死ぬ！。」

「僕もか。」

「…………無論さ。」

「君と一緒なら僕は進んで死んでも好い……然れども世間は然うは行くまい。」

「いや行く――必と行く！。」

「ハハハハ大變強いね。」

「ハハハハ……今日は佛法の先生遣つて來ないね。」

「ほんとに來ないねえ、如何したんだらう、試驗で忙しいかな。」

「あの躰格では二晩位の徹夜は平氣だらうねえ……や、豆の花が咲いてる、綺麗だなア、摘つても好いだらう。」

「好いだらうツて。」

「……さ、君も一つ持つてつて何かに挿し給へ。」

「有難う……明日君まだ學校へ出やしまい。」

「あゝまだ行かない積りだ……君……最う少し悠緩歩かないか。」

「然うか、失敬々々。坂は倘且苦しいね。」

「あゝ。」

…………………………

「ぢや失敬。」

「君懷の郵便出すんぢやないか。」

「然う、此函へ入れるんだつた。有難う。」

「學校へ出すのか。」

「あゝ……届さ。」

「ぢや明日は僕が君ん處へ行かう。」

「さうか、ぢや然うして呉れ給へ。」

「失敬。」

「失敬。」

四

「君、あの人は死んだとさ。」

「誰？」

「此處で屡會ふ佛法の人さ。」

「え？　死んだ？　何時？」

「君が學校休んでる間に――僕も今日始めて聞いたんだ。」

「如何してね。」

「腸窒扶斯で急にださうだ。」

「へえ？　解らないもんだね。」

「寄宿では傳染病だと云ふんで大騷ぎださうだ。」

「寄宿に居たんだね………へえ、あの人がねえ………あんな壯健な人がねえ………氣の毒だなァ。」

「………實に氣の毒だ！」

「あゝ云ふ人の死には如何云ふ意味があるんだらう………あんな人も君の所謂『出來損』なのか不知。」

「やつぱり然うだつたんだねえ――僕等には分らなかつたんだけれども。」

「過つて大切な畫稿にインキを瀉して了つたんぢやなからうか。」

「造物主はそんな粗忽家では無いと思ふ。」

「青い葉が枯ッ葉より先へ落ちる處を見ると、まんざら風ばかりを恐がるにも當らないやうだねえ。」

「………けれども風は尙且恐いに違ひない。」

「………一體僕等は何日死ぬんだらう。」

「ほんとに何日死ぬんだらう」

………………………………………………

留任運動

某年某月某日

けふは實にいやな日だ。惡く寒くつて、空は蔽ひかぶさるやうに曇つてゐて、どう云ふ訣か、心配しても返らぬ昔の事を心配する。たとへば旣に死んでしまつてる父が、何かまだ病床に横たはつて死にかかつてでもゐるやうな氣がして、墓の中の人の爲に藥を憂へる、醫を憂へる。さうかと思ふと心配するには及ばぬ先の先の事を考へる。僕が子を持つて、その子がよそへ養子に遣られて、それが養父に虐待されて、家の外へ追ひ出され、寒風に吹きさらされてる姿などが目について目について堪らぬ——沼津に避寒をしてゐる病母から手紙で、けふは海が荒れて漁り船も出ぬと言つて來た。

同某月某日

けふもきのふの通り不愉快な天氣だ。

午後、學校へ行く。廊下でみんなが何かひそ〳〵話をしてるから、そばへ寄つて聽いて見ると、L・H先生が學校を追ん出されるといふ話だ。追ん出されるのではない、年期が來たのだと言ふ、いやさ

うではない、子供を連れて英吉利へ行かれるのだと言ふ――俄に胸が騷いで來た。

二階の窓に腰をかけて、見るともなしに假門の方を見てゐると、やがてがらがらと車の音がする。と見ると、少し前こごみで、溫かさうな外套を深々と着、クロムヱル時代の歷史畫によく見る、緣の廣い、山の高い、ちよつと朝鮮人のやうな帽子をかぶつた、瘦せた人が乘つてる――あ、先生だ。けふは Rossetti の抒情詩 "Woodspurge" の講義だ。例の通り珠玉口をついて出づといふ調子で、一通りパラフレエスをされた、その終りの一節はかうだ――

In a time of intense grief, it may happen that one learns nothing, and remembers nothing. Such is often the case. But if, at such a time, one does happen to observe anything, it never can be forgotten. And one thing which I, that day, learn; I never can forget. I still remember that the flower of the woodspurge is like three little cups, one inside of another.

それから先生はこの歌につけて思ひ出す事があるといふので、自分がまだ幼ない時、ある日何か家庭に非常な悲しい事があつた。その日に小學校へ出は出たが、悲しくて何も手につかぬ。ふと教室の天井を見ると、天井が一ヶ處破れてゐた。それが今だに忘れられぬといふ話をされた。大學にも教授多しだが、かういふ講義をする人は先づない。

例の通り一時間の講義が濟んで休憩時間になると、先生はとぼ〳〵と教室を出られて、教員室へは

はひらず『御殿』の裏の池のほとりの置石に腰を掛けられ、なたまめの烟管で日本烟草をさも心地よげにすぱ〳〵と喫はれる。先生は孤獨が好きなのだ。懐しくて側へも寄りたいのだが、堪へて遠くから眺めてゐた。

二時間目の講義が始まる。同じ Rossetti の "Staff and Scrip" だ。

先生はいつもの通り親切に、いつもの通り面白く、いつもの通り時々寂しげな微笑を唇邊に湛へながら講義をされた。

併し、僕の心はいつもの通り嬉しく樂しく穏かではなかつた。

同某月某日

けふも午後の講義だ。相變らず先生が出される、いや、出してはならぬ、などといふ囁きが耳にはひる。けふの講義は『英詩にあらはれたる鳥』の續講で、George Meredith の『揚雲雀』の一節 Wasnever voice of ours could say 云々といふ處。

この節は極めて suggestive であるから、パラフレエスした方が尙よく分かつて面白からうといふので、先生、例の紙片ひとつ持たれず、そらでパラフレエスされた。それが實に名文だと思つたから一寸書いて置く。

There never was a human poet in our world which could speak the innermost thoughts of the

human heart in the most beautiful way possible——as that birds speak all its heart in the sweetest possible manner. And even if there were such a human voice, it would not be able to speak to all human hearts alike——as that birds can. For wisdom comes to us, poor human beings, only when we are not getting old——when our blood is growing chill, and when we do not care to sing. On the other hand, in the time of our youth, when we want to sing——want to write beautiful poetry——then we are too impulsive, too passionate, too selfish to sing a perfect song. We think too much about ourselves; and that makes us insincere. But there is no insincerity in that bird——Oh! if you could but utter the truth of our heart as he can! there is no selfishness in the song of that bird, nothing of individual desire; such a song is indeed like the song of a Seraph, the highest of angel——so pure is it, so untouched by the least personal quality. Only such an impersonal song is indeel suited to express the gratitude of all life to that great Giver of Life,——the sun. And that is just what the song does express——one voice speaking for millions of creatures——and no one of all those millions feeling in the least envious of the singer, but all, on the contrary, loving him for uttering their joy of heart well.

どうも色々この頃の評判を聞くと、確に先生は出されるのだらうのに、落着いたものだと思つた。

併し、僕はまた考へた。先生は世界に友達を持つていらつしやるのだ。わけの分からぬ日本の大學教授や、わけのわからぬ日本の大學々生に捨てられたつてそれが何だ……だが先生はそれで好からうが僕は厭だ。先生がゐなくなつちや僕學校へ出る張合がない——と言つても他の先生には濟まぬが、濟まぬと言つて悲しい事はやはり悲しい。

同某月某日

けふは休みだ。朝、赤い新聞を見るとL・H先生が大學をやめられると書いてある。愈々さうかと思ふと、さあ堪らぬ、どうかして引き留める事は出來まいか。併し、おれは新入（しんにふ）、相手は學長だ。ええ、叶はぬ相談か。

同某月某日

午後登校英文學史續講、シエイクスピアはじめ。

Without any long preparation, sudden, unexpected, the enormous figure of Shakespeare suddenly appears in literature at the beginning of the 17th century. Nothing before him intellectually approached his work……

獨眼白髯の老教授、その聲はその文の如く美しい。

小春日和の暮れがたの空に、階下のベルが鳴り響いて、課業が終へると先生は歸られた。

三年級の特待生がみんなに一寸殘つて呉れと言ふ。何だらうと思つて待つてゐると、その人が今まで先生の立つてをられた壇上に立つて、

「諸君、私は實に心外なる報知に接しました。それは外でもありません、敬愛するL・H先生の任期が充ちたからといふのでこの學校を去られるといふ事です。諸君の內に若しこの事を遺憾に思はれる方があるなら今夜臺町の××教會にお集まり下さい」と、言ふ。

勿論僕はその晩その會堂に行つた。嬉しいではないか、英文科殆ど全體集まつて、小さな禮拜室は明いたベンチ一つもない位だ。

さあ會議だ。議長は例の三年の特待生。この人が說教壇へ登つて、先づ一人々々の意見を訊く。咳一咳して發言を求むるものあり。

「宜しい、木村君。」

「私はかう云ふ事を考へてをります。丁度年若な娘が家庭といふ籠から、はじめて世間といふ大空へ放された時に、千萬人の男の中からたつた一人、自分のほんとに愛するものを見出だすやうに、われわれ學生が始めて或新しい學校にはひつた時、幾十といふ先生の中から眞個に自分の愛する先生を一人見つけなければ已まないものです……」

「……他人は知らず、僕は今までさうだつた。小學校時代に僕の大好きだつた先生は女の先生で……」
「ノオ。ノオ。」
「簡單。簡單。」
議長突と聲をかける。
「もう分かりました。木村君、つまり大學時代ではそれがL・H先生だつたと言ふのでせう。」
「さうです、無論さうです。」
「では宜しい、次は田澤君。」
「僕はかう思ふです。日本に帝國大學ある所以は、かれL・Hを養ふあるを以てぢやらうと思ふです。若しかれL・Hなくんば世界に於ける日本帝國大學の存在を奈何です。かれL・Hあらずんば帝國大學は何の誇る所なし矣です、かれL・Hなくんば帝國大學は卽ちナッシングです。僕は愛校者の一人であるから、死を以てしてもかれL・Hを留めむと欲するものです。」
「然り、然り、死をもつてもだ、われ〳〵は須らく四十七士の覺悟を以てせんけりやならん。」
「私は……」と、頓狂な聲を出すものがある。
「水野君！」と、議長。
「ええ私は……いや私はではない……戀をすれば手鍋さげてもといふ事があります、私は先生の爲に

は……に

「命をも惜しまぬか。」と、大聲に呼ぶものがある。

「はい。」と眞面目に言つて席に着く。

「ああ諸君。」と、今度は落着いた聲がする。

「宜しい、柴田君。」

「諸君は兎角青春の氣に驅られていけない。やれ四十七士だ、やれ命をも惜しまぬだ、やれ戀だ、などと何ですか。成程L・H先生は惜しい人だ、併しその先生を留任せしめむが爲に吾人の前途をまで犧牲に供さなくても好いではありませんか。」

「その位なら全然止めろ。」

「ナニ。全然やめろ。すぐそれだ。さう破壞的な人物ばかりゐるから、つい社會主義で飯を食へるやうな事にもなるのだ。」

「こら〳〵何を言ふ。もう止せ〳〵。」

「イヤ止さん。諸君は餘りに青春の氣に走つてゐる、諸君は餘りに若い。」

「成程、君にはワイフがあつたね。」と、後のベンチで冷かす者あり。

議長は又聲をかける。

「諸君、靜にしませんか、諸君は今極めてシイリアスな問題を議してゐる筈ではありませんか、この場合人身攻撃などをしてはいけません。」

落ち着いた聲の人は尙詞を續けて、

「さうです。そこで吾々は出來るだけ常識を用ひて學長に懇願し、而して聽かれずむば、謹むで新來の師を待つとしたらどうですか。」

「おい〳〵かれL・Hを措いてだね、吾々が就いて文學を學ぶべき人がこの日本にゐるかね。」

「そりやをらんとも限りません。」

「君知つてゐるのか。」

「知つとらんとも限りません。」

「知つてるなら言つて見ろ。」

「そりやあその……」とつまる。

新に發言權をこふものあり。

「宜しい、安中君。」

「僕は改めて一派の穩健黨に訊すが、一體或事をするのに、遣り通すつもり、卽ち倒るるまで遣るつもりで遣らなくて何が出來ると思ふ。新來の師を謹しんで待つやうな奴は既にこの會に列なる權利な

してある。」
「併し君、若し餘り突つ込んで遣つて、僕等が學校を出されるやうな事があつたらどうするつもりだ。」
「さうなりやあそれまでさ。」
「それでは喰へんぜ。」
「だから死をだに辭せんと言つてるのではないか。」
議長。
「もう分かりました、之を要するに何處までも遣ると言ふものと、遣るだけ遣つて駄目なら諦めると言ふものと二派あるやうです。先づその採決をいたしませう。諦めると云ふ方は手を擧げて下さい、一つ―二つ―三つ―四つ、五つ。少數と認めます。」
「萬歳。」
「騷いではいけません。では、これから如何なる方法を執るかといふ事に就いて尙御相談いたしませう。」
破壞派は新聞を借りて學校を攻擊しろと言ふ。穩健派は事務から學長へ頼んで貰へと言ふ。結局各年級から一二の總代を出して學長を訪問せしめ、一には質問する處あらしめ、且は哀願する處あらしめようといふ事になッた。

まあ併し嬉しいと思つて歸つて寢た――夢なし。

同某月某日

總代が學長を訪ねるのはけふの夕方だ。どうしたらう、うまく行つたか知ら。

同某月某日

學校へ行つて先づ總代の一人を捉まへた。

喜ぶべし。終に學長を説服したと言ふではないか。

學長もみんなの熱心に感じて、なほL・H教授とも相談し、必らず諸君の望み通りにしようと言はれたさうな――學長も人である。人にして人の至誠に動かされぬ筈はないと思つてゐたのだ。果して動かされた。と思ふと、何だか愉快で堪らぬ。

同某月某日

三年級總代の報告するところによると、一方に於いて學長を說くと同時に、一方に於いて總代の一名はL・H先生を大久保の屋敷に訪ねて切に留任を乞はうとした。一度行つて面會謝絕、二度行つて面會謝絕、三度行つて漸く會はれた。色々話のあつた末、先生は「たとひこの美事成らずして私が諸君の學校を出るやうな事にならうとも、諸君のカインドネスは永久に忘れない」と言はれたさうだ。

自分の留任の爲に訪ねて來た者に三度目に漸く會ふ。さうして一旦會へば、今のやうな情のある詞

は吐かれるのだ。L・H先生の性格はこれだ。愛する者は愛せよ、愛せざるものは愛せざれ。

同某月某日

L・H先生と學長と會見したといふ噂があつた。

明日からは春休み、いづれ花の咲く時分には快報に接する事だらう。

同某月某日

春休みも濟んだ。

町の中にも櫻は咲いて、片町あたりちら〳〵と花片の舞ふ中を、學校へ行く、夢まぼろしに描いてゐたL・H先生留任の掲示を見に行くのだ。

學期のはじめで、法文科大學の掲示場には人が澤山立つてゐる。

さし覗いて見ると驚いた。

任文科大學英文科講師――英人A・L。

A・LはL・Hに非ず。

あの會議はどうなつたのだ。學長訪問はどうなつたのだ。學長の好意はどうなつたのだ。會見はどうなつたのだ。僕は何も知らぬ。ただ今僕の前にある掲示は夢にあらず、幻にあらず、手をかけて裂き捨てもせずむば影も隱さぬ現實の現實だ――ああ人生終にこれか。

×

某年某月某日

しばらく學校へ出なかつたが、周圍がやかましいので學校へ行く。厭々ながら行く。行けばやつぱり教場へはひつて、やつぱり新來の教授の講義を聽くのだ。何かこれが二心ある人の行のやうな氣がして堪らぬ。

今頃先生はどうしていらつしやるだらう。

あゝ厭だ〳〵。

家へ歸つてツルゲエネフの英語譯を讀んだら、こんな事が書いてあつた。

Two——three——years passed……six years, seven years……Life has been passing, ebbing away ……while I merely watched how it was ebbing. As in childhood, on some river's edge one makes a little pond and dams it up, and tries in all sorts of ways to keep the water from soaking through, from breaking in. But at last the water breaks in, and then you abandon all your vain efforts, and you are glad instead to watch all that you had guarded ebbing away to the last drop…………

實に痛切だ。

×

某年某月某日

讀賣新聞のよみうり抄を見ると『L・H逝く』とある……僕はもう何も書くに忍びぬ。

同某月某日

諸新聞は先生を惜んで呉れた。

學校の人達もこれを惜んだ。

先生の去るに任せた學校でさへこれを惜しんだもの、これを歡び迎へた早稻田の學校の悲嘆はどれ程であらう。

同某月某日

一体先生はなぜ學校を去られたのだ。

「年期が來たからだ。」とまあ學校の人は言ふ。

先生は今、天のなせる年期が來てこの世を去られたのだ。人力以て如何ともすべからざる天の年期が來てこの世を去られたのだ。それでさへ人はこれを惜しむではないか。

人の作つた任期なるものが來た爲に學校を去られる先生を毫も惜まなかつた人が、天のなせる年期でこの世を去られた先生を惜むのは不思議だ。不思議だ。實に不思議だ。

これからお墓へ行つて、先生と世の不思議を語り合はう。

追悼文

葉の落ち切つた櫻の木の股に寄生木が生えてゐる、それが雨に打たれて動いてゐる、これをぢつと見詰めながら晋一は考へた。四年前の今頃、やつぱり雨の降る日、この緣側のここの處に腰をかけて、あの寄生木が雨に動くのを見ながら、お藤さんと謎のやうな話をし合つた事がある——人は金の欲しい時に謎を言ふ、女の心を得たい時にも亦謎を言ふ。

けれども晋一は前からお藤さんをどうとか思つてゐたのではない。その日に限つてどうしてあんなにお藤さんが好きになつたのか、それは今以て自分にも分からない——こんな妙な氣になるのはきつとけふつきりに違ひない。きつとけふつきりに違ひないと思ひながらも抑へる事が出來ないのは不思議だ。姉さんが留守で寂しいからかしら。いや、姉さんの留守に姉さんの友達が尋ねて來たのはけふばかりぢやない。雨が降つてるからかしら。雨が降るから女が戀しいといふのも可笑しい。

お藤さんは或ミッションスクウルに寄宿をしてゐるのだ。けふは土曜だからいつものやうに泊りがけで姉を訪ねて來たのだが、姉は生憎用があつて橫須賀まで行つたので、あすの朝でなければ歸つて

來ない。「それでは……」と言つて歸りかけたのを、「どうせ明日の朝は歸つて來るんだし、いつもの例を破るのも變だから……」と緣側に腰かけた儘晉一は留めて見た。するといつも、强情なお藤さんが、どうしたのか直ぐと袴を脫いで、緣側へ出て來て、晉一の隣へ腰をかけた。

お藤さんは晉一より年下なのかも知れぬ。併し、姉さんの友達だから、晉一には何となく姉さんに見える。兩親の無い晉一きやうだいの寂しい二人暮しをどんなにお藤さんは慰めて吳れたらう。實際晉一はお藤さんを姉さんのやうに思つてゐた。お藤さんも晉一を弟のやうに可愛がつてゐた。

それがけふは姉さんのやうに見えない。見えないのではない、見せないのだ――お藤さんの態度がけふは大分變つてゐる。いつものやうに亂暴な詞を使はない。常のやうに直ぐに欠伸をしない。妙に小さくなつてゐる。妙に優しい、妙に女らしい、一口に言へば、けふは少しも晉一を弟扱ひにしない。

晉一が妙な氣になつたのは、お藤さんのこの態度を見てからではない、そんならいつからだと聞かれても、それはぼんやりしてゐて分からない――兎に角お藤さんの變つた態度を見てからではなかつた。が、お藤さんの方がかういふ態度を見せるやうになつた切掛だけはよく分かつてゐる。卽ち晉一に引き留められた時からだ。併し、晉一に留められた爲にどうしてかういふ態度を見せるやうになつたのか、それはお藤さん自身にも分からない。

動機のない目的を持つた男と女は、今雨に動く寄生木を眺めながら、謎のやうな話を始めた――謎

は段々亂れて來る、段々分からなくなつて來る、降る雨と動く寄生木と緣側に腰かけた男と女とが縺れに縺れて、終に夜の暗闇になる………

動機の無い目的は達せらるるが早いか、直ぐ忘れられてしまふ。明くる朝晋一は平氣で起きた。平氣で顏を洗つた。何事もなかつたやうである。自分でも不思議に思ふ程平安だ。

「俺は罪惡を犯した。」と、聲にまで出して言つて見た。けれどもどうも罪を犯したやうな氣がしない。自分の氣持程正直なものはないとして見ると、俺は罪を犯したんではない、夢を見たんだ。さう云へばどうもさうらしい、お藤さんも平氣な顏をしてゐる。

お藤さんに對してきのふ起こしたやうな氣持はけふ体中何處を探してもない。きのふの事はみんな夢のやうな氣がする。晝間の内の事さへ夢のやうな氣がするのだ、夜になつてからの事は尙夢のやうな氣がする。どうも夢だ、夢に違ひない。

晋一は平氣で聖書と讃美歌とを携へ、お藤さんに留守居を賴んで、口笛を吹きながら、教會へ行つた。

教會から歸ると、お藤さんは晝飯の支度をしといて吳れた。それからお藤さんのお給仕で飯を喰べながら、今日の說教の梗概を話す。お藤さんは熱心に聞いてるやうな顏をしてゐて、時々晋一の言ふ

事に茶を入れる――お藤さんはまた姉さんに歸つたのだ、晋一はまた弟に歸つたのだ。きのふの事は百年も昔の事の様な氣がする。否、「昨日」といふやうな日は全くこの世にないやうな氣がする。姉はどうしたのか夕方まで歸つて來なかつた。袴を穿いて遊びに來て、袴を脫いで遊んでゐたお藤さんは、また袴を穿いて歸つて行つた。

その後お藤さんは餘り晋一の姉を尋ねて來なくなつた。消息も段々稀になつて來た。暫く立つと晋一の姉は、どつかでお藤さんがお嫁に行くといふ話を聞いて來た。それから又暫く立つと、田舍から名字の變つたお藤さんの手紙が晋一の姉へ當てて一通來たが、その後ぱつたり便りがなくなつてしまつた。晋一はお藤さんが嫁に行くといふ事を聞いた時に、何といふ意味もなくぼんやりお藤さんの顏を思ひ出したぎりで、その後は全く忘れてしまつた。

然るに、けふはどうしたのか、しきりにお藤さんの事が思ひ出される。姉はその後嫁に行つたので、今は家にゐない。晋一は一人で緣側に腰をかけてゐるのだ――雨が降つてる、寄生木が動いてる。いつまでも枯れない寄生木だ。いつまでも盡きない雨だ、と晋一は思ふ。併し、あの寄生木はいつの間にか生え變つたものなのかも知れない。雨も決して昔の雨ではない。して見ると、今思ひ出したお藤さんも、今田舍へお嫁に行つてるお藤さんではないのかも知れない。さうだ、俺と關係があるのは今生

きてゐるお藤さんぢやない、今思ひ出してゐる昔のお藤さんだ。たとひ田舎にゐるお藤さんは死んでも、このお藤さんは死ぬ事ではない。俺に若し責任があるとすれば、このお藤さんに對して責任があるのだ。田舎にゐるお藤さんに對しては何の責任もない。併し元々罪ぢやないんだ。夢なんだ。夢に對して責任も何もあつたものではない。要するにお藤さんの事などはどうでも好いんだ。どうしてまたお藤さんの事なんか思ひ出したもんだらう。と、不思議に思ひながら晋一は縁を立つて書齋へはひつた。書齋へはひとお藤さんの事は直ぐ忘れてしまふ……

鴨居の上を見るときのふ額縁の出來て來たばかりの基督の畫像が掛かつてゐる。基督は白い着物を着て、ランタアンを下げて、八重葎に閉ぢられた草の戸を叩いてゐる。白い着物は神々しい、ランタアンの光は氣味が悪い、戸を叩いてる音が聞こえさうだ。晋一は五六日前にこの印畫を何處かで買つて來て、早速額縁屋に賴んで額にして貰つたのである。意味は分からぬが、何となく心の引かれる繪だと思つて、晋一はぢつとその新しい額に見入る………

と、縁側をばたばたと飯焚の婆やが遣つて來て、「若旦那、何處からか電報が參りましたよ」と言ふ。

晋一は電報を受け取つて封を切つた。「フジコシス」とある。

「フジコつて誰だらう。」

「御存じないんでございますか。」

「さあ。」
「へえ。妙でございますねえ。」
「あ、お藤さんだ。分かつた、お藤さんだ。」
「お分かりになりましたか。」
「分かつた、分かつた。きつとお藤さんだ。」
發信者を見ると、片假名に一字相違はあるが、確に覺えのある名字だ。
「どうして死んだんだらう、可哀さうに。」
と言つた時は、もう冷淡な婆やはそこにゐなかつた。
晉一は關係のない筈のお藤さんの死に大層動かされた。「田舍にゐるお藤さん」の死を大層悲しんだ。死んでも悲しくない人は遠くで死んでもほんとに死んだと思へるが、死んで悲しい人は目の前で死なれてもほんとに死んだとは思へないものだ。晉一がお藤さんの死を悲しんだ證據は、どうしてもお藤さんが死んだと思へなかつた事である。
お藤さんは確に生きてゐる。死んだのはさつき思ひ出したお藤さんだ。「田舍にゐるお藤さん」は決して死にやしない――雨も死にやしない、寄生木も死にやしない、四年前と同じ雨だ、四年前と同じ寄生木だ。

晋一の考へは段々今までと反對になつて來る。今まで本當だと思つてゐた事が段々夢だつたやうな氣がして來て、今まで夢だと思つてゐた事が段々本當だつたやうな氣がして來る。罪ぢやないと思つた時の事が夢になつてしまつて、罪を犯した時の有様がありありと目の前へ浮んで來る……

「若且那様、郵便。」

と、一通の封書を婆やは投げ込んで、直ぐ又臺所へ行つてしまふ。上書を見るとお藤さんの夫から來たのだ。惶しく開封して讀む——腸窒扶斯で急に死んだと書いてある、悲痛に堪へないと書いてある、君には面識はないが佛と生前仲好くして下すつたといふ事だから、一緒に泣いて呉れるだらうと書いてある、君の姉さんの處へ知らせたいのだが、嫁に行かれた先が分からないから、君の處まで知らせた、どうか直ぐ姉さんに知らして呉れと書いてある、最後に「就ては生前御懇情を辱う致し候諸先生、同窓の學友其他の方々より一々追悼文を頂戴仕り、一小册子を綴りて彼女の靈にも捧げ度、小生の慰藉とも仕り度と存じ居候儘御姉君は勿論の事貴兄よりも是非々々一篇御寄せ被下度、伏して奉願上候。」と書いてあつた。

晋一はこの最後の一句を讀むと、鉄槌で頭腦をがんとやられたやうな氣がした。ふと鴨居の上の額を見る。基督の持つてるランタアンの氣味の悪い光が自分の胸の中へはひつて來るやうな氣がする、基督はにこにこしながら自分の胸を叩きにやつて來さうだ——晋一は堪らなくなつて書齋を飛び出した。

縁側へ出ると、又寄生木が目につく。目を閉いで茶の間へ駈け込んだが、雨の音は此處へも迫つて來る……「追悼文を書いて呉れ」といふ一句で、俺の罪は總て許されたやうな氣がする。許されたと思ふと何ともいへぬ苦痛を感じて來た。俺は縛られてゐた間眠つてゐたので、繩を解かれてから眼が覺めたのだ。縛られてゐた間の苦しみは知らない。繩の喰ひ入つた跡が痛くて堪らない。

俺はけふといふけふ、始めてお藤さんが戀しくなつた。お藤さんの死を聞いて、俺は人一倍追悼の情に堪へない。併し、この追悼の情を正直に書いたものが、よくお藤さんの靈を慰める追悼文になるであらうか、お藤さんの夫を慰める追悼文になるであらうか。俺の追悼文はお藤さんの夫にも見せられない、死んだお藤さんにも見せられない。俺の追悼文はお藤さんの追悼ではない、實は自分の追悼だ。

晋一は夢現に姉の處へ端書を出した。その晩は早くから茶の間に寢た。床にはひつたが、身を責められるやうでどうしても眠られない。雨は夜になつても止まなかつた。雨戸の外の樹のざわ／＼いふ音が聞こえる度に晋一は寄生木を思ひ出してぞつとした。悶えに悶え拔いて、とろ／＼としたかと思ふと、晋一は何かに搖り起こされるやうな氣がして目が覺めた。氣がつくと地震だ。大分烈しい。晋一は立ち上がるとよろ／＼とした。家がみし／＼いふ。書齋の方でがちやあんと何か高い處から落ちて毀れたやうな音がする。眞つ暗な縁側を傳つて書齋へ行つて、障子を明けて暗闇を透かして見たが何も異狀はないやうだ。地震ももう止んだ。止んだと思ふと今のは地震ではなかつたやうな氣がする。きつ

と鼠が暴れたんだらうと思ひながら、晋一は茶の間へ歸つて再び床にはひつた。疲れたか、今度は朝までぐつすり寢込んでしまつた。

朝、目が覺めると早速書齋へ行つて見た。基督の額が俯向けに落ちて、硝子が粉微塵に毀れてゐる。鼠の糞が硝子のかけらに交つて散つてゐた。

ゆうべあの時落ちたのかしら。あの時は丁度今この額の落ちてるとこの障子を明けて見たんだけれども、落ちたやうな樣子はなかつた。して見ると、あの後ぐつすり寢込んだ間に落ちたのかしら。併し、落ちない前に音のしたのは可笑しい。不思議な事もあればあるものだと思ひながら、晋一はふと庭を見た――雨あがりの淺葱空に寄生木がくつきりと黑く見える。晋一はぞつとした。

色の褪めた女

大井君が死ぬ一年前の日記を見ると、非常に綿密な日と非常に粗雜な日とがある。朝何時何十分に起きて何と何の新聞を讀んで、何時に學校へ出て、第何時間目に何處の敎場で何を敎へた處が、生徒が難しい質問をして困らしたとか、欠伸をして癪に障つたとか、歸途に牛肉を買つて竹の皮包を抱へて來たとか、今日で電車の回數切符が盡つたとか、こんなつまらぬ事を明細に書いてある日があるかと思ふと、何一つ出來事は書かずに、

「噓と噓とは手を握る能はず。」

とか、

「生くべき人の死なむとするを死すべき人の生きよと止む。」

とか、感想の樣な格言の樣な文句が大きく書いてあるだけの日がある。又左樣かと思ふと「小豆粥て寢ころび食ふや春の雨」とか、「ひとり覺めて我が宿寂し百舌の聲」とか、發句一行ですましてある日がある。數字で何か計算の樣な事だけしてある日がある。「今日は三兩二分稼いだ。」とだけ書いてあ

る日がある。「日記を記す暇なし。」と忙しさうに書いた日がある。全で眞白な日がある。此位不規則な、不統一な日記は無い、如何考へても一人の日記とは思へぬ、哲學者と實業家と俳諧師と學校教師と小說家と職人とが一日代りに書いた日記だ。

この不思議な日記の中に次の様な不思議な事が書いてあつた――

『十二月五日。

夕刻、四年振で品川の村田君（當時街鐵社員）を訪ね、ビールの御馳走になり乍ら種々電車の話を聽く。發電所の石炭焚で石炭の焚き様の熟練一つで非常な月給を貰つてる老爺があると云ふ話を聽いて何だか酷く感心する――自分の月給と石炭焚の月給と比べて見て、又一つ感心する。

大分夜が更けたなと思つて時計を見ると、最う十二時近い。忙てゝ挨拶もそこ〳〵に八ツ山下の停車場へ駈けつけると「赤」が今出る處だ。急いで乘ると、誰も居ない。車掌に「今川橋まで。」と斷つて置いて、扨隅ッこを占領して寢仕度をする――電車は動き出した。

……………………………………………………

ガタ、ガタ、ガタンと電車が留つたので、眼が覺めると最う大門！　客は矢張僕一人だ。

誰か乘るのかなと思つて居ると、一人の少い女が這入つて來た。僕と反對の側の隅ッこに腰を卸す

………

見ると女は羽織を着て居る、頭巾を被つて居る――頭巾はもと紫だつたか、今では最う灰色に褪めて居る。羽織はもと茶だつたか、これも灰色に褪めて居る。衣服の色も褪めて居る。帶の色も褪めて居る。羽織の紐も褪めて居る。白足袋は灰色に汚れて居る。

この日和續きに足駄を穿いて居る。足駄の齒に何時附着いた泥だか灰色に乾いて居る。右の足駄の横鼻緒が一本切れて居る。鼻緒の色も褪めて居る。俯向いて物思はしげに眼を閉ぢた顏の色も褪めて居る――頭の天邊から足の爪先まで、色の褪めてない處は一つも無い。これは色の褪めた女だ！

如何して此女は如是に色が褪めたのだらう。盥の水にでも浸つて居たのかしら。左樣だ、「苦勞」と云ふ者が若し水なら、其水に二年も三年も全身を浸して居たのだらう――居るのだらう――。水も大分吞んだらしい、舌の色も必然褪めて居る、心臟の色も必然褪めて居る………

車掌は鞄の口を開けて、片手に帶をした切符を、片手にペンチを弄り乍ら、器械的に女に近づく。

女は顏も上げずに、帶の間から財布を出した――財布の色も褪めて居る………

財布を振ると中から往復切符の「復」が一枚出る――女の財產は此切符一枚らしい。其貴き一枚に車掌は容赦もなくペンチを入れて、之を女に渡しながら、

「何處まで御出になります？」

（行先を訊くのは途を急ぐ爲めだ。）

「何處まで行つても可いんでせう。」

女は俯向き乍ら云ふ。

車掌は笑つて、

「何處まで入らしても構ひませんが、此電車は上野の車庫へ這入るんですから。」

「え？」

「この電車は上野までしか參りません。」

「では上野まで。」

と云つて又眠るともなく眼を閉ぢる……

木場の堀に何年も用はれずに浮いてる色の褪めた材木――場末の呉服屋に何年も賣れずに垂下つてる色の褪めたメリンス……女を見てると種々な事が腦裏に浮ぶ。

乃公も何時か色の褪める時があるだらう――いや、今褪めてる最中かも知れない。と思ふと慄然とする――今川橋！

降りようとして、ひよつと見ると、色の褪めた少い女は前後も知らず眠りこけて居る。

一體女は何處まで行くんだらう？　家へ歸つて臥床へ這入つても氣になる。

十二月六日。

昨夜の女は何處まで行つたらう。車掌は「上野の車庫まで」と云つたが、今日も彼の電車は唯一人色の褪めた女を載せて走つてるやうな氣がする、いつまでも〳〵走つてるやうな氣がする――廢物が塵取で掃溜へ運ばれる樣に、色の褪めた女は電車で掃溜へ行くのではあるまいか……

今日は電車に乘らずに學校へ行く。

空腹

『來月から月給を上げて遣る。』と課長が言ふから、その積りで居たのに矢張廿五圓しか呉れない。癪に障るから突返した。課長は『入らなきや已が貰つとく。』と云つて、ポケットへ收つて了つた。入らなきや已が貰つとく！ほんとに貰つとくのかしら、もう渡しては呉れないのかしら。一時の怒で突返しは突返したが、實際取放しでは困る！　もう蝦蟇口には幾何も無い、今日で米がなくなると母が言つて居つた、明日の米は如何したら好いだらう？――また廢具を賣飛ばして、一升買をするのか！

廿五圓と云へば大金である。僕一人なら充分だ。然し僕には母がある、母の弟が二人共不中用で家にゴロ〳〵して居る、死んだ親父の負債もある――中々廿五圓では遣り切れない。遣り切れないから突返したのだ。遣り切れないのを察して居て、毎月毎月、『來月からは上げて遣る。』『來月からは眞に上げて遣る。』と言ひ〳〵虚言を吐く課長が癪に障るから突返したのだ。突返せば尙遣り切れないのは分つて居る。分つては居るが、飢死してもあれを受取るのは厭だ！

飢死してもあれを受取るのは厭だ！　どうしても厭だ！　然し、考へて見ると、突返して好い心持

なのは自分ばかりだ。僕が突返した爲に飢死する者が自分の外に三人も生じて來ると思ふと、少し不安になつて來る。成程、僕一人なら飢死しても好い。然し、母が困るだらう、叔父さん二人が困るだらうと思ふと、『何故突返したのだらう、惜しい事をした！』と云ふやうな意氣地の無い感じが浮んで來る。かと思ふと、『己は男らしい事をした、豪い事をした。』と云ふやうな得意な感じも浮んで來る。

社の罷るまでには何とか話が有るだらうと思つて居たが、とう〳〵何も話が無い――退社の鈴がガラアン〳〵と鳴り亙ると、もう堪らなくなつて用も無いのに課長席の前を二三度往來して見る。往來しながら、横眼でチョイ〳〵課長の顏を竊み見る。課長は態と僕の眼を避けてるやうだ。初め通つた時にはポオトフオリオへ何か詰めて居た、二度目に通つた時には『子供』を呼んで何か命令けて居た、三度目に通つた時には瓦斯で煙草に火を點けて居た。――『これを默々として頂いて歸つては、餘りに私が意氣地の無い人間になります。御約束の通りでなければ如何しても頂けません。私は子供では御座いません、憚りながら一個の男子で御座います。飢死にしても自分の意志を貫いて御目に掛けます！』假にも斯んな立派な口を利いたのだから、僕の方からは今課長に言葉を掛ける事は如何しても出來ない、彼方から何か言ひ出すのを待つて居なければならぬ。

課長は矢張默つて居る。追々社員も歸る。みんな歸るのに自分一人躊躇して居て、若し理由でも訊かれたら工合が惡いからと思つて、一寸便所へ行く。便所から戻つて見ると、課長席の瓦斯はもう消

えて居る。あゝ課長は歸つて了つた!!!

仕方がない………仕方がないと諦めて社を出る。空は曇つて眞暗だ………『諦めて』とは言つたが、實は諦められたのではない。一圖に男らしいと思つて、あんな事はしたものゝ、實際明日の小遣は勿論、米にも差支へる譯なのだから、何れ何處へ行つて金を借りなければならない——人に金を借りる！　少い月給を默つて貰つて歸るより猶男らしくないぢやないか。己は如何も感情が强くて不可ん！　あゝ己は不幸な男だ！いくら一生懸命に稼いでも、得た金は悉皆他人が遣つて了ふのだ——母が遣ふ、叔父が遣ふ、死んだ親父までが遣ふ！

斯うやつて春廣の洋服を着て、和製パナマの帽子を冠つて、八字髭を生した處は如何見ても立派な紳士だ。其紳士の嚢中には今何が在る？　覺えず蝦蟇口を引出して、パチンに手を掛けたが、恐ろしいから開けて見るのは中止にして、直ぐ又ポケットへ入れて了ふ。

明日は家内四人、如何して命を續ける事だらう？　事に依ると死ぬかも知れない。然し、同じ死ぬにも飢死は厭だ。自殺も厭だ。いつそ課長と刺し違へて死にたい。と思ふと、しらばツくれて煙草の火を點けてる課長の顏が眼先にちらついて、口惜しくツて〳〵堪らぬ。と又、『この廣い世界でお腹の飢つてるのは己一人だ！』と云ふ樣な事を考へ出して今度は又、悲しくて〳〵堪らぬ。いつか涙がボタボタと垂れて來て、頰を傳ひ、顎を流れて、確と小脇に抱いた蝙蝠傘の柄を濡らす。

頭腦がぼうッとして了つて、もう何も考へない。唯毎晩通る道を習慣的に器械的に家へ近づくのである。初めは『家へ歸りたくない。』と云ふ樣な事を思つた。然し、歩いてる内に左樣云ふ感じも何處へか行つて了つた。たゞ歩いて居るのだ。たゞ歩いて居るのだ。

ト暗闇の路傍に突伏してる男がある。

ぼんやりそれを照らしてるのは掛行燈の光だ。行燈の字を見ると大金亭とある――あゝもう矢の倉まで來たのか。

男は地面に膝を突いて、尻を持上げて、兩の掌を地面に突いて、顔を泥の中に突込んで居る。印半纏の脊中には丸に和の字が大きく書いてある。右には小さな風呂敷包が地面の上に置いてある。左には繭紬の蝙蝠傘の古いのが矢張地面に置いてある。風呂敷包と蝙蝠傘との間に男は突伏して居るのである。

闇の中を朦朧と人は往つたり來たりして居るが、誰も此男の傍に寄る者は無い。僕はぼんやり此處まで歩いて來たが、ぼんやり此男の傍に留つて見る。

身體を屈めて男の顔を覗き込んで見たが、男は身動きもしない。

「おい如何したんだ。」

同情でもない、好奇心でもない。ぼんやりした僕から、ぼんやりと斯う云ふ言葉が出る。

「…………………………」

男は返事もしない、身動きもしない。

「お腹が痛いのか。」

矢張默つてる。

「醉つてるんだらう。」

同じく物を言はぬ。

提灯を手にした車夫が一人遣つて來る。

「如何したんです。」

「如何したのか分らん。」

「おい如何したんだ。」

と言ひながら、突然印半纏の肩に手を掛ける。今迄身動きもしなかつた男は、肩に手を掛けられて、漸く首を擡げる、靜かに膝を立てる。

「おい如何したんだ。」

車夫は又訊ねる。

「頭…………頭がフラ〳〵…………したもんだから。」

と嗄れた聲で片々に答へる。頭の大きな、毛の薄い、白髪の多い、人相の柔和な男だ。
「如何だ、大丈夫か。」
僕は又無意味に斯んな事を言ふ。
「いえ………大丈夫です………歩けます。」
と言ひながら、蝙蝠傘を杖にして、辛くも立上る。
追々人集りがして來た。大金の行燈は、朦朧と群集の物奇らしげな顏を照らす。僕の隣りには何處かの內儀らしい人が乳母らしい人と並んで立つて居る。僕の背後からは襷掛の娘が覗き込んで居る。
――女の香で息苦しい。
「一體御前何處まで行くんだ。」
僕は少し熱心に問ひ始める――
「十條と………云ふ處まで行けば………親方が居ますから………」
と又息苦しさうに片々に答へる。
「十條？　十條ッて一體何處だね。」
「お………お………王子の傍です。」
「え？　王子？　そりや大變だ、王子迄はまだ餘程あるぜ。」

「え？　へい…………なアに十條まで行けば…………親方が居ますから。」

　と又同じ事を言ふ。

「そして御前の家は何處なんだ………御前の出て來た處は？」

「横須賀………横須賀から二日………二日歩いて來たんで………」

「横須賀か。横須賀から歩いて來たのか。そりや大變だ！」

「う………う………浦賀なんで。」

「浦賀？　それぢや尙遠い。…………御前お腹が飢つてるんぢやないか。」

　と覺えず口走つて、ハッと氣がついて、忙てゝ息を呑む――訊ねてる洋服が自分か、訊ねられてる印半纏が自分か、何だか分らなくなる。男は何と返事をしたか、返事をしなかつたか、ぼうッとして了つて最う分らない。やがて微に、

「お願です！　御願ですから水を一杯與つて下さい！」

　と言ふ聲が聞える。

「え、水？」

　と言つて其處等見廻したが、東京の往來に淸水のあらう筈もない。困つて居ると、背後に立つてた襷の娘が、

「持つて來て上げませう。」
と向ふへ行くから、見て居ると、大金の隣のめしやへ這入る。やがて濁酒用の厚手なコップに水を一杯と、烟の出て居る大きな握飯二箇を持つて出て來た。
「きつとお腹が減つてるんでせう。お握飯を持つて來て上げたわ。」
僕は又ハッとする。『左樣です、何卒そのお握飯を下さい。』と言ひさうにする。
娘は先づコップを出した。男はコップの緣を嚙み碎かんばかりに嚙りついて一息に呑み干したが、
「もう一杯御願です！」
と言ふ。娘が默つて握飯を出すと、凝と其顏を視つめて居たが、
「どうも有難う御座います。」
と受取つて、
「實は…………二日二晩…………何も喰べずに歩いたんで…………お腹が飢つて、お腹が飢つて……」
漸く男は本音を吹いた。矢張お腹が飢つて居たのだ！　やがて二箇の握飯を綺麗に喰べて了つて、もう一杯持つて來て吳れた水を呑み干すと、
「どうも皆樣…………種々有難う御座いました…………御蔭樣で今夜十條まで參れます！」
と言つて、幾度も叩頭をしながら、とぼ〳〵出掛けさうにする。僕は氣の毒だなァと思つて、蝦蟇

口へ手を掛けたが、中の數は知れて居るので、自然と手が弛む。惠んで遣りたい、あゝ惠んで遣りたいと思ふと、それが惠んで貰ひたい、あゝ惠んで貰ひたいと云ふ様な感じに變つて來る――小さな風呂敷包を肩に掛けて、繭紬の洋傘を杖に突いて、藁草履を穿いて、印半纏を着た、頭の大きな男が自分のやうな氣がして來る……

「御前さん、少しだけども之を上げませう。」

僕は又ハツとする。僕の隣に居た內儀は、銀貨を紙に包んで、親切にも男の內懷中へ入れてやつて、「落さないやうに持つて入らつしやい……王子まで行くつたつて、迚も今夜は駄目だから、今夜は淺草邊の安泊に宿つて、明日の朝御出なさい、ね。貴方は頭がきつと惡いのよ。また眼が暈ると不可いから、ね。今夜は左様なさい……人の好さゝうな人だのに可哀さうだわねえ！」

「あ……あ……有難う御座います！」

男が言つたのか、僕が言つたのか分らない。僕の內懷中にも何かドツシリと這入つたやうな氣がする……

男はとぼ〳〵と兩國の方へ向ふ――人の山は漸う崩れた――僕も群集を離れて、男と並んで歩いて行く。男も默つて歩く、僕も默つて歩く。

米澤町へ來る。列んだ店の白熱瓦斯で男の顏が始めて明く見える。さんざ苦勞をしたらしい顏が、

何とも云へぬ嬉しさうな滿足さうな色を浮べて居る。男の此顏を見ると、自分ゝ何だか無上に嬉しくなつて來て、今迄途上考へて來た事が、覺めてから思ひ出せぬ夢のやうに、遠い遠い事のやうに思はれる………

兩國橋の袂で、この男に無言で別れて何か知らず勢よく家へ飛込むと、課長から參拾五圓屆いて居た。母や叔父等は、僕の歸宅の遲いのを大層心配して居たのださうである。

巣鴨の鯉屋

わたしはその頃京橋の或新聞社へ毎晩夜勤をしてゐました。ですから社を出るのはいつも十一時頃で、それから電車に乗つて本郷四丁目まで來て、あすこで降りて、それからずつと歩くのですから、どうしても家へ歸つて床へはひるのは一時過ぎでした――え。家ですか、家は巣鴨の御駕籠町だつたのです。

ある雨霽りの寒い晩。いつもの通り駒込の追分を左に折れて、まだ濕りつ氣のある古番傘を肩に、爪皮のかゝつてゐない、鼻緒の緩んだ古足駄を引き摺るやうにして、あの有名なぬかるみの道を、白山の坂の上まで來ますと、あすこの汚い共同便所の前に三四人、人だかりがしてゐます。眞暗でよくは分かりませんが、荷車に大根を一ぱい積んだ男がぬかるみがひどいので引けないで弱つてゐると、鳥打帽子を冠つた學生風の青年が親切に後を押して遣つてゐるやうです――そこいらには三四本大根の折れたのがぬかるみの中に落ちてゐるやうですし、見れば荷車の男も泥塗れになつてゐるやうです。何でもこゝで轉びかどうかしたに違ひありません。

學生風の青年は頻に掛聲をして後から押すのですけれども、荷車の男は一向に力を入れて引かうとしません。そして口の中で何だかブツ〱ブツ〱言つてゐるのです――側へ寄つて見ると男はぐでんぐでんに醉つてゐました。

凡そ十五分もこんな事でぐづ〱してゐるので、さすがに親切な學生も少し參つて來た樣子です。わたしは氣の毒になりましたから、一番引き受ける氣で學生に向つて、

「あなたはどつちへお歸りなのです。」

「僕。僕は大觀音の側です。」

「この男は何處へ歸るんだと申してをりました。」

「庚申塚だとか言ひました。」

「それぢや大變だ。貴君は直ぐそこをはいれば家へ歸れる方です――この男はわたしがお預かりしませう、どうせわたしは御駕籠町まで歸るんですから。」

學生は暫く默つて立つてゐたが、

「さうですか。それぢや君にお願ひしませう。大分醉つてるやうですし、道が惡いんだから、全く可哀さうです。」

「宜しい。わたしが引き受けました。」

「ぢや、どうぞ。」
學生はやッちや場の方へ曲つて行つて了ひました。醉つぱらひは學生の後姿を見送つて、幾度かおじぎをして、
「あゝ、有難うございました。有難うございました。」
と申しました。
もうたかつてゐた人達も「何だ、つまらない。」と云ふ顔をして、みんな行つて了ひました。
私は醉つぱらひと二人きりになつて了ひました。
わたしは醉つぱらひの肩を叩いて、
「庚申塚まで歸るのか。」
と言ひますと、
「さうよ。」
と酒臭い息を吹きかけながら、息張つて申します。そして獨語のやうに、
「あの人は豪いや。全く豪い人だ。」
と言ひます。わたしの顔などはてんで見ようともしません。
「うん。全く豪い。」

とわたしが調子を合せると、
「ほんとに若いのに似合はねえ豪い人だ。」
と又同じ事を言ふのです。
「さ、今度は俺が押してつて遣るから――俺はどうせ巣鴨まで歸るんだ、家まで送つてつて遣るから、さあお引き。」
男は澁々荷車を引き出しました。
引き出しながらも又、
「全く若いに似合はねえ豪い方だ。」
を繰り返すのです――それが如何にも「お前は駄目だよ。」と言はぬばかりの口調なのです。
中々道が捗りません。一間引いては休み、二間引いては休むのです。やうやく鷄聲ヶ窪まで來ると、又立ち止つて何か言ひ出しました。
「おい後の大將、この提灯を見ねえ。」
男は『藤』と云ふ一字を書いて、上に藤つなぎの輪が書いてある手丸を持つてゐるのです。
「これはその、借りて來たんだ。」
「さうか、借りて來たのか。それは好かつた。さあ行かうぜ。」

「まだ新しい提灯だ。」
「さうだ、新しい提灯だ。さあ、行かう。」
「人間てものは……何でも義理を思はなくちやいけねえ……義理が一番大切だあ。」
「さうだ、大切だ。さあ〳〵行かうぜ。」
男はやうやく又あつちへ一間こつちへ一間とぬかるみの中をうね〳〵と引き出しましたが、曙町まで來ると、又車を止めて了ひました。
「しやうがないなあ。」
とわたしが言つてる内に、男は梶棒を下ろして、車の外へ出て了ひました。
「どうするんだ。」
とわたしが少し怒つて言ひますと、
「もう駄目だ。」
「駄目だぢやない――駄目だつて、こんな處へ車がうつちやつて行けるものか。家まで持つて行かなきや困るんだらう。」
「困らねえ。」
「困らない事があるものか、こりやみんな賣り物だらう。」

「賣れねえんだ。」

「あゝ賣れなかつたのか――町へ持つて出ても賣れなかつたのか。道理で澤山あると思つた。買ひ出しにしちや時間が變だし、俺も妙だと思つてゐたよ。」

「賣れねえんだよ。」

「だが、何だつてこんなに大根をみんな汚しちまつたんだ。」

「ぬかるみへ……落つこちたから……よ。」

「そりやお前が醉つぱらつて落としたんぢやないか。」

「さうだ。」

「何だつて又代物が賣れもしないのに酒なんか飲むんだな。」

「賣れねえから飲むんだ。」

「そんな奴があるものか。」

「う、賣れりやあ嗅に錢を持つてつて遣らあ。」

「……さあもう遲くなるから行かないか、俺も今更逃げる譯にも行かないし、弱るぢやないか。」

「もう引くのは御免だ。」

「しやうがないなあ。乃公が賴んで引いて貰つてるやうだ……。」

とわたしも一時は途方に暮れましたが、やがて決心をしまして、

「ぢや今度は俺が引いてつて遣らう。お前は後を押すんだ。」

と言つてわたしは梶棒の中へはいつて、梶を上げました。男は默つて後へ廻つて後を押しました。中々力があります。もう引けないなどと言つたのは嘘に極まつてゐます。橫着な奴だとは思ひましたけれども、かういふ人間に盡すのが眞の慈善だ、眞の傳道だといふやうな、今日から見れば隨分子供らしい思想に勵まされて、あのだら〳〵坂を一生懸命に引いて登りました――あすこは歩いてゐると一寸坂とは見えませんけれども、車を引く者には可なりな難所ださうで、だら〳〵だら〳〵が無暗と長いので弱るのださうです。わたしも荷車を引いて見て始めてそれがわかりました。

酒井樣の屋敷の門の前まで來ると、車を止めて、ほッとした息を吐きました。

「一體お前これを一本いくらで賣るつもりだつたんだ。」

わたしはこの八百屋だか百姓だか車力だか分らぬ男に問ひかけました。

「一本一錢五厘よ。」

と答へる顔を、酒井樣の屋敷の瓦斯燈の光で、始めてよく見ますと、隨分人相の悪い男です。鼻が低くて、口が大きく、目が片つ方牡蠣のやうに腐つてゐて、不恰好な赤ら顔に一面の痘痕(あばた)です。頭の毛も所々に白髪だの黒いのだの混つて生えてゐるきりで、大抵汚なく禿げてゐるのです。汚ない色の

褪めたつぎはぎだらけの法被に細帶といふ體裁で、もう何から何まで飮んで了つたといふ風でした。
「一本一錢五厘か。それでこゝに何本殘つてるんだ。」
「五十本あらあ。」
「五十本。馬鹿を言へ、見ても分かるぢやないか。高々二十本よ」
「なあに五十本あるよ。」
「まあ何本でも好いや。氣の毒だから俺がみんな買つてやらうぢやないか。」
「さうか。」
とは言ひましたが、餘り嬉しさうな顏でもありませんでした。
「どうだ、みんなでいくらにしとく。」
「みんなか、みんなたら十六貫だ。」
「宜しい、買はう。」
わたしはどうしたのか、この際十六貫を十六錢の事だと勘違へをしてゐたのです……と、氣がつくと、
「いや待てよ。何。十六貫だつて。馬鹿な。一本一錢五厘の大根を二十本買つて十六貫拂ふ奴が何處にあるものか……」

れはそれから一人で行つて了ひさうにします。

（以下右から）

「買はねえのか。」

と、車をうつちやつてどん〳〵一人で行つて了ひさうにします。

「……買ふよ、買ふよ。買ふから後を押しな。」

わたしは又曳き出しました。男は現金な奴で、大根が買つて貰へる事になつてからといふものはそれは〳〵勢よく押すのです。

やうやく原町の交番まで來ました。

わたしは馴れない爲事を足駄穿きでしたのですから、もう好い加減疲れても來ましたし、時間も遲くはなりますし、今の『十六貫』ゆすられさうな一件もありますし——途中で幾度つまらぬ俠氣を後悔したか知れませんけれども、唯うつちやつて逃げる譯にも行かないので、やうやくこゝまで來ましたが——交番の燈を見ると、ほつと息をつきまして、もういつそ巡査さんに渡して了はうと、車を止めて、梶棒を出て立番の巡査さんの側へ近寄らうとしますと、後から、

「手前俺を泥坊と思つてるな。」

と、大きな聲で呶るぢやありませんか。

びつくりして立ち戻ると、

「手前俺を渡す氣だな。」

と言ひます。

「馬鹿を言つちやいけない。俺見たいな者が車を曳いて、若し怪しまれるといけないから斷りに行つたんぢやないか――あゝびつくりした。」

と言つてる處へ、巡査の方から遣つて來ました。

「どうもこの通り醉つてるんですが、何とか御處置は附きますまいか。一體何處の者でございませう。」

と眞面目になつて言ひますと、巡査は醉漢を見てゐましたが、やがて人を馬鹿にしたやうな笑ひ方をして、

「ふん、又か――巣鴨の鯉屋です。醉つぱらひでしやうのない奴でさあ。うつちやつてお置きなさい。」

「けれども……。」

と言ふ内に、巡査は向うへ行つて了ひました。

わたしは非常な侮辱を受けたやうな氣がしました。『巣鴨の鯉屋』と言へば、この近所から本郷へかけて知らぬ者のないやくざ者なのです。本郷四丁目の交番から巣鴨一丁目の交番までに四つか五つ交番がありますが、この鯉屋が『御厄介』にならぬ交番は一つもないと聞いてゐました。

わたしは話を聞いてゐたばかりで、鯉屋の顔を知らなかつた爲に――それにこの日に限つて鯉屋が大根屋になつてゐた爲に――すつかり欺されて了つたのです。(尤も後で聞きましたら、鯉のない時は

色々な物を賣つて歩くので、時々は海鼠(なまこ)なども賣つて歩くさうです。何を賣つて歩いても少しも賣れないんださうです。醉つぱらつて賣つて歩くから女などは恐がつて買はないんださうです……）

わたしは最ういつその事、交番の前へうつちやつて行かうかとも思ひましたが、今の調子で大きな聲で叱られるんで、元々こつちが關りあつたのが惡いのだからと諦めて、又梶棒を握つて曳き出しました……どつか先の寂しい所へ行つてからうつちやつて遣らうと思ひまして。

やがて自分の家へ曲かる横町も通り越しました。瘋癲病院の煉瓦塀も通り越しました。とう／＼あれは大原町(おほはらまち)だつたか西丸町(にしまるちやう)だつたかの饂飩屋(うどんや)の横町まで來て了ひました――交番からこゝまで二人共默つて曳いて、默つて押して來たのです。

私は車を留めて、梶棒を出て、番傘を大根の上から取つて、ハンケチで、額の汗を拭きました――そつと樣子を見ると、鯉屋はまだ醉が醒めない樣子で、ひよろ／＼してゐます。「これなら好し。」とわたしは心に頷きました。

そこで態と物靜かに、

「ではもう俺はこゝで別れる。とてもこの大根を積んだなりでは家まで曳いて行けまいから、俺が二貫だけ買つて遣るから、それだけこゝにうつちやつて行くともどうともおし、そして早くお歸り。お上さんが待つてらあ。」

と行つて廿錢銀貨一つ握らせました。わたしはなぜこんなに優しい口を利いたのでせう――交番の前で叫られてから少し恐くなつたのです。

幸に鯉屋はさつきの『十六貫』を忘れてゐて呉れました。

「うん、有難え……」

と言つて男は頭を下げましたが、直ぐまた詞を次いで、

「もう少し買つて呉んねえな。」

「いや、それで澤山だ。」

「よう、もう少し……」

「澤山、澤山。」

と言ひながら、わたしは逃げるやうに眞暗な饂飩屋の横町へ馳け込んで了ひました。

「もう二貫貸して呉んねえ、よう、もう二貫貸して呉んねえ。」

といふ嗄れた凄い聲が、私を追つかけて來ました――いつまでも、いつまでも、その聲が耳を離れません。

わたしは眞暗な道を大廻りして、二時半頃やうやく家へ歸つて寢ました。けれども中々寢つかれません。そこで暫く怠つてゐた日記を出して來て、その日だけ書く事にしました。書き終ると、その

末に、

「人間は天使の事業をなしつゝありと信じながら、悪魔の下働きをなしつゝある者なり。」

と書きました――そして寝苦しい夢を結びました。

沈默

軍港の夏の午後――戰爭の最中――

ステエションへ着いて、汽車を出ると……金の板を叩く音、蒸汽を吐く音、機關の廻る音、車の往來する音、靴の音……劍の音……雜然として意味をなさざる數千の人聲……船といふ船から上る赤黑い烟は、工場といふ工場から上るどす黑い烟と入り亂れて、からりと晴れた大空へ――青い吸取紙へどぶ〳〵とインキを零したやうに……

私は先生の小さな鞄を持つて、先生の背後に隨いてステエションを出た……港に添うた狹い長い一本路を、眼眩しい程人が往つたり來たりしてゐる――靑服を着た職工、軍服を着た海軍士官、水兵、機關兵、御用商人……先生と私は小さくなつて、その間を通り拔けた……

軍港の入口の門の横に黑い煤びた塀がある――その塀一面に大きな白い西洋紙が貼つてあつて、大きな字でそれに戰況が書いてある――都の新聞社の前に貼出してあるのに似てはゐるが、それから見ると思ひ切つて規模が大きい――如何にも軍人の爲事らしい……『敵艦終に沈沒』といふ所に、赤イン

キで勢好く大きな丸い圏が打つてあつた。

先生は洋服を着て、その上に薄い鼠色の夏外套を着てをられる……外套の背中の肩に近い部分が少し色が褪めてゐる……帽子は例の縁の廣い、山の高い、眞黑な、あれだ……大分埃がたかつてゐる……かう造つて背後から見ると、近頃大分痩せた――前へ廻つて見ると、眼に光と力があるから、如何にも元氣な丈夫な人に見えるが――背後から見ると爭はれないものだ……この頃の先生の苦勞……戰爭國に於ける唯一人の非戰論者……決鬪狀……暗殺の威嚇……『賣國奴』……『敵國の探偵』……嘲笑……唾……先生の頤には汚く髯が生えてゐる……

非戰論者と非戰論者の弟子とは、軍港の煙に前を塞がれ、軍港の煙に後を襲はれ、軍港の煙に頭を壓され、軍港の煙に肺の臟の奥の奥まで汚しながら……軍港の山手へ……

長い坂の途中まで登ると、先生は立留つて、ほつと息を吐かれた……

「どうだ、君、盛に働いてるぢやないか――この下に見える煙は、君何だと思ふ……あれは惡魔が吐く煙草の煙だ。」

先生は聲の無い聲で笑ひながら、また坂を登られた。

登り切ると、路の右側に靑く塗つた木造の西洋家屋がある……先生と私とはこの家を訪ねて來たのだ……

眞白な服を着た三十許りの西洋人が如雨露を手にした儘飛んで出て來た……先生は落着いた沈んだ聲で、この西洋婦人と英語で何か三語四語挨拶をされたが、私には分らなかつた。

玄關前の空地には花壇が二つ三つ作つてある……サイネリアの紫、ロベリアの碧、ジエレニアムの眞紅……何れも露を含んで晴れた日の空氣に搖いでゐた……軍港の煙は低く、遠く、高山で脚の下に見る黑い雲のやうに……

先生と私とは直ぐ內へ這入つた……讀書室のやうな廣い處である……硝子窓の外を見ると……垣根にスヰイトピイスが紅白を交へて美しく咲いてゐる……

やがて先刻の西洋婦人が這入つて來た……私は『先生の友人』として、先生から紹介された――實は『先生の弟子』だのに……

西洋婦人は名をE某と云つた。亞米利加の人である。この軍港に住む事既に八年、基督敎信者の海軍士官や下士や兵卒の爲に、說敎もし、祈禱會もし、寄宿舍を設けて宿もしてゐる……日本語も巧く出來る。箸も持つ。味噌汁も喰べる……『珍らしい人だ。』とはいつも先生から聞いてゐた――殊に先生の氣に入つてるのは、このEさんがミツシヨンの補助を受けないで、全く獨力で遣つてゐるといふ事だ……Eさんは軍艦の出這入りを好く知つてゐる。今日は誰さんが出發するといふ日は、その人の爲に寄宿舍にゐるだけの者みんなを集めて祈禱をして遣り、艦の出る時分には、きつと

自分の部屋……軍港を眼下に見下ろす自分の部屋の窓を開けて、双眼鏡で一心に艦を見ながら、別れのハンカチフを振る――出て行く若い士官も、これを知つてゐるから、きつと甲板へ出て答のハンカチフを振るさうだ――また、今日は誰が着くといふ日は、もう朝早くからそは〳〵してゐて……若し何かの都合で着港でも遲れようものなら、靑くなつて心配して、その揚句には持病のリウマチスに惱まされる……

Eさんの世話になつてる若い士官は、軍港へ着くと、直ぐEさんを訪ねて、Eさんと一緒に感謝の祈禱をし、Eさんと一緒に讃美歌を唱ひ、Eさんの燒いた菓子に舌鼓を打つ……Eさんは『マザア。』『マザア。』と呼ばれて、これらの靑年士官から慕はれてゐる……

先生は今日Eさんに賴まれて、Eさんが世話をしてゐる士官達に、一夕の談話をしに來たのだ――非戰論者が、戰爭最中、軍港へ、軍人に向つて說敎をしに來たのだ――私は窃に『危險だなあ。』と思つた……

先生は垣根のスキイトピイスにぼんやり見惚(みと)れてをられる……

日が暮れかゝると、追々に人が集まつて來た……機關學校の生徒も來た、海兵團の下士も來た、水兵も來た、士官も來た……何れも晴々した愉快さうな顏をした人達ばかりだ……誠に氣持か好い……

先生に久濶を謝す人がある……恥かしさうに初對面の挨拶をする人がある……聖書に就いての小質疑をただす人がある……愉快な話聲と笑ひ聲はこの室の窓の硝子に響いた……

中にも話の中心になつたのは、小川と云ふ中機關士の噂である……この人は學問の出來る、膽力の据わつた、信仰の堅い、年の若い機關士だ……年老つた阿母さんと二人切りで暮らしてゐる……Eさんの事業に對しては、始終身分に適はぬ寄附をする……戰爭へ出てからも度々殊勳があつた……近頃自分の乘つてる軍艦に損所が出來て、こゝへ入港してゐる……朝早くから晩おそくまで勤務をして、それからEさんの寄宿へ歸つて寢る……非常な勉强家だ……かういふ種々な話を聞いて、私も會ひたくなつた……が、まだ歸つて來ない……ランプが點いた。

大抵人も集まつたからと言ふので、Eさんの短い祈禱を前にして、先生の談話が始まつた……私は忙しく鉛筆を動かし始める……

また……非戰論である……尤もこの頃先生の頭腦(あたま)を支配してゐるものはそれより外にないのだから、爲方がないとは言ふものゝ、この場合、この聽衆……私は硝子窓の外の暗闇に屢々人影の動くあるを疑つた……坂を降りて行く醉つぱらひ水兵の濁つた叫り聲(どな)には、屢々膽を寒くした……この間もこゝに寄宿してゐる士官が水兵に喧嘩を吹つ掛けられたと言ふではないか!

先生の非戰論はトルストイズムではない……もつと深い……もつと現實的だ……カントの永久平和

論……スペンサア……「戰爭といふ者は、果してその豫め目的とした所のものを獲得し得らるゝものであらうか。」……これには聽く人が大分動かされたやうだ……私も動かされた……先生の……あの眼の光……舌の力……熱……しかも冷靜なる理路……

非戰論と軍人……非戰論と基督信者の軍人……非戰論者の軍人が職務に對する態度……談話は一時間と四十分で終つた……私は鉛筆を置いた……中指が痛い……

茶を飮みながら、一同は又先生を取卷いて話を始めた……小川中機關士はいつの間にか歸つて來てゐた……先生の話が始まると直に歸つて來たのださうだが、靜な人だから誰にも分からなかつた……盛に話が始まつても、小川君は默つて人の話を聽いてゐる……誰が何を話しかけても一言二言小さな聲で答へるきりだ……先生が『御苦勞だねえ。』と言はれた時も『有難う。』と微笑を含んだきりだつた……私は何となくこの若い機關士が好きになつた……瘦せた、眼尻の上がつた、丈の高い人だ……雪のやうに白い軍服を着けてゐた。

歸るべき人は皆歸つて、寢床に就くべき時は來た。

先生は母屋へ寢に行かれた……私は寄宿舍の二階へ案內された……

廣い蚊帳の中に洗ひ立てのシイツの敷いてある寢床が二つ白く見える……私はその一つを指差され

た……眞白なナイト、シャアツが束ねて置いてある。
誰が隣りへ來て寢るんだらう……と私は思つた……蚊帳の中へ這入つて、汗臭い浴衣を氣持の好い寢卷に着換へて、暫く床の上に坐つてゐた……坂を上り降りする人聲が喧しく聞える……
やがて眞白な軍服を着た丈の高い士官が、私の室へ這入つて來て、軍服を寢卷に着換へると、直ぐ蚊帳の中へ這入つて來た……小川中機關士だ……
私はさつきEさんに依て紹介されてゐる……殊に自分の好きな人だ……これは好い友達が來たと思つた……
「お先へ。」
「いや……」
小川君も私のやうに、床の上に坐つた。
「軍艦に損所が出來たんださうですね。」
「いや損所と言ふんでもないんです……」
「戰地から戰爭最中にこゝへお出になつたんださうですね……直ぐ又あちらへお歸りになるんでせう。」
「どうなりますかと思つてゐます……」

「あなたは今戦争をしてる最中の方なんですね。」
「まあ、さうです……」
「戦爭は如何です。」
「中々忙しいものです……」
「もう艦は修つたんでございますか。」
「さあ……」
「いつ頃又お立ちになるんです。」
「さあ……
「今、どの邊で始まつとりませう。」
「……」
「もう大分敵もやられましたらうな。」
「……」
「……」
「……」
小川中機關士はとう〳〵沈默になつて了つた……私も默つて了つた……

「お休み……」
「はあ、お休み……」
私は寢前の默禱をして、横になつた。
小川君も俯向いて暫く默禱をして、それから靜に寢たが、間もなく鼾を立て始めた……
私は中々眠れなかつた……『戰爭をしてる人』と枕を並べて寢てゐるが爲に……自分が戰地へ來てるやうな氣がして來た……不安……矛盾……流るゝ血の色……破るゝ肉の臭……心臟の鼓動が激しくなつた……手足に溢るゝ計り力が這入つて來た……
小川君はすつかり寢ついて了つた……
私は眼を塞いだけれども、中々寢つかれない……「て、て、帝國の軍人たる者が……」醉つぱらつて坂を降りて行く……
少しトロ〳〵ツとしたかと思ふと……人聲で眼が覺めた……小川機關士が誰かに起されてゐるのだ……
「松……兵曹が只今急に出發する事になりました……祈禱會を開きますから……」
と、暗闇の中に太い聲がする……一時頃だと思つた……
小川君は直ぐと起きて……出て行つたやうだ……

朝眼が覺めると……小川君の寢床は綺麗に疊んであつた……軍服の影も見えぬ……もう艦へ行つたらしい……

雀が鳴いてゐる……窓を開けると……今日も好い天氣だ……眼の下に軍港が小さく見える……赤黒い烟りとどす黑い烟りが彼方此方から上がつて、昨日聞いた物の響が又今日も……遠く聞える……

その日の午後、先生と私は都へ歸つた……

風船賣

爺は花町（はなちやう）の木賃を出た。

臺灣パナマの幾度か雨ざらしになつて土氣色をしたのを被つて、綿入の綿を拔いたらしい縞目も分からぬ袷を薄汚い素肌に着てゐる。瘦せこけた素足に草鞋を穿いてゐるが、そのまた草鞋が芥溜で拾つて來たもののやうに崩れてゐる。

爺は環の脫れた用簞笥の古い引き出しに襷の古いのを籠の手のやうに丸くつけて、それを首からかけてゐる。抽匣の中には赤いのだの青いのだの紫のだの、護謨風船の口に赤い笛のついたのが二三十、小さく黑く縮んではひつてゐる。護謨酸漿（ごむほゝづき）も少しばかり隅つこに入れてある。襷の附根には瓦斯のはひつた大きな丸い護謨風船が三つ四つ、飛ばないやうに細い麻絲で結びつけてある。これにも赤いのや青いのや紫のがある。

爺はをとといまで每晩番場（ばんば）へ今川燒の店を出してゐた。けれどもちつとも賣れなかつた――あの爺のは何だか汚らしいといふ評判が立つたので。

そこで、借りてゐた屋臺も道具一式もみんな返して、僅かばかりの賣溜を元に、懇意の燒芋屋の婆さんをいびつて、壹圓五十錢無理に借りて來て、それでけふから風船賣になつたのだ。

爺は燒芋屋の婆さんに借りた一圓五十錢に自分の賣溜廿五錢を足して、きのふの午頃近所の問屋へ行つた。ところが風船は百四十四個入の箱でなければ卸さぬといふ。そこで、淺草公園へ出かけて、小賣をしてゐる風船賣から又讓りに讓つて貰つた。問屋で買ふよりは餘程高くついてゐるだらうけれども、そんな事に構つてはゐられなかつた。兎に角四錢の元なら六錢には賣れるといふ風船商賣が無暗と爺の氣に入つたのだ。

今川燒をやる前に、老爺は新聞の呼賣もやつて見た。每日淺草のちん屋の角へ出て、公園へはひる客を捕まへようとしたが、これも年の若い同業者に壓倒されて駄目だつた。

新聞賣をやる前に、納豆も賣つて見た、七色唐辛も賣つて見た、けれども、これらはみんな賣り聲の下手な爲に失敗した。

爺は今年六十二である。四十一の時、廿歲になる一人息子に死なれた。息子は鐵道の方に出てゐたが、もう少しで車掌になる所を死んで了つたのだ。五十三の時、上さんに死なれた。上さんは裁縫が達者だつた。

それからこつち、爺は全く一人ぼつちで、その一人ぼつちの口を潤す爲に、殆ど十年間、每日每日

日氣の安まる事はなかつた。

爺はいつも考へる。俺はまあいつまで働かなければならないのか。大抵の人なら、もう子供か孫の世話で喰べて行かれる年だ。生きてゐて用のない躰を、自分で齷齪して無理に生かして置かなければならぬ道理が何處にあらう。さうかといつて、飢死をするのは厭だ。身を投げるのはなほ厭だ。乞食になるか、ひとりでに死ぬのを待つより外に爲ようはない。乞食になるのは身を投げるのより厭だ。だから、死ぬのを待つとする。死ぬのを待つとしても、お迎ひの來るまでは、何かしらして働いてゐなければならない。人間が齷齪働くのは、みんなお迎ひの來るまでの時間をどうにかかうにかごまかす爲だ。

爺は上野の方面へも向はず、淺草の方面へも向はなかつた。爺は京橋の方面へ向つてトボ／＼トボ／＼と歩いて行く。細い麻絲で縛つた赤、靑、紫の風船もフラフラフラ／＼と附いて行く。

爺はどういふ料簡か、銀座で風船を賣らうとした。夜は夜店が出るから駄目だと思つた。晝間は店が出ないから、きつと賣れると思つた。上野や淺草には古參の風船賣がゐるから駄目だ、銀座ならさういふ人がゐないから大丈夫だと思つた。

爺は銀座へ出て、とある水菓子屋の前に立つた。ところが、そこに立つてゐては邪魔だと言つて追ひ拂はれた。

そこを退いて、今度は或麪麭屋と烟草屋の間に立つた。處が又麪麭屋の小女と烟草屋の小僧に追は

れた。

そこで今度は或時計屋のショオ、ヰンドォの前に蹲んだ。時計屋は水菓子屋よりも麪麭屋よりも烟草屋よりも寛大だつた。尤もショオ、ヰンドォの下に蹲んだのだから、店の奥からは見えなかつたのかも知れぬ。

隨分大勢人通りがある。紳士も通る。奧樣も通る。お上さんも通る。番頭も通る。子守も通る。小僧も通る。立留つて時計屋のショオ、ヰンドォを覗く人も澤山ある。ショオ、ヰンドォの中には、懷中時計だの、目覺し時計だの、置時計だのが、目を射るばかりにキラ〳〵と列んでゐる。中にも人の目を喜ばしたのは、發條仕掛で鐵葉で出來た輕業師が器械體操をするおもちやだ。

人は大勢通るが爺に注意する人は一人もない。況や爺の風船に注意する人はない。ショオ、ヰンドォを覗いて、鐵葉の人形の器械體操に感心する人はあるが、老爺の首引き出しを覗いて、護謨酸漿一つ買はうとする人はない。

銀座は唯遊びに來る所ではない。贅澤な物を買ひに來る所だ。たまたま子供が母に連れられて來ても、子供の目は護謨風船などといふ安い物には決して向かない。

さつき爺の追はれた筋向うの水菓子屋には、もうさつきから五人客があつた。その隣りの瀨戶物屋にも三人客があつた。みんな何か澤山買つて、それを抱へて出て行く。爺は小一時間時計屋の前にゐ

るが。まだ一つも風船が賣れぬ。

爺は自棄になつた。

七色を賣つた時分に、賣り聲が拙いので、往來の子供に笑はれた事を思ひ出した。納豆を賣つた時分に、同じ譯から家の前だけはどうか通つて吳れるなと或妾宅の下女に五十錢握らせられた事を思ひ出した。新聞を賣つた時分に、よく若い新聞屋に揶揄られた事を思ひ出した。今川燒を賣つた時分に、あまり賣れないんで、自分で拵へた今川燒を自分で喰べて、それで自分の露命を繋いだ事を思ひ出した。

爺は自棄になつて、引き出しの中の風船を一つ〳〵取り出して順々に膨らしたり窄めたりし始めた。息が足りないから、さう大きくはならぬが、それでも小さな護謨鞠程にはなる。口を放すと、赤い笛がピイイイイと鳴る。

爺はもう客などは有つても無くても構はないと思つた。かうやつて風船を膨らましては口を放し、膨らましては口を放して、赤い笛をピイ〳〵やりながら死ぬまでここに凝としてゐようと思つた。

紫の風船を膨らます時に、老爺はふとかう思つた。今度は一つ出來るだけ大きくして見よう。出來るだけ息を出して、出來るだけ膨らまして見よう。或はそれが爲に身體中の息が出切つて、死んで了ふかも知れぬ。さうなれば尙結構だ。この賣れない棺らしい風船の中へ、この世の息の在る限りを吐き切つて死ぬのは面白い。

爺は赤い笛を口にして出來るだけ吹いて見た。途中で息が切れても、口は放さずにその儘ちよいと息をして、また吹き續けた。

紫の風船は段々に大きくなつた。卵位のが眞桑瓜位になつた。眞桑瓜位のが氷囊位になつた大くなるに從つて、護謨に染めた色が薄くなつて來る。色が薄くなつて來ると、護謨の內側に溜る水蒸氣の滴りが小さな銀の玉のやうに見えて來る。

爺は頰を膨らし、目を見張り、鼻の穴を廣げて、本當に全身の息を吐出して了ひさうであつた。紫の風船はます〳〵大きくなつて、もう爺の顏を隱して了ふかと思ふばかりになつた……

と、パチインと破けた――石鹼玉のはじけるやうに――石鹼玉のはじけてもう取り返しのつかぬやうに。風船は出來るだけ大きくなつて、つひに命を終へて了つた。が、爺の息は幾ら吐いてもまだ殘りがあつた。

爺はまだ生きてゐた。

爺は生きてゐて、がつかりした。

爺は破れた紫の風船だけの元を取り返すには、これから幾つ風船を賣らなければならぬかを考へなければならなかつた……

ふと首をあげると、學生が二人佇んで、ぢつと爺の顏を見てゐる。爺が風船を膨らますから、これ

を破るまでずつと見てゐたものらしい。二人の學生の顏には氣の毒だといふ色があつた。

その色を見てとると、爺は俄に傲然とした。こんな風船の一つ位何だといふ顏をした。そして學生二人の顏を見詰めながら、さも〳〵暢氣らしく聲をあけて笑つた。

乞食

僕は時々乞食に錢をやる。併しそれは、決して可哀さうだとか氣の毒だとか思ふからではない。

僕には妙な理窟がある。

僕は乞食を一つの商賣だと思つてゐる。僕等と同じ商賣をしてゐるものだと思つてゐる――ただ種類が違ふだけの話だ。

冬は凍つた地面に坐つて、夏は燒埃の中に膝を突いて、額に土をつけて、手の平を泥だらけにして、出來るだけ短い時間の間に出來るだけ澤山のお辭儀をして、さも悲しさうな作り聲をして、『あゝ可哀さうに』といふ感じを人に與へよう與へようと勉めてゐるところは、一種の努力だ。

僕が乞食に錢をやるのは、この努力を買ふのだ。

かういふ努力を買はうと買ふまいと、それは各自の勝手だ。僕は面白いと思ふから買ふのだ。面白くないと思ふ人は別に買ふ必要はない――玉乘を見に這入らうと這入るまいと、それが道德上の問題にはならぬ。

乞食は一種の不生産的な商賣だ。不生產的な商賣の中でも、最も不生產的な商賣だ。その最も不生產的なところが、僕の氣に入つてゐるのだ。

また別にかういふ理由がある――

僕は時々『寂しい病』といふ妙な病氣に取りつかれる。これに罹ると、もうゐても立つてもゐられなくなる。これも亦僕の妙な癖で、さういふ時には知つてる人と口を利くのが厭で厭で堪らなくなる。だから、直ぐ家を飛出してしまふ。そして見も知らぬ往來の人の誰とでも話がして見たくなる。併し、如何なる場合でも僕にはきつと常識が纏つてゐて、狂じみた眞似をすることはどうしても出來ぬ。そこで、要りもせぬ酸漿を買つて、酸漿屋の婆さんと話をしたり、買ひたくもない人形燒を買つて、人形燒屋の爺さんと話をする。

別に大した話をするのではない。景氣が好いとか惡いとか、儲かるとか儲からないとか、雨が續いて困つたとか、惡い病氣がはやりさうだとかいふ極平凡な話をするのだ――それで滿足出來るのだ。

さういふ意味からも、僕は時々乞食に錢をやつて、乞食の傍にしやがんで、乞食と話をする。

この間の晩、淺草の公園の池の緣を通ると、女乞食が借物の子供を三人連れて出てゐた。そこへ筒袖の浴衣を着た職人體の若い男が一人來かかつた。若い男は暗闇に乞食が坐つてるのを見ると、突とその前にしやがんだ。そして懷中から今川燒の這入つた新聞紙の袋を出した。

「おれ一つ貰つて行くぜ。」

と言つて、男は袋の中から今川燒を一つ出して、それを頬ばつた。そして殘りの今川燒を袋ごと女乞食の膝の上へ置くと、直ぐ立上つて、何處かへ行つてしまつた。

勿論、乞食に賴まれて今川燒を買つて來たわけではない。今川燒を買つてから、ひよつこり乞食に逢つたのだ。乞食に逢つてから、今川燒をやる氣になつたのだ。それを『おれ一つ貰つて行くぜ』と如何にも乞食の方に權利があるやうに言つたのは面白い。

あの職人は吾黨の士だ。あの今川燒も、僕式に、食ひたくもないのに買つたものかも知れぬ。

併し、これは餘談だ。僕は今、近頃出來た僕の乞食友達に就いて話をしようとしてゐるのだ。

三四ヶ月前の或晩だつた。ちやうど櫻の散る時分だつた。『季節の代る悲み』といふやうな感じの、しみじみと身に迫る時分だつた。

僕は例の『寂しい病』に取りつかれて、家を飛出した。

元柳町から吉川町、矢の倉河岸から濱町河岸と、さんざ方々歩き廻つた揚句、偶と明治座の前へ出た。

明治座には大阪の役者が掛つてゐた。狂言は何だつたか忘れたが、何でももう二番目の終ひ方で、

幕見の入口には『この幕十錢』といふ木の札が出てゐた。

幕見へ這入つて、見物の誰かと話をしようかと思つたが、芝居が邪魔になるから駄目だと思つて止めにした――尤も、懐中も怪しかつた。

それから、明治座の前の橋を浪花町の方へ渡つた。

橋の袂の薄暗い蔭に、子供の乞食が三人出てゐて、例の悲しさうな作り聲をしながら頻に憫みを乞うてゐた。

僕は一錢銅貨を二つ投げてやつて、さッさと人形町の方へ向つて行つた。子供では相手にならぬと思つたからだ。

人形町へ出て見たが、夜店は大抵もう終ひかけてゐた。赤黒いカンテラの搖らめく火の蔭で、腰を屈めた黑い人影が、何かに追はれるやうに默々として荷を拵へてゐる景色は、何となく不安だ、何となく寂しい。

僕は堪らなくなつて又明治座の方へ引返した。

子供の乞食はまだ橋の袂に坐つてゐた。明治座はいつ終つたのか、小屋も茶屋も、もうすつかり暗くなつてゐた。

見ると、三人の小乞食は、何か小聲で呟きながら、埃の中を掻き廻して、頻に何か探してゐる。

「何を探してるんだ。」

僕は偶と子供の乞食を相手にして、話を始める氣になつたんだ。

「一錢なくしちやつたんだよ。」

三人の内誰かが斯う答へた。

「おれのやつた奴か。」

僕がかういふと、三人の中の眞中にゐた男の子が首をあげて、凝と僕の顔を見た。可愛い顔をした利口さうな奴だ。

「あゝさうだよ。」

と言つて、また三人で探し始める。

「探したつてあるものか。もう一錢やるから、もう探すなあ廢せ廢せ。」

「うん。」

僕は一錢銅貨を一つ出してやつて、そして三人の前にしやがんだ。夜が大分更けたと見えて、もう人通りは餘り無い。

男の子の左右にゐるのは、いづれも女の子だ。一人は丸々と肥つてゐる。一人は小さく痩せてゐる。併し、どッちも卑しい顔はしてをらぬ。無邪氣なおッとりした顔だ。男の子は形が一番小さい。

「毎晩幾時頃までこゝにゐるんだ。」

「貰へるまでさ……二時までだつて、三時までだつてゐるよ。」

と、男の子が答へる。

「大抵毎晩幾ら位貰へる。」

「二錢五厘のことも、二貫のこともあるよ……一文なしのこともあるよ。」

と、丸く肥つた女の子が優しい聲で答へる。

「晝間は何をしてゐる。」

「内で遊んでるんだ。」

また男の子が答へる。

「お父あんやお母さんも貰ひに出るのか。」

「ああ出るよ。」

「別に出るのか。」

「あゝ……今夜は清正公様にゐるよ。」

「お前達、家は一體どこなんだ。」

「花町(はなちやう)だよ。」

と、今度は丸い女の子が答へる。
「花町つて、本所のか。」
「ああ。」
「みんな同じ家にゐるのか。」
「ううん、みんな違ふよ。」
「家を借りてるのか。」
「木賃だよ。」
「さうか、木賃か。」
「あたいんとこは二疊に蒲團が三枚で十三錢だよ。」
と、男の子が口を出した。
「あたいんとこは二疊に蒲團が三枚で十五錢だ。」
「あたいんとこは二疊に蒲團が三枚で十三錢。」
と、痩せた女の子が始めて口を利く。
「毎晩三人で出るのか。」
「まだあすこにゐるよ。」

と、男の子は左手の角の電信柱の下を指す。

「ほら、あすこに荷物見たいになつて、寝てる子があるだらう。あの子が一番大きいんだよ。」

見ると、電信柱の下に、人か荷物か分らぬやうになつて寝てゐる子があつた。乞食の子はなかなか巧い形容をする。

「毎晩柳橋に出てる、あれはお前達の家と違ふか。」

「ああ、あのかつたい坊の女かい。」

と、肥つた女の子が訊く。

「うん。」

「あのかつたい坊、同じ家だよ。」

「さうすると、お前達の宿は、大抵みんな乞食ばかりなんだね。」

「ああ大抵さうだよ。」

「一遍遊びに行かうか。」

「御出でよ、をぢさん。」

と、男の子が言ふ。

「おまはりさんにとつ捕まるやうなことはないか。」

「あるとも……兩國の眼鏡が一番恐いんだよ。」
と、又男の子が答へる。三人の内ではこいつが一番その方の經驗に富んでゐるらしい。
「眼鏡つて、眼鏡をかけたおまはりさんか。」
「ああ、いつでもね、黑い眼鏡をかけてるよ……恐いんだよ……分署へ連れてつてね、劍でぶつたり、頰ぺたを手でぶつたりするんだよ……いつかなんか、マッチで頭へ火を點けられた。」
「ひどい事をするもんだ。」
「毛がじりじりつていつて熱かつたよ……それから一晩止められて返されたんだよ……家へ歸つたら又お父あんにぶたれちやつた。」
「この子はよくぶたれるんだよ。」
と、肥つた女の子が口を出す。
「たまには好いおまはりさんがあるかい。」
「あるとも……好いおまはりさんは『あつちへ行け行け』つて、逃がして吳れるよ。もつと好いおまはりさんは『貰つてろ貰つてろ』つて言ふよ。」
「一體お前達は幾ら貰へば、家へ歸れるんだ。」
「二貫貰へば歸れるんだ。」

やはり男の子が答へる。
「今夜はもう二貫になつたらう。」
「まだ中々だねえ。」
と、三人顔を見合す。
「ぢやア二貫にさへなりやあ、どんなに早くつても歸れるんだね。」
「ああ。」
と三人一緒に答へる。
「お前は今夜幾ら貰つた。」
僕は先づ丸く肥つた女の子に訊いた。
「あたいは十錢。」
「お前は。」
今度は男の子に訊いた。
「あたいは十六錢。」
「お前は。」
今度は痩せた女の子に訊いた。

「あたいは十四錢。」
「それでは御前に十錢と、」と丸い女の子を指し、「御前に四錢と、」と男の子を指し、「御前に六錢と、」と小な女の子を指して、「それだけやれば、みんな家へ歸れるんだね。」
と、僕が言ふと、
「あゝ。」
と又一齊に答へる。
「ぢやあ、それだけやるから、早く歸れ。」
「あゝ。」
と嬉しさうに、又三人が答へる。
僕は蝦蟇口から、みんなの言ふ通りに出してやつた。三人は少しも爭はずに、各自分の要求するだけを取つた。
「ぢや、もう、歸れ、歸れ。」
「あゝ。」
三人は立上つた。
「兩國の方から歸るのか。」

「うん。」
「ぢやあ途中までおれが一緒に歸つてやらう。」
「をぢさん、何處まで歸るんだい。」
「兩國の方だ。」
「ぢやあ一緒に行かう。」
「あすこに寢てるのは起さなくつても好いのか。」
「寢てるから好いよ。」
と言ひざま、男の子は早くも橋を明治座の方へ駈けて行く。
「おい、おい、待てよ、待てよ、一緒に行つてやるから。」
僕はものこの子供の乞食達と別れるのが厭になつたのだ。
「今、小便するんだよ。」
と、大な聲で叫りながら、男の子は河岸の共同便所へ駈込んだ。
「あたいもして來ようや。」
と言ひながら、肥つた丸い女の子が、また共同便所へちよこちよこと這入つた。
痩せた小さな女の子は一人僕の側に立つてゐた。二人は中々便所から出て來ない。

「どうした。馬鹿に長いぢやないか。」

と獨語のやうに僕が言ふと、痩せた女の子は便所の方を向いて、

「保、保、早くしないか。」

と大な聲で叫つた。

「今行くつてば。」

と言ひながら、直ぐ二人は一緒に出て來た。

僕は三人の乞食の子と一列にならんで、明治座の横手へ這入つた。

「今、保とか何とかいつたね。お前の名か。大層立派な名ぢやないか。」

と、僕は男の子の方を向いて言つた。

「ああ、あたいの名だよ。あたいの名はね、ほんとはね、吉高保つてんだよ。」

「お父さんは何ていふんだ。」

「お父さんはね。吉高……えゝと……吉高親父つてんだ。」

「親父なんて名があるか、馬鹿。」

と、僕が言ふと、

「ヤハハイ、ヤハハイ。」

と保をからかひながら女の子二人が賑に笑ふ。
「お前のお父さんはやつぱり貰つてるのか。」
「ううん、もう死んぢやつたんだ。」
保は首を振る。
「死んだのか。」
「ああ……大阪の汽車會社へ出てゐたんだよ……汽車に轢かれて死んぢやつたんだ。」
「ふうん。ぢやお前は大阪で生れたのか。」
「ああ。」
「あたいは京都で生れたんだ。」
と丸い女の子が言ふ。
「あたいは東京で生れたんだ。」
と瘦せた女の子が言ふ。
「保は幾つだ。」
「九つよ。」
「お前は。」

と、京都で生れたといふ女の子に訊くと。

「あたいは十。」

「お前は。」

と、東京で生れたといふ子に訊くと、

「あたいも十。」

「十が随分多いよ。」

と保が言ふ――彼等の仲間には九つから十位のが多いさうだ。

「お前の名は何て言ふんだ。」

と、僕は瘦せた女の子に訊いた。

「おきみちやんてんだよ。」

と、保が横から口を出した。

「さうか。」

「ああ。」

と、お君ちやんは素直に頷く、

「お前は。」

と肥つた女の子に訊くと、保が又口を出して、
「おてちやんといふんだよ。」
「何。おてちやん。」
「おていちやんといふんだよ。」
と小い女の子が直す。
「ああ、おていちやんか。」
お貞ちやんは頷く。
「だつて、みんな、おてちやん、おてちやんていふんだよ。」
二人の女の子は、又聲を上げて、賑に笑つた。
三人はもう餘つ程僕に馴れて來た。病院と何かの家との間の横町を這入つて、つたやの方へ行く時分には、三人が先を爭つて僕に話をしかけるやうになつた――この横町は何だか曖昧な家の多い横町だ。
向うから藝者が二人に客が二人、何か大聲で叫りながらやつて來た。擦れ交ひざまに、彼等は――殊に女達は――凝と僕の顏を見た。それから乞食の子三人の顏を凝と見た。そして僕と乞食の子達を見比べたが、不思議な顏をして、何も言はずに行つてしまつた。

「あのねえ、をぢさん。」とお貞ちゃんが僕の顔を見上げて言ふ。「保さんは今繼親なんだよ。」
「本當のお母さんは足を怪我して、今養育院にゐるんだよ。」
と、お君ちゃんが言ふ。
「お母さんが歸つて來ると、保さん隨分御小遣つかふよ。」
と、おてちやんが言ふ。
「今は繼親だから、隨分ぶたれるよ。」
と、お君ちゃんが言ふ。
「みんな繼親か」
「ううん、おてちやんは本當の親だよ……だから毎晩出ないでも好いんだよ。」
と、保が答へる。
「お前達は小遣を貰ふのか。」
「ああ、日に二錢貰ふよ。」
と、又保が答へる。
「それは豪氣だ。」
「五厘宛四度貰ふんだ……それから夕方出がけに一錢呉れるよ。」

「飯は内で食つて來るのか。」
「ああ。」
「買食ひをするやうなことはないか。」
「買食ひすると叱られるよ。」
「二十錢より餘計に貰つた時は、餘計に貰つただけ買食ひしたつて分かりやしまい。」
「駄目だよ……内へ歸るとね、直ぐ口の端を見るんだよ……何か附いてると、また何か買食ひしたなつて叱られるんだ……この間も大橋でしる粉を喰べて歸つたら、餡粉がここんとこに附いてたもんだからぶたれちやつた。」
と言つて、保は口の端を抑へた。
「何故乞食なんかしてるんだ。辻占でも賣つた方が好いぢやないか。辻占より乞食の方が儲かるか。」
「そりやァ辻占の方が儲からァ。」
と、保は言下に答へる。
「あたいは今に大きくなつたら烟草の工場へ行くんだ。」
と、お貞ちやんは少し得意さうな口調で言ふ。
「あたいは烟草の工場なんかへは行かないんだ。」

と、これも稍得意な調子で、お君ちやんが言ふ。

「ぢや、何處へ行くの。」

と、お貞ちやんが反問すると、

「何處でも好いの。」

と、少し曖昧だ。保は嘲る如く、

「ヤハヤイ、何言つてやがるんでえ。」

と大な聲を出す。

小常磐（こときわ）の臺所では、繩の暖簾の中で、男と女が二三人ごしごしと、何か洗ひ物をしてゐた。もう火を落したらしい。表はひたと締まつてゐた。

そこを左へ曲つて、東友軒といふ球突の前まで來ると、

「おうい、おうい。」

と、後から追かけて來る子供がある。

僕等は構はず電車道へ出ると、その子供はやがて追ひついた。

「やい、よくも手前等おれの邪魔あしやがつたな。腹が立つて、腹が立つてなりやあしねえ。」

と、嗄（しやが）れた聲で、憎ていな口を利くから、振向いて見ると、髮をめちやめちやに毀した、口の大き

い、色の黒い、卑しい顔をした女の子だ。ひどい襤褸を着て、四角な明鑵に眞田紐の古いのを附けて鞄のやうにしたのを肩から懸けてゐる。三人から見ると餘程なりが大きい。三人は、この一人の聲を聞くと、怯えるやうに突立つてしまつた。

時々――ほんの時々――歸りを急ぐ終ひ方の電車が通る。

「をばさんにいつけずにやあ置かねえぞ。ほんとに、ほんとに、腹が立つて爲やうがありやしねえ。」

「だつてお前寢てたから惡いぢやねえか。」

保は小さくても、流石は男だ。ふんといつた調子で、かう言つた。こいつきつと『荷物見たいに』寢てゐた奴に違ひない。

お貞ちやんとお君ちやんとはもう口も利けないで、慄へてゐる。この散ばら髪を餘程ふだんから恐れてゐるものと見える。

「まあさう怒るなよ。お前寢てたから惡いんぢやないか。」

と言ひながら、僕は蝦蟇口を出した。散ばら髪の女の子は凝と僕の手元を見詰めた。

蝦蟇口の中には、もう一錢銅貨が一つしか無かつた。僕はそれをその女の子の手に載せてやつて、

「今夜はそれで我慢しろよ。もう遣りたくも空つぽだ。」

と言つて、蝦蟇口の口をあけて見せた。

散ばら髪は、覗き込むやうにして、蝦蟇口の中を凝と見た。
「さあ、それで好し好し。さあみんな一緒に仲よく歸るんだ。」
と言ひながら、僕が花やしきの方へ眞直に行かうとすると、その散ばら髪が、
「そつちは分署があるから駄目ですよ。」
と言ふ。
「成程さうか。ぢやあ河岸へ出よう。」
「あゝ、それが好いや。」
と、保が言ふ。
僕は四人の乞食の子を連れて、濱の家の前から、俱樂部の前を通る。
「御前の名は何ていふんだ。」
と、僕は今來た散ばら髪に訊く。散ばら髪はもう御機嫌が直つた樣子で、にやにや笑ひながら、例の嗄れ聲で、
「あていかい。あてい、お幸ちやんていふんです。」
流石に大きいだけあつて、時々『です』といふ丁寧な語を使ふ。
「幾つだい。」

「十一です。」

「それぢやァ、お君ちやんやお貞ちやんとたつた一つつきやァ違はないんだね。」

「あぁ。」

「それにしちやぁ大きいなぁ。」

電車道へ曲る所の暗闇に巡査が一人外套を着て立つてゐた。四人は小聲で何か囁き合ふかと思ふと、行きなり聲を合せて歌を唄ひ出した――

チリリンリインとやつて來るは、

自轉車乘りの時間借り、

曲乘り上手と生意氣に、

兩手を放して氣障男(きざをとこ)。

あつち行つちや危いよ、

こつち行つちやひようろひよろ、

そおらあぶないといふ間に、ころがり落つこつた。

勢よく、しかも巧に、この流行歌を唄つた四人は、どうしても乞食の子とは見えなかつた。殊に暗闇だから着てゐる物はよく分からないし、巡査は全く四人を僕の連と思つてしまつたらしい……知ら

ん顏をして河岸の方を向いてゐた。

僕は、こんな時分から「二人をごまかす術」は自然に湧いて來るものかと思つて、それが如何にも可笑しかつた。

無邪氣な歌聲は、一しきり暗い大川の川面に響いた。僕はステツキを振つて好い加減な拍子を取つてやつた。四人は段々浮れ出した。お幸ちやんの爲に一時萎れてゐたお貞ちやんもお君ちやんも、お幸ちやんの機嫌が直つたんで、又はしやぎ出した。中にも保は、

向島、花ざかり、團子の横喰ひ、うで玉子……

といふやうなことを言つて、無暗とそこら中踊り廻る。三人の女の子も、一緒になつて囃す。

矢の福の土塀の外へ來ると、アセチリンの青白い光が、五人の影を眞黑に地へ印した。四人の子供の影の眞中に、一人丈の高い大人の影のあるのを見て、僕は孤兒院の監督でもしてゐる樣な氣がして來た。

思へば、今から八年前だ。つまらぬ事から人生を悲觀して、いつそ孤兒院の監督にでもなつてしまはうかと思つたことがあつた。

併し僕にはまだ全く世が捨てられなかつた。この世に一縷の望を繋いで、未練がましく世に生きて來たばかりに、たうとう僕は乞食のお辭儀を金で買ふやうな人間になつてしまつたんだ。

乞食の子供を四人連れて歩いてるところは、外から見ると、如何にも同情のある人だ、如何にも慈善家だ。併し僕自身からいへば、同情を寄せてるのでもなければ、慈善をしてるのでもない――僕は四人の乞食を僅の金で自由にして、今夜の遊び相手にしてるに過ぎない。藝者を買ふのも同じだ、淫賣を買ふのも同じだ。

僕は一刻と雖自己を思ひたくない、一分時と雖この不快極まる自己を忘れてゐたい。自己を忘れるには一生懸命に遊ぶか、一所懸命に働くより外はない。だから僕は、晝間は一所懸命に働らく。用が無ければ、無理に用を拵へても働く。夜になると一所懸命に遊ぶ、金があれば美しい女の顔を見に行く。金がなければ人形燒の爺さんを相手に遊ぶ。今夜のやうに乞食を相手に遊ぶこともある。

兩國公園の前まで來ると、保は一人連を離れて公園の中へ駈込んだ。暫くすると、口の端を濡らしながら出て來た。水道の水を飲んで來たのだ。餘り騷いだので咽喉が渴いたのだらう。兩國橋へ來た。

「ぢやあもうここで別れよう。」

「をぢさん、あしたの晩も亦來るかい。」

保が訊く。

「さうさな。あしたの事はあしたの事だ。今から分からない。」

「あしたも御出でよ。」

と、おてちやんが鼻を鳴らして言ふ。
「有難う。ぢやア、みんな、さよならよ。」
「さよなら。」
「さよなら」
「さよなら」
保とお君ちやんとお貞ちやんとは、一人一人僕に別を告げた。
「どうもお有難うございます。」
と、戯けるやうに言つたのは、散ばら髪のお幸ちやんだつた。そして、
「をぢさん、今度もおくれよ。今度は二貫おくれよ。」
と、甘えるやうに附加へた。
「ああやらうな。」
四人は笑ひながら、鐵の橋を本所の方へ渡つて行つた。

その晩を手初めとして、その後時々僕は明治座前を訪問した。
二人ゐることもあり、三人ゐることもあり、四人ゐることもあるが、いつでもきつとゐるのは保だ。

僕はすつかり保と仲が好くなつてしまつた。

僕は夜の遊び場處が一つ殖えたんで、一時は非常に喜んだものだが、この頃はこれにも少し倦きて來た。

保は錢ばかり欲しがるから厭だ。たまには金錢以外の交際もして貰ひたいぢやないか……

近い內、又何處かで新奇な遊び場處を見つけたいものだ。

不思議

玉天齋は別に不思議な事をするのではない。

中入前に『羅馬の取寄』と稱する誰にでも出來る奇術を一つやれば、それで一晩の職務は濟むのである。

高座の background に黑い幕を一面に張る。その黑い幕の眞ん中に大きな額縁を裏返しにしたやうな眞新しい木の框を吊る。框の中には何もない、後の黑い幕が黑く見えるばかりだ。

それから、木の框の上に石蠟を十四本列べて點ける。高座の鼻へ二十三本石蠟を列べて點ける。幕を明けて、口上を濟ますと、電氣をみんな消してしまふ。

玉天齋は木の框の中の暗い所から、客の好む品物を何でも出すのである。

併し、それに不思議はない。

玉天齋は總ての客に紙片を配つて、望みの品物を書いて貰ふ。それを高座へ持つて來て、一つ一つ讀む。讀んでしまふと、その紙片を固めて置いて、一摑み摑む。そしてそれを茶壺に臺をつけたや

うな黄色い鑵へ納つて蓋をする。直ぐ蓋を明けると、その鑵から紙片を一つ一つ取出して客に讀ませる。客の讀むに從つて、品物を一つ一つ出すのである。

出る物はいつも極まつてゐるのだ。そしてそれだけの物はいつも樂屋に用意してあるのだ。出すに極まつてゐる品物の名は豫め紙片に二通り書いて置く。その一通りは玉天齋が隱して持つてゐて、客の書いた紙片を讀む時に、それを一緒にまぜて讀む。他の一通りは例の鑵の二重蓋の内に隱してある。一度蓋をして明けた時は、樂屋で書いた紙片だけが殘るやうに仕掛けてある。

それからはもう樂なものだ。

用意してある品物を、樂屋の芳爺が一つ一つ黑い幕の間から出せば好いのだ。見物は框の上の蠟燭の光と、高座の前の蠟燭の光とに眼を欺されて、品物が宙に浮いて出たやうに思ふ。

出る品物は大抵どこの席でも同じだが、場所の便不便によつて多少の相違は出來て來る。端書、胡瓜、惠比壽ビィル、薪一把、紙屑籠、急須、蒟蒻、粟餅、煎餅、奴豆腐、澤庵などはいつも動かぬ所である。外に『浴衣の反物』といふと『觀音様の白鳩』といふのを大抵出す。この二つに大抵な客は感心してしまふのである。

玉天齋は手品師でも何でもない。今言つたやうに、品物の受次を毎晩やつてれば、それで好いのである。併し、出た品物は景物として、寄席から客に進呈する事になつてゐるので、何處でも中々人氣

がある。

玉天齋は今まで一度も東京の眞中の寄席に出た事はない。左柳といふ『怪談ばなし』を眞打とする一座に附いて、千住、澁谷、品川、佃あたりを打つて歩いてゐるのだ——左柳は『お茶の水のおこの殺し』といふやうな古臭い新聞種を、いつも高慢な顔で話してゐる。

玉天齋の前身については誰も知る者がない。この一座に一番古くから附いてゐる樂屋の芳爺の話によると、今から三四年前、左柳が埼玉あたりを打つて歩いてゐる時に、勘定方を兼ねて拾つて來た役場の書記の古手だといふ事だ。

玉天齋はもう五十幾つといふ年だ。頭が禿けてゐる、その禿げが赤黑くてかてか光つてゐる。口が大きい、鼻が赤い。手足が頑丈に節くれだつてゐる。十二になる色の白い黑目勝な娘と、二十三になる體のひよろ長い目の濁つた甥と、かう三人で、この一座に加はつてゐる。

玉天齋は不思議といふ事を知らない男だ。子供の時からどんな事に出會しても不思議だと思つた事はないといふ話だ。

その玉天齋にも一度不思議があつた。

それは左柳に拾はれて、俄拵の手品師になつた時の事だ。敎はつた『羅馬の取寄』は少しも不思議ではない。餘りに當り前だ。玉天齋はばかばかしいと思つたが、まあ試しにやつて見た。

すると見物がしきりに感心する。『えれえ手妻だ。』とか、『てえした魔術だ。』とかいふ囁きが方々で起る。

玉天齋は生れて初めて、『不思議だなア。』と思つた。『こんなつまらない事がどうして不思議なんだらう。誰だつて出來る。誰だつて分かる。何處に不思議があるんだ。こんな事を見物が不思議がつてゐるのは不思議だ。』

併し、その不思議感も段々に鈍つて來た。この頃ではもう見物が不思議がるのを當り前だと思ふやうになつた。見物といふものは何をしても不思議がるものだ、不思議がらなければならぬものだと思ふやうになつた。從つて自分も天晴一角の手品師になつたやうな氣がして來た。自分で自分を何か非常な不思議でも行ふ人のやうに思つて來た。天地の一大祕密を握つてゐるのは俺だといふやうな氣にもなつて來た。

ところがその玉天齋に近頃又第二の不思議が起つた。

怪談ばなしの左柳は、東京の時代に遲れたので、近在廻りを始めたのだが、近在では何處へ行つても景氣が好いので、又東京が戀しくなつて來た。

「俺のやる事を時代遲れだなんていふが、何が時代遲れなもんか。近頃奧山でやつてる實物應用活動

寫眞なんて物は、つまり俺の式を眞似たものぢやねえか。俺は何も遲れたのぢやあねえ。飽きられたんだ。藝人といふものはきつと一度は飽きられるもんだ。褒めるのが熱ぼりなら、飽きるのも熱ぼりだ。熱ぼりがさめた時分に歸つて行きやあ、又人氣が出て來るに相違ねえんだ。」

こんな事を考へた。

「こんなに此處いらぢやあ入があるんだ。東京にだつてまだ少しは話せる奴もあるだらう。」

こんな事も考へた。

左柳は一座を連れて、久しぶりで東京の土を踏んだ。そして人形町附近の或小さな活動寫眞の小屋を借りた。前を電車が通る。護謨輪の人力が通る。自動車が烟を立てて走る。角には自働電話もある。ここへ『怪談ばなし大魔術左柳一座』といふ立看板を出した。

『大魔術』といふのは、玉天齋がやる『雞馬の取寄』の事だ。

初日は一向客が來なかつた。併し、それはまあ初日だからといふので、誰も氣にしなかつた。

ところが二日目もやはり客が來なかつた。併し、その日は又近所に緣日があつたから、その方へ取られてしまつたのだと、みんなまあさう思つた。

さて三日目の中入前にもなつた。

玉天齋は娘が高座鼻の蠟燭と木の框の上の蠟燭を點け終るのを待つて、幕を上げさせた。

玉天齋は縁取の古びたフロックコオトを着て、例の鑵が載つてゐるテエブルの前に立つた。右手にモスリン仕立の熨斗目に小倉袴を穿いた娘が立つてゐる。左手に鼠つぽい筒袖に古びたモスリン袴を穿いた甥が立つてゐる。

玉天齋は口上を言ひ始めた。

「えゝ、私のところおは、『羅馬の取寄』と申しまして、お客様お好みの品物を御眼前に於きまして……。」

やッぱり今日も客が薄い。

『併し、俺が遣つてる内には、段々遣つて來るだらう。ゆうべも俺の時分には大分詰めかけて來たからな。何しろ澁谷では毎晩滿員だつたんだ。さう來ないといふ道理がないて。』

こんな事を考へながら、玉天齋は獨でに口を滑つて出る暗誦的な口上を續けた。

「……さう致しまして、その出ましたる品物を福引にして皆樣に差上げるのでございまする。しかもその内二三品はお宅へ歸つて御覽になりますると、ここから持つてお歸りになつた品物とは丸で違つてゐるのでございまする。昨晩もバケツの積りでお持ち歸りになつたのが土瓶の弦になつてをつたり、

鍋の積りでお持ち歸りになつたのが輕石になつてをつたり致したさうでございまする。」

これは嘘だ。この嘘は玉天齋が一二ヶ月前から用ひ始めたのだが、大分樂屋の評判は好い。

娘と甥が紙片と硯箱を持つて客に望みの品物を書いて貰ひに歩いてゐる內に、玉天齋は一度樂屋へ引込む。そして服を着換へる。

詰襟で、袖の細い、胴の締つて裾の開いた、西洋の坊さんが着るやうな服の、しかも茶色にぼけたのを着て出ると、もう娘と甥が集めて來た紙片をテエブルの上に山にしてゐる。

玉天齋はも一度客席を見廻した。やはり薄い。玉天齋は少し不思議になつて來た。

「ええ、先つ第一が『洋服』、次が『天どん』、お次が『唐茄子』、それから『ハンキツ』。これはハンケチでございませうな……」

玉天齋は客の書いた紙片を讀み出した。子供のが多いから中々讀みにくい。

「『金魚五疋』『木枕』『靴』『玩具の汽車』。なに、『奴豆腐』か……」

などと、さも驚いたやうに自分の樂屋から持つて來た紙片をまぜて讀む。

「『シヤツ』『烟草盆』『行燈』ええ『親父入れるよな火消壺』……」

客が笑ふ。

玉天齋はちよいと客の方を見る。やはり薄い。

『机』『時計』『うどん』『蒟蒻』『巻烟草』『觀音樣の白鳩』……」

玉天齋は態と困つたやうな顏をする。客はその困つたやうな顏を見て喜ぶ。

紙片の山から一掴み掴んで罐に入れると、一度蓋をして、直ぐ蓋を取る。

娘はそれを持つて客席に降りる。

電氣を消させる。

漂ふやうな、『昔』を思はせるやうな蠟燭の光の中に、玉天齋の禿頭と茶色の服がぼんやり見える。

娘は客に一一紙片を見せた後、自分でその品物の名を讀む。甲高な、嗄れた、悲しい聲だ。

玉天齋は先づ品物の名を樂屋へ聞えるやうに大な聲で言ふ。それから、鞭を振つて身を捩りながら、出鱈目な呪文を稱へる。

木の框の中へ朦朧と現れる品物を、玉天齋は物をちぎるやうな手附で一つ一つ取つて來て、高座の鼻へ列べる。端書、胡瓜、惠比壽ビイルなど、例の通りである。

『觀音樣の白鳩』といふ時は、本當に白い鳩の足に赤いリボンの結んであるのを出す。そして、

「ええ、これは觀音樣のでございまするから、觀音樣へお返しを致さなければなりません。でございますから差上げるわけには參りません。」

かう言つて、樂屋へ逃がしてしまふ。

『浴衣の反物』といふので、出る物がお終ひになると、電氣を點けさせて、蠟燭を消す。それから客の持つてゐる木戸札の裏に書いてある番號に依つて、出た物を配る。

やはり客が薄い。さつきから一向殖えた樣子がない。景物を配る段になると、澁谷や千住あたりでは大騷動だつた。ところがここでは一向靜かだ。澤庵が配ばられても、蒟蒻を持つて行つても、一向騷ぐ者がない。

玉天齋はつくづく不思議になつて來た。

高座を降りると、服を脫ぎながら、氣の重さうな顏をしてゐる眞打の左柳に聞いて見た。

「師匠どうしたんでがせうな。」

「客かい。」

「はい。」

「田舍者ばかりへえり込んで來やがつたんで、分かる奴がゐなくなつたんだ。話をしてゐても、急所がちつとも堪(こた)へねえ樣子だ。」

「分からないのでがすかな。」

「以前の東京(とうけい)はかうぢやあなかつた。」

「はい。」

「江戸が滅びたやうに、又東京も滅びるんだ。」

「かう來ないといふのは不思議でがすな。」

玉天齋は體の汗を拭いて、白地の浴衣に着換へると、夏羽織のぺらぺらしたのを引掛けて、木戸へ第二の務を果しに行く――上がりを勘定しに行くのである。

幕が明いて、左柳が『お茶の水おこの殺し』を讀み始めた。

左柳の膝の前には眞黑な臺のやうな箱のやうな物が置いてある。その臺のやうな箱のやうな物の左の端と右の端に黑く塗つた四角い筒のやうな物が立つてゐて、その筒のやうな物の上に蠟燭が一本づつ點いてゐる。

客席の子供達は今まで一度も見た事もない物を見るといふやうな顏をしてゐる。左柳はさういつた子供達に向つて、しきりに入のない愚痴やら厭みやらを零してゐる。

玉天齋は木戸へ行くと、木戸札を調べて、その晩の上がりを算盤で寄せて見た。現金と引合せて見た。ちやんと合ふ。

併し、どうも上がりが少ない。あの位方々で評判を取つた一座が、どうして此處ではこんなに客を呼ぶ事が出來ないのか、それが玉天齋には不思議でならない。

左柳の上さんが上がりを取りに來た。丸髷に結つて、薄化粧をした、瘰癧(るゐれき)の跡のある、若い女だ。

「不思議でがすなあ。」
玉天齋は金を渡しながら小聲でかう言つた。
「何が。」
「かう客が薄いといふのは、不思議でがすなあ。」
眞面目な顏をして、同じ事を又丁寧に言ひ直す。
「へん、誰が來るもんかね。」
と、左柳の上さんは苦い顏をした。
玉天齋は愈々不思議で堪らなかつた。

高座は今青白い光で照らされてゐる。左柳は毛の長い鬘を冠り、頸に長い髯を釣つて、松平紀義の聲色を使つてをる。
電車の通る音や、護謨輪のベルの鳴る音が、しつきりなしに外に聞える。
玉天齋の第二の不思議は、いつになつたら鈍るだらう。

歸り道

その時分私は巣鴨の伯父の所に厄介になつてゐました。伯父の家は乳屋で、牛も七八頭は飼つてゐました。家の周圍はずつと野菜畑で、薩摩芋だの人參だのジャガ芋だの牛蒡だのが作つてあるのです。あなた方はまだジャガ芋の花を見た事がありますまい、眞中が黄色くて周圍が白いあの水仙のやうな美しい花は、毎朝どんなに私の忙しい心を慰めて呉れたでせう。野菜畑の南には雜木林があつて、その木の間からは監獄署の赤煉瓦がチラ〳〵見えるのです。それが又如何にも平和な景色で、一度散歩して、あの嚴めしく大きな、そして潜り戸の低く小さい黒い鐵の門を見た時までは、どうしてもあの綺麗な塀の中に恐ろしい苦役があるとは思へませんでした。

毎朝牛小屋の後の井戸端で顔を洗ひながら見る監獄の赤煉瓦は、始終私に正直と勤勉とを忘れさせませんでした。私は毎朝井戸車に釣瓶繩の軋るやうな牛の鳴き聲でいつでも眼を覺ますのです。それは大抵午前の五時でした。その時分もう家は空ッぽで、殘つてゐるのは若い伯母と四つになる男の子許りでした。伯父は朝の三時頃から、『養神舍』と書いた提灯を點けて、縁を赤く塗つた袖珍の新約聖

書を印半纏の懐へ入れて、男達と一緒に都へ乳を配達に出るのです。

私は顔を洗ふと、絞り立ての乳を一合ぐつと飲んで、伯母が手製の佛蘭西パンで朝の食事を濟ませるのです。それから直ぐ寢間着を一張羅の紺の背廣に着換へて、赤いズックの靴で冷たい朝の土を踏みながら都へ出掛けるのです。

私は日本橋駿河町の或呉服店へ出てゐました。この呉服店は先づ日本一と言つても恥づかしからぬ呉服店で、今日ではデパアトメント、ストアもすつかり出來て實に大したものになりました。その時分はまだそれ程でもありませんでしたが、それでも外の呉服屋に率先して洋服部が出來てゐたので、私はそこへ通ふ事になつてゐたのです。ちやうど伯父が北海道にゐる時分、私も向うへ行つてゐて、札幌で或獨逸の婦人に道樂半分洋服の仕立を三年許り教はつたのが、東京へ來て糊口の道になつたのです……巣鴨の乳屋から駿河町の店へ出ると、世界は實に雲泥の相違で、自分も一生懸命に勉強して早く立派な店を持つやうにならなければ駄目だと、いつも然う思つたものです。

その時分はまだ巣鴨まで電車がありませんでしたから、本郷四丁目まで歩かなければなりませんでした、私はお天氣だと埃が立つし、雨だと泥濘のひどい、あの板橋街道といふ奴が大嫌ひでしたから、宮下町から西丸町、西丸町から原町、原町から西片町と、裏通り裏通りをよつて、大學の前まで出るやうにしてゐました。毎朝きつと原町の八百屋の前で青く塗つた箱車を引いて町から歸つて來る伯父

に會ひました。伯父はきつと片手に車の梶棒を握りながら、片手に小さな聖書を廣げて、それを讀みながら歸つて來ました。八字髯に印半纏といふのが既に可笑しいのに、それが木を讀みながら車を引いて來るのですから、この邊ではもう有名なもので、近所の子供などは伯父の姿がちよいと遠くに見えるが早いか、「やあ、髯の乳屋さんが又來たよ。」などと叫つたものです。けれども伯父は一向平氣なのです。私に會ふといつでも、「遲れないやうに早く行き給へ。」と言ひますが、それもそれつ切りで、直ぐ又聖書に眼を落して、ガラガラ車を引きながら行つて了ふのです。私はどの位この伯父に勵まされたか知れません。

家を出てから西丸町に掛るまでは、まだその時分は家もあんまり有りませんでしたし、畠や野原に四季折々の移り變りも見えて、實に好い道でした。

家を出ると直ぐ右手の小高い畠の中にノアの箱船でも見るやうな家がありました。柔術か擊劍の道場でもあるやうな木造の細長い建物で、所々に高く窓が開いてゐるのです。そして玄關の丁度上に物見櫓のやうな小さな二階が附いてゐるのです。汽車の機關車の烟突を見るやうに、先の方だけがヒヨコンと持上つてゐるのです。英語のLといふ字に似た建築なのです。曲尺(かねじやく)を横にして立てたやうにも見えるのです。

この妙な家に妙な人が住んでゐました。昔亞米利加で二十何年學問をしたとかいふ豪い學者で、時

時基督教に莊子とエマァソンとを加へたやうな宗教上の說を小さな本に印刷して、知つてる人にだけ配つてゐました。決して賣るのではないのです。伯父は時々この學者を訪問して、よく然う言つて本を貰つて歸つて來ましたが、その本は迚も私共には分らないやうな難しい文章で出來てゐました。

この學者はその時分もう六十幾つでしたが、私は一度もその姿を見る事が出來ませんでした。私などと同じやうに朝早く都へ出て、日が暮れてから家へ歸るのださうですが、每日東京へ何をしに行くのか、それは家の人も知らないのださうです。勿論唯遊びに行く譯はないのですが、さりとて學校の敎師になつてゐるといふ譯でもないのださうです。唯フラリと出てはフラリと歸つて來るのださうです。歸つて來ると直ぐ物見櫓のやうな二階へ閉ぢ籠つて頻に何か勉强するのです。私は夜家へ歸る時によく、この箱船の物見櫓に燈の點いてゐるのを見ました。

道場のやうな所には誰も住んでゐるのではないのださうです。或時或田舍の靑年が、この學者の名を聞いて、弟子にして吳れと遙々尋ねて來た事がありました。學者は直ぐと許して、靑年をその道場のやうな所に寢かしたさうです。丁度十二月と一月の間で筑波颪が寒い寒い時分でした。靑年は幾日かその廣い寒い道場に寢ましたが、とう〳〵七日目に逃げて了つたさうです。寒い風が吹き通すだけなら未だしも、雨が降ると遠慮もなく洩るのださうです。

學者の家の人は一人もこの箱船には住んでゐないのです。直ぐ隣に當り前の日本の家を建てて、そ

こに住んでゐるのです。賄なども全く別で、學者は例の二階へ何もかも持込んで、そこで自炊をして暮らしてゐるのださうです。

この不思議な家の前を通つて少し行くと、一萬坪許りの明き地がありました。夏の初めにこの明き地の側を通るのは、私の樂しみの一つでした。野生の雜草が思ふ儘に生え延びて、天然の芝生のやうに見えます。この原の緑は如何なる緑にも優つて美しく見えました。唯美しいと言ふ許りではありません、凡そ緑といふ色なら如何なる種類の緑もこの原に含まれてゐるやうに見えたのです、それ程この野原には數多くの草が生えてゐました。

花も美しいのが澤山に咲きました。小さいのでは、白い天鵞絨で拵へて黄色の繪の具をちよいと附けたやうな鷺苔が、私は好きでした。踊子草も色は映えませんが、形が面白いと思ひました。小豆色の羅紗かフランネルを切つて、あの花の形を拵へて見ようとした事も度々ありましたが、中々巧く行きませんでした。露草の花も色の調子が如何にも好くて私は好きです。淺黄とか瑠璃とかいふ色は、日本では得て卑しくなるものですが、露草のは如何にも品が好く行つてゐます。この外、鳴子百合といふ象牙で出來たやうな花もありました。浦島草といふ西洋のパイプのやうな花もありました。

この明き地を通り越すと、兩側が桃畑で、道の左右に大きな櫻の木が並んで植わつてゐる所へ出ます。この間は凡そ二町許りでしたが、兩側から櫻の枝が生ひ被さつてゐるので、自然のトンネルのや

うになつてゐました。近所でもこゝの事をみんな『櫻のトンネル。』『櫻のトンネル』と言つてゐました。

櫻のトンネルの下を通るのも、私にとつての愉快の一つでした。若葉青葉の時分の生き生きした緑の反射も然うですが、冬の夜店から歸る時分に、悉く葉の落ちた細い枝と細い枝とが、複雑なレエスを見るやうに、透き通つた空に交り合ひ縺れ合つて見えるその奥に八日位の月が寒く光つて見える景色などは何とも言へませんでした。

桃の花の盛りに、兩側の櫻の幹を通して、それを眺めるのも一興なのですが、私は自分が餘り桃を好かぬ勢か、それ程にも思ひませんでした。やはり好かつたのは櫻の花の盛り時分です。朝櫻の心地好さは、一度向島か荒川の堤を朝早く歩いた事のある人は知つてゐる筈です。もう咲いた花も、まだ咲かぬ蕾も、みんな露を含んで、微風にハラリ――ハラリと間を置いて散る雫が桃色に光つて見えるのも朝です。小鳥が囀りながら櫻の中を潜り抜けると冷たい花瓣が二つ三つ落ちて來て、頬だの手の甲だのにヒヤリとするのも朝です。

併し私は夜が一番好きでした。月夜の美しさは誰でも知つてゐます。薄曇りの夜、櫻のトンネルの下を通ると、蓋ひ被さるやうになつた花の團りが、雲のやうに、また綿のやうに見えるのです。花の光で四邊が桃色に明るく見えるのです。そしてトンネルの途中まで行くと、何とも言へぬ溫かい氣が、

頭から私をふうはりと包みます。私はそれを薄桃色の練絹のエエルでも被せられるやうに感じたものです。

或春の事。さう言つた薄曇りの晩が幾日か續いた時に、私は毎晩のやうにこの櫻のトンネルの中で不思議な年寄の夫婦に會ひました。私がこのトンネルに掛るのは大抵夜の十時でしたから、場末の事ではありますし、もう人通りは絶えて無いのです。

薄暗いので好くは分りませんでしたが、夫婦は何れももう六十位で、お爺さんもお婆さんも髮の毛が眞白でした。併し二人とも腰はまだシャンとして少しも曲つてゐないのです。お爺さんはいつでも汚いチャンチャンコを着てゐました。お婆さんはいつでも可愛い赤ん坊を搔卷で負ぶつて、大事さうに兩手を背中へ廻してゐました。

始めはこんなに夜遲く何處へ行くんだらうと思ひましたが、毎晩々々會ふので、遠くへ行くのではないと言ふ事が分りました。段々氣を附けますと、何處へと目的があつて歩いてゐるのではない樣子なのです。どうも唯散歩でもしてゐるやうな樣子なのです。

お爺さんとお婆さんは、いつでもトンネルの奧の方から低い聲で、ゴトゴトゴトゴトと頻りに何か話しながら出て來るのです。私が段々近づくと、段々聲が低くなつて、私が眼の前へ來るとぱつたり話を止めて了ふのです。さて擦れ違つて、私が段々二人を遠ざかると、またゴトゴトゴトゴトと話を

始めるのです。その話が如何にも綿々としてゐて、夜が明けても日が暮れても、明日になつても明後日になつても盡きさうもない樣子なのです。

夜夜中に、生れてまだ誕生にもならぬ程の赤ん坊を背負つて、六十にもならうといふ年寄夫婦が散步をしてゐるのですから、何か譯があるに違ひないと私は思ひました。私はどうかして二人の話を聞きたいと思ひましたが、それはどうしても駄目でした。二人は私の姿を見ると、言ひ合してでもあるやうにきつと默つて了ふのです。そして私が十分擦れ違ふのを待つて、私の後で話を始め出すのです。さうかと言つて、まさか後戾りをして後から話を聞く譯にも行きません。私はこんな餘計な事で大分頭を痛めました。氣になつて氣になつて仕方がなかつたのです。

或晚歸りのいつもより遲くなつた事がありました。麴町の或大使館にファンシイ、ボオルがあるので、在留外人のお得意から埃及風だの土耳古風だの希臘風だのの衣裳の注文が一度に來たので、コスチウムの歷史を調べたり何かしてゐた爲に、いつもより一時間許り店を出るのが遲かつたのです。

何の氣なしに櫻のトンネルへ掛りますと、年寄夫婦が私の直ぐ前を步いてゐるのです。いつもは向うからこッちへ向いて來るのに、この日は私に背中を向けて、私の行く方へ步いて行くのです。私の時間が遲かつたので、丁度二人の歸る所にぶつかつたのです。私は巧い機會を得たと思ひました。

二人は相變らずゴトゴトゴトゴトゴト小さな聲で話しながら行きます。お婆さんの搔卷から色の白い首

を出した赤ん坊は、櫻の花の薄白い光を眞面に顔へ受けてすや〳〵とよく眠つてゐる樣子です。お婆さんは痩せた白い手で赤ん坊のお尻の所を抱へるやうにして、心持身體を左右に搖りながら歩いて行くのです。お爺さんは下駄を引摺るやうにして歩きながら、自分の前をぢッと見た儘、お婆さんの顔も見ずに、何かゴトゴト言つてゐます。

私はそつと跫音を盗んで、氣の附かないやうに、段々二人の側へ近づきました。トンネルの途中まで來ると、私はもう年寄の直ぐ後へ來ました。

話が聞えます。斷々ですが聞えます。

「何處へ行つたらう。」

「何處へ行くものかね。あの赤い煉瓦の中にゐるのさ。」

「今頃は何をしてゐるだらう。」

「生んだ子供の夢でも見てゐるだらう。」

「子供に罪はないな。」

「子供に罪があるものかね。」

「情と情とが縺れ合つて子供が出來たんだ。娘も無けりや、あの男も無い。」

「だから子供は綺麗だと言ふのさ。この子は惡者の子ぢやない。誰の子でもない。美くしい情の中か

ら生れた子だよ。天の子だよ。」
「あんな惡い男だつて、娘を思つたのは本當に思つたんだ。當り前の人間に負けない位娘を思つて吳れたんだ。」
「娘が又あの男を思つたのにも無理はないよ。あの男の商賣が分つた時、娘が思ひ切つたら、鐵の門の中へは這入らないで濟んだかも知れないのだよ。その代り一生情のない女にならなければならなかつたんだよ。」
「情のない女だと。情がなけりやあ女ぢやない。」
「だから女でなくなる所だつたと言ふんだよ。地獄のやうな所で、男のやうに働いてゐても、娘はやつぱり女だよ。」
「女でゐて吳れ、いつまでも女でゐて吳れ。お前が殘した情の固まりは俺達がいつまでも……。」
お爺さんは涙聲になりました。私にはまだ十分樣子が知れませんでしたが、何となく誘はれて胸がドギドギして來ました。覺えず石に蹴躓きますと、年寄夫婦はびつくりしたやうに私の方を振返りましたが、それつきりもう何にも言はなくなつて了ひました。
私は少し極りが惡くなつて、急いで二人を追ひ越しました。トンネルを出て、明き地を通り越すと、振り返つて見ました。二人はやつぱり後から歩いて來ます。

私は又歩き出しましたが、例の箱船のやうな家を通り越すと又振り返つて見ました。二人は段々箱船のやうな家へ近づいて來ましたが、やがて姿が見えなくなりました。

箱船へ這入つたのか、住居の方へ這入つたのか、それは好く分りませんでした。まさかそのお爺さんが例の學者なのではありますまい。使はれてゐる爺さんか何かなのでせう。併し、それにしては言ふ事が少し深過ぎました。

家へ歸つて考へて見ると、二人の話はほんとに二人がしてゐた話なのか、自分の耳の中にひとりでに湧いて來た話なのか、分らなくなりました。二人の姿も夢のやうで、實際あゝいふ人が歩いてゐたのかどうだか怪しくなつて來ました。總てが夢のやうなのです。

その晩きり年寄夫婦は櫻のトンネルに姿を見せなくなりました。祕密の袋は少し口を發けて又口を閉ざして了つたのです。

併し私にはその晩の事が忘れられませんでした。正直と勤勉との外に世界はないと信じてゐた私もその晩からはまだ外にも世界があるなとつくづく思ふやうになつたのです。

トンネルの櫻が散り始める時分、私はそこを通りながら、いつも年寄夫婦の身の上を思ふのでした。年寄夫婦と赤ん坊との關係は、いつまで經つても分りませんでしたが、二人が花曇りの夜に取り交した語の斷片は深く私の頭に彫りつけられて了つたのです。

サラサラサラサラサラサラと限りもなく降つて來る花の匂に包まれながら、私はそれから毎晩のやうに、『情（じやう）の世界』を思ふのでした。

近所

こんな風に家作の立込んだ所ですから、斯う遣つて夜延をしてゐますと隨分面白い事がありますよ。晝間の事は、まア全く知らないと言つて好いでせう、註文取りか、誂物の出來上つたのを納めに大抵朝から出歩いてゐますからねえ。

夜だけなんです。夜、まア六時頃から十二時乃至一時頃までなんです。斯う遣つて一人で仕事をしながら坐つてゐますと、獨りでに色んな事が耳に這入つて來るんです。

でも、たゞ聲だけや音だけでは何の事だか分らない事があります。然ういふ時は、明くる朝起きてから、下のお袋に訊くんです。昨夜これ〳〵の聲がしたが、ありや一體如何したんだらう、といふ風にね。すると、お袋は近所博士ですから、一々それに註解を加へて吳れるんです。

勿論お袋の註解は、この頃雜誌によく書いてある『誇張に過ぎた』ものなんで、決して正しい解釋ぢやないんです。それでもそのお蔭で、丸つきり分らない事が朦朧でも時々當りのつく場合があるから不思議です……

この直ぐ前の家はね。東京でも名うての刑事さんの家です。もう可なりな年輩な人で、新聞などに書かれる時は、いつでも『日本橋區の老刑事』です。何でも『手先』とか『岡ッ引』とか言はれた時分から、この職をとつてゐた人で、大柄な、骨節の逞しい、聲の太い、丈夫なお爺さんです。朝早く錢湯で時々會ひますがね、脊中に水滸傳の剳靑が一ぱいしてあります。

上品な小柄なお神さんと、眼の丸い、色の白い、愛くるしい娘さんと、親類の者だとかいふ、無口な田舍出の書生と、それに主人を併せて四人暮らしですがね。然ういつた商賣――絶えず生死の境を潜るといつたやうな職――をしてゐる人の内にも似合はず、家庭は羨しい程平和なんです、圓滿なんです。

主人は大の鳥好きでしてね……まア今度晝間入らした時に、一寸覗いて御覽なさいまし、色んな鳥がゐますから……丸で鳥屋です。私などは毎朝、前の家の鳥の聲で眼が覺めるんです。澤山の小鳥が、美しい聲を合せて囀るんでせう、それはそれは好い心持に眼が覺めるんです。

その鳥を一羽一羽、みんな刑事さんが世話をするんです。泊り番の明くる朝は、ちやんと娘さんが阿父さんの代理をするやうになつてゐるんです。ですから鳥は娘さんとも仲が好いんです。中にもあの九官鳥ですね――人の眞似を好くする。あれと娘さんとは殊に仲が好いんです。娘さんが一寸でも外へ出て、内にゐないと、「お文ちやん……お文ちやん……」と、金切聲を上げて、呼び續けに呼んで

ゐます。

でも、やつぱり刑事さんの家らしい所はありますよ。主人が泊り番の日には、五時頃になると、もうすツかり戸締りをして了つて、中で娘さんが講談物か何か讀んでるやうな聲がしますがね。然うい ふ晩に限つて、必と誰か前の家を訪ねて來るんです。訪ねて來た人は、まア誰しも先づ「今晩は」と言ひます。すると中では本を讀む聲が礑と止んで、急に寂寞して了ひます「今晩は……今晩は……」といふ聲が暫く續いても、中では一向返事をしません。やがて外の人は、戸を叩き始めます。ドン、ドン、ドンと戸を叩きながら「もうお休みですか……今晩は……今晩は……」と又これを何遍か繰返します。割れるやうに戸が叩かれて、哀願するやうな「今晩は。」が、段々調子高になつて來ると、漸く中からお神さんの細い聲がして、「誰方です。」と訊くんです。私はこれ〳〵の者だが、旦那はと訊く聲がすると、今夜は泊り番だから、署へ行つて下さいと言ふ聲が中でするんです。すると訪ねて來た男は、大抵ピョコ〳〵頭を下げて、禮を言ひながら歸つて行きます。車に乘つて急いで來て、車を返して歩いて歸つて行くのがあります。車に乘つて來て、車を待たしといて、又車に乘つて歸つて行くのがあります。歩いて來て、駈けて歸つて行くのがあります。駈けて來て歩いて歸つて行くのがあります。色々ですよ。斯ういふのが泊り番の日には必と二つか三つ來るんです。こなひだの晩なども、中洲のハゲ富とかいふ男が遣つて來ましてね、「あツしは中洲のハゲ富でござんすがね……旦那に是

非一寸御目にかゝりてえんで……」なんてね、何だか頻に泣き聲を出してゐましたッけ。やッぱり中で返事をしないもんですから、頻に心細がつてね、幾度も幾度もその『ハゲ富』を繰返すんです。實に可笑しうございました……凄いのは、戸を叩いても叩いても中で寂寞してゐて一向返事をしない間ですね。

刑事さんが晩家にゐる時は、之に反して、いつでも大陽氣です。夏などは窓も這入り口も開けッ廣げで、電燈のカン〳〵點いてる下で刑事さん大肌脱ぎの大胡坐で、娘さんを相手に遲くまで酒を飲んでゐます。時々破れるやうな笑聲が近所中に聞えるのです。

刑事さんが内で酒を飲んでゐる晩には、三度に一度位、必と印半纏を着た男か、黒い襟の掛つた半纏を引かけた男が遣つて來てゐて、刑事さんの前にぎごち無さゝうに畏りながら何か頻に叱られてゐます。併し斯ういふ時の刑事さんの聲は、不斷と違つて馬鹿に優しいんです。男は大抵首を下げて、默つて刑事さんの言ふ事を聞いてゐます。娘さんは阿父さんにお酌をしながら、必と可愛らしい眼に涙を溜めて、若い遊び人の顔を凝と視てゐます……

刑事さんの隣は長唄の女師匠の家です。まだ若い人ですがね、鞘町の弟子では中々好い方なんださうです。子供八分ぢやありますが、お弟子さんも中々あります。有福だと見えて、よく盜賊が掛りますよ。御亭主は二三軒芝居を持つてるッケ師ですがね、先生中々氣難し屋で、毎晩のやうに夫婦喧嘩で

す。晝間は子供達の「曾我の五郎時致が……」だの、「こちら向かせて、引き寄せて……」だので散々惱ませられるし、夜になつて漸く靜になつたかと思ふと、今の一件が始まるんでせう。近所は堪つたもんぢやありませんや。その癖、ひどく仲が惡いのかと思ふと、然うでもないんですねえ。御亭主は朝早くから起きて、飯焚から掃除から一切自分一人でするんです。そして好い加減そこらの片附いた時分でなければ、決してお上さんを起さないんです。月に一度の休には、必と夫婦で何處かへ遊びに出掛けます。去年の夏などは二人で京大阪まで見物に行つたさうです。それでゐて喧嘩が絶えないんだから面白いぢやありませんか。内のお袋などの註解によると、男が燒餅燒だからだといふんです。成程、然ういへば、こなひだも一寸そんな事がありましたよ。先生の出てゐる或大芝居の頭株の役者の息子で、親父に負けない大連を持つてる人氣者の青年役者があるんです。ツケ師先生これに勸めて、自分の內へ唄の稽古に來させたもんです。自分が勸めて稽古に來さして置きながら、どうも上さんと怪しいとか何とか言ひ出して、何でも一晩大喧嘩をやりましたよ。結局、又自分でその青年役者に來て貰ふのを斷つたとかいひます。隨分面白い男ですよ。喧嘩になると、必と「お前は强情だ。お前は强情だ。」と言ふのが癖でしてね、この「お前は强情だ。」が一聲聞えると、近所では「そら又始まつた。」と言ふ位なもんです。それでも人に聞かれて餘り好い氣持はしないものと見えますね。その役者問題で大嵐のあつた明くる朝、錢湯で會ひましたからね。「昨晩は大分御盛でしたね。」と私が笑つて言ひま

すとね、元來人間は好いもんなんですから、眞面目な顏をしましてね、「昨夜は本當に驚きやしたよ。深川の親類の婆さんが遊びに來てゐて、急に卒倒したんでがせう……」などゝ有りもしない事を事細に話しました。

それから、もう一つこの先生が夜時々近所を驚かす事があるんです。先生、二三度盜賊に細君の着物を持つて行かれてから、馬鹿に神經質になつたんですね。夜、戸が少しでもガタッといふと、近所中に鳴渡るやうな大な聲で、「こらァ――ッ。」と叫るんです。近所の人が驚いて駈けつけて見ると、なァに犬が雨戸に觸つたんだとか、乞食が芥箱の蓋を開けたんだとかいふんですね。一度なんかも郵便屋が郵便を戸の隙間から入れようとして、戸をガタ〳〵させたんですね、すると中から例の「こらァ――ッ。」を食はせられたんでせう、郵便も置かずに驚いて逃げて行つたさうです。何しろ立廻りの先生ですから、內には槍も刀もあります。まかり間違へば、そんな物を持つて飛出さないとも限らないんだから危險です。いつでしたか、もう餘ッ程前でしたがね、雨上りの晩でしたよ。私が斯う遣つて例の通り夜延をしてゐますと、さァもう十二時頃でしたらう、突然例の「こらァ――ッ。」が聞えたかと思ふと、戸をガラッと開ける音がして、足駄で誰か表へ飛出すやうな音がするぢやありませんか。今夜は本物かなと思ふと、私も餘り好い氣持はしませんでした。でも、恐い物見たさです。窃と其處の雨戸の節穴から表を覗いて見ますとね、ツヶ師先生、晝のやうに明るいお月樣の下に、坊主頭を光

らせて、足駄穿で、槍を抱へて立ってるぢやありませんか。如何するのかと思つて、見てゐますと、暫く突立つた儘何かブツ〳〵言つてゐましたがね、やがて家へ引返して、戸締りをして寢て了ひました。當人の說に依ると、その晚は確に來たんだ、逃げて行く大きな後姿まで見たんだから、といふ事でしたが、近所では『なァに又犬だらう。』で、取合ふ者はありませんでした。この頃では愈神經質になつて、大抵夜の明け方まで寢つかれないんださうです。それでもやッぱり朝は早く起きて相變らず這入り口の三和土を頻に水で洗つてゐます……今夜は如何したんだか馬鹿に靜ですねえ……

この直ぐ右隣は、本舟町の鹽物問屋さんの控家でしてね。隱居さん御夫婦と、早稻田へ通つてるお孫さんがゐる限りで、誠に靜な落着いた家庭です。宅の物干へ上りますと、中庭が見えますがね、手入れの屆いた好い庭です。塵つぱ一つ落ちてゐたのを見た事がありません。時々聞えるのは御隱居樣の謠です。修羅物がお好きと見えて、いつでも早間な戰の所です。お孫さんは非常な勉强家で、內にゐる間も、本ばかり讀んでゐるさうです……

それからこの左隣ですね、こゝは今明いてますがね。こなひだまでゐたのは石鹼の卸屋さんでした。主に地方へ出すんですね。左樣。恰ど私がこの家へ越して來てから一月も遲れて越して來ましたらうか。その時はまだ獨身で、小僧二人と三人暮らしをしてゐましたがね。半月許り經つた或晚の事でしたよ、やッぱり私が斯う遣つて仕事をしてゐますと、大層隣が賑なんです。まだお袋が起きてゐまし

たから、下へ降りて訊きますとね、お嫁さんが來たんだといふぢやありませんか。そいつァ面白いと思つて、又二階へ上つて默つて仕事をしてゐますとね、壁一重といふ程でもないんですが、何しろ窓と窓とが、あんな風に喰着いてゐませう。何でも手に取るやうに聞えるんです。何でも友達が四五人祝ひに來てゐたやうでしたがね。いや、その連中の騷いだ事ッたらありませんでした。先づ喇叭節が出ますね、サノサ節になりますね。都々逸、端唄、やがて義太夫、それも太十の連發で、武智光秀が何度現れ出るんだか、際限がないんです。一時頃まで騷いでゐましたがね、やがて急に寂寞すると、戸のガタ〳〵開く音がして、「左樣なら。」「左樣なら。」といふ大な聲が、右と左に分れて聞えました。「もう電車はねえぞ。」と一人が遠くから叫ると「あつたッて乘つた事アねえんだ。」と一人が反對の方角から又叫るんです。やがて戸を閉める音がして、すッかり靜になつて了ひました。

私は考へましたね。彼あいふ連中が、これから毎晚のやうに遣つて來ちやァ、酒を飲んで騷ぐんぢやあるまいか。少くとも一週間に一度は必と押掛けて來るに違ひない。頭を使ふ商賣ぢやないから、好いと言へば好いやうなもの丶、何しろあの騷ぎを時々遣られちやァ堪らない……私は斯う思ひましたがね。明くる朝になると、隣の主人はいつもと少しも變らずに、小僧の曳く箱車の後を押して、小石川の製造場へ出かけて行きまして、午頃石鹼を車に一杯受けて來ますと、せッせと又荷造りを始めてゐる樣子なんです。少しも昨夜細君を貰つたばかりの人のやうぢやないんです。もう細君と三四五

年も一緒にゐるやうな樣子なんです。お嫁さんも少しも恥づかしがる風などはなくて、平氣で小僧の手傳をしてゐました。

騷ぎ屋の友達連中は、婚禮の晩來たぎりで、好い鹽梅に誰もその後は遣つて來ない樣子でした。時時晩などに客があつても、大抵商賣上の話ばかりで、話が濟むと、「何分宜しく。」といふやうな事を言つて歸つて行く人ばかりでした。夫婦は常談口一つ利くでもなく、受けて來た石鹼を荷造りして出すといふ一本調子な充らなさうな商賣を、さも面白さうに每日勉强して遣つてゐました。

一年ばかりすると、子供が生れました。子供が生れると、大分隣の空氣が違つて來ました。第一赤ん坊の泣く聲ですね。あれが何となく生々したものでさア。朝晩は主人が嬉しさうに赤ん坊を慰す聲も聞えます。細君が子守歌を唄ふ可愛い聲も日に幾度か聞えます。小僧が「玉ちやん……抱つこ。」などゝ生意氣を言ふ聲もします。今まで、包紙のガサ〳〵いふ音ばかりしてゐて、一向人聲のしなかつた陰氣な隣の家も、子供が生れると一緒に、俄に陽氣になつて來ました。

すると間もなく赤ん坊が病氣になりました。初は大層泣きましたがね。段々聲が弱くなつて來て、終にはもうすツかり默つて了ひました。赤ん坊が泣かなくなると、阿父さんも阿母さんも小僧達も又前の沈默に歸つて了ひました。內のお袋などに聞きますと、大分容體の惡いやうな話で、終には阿父さんも商賣を休んで看病してゐたやうです。さア然うなると、包紙のガサ〳〵いふのも聞えなくなる

譯ですから、尙寂として了ひました。夜などは、殊に靜で、斯う遣つて私が仕事の手を休めて凝としてゐますと、赤ん坊の苦しさうな寢息が手に取るやうに聞えるんです。

間もなく子供は死にました。葬式は或晩主人が二人の小僧を相手に窃と爲て了つたやうでした。近所でも餘り知つてゐるものはありませんでした。それから間もなくつい向う横町へ引越して了ひました。そんなに遠くへ越さなかつたとこを見ると、やッぱり場所の都合ぢやなかつたんでせう。悲しい紀念のある家に引續いて住んでる事が出來なかつたんですねえ。引越の日にお上さんの顏を見ましたがね、眞靑でしたよ。

それから、もう九月も明いてゐますが、今だに借手が無いんです。內のお袋などに言はせますと、お隣には丸で日の差さない眞暗な部屋が一つある、あれが惡いんだなどゝ申しますがね、如何いふもんですか、私は這入つて見た事もありませんから分りません。なァに、お袋だつて這入つて見た譯ぢやないんです。

それから一つ面白い家は、今の石鹼屋さんのゐた家の最一つ先の家です。

一體變な事でしてね。私が此所へ越して來ました時分から、もう妙な人が住んでゐましたよ。何でも瀨戸物町あたりの大な寄席の上さんだとか娘さんだとか言ひましたがね、もう肺病で難しいといふのを連れて來たんですね、つまり病人の引越をしたんですね。人の家作を單に死に場所に使はうとし

た譯なんです。大家さんも隨分堪りませんねえ。尤も商賣がら家にも置けなかつたものでもありませうがね。

間もなく、死んで、葬式を濟ますと、現金ぢやァありませんか。直ぐその明くる日越して行つて了ひました。

その直ぐ跡へ、何も知らずに、銀行へ出るとかいふ若夫婦が越して來て、二月ばかり住んでゐましたが、何となく土地に腰の据はらないやうな樣子で、碌々近所の交際もしない内に、何處かへ越して了ひました。

その次に又妙な人が越して來ました。主人の顏は到頭見ず了ひでしたがね。お袋などの話を聞くと、四十少し前位の、八字髭の立派な紳士だつたさうです。それと六つばかりになる色の眞黑けな男の子と、その子にも負けずに色の黑い、二十位の女中と、斯う三人限りなんです。子供の阿母さんらしい人のゐないのを不思議がつて、早速內のお袋が調べました所が、何でも近頃細君を失つた人だといふ事だけ分りました。一體千葉の方に家を置いといて、自分は用の都合で始終東京に來てゐたのを、今度妻君が亡つたんで、千葉を引上げて此方に家を持つ事にしたんださうです。子供も女中も千葉から連れて來たのでした。

この家の主人は朝何時頃家を出るんだか、私には一向分りませんでした。何の商賣をしてゐる人か、

如何いふ職を執つてゐる人か、それも分りませんでした。併し、夜歸つて來るのは好く分りました。大抵十二時か十二時半、遲い時は一時頃で、必と車に乘つて歸つて來ますが、一度も金を拂ふやうな音のした事はありませんから、いつでも何處かから宿車に乘つて來るに違ひないんです。車を降りると、「お松――お松――お松。」と必と三度女中の名を呼ぶんです。女中は大抵中で起きてゐるやうな樣子で、直ぐ戸を開けに出て來ます。併し、決して「ハイ只今。」とか、「お歸りなさいまし。」とか言つた事はありません。默つて戸を開けて、默つて旦那を入れて、默つて戸を閉めて了ふんです。

これが殆ど毎晩なんです。私は毎晩十二時頃になりますと、「もう歸る時分だな。」と思ふんです。すると、必と遠くから車の音が段々近くなつて來て、一軒置いて隣の前あたりで、ピタリと留るかと思ふと、必と「お松――お松――お松。」といふ聲が聞えるんです。如何な晩でも、この車の音と「お松――お松。」の聞えない晩はありません。

偶に歸りの早い事があります。九時半か十時頃に歸つて來る事があるんです。すると女中は中々起きません。早いと却て起きないんです。然ういふ時には、幾ら遲くても決して戸を叩いた事のない主人が、ドン、ドン、ドンと二つ三つ遣るんです。戸を叩かれると女中は直ぐ飛起きて來て、「誰方だね。」と妙に尻上りな調子で訊ねます。この訊ねるのも早い時に限つた事です。

晝間はいつでも女中と子供と二人つ限りです。客が來るではなし。何處へ行くではなし、御飯を喰

べる外に何も用が無いんです。毎日子供と二人で近所をブラ〳〵遊んで歩いてばかりゐるんです。如何にも色の黑い、可愛氣のない子供でしたが、如何したのか聲が馬鹿に優しくて、丸で女の聲のやうなんです。「死んだ阿母さんの聲が乘移つてるんぢやないか。」などと近所で言つた者もある位です。その子が恐ろしく人を懷しがる子でしてね、何處の家でも構はず門口から中を覗いて、「小父さん——小母さん。」などゝ出鱈目に呼んで歩くんです。その聲が今の咽喉を絞るやうな女の子の聲でせう。何とも言へない情ない聲に聞えるんです。

人も懷しいでせう。阿母さんに別れて、不案内の東京へ連れて來られて、阿父さんには朝早くから晩遲くまで出歩いてゐられるんでせう。丸で親身の人の顏を見る事はないんですからね。ですから「お松——お松」つて、お松の側を一分時も離れないんです。そしてお松の袂を引張つて外へ出るとは、餘所の家を覗き込んで、「小父さん——小母さん。」を遣るんです。

何でも近所の話では、旦那といふ人は小遣も碌に家へ置いて行かないんださうで、子供が玩具を欲しがる時などは、大抵女中が自分の小遣で買つて遣るんださうです。女中は又その子を自分の弟のやうに可愛がつてゐました。

いつだつたかしらも、子供が女の子の穿く鼻緒の赤い塗下駄を買ふんだと言つて、どうしても泣いて聞かないんです。女中は到頭自腹を切つて、それを買つて遣ると、子供は大喜びで、それからとい

ふものは毎日朝から晩まで穿き詰めにそれを穿いて飛んで歩いてゐました。

私が朝電車道の方へ出て行きますと、必と後からその子が隨いて來るんです――今の女の子の塗下駄な穿きましてね。そして駈け出すやうにして、私に追ッつかう追ッつかうとしながら、「小父さん何處行くの……小父さん何處行くの……」とそれはそれは煩く訊くんです。「小父さんは電車に乘つて遠くの方へ行くんですよ。」と言ひますとね、「然う……」と言つて泣出しさうな顏をしながら、それでもやつぱり電車道まで隨いて來るんです。そして私が電車に乘つて西の方へ行くのを、停留場の赤い柱の下に立つて、いつまでも〳〵見てゐるんです。まだ六つ位の子供です。どんなにか方々へ遊びにも行きたいんでせう……

或晩の事でした。まだ八時か九時時分でしたがね。頻に一軒置いて隣の門口あたりで、「今晩は。今晩は。」といふ聲がするんです。やがてドン〳〵と戸を叩き始めました。凡そ二十分も然う遣つてゐると、漸くお松どんが起きて來たやうな樣子でした。すると表から男の聲で、「えゝ私は住吉町の竹萬から參りましてございますが、若しや內の姐さんはお宅へ上つてゐやしますまいか。」と言ふんです。それが女中には好く分らないと見えて、「なに。誰方だね。」と、例の尻上りの妙な調子で訊ねるんです。すると外の男は、「えゝ、住吉町の竹萬家でございますが、內の姐さんは若しや御宅ぢやありますまいか伺ひに出ましたんで。」と又同じ事を繰返すんです。女中はまだ分らないと見えて、又「誰方だね。」

を遣るんです。外の男は三度「竹萬ですが……」を繰返しました。それから暫く女中と問答をしてゐましたが、結局どうもゐさうもないので、「何處へ行つたんだらう、困つた姐さんだ。」と謚さながら歸つて行つて了ひました。

その晩は十二時になつても一時になつても車の音がしませんでした。その明くる日の晩からは、もうパツタリ歸つて來なくなつて了ひました。

二三日經つて近所の話を聞きますと、もう出たつ限りなんださうで、家の事は些とも構はないんださうです。內のお袋の說によりますと、葭町の或婆さん藝者に前から深いのがあつて、始終濱町の何とかいふ家で會つてゐたんだが、段々借金が嵩んで來たんで、この頃ではもう藝者屋に入浸りになつてるんだといふ話なんです。「大方その藝者屋の主人にでもなるんだらう。」とはお袋の結論でした……

何しろ、主人が寄りつかなくなつてから、お松どんが途方に暮れたのは事實です。電燈會社はヤイヤイ言つて來ますね。大家は坐り込みますね。八百屋米屋は品物を入れませんしね。それは可哀さうでしたよ。

とう／＼或晩、主人の子供を連れて夜逃げをして了ひました。何でも自分の田舍へその子を連れて行つて養つてるといふ噂ですがね。態々調べに行つた譯でもありますまいから恃にはなりません。併し、然ういふ風な事は爲さうな女でしたよ。又、逃げる前に多少近所の人に向つて、そんな心持を洩

らした事があつたのかも知れません……

この頃は明いたり塞がつたり、明いたり塞がつたりして、碌に落着いてゐる人はありません。何だか妙な家ですねえ……

醉人

彼はへと〳〵に醉つて家を出た。

兩側に朦朧店が並んでる、店の中に朦朧人が動いてゐる、自分の手足まで朦朧見える……が、まだ飲みたい。

「あら子供が死んだつてえのに醉つぱらッて歩いてやがるよ、畜生！」

何處からか女の聲が聞える……

「やッぱり悲しいんだあね、自棄になつたんだよ。御覧な、涙をぽろ〳〵零しながら歩いてるぢやないか。」

又異つた女の聲が聞える……

彼は泳ぐやうな手つきをして眼を一寸擦つたが、倘且道路は朦朧して居る、石が水母の様にふはふはして居る……が、まだ飲みたい。

どしんと何かに突當つたと思ふと、誰かゞ力一杯に肩を摑んだ……痛い……痛い……が、まだ飲み

たい。
「健坊が死んだのは御前の酒の爲ぢやねえか……」
何だか眞黑な顏が朦朧見える。眼がぴかッと光つて居る。眩しいから眼を塞ぐ……
「わからねえのか、健坊は御前の酒毒を背負つて生れて來たんだぜ、だから見ねえ、子供にも似合はねえ足腰の立たねえ病氣になつて死んぢまッたんだ――手前の罰が子供に報つたんだ……」
おゝ肩が痛い……が、まだ飮みたい。
「それにまだ葬式を濟ましてから三日も經たねえと云ふのに、この態は何だ、この態は何だよ！」
身體を搖ぶられる……倒れさうになる……寧そ倒れて了はうと思つて、自分から倒れかゝると今度は又手を引張られる。
「分らねえのかなア、畜生、情ねえなア！」
泣き出しさうな聲が聞える……
「駄目だ、駄目だ、氣が狂つたんだ、打捨つときねえ！」
又異つた男の聲がする――朦朧した赤い顏が、先刻の黑い顏に並んで出た。
と、肩が輕くなつた――また足が朦朧動き出した。
「左樣よ、當然よ、健坊は乃公の酒で死んだのよ、乃公が殺したのよ。乃公が酒で殺したんだから、

乃公も酒で死なうッてのよ！」

彼はぶつ〳〵獨語を言ひ出した……だが飮みたい、飮みたい。

「け、け、健坊を殺した刀で、この乃公も死ぬのよ！」

彼は大きな聲で斯う叫つたが、往來の人には何の事だか解らなかつた。

酒の香がする――自分の身邊の香より、もつと強い、もつと新らしい香がする……朦朧酒屋らしい店が見える。

飮みたい、飮みたい、飮みたい！　飮んで、飮んで、飮んで――早く死にたい！

蹌踉と店へ這入ると、冷たい圓い器を掴んだ。眼の前へ持つて來て見ると、黃金色をした液體が動いて居る。先刻嗅いだ好い香がする――がぶりッと一息に仰る……

健坊が大きな眼を開いて、仰向に寢て居る……あんな大きな眼をして居ながら、最う乃公の顏が分らないのか……あの大きな眼は最う此世に向いて開いてるのぢやない、彼世に向いて開いてるのだ！

あの大きな眼は乃公達の見る事の出來ない、暗い、深い、遠い處を見て居るのだ！……

又がぶりッと飮つて……蹣跚と店を出る。

「そんなに醉つて步いては不可んなァ。」

又男の聲がする……白い帽子が見える……銀色をした長い物が光つて見える――巡査さんだ！

派出所の前には小さな黒板へ白墨を溶かして書いた天氣豫報が出て居る。彼は其黒板の前へ顏を持つて行つて、凝と其白い字を眺めて居たが、

「北の……風……晴れか……成程好い天氣だ！」

と、大きな聲で言つた。が、まだ黑板から顏を離さない。また暫く凝と覗つめて居たが、やがて舌舐めずりをして、

「下にぼんやり見えるのは……東の……風、雨か……成程昨日は天氣が惡かつた！」

と捨てたやうに言ふ。派出所を蹣跚と三四歩離れると、

「わ、わ、忘れられねえ——忘れられるもんか！」

と小さな聲で獨語を言つた。

人が大勢朦朧見える——まるで海坊主のやうだ——何だか譯の解らない事を話しながら、人の前を彼方へ通り過ぎたり、此方へ通り過ぎたりする……飲みたい、飲みたい！　早く死んで、この酒に濡れた唇を、酒毒で死んだ健坊の冷たい唇に壓つけて遣りたい！

大變靜かになつた。人の聲が些とも聞えなくなつた。海坊主のやうな人の影も少しも見えなくなつた。兩側に丈の高い樹が列んで立つて居る。上を見ると青空が細い路のやうに見える……兩側から樹が倒れて來さうだ！　慄然として下を向く……ゴォーウンーウンーウンーウンと鐘が鳴る。

兩側の樹が無くなつたかと思ふと、今度は兩側に石が澤山列んでる……石に字が彫つてある……だ！……墓場だ！

健坊の御墓は何處だらうと見廻したが分らない……兎に角此邊の地面の下で乃公の來るのを待つてるんだ！

行くぞ！　行くぞ！　最う直き行くぞ！　御前と同じ毒を飲んで死んで行くぞ！　死なゝけりや御前の處へは行けねえんだ！　待つてろ健坊！　いゝか健坊！

彼は躊躇しながら、墓から墓へと手を掛けて歩き廻つて居たが、軈て『前田健一之墓』と、書いた白木の墓の立つてる小さな土饅頭の前へ出た――健一の一の字が水に濡れて、淡くなつて、消えかゝつて居る。

彼はこの墓に氣が附くと、顏を墓標に擦りつけぬばかりにして、暫く凝と見上げたり見下したりして居たが、

「いよう、これは妙だ！」

と二三度手を拍つた――その音が墓地を寂しく響き渡る。

「前田健之墓！　いよう、これは妙だ！　前田健之墓なら乃公の墓だ！」

と言つて四邊を見廻した――何處を見ても墓ばかりだ――墓が朦朧みんな自分の方を向いて居る…

「して見ると乃公は死んだんだ！　有難え！　たうとう酒で死んだんだ！」

と言つて彼は土饅頭の上へ坐り込んだ――ふはりと膝が落込む……

「それでこれが乃公の墓か！　これが健坊の處へ行ける這入口か！　有難えなァ！」

彼は墓標に手を掛けて搖ぶり始めた。

「健坊！　今行くぞ！　待つてろ！」

と言ふ聲が、また寂しく墓地を響き渡る。

軈て彼は墓標を拔いて了つた。そして其跡に口を開いた穴を覗き込んで、

「健坊！　待つてろ！　今降りてくぞ！　健坊！」

と暫く大聲で叫つて居たが、やがて其赤土の穴へ鼻と口と眼とを突込んだ儘、鼾をかいて寢て了つた。

馭者

朝起きると雨がびしよ〳〵降つて居る。顔を洗つて室へ歸ると、「馬車が參つて居ります。」と云ふから、拂を濟まして宿屋の店先へ出る。水を打つた履脱に、友人のと私のと、昨日穿いた草鞋の巧く足形に踏みこなされたのが、泥に塗れた儘列んで居る。

私は逸早く草鞋を穿いて了ふ。友人が草鞋を穿いてるとぷつッと紐か切れた。と店先へ紺セルの古洋服に縞の半洋袴の古を穿いて、深護謨の古靴を穿いた、色の黒い男がニヤ〳〵笑ひ乍ら這入つて來て、宿屋の男に新しい草鞋を持つて來させて、友人が之を穿くのを手傳ふ。

外へ出るとガタ馬車が一臺細雨の中に立つて居る。今の男は突と馬車の傍へ走け寄つて、此方を向くと、

「お早うムいます。どうか之へお乘んなすッて。」

と言ふ——成程、これが馭者だ。

二人が馬車へ乘つて腰掛へ腰を下すと、直ぐ馬が動き出しさうにする。馭者は「どうよ。」と言つて

馬の口を抑へる――

馭者臺の後の額面を見ると「定員八人」とある。

馭者は色が黑いと言つた。色が黑くて、頭の頂邊が文久錢程に赤く禿げて居る。草のやうな眉毛の奥から蛇のやうな眼が覗いて居る。鼻は高い。口は大きい。油を塗つて丁寧に分けた髮の毛の端が、日に燒けた額へ垂れ下つて居て身體を動かす度に、フラ〳〵フラ〳〵搖れる。

馭者は未だ馭者臺に乘らず、馬の口を持つて突立つた儘頻りに町の方を見詰めて、何か待つて居る樣子である。

やがて横町から、白の小倉服の鼠色に化けたのを着て、兵士の古帽子を冠つた、團栗眼の飛び出た、低い鼻の仰向いた、出ツ齒で開いた口の塞がらぬ男がぼんやりと出て來た――馬丁らしい。尋常小學の生徒の樣に右の肩から左の腰へ、古い鞄を實體に懸けて居る。

馭者は直ぐ馬丁の傍へ走け寄つて、一言二言突慳貪に何か言ふかと思ふと、背中を一つ打した。馬丁は又他の横町へ這入つたが、暫くして又ぼんやり出て來た。又馭者に叱られて、又一つ打されて、泣き出しさうな顏をし乍ら直ぐ前の居酒屋へ這入ると、やがて焦茶のお釜帽子の古いのに、頑丈な樹の枝の先へ細い革を附けた鞭の、手擦れて黑く光つてるのを持つて出て來た。

「それ見ろ、つい鼻の先にあるんぢやねえか、愚鈍め！」

「お、お、親方が、ゆ、ゆ、昨夜、よ、醉ッぱらッて忘れたんだ！」
「吃め！　默つて居やがれ。」
「…………」
馭者は直ぐ馭者臺へ乘つて、穴の開いた古毛布で腰を卷くと、吾々の方を振返つて、ニヤ〳〵と笑つて、一寸會釋をして、さて手綱を執る。馬丁は默つて車掌臺へ乘つて、上から垂下つてる革の紐を引く。鈴は錆びたか、音もせず、唯革がバタ〳〵と天井を打つのみである。馬車は動き出した。
馬車はガタ〳〵と前後左右に搖れ乍ら、一の關の朝の街を狐禪寺指して走る。馬丁は馬車を飛び降りて馬車と一緒に暫く走けたが、やがて馭者臺に飛び乘つて、馭者の左に腰を掛け、銅色をした喇叭を衣兜から出して節面白く吹き立てる。
町の半まで來ると馬車が停つた。店先に裸馬の繫いである小さな旅籠屋から、結束凛々しい旅商人が二人紺の風呂敷に包んだ丈の高い荷を擔いで出て來て馬車に乘る。
馬車は又動き出す。少し行くと荷物を振分にして擔いだ白髮親爺が追つかけて來て飛び乘つた。又少し行くと大勢子供の賑かに呼ぶ聲がする――馬車は柱の黑光りのしてる、奥の暗い、古い大きな旅籠屋の前に停る。袴を着けて學校帽子を冠つた子供が三人脚絆草鞋の可愛い旅姿で乘込む――これで滿員だ。馭者は瘦馬に一ト鞭呉れる、馬車は漸く早くなる。

吾々二人は探勝旅行、次に乘つた二人は小間物行商人、老爺は農夫、子供三人は一の關の小學校へ「遊學」に來て居るので、暑中休暇で狐禪寺附近の村へ歸省するのださうだ。乘合の素性と旅行の目的が分明ると、追々と懇意になる。

ト馬車が又停る。「はてな?」と思つてると、眼の前の木賃宿から洋服姿の旅人が一人出て來た。

私の友人は嚴しい人だから、

「オイ馭者、もう滿員だぜ。まだ載せるのか。」

と突込む。

「いゝえ……あの」

と云ひ乍ら、振返つて馬車の中を覗き込む。

「一人でも餘計に載せたら承知しないぞ!」

「へイ……それはもう……」

洋服姿の旅人は默つて車掌臺に足を掛ける。

「オイ〳〵載せるなら己は降りるぞ。」

友人は降りかゝる。

馭者は「いんえ、いんえ…………」と云ひ乍ら、左に腰掛けて居る馬丁に、何か小聲で囁くと、馬

丁は直ぐ馬車を飛び降りる。
「坊ちやん、此處へ入らッしやい。」
馭者は今迄馬丁の腰掛けて居た處へ小供の一人を抱き上げる。
「オイ〳〵危いぜ。そんな處へ載せて。」
と痩せた方の小間物商が云ふ。
「いゝえ大丈夫！」
と云ひ乍ら、馭者は又例のニヤ〳〵と笑ふ。子供は高い處へ乘つたのを喜んで居る。洋服姿の旅人はずんずん這入つて來て今空いた席へ腰を下す……
この旅人は手もなく「侵入者」である。云ひ合さねど今迄の乘合は、互に心に頷き合つて、此旅人には言も掛けない。旅人も澁面作つて默つて居る……
馬車は又動き出す。馬丁は車掌臺に一寸乘つたが、乘合の顏色を見て取ると、直ぐ飛び降りて馬車と一緒に走け出した。
雨は止んだ。雨雲を通して來る太陽の熱がむん〳〵する。
愈町を外れて畠道に這入らうとする靑面金剛の前で、如何したのか又馬車が停つた。
ヒラリと飛び乘つたのは、法被を着て、鳥打帽子を冠つた若い男である。

「オイ〳〵まだ載せるのか。」

友人は又怒る。

「いんえ………」

と又苦笑をするかと思ふと、默つて馭車臺を飛び降りて、默つて又子供を一人、今迄自分の乘つて た處へ載せて、二人の腰を一緒に、例の古毛布で包む。

「慾張！」

と、肥つた方の小間物商が云ふ。法被を着た男は平氣で這入つて來て、今空いた席へ腰を掛ける……乘合は第二の侵入者とも言を交さぬ。第一の侵入者と第二の侵入者とは侵入者同志早くも懇意になつた樣子である………

馭者臺に列んで腰を掛けた二人の子供は、嬉しさうに何か話してる。馬車の中に殘つてる一人の子供は、羨しさうに其を眺めてる。

馭者は馬丁に又何か小聲で囁く。馬丁は馭者から鞭を貰ひ、馬の手綱の端を握つて、馬に一ト鞭當てたかと思ふと、馬と一緒に走け出した。馭者は後から走けて來て、車掌臺にヒョイと飛び乘る。

「オイ、此馬車は御前等二人を入れて十人乘だ、一人多いぜ！」

と、瘠せた方の小間物商が又怒鳴る。

馭者は口惜しさうに苦しげに、ニヤ〳〵と笑つたが、突然馬車を飛び降りて、馬車に隨いて走け出し始めた。

「オイ〳〵こんな事をして居て汽船に間に合ふかい。」

憎らしいから何處までも苛ぢめて遣ると云ふ口調で肥つた方の小間物商が云ふ――私の友人は馭者の顏を見詰め乍ら考へ込んで了つて、最う何も云はない。

馭者は走け乍ら、怨めしげに衆の顏を見廻して、

「大丈夫………作兵衛、しツかり走けろ。」

と後から怒鳴る。愚直な、丈夫な、吃の作兵衛は、馬に並んでトツトと走ける………

空は何時の間にかカラツと晴れて、畠の土と野菜の綠がギラ〳〵と眼を射る。一と筋長い田舍道を八人乘の馬車が十人の客を載せて走る、馬丁は馬に並んで走る、馭者は馬車を追ひかけて走る。

五六軒家の在る處を走け拔ける。鍛冶屋らしい家の前を此奇妙な乘合馬車の一隊が通ると、鍬の刃を持つた小僧だの、鐵槌を手にした若い者だのが五六人飛び出して、後から一齊に何か怒鳴つたが、馬車がガタガタ云ふので、些も分らない。

作兵衛は更に疲れない。依然として同じ速力で、依然として馬と並んで走けて居る。路の兩側が堤の樣に高くなつた頃、馭者は漸く遲れて來た、顏色の黑いのが蒼ざめて來た、垂れ下つた髮の毛は汗

に濡れてぴッたり額に附いて了つた。衣兜から紅い縁の附いた汚い手巾を出して顔を拭ふ内に、早くも半町遅れた。やがて一町、やがて二町、路が曲つてからは全く見えなくなつて了つた。

「ぐづ〳〵してると遅れるぞ。」

肥つた小間物商さんは、愚直な作兵衛まで苛める氣だ?!

作兵衛は少し赤くなつた顔を振向けたが、口を開いて笑ひ乍ら二三度大きく頷いて、又一生懸命に走け出す。

又路が曲つて、だら〳〵上りになると、兩側に新建の掛茶屋が五六軒見えて、人が大勢出たり入つたりして居る。路傍に空の乘合馬車が三四臺置いてある。馬は轅を離れて草を喰べて居る。馭者は馭臺を降りて莨を燻らして居る。と見ると、北上川は眼の前に銀を湛へて、悠々緩々と流れて居る。石の卷行の汽船は岸に引添うて、既に黑烟を吐いて居る――漸く間に合つた!

汽船の切符を買つて一ト休する處へ、馭者は眞蒼になつて走けて來たが、汽船を屹と見詰めて一言何か力の無い聲で唸くかと思ふと、仰ぬけ樣にどうと倒れた。見る間に顔が土色になる。口から白い泡を吹く。

馬丁は倒れた馭者には眼も吳れず、平氣な顔でニコ〳〵笑ひ乍ら、常より二人分餘計に乘車賃を集めて、これを大切さうに古鞄の中へ納めた。

汽船へ乘つて、岸の方を振返つて見ると、今馭者の倒れた處に人が蟻のやうに群(たか)つて居る。船が出ようとすると、川に響いて群集のドッと笑ふ聲が聞えた。

事業

案内者は四十五六の痩せぎすな男で、黑い長い髮の毛を眞中から綺麗に分けてゐる。顎にも鼻の下にも薄く髭が生えてゐて、額には深い皺が幾條か見える。眼は鋭いが、鋭い中に愛嬌がある。左の腰には白鞘の山刀。右の腰には手擦れのした黑革の煙草入。藁を編んで作つた脚絆を穿いて、細い繩で編んだ合財袋をしよつてゐる。頭には鍔廣の麥藁帽子。手には樹の枝を杖。

殺生石を見捨てゝ急坂を登り切ると、一面の叢だ。番號の木札を首にぶら下げた裸馬が澤山野放しにしてある。馬の子は道の行手に立ち塞がつて人の顏を凝と見てゐるかと思ふと、とツとゝ叢の中へ逃げて行く――姿は見えず、叢の中で木札のがら〳〵と鳴る音がする。

五六町の間といふもの、木といふ木が悉く白く立ち枯れてゐる處へ出た。骸骨の群のやうである。巨人の齒のやうである。灰色の炎が燃え上がつた儘にかたまつて了つたやうである――十五年の噴火にかうなつたのだと案内者は言ふ。

硫黄の製煉所へ來た。

小さな木の札に「茶臼ヶ嶽製煉所事務所」と筆太に書いてある。粗末な小屋が二つ三つ。土間には製煉用の竈が備へてある。硫黄を入れる器であらう、筒形をした物が五つ六つ眞黄色になつて轉がつてゐる。あたりは堪らず硫黄臭い――呼吸(いき)が詰まりさうだ。何處へ行つたか、大人の影は一人も見えず、汚い着物を着た子供が二人遊んでゐたが、その顏の色は紫だつた――人の顏の色ではない。

僕は臭くて堪らぬから、成るべく早くそこを離れようとしてゐるのに、案内者は何か離れがたない風情である。遊んでゐる子供の顏をぢつと見詰めたり、事務所の中を覗き込んだりして、ぐづ〳〵してゐる。

「誰か知つてる人でもゐるのか。」と聞くと、「いえ、さうぢやありません。」と答へる。

案内者はほつと嘆息(といき)をついて製煉所を出た――二人は默つて山を登つた。

轟々といふ音が聞こえて來た。噴火口に近づいたのだ――間もなく二人は烟の中にはひつた。

生暖かい土を踏んで、生暖かい烟の中を見上げると、行手に大きな黑い岩が見える。登り登つてその岩に近くなると――岩が動き出した。岩ではない。硫黄をしよつた硫黄採りが、烟の中に休んでゐたのだ。

擦れ違ひざまに案内者は聲をかける。
「何遍でがす。」
「けふはまんだ二度目だ。」
と言つたきり、老いたる硫黄採りは默々として烟の中へ降りて行く。
「一日に何度位しよつて來られるもんかね。」
と、僕が訊くと、案内者は、
「まあ七度位でがすな。」
「それでいくら位になるんだ。」
「まあ一圓程でがす。」

湯が池のやうになつて煮立つてゐる所へ出た。見上げたが火口と思ふあたりは轟々と音ばかり聞こえて、烟の奥に又烟が見えるばかりだ。

道を折れると、黄いろい烟の上がつてる所へ出た――硫黄が噴出してゐるのだ。瓶が澤山埋めてある。埋めてある瓶がみんな黄色になつてゐる。石を投げると、硫黄が崩れる。崩れ　硫黄は下から噴

き上げる勢で、紙のやうに輕々と飛ぶ。

少し降ると大きな火口がある。大きな白い烟が音もせずに大きな口から沸き上がつて來る。巨人の口からゆるやかに吹かれる煙草の煙のやうである。火口の廻りは薄淺葱色をしてゐる。大勢乘ると崩れ落ちさうだ。深さはどの位あるか覗いて見ても分からない。

案内者は、子供の時この穴の中を探檢に降りた事があるといふ自慢話をし始めた。その時の連れは六人であつた――二人はその後死んだが、四人はまだ生きてゐるから、嘘だと思ふならその人達に聞いて見ろと言ふ。珠數繋がりに繋がつて、五六十間降りたら、大きな湯の沼があつた。石を投げて見たが、どの位廣いのだか分からない。氣味が惡くなつてそこから上がつて了つたと言ふ。

降りについた。

道々、硫黄採りに會ふ度に、案内者は例の「何遍でがす。」を繰り返す。年をとつた硫黄採りは大抵向うから挨拶をする。

「大層知つてる人があるね。」

と聞くと、

「みんな昔使つた者でがす。」
「ぢや、君も以前は製煉所を持つてゐたのかね。」
「なあに、一寸の間でがす。」

向うから若い硫黄探りが三四人一緒に遣つて來た。と見ると、案内者に挨拶をして好い鑛石の在る處を訊く。案内者が教へてやると、喜んで、禮を言つて、上の方へ登つて行く。
「二年や三年ぢや中々分かるもんぢやがあせん。」
案内者は僕を捕まへて硫黄の講釋を始める――
「赤くても、白くても、黒くても硫黄はやつぱり硫黄でがすからなあ。さうかと、思ふと、硫黄のやうな色をしてゐて、ただの石なのがあるでがす。白根山の硫黄は黒いでがす。越後の淺間は俗に燒山と申しやすが、こゝの硫黄はこの那須と同じで黃いろいでがす。妙高山の硫黄は、昔噴火した時のが埋まつてるんで、中々見つかるもんぢやねえでがす。「鵜の目鷹の目」と申しやして、まあ硫黄ぢやあ一等好いでがす。」
と言つて、暫く默つて歩いてゐたが、又口を開いて、
「この茶臼ヶ嶽は無間山、新山、八間前、小釜などと字が別れてゐやすが、みんな監督署の持で、一

つ字をいくら〳〵とかいつて借りるでがす。」案内者は又默つて了つた。
「君が遣つたとかいふ時の話を聞かうぢやないか。」
と僕が言ふと、
「なあに、わしらあ一寸ばかりでがす。」
「どの位借りて遣つたのだね。」
と誘ふと、
「なあに一千二百坪ばかりでがす……大失敗を致しやしたつけ。東京の下谷の或人と同盟してやつたでがすが、しくじりやした。わしらあまあかうやつて案内者に落ちぶれただけで濟んだけれど、その人なんざあ、東京で立派な所にゐた人ですが、成り下がつて白河の裁判所の判事になりやした。それも暫くで、何でもそれからどつかの郡長になつたさうでがす。もう今ぢや消息もねえでがす……」
案内者は首を垂れた。
「一體何で失敗するのかね。」
と訊くと、案内者は又首を上げて、
「さつき會ひなすつたやうな人足に拂ふ賃銀と、製煉所の人夫に拂ふ給料に食はれるでがす。それに薪は高いし、硫黄はその割に高く賣れねえでがすからなあ。製煉所のあるじはわしら時代からもう四

五代變りやした。」

案内者は又暫く默つて、道を降つたがやがてほつと嘆息をして、

「人間にも失敗がないと好いでがすなあ……だがまあ大抵失敗でがすなあ。」

と言ふ。

「事業といふ奴は、大抵初めから成功するものにして始めるから、失敗が餘計に强く響くのさ。」

と僕が言ふと、

「さうでがす……まあ古河さんのやうな方は千人に一人でがすなあ。」

製煉所の煙が見えて來た。道は林にはひる。

と、荷車の音がして人聲が聞える。

「はあ、登るな。」

と案内者が言ふから、

「何だね。」

と聞くと、

「今の製煉所のあるじでがす。まあどんな奴か見て遣りますべえ。」

と、さも憎さげに言ふ――車は眼の前へ現れた。

嚢を載せた三臺の車を三人の人夫が引いてゐる。道が少し險しいので、製煉所の役員らしい三人の男は各々一臺の車の後を押して來た。

第一の車の後押しをして來たのは、まだ廿三四の青年である。白絣の一重を着て、尻端折で紺の脚絆を穿いてゐる。黒い護謨のマントを細く疊んで首の廻りに巻きつけてゐる。麥藁の大きな海水帽の下から鋭い目が光つてゐる。第二の車を押して來た男は鼻の下に髭が生えてゐる。鳥打帽子にカアキイ色の立襟の夏服だ。色が黒い。目が鋭い。第三の車を押して來た男は、茶色の冬帽子を冠つて、紺絣の一重を着てゐる、ぼんやりした顔ではあるが、やつぱり目には何處か鋭い處がある――三人共樹の枝を杖にしてゐた、三人共汗をかいてゐた。

案内者は第一の車の青年の顔を見ると、直ぐ聲をかけた。

「好い礦石のある處を教へてやらうか。」

「教へて呉れ。」

と横柄である――が、目は既にキヨロ〳〵と何かを探し求めるやうだ。

「無間に向つて左の方へ二十間ばかり登ると、ブツ〳〵烟が出て、粉の澤山ある所がありやす。その直ぐ上に好いのがありやすぞ。」

青年は勿論、髭の生えた男も、ぼんやりした顔の男も一齊に目の色を變へた。

「宜しい。左だな。」
「さうでがす。」
青年は禮も言はずに山に登つた。髭もぼんやりも車を押して後を追つた。と、直ぐ頭の上から又今の青年の聲で、
「左か、左か。」
と叫ぶのが聞える。
「さうでがす。」
と案内者は上を向いて大聲に叫んだ。やがて車の音も聞えなくなつた。
「どれが今の持主だね。」
と僕が聞く。
「眞中の髭の生えた奴でがす――髭ばかり生えてたつて何が分かるもんで。」
「だつて、今、君が敎へて遣つたから分かるだらう。」
「なあに、ありや噓でがす、あんな所に礦石があつて堪るもんですか。」
と言つて案内者は嘲るやうに笑つた。

馬が野飼にしてある所の少し上に林がある、そこで僕等二人は太い木を一本横にしよつた薪採りの婆さんに追ひついた。

今まで默つてゐた案内者は又口を開いた。

「なぜ割つてから擔がねえ。」

女は振り向いて、

「下へ行つてから割るだ。」

「損だんべい。」

「損でも好い。」

「この谷の木は堅くて割れまい。向うの谷のがよかんべい。」

と案内者は左の谷を指さす。

「割れねえのは割れねえ。割れるのは割れるだ。」

女は膨れ面をして、默つて山を降りて行く。案内者は又嘆息を吐いて

「あんな奴でももう人を馬鹿にしてやがる。」

と、さも〳〵憤慨に堪へぬやうに言つたが、僕が相手にしないので、又默つて了つた。

二人は無事に溫泉宿に着いた。五十錢は案内料の定めである。ところを僕が六十錢やつたら、案内者は喜んで幾度も禮を言ひながら歸つて行つた。

蝙 蝠 傘

夏の暑い日盛り。

眞青な空を眞白な雲が飛ぶ。光を含んだ空の色は雲の色をも通して輝く。空に曇が出たやうでもある、雲が青いやうでもある。

僕は唯ある辻堂の縁に腰を掛けてゐる。辻堂の前は富士の裾野を吉田へ通ふ路だ――右から左へ三尺巾の赤土色が青い草と青い草との間を明るく通つて處々に小石が眼を射るやうに輝いてゐる…―ぎら、ぎら――ぎら、ぎらつと。

辻堂の前に路を隔てゝひよろ高い松が一本。松の彼方には富士山が深碧の裾を廣げてゐる。その裾とひよろ松との間は一面の玉蜀黍畑で、半分紅くなつた葉と半分紅くなつた莖とが、紅毛を出した長い實と一緒に風の吹く度に、彼方へさら／＼、此方へさら／＼、一齊に靡く――靡く旬に葉と莖と實とが光る。

熾烈な日光は草の根を襲ひ、道路の土に食ひ入り、大空の限りなき空間に充ち溢れて、在らゆる物

を燒き盡さうとしてゐる……影のあるのは辻堂ばかりだ。

辻堂の前を時々人が通る。右から左へ通るのが多い。田舍から吉田へ出るのだ。もう町が近いからか、この涼しい辻堂の蔭にも休んで行く人は殆どない。

僕は路傍に蹲る乞食の樣に、辻堂の緣に蹲つて、右から來る人を遙に見迎へ、前を通る時その顏をしけ〳〵と眺め、左へ遠ざかつて行く後姿を、又遠くまで見送つた。

種々な人が通る。

縱に長い風呂敷包を提げた人物の好ささうな爺さんも通つた。年の若い易者らしい人も通つた。旅行に疲れた學生も二人通つた――何れも顏を赤くし、息を跳ませ、汗に額を濡らしてゐた。

それでも辻堂の涼しい蔭には時々涼しい風が來る……熱した汗の點滴が冷たい線になつて胸を流れる……

右の方から又二人人が見えて來た。二人とも黑い蝙蝠傘を差してゐる。二人とも大きな――自分の丈よりも高い――風呂敷包を背負つてゐる。近づく儘に熟く視ると、二人は女だ。老婆だ。一人は頭の毛が眞白だ、一人は半白だ。

二人は辻堂の前まで來ると立止つた。一齊に蝙蝠傘を展げた儘柄を仰向けにして地面の上へ投り出すと、先づ半白が白髮を手傳つて、草の上へ荷を下ろさせる。それから自分の荷を一人で解く。大き

な荷は二つとも案外輕いものらしく、下へ置かれるとグラ〱と、一つは右へ一つは左へ傾いだ。風呂敷の結び目から繭の骸が澤山顏を出した――二人は草の上に腰を下ろした。

半白は五十を四つか五つ越した位だ。全で白髮のはもう七十に近いだらうと思はれる。二人とも丈夫さうな老婆だ。

「暑いな、お母さん。」

と、半白の老婆が言ふ。

「うむ暑い。」

と白髮の老婆が鸚鵡返しをする。はてな。して見ると、これは母子だ。五十幾つかの娘に七十近い母なのだ。年老つた母子が繭の骸を町へ賣りに行くのだ。

二人は暫く默つて汗を拭いてゐたが……

やがて半白の老婆は白髮の老婆の蝙蝠傘に眼をつけた。

母の蝙蝠傘は骨が一本飛出してゐた。色の褪めた毛繻子の地を脫れて……

「お母さん、蝙蝠傘を直さなけりやいけないな。今日吉田へ置いて來るかな。」

と言ふ。母は默つて蝙蝠傘を見てゐたが、やがて眞面目な顏をして、

「勿體ねえ。もう今度の世にしようよ。」

と言ふ。すると半白頭の娘も亦眞面目な顏で、

「それもさうさね。」

と答へる。

軈て二人は立上つて、澄して又荷を背負つて、又蝙蝠傘を差して、吉田の方へ向つて出かけた。

僕はこの無智な田舍老婆二人の短い會話に少からず動かされた。

『今度の世』と云ふのは何だ。死んで又生れて來る世を言ふのだ。白髮の老婆に取つては、死ぬ事は眠る事なのだ。死んで又生れて來ることは眠つて又眼が覺める事なのだ。『今度の世にしよう』といふ語は『明日にしよう』といふ語なのだ。

娘も之を訝しまずに、「それもさうさね」と事もなげに言つてのけた。

老母は戯けて言つたのかも知れぬ。娘は戯けて答へたのかも知れぬ。併しこの二人の素朴な田舍老婆に諧謔があらうとは思はれぬ――二人は確に眞面目なのだ。

僕は二人の老婆を羨ましいと思つた――生きてゐるといふ事を無上に有難いと思つてゐて、死ぬといふ事を無上に恐ろしい事のやうに思つてゐる自分が自分で厭になつた。

僕はいつまでも二人の後姿を見送つた。二人は段々小さくなつて、やがて草の蔭に隱れた。

日が少し陰つて來た。

失明

「……それから宇都宮まで來ました。」

M君は新婚旅行から歸つて來た翌日、その樂しかつた追憶を、母の前に物語る——明治卅…年初秋九月の只ある晩——戰爭が濟んで間もなくの事だ。

「こゝでは大分人が下りました——私共二人は『有難い！　漸く隙いた！　もう大勢にジロ〳〵視られる心配もない！』と思つて、一時は喜びましたが、さて悉皆下りて了つて空ッぽになつて見ると、何だか寂しいやうな氣がします——人に視られないのが今度は物足りなくなつて來ました……

「途端に又新しい乘客が澤山に這入つて來ました——さうして又私共二人の姿を指してジロ〳〵視始めました……私共二人はたッた今人の出て行つたのを喜んだ癖に、また人の這入つて來たのを喜んだものです……

「一番終にカァキイ色の軍服を着て、赤い帽子を冠つた士官が、同じくカァキイ色の服を着た從卒を一人連れて這入つて來ました。士官は從卒に手を引かせて、私共二人の恰ど正面の向側に腰を掛けま

した――見ると士官は盲目です――右の耳から左の耳へ掛けて兩方の眼の上に白い繃帶が横にしてあるのです――私共二人は思はず眼を見張りました。
「從卒が士官の隣りへ坐ると、汽車は直ぐに發車しました。
「私共二人は最う同室の人が自分達をジロ〳〵視て居ようが視て居まいが、そんな事には眼も奐れずに、一心にその盲目の士官ばかり見詰めて居ました。
「屹度戰爭で負傷をして、それで潰れたんだ！　氣の毒だなァ！　彼あ云ふ人の身の上に比べて見たら、僕等二人などは勿體ない程幸福な身分だ！……などゝ色々に考へて居ますと……
「士官は小さく足踏をしながら、小聲で軍歌を歌ひ出しました――戰地で歌ふ軍歌らしいんです。
「その聲が低く、小さく、如何にも寂しく聞こえるんです――日の暮れがた、戰地の露營のほとりで歌つてる聲が――幾百里を隔てた故國の人の耳に……微に……微に……聞えて來るやうなんです。
「いや――『暮れがた』ではありません。晩です。暗い晩です。歌の主は全で見えず、歌だけが寂しく聞えるやうな眞暗な晩です――士官は眼が見えないんでした……
「汽車が停りました――士官は軍歌を止めて、從卒に停車場の名を訊きます。從卒は『岡本！』と小さな聲で答へました。
「汽車が動き出すと、士官は又低い聲で軍歌を歌ひ出しました――その寂しい聲は私共二人の心臟を

石と石の間に挾んで壓しつけるやうに致しました……

「また、停車場へ着きますと、士官はまた軍歌を止めて、從卒に停車場の名を訊きます。從卒は又低い聲で、今度は『寶積寺（ほうちやくじ）！』と答へました。

「車が出ると、又士官は軍歌を低く歌ひ出しました――聞く者は腸を捩られるやうなのですけれども、歌ふ人は勇ましい追憶に耽つても居るのでせう――盲目の士官は歌ひながら、折々口の邊に微笑をさへ含むのです……尙々私共は堪へられませんでした。

「やがて又停車場へ着きました。また、停車場の名を訊くのです。今度は氏家と云ふ所でした。

「列車が動き出すと、士官は又軍歌を小聲で歌ひ出すのです……

「片岡――矢板――野崎――とう〳〵私共二人の下りる西那須野へ來て了ひました。

「私共二人はこの士官に別れて汽車を下りるのが、如何にも辛う御座いました――士官は那須の温泉へ行くのだと聞きました。

「私共二人は鹽原行の人力車に乘りました。失明の士官を載せた列車は、那須野を東へ、煙を長く後へ引いて……走つて行つて了ひました。

「今度の旅で私共二人の直ぐ傍に坐つたり居たりしながら、私共二人の姿を見ない人は、あの失明の士官唯一人でした……

「鹽原へ行きましてからは、隨分愉快な事がありましたよ……」
と言ひかけると、今まで默つて聽いて居たM君の老母は俄に手を左右に振つて、
「もう今夜は晩いから、また明日聞かう。今夜は最うお休みなさい！」
と言つた。
「これからが面白いんだのになァ……」
とM君は甘えるやうに言つたが、偶と母の眼尻に涙の一滴光るのを見て取ると、
「は！　ぢやァ明日にしませう。お休みなさい！」
と勢好く言つて、新妻君（しんさいくん）が一人で本を讀んで居た室へ這入つて、そして『私共二人』になつた。

軍醫の家

日は全く暮れた。
諏訪神社を出ると、路の片側に行燈を點けた水菓子の夜店が二三軒列んでゐる。白い夏服を着た兵士が五六人各雁木の印の附いた陸軍の提灯を手にして、汗になつて諏訪神社の方へ急いで行く。
Y君は頻りに盆踊の話をする。この頃或所で盆踊をやつてゐた所が、それが巡査に見つかつた、巡査が怒ると反對に巡査に喰つて掛つた爲に五年の懲役に遣られた奴がある……
路傍に盥を置いて、暗闇で湯を使つてる女があつた……
牛乳屋の親爺が又飮んだくれて歩いて居た……
伯父の家の前まで來ると、門の處に人力車の提灯が二つ見える。「夜、醫者の家に人力車が乘りつけてあるのは碌な事ではないぜ。」とY君が言ふ。
一つの人力車は今來た計りらしい。

と、その人力車から飛び降りたのは、白服を着た兵士で、飛び降りると直ぐ『氣を附け』の姿勢をした。

兵士より前に來て門の所に立つて居たのは、同じく白い夏服を着た、八字髯の太い士官であつた。兵士は低い聲で嚴格に何か二言三言士官に報告すると、直ぐ又人力車に乘つて歸つて行つた。

家へ上ると伯父の軍醫が悠々と軍服を着けて居る。伯母に訊くと、今日の夕方、今門に待つてゐる將校の從卒が、五十公野の山で自殺をしたのださうだが、死に切れずに、山奥へ這入つて行つたといふ事で、今その搜索中だといふ話だ。

平服で伯父の處へ遊びに來てゐた衞戍病院長は、玄關の暗がりに突立つて、門の所に待つてる先刻の將校と暢氣に大聲で話をしてゐる。

「僕のピストルの彈丸は大きいからな。巧く行けば一度なんだ……え？　僕の机の引出から出したのさ……こんな事があつては實際困るよ。」と士官の聲がする。

伯父が出て來た。人力車は更にもう一臺門の所へ來て待つてゐた。伯父も士官も人力車に乘つて、直ぐ出掛けた。

院長は步いて歸つて行つた。

Y君も暫くすると、「左樣なら、又。」と言つて歸つて行つた。

蟋蟀が何處かで美しい聲を出して鳴いてゐる。洋燈の周圍を灯取虫がぐる〳〵廻る。
伯母は裁縫をしながら、落着いた低い聲で種々と兵士の自殺の話を爲始める。
ここではよく兵士が自殺をする。
ある兵士が自分の仕へてゐる將校のお孃さんに通じた。お孃さんには許婚の夫があつた。從卒は臺所の板の間で腹を切つた……
又或る軍曹が豫備召集の時に、和服の預かり役になつた。軍曹は出來心で誰かの兵兒帶を隱して置いて、それを後で賣つた。それが知れて毒を仰いだ……
寺の鐘が十時を告げる……靜かな寂しい低い音波の漲る中に蟋蟀の美しい高い調が聞える。
伯父は今五十公野の山にゐる……
默つて讀書を始めると、伯母も默つて裁縫を續けてゐる。
伯父が歸つて來たのは十二時過であつた……白の夏服は少しも汚れてゐなかつた。
伯父は普通の病人を診察して歸つて來た時と同じやうな冷靜な態度で靜かに自殺未遂者の有様を話す。
「まだ息がある……氣管を二個所貫いてゐるが彈丸は見えない……食道は安全だ。」
伯父は軍服を寢卷に着換へると、直ぐ寢床へ這入つた。伯母も裁縫を廢めて、間もなく寢て了つた。

僕も續いて寢床へ這入つたが、衣紋竹に掛けて吊してある伯父の軍服が眼に附いて、どうしても眠られない。

伯父も伯母ももう鼾をかいてゐる……

孫の巡禮

青年は赤毛布に紐を通して首に結び、着換一枚を風呂敷包にして片手に脇挾み、葡萄餅と豆銀糖の紙包を片手にして、盛岡のステエションから青森行の汽車に乘つた。七月某日の夜の十二時だ。

彼は生れて始めて自分の祖母の顏を見に行くのだ。廿三歲の孫として七十三歲の祖母に初對面をしに行くのだ。青年の心は新しい經驗の前に小さく慄へてゐる……

彼は暗闇を走る汽車の動搖に身を任せながら、客のない、ラムプの薄暗い、三等室の隅つこで、しづかに自分と祖母との關係を考へた。

青年の死んだ父は、十五六の時分に弘前の生家を逃げて、江戶へ出て、獨で苦學して官吏になつた人だ。

生家を逃げた理由については、青年の親戚間でも色々に說が違ふ。大變母――青年の祖母――に虐められたからだともいふ。青年の父が夕方藩の學校から歸つて來ると、祖母は時々門の側の暗闇に髮を振り亂して立つてゐて、まだ年若な青年の父を嚇かしたものだなどといふ。「併し、まさかそんな

事はあるまい。父が逃げたのは、親類の他の一派が稱ふる如く、野心に驅られた結果だらう。」青年はかう思つてゐる。

出世してから、父は幾度か自分の母を東京の屋敷へ迎へようとした。けれども、詞が通じないし、水も合ふまいからとばかりで、祖母はどうしても上京を肯じなかつた。そこで、青年の父は已むを得ず、月々幾らか宛のものを祖母の許へ送る事にした。

青年の父は裁判所に關係してゐたから、裁判所の所在地は日本國中諸所方々と隨分歩いたが、青森地方へだけは終に一度も行かなかつた。さういふ工合で、青年の父は子供の時に國を出たきり、再び母の顏を見なかつたらしい。

從つて東京で嫁に來た青年の母は弘前の祖母の顏を知らぬ。況んやその母の腹から出た青年がそれを知らう筈がない。

青年の父が死んでからも、青年の母はやはり毎月幾らか宛のものを祖母の許へ送つてゐた――額は無論減つた。

青年の家が零落して來てから、青年の母はもう弘前へ何も送らなくなつた。それでも祖母からはつひぞ無心がましい手紙の來た事はなかつた。ただ時々孫の安否を尋ねて來るばかりだつた。

祖母は青森の港に一寸した屋敷を持つてゐた――弘前からいつそこへ移つたものだか、それは分か

らぬ。弘前には祖母の弟が一戸を構へてゐた。祖母は青森にゐたり弘前にゐたりした。

四五年前の事である。祖母は一人で寂しいからといふので養子をした。ところがその養子が惡い奴で祖母の貯金をすつかり使つて了つた揚句に、祖母の實印を盗み出して、諸方に借金をした。祖母は涙ながらにその養子を追ひ出したが、そのお蔭で青森の屋敷も人手に渡つて了つた。それでも祖母は愚痴一つ東京へ言つて寄越すでもなく、默つて或在所の百姓家に同居した。それから後も、祖母はその在所にゐたり、弘前の弟の家にゐたりした。代筆ながら東京への消息も絶えずしてゐた。

去年であつたか、一昨年であつたか、「わたしももう七十にもなるし、身體も兎角すぐれないから、墓を一つ建てて置きたいと思ふ。就いては甚だ氣の毒だが、これ〳〵の金を送つて呉れ。」といふやうな意味の手紙が來た。向うから金の事を言つて寄越したのはこれが始めてである。青年の母は早速爲替を組んだ。要求額は僅五圓だつた。

去年は又、孫の寫眞を送つて呉れと言つて來た――死ぬ前に一度會ひたいからといふので。早速青年は法科大學の制服を着た半身のを送つた。

青年は今法科の一囘生である。二囘生であるのが順だが、去年一年は家の爲に働きづめで、殆んど休學同樣だつたので、それで一年遲れたのだ。今年の春から或教授の家へ家庭教師に這入つたので、稍順境になつて來た。

この夏盛岡へ來たのも、この教授の御供としてであつた。盛岡は教授の故鄕である。教授は夫人及び二人の男の子を連れて、今尙健在な故山の父母を尋ねられたのだ。

盛岡へ來るまで、青年は靑森だの弘前だのといふ事は、一向に考へなかつた。恩人の愛兒二人に過ちの無いやうにと心配する外、他に何の念慮もなかつたのだ。

盛岡へ來て、教授夫婦が久しぶりで兩親に會はれる有樣を見て、青年はふと靑森の祖母を思ひ出した――

「ああ、ここから八九時間汽車に乘りさへすれば、おばあさんのゐる所へ行く事が出來るんだ。まだ一度も僕が會つた事のないおばあさんの所へ行く事が出來るんだ。先生は羨しい。先生にはお父さんもお母さんもおありなさる。僕には母の外、まだ會つた事のない祖母がゐるきりだ。僕はもう母に甘えられる年ではない。併しまだ祖母には十分甘えられる年だ。ああおばあさんに會ひたい。おばあさんに會つて思ふさま甘えて見たい。この胸の中にある總ての哀しい寂しい感情を悉く打ち明けたい。今まで受けて來た心の負傷を悉く見せてやりたい。そして一言「おう可哀さうに。」と言つて貰ひたい。おばあさんはもう死にかかつてゐる人だ。この機會を利用しなければもう永久に會ふ事が出來ないかも知れぬ。さう思つて來ると、今度の旅行も決して偶然ではない。運命は僕を先生の家の家庭敎師にした。運命は先生のお供をさせて、僕を盛岡まで來させた。運命はきつと僕をおばあさんに會は

せずには置くまい……………」
こんな風に考へて來るとゐても立つてもゐられなくなるのが、この青年の性分だ。青年は狂喜して、その晩直ぐに汽車の客となつたのである。
青年は教授に衷情を訴へた。教授は笑つて二日の暇と幾らかの旅費を呉れた。青年は狂喜して、その晩直ぐに汽車の客となつたのである。
青森までの切符を買つて、青森行の汽車には乘つたものの、青年の心は聊か不安である。青年は祖母の住んでゐる町所をはつきり覺えてゐない。東京を出る時、祖母を尋ねようなどは夢にも思はなかつたから別に母にも聞いて來なかつた。ただ「新安方町七十二番地」といふ所書が、子供の內から頭に染み込んでゐて忘れられない。ただそれだけを賴りにして盛岡を出たのだ。
祖母に會ひたいと思ひ出してからの熱慕、教授の許しを得るまでの苦心、うまく尋ねあてられれば好いがと思ふこれから先の心配。
思ひ勞れて、青年はいつか寢て了つた。
『淺蟲。』『淺蟲。』と呼ぶ驛夫の聲に、青年は目を覺ますと、夏の夜は旣に凉しく明け離れてゐた。海が見える。溫泉の匂がする。プラットフォオムの柱に白い札が懸かつて、「途中下車驛」とある。
「まだ早過ぎる。次の汽車まで遊んで行かう。」青年はかう思つて汽車を降りた。彼は淺蟲が青森の「鎌倉」なる事を前から聞いて知つてゐたのだ。

ステエションの構外へ出ると、彼はそこここと當てもなく歩き廻つた。宿屋で身體を休めたり、茶屋で菓子を食つたりする餘裕は彼になかつた。

先づ海岸へ出た。

入江のやうになつた深緑の海の、直ぐ目の前に圓錐狀（ゑんすゐじやう）をした深緑の島が見える。海には塵一つ浮んでゐない。海岸には青年の外人の影もない。日は未だ昇らぬか、朝の空は白く美しい。青年はこの靜寂の境を、唯一人舟に乘つて向うの島へ渡つて見たいと思つた。

やがて青年は溫泉のある所へ來た。

臭い、汚ない溫泉だ。右の屋根と左の屋根とが相接しさうにしてゐる狹い路地を這入ると、右からも左からも湯の烟が上がつて來て、息が塞（つま）りさうだ。身體の汚ない男が二人ビチャ／＼湯を使ひながら奥州訛りで何か譯の分からぬ話をしてゐた。路地を出ると、海の匂と湯の匂とが交つて、何とも言へず、不愉快な空氣が鼻を突いて來る。

青年は走るやうにして又海岸へ出た。又靜かな島を見た。そして又吸へるだけ朝の爽かな空氣を吸つた。

朝の二番汽車が青森へ着いた時、赤毛布を抱へた青年は、それから降りる客の中にゐた。

青年はステエションの待合室に這入つて、そこらの人の顏を珍らしさうにじろ／＼見廻した。そし

てその內の誰かに、「新安方町は。」と聞かうとした。

が、ふと青年はかう思つた――

「待てよ。新安方町といふのは青森ぢやない。ありや弘前だ。今まで自分は青森も弘前も一緒くたに考へてゐたが、來て見ると、大分離れてゐる。さうだ。新安方町といふのは確に弘前だ。こりや飛んだ事をした……」

靑年は自分の不意と直覺した事を、直ぐ本當だと信ずる癖がある。それに又、語音の不愉快なこの邊の人に何か聞くのが非常に厭でもあつた。

靑年はひとりで考へてひとりで極めて、又弘前までの切符を買つた。そして次の汽車で弘前へ向つた。

一時間と少しで汽車は弘前へ着いた。灰色に曇つた空の下に、津輕富士の廣く引いた裾野を、汽車の窓から始めて見た時、靑年の心は何となく勇んだ。

「もう間もなくおばあさんに會へる。」彼はかう思つて、ステエションを出た。そして屋敷町らしい方面へ、道も聞かずに步き出した。

彼は北國の町の家の作りを非常に珍しく思つた。檐が思ひ切つて長く往來へ突出してゐる。その檐の端に柱が列んで立つてゐる。冬になつて雪が往來を埋めて了ふと、人はこの檐の下を通るのだ。

家はいづれも古びてゐた。檐はみんな曲がつてゐた。柱もみんな黑ずんでゐた。靑年はその暗い家の暗い檐の下を當てもなく步きながら、年若で、死んだ父の事を思つた――

「父はこんな陰氣な町に生れて、こんな陰氣な家で育つたのだ。僕が今踏んでゐるこの薄暗い土間は、父が子供の時分に幾度か踏んだ道に違ひない。父はきつとこの陰氣な町の壓迫に堪へないで、花やかな都へ逃げて出たのだらう。父は思ひ通り花やかな都で花やかな生活をする事が出來たが、併し、その生涯は北國の冬の晝のやうに短かつた……」

靑年は凡そ一時間も町を步いたが、終に新安方町を見出だす事は出來なかつた。彼は我を折つて往來の人に尋ねた。併し、多くの人は唯『知らぬ。』とのみ言ふ。たま〳〵敎へて吳れた人があつて、さてその敎へられた方面へ行つて見ても、中々分からない。

彼は終に警察へ這入つた。そして尋ねて見た。分からないのも道理だ。新安方町はやはり靑森だつた。靑年はがつかりして警察を出た。

雨が降つて來た。彼は赤毛布を着て、その下へ豆銀糖と葡萄餅とを隱して、長く突き出た檐の下を步いた。

小學校の生徒が男女七八人、いづれも柄の長い小さな雨傘をさして、足駄を鳴らしながら學校へ行く……

青年はとある今川燒屋へ默つて這入つて、今川燒を四つ五つ食べた。そして茶を飮んだ。彼はまだ朝飯を食べないのだ。

午少し前の青森行が弘前のステエションを出る時、青年は又三等室の窓から、その困惑したやうな顏を出してゐた。

青年は又津輕富士を眺めながら、たつた今來た何哩かを、又戻つて行くのだ。

青年は青森のステエションで辨當を買つて、それで朝晝兼帶の食事をした。

彼はステエションを出ると、今度は直ぐ道を聞いた、新安方町の所在は直ぐと分かつた。北國訛りも今度は少なからず賴りになつた。

青年は敎へられた通り、左へ海岸通りを歩いた。雨はいつの間にか止んで、薄日が弱く差してゐる。家と家の間の狹い路地から、海の匂が吹いて來る。

青年の家の名は東京には二つとない珍しい名だ。彼は珍しい名だから、どこへ行つても直ぐに知れると思つてゐた。ところが靑森へ來て驚いた。彼の家の名の人が殆ど門並に住んでゐる。

漸く七十二番地を探し當てた。表札を見るとやはり青年の家の名と同じである。彼は稍安心した。併しながら、その家は米屋であつた。しかも大きな米屋であつた。青年は考へた。今まで祖母が米

屋をしてゐるといふ事は一度も聞かなかつた。また米屋に同居してゐるといふ事も聞かなかつた。さう思つて、躊躇しながら、青年は祖母の名を店の若い者に告げて見た。若い者は祖母の名を知らなかつた。若い者は番頭に聞いて呉れた。番頭も知らなかつた。番頭は主人に聞いて呉れた。主人も知らなかつた。

青年は失望した。

「この米屋がきつと祖母の賣つた屋敷の跡に違ひない。その後幾度か代が變つたので、今の主人は全く祖母の名を知らなかつたのだらう。ここで分からなければ、もう少しも分かる當てはない。」

さう思つて、青年はぼんやり又歩き出した。

「でも、この儘歸るのは如何にも殘念だ。折角先生の親切でここまで出て來て、分からずに歸つても申譯がない。どこかへ宿をとつて、東京へ電報をかけて聞いて見ようか。いや併し、そんな餘裕はない。」

青年は未練がましく、裏通りから表へ、また表から裏通りへと、あらゆる小さな道を歩いて見た。裏通りには多く漁夫の家があつた。汐の香、海草の香、魚の香は絶えず青年の鼻を突いた。その漁夫の家にも、青年の家の名と同じなのが多かつた。

同じ所を幾度か歩いて、青年は身も心も散々に勞れた。そこで或駄菓子屋に腰をかけて、うまくも

ない菓子を無理に喰べながら、茶を一杯貰つて、暫く休んだ。
青年はもう諦めてゐる。もう爲方がないから盛岡へ歸らうと思つてゐる。併し、まだどうしてもすつかりは思ひ切れぬ。
彼は駄菓子屋の老婆を捕まへて、愚痴を列べ始めた。初めて祖母を尋ねるのだといふ話。青森で一旦降りたのを又弘前まで行つて、知れずに又青森まで戻つて來たといふ話。それでも終に知れなかつたといふ話。今度會へなければもう一生會はずに了ふだらうといふ話。
老婆は默つて聽いてゐたが、青年の巧みに操る東京語は大方分からずに了つたらしい。青年の話が終ると老婆はさも感に堪へたやうに何か言つたが、それは又青年に分からなかつた。
その時、店の奧の薄暗い所で默つて烟管を噛んでゐた老爺が出て來て、老婆に何か言つた。老婆も亦何か老爺に言つた。併し、それが何の事やら、青年には一向分からなかつた。けれども、それはどことかの媼さんではなからうかといふやうな事がちよいと聽きとれた。老婆と老爺とはしきりにその「どことかの媼さん」を繰り返した。
やがて老爺は青年の方を向いて、お前は東京かといふやうな事を聞いた。さうだと答へると、それではお前はその尋ねる媼の孫かと聞く。また、さうだと答へると、學校はどこだと聞く。大學だと言ふと、それではてつきり「どことかの媼さんだ」と言ふ。去年寫眞を送つた話をすると、さう、さう、

そんな話もあつた、大層な自慢だつたと言ふ。

青年の心臟は激しく鼓動して來た。どうもこの老爺は祖母を知つてゐるらしい。祖母と親しく口を利いた事があるらしい。併し、その「どことかの」はどう聞いても分からない。

青年は強ひて平氣を裝ひながら――その癖眞赤になつて――老爺にその心當りといふのを聞いた。老爺はその媼の姓も知らなければ名も知らない。ただその新安方町にゐた時分に時々菓子を買ひに來て、話して歸つた。東京に立派な孫のある話は來る度にして行つた。その媼さんなら、今在所にゐると言ふ。

在所。在所。青年は祖母が家を賣つて在所へ引つ込んだ事のあるのを思ひ出した。きつとその在所に又ゐるのだ。かう思つて、青年は駄菓子屋の老爺にその在所の家といふのを聞いた。

在所の家ならよく知つてゐるから、俺が案內して遣らうと言ふ。どの位あると聞くと、半道はあらうと言ふ。半道も案內して貰つては氣の毒だと言ふと、なあに、どうせ遊んでるんだ、遠い處から態態來て、知れなくて歸るのも氣の毒だからと言ふ。

そこで青年は老爺についてそこを出た。もう午後の四時頃だつたらう。

青年は老爺の歩く通りに歩いた。どこをどう歩いてゐるのか自分にも一向分からない。それでも漸

く目的が果せさうな氣がして、何となく氣が勇んだ。
何里と續いてゐさうな廣い廣い靑田を前にして、破屋が二三軒並んでる所へ出た。田が廣いだけに家が小さく見える。田が綺麗なだけに家が汚なく見える。駄菓子屋の老爺はその破屋の中でも最も小さい最も汚ない一軒の家の中に這入つた。靑年もついて這入つた。
土間には汚ない子が大勢直に坐つて遊んでゐる。覗いて見ると、住居は三疊二間位だ。その又疊が丸で使ひ古した筵の樣に汚なく破れてゐる。何とも言へず臭い土の匂がする。
駄菓子屋の老爺が大聲で何か言ふと、裏の方から汚ない老爺が笠を冠つた儘出て來た。その又老爺の汚なさと言つたらない。靑年は思はず顏を背けた。
駄菓子屋の老爺は百姓の老爺と暫く何か譯の分からぬ事を話し合つてゐたが、やがて靑年の方を向いて、やはりここにもうゐないと言ふ。
靑年は百姓の老爺に祖母の姓名を告げて見た。百姓は確にそれを記憶してゐた。祖母は去年少しここにゐたが、今は弘前の弟の家にゐると言ふ。弘前は何處だと聞くと、田茂木町のこれ〳〵いふ所だと言ふ。
靑年は又弘前へ行かなければならなかつた。
併し田茂木町と聞けば覺えがある。靑年はやうやく祖母を尋ね當てたやうな氣がした。

それにしても祖母が好くこんな汚ない家に少しでもゐたものだと思つて、青年はあたりを見廻しながら暫く土間に突つ立つてゐた。

日は容赦もなく暮れて來た。

金を遣つて駄菓子屋の老爺に別れた青年は、勞れて暫く往來の捨石に腰をかけた。膝にのせた豆銀糖と稻荷餠の包は、もう散々に手擦れがして、紙も所々破れてゐる。

彼はものの廿分ばかり身動きもせずに、宵暗の空の一方をじつと見詰めてゐたが、やがて身を起して、二階作りの旅宿に向つた。

彼は青森に一泊して、明日弘前を尋ねる事にした。そして弘前には泊らぬ事にした。

港には燈がついた。

青年はみなりの惡い爲に、あまり宿屋でも優遇されなかつた。彼は暫く横になつて、ゆうべからの勞を休めようとしたが、あまり頭を痛めたせいか、どうしても目が冴えて眠れない。そこで又、町の空氣を吸ひに外へ出た。

けふ一日あつちへ行つたりこつちへ行つたりして散々無駄をした事が、もう遠い昔の事のやうに思

はれる。自分は今度豫め祖母のゐる所を確に知つて來て、そしてたつた今この港に著いたもののやうな氣がする。それ程今青年の心は落ち着いてゐた。

青年は料理屋へ行く藝者の顏に北の女の美しさも味つた。芝居へ這入る學生の顏に北の男の凛々しさも見た。醉うて歌ひ歩く漁夫の聲に北の訛りの可笑しさをも聞いた。

やがて青年は海邊へ出た。

暗い海。暗い空。その暗い中に更に暗い巨大な物が右に左に動いてゐる。それは函館行の汽船だつた。ぼんやりした燈がたつた一つ高い所に點いてゐた。

青年は當てもなく暗い海の岸を歩いた。と五六町沖の水の上に小さな光が一つ見えた。と思ふと、消えた。また光つた。また隱れた。螢火の明滅を見るやうだ。青年はじつとその光の方を見詰めた――光は波を上下する小舟の燈だつた。

青年は「果して明日おばあさんに會へるかしら。」と思つた。

明くる日の朝の十時頃、赤毛布を抱へた青年の姿は、また弘前の屋敷町に現れた。田茂木町は直きと知れた。祖母の弟の家はその靜かな町の取つつきにあつた。青年は古びた門を這入つて、古びた玄關の土間に立つた。人氣が無い。

「おばあさんはお出でですか。」

青年はいきなりかう叫つた。すると、丈の高い痩せた老爺が出て來て、

「どちらから。」

と、立派な東京辯で言ふ。青年は一日一晩これを聞かなかつたので、先づ頼もしく思ひながら、

「東京から。」

「東京の……」

「おばあさんの孫です。」

「おう達さんか。成程。ちつとも氣がつかなかつた。これは珍しい。さあ、お上がり。さあ、さあ。」

青年は老人に手を引つ張られるやうにして、上へあがつた。老人は祖母の弟であつた。

青年は爐の切つてある部屋へ通された。廣い庭が見える。庭には林檎の木が澤山ある。林檎の木には澤山青い實がなつてゐる。その林檎の實が一つ落ちてゐる側に、ひよろ長い南部百合が、その細い莖の先に煉瓦色の花をつけてゐる。

隣の部屋には、床がとつてある。床の向うには机が置いてあつて、机の上には何か本が廣げた儘になつてゐる。床の中にも人がゐない。机の前にも人がゐない。

老人は青年を置きつ放しにして、奥の方へ這入つて行つたが、直ぐと又出て來て、

「今すぐ姉も參ります。姉もこの二三ヶ月大分弱りましてな。やうやく一人で便所へ行けるやうなわけです。大層喜んでゐますよ。」

「突然出ました。盛岡まで學校の先生の供をして參つたので。」

「それは、それは。まあお樂に入らつしやい。わたしもお父さんにはえらい御厄介になりました。もう倅も戻りませう。」

老人はいろんな事を一緒くたに言ふ。それを可笑しく思ふ程青年の心は落ち着いてゐなかつた。青年は青年で又昨日からの失敗を秩序も無く老人に話した。

「それは嘸お困りでしたらう。それでも好くお尋ね下すつた。」

とばかりで、老人にはさ程にきのふ以來の青年の心勞が響かぬらしい。青年はそれをも殘念に思ふ餘裕がなかつた。

おばあさん。おばあさん。早くおばあさんに會ひたい。青年の心にはもうこれより外何もなかつた。

やがて奥の方から祖母がよぼよぼと出て來た。腰が直角以上に曲がつてゐる。頭が眞白だ。目がしよぼしよぼしてゐる。鼻が小さい。口が大きい。

でも青年は懷しさうに祖母の顏を眺めた。祖母も亦嬉しさうにじつと孫の顏を見詰めた。やがて祖

母の汚なびた頰に、銀(しろがね)の雫がホロリと光つた。

祖母は嬉しさうにしきりに何か孫に話しかける。孫もしきりに何か祖母に言ふ。けれども祖母の言ふ事は一向孫に分からず、孫の言ふ事は又一向祖母に分からなかつた。

けれども兩方で一生懸命に話してゐる内に、大分お互に意味がとれて來た。それに祖母の弟が折々通譯を勤めて吳れた。祖母の弟は青年がまだ六つか七つの頃、東京の青年の家に寄寓して、巡査を奉職してゐたのだ。

祖母は戸棚から青年が去年送つた寫眞を取り出して來て、つく〲青年の顏と見比べた。そして「もうお前に會つたから、何も思ひ殘す事はない。安心して死ねる。」といふやうな事を言つた。

それから祖母は又自分の墓の繪圖を出して來て、青年に見せた。「御前の家のお蔭で墓も出來た。中中立派だらう。」と、自慢をした。

やがて祖母は又古い行李の底から、青年の父の葬式の行列順序を書いた長い紙を出して、青年に見せた。十八年前、青年の父の死んだ時、誰かが書いて送つたものらしい。かかる物は青年も生れて始めて見るのだ。

青年は熱心にその行列順序を見た。そして十八年前の父の葬式が如何に立派なものであつたかを知つた。青年はその時自分が車に乘つて、棺の直ぐ後についたものである事を今始めて知つた。

祖母は是非とも今夜は泊まれと言つたが、青年は先生に貰つた時間が切れるからといふので、無理に斷つた。實は青年には、この初對面が期待した程面白くなかつたのだ。

やがて祖母は青年の爲に晝飯の仕度をして呉れた。古い汚ない膳にとても食へさうもないお菜が並んだ。祖母は初對面のしるしだと言つて、泡盛の杯を青年に差した。青年は酒を嗜まぬから、これには少からず弱らせられた。

祖母は又手づから魚の串ざしを爐に燒べて呉れた。青年は今度の旅で、この魚の串ざしを度々見てゐる。街道の立場茶屋などに、よく藁束に差してある、あの串ざしだ――多くは靑蠅かたかつてゐた。「若い者がそんな事ではいかん」と、祖母はしきりに勸めたが、青年は我慢にも箸が執れなかつた。

彼は祖母の弟が庭から取つて來て呉れた林檎ばかり喰べてゐた。

間もなく祖母の弟の息子が歸つて來た。尋常中學の生徒だ。祖母の寵愛する所で、始終祖母の側にゐる。机も祖母が老病を養ふ床の側に始終置いてある。

祖母は青年に對つて、この少年を案內にして市中を見物して來いと言ふ。「お前の父さんの生れた所だ。一度は見てお出で。」といふやうな事も言つた。

青年は餘り町が見たくなかつた――青年にとつてこの町の第一印象は餘り心持が好くなかつたからだ。それでも、青年は少年に連れられて出た。

少年は忠實にそこここと案内して吳れた。あれはどこの學校だとか、あれは何聯隊の兵營だとか、丁寧に說明して吳れた。けれどもこの少年の詞は青年に全く分からなかつた。青年は唯「はあ、はあ。」と受けてゐるばかりだつた。

町外れの街道口へ來た時、少年はしきりに祖先の逸話を說いた。青年の四代前の祖父が武者修行に行く時、別れに兄弟とここで眞劍の勝負をしたといふやうな話もしたが、青年にはそれも好く分からなかつた。

青年はやうやく倦怠を覺えて來た。少年が更に方々案內しようとするのを、無理に遠慮して歸つて來た。

祖母はあけび細工の籠に、しきりに林檎を詰めてゐた。青年は出すのを忘れてゐた豆銀糖と葡萄餠とを出して、も一度東京土產のないわけを述べた。それでも祖母はホク／＼喜んでゐた。

祖母の弟は庭へ降りて、南部百合を一枝折つて、あけびの籠に挿した。そして、その籠を青年に吳れた。

「途中でいくら喰べても好いから、若し一つでも殘つたら、お母さんの所へ持つて行つて喰べさせてやれ。」と祖母は言つた。「南部百合はお父さんが大お好きだつた。番町のお屋敷の庭の松の根方に態

態こつちから取り寄せて植ゑられたことがある。」と祖母の弟は言ふ。
午後の五時頃、そこ〳〵にして青年は祖母の家を出た。

弘前のステエションにはどこの溫泉歸りか、顏の汚なく膨れて眼の爛れた男女が澤山ゐた。
青森を出て、汽車の浦町を通る時、何かの祭で赤い提灯が澤山についてゐた。
青年は汽車の中でぼんやり考へてゐる――
「僕には故鄕がないんだ。生れた岡山がさうかと思ふが、行つて見ても一向そんな氣がしない。三つから育つた東京がさうかと思ふが、またさうでない氣もする。父の生れた弘前かと思つて、來て見たが、やつぱり駄目だ。第一詞が分からない、食物が喰べられない、町が陰氣だ……」
斯う思つて、青年は非常に賴りないやうな氣がした。
汽車の動搖がひどい。

汽車が盛岡へ着いたのは、午前二時だつた。青年は降りは降りたが、行く所に困つた。先生の家を叩く事は出來ない。さうかといつて、宿屋へ泊まる餘裕もない。
青年はステエションで夜を明かす決心をして、待合室の薄暗い隅つこに毛布を被つて腰かけてゐた

驛夫が段々に燈を消して歩く。ステエションは段々に暗くなる。やがて待合室へも這入つて來た。青年は驛夫に事情を述べて一晩ここに寢かして貰ふやうに頼んだ。驛夫は直ぐと許して呉れた。やがて待合室の燈を消して出て行つた。青年は眞暗なステエションに唯一人殘された。

硝子窓の白む頃、青年は眼敏く起きた。ゆうべの驛夫はもう箒を持つて掃除をしてゐた。青年は禮を述べてステエションを出た。

青年は川添の路を、教授の家へ向つたが、まだ起きてゐる家は少なかつた。そこで、川端の石に腰をかけて暫く休んだ。

そして、あけびの籠から青い林檎の大きいのを一つ出して、いきなり丸噛りを始めた。

南部百合はもう萎れてゐた。

東京へ

一郎が上野のステエションへ這入つた時は、恰ど福島行の汽車が出る所だつた。

彼はステエション中に鳴り渡る喧しい鈴の音と、赤筋の這入つた帽子を冠つた驛夫の、歩きながら方向を呼ぶ聲とに追はれて、急いで切符の賣場へ駈けつけた。そして黒田原までの三等を買つた――ステエションへ足を踏込むまでは、何處まで行くのか、自分にも分つてゐなかつた。それ程彼の頭は昏迷してゐた。ステエションに這入つて、偶と賃銀表の額を見上げた途端に彼は決心がついた。「黒田原」といふ三字が第一に眼についたのである。それで直ぐ其所に極めたのである。彼は何處へ行つても好いのだつた。唯靜な所へ行つて靜に考へたいのだつた。

彼はこの列車に乘る最後の客だつた。彼が後の方の或三等室へ飛乘ると、後から驛夫がバタンと戸を閉めた。汽車は直ぐ動き出した。

一郎は網の棚の下の、幅の狹い疊の敷いてある、堅い腰掛の隅に腰を卸して、大學の制服の左の胸の衣兜から、手擦れのしたレクラム本の『青年ヱルテルの苦痛』を出して、その終の方を開けて凝と

それを見た。

一郎は讀まうとして、それを見たのだが、彼の眼は唯異形な活字の行列を寫すばかりで、一向その意味を頭に傳へなかつた――一郎はエルテルと全く關係の無い事を考へてゐるのである。日暮里（にっぽり）、田端（たばた）、王子（わうじ）、赤羽（あかばね）――汽車はどん〳〵北へ走る。一郎の重い頭を載せて走る。一郎の重い頭を輕さうに載せて走る。

一郎は今日の出來事を考へてゐるのである。昨日の事を考へてゐるのである。一昨日の事を考へてゐるのである。半月前から今日までの事を考へてゐるのである。

彼は廿二歳のこの秋になつて、初めて生活問題に打つかつたのである。彼は今まで父の遺産を無盡藏なものだと思つてゐた。縱（よ）しそれが無くなつても、親類へ貸してある金を取り立てれば、一生喰ふ位は必とあると思つてゐた。少くとも母が政府から寡婦としての扶助料を貰ふ限りは、一家は安樂に坐食して行かれるものと思つてゐた。一郎はそれを自己の幸福だとは思つてゐなかつた。天から人に與へられた當然の權利だと思つてゐた。この權利に十倍し百倍し千倍した事が無ければ、幸福ではないかと思つてゐた。

その父の遺産はもう遠に無くなつて了つてゐたのである。もう二三年も前に無くなつて了つてゐたのである。母はそれを息子に隱さうとして、親類に貸してある金を取り立て始めた。併し、親類は此

方で貸した時のやうに、中々ぽんと返しては呉れなかつた。或者は月賦で拂つた。或者は年四回に拂つた。或者は二月に一度、三月に一度といふ風に不規則に拂つた。それでも、それらの金が來る內はまだ好かつた。まだ息子に父の遺產があるやうに見せて來る事が出來た。その內に忽ち一軒は義務を果して了つた。母は日下の境遇を手紙に書いて、更に幾分かの利子を請求した。それも直に拂はれて了つた。續いて他の一軒も義務を果して了つた。これは向うから利子を添へて持つて來た。斯くして段々に人から取る物は少くなつて來た。

もう唯一軒大な口が殘つてる許りになつた。それは一郎の母の妹が嫁いだ先であつた。絲問屋で、可なり手廣く遣つてゐたのだが、半年許り前に非常な失敗をして、忽ち店を無しにして了つた。從つて少からぬ月賦の這入り口が——今では唯一の這入り口が——礑と止つて了つたのである。母はこれを彌縫しようとして、扶助料の一年分を引當に金を借りた。母は飽くまでも息子の幸福を破りたくなかつたのである。

併し、その金は直ぐと又無くなつて了つた。もうそれだけの金を返さなければ、先を借りるといふ譯にも行かなくなつた。これが半月前の事であつた。

母はもう爲方が無くなつて、初めて一家の事情を息子の一郎に打明けた。そして「一つ將來の方法に就いて考へて見て呉れ。」と相談をかけた。

一郎は驚いた、呆れた、やがて腹が立つて來た。堪らなく腹が立つて來た。彼は自分の所有物を誰かに奪はれたやうな氣がしたのである。自分の物でないものを誰かに欺されて自分の物だと思つてゐたのが、俄に然うと知れたやうな氣がしたのである。人間一般に當然與へらるべき權利を突然剝奪されたやうな氣がしたのである。一年の約束で借りた金を二月か三月で返せと脅迫されたやうな氣がしたのである。

考へろ。考へろとは何を考へるのだ。俺はそんな問題を考へ得るやうに育てられては來なかつた。俺はそんな問題を考へる頭を造りに學校へ行つたのではなかつた。人の知らぬ間に、人を穴の中に突落して置いて、さァ此所は穴だから、早く上る工夫をしろと言ふやうなものぢやないか。人の知らない道を、ずつと車に載せて連れて來ながら、行きなり途中で人を卸して、さァこれからは一人で歩けといふやうなものぢやないか。何故初に言はないんだ。何故今になつて急に言ひ出すんだ。

この問題が起つてから、一郎は母の顏を見るのが厭になつた。母の眼は絕えず何物かを哀求してゐるやうに、彼の眼に映るからである。彼は又弟の顏を見るのが厭になつた。妹の顏を見るのが厭になつた。弟も妹も始終何か欲しさうな眼をして、兄の顏を見てゐるやうに見えるからである……

汽車は今或堤の側を走つてをる。堤の並木には、黑く虫が穴をあけた黃いろい葉や赤い葉が、一つの枝に木の一枚か二枚、今にも落ちさうにして縋つてゐるだけである。堤の草も黃いろく枯れてゐる。

川の水も細く寒さうである。

一郎はいつまでも『ヱルテルの苦痛』の同じ所を膝の上に開いた儘、考へ續けてをる。彼の感情は、汽車の單調な響と、窓の外の色の淡い景色と、しツとりした田舍の秋の空氣とで、段々に和いで來た。感情が和いで來ると、心の鏡が秋の空のやうに奧の奧まで澄んで來て、昨日から今日へかけての出來事が、一々繪を見るやうに歴然映つて來た。

彼は先づ昨夜の晩飯を思ひ出した。食卓の眞中に臺ラムプが置いてあつた。ラムプの紙の笠は黃いろく煤けてゐた。細い、赤い、緣をとつた紙が、一所剝がれかゝつてゐた。ラムプの光は青白かつた。心の切りやうが惡かつたと見えて、火の形が妙に曲つてゐた。ラムプの廻りには四枚の青い皿が置かれた。母の前に置かれた皿の緣が缺けてゐた。母は長火鉢で魚の切身を一つ一つ燒いて、一郎の皿、弟の皿、妹の皿、自分の皿と、順々に燒けたのを菜箸で挾んで載せた。一郎の魚は一番黑く焦けてゐた。一郎は焦けた魚が好きなのである。

血色の惡い四人の顏は青白いラムプの光に照らされて、倘厭な色に見えた。みんな默つてゐる。みんな表情の無い顏をしてゐる。そしてみんなラムプを見詰めてゐる。妹がみんなの茶碗に飯をよそつて、それを兄、母、弟、自分といふ順に、銘々の前に置いた。四人は默つて飯を喰べ始めた。何れも表情の無い冷な顏をして。何れも青白いラムプの光を見詰めながら。

みんなの飯が濟むまで、誰も口を利く者は無かつた。茶の欲しい時も、飯を要求する時も、總て手眞似と眼附とであつた。飯が濟むと、一郎と母との間に次のやうな對話が起つた。二人とも低い聲だつた、沈んだ聲だつた、曇つた聲だつた。重い霧に壓されてゐるやうな聲だつた。

「どうしたもんだらうねえ……」

「どうしたもんだらうツて、僕には如何も爲樣はありません。」

「けれども如何にかしなツくツちやアねえ……」

「叔父さんの方はもう駄目なんですか。」

「駄目なんだとさ。」

「扶助料ももう借りて了つたんですねえ。」

「ああ……」

「それぢやア賣食ひでもするより爲方ありますまい。」

「でも、まさか……」

「まさかツて、外に爲樣はないぢやありませんか。」

「何とかならないもんかねえ……」

「今の僕の力では何ともなりませんねえ。」

「それぢやァ御前困るぢやないか……」
「僕が困るやうにしたやうですねえ。」
「さういふ譯ぢやないけれども……」
「だつて、然う聞えるぢやありませんか。」
「御前のやうに、然う言つて了つちやァ……」
「よござんす。僕は學校を廢めます……」
「學校を廢めちやァ困るぢやないか……」
「學校を廢めて銀行か何かへ出ませう。帳面をつける役か、錢勘定位なら出來ませう。齋田君に手紙を出して賴めば、何處かに口があるでせう。」
「御前に學校を廢めさせる位なら、こんな心配はしやしないよ。叔父さんも、學校だけはどんな事があつても廢めてはいけないッて被仰るしね……」
「それぢやァ學校は廢めますまい。併し、學校へ行つてれば、家の爲に働く暇はありませんよ。」
「だから、如何したもんだらうと言ふのさ……」
「そりや無理だ。學校を廢めて、家の爲に働くか。家の爲に働かずに、學校の方を勉強するか。この二つの內孰かに極めなければ駄目です。學校へも行け、銀行へも出ろ……そりやァ無理だ……そりや

ア無理だ……」
「だからさ……」
「いんえ、無理です……そりや無理です……」
「…………」
「泣くんですか……泣いたつて爲樣がないぢやありませんか。無理な事は、僕には出來ません。」
「…………」
「何を泣くんだらうなあ。何も泣く事はないぢやありませんか。無理だから無理だと言つたんです。」
「…………」
「見つともないから、泣かないで下さい。妹もゐるんです。弟もゐるんです。貴方のその涙は小い者にどんなに惡い影響を及ぼすか知れません。その涙は毒汁です。その涙に一寸でも觸ると、弟の心臓や妹の心臓や僕の心臓は忽ち爛れて了ひます……子供の事を思ふなら、どうか泣かないで下さい……」
「…………」
「まだ泣くんですね……よござんす、いつまでも泣いて入らつしやい。その涙がこの部屋中一杯になるまで泣いて入らつしやい。この家中一杯に溢れて、僕達を家の外へ押出すまで泣いて入らつしやい、そして僕達を押出した後で、一人でいつまでも泣いて入らつしやい……あゝ厭だ、厭だ……二郎もお

花も俺に隨いて來い……」

「…………」

母はいつまでも默つて泣いてゐた。一郎は荒々しく廊下を踏んで、自分の書齋へ這入つたが、二郎もお花も後から隨いては來なかつた。

一郎が部屋へ這入つて了ふと、母は聲を立てゝ泣き始めた。その訴へるやうな絕え入るやうな聲が、茶の間から雨戶の閉めてある廊下を傳はつて、一郎の書齋まで聞えて來た。

一郎は手擦れのしたレクラム本の『ヱルテルの苦痛』を本箱から出して、机の上に置くと、成るべく刺戟の强さうな、感情的な條を開けて、兩手で耳を確り押へながら、それを讀み始めた。彼は『ヱルテルの苦痛』の愛讀者である。何處でも自分の讀まうと思ふ所を直ぐに開ける事が出來る程、この小さな悲哀の書に通じてをる。彼はいつでも自分の感情が昂ぶつて來ると、自分の以上に激しい感情をこの書の內に求めて、それで自分の感情を押へようとするのである。けれども昨夜はそれも無駄だつた。

母の泣聲は、兩手の指の隙間を押し開けるやうにして耳の中へ這入つて來た。いつまでも止まない……いつまでも止まない。

一郎は今まで子として押へてゐた母に對する總ての赤裸々な非難を、一度に心の內で切つて放つた。

今日家が困るやうになつたのは、母の財政が惡かつたからである。父の死んだ後で無暗と親類に金を貸したのもその一つである。父が死んでから、生活方法を縮少しなかつたのもその一つである。父が死んだ後に、亭主の有る奥樣達と同等の交際をしたのもその一つである。そして散々な彌縫をして來て、もう彌縫がしきれなくなつた所で、息子に如何かして吳れと言ふのである。學校は廢めずに家を救へと言ふのである。家も救へ、學校も遣れと言ふのである。今まで丸で然ういふ方面の經驗をさせずに育てゝ來た子供に向つて、行きなり然ういふ方面の心配をさせようといふのである。

一郎は無理だと思つた。無理だ、全く無理だと思つた。

彼は終に決心した。もう家にはゐまい。明日家を逃げて了はう。俺さへ家にゐなければ好いんだ。母が心配するのも俺あるが爲だ。又母が賴む所のあるのも俺あるが爲だ。俺は母に心配して貰はなくとも好い。その代り母の方からも俺に賴つて貰ひたくない。俺は飽くまでも自由の身となりたい。

一體親といふものは幾つまで子供を養ふ義務があるのだらう。親が子供を養ふのに幾つまで養つたから、もう好いといふやうな時があるものだらうか。一郎は考へた。親にして一旦子を養ひ出した以上は、一生これを養ふ義務があるのではあるまいか。これに反して子供に親を養ふ責任は初から少しも無いのではあるまいか。親が子を養ふのは絕對でなければならない。中途まで養つて置いて、そこで捨てるのは殘酷である。捨てゝ置いて、その捨てた者の世話にならうとするのは更に殘酷である。

その位なら、生んだ時何故直ぐと捨てゝ呉れなかつたらうか。

一郎は思つた。俺は今母に捨てられかゝつてをる。今まで養はれて來て、急に中途で振り捨てられさうになつてをる。向うの手で捨てられない内に、此方から向うを捨てよう。俺が母に捨てられても世間の人は同情を寄せて呉れまい。母が息子に捨てられゝば、多少は世間の同情を惹かう。愈然うなれば親類も打遣つては置くまい。

然うだ、これが一番好い方法だ……俺も一文無しの、世の中に一人も頼る人の無い人間になつて了へば、却つて諦がつく……今生れた計りで捨てられたんだと思へば思へる……自由だ、全く自由の身だ……俺は然ういふ身になりたい。

母も一郎がゐなくなれば、心配が無くなるだらう。二郎もお花もまだ小學校へ行つてる子供だ。母の頼るべきは、何處までも一郎なんだ。その一郎がゐなくなつたとあれば、必と世話をする人が何處かから出て來るだらう。然うすれば、生活問題に心配が無くなる計りでなく、一郎の學校問題に就いても心配する必要が無くなつて來るんだ。

これだ、これだ。これより外に好い方法は無い。と、一郎は思つたのである……

汽車は今、廣い枯野の緩い傾斜を、飛ぶやうに走つてをる。丈の低い雜木の林が、悉く紅葉してをる。所々に松の樹が、黒く寂しく立つてをる。捨てられた人のやうである。捨てられて、捨てられた

場所を離れられぬ人のやうである。捨てられた場所に鎖で繋がれてゐる人のやうである。眞赤な、光の少しも無い、大な太陽が、枯野の西に沈みかけてゐる。

一郎は今日學校へ行くと言つて家を出た。それは晝飯を食ふと直ぐであつた。『ヱルテルの苦痛』を左の胸の衣兜に入れて、『十九世紀獨逸文學史』の筆記と蝦茶色をしたクライストの戲曲集とを露出の儘手に持つて、如何にも學校へ行きさうな風で家を出たのである。

家の近所に祭があつた。一郎は祭の人込の中を急ぎ足で通り拔けた。人のゐない小な横町へ這入つた時、彼はホッと太息を吐いた。そして（今日から俺も自由の身になるぞ）と思つた。

一郎は學校の前まで來たが、學校の門へは這入らずに、學校の筋向うの下宿屋へ這入つた。そして案內も乞はずに、二階へトン〳〵〳〵と上つて、谷村といふ友達の部屋の障子をガラリと開けた。谷村と一郎とはプラスとマイナス程に性質が違つてをる。それ程性質が違つてゐながら、こんなに仲の好いのは同じ科の內にも少いのである。「異性相引くんだ」とは一人の交際に對する一般の學說だつた。

谷村は机の前にキチンと坐つて、チャンドオス本のプルタアクを讀んでゐた。『英吉利文學史』の筆記だの『英吉利文學に現れたる花』の筆記だのが、小な床の間に載せてあつた。彼も學校を休んでゐる人らしかつた。

「どうしたい。」

「これから旅行に出ようかと思ふ。」
「これから……今直ぐかい。」
「ああ。」
「何だつてさ。」
「頭がむしやくしやして爲樣がないから。」
「そんなに頭が惡いか。」
「あゝ。」
「それぢやァ旅行も好からう。」
と、こゝまで話して來ると、谷村は疊を見ながら、一寸考へて。
「近頃何か問題が起つてるんだつていふぢやないか。」
「なァに、つまらない事さ。」
「生活の問題か。」
「破産さ……破產……實に好い語だ……實に適切な語だね。」
「どうしたんだ。」
「食へなくなつたんだ。」

「と言ふと。」

「有ると思つたものが無かつたんだ……」

「成程。」

「僕は精神に非常な打擊を受けた……僕の精神は今ではもう隅の方に小くなつて、悚々と慄へてゐるばかりだ……これでは駄目だ……何處か靜な所へ行つて、受けた傷を直して來なければならんと思ふ……」

「僕もそれは好いと思ふ。その上でなければ詳しい話を聞く譯にも行かない。又相談に乘る譯にも行かない……君は大分興奮してるやうだ……」

「ぢや行つて來る。これを預つといて呉れ給へ。」

と、一郎はクライストと『十九世紀獨逸文學史』の筆記とを、谷村の机の側に置いた。

「家へは何とも言はずに出て來たのか。」

「無論さ。」

「そりや行かんね……」

「その代り君の所へ斷りに來たんだ。」

「まあそれは好いが……旅費はあるのか。」

「それでもまだ僕の小遣が五圓殘つてゐた。それを持つて來た。」
「それで足りるのか。」
「迚も足りないだらう。」
「どうする積りだ。」
「出掛けりや如何にかなるだらうと思ふ……困つたら知らない家へ泊めて貰ふさ。」
「馬鹿を言ひ給へ。それは昔の話だ……」
と言ひながら、谷村は金入から拾圓札の綺麗なのを一枚出して、
「少しだが、これだけでも持つて行き給へ。」
「入らないよ。」
「そんな事を言はずに持つてき給へ……一夜のやどりを頼むなんて、そんな事が今時出來るもんか。」
「然うか……」
「好いから持つてき給へ。恰どこれだけ今入らないんだから。」
押問答の末に一郎は漸くその金を自分の錢入に入れた。そして谷村の下宿を出た。もう歸らない決心だといふ事は終に一言も洩らさなかつたのである。洩らせば必と留められると思つたからである……
汽車は終に黑田原へ着いた。ステエションを出て、湯の煙の立迷ふ、夕暮の寂しい廣野の一角に立

つと、一郎は初めて自由の天地を得たやうな氣がした。野飼にしてある馬の子がとつとつとつとつとつと驅けて來て、一郎の前にピタリと立留つた。そして一郎の顏を、(知らない人だ と言ふやうな眼附で凝と見詰めた。一郎は寂しい氣がした。

一郎はこの野中の溫泉宿に先づ一晩泊る事に極めた。土地の人が這入る汚い總湯(そうゆ)の前に、古い溫泉宿があつた。一郎は其所に宿を定めて、制服を溫袍(どてら)に着換へると、湯にも這入らずに、直ぐと野へ出た。そして人の聲の聞えなくなるまで歩いた。

一郎は或小高い岡に登つた。そして一面に黃いろい廣野を凝と眺めた。遙に那須の噴煙が見える。黑い煙が暮れがたの秋の空を眞直に立登つてをる。長い細い帶のやうに見える遠くの野中の道を旅の人が一人、俯向きながら歩いてをる。岡の下の灌木(くわんぼく)の葉の眞赤に紅葉したのが、一つ一つ同じ位の間を置いて、絕えず散つてをる。火山が煙を吐く音も聞えない。旅人が道を歩く音も聞えない。灌木の葉が散る音も聞えない。靜だ、實に靜だ。一郎は覺えず耳へ手を遣つた。耳が無くなつたのではないかと思つたのである。

彼は日の全く暮れるまで、この岡に蹲踞(しやが)んでゐた。又昨日の事を考へたのである。一昨日の事を考へたのである。半月許り前からの事を考へたのである。そして自由と寂寞とを思ふさま味つたのである。

四邊が暗くなると、俄に寒くなつて來た。馬の細く嘶く聲が、突然この大なる寂寞を破つた。一郎

は夢から醒めた人のやうに、突と立上つて、何者かの襲來を恐るゝものゝやうに身を構へて後を見た。温泉宿の方には、もう燈がついてゐた。燈が湯の烟で陰つたり明るくなつたりしてゐた。

一郎は宿へ歸つて、初めて湯殿に這入つた。朦朧したランプの光で、立登る湯氣を凝と見詰めながら、彼は深々と湯に浸つた。天井に溜つた湯氣が、冷い雫になつて、時々ポタリと一郎の顏へ落ちた。彼はそれを好い心持に思つた。

汽車が湯殿の直ぐ外を、地響をさせて通つた。一郎は（明日は何處へ行つたもんだらう）と考へた。彼は偶と、三月許り前から福島に來てゐる齋田といふ年上の幼馴染を思ひ出した。彼は母と言ひ合ひをした時に、「齋田君に手紙を出して頼めば」と言つた、その齋田である。齋田は銀行員である。東京の日本銀行に出てゐたのが、近頃福島の出張所詰になつたのである。

「然うだ、齋田君の所へ行かう。」と、一郎は獨語を言つた。そして、宿で借りた湯垢で赤くなつてる手拭で、顏をざぶッと一つ洗つた。

湯から上ると、一郎と同年位の番頭が古びた宿帳と、汚い硯箱を持つて這入つて來た。

「あとで書いとくから置いてつて呉れ給へ。」

と、一郎が額の汗を拭きながら、倦さうな聲で言ふと、

「はい。」

と、語が明晰（はつきり）してをる。

「君はこゝの息子か。」

「いえ。然うではありません。」

「番頭か。」

「はい。」

「大層若い番頭さんだね。」

「こゝで働いて、金を貯めて、それから東京へ勉強をしに參ります。」

と、如何にも生々とした聲で言つた。一郎は何となく責められるやうな氣がした。

「東京へ行つたつて充（つま）らんよ……こんな靜な所にゐて何が不足なんだ。」

と、一郎は口の中で謐（つぶや）くやうに言ふと、番頭に脊中を向けて、ゴロリと横になつた。

學生のやうな若い番頭は、一面憫むやうな、一面解し難いといふやうな顏附をして、默つて出て行つた。

番頭のゐなくなつたのを見極めると、一郎は突と身を起して、忙てゝ宿帳を手にとつた。そして急いでそれを點檢し始めた。紙に記された群集の內に、一人でも知つてる人を見出さうとしたのである。名だけでも好い、手だけでも好い、誰か知つてる人に會ひたいと思つたのである。それ程寂寞は最う

一郎の心を犯してゐた。

と、彼は不思議な事を發見した。思ひも寄らぬ友達の名が書いてあつたのである。しかもその友達の名の隣に、妻何子と女の名が書いてあつたのである。この友達は中學時代に一郎と仲が好かつた。中學を出ると、目的が違ふので高等商業に這入つてからも、交通は暫くあつたのだが、近所にゐた兩方の家が、お互に段々離れて了つたので、近頃ではもうすッかり消息が絶えて了つたのである。併し近頃或女に戀をして、それが爲に親との仲が面白くないといふ事は、外の友達から仄に聞いてゐた。一郎は更に宿帳を見た。今年の夏來たのである。出發地は東京としてある。行先地は白河としてある。

白河は女の故鄕らしい……

一郎はその友達の中學時代の蠻な風を思ひ出した。高商へ這入つてから急に變つた、粹な學生姿を思ひ出した。戀をした女學生の顏を想像して見た。彼がその女と二人で、態々この寂しい溫泉を選んで遣つて來た時の心持を想像して見た。宿帳に女の名を妻何子と書いて、默つてそれを女に見せて、そして嬉しさうに笑つた友達の顏が思ひ浮べられる。二人は必と夕方一緒に野へ出たらう、そして必とあの小高い岡に並んで立つたらう。その時二人は四邊の寂寞を破るまいとするやうに、密々と小聲で何を話したらう……一郎は今その囁きを聽かうとするものゝやうに、凝と障子の方へ聽き耳を立てた。

「この人達も自由を求めに來たんだ。」と、彼は自分に言つて聞かせるやうに、聲を出して言つた。（併し、これは戀だ）と思つた。

「俺はつまらんなア……」と、一郎は又聲を出して言つた。そして、醜い物でも押し退けるやうに、膝から宿帳を押退けた。

＊　　＊

一郎の勞れた重い頭は、深く括り枕に食ひ入つて、明くる朝の十一時頃まで、死んだ者のやうに眠つてゐた。

眼が覺めると、一郎は直ぐ湯に這入つた。その日はすツかり曇つて、今にも雨が降つて來さうな天氣であつた。彼は湯に浸つた儘、冷い灰色の空を眺めて、又家の陰鬱な空氣を思ひ出した。（併し、俺はもう自由の身になつたんだ）と思ふと、ニコリとした。

湯から上ると、朝晝兼帶の食事をして、勘定を濟まして宿を出た。若い學生のやうな番頭は、又憫むやうな、解し難いといふやうな眼附をして、暫く一郎の後姿を見送つてゐた。

一郎は最一度野へ出た。そして最一度昨日の小高い岡へ登つた。那須の噴烟は雨催ひの雲に壓されて、山を這ふやうに靡いてゐた。昨日旅人の歩いてゐた野中の道は、人の氣の名殘も留めずに、落莫として横たはつてゐた。岡の下の灌木の葉は、昨夜一晩の内に落ち盡したものと見えて、枯れた骨の

やうな枝ばかりが寒さうに黒く慄へてゐた。靜だ、昨日よりも靜だ。一郎は何の氣なしに、左の胸の衣兜を、右の手で上から押へた。そして其所に『ヱルテルの苦痛』が納つてある事に氣がついた。併し一郎はその愛する悲哀の書を出して見ようともしなかつた。この廣野の寂寞は、ヱルテルの戀の悲痛よりも、遥に今の一郎に近かつたのである。彼は宿帳で會つた友達を思ひ出した。そして『ヱルテルの苦痛』を衣兜の上から押へながら、(これはあの人達二人が、この岡へ來て讀むべき物だ)と思つた。

やがて彼が岡を降りた。そして、汽車道の踏切まで歩いて來ると、別を惜むもののやうに、最一度振返つて、那須の畑を見た。

彼がステエションへ這入ると、間もなく福島へ行く汽車が來た。このステエションからこの列車に乘るのは、一郎唯一人だつた。この列車からこのステエションへ降りたのも唯一人だつた。それは赤ら顏の、丈夫さうな、百姓らしい老爺だつた。汽車は陽氣な歌でも唄ひ出しさうな老爺の代りに、陰氣な、今にも泣き出しさうな青年を載せて走り出した。間もなく、雨が、ボツリ――ボツリと降つて來た……

一郎は客の少い三等室の片隅に腰を掛けて、斜に勢好く汽車の窓へ吹掛けて來て硝子に打つかると、タラタラと碎けて眞直に硝子板を傳はつて垂れる雨の雫を凝と見詰めながら、今日會ひに行く齋田といふ友達の事を色々と考へた。

齋田は一郎より三つも年上である。併し、小學校が同じであつた爲に、子供の時から一郎と仲を好くした。一郎は高等學校へ這入ると、出身の小學校から同窓會の幹事に押された。齋田も同窓會幹事では元老の方であつた。そこで二人は一層親しく往來をするやうになつた。

一郎は常に思ふ。（齋田君は實に偉い人だ。俺には迚もあの眞似は出來ない）。彼は一郎と同じやうに早く父に死に別れた。父に死なれると、直ぐ生活問題が湧いて來た。それ故、彼は殆ど小學以上の教育を受けてなかつた。彼が今日の地位まで登る事の出來たのは、偏に講義錄のお蔭であつた。彼は子供の時から家の爲に働いた。給仕もした。小使もした。受附もした。そして、母と妹と祖母とを細い腕一本で養つて來た。

一郎が齋田に就いて殊に感心してゐる事は、その稀に見る妹思ひな事である。一郎が高等學校へ這入つてから、同窓會會幹事として、時々何かの相談をしに齋田の家を訪ねた時分には、齋田は最う立派な行員になつて、國庫係を勤めてゐた。併し、彼は出來るだけの儉約をして、儉約した丈の金を悉く妹にかけてゐた。齋田は妹を音樂の學校に通はせてゐたのである。今も尙通はせてゐるのである。

一郎は或夏の晚に、齋田の家を訪ねた時の事を思ひ出した。齋田の家は或小な神社の境內にあつた。餘り參詣人の無い、寂しい境內の一隅に、神官の持つてゐる汚い三間長屋があつた。齋田はその取附の家を借りてゐたのである。一郎が訪ねた時、齋田は白い浴衣の胸を寬けて、柱に凭り掛りながら、

膝を抱いて、呆然してゐた。臺所の暗闇では、團扇をバタ〳〵遣りながら、母と祖母とが何か小聲で話をしてゐた。妹は夜學に行つてゐて、留守だつた。晝は音樂の學校へ行き、夜は英語の學校へ通ふのである。

「斯うやつて呆然してるのは實に勿體ない譯だが、どうも爲方がないんだ。夜は全く用が無いんだから、夜學にでも行くと好いんだが、一錢でも不必要な支出は省くやうにして、それをみんな妹にかけて了ひたいと思つてるんだ。僕の代りに妹が夜學に行つてゐるやうなものさ。斯うやつて無意味に時間を消してるのも妹の爲だと思へば却つて嬉しい。もう僕などは出來損つて了つたんだから、幾ら勉強した所で爲方はないさ。せめて妹だけは、生活の苦痛をさせずに、暢氣にその本分を發達させて遣りたい。僕は妹の犧牲になる積りなんだ……」

齋田はこんな事を言つた。それから二人で近所の緣日へ出掛けた。そして二人で氷水を飮んで別れた。

齋田の妹は色の淺黑い、眼の可愛い女の子である。彼女は學校へ出ても、世間を歩いても、嘗て兄の愛以上の愛に遭遇した事がない。だから多少世間を曲んでをる、白眼視してをる。友達とも餘り口を利かない。教師にも餘り親しまない。併し、音樂の方の技術には餘程天分が豐で、友達からも教師からも羨まれてをる。

彼女は學校では『變人』と言はれてをるが、家にゐる時は決して『變人』ではない。母にも、祖母にも、兄にも、それは〳〵優しくする。併し、生活上の事などに就いて、氣を揉んだりするやうな事は更に無い。それは兄が然う育てゝゐるのである。それを望んでゐるのである。彼女は學校の朋輩に少しでも落ちるやうな身裝をしてゐた事はない。

妹の業が進むに連れて、兄の負擔は益々重くなつた。それにこの春から祖母が老病の床に就いた。幾ら年寄だからと言つて、孫として祖母の死を早める譯には行かない。出來るだけの手當はしなければならぬ。

そこで齋田は決心した。何處か地方の出張所へ遣つて貰つて、少しでも餘計に金を取らなければならぬ。東京にゐては中々上が支へてゐて、上れはしない。可愛い妹を置いて故鄕を離れるのは厭だが、一家の爲ならそれも爲方がない。然う思つて、彼は地方の出張所詰を願つたのである。それが三月前に漸と許されて、福島へ來る事になつたのである。彼は福島へ立つ時、一郞に向つて、「君は阿父さんが無くても、生活に困らないから仕合だ。しつかり勉强して呉れ給へ。僕もこれから又二三年奮鬪だ。出稼ぎ――といつたやうな心持がするよ。」と言つた。その時、彼の美しい眉宇の間に、一郞は男らしい決心の色を讀んだ。………

汽車は郡山で長く留つた。雨は益々激しく降つた。じめ〴〵と濡れた人が澤山に乘込んで來た。間

もなく汽車は又、寒い雨を突いて走り出した。

一郞は偶と日本銀行の中で齋田に會つた時の事を思ひ出した。或春の事だつた。一郞は母の代理で東京府へ扶助料を貰ひに行つた。支拂命令の通知書を其所で貰つて、それから日本銀行の國庫まで來て、其所でその通知書と引換に現金を受取るのである。一郞は滅多に銀行などへ來た事がなかつた。彼は恐る〳〵石段を登つて、大な建物の中へ這入つた。這入ると、そこは天井の高い、明い、大きなホオルだつた。所々にベンチが置いてあつた。それに大勢人が腰掛けてゐる。暖い春の光が、天上の曇硝子を通して、遍く建物の中に溢れてをる。大な溫室のやうでもある。繪で見た西洋のステェションのやうでもある。屋根のある公園のやうでもある。石の敷いてある床を往つたり來たりする人の、足を引摺る音が、キツキツと不愉快に響く。人の名を呼ぶ聲、それを取次ぐ聲、それに答へる聲が建物の中に大く自由に響き渡る。銀貨を數へる音、札を數へる音が、四方から人を取卷くやうに聞えて來る。

一郞が國庫係の口へ行くと、恰ど齋田が番號札を渡す役目をしてゐた。家で見る齋田とは丸で別人である。輕さうな春の服を着て、頭を綺麗に、併し少しの厭味もなく、分けてゐる。鼻の下の濃い、短い、先を剪んだやうな髭も、中々映りが好い。瀟洒たる青年紳士だ、好個の青年銀行家だ。

「や、一郞君か。」

「ああ。今日はマザァの代理さ。」

「用が濟んでも少し歸るのを待つてゐ給へ。もう直晝の休だから、方々案内しよう。好いんだらう、少し位遊んで行つても。」

「ああ、構ふもんか。」

一郎は金を受取つてからも、外へは出ずに、暫くベンチに腰掛けてゐた。又、人の足を引摺る音が聞える。人の名を呼ぶ聲、それを取次ぐ聲、それに答へる聲が聞える。銀貨を數へる音、札を數へる音が聞える。

やがて、齋田が遣つて來た。一郎は齋田に案内されて、銀行の中を見物して歩いた。エレヹエタアにも載せて貰つた。貴賓室をも見せて貰つた。圖書室も見た。會議室も見た。裏の方へ出ると、テントを張つて兵士の屯してる所があつた。その直ぐ側の建物の一部を、硝子窓の外から覗いて見たら、女が大勢並んで、新しい札を極めて早く勘定してゐた。

ああ、あの時分は、役目で冷に札を數へてゐたあの女達よりも、もつと自分は金錢に無頓着であつた。あの時分の心持では、自分の家と日本銀行との間に、財産の上で然う多寡があるとは思つてゐなかつたに相違ない。その暢氣は奪はれて了つたのである。その夢は破られて了つたのである。殘酷だ、失敬だ、無理な世の中だ……

一郎は眼を閉つた。汽車の屋根を打つ雨の單調な響は猶と氣を滅入らせる……と、足を引摺る音がして來た、人の名を呼ぶ聲がして來た、銀貨を數へる音がして來た、札を數へる音がして來た、……一郎は今までに覺えのない一種異樣な感じで、それらの音に凝と耳を傾けた。すると、息が跳んで來た、咽喉が渴いて來た。

母の顏――弟の顏――妹の顏――一郎の顏。みんな嬉しさうに笑つてゐる。一郎が銀行から取つて來た金を母の前に出すと、母は直ぐと拾圓札を一枚拔いて、一郎に奥れた。そして「お使賃だよ。」と言つた。母は殘の札を勘定もせず帶の間へ挿むと、「さア今日はみんなに御馳走しよう。何處でも御前達の好い所へ行かう。お花と二郎には歸りに玩具を買つてやるよ。」と言つた……その嬉しかつた樂しかつた紀念が、今一郎の頭を、針で突くやうに責め呵む……

苦い顏をして眼を開くと、外は雨が車軸を流すやうに降つてゐる。又、銀貨を數へる音が聞えて來た、札を數へる音が聞えて來た。一郎は眼を開いてゐて、それを聞いた。やがて、雨の煙る中に多くの煙突が見えて來た。煙を吐く大きな建物が見えて來た。汽車は福島のステエションへ這入つた。

一郎は汽車から降りると、子供の驛夫を捕へて、日本銀行の出張所のある所を訊いた。道が分ると、一郎は直ぐ雨の中へ飛び出した。傘も無いのである。外套も着て來ないのである。彼は商家の軒下から軒下を傳つて步いた。

銀行の出張所は或町の角にあつた。びしよ濡れに濡れた一郎は、氣が引けるといつた樣な風で、恐る〳〵スヰング・ドアを中へ押した。

中へ這入ると、ベンチに腰掛けて待つてゐた町の人達も、網の中で働いてゐた銀行の人達も、一齊に一郎の顏を凝と見た。一郎は冷い雨の雫が肩から腕、腕から手の甲を滑つて、床の三和土にボタリ、ボタリと垂れるのを覺えた……銀貨を數へる音がする、札を數へる音がする……一郎は俄に乞食にでもなつたやうな氣がした。

「一郎君ぢやないか……」

顏を突出すやうにして網の中から呼ぶ人がある。それは一郎の懷しんでゐた齋田であつた。

「よく來たね……何しろそれぢや大變だ……この裏へ一寸曲ると僕等の社宅がある。そこへ行くと婆やがゐるから、婆やに然言つて、僕の着物を出させて、直ぐ着換へ給へ。僕も最う直歸るから……」

一郎は寒に慄へながら、極惡けに銀行を出た。社宅は直ぐと分つた。婆やといふ人に譯を話すと直ぐ上げて呉れた。そして、一郎に濡れた制服を脱がして、綿の澤山這入つた齋田の不斷着を着せて呉れた。一郎は眞赤になつた手の甲を擦りながら、暫く齋田の部屋に呆然坐つてゐた。眼が倦い。頭が重い。花も木も無い中庭へ小止もなく降る雨が、遠く微に耳に響く。

間もなく齋田が笑ひながら歸つて來た。

實に意外だ。何と思つてこんな充らない所へ遣つて來た。漫遊か。」

暗くなつて來た。婆やがランプに火を點けて持つて來た。ランプの黄いろい光を見ると、一郎の頭は稍輕くなつて來た。

「君に急に會ひたくなつたんだ。」

「僕も君には一度來て貰ひたいと思つてゐたんだが、何しろ何も見る所のない、斯ういふ殺風景な所なんだからね……」

「別に名所を見に來たんでもないから、それは好いさ。」

「まア、緩りしてゐ給へ。その内東山の溫泉へでも案内しよう。」

「有難う。併し、然う緩りもしてられないのさ。」

「不意に思ひ立つて來たんだね。傘も外套も無いのは酷い。不相變坊ちやんだね。僕は君が羨しい…」

「ところが、その坊ちやんが急に坊ちやんで無くなつたんだ。」

婆やが夕飯を持つて來た。暖い飯と暖い薩摩汁。一郎はふッ〳〵と白い息を吹きながら、幾杯も幾杯も忙はしくそれを喰べた。齋田はその樣子を見て、初は喜んで笑つたが、中頃から稍不思議に思ひ始めた。齋田は一郎のこんな樣子を初めて見たのである。齋田計りではない。一郎自身から見ても、こんなに自分を卑しくした事は今までに一度も無かつた。それは一郎も知つてゐた。知つてゐたが止

める事が出來なかつた。

一郎は齋田から何も訊かれない內に、急變のあつた一家の事情を長々と述べ始めた。訴へるやうな調子で。同情を求めるやうな調子で。愚痴を零すやうな調子で。一郎はいつの間にか、谷村の下宿で同じ話を簡潔に勢好く話した時のやうな若々しい調子を失つてゐた。

話を終へると、彼は力の無い笑ひ方をして、

「もう面倒臭いから家へは歸るまいと思ふんだ……」

と、常談のやうに言つた。

「馬鹿を言つちやいけない。」と、齋田は飯茶碗で茶を飲みながら、弟でも叱るやうな調子で言ふ。「家を出て、何處に家があるもんか。君は自由、自由と言ふが、天下に自分の家程自由な所はありやしないんだぜ。それは世間へ出て見れば、直ぐに分る事だ。束縛は內に無くて却つて外に有るんだ。一間しきやない長屋に住んでゐても、公然の夫婦なら、廣い天地を唯二人で占領してゐるやうにも思へるだらう。那須野の原の眞中に立つて見た所で、駈落者の二人連ぢやあ、身を置く所も無い位に狹い氣持がするだらう……」

一郎は思はず飮みかけてゐた茶をチャブ臺の上へ置いて、探りを入れるやうに齋田の眼の色を凝と見た。齋田は色の白い頰を、稍赤くして、熱心に一郎の顏を見ながら、無心に向語を續ける――

「天下には僕の如き憫むべき人間もゐるんだ。まァ僕の今までの生活を見て見給へ。君の所謂『自己の生涯』なんてものは一分間だつてありやしなかつた。僕は生れ落ちるから人の爲に計り働いて來たんだ。そして一生人の爲に働かなければならないんだ、僕は滿足して、それを遣つて行く積りだ。犧牲と奮鬪――これが僕の理想さ……」と、言ひながら、卷烟草に火を點けて、それを一服落着いて吸つた後で、「それを思へば、君などはどんなに幸福な人か知れやしない。今困つたつて、學校も最う大學まで來てゐるんだ。實力が出來てるんだから、どんなにしたつて遣つて行けると思ふ。好いから、家の爲にも稼ぎ、自分の爲にも勉强し給へ。兩方一緖には遣れないと、君は今言つたが、そんな意氣地の無い事でどうなるもんか。そりや學校へ行きながら、銀行へ勤める事は出來ないだらう。併し、何も銀行に限つた事はありやしない。語學を子供に敎へたつて好い、飜譯物を引受けたつて好い、已むなくんば辭書の校正を遣つたつて好いぢやないか。人生は詩ぢやないよ。人生は事務だよ、ビジネスだよ。昔は如何だか知らないが、今は然うだよ。若し飽くまで人生が詩なら、事務が詩なんだ、ビジネス、イズ、ポエトリイなんだ……まァ、好いから二三日此所で遊んで、頭が直つたら家へ歸り給へ。阿母さんも嘸心配してるだらう。今夜僕から端書を出して置かう……」

一郎は初から終まで默つて聞いてゐた。折角自分の建てた家を土臺から引繰り返されたやうな氣がした。折角自分が乘出した新しい舟の舵を折られたやうな氣がした。一句、一句、實に厭な語だ、實

に痛い語だと思ひながら聞いた。併し一郎は決して齋田を憎くは思はなかつた。唯齋田の口から出る語を惜いと思つた。彼は默つて聞いてゐながらも、早く止めて吳れゝば好い、早く止めて吳れゝば好いと思つてゐた。然るに、話が止むと、却つて一郎は氣が滅入つて來た、眼が眩んで來た、耳が鳴つて來た。

「さァ一つ田舍の芝居でも御覽に入れよう……まァ然う煩悶する事はないさ。」と言つて齋田は笑ひながら立上ると、大な聲で、「婆や、足駄と傘を出しときな。御客樣の分も何かあるだらう。」と叫つた。足駄を穿いて、銀行の名を書いてある番傘を差して、齋田と列んで外へ出ると、一郎の頭は稍開いて來た。灯影の十分に屆かぬ雨の夜の大通りを、忙しげに往來する町の人の黑い影は、一郎の氣を稍浮き立たせた。

芝居は遠くはなかつた。一郎と齋田が列んで中へ這入ると、見物は珍しさうに二人の顏をジロジロ見た。狂言は『銀行の祕密』といふのだつた。役者は勿論新俳優だつた。座頭は一時東京でも鳴らした事のある秋岡某といふのだつた。齋田も一郎もその名を覺えてゐた。二人は子供の時の記憶を呼返して、その荒んだ藝と、衰へた顏色とを憫み合つた。一郎の今度の問題に就いては、社宅を出てから、もう一言も互に言はないのである。言はないやうにしてゐるのである。

狂言は殺傷の多い、慘酷な、探偵小說的なものであつた。齋田と一郎とは、座頭が出てゐる間だけ、

惘むやうな眼附で、舞臺を見てゐるだけで、あとは大抵話計りしてゐた。友達の話――東京の話――福島の話――昔の追憶。

「君と一緒にハムレットを見に行つた事があるねえ。」

齋田は今買つた駄菓子の豆捻を噛りながら、二年前に一郎と本郷座へ行つた時の事を言ひ出した。

「然う、然う。」

「今だから話すが、あの時は實に苦しかつたんだ。僕は一體家の內がどんなに苦しくつても、それを人に見せない――卽ち訴へない――主義なんだらう。だから、君と約束した以上は苦しくつても斷るのは厭だつた。しかもあの時は妹に新しい譜を買つて遣らなきやならないんで、唯さへ參つてゐた時なんだ。爲方がないから、親父の形身の刀を竊と持出して、質屋の暖簾を潜つたんだ……」

「そりやァ氣の毒だつた。僕はあの時自分の方から誘つて置きながら、却つて君の御馳走になつて了つた。」

「そんな事はまァ好いさ。」と言ひながら、齋田は又新しい豆捻を一本取つて、「一體江戸つ子といふ者は妙なものさ。どんな苦しい人間でも芝居とお祭だけは必と忘れないからね。今夜の君と僕だつて然うだ。」僕は當時中々暢氣な身分ぢやないんだ。出稼ぎに來てゐる人ぢやないか。君は又容易に解決の出來ない大問題に打つかつて、たつた今家を飛び出して此所まで來た人ぢやないか。その僕とその君

とが、暢氣に芝居を見てゐるんだ。江戸つ子の淺薄な所も此所にあるなら、又深い所も此所にあるのさ。僕等の心持がどうして此邊の田舍ッぺいに分るものか。君の阿母さんだつて、單にその江戸つ子たるに過ぎんのだ。何も君のやうに言ふ事はありやしないと思ふ。君の責め方は丸で東北人の責め方だ……」

斯う言つて、齋田は聲を上げて笑つた。一郎は話が又自分の避けてる問題に向いて來たので、それを逃げるやうに、

「今日ステエションへ着くと、この町に祭か何かある樣子だつたが、然うなのか。」

と、餘り注意もしなかつた事を、無理に記憶から呼出して言つた。

「ああ。明日あるんだ。中々盛なものださうだ。明日は恰ど日曜だから、天氣だつたら一緒に歩かう。」

二人が話に夢中になつてゐる内に、芝居はいつの間にか終局に近づいてゐた。惡人が亡びつゝある、善人が榮えつゝある。一郎と齋田は込まない内にと思つて、罵るやうな訴へるやうな役者の聲を後にしながら、席を立つて木戸口の方へ出た。

＊　　＊

明くる日も、矢張朝から雨が降つてゐた。一郎も齋田も、婆やが隣の部屋を掃除する音で、同時に九時頃眼を覺ましたが、雨は降るし、日曜ではあるしといふので、齋田は直ぐ二度寢をして了つた。

一郎も最一度寢ようと思つたが、色々な事が思ひ出されて、どうしても最う眠れなかつた。

一郎は、節の多い天井の一所を見詰めながら考へた。俺はどうしても家へは歸るまい。成程、そりや齋田君の言ふ事は本當だ。家を出たつて自由はあるまい。母を責めるのは慘酷だらう。併し、俺が家を出たのは、單に自由を求めるだけが目的ではなかつた。單に母に對して腹を立てた丈が動機ではなかつた。俺は今まで連れて來られた道を、急に取變へられたので、歩き難くて爲方がないから、いつそ振出しへ戻して貰つて、今度は自分で選んだ道を、自分で勝手に歩いて見たいと思つた丈の事だ。齋田君の說は如何にも尤だが、俺の今度の出奔とは一向交渉の無い俗な說だ。俺は飽くまでも家へは歸るまい。

一郎は然う思つたが、何となく心が不安になつて來た。そこで默想の方向を變へて、今度は如何して齋田の所を逃げようかといふ問題を考へ始めた。東京へ歸ると言はなければ、必と返しては吳れまい。東京へ歸ると言つて、內證で郡山までの切符を買つて、東京行の汽車に乘つて、そして郡山で降りて了はう。郡山で降りたら、それから何處へ行かう……

婆やが障子を開けた。二人がまだ寢てゐるのを見ると、笑つて又障子を閉めた。そして廊下をバタバタと臺所の方へ行つて了つた。

然うだ。會津へ行かう。一郎は先づ斯う考へた。いや、會津よりは猪苗代へ行かう。彼處には田園

生活で有名な三輪先生がをられる筈だ。先生を訪ねて、下男か學僕にでもして貰はう。それが好い、それが好い。

一郎は人から聞いた事のある僅な知識で、猪苗代の景色を想像しようとした。山の中の靜な湖。湖水に沿うた街道の紅葉。マタシャレを穿いて稻を取入れる百姓。寂しい湖水の岸に近く小い舟を浮べて釣をする漁夫。湖畔の小な郵便局。越後から湖を渡つて來る汽船の、ぼおーッといふ笛の音……

齋田は眼を覺ました。そして「もう起きよう。」と言つた。二人は顏を洗つて、暖い味噌汁で、遲い朝飯を食べた。

「どうだい。雨は降つてるが、外へ出て見るかい。」

「出て見ても好いね。」

「雪の景色も見て置くさ。」

二人は昨夜のやうに、足駄を穿いて、傘を差して、社宅を出た。雨は降つてゐても、町は何となく賑だつた。大通りでは、門並に繪をかいた行燈が掛けてあつた。その行燈も、行燈の上の花傘も、雨に濡れて、紙は剝がれ、繪の具は赤く流れてゐた。大な店はみんな格子を閉めて、商賣を休んでゐた。格子の隙間から、薄暗い店の奧で、綺麗な着物を着た女の子が大勢、金屛風の前に坐つて遊んでゐるのが見えた。

「筑土八幡の祭ぢや。好く君の町と僕の町と喧嘩したね。」

齋田は子供の時の事を言ひ出した。齋田は飯田町で育つたのである。一郎は隣の富士見町で育つたのである。

「然う、然う。」と一郎も昔を思ひ出すやうな顏附をして、「君も樽天王を擔いだ連中だつたね。僕も好く擔いだが、喧嘩となると、いつでも弱かつた。一遍なんか、九段坂の中途に唯一人取殘されて了つて、樽御輿を持ち扱つた事があつたつけ。みんな飯田町征伐に行つて了つて、僕一人殘されて了つたんだ……。」

こんな話をしてゐる內に、偶と一郎は母が山王の祭へ行つて轉んで歸つて來た時の事を思ひ出した。一郎がまだ八つか九つの頃だつた。母は一郎の學校へ行つてる留守に、一人で山王の祭へ出掛けた。恰どそれは雨上りの日だつた。母は人込の中で下駄を覆して、泥濘へ横さまに倒れたのであつた。一郎は學校から歸つて來ると、恰ど手の擦傷を押へて祭から歸つて來た母と、門の所で會つたのである。一郎はその時、どんなにその小な胸を痛めたらう。母もその頃はまだ若かつた。若い母が人込で轉んだ時、どんなに人々は笑つたらう。母は嘸顏を赧くしたらう。嘸泥だらけになつた着物を恥づかしく思つたらう。一郎は母思ひの、神經の鋭い、感情の細やかな子供であつた。その口も、母の身に起つた事を、隅から隅まで想像して、涙を零さない許りに母の恥を口惜しく思つた……

一郎は俄に齋田の方を振向いて、

「僕は今日もう失敬しようかと思ふ。」

「歸る氣になつたか。」

一郎は默つてゐた。

「東京へ歸るんでなけりや、僕は返さんよ。」

一郎はまだ默つてゐた。勿論、東京へ歸る氣はないのである。今、母の事を思ひ出したので益々東京へ歸るのが厭になつたのである。それに昨夜寢てから、齋田はどうも東京へ端書を出したらしい。遲々してると、必とその返事が來る、それを見せられるのも亦一つの苦痛だ。どうしても今の間に立つて了はなければならぬ。一郎は斯う思つた。

「東京へ歸るよ。」

「本當に歸るのか。」

「ああ。昨夜寢てから考へ直したんだ。」

一郎の語は不思議に少しも僞の調子を帶びてゐなかつた。一郎は自分で嘘だと思つてゐるのに、少しも嘘らしい調子の出ないのを自分で妙に思つた。

「宜しい。そんなら一刻も早い方が好い。これから家へ歸つて、直ぐ支度をして出發し給へ。僕はス

テエションまで送つて行く。」
「それには及ばんよ。」
「いんや、然うでない。」
雨は少し小降りになつた。町は益賑になつて來た。齋田と一郎は社宅へ歸つた。暫くすると、一郎は借着を制服に着換へて、齋田と一緒に又社宅を出て來た。
「お歸りにお客さんの傘も忘れねえでね……」
と、後から婆やが叫つた。齋田は振向いて、笑ひながら頷いた。
ステエションへ這入ると、直ぐ齋田が東京までの切符を買つて了つた。
「これは本の志だ。君の新生涯の鹿島立には、赤い切符が適當だらう。」
斯う言つて、その切符を掌に載せられた時、一郎は礑と當惑した。
「こりや困るねえ。」
「何が困るものか。東京へ行く人が青森行の切符を貰つたのなら、そりや困るかも知れない。自分の行きたい所へ行ける切符を貰つて、困る奴はあるまい。」
齋田の語は、一々針を刺すやうだ。
「有難う。感謝して貰つとく。」

と、一郎は勢よく言つた。この語にも少しも嘘らしい調子は無かつた。併し、一郎自身は、俺は齋田を僞いてゐるのだと思つて、窃に身を責めてゐた。

爲方がない。郡山で降りて、この切符は裂いて捨てよう。そして郡山から猪苗代までの切符を買はう。齋田君の志は有難いが、俺の內部生命の死滅には代へられない。新しい人間になる事が出來たら、その時詫りに來れば好い。一郎は斯う決心して、盗むやうな眼附で齋田の顏を覗くやうにした。齋田は無心に汽車の來る方を見てゐた。

「來たぞ……」

齋田が斯う言つて身を引くと、汽車はもう地響をさせて、その大な長い身體をプラットフォオムに横たへてゐた。

齋田は或三等室の戶を開けた。一郎が乘込むと、直ぐ後から閉めて了つた。一郎は暫く窓から首を出してゐた。

「一つ確り遣つて呉れ給へ。僕もまだ二三年は此所で奮闘だ。少しでも餘裕がつけば、直ぐ東京へ歸る。誰が好き好んでこんな田舍にゐるものか……當分は君も辛からう。今まで爲ない事を爲るんだからね。なアに、口は幾らでもあるもんだよ。少し探して見給へ、直ぐ見つかるから。」

齋田はこんな事を言つた。一郎は心を冷に持つて聞いてゐたが、時々暗い心の奥を眩しい光で照ら

されるやうな氣がした。と、汽笛が鳴つて、汽車が動き出した。齋田はプラットフォォムに立つて、いつまでも鳥打帽子を振つてゐた。

一郎は腰を掛けた。そして窓の外を眺めた。まだ細い雨が降つてをる。煙の町、煙突の町、製絲場の町、汽車は段々にそれを離れて行く……

一郎は自分の前を見た。日本髪に結つた十七八の女が腰掛けてゐる。一郎の掛けてゐるベンチには、一郎の外に人がゐなかつた。女の掛けてゐるベンチには、女の外に人がゐなかつた。一郎と女とは何等の妨なしに、斜に相對してゐた。

女は色が白い、皮膚が美しい。陰影のある、深みのある、味のある顏立である。少し廣い額にも意味がある。小な黑い眼にも意味がある。透通るやうな桃色の耳にも意味がある。眞白な、光のある、綺麗な齒が、時々薄い下唇を噛む……

一郎は凝とこの女の顏に見惚れてゐた。一郎は自分の頭に一杯になつてゐた色々な苦痛や心勞が、咄嗟の間に、この女の額や眼や耳に吸ひ取られて了つたやうな氣がした。それでもまだ殘つてゐる頑固な苦痛や心勞は、この女の美しい白い齒で一つ一つ噛み碎かれて行くやうな氣がした。

女は一等室を慣する程の着物を着てゐた。着物以上の氣品を持つてゐた。一人旅の寂しさに態と三等を擇んだものらしかつた。一郎は仰向いて、女の坐つてる上の網棚を見た。林檎の籠が載つてゐた。

赤皮の薄手な長方形の鞄が載つてゐる。何れにも青森の旅館の札が下つてゐた。札の裏には何れも上野行と書いてあつた。札は網の外に垂れてゐて、汽車の動く儘に、折々クル〳〵と廻るのである……一郎は何處までもこの女に隨いて行きたくなつた。戀ではない。男が女を慕ふといふ平凡な心持ではない。この女に隨いて行けば、新しい生活の道が、前へ前へと開けて行くやうな氣がしたのである。

一郎は初め旅館の札に『上野行』といふ三字を見た時、覺えず慄然として眼を背けたが、女の顏を凝と見てゐる内に、その恐怖は段々に滅じて來た。彼の頰は段々に赤く活氣を帶びて來た。

女は美しい手で始終編物をしてゐた。眞白な毛絲を、眞白な象牙の編棒で、巧に小な靴下を編むのである。時々顏を上げて、可愛い眼で雨の降る外の景色を眺めた、又、一郎の顏を凝と見た。一郎の顏を見る時は、いつでも笑ふやうな眼附をした。今にも話しかけさうに唇を動かした。併し、女は終に一語をも吐かなかつた。

四邊が薄暗くなつて來ると、女は編物を白い天鵞絨の囊に納つて、膝の側に置いてあつた小な木の蔓で出來た籠から、美しい、可愛い青い蜜柑を一つ取出して、それを膝の上で剝き始めた。白い、細い、透通るやうな指が、青い、薄い、艶々した皮を靜に剝くと、黃いろく熟んだ蜜柑の房の、菊の花のやうに丸く密接して列んだのが、一つ一つ現れて來るのである。女はその香の高い、新しい蜜柑の房を一つ宛口へ運ぶのである。音もさせずに、露の限りを吸ひ取つて了ふと、空になつた房の名殘を

親指と食指で摘んで、膝の上に折つて置いた白い紙へ載せるのである……

一郎は凝とそれに見惚れてゐた。女は飽くまで新しい果物の匂を味はうとするもの丶やうに、一つ二つ、三つと、段々に籠から青い蜜柑を出して喰べた。

一郎は燈の澤山點いた、賑な郡山のステエションに、汽車が着いたのをも知らなかつた。騷しい人聲を後にして、其所を汽車が出るのも知らなかつた。彼は或暗いステエションで、『矢吹』『矢吹』と驛夫の呼ぶ聲を聞いて、初めて我に歸つた。

我に歸つて驚いた時、汽車はもう又暗闇を走つてゐた。「通り越して了つた。」と、彼は自分にも聞えない程な小な聲で投げるやうに呟いた。

汽車の車輪がレエルに軋んで、不快な音を立てた。(行け、行け、何處までも隨いて行け)といふ聲が、何處からともなく一郎の耳へ這入つて來た。

汽車は又單調な響に歸つた。掃除の行屆かぬランプの赤黒い火が絶えずブル〱と慄へてゐる。と、一郎は自分の名を呼ばれるやうな氣がした。(一郎さァん……一郎さァん……一郎さァん……第一が母の聲である。第二が妹の聲である。第三が弟の聲である。(一郎さァん……一郎さァん……一郎さァん

一郎は青い蜜柑の女を、薄暗い灯影に凝と見ながら、いつまでも、いつまでも、聞えて止まないこ

の悲しい聲に聞惚れてゐた。（一郎さアん……一郎さアん……一郎さアん……）

又、母が呼ぶ。妹が呼ぶ。弟が呼ぶ……あ、青い蜜柑の女も一郎の名を呼ぶ。（一郎さアん……一郎さアん……一郎さアん……一郎さアん……）

汽車は自分を乘せてゐる一郎の心も知らず、青い蜜柑の女の心も知らずに、唯走つた。東京へ、東京へ。冷い秋の雨を突いて、暗闇の野を唯走りに。東京へ、東京へ。

掏摸

「話は悉皆聽いて來た。もう御前から何も聞く事は無い。御前の心も充分察して居る。弟の不埒も確かに認めて居る……が、俺には俺で又說が有る――この說は弟を贔屓するのでも無い、又御前の味方をするのでもない、これは俺だけの說だ、言はゞ自分を中心にした說だ。――この說だけ話して置きたいと思つて、それで、今夜態々遣つて來たのだ。俺は御前が狂人の樣になつてると聽いて恐くなつて來たのぢやない。可哀さうな奴だ、俺の說でも聽かしてやつたら又如何にかならないとも限らないと思つて遣つて來たまでだ。俺の說に贊成して吳れようと贊成して吳れまいと、それは俺の構つた事ぢやない。どうだ、俺の說を聽いて見ようと云ふ氣はないか?」

「……有難う厶い升……伺ひませう。」

「聽いて吳れるか、其奴あ有難い、ぢや先づ初め俺の方で訊きたい事があるから、それを答へて吳れ。」

「……ハイ。」

「一體御前は何が口惜しいんだ?――俺は事件に關係の無い人間だから極めて冷淡に訊くよ。」

「……欺されたと思ふと殘念で……」

「欺された？　誰に弟にか？」

「……ハイ。」

「成程。欺されたと思へば口惜しいだらう。俺だつて欺されりやア口惜しい。欺されて口惜しくない人間は一人もあるまい。」

「ですから殘念なのでムい升。」

「だが御前のは欺されたのぢやない！」

「え？」

「好い御天氣の日が一日在つたとするね、處がその翌る日雨がどしや降りに降つたとする。御前は今日雨が降つたからツて昨日の御天氣は「ありや僞だ」と言ふ事が出來るか。今日幾ら雨が降つたつて昨日の御天氣は尙且御天氣ぢやないか。昨日は御天氣、今日は雨さ。それに僞も誠もあつたものぢやない！」

「でも朝好い御天氣ですから、今日は大丈夫だと思つて、傘も持たず高下駄も穿かずに家を出まして、ものゝ二時間か三時間經つか經たない內にざあッと降つて來られたら、口惜しいぢやムいませんか。」

「些とも口惜しかない。それは自分が不注意なのだ。」

「そりや天は「俺は今日一日好い天氣で居るぞ」とも何とも申さないんですから、成程貴方の被仰る通り自分の不注意とやらかは存じませんけれども、「人」は口を利きますものねえ。」
「御前は口を利かぬ天よりも口を利く人間の方を確だと思つて居るのか。」
「でも御自分の口で御誓ひなさる程確實な事はムいますまい。」
「いや、自分の口で誓ふ程不確實な事はない……と俺は思つてる。一體御前は何故弟の――人間の言ふ事などを信じたのだ。俄雨を降らせる天も憎いには憎いが、傘を持たずに出掛ける人も惡いぢやないか。いつまで天氣が持つもんか。」
「それも雨なら好ござんす。直に又霽りませう。」
「そこだ、俺の言ふのは……。」
「雨が降つても、雷様が鳴つても、上の方は何時でも御天氣なんでムいませう。御富士様の頂上へ登ると、雷様が下で鳴つてると云ふぢやムいませんか。」
「左様だとも。」
「して見ると空は何時でも青いんですねえ。――人間の心は空の樣ぢや無いんですかしら。」
「左樣だとも、心臟の色は紅いと云ふ話だが、世界始まつて以來、まだ生きてる人間の心臟の色を見た者は一人も有りやしない。空の色は少ない時でも一ト月に二日や三日見る事が出來る、人間の心の

色は百年待つても千年待つても見る事は出來やしない。」

「…………」

「どうだ、解つたかね。」

「……ハイ……」

「何だと云ふぢやないか、御前は此二三日晩になると、店の前を徘徊いて、弟の出掛ける處を捕へようとしてるとか云ふ話ぢやないか。」

「ハイ。一昨夜も一昨々夜も一ト晩立つて居ましたけれども、御出掛が無いので落膽して歸りました。昨夜もやつぱり例の時分に立つて居りましたんですけれど、ほら御前家に遊び人の家が厶いませう、彼處から變な男が二三人出て來て、人の周圍をぐる／＼廻るんですもの、恐くなつて逃げて歸りましたの。」

「そんな馬鹿な事をして如何するんだ。一體弟を捕へて如何しようと云ふんだ。」

「唯殘念ですから、それだけを……」

「また殘念か。けれども弟を捕へて何か言つた處で何にもなりやしないぜ。弟に會ひたいと言ふなら何時でも會はして遣る。だが會つたつて弟は最う居やしないんだよ。」

「御目に掛れば在ツしやるんぢや厶いませんか。」

「處が居ないんだ。御前に優しい口を利いた弟は最う居やしない、何處へ行つて了つたか、俺は勿論、弟自分だつて知りやしない。」

「？」

「御前を可愛がつた弟の心は何處かへ行つて了つたんだ。御前に取つては弟は最う死人なんだ。死骸なんだ。心が變つたのぢやない、心が無くなつたんだ、心の無くなつたのは死んだんだ。御前は冷たい死人と添寢がしたいと言ふのか。」

「………………」

「解らないか……ぢやァ斯う云ふ話をしよう。御前が或時電車に乘つたとする、御客は御前の外に唯一人だつたとする、其一人が掏摸だつたとする、而してその掏摸に御前がお金を奪られたとする、お金を奪られたと氣の附いた時は最う其掏摸の降りて了つた後だとする。それでも此電車の中で奪られたんだから此電車の中で捕へなけりやならないと云ふんで、御前は何時までも其空虚の電車に縋り着いて居るか。弟の心は卽ち掏摸だ、弟の身躰は卽ち電車だ、行方の知れない掏摸を空虚の電車の中で限もなく待つてる暇で稼いだら、奪られたお金位難なく取返せるだらうぢやないか。掏摸を捕へるにやそれでも警察と云ふものがあるけれども、人の心を捕縛の出來る刑事は世界に一人も居やしない。そんな無駄骨折をする勞力を新しい方面に用ひたら、奪られたお金以上――失つた心以上の心が得ら

れないとも限らないぢやないか。同じ番號の紙幣は一枚しきや無いけれども、番號は違つたつて五圓は五圓に通用すらァね。同じ心は一人にしか無いけれども、異つた心ならまだ他に澤山ある。疊の間に轉げ込んだ五厘錢を何時まで探して居たつて仕樣が無いぢやないか。」

「……そりやほんとに左樣でムい升ねえ。」

「掏摸に遭つたんだ。掏摸に遭つたんだと諦めて、もう失つた紙幣の番號などは忘れて了つて、一番新しい人間になるさ。俺だつて此處まで立入つて口を利いたんだ。俺の說に贊成さへして吳れりやァ……なんだ……新しい旅に出掛ける旅費位は如何にでもするさ。だが、何も無理に聽いて貰ひたいと言ふんでもないから……」

「貴方の被仰る通りに致し升。……もう電車は降り升、電車の番號も忘れて了ひ升。」

「ぢやァ俺の說に贊成して吳れるか、其奴あ有難い。俺の自己流の說に一人でも贊成して吳れる人があると思ふと、俺の說に價値が附いて來たやうな氣がして嬉しい。弟の事なざァ如何なつたつて構ふもんか、俺の說さへ通りやァ俺は嬉しいんだ。」

「何も彼も貴方に御任せ致し升……私も量見を入れ替へて新しい人間とやらになつて御目に掛け升。」

「それで俺も安心……俺の說が通つたのは嬉しい。では此處に少なからうが是だけ金が在るから、これで身の振り方を何とかつけるが宜い。これは誰の金でもない、御前の金だ、俺の說に贊成して吳れ

た俺の御禮だ。」
「有難う存じ升。」
「使つて呉れるか、それは有難い。……そこでと……俺は先刻言つた様な說を有つてるのだから、人の口で言つた事を如何も信ずる事が出來ない……甚だ濟まんが、此事件は永久に忘れると言ふ一札を俺に宛てゝ書いて呉れないか――俺に宛てゝだぜ。弟に宛てゝ書くなら厭でもあらうが、俺に宛てゝ書くんだ、弟に關係の無い事だ」――俺の說に贊成して呉れる以上は人の言ふ所を信じないと云ふ點にも贊成して呉れるだらうね。」
「私には何と書いて宜しいか分りませんから何卒貴方宜しい樣に御書き下さいまし。」
「何とでも好いから御前御書きな。」
「いえ、どうぞ。」
「では俺が書くぞ……えゝと……後日一切苦情申すまじく依一札件如――御前の名は何とか云つたつけな。なかか？」
「いえ、それは彼方で附けた名で厶い升。」
「ぢや本名は？」
「石井たけ。」

「石井たけ、か……それでは「木村長十郎殿」と……俺の名を書いとくよ。」

「どうも御世話樣でムい升。」

「何か印形を有つてるか。」

「實印を有つてます。」

「それは結構だ、こゝへ捺して吳れ。」

「ハイ……これで宜しうムい升か。」

「結構々々。ぢやアまア一つ今迄の事は忘れて新規蒔き直しと出掛けるさ。」

「ハイ。こんな事で暫く消息も致しませんでしたから、生家でも心配してるに違ひムいませんから、早速歸りまして、何か堅氣な商賣でも始めようと思ひ升。」

「それが好い、それが好い。」

「どうも種々有難う存じました。」

「ぢやまア一つ一生懸命に遣り給へ。――前祝ひに一杯飮んで別れやうぢやないか。一寸手を拍いて吳れ給へ。」

侮蔑

これはY君から聞いた話だ。

山の手の某區にY君の知己で野澤と云ふ家が在る、可なりな財産家だが、主人は最う死んで居ない。六十近い母と廿二になる娘と下女と書生と四人暮らしだ。

母と云ふ人は一體世間を知らぬ好人物な處へ、年を老つて頭腦が鈍くなつたからか、唯最う老耄と日を暮らして居る、之に反して娘は人並外れた勝氣な鋭い女で、家中切つて廻して居る――表面は母が主人だが、實際は娘が主人も同然だ。

書生は、女ばかりでは物騷だからと云ふので、娘の父が死んでから置いたのだが、生來が柔和しいのか、猫を冠つて居るのか、それとも娘の勝氣に壓倒されて居るのか、一向「男」を發揮しない。恰で女だ。とても盜賊の用心にはなりさうも無い――それに夜學で醫學校へ通つて居る。

下女は房州北條の在の者だが、生れると直ぐ貧乏な兩親に捨てられようとしたのを、死んだ此家の主人に貰はれて來たので、いろはのいの字も讀めぬ無教育な女ではあるが、その赤く肥つた身體には、

「忠義」と云ふ血の外は何も循つて居ない。「命の親だ！　此家は命の親だ！　此家の御主人が彼時あの田の畔を通らなければ私は今生きては居ないのだ！」これより外には何の念慮も無い。よく働く。朝から晩までよく働く。母の世話もよくするが、娘には殊に忠實だ。一度命令つけた事は決して忘れないと云ふので、勝氣な娘にも甚く御氣に入りだ。

野澤の母は早寢である、毎晩大抵七時には寢て了ふ。書生は六時から夜學へ出掛けて十一時でなければ歸つて來ない。娘は母を寢かすと屹度夜遊びに出掛ける――寄席か、芝居か、それで無ければ友達を引張つて何か喰べに行く。此時刻になると毎晩下女は一人ぼつちになる。然れども別に寂しいとも思はない。――思ひ出すべき故郷も無いから。

處が近頃如何した機會からか、娘が夜遊びに出なくなつた。そして反對に下女に小遣を持たせて遊びに出すやうになつた。下女は御孃樣の命令だから毎晩のやうに小遣を貰つて外へ出たが、何を喰べたいでも無い、何を見たいでも無い人だから、好い加減近所をぐる〳〵歩き廻つてはお金は其儘使はずに持つて歸る。歸ると何時でも娘は一人で本を讀んで居る。下女は持つて歸つたお金を風月のカステイラの空箱へ貯めて置いた――凡そ廿日もこれが續く。下女は何故御孃樣はこんな事をなさるのだらうと別に不審を打つでもない――不審を打つだけの頭腦が無いのだ――金は何時の間にか五圓某に

なつた。

或晩例の通り外へ出されて、例の通り近所をぶら／＼歩いて、例の通りお金は使はずに家へ歸ると、娘の處へ客が來て居る――下女が格子戸を開けた途端に其客が忙てゝ立上らうとすると、娘は霽へ聲で「家の女中です。まア、ゆつくりして入らッしやい。」と言つた。客は又坐つた、何處かの學校の服を着て居る綺麗な若い男だ。

下女は御客樣の御出を留守にして居て大變濟まなかつたと云ふやうな樣子で――爾う思つても口で言ふ事は出來ないので――默つてお茶を入れ替へたり、火鉢へ火を次いだりして孜々と働いて居ると、娘は凝とその手元を視て居たが、

「お前はほんとに罪が無いのねえ！」

と思ひ入つたやうに言ふ。下女は分らないから、

「ハイ？」

と訊き正すと、娘は、

「いんえ……この方はね、私の仲の好い御友達なんだからね、これからお出になつたら大事にして上げなくては不可ないよ。」

「ハイ。」

「ぢや此處は好いから彼方へ行つて御出で。」

「ハイ。」

下女は畏つて下女部屋へ退つた。

その翌る晩は、最う娘が下女に遊びに行けと云ふ事を言はない。八時頃に又昨夜の綺麗な學生が來た。下女は茶と菓子とを出して、火鉢に火を次ぐと、昨夜の通りに下女部屋へ退つた。

客は書生が夜學から歸つて來る少し前に歸つた。

下女は遊びに出もしないのに、例の通りの小遣を貰つた。

此晩を初としてこれが十日ばかり續いた。

下女は毎晩のやうに、御孃樣とお客樣との「仲の好い」處を見せられて妙な氣持になつて來た。初は旨い食物の匂を遠くから嗅いでるやうな好い氣持になつた――それからその食物を自分に喰べて見たいやうな氣持になつた――やがて喰べたい、喰べたい、手が出したくて堪らないと云ふ樣な氣

持になつた。

下女は終に手を出した――或晩夜學から歸つて來た書生は、玄關の暗がりで肥つた暖い手に確と手を握られた。

書生は其晩から俄に「男」を發揮した。下女は脈管に漲る「忠義」の血を「樂欲」の血に濁らせた。

やがてこれが娘に知れた。

娘は非常に怒つた――「家のしめしがつかない。」と言つて大に怒つた。早速下女を追出さうとしたけれども、考へて見ると下女には歸る家が無い。それではと書生を追出す事になつた。

書生は頂點まで「男」を發揮した。散々娘を罵つた揚句、平氣で家を出て行つた――又何處かへ行つて女をこしらへて追出されるまで居る迄だと言はぬばかりの顏をして。

書生が出て行くと、下女は强かに泣いた。泣いて、泣いて、中々泣き歇まない――殆んど半日も泣き通しに泣いて居たので、流石に娘も可哀さうになつて來た。「でも、やッぱり別れは辛いものと見える。」と思つて下女の肩に手を掛けて、二言三言慰めて見たが、如何したのか矢張泣き止まぬ。

段々賺して訊いて見ると、何時までも悲しい理が分つた。下女は書生に煩られて、カスティラの空箱に貯めといた小遣錢六圓某を悉皆貸して了つたのだ――この儘書生に行かれて了つては其貸金が取れないと言つて泣くのだ。

娘は之を聞くと一種侮蔑的な笑を口の邊に見せたが、其儘外へ遊びに出て行つて了つた。

その晩娘は一部始終を綺麗な學生に話して、「やッぱり教育の無い者は仕様が無いのねえ。」と言つた。

「でも可哀さうぢやありませんか。」と男は同情のある言語を吐いたが、其調子は如何にも力の無い、熱の無い、冷淡極まるものであつた。

戰慄

熱い夏だつた。熱い日だつた。熱い午後二時だつた。

私は會社の應接間にゐて、その日の新聞を讀んでゐた。表に向いた硝子窓には卵色の窓掛が下してあつた。窓硝子を通して、その窓掛に一杯日が差してゐた。眞赤な、爛れるやうな日だつた。卵色の窓掛も血の色のやうに見えた。私の大きく廣げてゐた白い新聞も、眞赤に見えた。時々新聞から眼を離すと、瞳の中を赤い活字が踊つて、そこらが眞暗に見えた。

窓は今言つた一口しか無かつた。これを開けると、血の色をした、爛れるやうな日が差込むのであつた。そこで、給仕がぴッたりと硝子戸を閉めて、窓掛をずつと下まで下したのであつた。後も壁だつた。前も壁だつた。唯一方が事務室に通ずる硝子戸になつてゐた。その硝子戸は規則でいつもぴつたり閉めて置かなければならなかつた。それ故、風は何處からも這入つて來なかつた。湯のやうに熱くなつた部屋の空氣は又何處からも外へ出られなかつた。外へ出られない熱い空氣は、出られないのを怒つて「出せ、出せ、」と言ふやうに、私の身體をふはりと包んで、息の窒る程締めつけた。

硝子戸を通して、事務室を見ると、支配人は椅子にぐつと凭り掛つて、前の方を眞直に見た儘凝として ゐた。眼を閉いて、寢てゐるのだつた。副支配人は自分の前の卓に兩肱を載せて、兩手で顎を押へて眼を閉つてゐた。何か考へながら、寢てゐるのだつた。出納は兩手を袴の中に突込んで、端然としてゐたが、顎はがつくり襟の中に落ち込んでゐた。威儀を正して、寢てゐるのだつた。

總てが倦かつた、總てが勞れてゐた、總てが死んだ者のやうだつた……人も、家も、椅子も、帳簿も、みんな眠りこけてゐた……靜だつた、夜中のやうに靜だつた……私は柱時計を見上げて、「午前二時」ぢやないかしらと思つた。

私の讀んでゐた新聞の記事は、情死の記事だつた。それはその頃私の通つてゐた吉原の女郎屋であつた事だつた。私もその女の顏だけは知つてゐた。不器量で身綺麗な女だつた。相手の男にも、一度內證の湯で會つた事があつた。髮の毛の長い、人の好ささうな、醫學生だつた。この男は半年の間、一日も缺さず、この女の所へ通つた。私は一度何かの拍子で、帳場に玉帳を見せて貰つた事があつた。その時、私は驚いた。如何な日でも、この男の名がこの女の名と結びつけられてない日は、一日も無かつた。忙しい日は五分でも十分でも來たらしかつた。

その男がその女と情死を企てたのだつた。男は多量に毒を呑んだ爲に、見事に生を終へたのだつた。女は毒の飮み方が足りなかつた爲に、死に損つて、女郎屋の奧に寢てゐると書いてあつた。「女は本の

御交際に、ちよいと口をつけたものなるべし。」と書いてあつた。
私は、唯一人で眞暗闇な山坂道をとぼ〳〵と歩いて行く、髪の毛の長い、人の好ささうな男を想像した。女郎屋の奥の、薄暗い、風の通らぬ、疊のじめ〳〵した部屋で、汚れた薄い蒲團の上に、髪を亂して、枕を外して、臭くなつて寢てゐる、身綺麗だつた不器量な女を想像した……。
新聞が手から膝へ落ちるやうな氣がした。膝から又床へ落ちるやうな氣がした。瞳の中で踊つてゐた赤い活字が赤黑くなつた、やがて眞黑になつて、眞黑になるかと思ふと暗闇の中へすうッと消えて了つた……。
椅子と一緒に危く倒れようとして、無意識に卓の脚を摑んだ……と、眼が醒めた。
みし〳〵ッと柱の割れるやうな音がした、窓硝子がぴり〳〵と鳴つた。聲は無くて、人のドタバタと外へ逃げる物音がした。何所かで鷄が慌ただしく鳴いた。
「地震だ……。」
私は先づ天井の電燈を見た、電燈は少しも動いてゐなかつた。それから後の壁に掛つてゐる額を見た。額も凝としてゐた。
その內にドタバタいふ物音が段々激しくなつて來た。併し人聲はやはり聞えなかつた。それがどうも窓の外らしかつた。往來の向うの家あたりらしかつた。

「火事だ……」

咄嗟の間に、私は、嘗て見た事のある火事の始まりを思ひ出した。それはやはり夏の事で、銀座の裏通りの、或親類の家に泊つた晩の事だつた。夜中に二階で眼を醒ますと、耳の直ぐ側で容易ならん物音がした。それが人の聲はせずに、唯ドタバタといふばかりであつた。窃と掃出しの窓を開けて、恐々外を覗くと、つい二三軒先の二階から火がひら〳〵と舌を吐いてゐた。大勢の人が、眞黒になつて、その火を隱すやうにしながら、蓙だの、蒲團だので、火を叩いてゐた。大勢人はゐても、聲を出すものは一人もなかつた。みんな啞のやうに默つて、太息を吐きながら火を叩いてゐた。「災禍」の手が人の口を糊で封じて了つたやうだつた……。

「火事に違ひない……。」

さう思つて、私は窓掛の下の紐を一寸下へ引いて、ポンと指を放した。窓掛はする〳〵と上へ上つた。

騷ぎは前の家だつたが、地震では無かつた、火事でも無かつた。

二階から隣の屋根へ飛降りて、屋根傳ひに逃げて行く男があつた。

下の格子戸を突くやうにして開けて、跣足で表へ飛出す男があつた。

障子を蹴破つて、二階から往來へ飛降りた男があつた。

戰慄が私の肩から胸を驅け拔けて足の方へ走つた……。
私は忙てて窓掛を引いた。そして下の方だけ少し開けて、そこから向うの遊び人の家を見てゐた。
家の中では低く罵る聲がした。赤坊の泣くのと婆さんの叱る聲がした。
家は見る間に空になつた、何疋かの獸が檻を食ひ破つて逃げ去つた跡のやうに、其所にも此處にも大きな穴が口を開いてゐた。

追々と近所の人が門口へ集つて來た。みんな「午前二時」の夢から醒めたばかりのやうな眼をしてゐた。やがて、人相の惡い皺くちやな婆さんが、口の廻りの汚い、眼のしよぼ〳〵した赤坊を負つて、家の中から出て來た。そして恐怖を虛榮で無理に押へつけるやうな眼附で、近所の人に何か辯明してゐた。口が動くだけで、何を言つてるのか、些とも聞えなかつた。

暫くすると、横町の、塀の縱に破れた所から、鳥打帽子を冠つて、和服の尻端折に、薄い洋袴下を穿いた、眼の鋭い、官吏風の威嚴を持つた男が出て來て、倒れかゝつた塀の板を元の所へ押しつけた。が、この男が横町を出ると、塀は直ぐ叉縱に口を開いた。

格子戶の方からは、丈の低い、頭の大きな、智力の鈍さうな、眼の血走つた男が、腰に繩をつけられて出て來た。その後から出て來た男は、今塀の破から出て來た男のやうに、やはり鳥打帽子を冠つてゐた。和服の尻端折に、薄い洋袴下を穿いてゐた。眼が鋭かつた。官吏風の威嚴を持つてゐた。そし

て右の手に腰繩の先を確り握つて、左の手に赤い毛布の大きな包を抱へてゐた。

往來で待つてゐた塀の破から出て來た男は、腰繩を持つて出て來た男から、赤い毛布の大きな包を受取つた。そして二人は誰にも眼を呉れず、默つて繩のついた男を歩かした。そして自分達もその後から歩いて行つた。

私は三人が遠ざかるに從つて、段々に窓の硝子戸を開けた。そして眞赤な爛れるやうな、日の中へ顏を出して、三人の後姿を見送つた。赤い毛布の包がいつまでもはつきり眼に映つた。

「田舍者を欺したんだつていふぢやないか……。」

「詐欺賭博なんだね……。」

「こないだつから刑事が張り込んでゐたんだ……。」

「うまく現場(げんば)へ飛込まれたんだね……」

「併しうまく逃げたよ……。」

「慣れてらあ……。」

「彼奴(あいつ)なら、いつでも捕るんだ……。」

「彼奴は捕まるのが役だもの……。」

「雇はれてゐるんですか……。」

「まあ、そんなものさ……。」
「赤い包は道具かね……。」
「さうよ、證據物件だ……。」
「あの證據物件は幾度も場數を踏んだらうね……。」
「裁判所のか……。」
「金鵄勳章だ……。」
「は、は、は、は……」
近所の人が、がやがやこんな事を云つてゐると、赤坊を負つた遊び人の家の婆さんが、もぐもぐと口を動かして、
「ほんとに、塀も何も滅茶苦茶にしちまやがつて……爲樣がありやしない……」と、息張つたやうな、悲しいやうな、ぶるぶると慄へた聲で言つた。
この聲を聞くと、再び戰慄が私の胸から背中へ突き拔けて、股から踵の方へ走つた。
バタンと窓を閉めて、するすると窓掛を引いて、椅子へ腰を掛けると、床の上に落ちてゐる新聞を叉手にした。
そして何事も無かつたやうな顏をして、事務室の方を一寸見た。

支配人は、まだ眼を開いて眠つてゐた。副支配人は、まだ考へながら眠つてゐた。出納は、まだ威儀を正して眠つてゐた。人も、家も、椅子も、帳簿も、みんなまだ眠つてゐた……靜だつた、夜中のやうに靜だつた……。

それを見ると、三度戰慄が私の顏から胸を驅け下りて、膝から爪先へ……爪先から床へ傳はつて行つた……。

消滅

一人の友達は外套を着て、座蒲團の上に箕居(あぐら)をかいた儘、柱に倚掛つて居眠りをしてゐる――鼻から息の出る度に、鼻の下の八字髭が微かに震へる。

もう一人の友達は、震へながら手に持つた盃を、暫くは口へも運ばず、ちやぶ臺の上へも置かずに、何か頻に人の惡口(わるくち)を言つてゐる――時々盃が傾いて、酒がタラ〳〵と洋袴(づぼん)の膝へ零れる。それでも構はずに、口を尖(とんが)らかして、まだ何か罵つてゐる。

その聽手は私で、『成程。』『成程。』と頻に感心はしてゐるが、さて何の話だか考へて見ると些とも分らない――手を顔へ遣つて見ると、火のやうに熱い――時々酒臭い吐息が口を突いて出る。

俄に頭がガン〳〵鳴つて來た。頭の中を、一方から一方へ血を激しく流れる音がドクン〳〵聞えて來た……やがてその流が、速度も方向も段々不規則になつて來て、彼方へ打當(ぶつか)つたり此方へ打當つたりするので、今にも頭の鉢が割れさうになつて來た。

同時に胸が苦しくなつて來た。恰ど胃の邊に、小さな盆のやうな平べッたい丸い物が塞へてるやうな氣がして、息苦しくて息苦しくて堪らぬ。してその盆のやうな平べッたい、丸い物を下つ腹へ下げたいと思つて、幾ら力一杯に押へるやうにして撫つて見ても、一向驗が無い。盆の上へ上へと狹い道を無理に上つて來さうにする……

「どうだ、寢たら。大分苦しさうだ。」

友人に叫られて、眼が覺めると、私は何時の間にか今までゐなかつた女中の膝を枕にして寢てゐる。吃驚して頭を上げると、直ぐ起上つた。足が蹌踉する。

「ちや、失敬して……僕寢るよ。」

と、寢言のやうに私が言ふと、

「うん、うん、それが好い。」

と、友達も寢言のやうに言つた。相變らず、慄へながら手に持つた盃を、口へも遣らず、ちやぶ臺へも置かずに、酒をタラ〳〵洋袴の膝へ零してゐた。

外套を着た儘居眠りをしてゐた最う一人の友達は最うゐなかつた。座蒲團が大きな石でも置かれた跡のやうに、皺くちやになつてゐた。

女中に案内されて、階子段を降りると、直ぐ左の部屋へ入れられた。

薄暗い室だ。有明が朦朧點いてゐる、室の眞中に床が取つてある。私は羽織も袴も脱らずに、行きなり夜具の上へ轉がつて了つた。

頭は益々割れさうだ。私は兩手で強く頭を緊めつけて、夜具の上を彼方へ轉がつたり、此方へ轉がつたりした……

「お手拭を持つて來て縛つて上げませうか。」

「どうか、然うして呉れ……」

私は思はず泣き聲を出した。

女中は出て行つた。

一體如何して今夜はこんなに醉つたんだらう……友達が二人で內の近所のＦ亭へ來たと……そこへ招ばれたと……そこで少し飲んだと……それから雨の中を車で家まで來たと……こゝへ來てからは最う幾らも飲みやアしないと……それだのにこんなに苦しくなる程醉つたのは訝しい……然うだ、車で搖られた故だ……車の中で寢た故だ……車の中で寢たから風邪を引いたんだ……風邪を引いたから頭が痛いんだ……いや、然うぢやない……雨の故だ……雨が降るから醉つたんだ……醉つたんだから雨が降つたんだ。

女中が手拭を持つて這入つて來た。
「來たか、さ、早く縛つて呉れ。」
女中は私の頭に手拭を卷きつけて、力一杯ぐい〳〵締めつける。
「もつと、もつと。」
「まだですか。」
「まだ、まだ。もつと、もつと。」
「まだ。」
「もつと力を出して……然う、然う……うん、好からう……うん好からう。」
「あゝ草臥れた。」
「有難う。」
頭が少し輕くなつた。手拭で縛つた處を境にして、上と下と全く血の交通が無くなつて了つたやうな感じがする。
「お召し換を遊ばせ。」
「うん。」
と言つて、私は立上つた。まだ足が蹌踉する。

不用な物でも打棄るやうに、羽織や袴を脱いで了ふと、直ぐ着物を寢間着に着換へた……と、今まで忘れてゐた胸の中の盆のやうな平べッたい丸い物が、俄に大きくなつて、咽喉の邊まで上つて來た。行きなり床の中へ飛込んだ、柔い絹が脹脛に觸つて氣持が好い……が、胸は益々苦しくなつた。

「胸がお苦しいやうですね。今直ぐ何か持つて來ますから。」

忠實な女中は又出て行つた。

私は俯伏になつて、枕へ顎を載せて、胸を敷蒲團に壓しつけた。

眼の前に、水差と大きなコップが盆の上に載せて置いてある。

胸の中の平べッたい丸い物は益々外へ出ようとする。私は如何しても出すまいとする。兎もすれば、頭が前へ下つて、胸が敷蒲團を離れようとする……

忽ち盆は胸の中で崩れた……私は夢中で大なコップを摑んだ……大なコップは忽ち臭い液體で一杯になつた。

胸は頻に敷蒲團を離れる……頻に首が前へ下がる……

女中が銅盥を持て來た。私はコップの水をその中へあけて、別に又少し水を吐いた。

胸の中の物は悉く出て了つた。漸く息が自由に咽喉を出這入りするやうな氣がして來た。

私は女中に禮を言つて、初めて横に寢た。體がガタ〳〵慄へて來た。頻に欠伸が出る。頭の鉢巻が

痛くなつて來たので、解いて了ふ。體の節々が痛いやうな倦いやうな氣がするので、私は床の中で體を出來るだけ延ばして見たり。出來るだけ縮めて見たりした。やがて草臥れてそれも廢した。

間もなく、自分の鼾の聲が自分の耳に聞えて來た。

「妹が死んだ。」

偶と斯ういふ考が胸に浮んだ。人から聞いたのか、手紙で知つたのか、それは分らない。外から自分の頭へ這入つたともなく、自分の頭から外へ出たともなしに、偶と斯ういふ考が浮んだ。

「妹が死んだ。」

吃驚して眼が覺めると、眞暗だ。暫くすると「あゝ昨夜の所だ。」と思つた。

「何だ、夢か。妹が死んだなんて嘘だ。」

私は又ぐッすり眠つて了つた。

「妹が死んだ。」

又吃驚して眼が覺めた。眞暗な中に自分のしてる枕が白く見える。

又同じ夢を見たのか。夢だ、夢だ、夢だ。

「夢ぢやない。」

「なに、夢ぢやない。」

「然うだ、夢ぢやない。」

「でも俺は好く人の死ぬ夢を見る。」

「常のは夢だが、今日のは夢ぢやない。」

「…………」

「その證據には、御前今眼が覺めてるぢやないか。」

成程、枕も見える——蒲團も見える——私は眼が覺めてゐる。

私は悲しくなつた。唯一人の妹——私にとつて唯一人の相談相手たる妹——が、とう／＼死んで了つたかと思ふと、身體中の血を絞られるやうな感じがする。

眼が覺めてゐるのに、然う思ふんだから、必と本當だ。必と昨日實際死んだのを知つてゐながら、夜寝たので一時忘れたんだ——それを今此處で思ひ出したんだ。

親しい人は自分の眼の前で死んでも、死んだやうな氣がしないものだ。私が今「夢だ。」「夢だ。」と思ふのも、それに違ひない。

夢ぢやない。眞實に妹は死んだんだ。

「妹が死んだ。」

又眼が覺めると、涙で眼の縁が冷たく濡れてゐた。

自分の傍に誰か寢てゐるやうだ。透して見ると、女が、後向きになつて寢てゐる。

「女の死骸だ。」

私は慄然とした。

「妹の死骸だ。」

觸つて見たら暖かだつた……

新らしく出來た立派な活動寫眞館の前に、友達が五六人、揃ひの法被を着て、草鞋穿きで、地面に蹲踞んで休んでゐる。紫だの、赤だの、緑だのを、『活動寫眞』と白く染め拔いた細長い旗が、五六本立てかけてある。口髭の生えた一人の友達は膝を抱へて居眠りをしてゐる。一人の友達は盃を持つてそれを口へ持つても行かず、地面へ置きもせずに、手を震はして、酒をタラ〳〵零してゐる。後の三人計りは煙管で煙草を呑んで居る……

「僕の妹が死んだといふ話だが、本當かしら。」

私は行きなり斯う訊いた。

煙草を呑んでゐた一人の友達は——これは昨日まで確か警保局へ出てゐた人だ——その友達が、

「本當とも、君は未だ知らないのか。」
と言つた。
「それではやッぱり本當だつたのか、困つたなァ。」と思つて、私は又何とも言へず悲しくなつた……
「活動寫眞は何時から始まるんだ。」
私は如何したのか、今度はこんな事を訊いた。
「明日からさ。君未だ知らないのか。」

「妹が死んだ。」
又眼が覺めると、最うすつかり夜が明けてゐた。四邊を見廻すとやつぱり昨夜來た家だ。夢に違ひない。然うだ、やつぱり夢だつたんだ。餘り苦しんだんで、あんな夢を見たんだ……障子が光つて目映しい。
「お眼覺めになりましたか。」
昨夜の女中が襖の外で聲を掛けた。
「あゝ起きた――這入つても好いよ。」
女中は笑ひながら這入つて來た。

「御氣分はお直りになりまして。」

何だか大變古い事を訊かれたやうな氣がする……

「あゝ氣分が、御蔭ですつかり直つた……二人は如何したい。」

「あの、今井さんは、今日は會社の勘定日だからつて、お早くお歸りになりました。けれども濟み次第直ぐ又此處へ來るから、貴方に待つてゐらツしやるやうにツて。」

「然うか……田中は。」

「田中さんは、御宅に來る人があるからつて、矢つ張りお歸りになりました。」

「然うか、ぢや俺も歸らう。」

「左樣ですか、貴方は御用が無いんでせう。宜しいぢや御座いませんかい。」

「いや、又出直して來よう……後で今井君の來た時分に電話を掛ける。」

私は夢だとは思つて居るが、どうも、夢の事が氣になつて、不安で堪らない。最う一分時も長く此處にゐる事は出來ないと思つた。

顏を洗つて、姿見へ顏を映して見たら、色が靑く、髭が汚なく、眼が凹んで、齒齦が白くなつてゐた。

着物を着換へると、好い天氣なのに、足駄を穿いて、傘を持つて、そこの家を出た。

直ぐと電車に乘つて內へ歸つたが、內には何の變りも無かつた――朝飯を食べずに歸つたんで、腹

が空いて堪らないけれども、それは言ふ譯に行かないから、默つて午まで堪へる事にした。妹の所へ如何かしやしないかといふ端書でも出さうと思つたけれども、何だか子供らしいやうな氣もして、つい止めにして了つた。

それでも未だ何となく不安な氣はする。

午飯が濟むと、その晩朝鮮へ立つ筈の友達の處へ、暇乞に根岸まで行つた。

友達は外務省へ行つた後で、生憎留守だつた。暫く妻君と話をして、何れ今夜新橋で會ふから、宜しく言つて下さい、と賴んで、その家を出た。

門を出ると、偶と思ひ出した事がある、昨夜夢に見た活動寫眞の旗持の中にはこゝの主人もゐた……こゝの主人も草鞋穿きで、地面に蹲踞んで煙草を呑んでゐた……と思ふと私は可笑しくなつて一人で歩きながら笑つた。

同時に又「妹が死んだ。」と云ふ聲が、何處からともなく微に聞えて來て、私は又、眞面目な、嚴肅な氣持になつた。

迷路(ラビリンス)のやうな根岸の道を、彼方へ曲つたり、此方へ曲つたりして、坂本の方へ向つて行くと、向うから盲縞の揃ひの爲着(しきせ)を着て尻を端折つた老爺が二人で棺の樣なものを擔いで來た。

擦れ交ひ樣に熟く視ると、やつぱり棺だつた。長方形の丈の低い棺で、上に、白く大きな十字架を縫にした黑天鵞絨の古い布が掛けてあつた。供は一人も無い。擔ぐ人も輕さうにしてゐる。今が歸りかと思つたが、それにしても墓地下の方へ向つて行くのが訝しい。

棺を見た時に、私は又妹の事を思出したが、最う不安の度は大分減つてゐた。妹とあの棺とは何の關係も無いと思つた。あれは必と外國人の葬式だと思つた。

坂本から電車に乘つて宅へ歸ると、妹の所から端書が來てゐた。

「一筆申上候、明日三四人にて歌舞伎座見物に參り候まゝお暇なれば三州屋までお越し被下度候。何れ其節。

妹より。

兄上樣　」

これを讀むと、私はほッと息を吐いた。

祕密

私が生れてから今までに、私の國は二度外國と大な戰爭をした。前の戰爭にだつたか、後の戰爭にだつたか、それはつひ聞忘れて了つたが、或地點の戰鬪で或步兵の中尉君が戰死した。

その中尉君の軍服の內衣兜に藏つてあつたといふ古い手帳が、流れ流れて近頃或人から私の手に渡つた。この手帳には細い日記の書いてある所があるかと思ふと、漠とした感想やうな事ばかり書いてある所がある。併し、何れも戰地へ着くまでに書いたらしいものばかりで、戰地へ着いてから筆を執つたらしい所は一箇所も無かつた。

その中に場所は方々に離れて書いてあつたが、どうも連絡のあるらしい或記事が時々見える。それを私は今斷片的に方々から書き取つては讀者諸君と共に續けて讀んで見たい。併し唯私の考だけで書き取るのだから、間違へて全く關係の無い記事を入れるかも知れぬ。又事件に密接な連絡のある重大な記事を寫し落すかも知れぬ。それは豫め承知して置いて貰ひたい。

「母は僕を生むのに苦しんだ。僕を大人にするのに苦しんだ。僕を世の中に出すのに苦しんだ。母が半生の肉と心とは悉く僕一箇人の爲に消耗されたと言つて好い。

「世界に唯一人の母だ。生れる前からの僕の母だ。僕の父と別れてから二十年來夫の無い母だ。僕は母の爲には一身を犧牲に供して盡さなければならぬ。

「二葉亭四迷の譯で、ツルゲエネフの『夢がたり』を讀んだ。讀んでる中に、こりやァ僕が僕の經歷を語つてるのぢやないかと思つた。『自分』といふのが。妙に僕らしい氣がするんだ。併し、僕の身の上にも、母の身の上にも、あんな忌まはしい物語があるのではない。あつて堪るものか。

「伯父と伯母がえらい喧嘩をした。伯父は怒つて、『女には男一人を持たすさへ惜しいのに、一人以上を求める奴があるか。』と言つた。

「伯父は何故あんな暴言を吐くんだらう。

「砂の道……貝のバリ〳〵と潰れる音……母の車は先へ行く……僕の車はその後から行く……夏の日が照る……車夫が汗をかく……

「母の乘つてる車の輪が、走りながら外れさうにする……ハッと思ふと……又もとへ戻る……又廻りながら外れさうにする……又もとへ戻る。

「何處かの栓が抜けたんだ……

「島の宿……岩に浪が白く笑ふ……日が暮れても、闇の中で笑ふ。

「達ちやんが後から來た……中尉の軍服を着て……僕が軍帽を借りて冠つたら、頭がスポツト這入つて了つて……眼が見えなくなつた。

「廣い座敷……大な蚊帳……僕と母と達ちやんは一緒に寢た……

「これが、僕が七歳の時の記憶だ。時々これが偶と思出される。今日も思出した。

「『達ちやんの來た事は誰にも言ふんぢやありませんよ。』

「朝、宿を立つ時、母は斯う言つた。

「『いゝかえ達ちやんの來た事は、伯父さんにも伯母さんにも誰にも言ふんぢやありませんよ。』

「ステエシヨンの待合室で、母は又斯う言つた。

「『いゝかい、達ちやんの來た事は誰にもお言ひでないよ。達ちやんが困るから。』

「汽車の中で母は又斯う言つた。

「僕は一體祕密の守れる男ではない。併しあの母の命令だけは、自分ながらよく守つた。

「僕が生れてから今までに、ほんとに誰にも言はなかつた祕密はあれ許りだ。

「あんな祕密——たゞ達ちやんが遊びに來たといふだけだもの——あんな祕密を守るのが、母に孝行の一つとなるなら、そんな容易い事はない。

「僕は常に然う思つて、今日まで誰にも言はなかつた。

「僕は親孝行だ。道德家だ。母が言ふなといふ事は決して言やしない。

「併し、何故母はあんなつまらない事を何故あんなに祕密にしたがるのだらう。家の書生が出世して、母と僕のお供をして、海の邊へ遊びに來たといふだけぢやないか、何の不思議もない。

「『達ちやん』と同じ中尉になつた時、僕は偶と忘れてゐた昔の事を思出した。

「『いゝかい、誰にも言ふんぢやありませんよ。』

「妙な語だ。訝しな文句だ。

「僕は今の自分の身をあの時分の『達ちやん』の位置に置いて見た。

「冷い汗が出る……

「僕の考は間違つてゐるかも知れぬ。恐らく間違つてゐよう。叉間違つてゐて貰ひたい。

「併し、冷い汗が出る……

「『いゝかい、誰にも言ふんぢやありませんよ。』

「僕は子としてこれを守らなければならぬ。紳士としてこれを守らなければならぬ。軍人としてこれを守らなければならぬ。

「僕は孝行な兒になりたい、道德家になりたい。武士の手本になりたい。

「ツルゲエネフの『夢がたり』を讀んだ。『死骸は少し横向になつて仰向いて、左の手を投出して、それへ頭を載せて、右の手を屈めた體の下に敷いてゐる。マトロスの穿くやうな大長靴を穿いてゐたが、その頭をベツタリした泥の中に埋めてゐる。……仰向けた面を見れば微笑(うすわらひ)でもしてゐるやうで、上唇を反らした下から細い齒が隙間もなく並んで見えて、半眼に閉ぢた眼の中は。白眼も曇り瞳も朦朧(どんより)して、どれをどれとも見分かねる程である。……』この邊まで讀んで來ると、何だか實に好い心持だ。

胸のすくやうな氣がする。

「併し、死骸は又形を隱して了つた。

「『自分は物を言ひ得んで、唯頷いたばかり。死骸を見付けてから。未だ三時間と經たぬ……誰が見付け出して擔いで行つたものであらうか、誰が擔いで行つたのか、擔いで行つて如何したのか？又一穿鑿せねばならぬ。』

「あゝ頭が締めつけられたやうだ。

「『いゝかい、誰にも言ふんぢやありませんよ。』

「遠い聲だ。微な聲だ。それが妙に僕の頭を刺すのは訝しい。いつそそんな聲を聞かなかつたら、僕は總てを忘れて了つたかも知れぬ。

「何でもない事だ。何でもない事に違ひない。併し、人に訊いて見る事も出來ぬ。

「僕は母に孝行をしなければならぬ。母の命令に從はなければならぬ。

「苦しい。苦しい。胸が痛む。

「微な傷……古い傷が……又疼く。

「小な毒なんだ。早く抉り出して了ひたいと思ふんだけれど、母が許して呉れぬ。

「いつまでも許して呉れないやうな顔をしてをる。

―――――

「祕密を守れ。暗くなれ。汝の眼は母の賜ならずや。

―――――

「……胸部の內衣兜へこの手帳を藏つて置く。彈丸が忌まはしい手帳を通して、僕を殺して吳れゝば好い……僕はこの祕密の袋を背負つて常闇の國へ行く……

―――――

これツきり、後には何も書いてない。

讀者諸君は如何思はれるか知らぬが、私はこの中尉君を實に孝行な子だと思ふ、道德家だと思ふ。事柄はよく分らぬが、兎に角母君の命令をこれまでに守つたのは豪い。

併し、中尉君にして、もしこんな手帳を殘さなかつたら、尙一層孝行な子だつたらうに、尙一層道德家だつたらうにと、たゞそれが惜しまれる。

中尉君を殺した彈丸は手帳を通らなかつたと見えて、手帳には傷がない。

眞　空

「今夜は約束の手紙を燒く晩だ。」

と、黑い服を着て水色の襟飾をした男が、下を向いて靜に言ふ。膝の上に黑いスクウル、バッグのはち切れさうに膨れたのが載つてゐる。

鐵色の服を着て黑の襟飾をした男は、默つて天井の隅を睨んでゐる。

紺の服を着て濃い紫の襟飾をした男は、默つて障子の棧を見てゐる。

居流れた六人の女は、默つて床の間の寒菊を見てゐる。

黑い服を着た男は、袋の紐を解いて古い手紙の束になつてるのを五つ六つ出した。

「隨分あるねえ。」

鐵色の服を着た男が、さも感心したやうに息を引いて言ふ。

「三年の間にこれだけ來たんだ……」

と、黑い服を着た男は悲しさうに言つたが、やがて調子を變へて、

「惚れ合つてゐたのが三年……夫婦になつてゐたのが三年……逃げられてから今日が三年……」
と、歌でも唄ふやうに言つて、くツつけたやうに力の無い聲で笑つた。
鐵色の服を着た男は默つてゐる。
紺の服を着た男も默つてゐる。
六人の女も默つてゐる。
「燒く前に僕に一本だけ讀まして吳れ給へ。」
黑い服を着た男は、他の手紙でも讀まして貰ふやうに、かう斷つて置いて、束の中から一本盲拔きに拔出した……暫く默つて讀む。
「あ、こりや伯父が病氣だつた時のだ……」
と、黑い服を着た男は苦い聲で言つて、眼を閉つた。
鐵色は默つてゐる。
紺も默つてゐる。
六人の女も默つてゐる。
「さ、もう好い……火消壺は來てゐるね。」
一通讀み終ると、黑い服の男は陽氣でかう言ふ。

一人の女が立つと、次の間から鐵製の錆びた大な火消壺を重さうに持つて來た。
「一本宛渡すから、讀まずに裂いて呉れ給へ……讀んぢやいけないよ。」
黑い服の男は、六人の女に一本宛、それから鐵色にも一本、紺にも一本手紙を渡した。そして自分も今讀んだのを一本持つた。
三人の男と六人の女とは、顏と顏とを合せて、手元を見ずに、一齊に古い封筒から古い手紙を拔き出した。そして各自にそれを裂き始めた。
「こら、こら、讀んぢやいかん、讀んぢやいかん。」
一番右の女が、直ぐと鐵色の男に叱られた。
「讀んだんぢやありませんよ。」
「でも下を向いたぢやないか。」
「はい。」
又みんな默つて了つた。紙を裂く音が靜に聞える。
「字が巧い事ねえ。」
右の端から三番目の女が、頓狂な聲を出した。
「又讀んだな。」

鐵色が又叱るやうに叫つた。

「ただ見たの。」

又靜になつた

手紙を裂く音が、そこにもこゝにも、しゆ……しゆ……しゆ……しゆッと聞える。

「好い音樂だ。」

紺の服を着た男が、耳を傾けて言ふ。

「男を欺した女を裂く音だ。」

鐵色の服を着た男が、無理に力を入れたやうな聲でかう言ふ。

黑い服を着た男は、眼を閉つて、默つて手紙を裂いてゐる。

六人の女も默つて手紙を裂いてゐる。併し女はみんな浮氣な微笑を含んでゐる……

「もう好からう。みんな此方へ呉れ給へ。」

黑い服を着た男は、夢から醒めたやうに、眼をパッと開いて、勢好くかう言つた。

鐵色も紺も六人の女も、みんな切々に裂いた手紙を、黑い服の人の前に積んだ……唯の紙屑としか見えない。

黑い服を着た男は、一摑つゝ幾度にもそれを摑んで火消壺の中へ投げ込んだ。そして裂かれずに殘

つてゐた三四束の手紙をも、その儘一緒に中へ投り込んだ。
鐵色の服を着た男は、立上つて、障子や襖を所々少しづゝ明けた。
黑い服の男は火消壺の中の手紙にマッチで火を點けた。
黑い烟が女の髮の毛のやうに亂れる。その下から赤黑い炎が女の舌のやうに……
ひら……ひら……と閃く……
「臭い。」
一番左の女が蓮葉な聲を出した。
「姦通した女の死骸を燒く臭だ。」
と、鐵色の服が細い聲で言ふ。

遠くで石臼を挽くやうな音がして來た。
「何だらう。」
「雷様よ。」
「まさか。」

「こんな寒い時分にねえ。」

紫白い稲妻が障子や襖の隙間に光つた……

「あ。」

「恐い。」

時ならぬ雷は、段々みんなの頭の上へ近づいて來る……段々音が激しくなる……段々光が繁くなる。

黑い服を着た男は、手紙の燃える烟と火とを眺めながら、靜に清い微笑を含んでゐる。

紺の服を着た男は、唇を白くして、眼を据ゑて、默つてゐる。

六人の女は、肩と肩とを摺寄せて、一齊に突伏した。

一人の女は橘の帶を締めてゐた。一人の女は藥玉の帶を締めてゐた。一人の女は菊の帶を締めてゐた。一人の女は花桐の帶を締めてゐた。一人の女は麻の葉の帶を締めてゐた。一人の女は鐵線花の帶を締めてゐた。

鐵色の服を着た男は、これを流し眼で見て、ハハンと鼻で笑つた。

祈禱

H――村には教會が無い。

信者は毎日曜の午後一時から、山の上の馬越夫人の家に集つて、感話祈禱會を開く。但し毎月第三日曜だけは、午後一時からの會を午後六時からに延ばして、六里離れたS――町の教會から、神學校出身の若い牧師村川氏を呼んで、說教をして貰ふ。說教が濟んでから、いつもの感話祈禱會に移るのである。

馬越夫人は元そのH――村の村長を勤めてゐた馬越市兵衞氏の未亡人である。市兵衞氏は生前大の佛教信者であつたが、基督を神と信ずる夫人と宗教上の爭論をするなどゝいふことは絕えて無かつた。市兵衞氏は常に夫人の信仰を尊重し、夫人は又常に市兵衞氏の信仰を尊重してゐたのである。『基督と釋迦が何處かで逢つたら、きつと互に握手するだらう。』といふ馬越夫婦の宗教觀は、常に村民の深い感動を得てをつた。

市兵衞氏が胃癌で死んだ時、夫人は良人を葬るに佛式を以てした。夫人と等しく基督を信ずる村人

達も式に列つて、各々一撮の抹香を香爐に燒べた。

それまで感話祈禱會は毎日曜小學教師田宮氏の二階で開かれた。市兵衛氏の歿後、馬越未亡人の家で開かれることになつたのである。牧師の村川氏をS――町から呼ぶ費用も馬越夫人の手元から出るのである。

馬越夫人の屋敷は山の上の風景絶佳な所にある。崖の下を水の綺麗なK――川が流れてをる。川の向うは四里續きの田圃である。田圃は紫雲英の紅から早苗の薄緑、收穫の黄から冬田の黑と、四時に色を變へる。崖の上に古い櫻が一本ある。花が散ると花が川で渦を卷く。葉が散ると、葉が川で巴を畫く。

ウォオヅウォオスを崇拜する青年牧師村川氏は、毎月一囘馬越夫人の家へ來るのを樂にしてをる。村川氏は第一に夫人の家の自然美を愛した。第二に村人の原始的な信仰を愛した。第三に月一囘のこの働が愛する妻の衣服費となることを喜んだ。

村川氏の若い妻君は、かれがS――町へ來てから貰つたものである。S――町から更に五里離れたN――市といふ大きな町の高等女學校を卒業した才媛である。S――町へ來た當座、村川氏はその獨身なるが爲に一部の信者に不安の念を與へた。聰明な村川氏はそれを見てとると、町長に媒妁を頼んで、直ぐと今の妻君を貰つた。妻君を貰ふと、村川氏は忽ち町全體の信用を得た。

毎月第三日曜には四時に教會の方の用を濟まして了ふ。それから五時少し前にS――町を出る汽車に乘つて、五時半少し過ぎにH――村のはづれにあるU――驛に着く。停車場から馬越夫人の家までは十二三町しかない。その間を村川氏は自然美を味ひながら歩く。

說教は正六時に始めて、正七時に終る。それから十分ばかり休んで、感話祈禱會に移る。村川氏は說教が濟んでも直ぐ歸るわけには行かない。感話會につきあつて、二三の熱心な信者の祈禱を聽いて、それから自分が閉會の感謝を捧げるまでは坐つてゐなければならない。

そして九時半の終列車に乘つて愛する妻君の元へ歸るのを常としてゐる。

ところが、時々この感話祈禱會が長くなつて、村川氏に汽車の心配をさせることがある。

村川氏が九時半の汽車に乘る爲には、どうしても感話祈禱會を八時半に終つて貰はなければならぬ。明い內なら三十分で行ける停車場までの道も、足場が惡いから、夜の暗がりでは五十分かゝる。それに切符を買ふ時間も欲しい。

けれども感話の長くなるのは、まだ防ぐ道がある。うまい隙を見て、「これから一二の兄弟に祈禱を願ひます。」といへば、それで感話は勢切りあげられて了ふ。

たゞ困るのは祈禱の長くなる時である。これもうまい隙を見て、閉會の祈禱を捧げて了へば好いわけであるが、顏を見合つて雜談的に感話をしてゐる時から見ると、何となく神聖な氣がして、然うや

たらに口も出せない。少しは長い沈默も許さなければならぬやうな氣がする。それが爲に、村に何か事件でもあつた時には、それからそれと祈禱が續いて、中々歇まないことがある。村川氏は俯向いて祈禱を聽きながら、時々兵兒帶の間から時計を出して、時間を見る。

「お泊りなされば好いに。」と馬越夫人はよく言ふ。けれども村川氏は一度も泊つたことがない。村川氏は妻君を家に置いて、自分が餘所へ泊るのを罪惡だと思つてゐる。それに馬越夫人は年寄ではあるが女である。女主人の家に泊るのは自分の信用に關ると思つてゐる。信用がどうならうとそれは好い。それが爲に幾多の質朴な信者に信仰を落させるやうなことがあつては神樣に濟まぬと思つてゐるのである。

けれども幸に今まで、泊らなければならぬやうになつたことは、まだ一度もない。時計を見ながら、もう一つ祈禱があつたらもう汽車が無いと思つて心配してゐると、大抵それで祈禱がお終になる。然もなくば、もうこの上遣られたらといふ間際に、うまく閉會の祈禱を捧げる機會が生じて來る。

奇蹟を聖書の文字通りに信ずる村川氏は、これをも奇蹟だと思つてゐる。しかしこの奇蹟はS——町の信者には話したが、H——村の信者には內證にしてをる。

ところがこの春、四月の第三日曜のことであつた。

感話の時に、或若い百姓が、自分の犯した或重大な姦淫罪を、極めて正直に、極めて質朴な語で述

べた。馬越夫人、小學敎師田宮氏を初め、村の信者はこの告白を聽いて、大に感動した――この告白は凡そ一時間かゝつた。

それからこの若い百姓が祈禱の口切りをした。かれが悲痛な泣聲を出して神の赦しを乞うた時には、嘆息のやうな「アアメン。」「アアメン。」といふ聲が、方々で起つた――祈禱も十二分許りかゝつた。村川氏の懷中時計は旣に八時半を五分過ぎた。村川氏はいつもの心配を始めた。しかし十分の九分は神の奇蹟に信賴して、けふも必と無事に歸れるだらうと思つてゐた。

若い百姓の熱烈な祈禱が濟むと、彼方からも此方からも祈禱が起つた。何れも若い兄弟の罪の赦しを基督の十字架を通して天なる御神に乞ふ聲である。

村川氏の時計はもう九時十分前になつた。村川氏は稍不安になつて來た。神の奇蹟は今夜どう働いてゐるのだらうと考へながら、かれは時計を膝の上に置いた。そして田宮先生や馬越夫人の愛情のこまやかな祈禱を聽きながら、俯向いて凝と時計の針を見詰めてゐた。

とう〳〵九時になつた。

村川氏はもう堪らなくなつて、足をむづ〳〵させた。祈禱は綿々と續いて中々歇まない。

村川氏は時計を兵兒帶の中へ納つて、竊と手を後へ出した。そして床の間に置いてあつた自分の帽子を竊と摑んだ。

それから竊と立つた。竊とこの室を出た。信者は各自の祈禱に神の聲を聽くの思をしてゐて夢中だつたから、牧師の立つたことに氣のついたものは一人もなかつた。

馬越夫人の家は下女下男に至るまで信者だつた。村川氏は誰も人のゐない暗い部屋を幾つか拔けて玄關へ出た。

玄關へ出ると、自分の下駄とステッキを摑んで駈け出した、足場の惡い暗い路を停車場まで、一息も休まずに駈けた。

終列車へはやつと間に合つた。慌てゝ切符を買つて、跣足の儘で汽車へ飛込むと、直ぐ車掌の呼笛が鳴つた。

かれは手拭を出して汚れた足を拭いた。そして下駄を穿いた。懷中へ手を入れて見ると、聖書も讃美歌も安全だつた。

村川氏はやはり奇蹟だと思つた。今日の樣な日に妻君の所へ歸れるのはやはり奇蹟だと思つた。そして身體の疲れたことなどは何とも思はなかつた。

祈禱は村川氏がゐなくなつてからも續いてゐた。その晩集つた人は總て祈禱をしたといつても好い。大方それの濟んで時はもう九時四十分だつた。

長い沈默……信者は俯向いた儘村川牧師の閉會の祈禱を待つてゐた。けれども、牧師はいつまで待

つても口を開かない。

馬越夫人は思つた。これは今夜の祈禱が餘りみんな熱心だつたので、若い牧師は餘りに感動して了つたのだらう、それで祈禱が出來ないのだらうと思つたから、自ら進んで閉會の祈禱を捧げた。

信者が一同首を上げると、先刻まで床の間の前にゐた筈の村川牧師は、何處へ行つたか影も形も無かつた。

みんな吃驚して口も利けずにゐると、夜の闇を通して、微に汽笛の音が聞えた――信者は互に顏を見合せて苦笑した。

十分間演說

或大學の文科の學生が上野(うへの)のS亭で茶話會を開いた事があつた。色々な雜談や隱し藝が濟んで後、誰やらの發議(ほつぎ)で、出席者殘らずが順繰りに「十分間演說」をする事になつた。

その時B君といふ學生が次のやうな演說をした――

「僕の演題は「不禮な女」といふのです。僕は今迄不禮な女に隨分澤山會ひましたが、その內でも終生忘れられない不禮な女が二人あります――その二人を御紹介しようと思ふのです。

「僕がまだ中學へ行つてる時分でした。或夏仲の好い友達三人と日光の中禪寺から湖水を船で渡つて、それから步いて足尾(あしを)へ出た事がありました。銅山を見物して、足尾に一晩宿つて、その明る日大間々(おほまま)の方へ向つて出發しました。

「處がその日は非常な雨で、みんなグショ濡れになりました。もう大間々へ着いた時分などは草鞋(わらじ)は水膨れになる、脚絆は泥で壁を塗られたやうになる、いやもう散々でした。

「その日の汽車で東京へ歸る筈でしたけれども、あんまり草臥れたからといふので、その晩は大間々に泊る事になりました。

「まるで勝手が分りませんから、警察の厄介になつて、警察の世話で或安宿へ案內して貰ひました。何でも這入り口に「おとまり宿」と平假名で書いた行燈の出てる極めて舊式な宿屋でした。

「僕達はその晩大に飯を食ひました。所がその給仕に出た下女です。僕が四杯喰べて五杯目の茶碗を默つて出しますと、茶をつぎさうにするのです。そこで僕は「おい茶ぢやない、飯だぞ」と申しますと、「あら、まだですか。」と、さも呆れたやうな顏をして僕の顏を凝と視ました。その眼つきが如何にも僕を侮蔑したやうに見えて、今だにそれが忘れられません。實にあの下女は不禮な女です。恐らく一生忘れられない不禮な女です。

「第二の不禮な女は、僕が高等學校時代の頃出會した女です。或日音樂學校にコンサアトがあつて、それを聽きに行つた歸りです。上野から電車に乘りました。乘りますと唯一つ席が明いてゐましたから、そこへ腰を掛けました。すると直ぐ後から袴を着けてゐない女學生が一人乘りました。この女學生はやはりその日の音樂會に行つた人です。僕の直ぐ斜め下にゐたのですから、僕も顏を覺えてゐました。

「この女學生が乘ると、直ぐ電車は動き出しました。立つてるのはこの人一人ですから、氣の毒に思

つて、僕は立ちました。立つて「さアお掛けなさい。」と申しました。
「けれども女學生は掛けません。「ヘン。」といつたやうな侮蔑的な笑を含んで、僕の顔を凝と見た切り、決して掛けようとしません。
「希代にその電車は須田町まで乘る人も降りる人もありませんでした。僕とその女學生とはその一つの空席の前に睨み合ひで須田町まで立ち通しました。
「僕も一旦立つた以上は坐る氣になれませんでした。女學生は一言の禮も言はず、貴君が勝手で立つたんだから私は知らないといふ顏をしてるのです。そして時々蔑むやうに僕の顔を見て厭に笑ふのです。それが如何にも「女だから立つたんだらう、厭な奴だ。」といふ風に見えるのです。
「僕は堪へられないで、須田町で飛降りて了ひました。僕はこの女の不禮を今だに忘れません。實に不禮な奴です。不禮極まる女です。」
と憤慨しながら、懷中時計を一寸出して見、
「や、十分が少し過ぎた。失敬、失敬。」
と言つて座に就いた。
するとM君といふ皮肉な學生が、
「おいB君、その大間々の宿屋の女中は美人だつたらう。」

と質問した、

B君は少し考へるやうだつたが、

「うむ、然ういへば中々美人だつた。眼が好かつた。」

「どうだ。その電車の女學生も美人だつたらう。」

B君は又少し考へたが、

「さあ。まア美人といふのかなア。兎に角丈のすらりとした、氣品の高い女だつた。」

「ハハハハ。」

M君はぶつけるやうに笑ひ出した。

「何が可笑しいのだ。」

とB君が疑に怒を混へて訊くと、M君はまだ抑へ切れぬ可笑しさに、はッはッと息を切りながら、

「だ……だつて、き……君は、不禮極まる女だから忘れられないと今言つたけれども、それは不禮をされたから忘れられないのぢやない。美人だから忘れられないのだ。然うだらう、え。B君、然うだらう。」

B君は、感心したやうに一寸頭を振つて、

「然うかなア。」

と言つたが、やがて眉根に皺を見せて、苦い顔をした。

Ｂ君の隣席のＡ君が起つた……

蚊

細井信吉は妻君のお玉と、木綿の綴布(はぎ)の少なからず當つた、色の黄いろく褪め果てた一つ蚊帳の中に褥(とこ)を並べて臥て居る。

六疊一間の周圍に破道具(がらくた)を有りたけ積んで、中央が穴のやうに僅か二疊ばかり空いてる處へ二人臥て居るのだから、蒸暑くて蒸暑くて迚も眠られたものではない。

おまけに梅雨以來の天井壁などの濕りが未だ乾き切らぬ勢か、空氣が厭にじめ〳〵して、何だか正(え)體(たい)の分らぬ惡臭が室一杯に充滿して居るから、なほと眠られたものではない。

雨戸を開放した處で、小さな路地の一番奥の、高い土塀と土藏の背面との間に家があるのだから、風の這入つて來よう道理がない。

然るに妻君は高鼾だ。

信吉は横になつたが如何しても眠れない。妻君の高鼾を聞くと益々眠れない。

信吉は偶と考へた……

こんなに零落れて了つたのも悉皆この女の御蔭だ。破道具の間へ狹まつて襤褸蚊帳の中に寢るやうになつたのも悉皆この女の御蔭だ……

何と云ふ醜い面だらう。半分口を開いて、汚い齒を剝き出して、がァ〳〵と鼾をかいてる處は恰で獸だ。あゝこれが乃公の妻君かと思ふと嘔吐が出たくなる！

面の醜いのも好い、鼾の騷々しいのも好い。が、一體この女の平常は如何だ！　敎育と云ふものは更に無い。新聞一枚滿足に讀めないのは未だ好いとして、今時電車の方向の讀めない女が居るか。それが乃公の妻君だ！

他人に物を命ぜられて「ハイ」と云ふ返事をした事がない。何時でも「ウン。」だ――それも澁々。人が來て茶一つ出すにも大抵立つた儘だ。坐れと言へば、立膝になる。乃公が工場へ行つて不在であらうと何であらうと、そんな事は一切構はず、三時間も四時間も金棒を曳いて步く。これが爲に無けなしの破下駄を盜まれた事も一度や二度ぢやない。

叱れば直ぐ泣く。泣くから口惜しいのだらう、口惜しければ直すだらうと思つて居ると、泣き歇んで了へばけろりとして不相變だらしが無いんだ。

家の事と云つたら更に爲ない。朝雨戶を開けるから、夜雨戶を鎖めるまで、悉皆乃公がするんだ。

乃公が働くのを見ても別に手傳はうともしなければ、氣の毒だと思ふやうな樣子もない。「一體御前は

如何云ふ量見だい?」と訊いて見れば、「私は何もしないで遊んで居たい!」と平氣で答へる奴だ!
何だつて乃公はこんな女と一緒になつたのだらう。何だつて乃公は……社會上の位置まで犧牲にして……こんな女と……
或人が言つた、人生は神の惡戯だと。神の惡戯が吾人にとつては眞面目な人生なのだ。人の惡戯が惡戯にならぬのは無理もない……
乃公は確に惡戯の積りだつたんだが、出來た小兒を惡戯だとは言へない……乃公は溫泉の在る山の村を逃げようとした……が、到頭村の者に捕まつて、厭でも應でもお玉を女房にしろと嚇かされた。生れた小兒は里子に呉れて遣つたが、お玉の始末には實際弱つた。お玉には父が無い、母が無い、兄弟姉妹が無い、親戚が無い、素より家も無い。故鄕も無い――溫泉から溫泉を働いて歩いて居た憐むべき女の浮浪者(やどなし)だ。
東京へ連れて歸ると、乃公は最う「社會の人」では無かつた。乃公は最う……斯う云ふ女の亭主になる人間と同じやうな勞働をし、同じやうな生活をしなければならなくなつて居た。
「縱令この女と別れた所で、乃公は最う迚も社會上の地位を回復する事は出來ないのだ。」……やがて乃公は斯んな意氣地の無い考を起して來た。そして過ごすこともなく日を過ごして……あゝもう八年になつて了つた……

或小兒が或家の黑板塀に落書をした。處が其處の主人に見つかつて縛られた。縛られて塀の落書の前に坐らせられた。斯うして、御前の今の苦痛は、それ御前の眼の前にある惡戯の爲だと敎へられた。主人は何時まで經つても繩を解いて吳れない。一日、二日、三日……一ト月、二タ月、三月……一年、二年、三年、四年、十年、廿年……恐らく死ぬまで解いては吳れまい。小兒は死ぬまで自分の眼で自分のした惡戯の跡を見ながら、自分の惡戯の爲に自分の得た苦痛を續けて受けて居なければならない……

乃公は恰どこの小兒だ！

一緒に居るのは已を得ないとしても、褥を列べて臥るのは實際堪へ難い苦痛だ。離れて臥たい、遠くの室で離れて臥たい、と思はぬ晩は一ト晩も無いが、今では六疊一間の住居――それも空いてるのは二疊きりだ！　屋根に臥る事も出來ぬ、緣の下に臥る事も出來ぬ！　矢つ張毎晩獸のやうな鼾を聞きながら獸のやうな妻君の隣りに臥なければならないのだ！

信吉はもう堪らなくなつて、橫になつてる事さへ出來なくなつた。むツくり起上つて褥の上に坐つた。褥の上に坐つて、腕組を堅くしたかと思ふと、恐い顏をして妻君の寢顏を睨みつけた……

ブーンと蚊の聲がする。信吉は偶と自分の褥の上を見た――流石は昔からのたしなみで敷布だけは兎に角白い。

その白い敷布の上を腹一杯に血を吸ひ込んだ一疋の蚊が細い脛を蹌踉と歩いて居る――もう飛ぶ力も無い。

信吉は恐い顔をしてその蚊を睨みつけた。

この蚊は屹度お玉の血を吸つて居る！　乃公の血も屹度幾らか吸つて居るに違ひない！　あの赤く透き通つて見える腹の中の血はお玉の血と乃公の血とが屹度一緒に混つて居るんだ！　と思ふと、堪らなくなつて、信吉は思はず平手を擧げて一撃にその蚊を潰した。

蚊は何とも言はずに潰れた。

濁つた赤黑い血は白い敷布を汚した。

不男

「それぢやあ、やつぱり斷りますか。」
書記の柳田は主人のデスクの横に立つて、卓上電話の受話器を弄りながら言つた。
「やつぱり斷つて置いて吳れ給へ。」
主人はタイプライタアから手を放して、悲しさうに書記の顏を見上げながら、響の無い聲で言つた。
「教育が無いからいけないとか何とか言つてね。」
今にも淚の溢れさうな眼附をして、主人が斯う附け加へると、書記は同情に堪へぬといふ調子で、
「でも今度のなどは隨分好い方なんですがねえ。第一仲人が木村子爵なんですし……。」
と言ひかけると、主人はコンマの釦をトンと一つ押して、寂しい笑を洩らしながら、
「やつぱり斷るより爲方がないさ。流石に子爵のお見立だけあつて、これなら僕も結構だと思つてはゐるんだが。」
と言つて、ほツと溜息をつくと、

「どうせ破れるものなら、恥を掻かない內に破れた方が好いからね。」
と言ひながら、訴へるやうな眼附で、又書記の顏を見上げた。
「けれども今度は子爵のお世話でもありますし、先方の親御も大分乘氣なやうな話ですから、どうです、せめて三四日待つて見ては、なんしろ昨日の今日ですからね。」
書記は主人の顏を憫れむやうに覗き込んだ。
「いや、いや」
主人は深く決する所のあるやうに頭を振つた。
「きつと又斷つて來るに極まつてる。どうかお願ひだから、向うから何とか言つて來ない內に早く斷つて吳れ給へ。」
「どうしても斷るのですか。」
「あゝ。」
「今日斷るのですか。」
「あゝ。」
「どうしてもですか。」
「うるさい……君は主人の命令を聞かんのか……。」

主人の聲は俄に荒々しくなつた。

書記は默つて首を垂れて、靜かに自分のデスクへ歸つた。そして、力無げに主人の方を見ながら、ライチング、タブレットの表紙をはねて、太い、長い、萬年筆を取り上げた。

主人は今までに三十何度と見合をした。そしてみんな女の方から斷られた。主人は金持である、建築學界の泰斗である、商店建築の熟練な技師として日本は愚か歐米にも名の高い人である。勿論外國へも幾度か行つて來てゐる、それ程の人物がどうして見合の度毎に女の方から斷られるのであらう。

主人は有名な不男である。主人は亞米利加の建築大學にゐる頃、『ブル』といふ渾名を附けられてゐた。主人の鼻はブルのそれのやうに黑く、短かく、そして上を向いてゐた。主人の右の眉毛は中程から禿げてゐた。子供の時樹から落ちて枝を突き差した傷の跡が赤くテラテラと禿げて了つて、いまだに毛が生えないのである。左の耳の後には瘰癧を切つた跡が蛇の首のやうな形をして光つてゐる。眼は如何にも細くて、唯顏の皮膚に裂け目があるといふだけである。

主人は幾度見合をしても、女の方から斷られるので、この頃では女の方から斷られない内に自分の方から斷るやうになつた。氣に入つたと言つて遣つてから斷られるのを恥に思つて、氣に入つても氣に入らないと言つて遣るやうになつたのである。主人はどんな美しい女にでも、どんなに教育のある

女にでも、無理に何か缺點を探し出した。氣に入らぬと言つて遣つてから斷られる分はまだそれ程恥でないと思つたのである。こつちから斷つて遣ると、大抵行き違ひに向うからも斷つて來た。

主人はもう結婚に望みを絕つたのかと言ふと、さうではない。さうでないから、いまだに人に周旋をも賴み、いまだにその果敢ない見合をも續けてゐるのである。

主人はこつちから斷つて遣つても、向うから押して來たいといふやうな女を求めてゐるのである。

書記の柳田が木村子爵家へ斷りを出した明くる日、子爵の執事から返事が來た。

書記は主人がプランを引いてる大きな机の側でそれを讀んだ。

『玉翰拜誦。貴臺益御清榮賀奉候。陳者子爵閣下御推擧遊ばされ候福島繁子義、御緣無之由遺憾至極に奉存候然る所本日先方よりも星廻り宜しからぬ哉にて破談申入れ參り候に付右樣御承知被下度、却て雙方便宜の義と相成　閣下も愁眉を開かれ申候、猶良緣も有之候はば必ず御世話仕るべく、精々心掛け居り候。餘は拜芝萬縷。早々不宣。』

主人は烏口を机の上に置くと、活き歸つたやうな調子で、

「それ見給へ。やつぱり斷つて好い事をしたんだ。今度もまあ恥を搔かずに濟んだ。」

と言つて、嬉しさうに笑つた。

「さうですねえ。」

と、書記は萎れて手紙を卷き返すと、それを持つて自分のデスクへ歸つた。

「助かつた。助かつた。」

と、主人はプランに向つて獨語を言つた。

夢

×

廣い道がある、道の左右に並木がある。格子戸の間から日の差すやうに、並木の間から日が差してゐる。日は差してゐても寒い。

三人の男の子が横に列んで來る。八つ位のを頭に左から右へ丈の順に列んで兵隊の玩具のやうに動いて來る。

三人とも半ズボンに黑い靴下を穿いて、襟の三角に折れた、胴のだぶ〳〵した上着を着てゐる。三人とも草色の鳥打帽子を冠つてゐる。三人とも小さな口を丸く明けて、白い息を吐いてゐる。

Papa! と言つて、一番小さいのが俺に縋りついた。Papa! と言つて、次のが又俺に縋りついた、Papa! と言つて、一番終に一番大きいのが俺の手を摑んだ。

どこの子供だらう。見た事もない子供だ。どうして俺の事を Papa! などと言ふんだらう。俺は父でもない、夫でもない、兄でもない、弟でもない、子でもない、伯父でもない、甥でもない、從弟でもない。俺はさういふ關係を世界の誰とも持つてゐない。この子供達はどうしたんだらう。あゝ、き

つと間違へたな。自分達の親父と間違へたな。俺はこの子供達の親父に似てゐるな。

併し、俺に似てゐる人間が一人でもあるのは不思議だ。世界にたつた一人しかゐない筈の、この俺に。

三人の子供の母らしい女が出て來た。横を向いて歩いて來る。少しもこつちを見ずに、こつちへ歩いて來る。草色の着物を着た赤ん坊を抱いて歩いて來る。

Kだ。Kだ。Kだ。

女は俺の直ぐ前へ來て、ぴたりと立ち留つた。やつぱり顏を背けてゐる。赤ん坊は母の胸に顏を伏せて、何者かを恐れるやうに、慄へながら縋りついてゐる。

Kだ。いくら顏を背けてもKだ。

三人の子供はKの子だ。抱いてる赤ん坊もKの子だ。Kの子ならBの子だ。

B。あいつが何だ。あんな者に人の父たる資格はない。あんな奴に子のある筈がない。

この子供達は俺の子なのかも知れない、草色の鳥打帽子を冠つた三人の男の子も、草色の着物を着た一人の赤ん坊も、みんな俺の子なのかも知れない。

「坊や。」

俺は赤ん坊の肩へ輕く手をかけて、やさしく斯う呼びかけて見た。俺の聲は破れた鞴(ふいご)のやうに掠れて鳴つた。

赤ん坊はこつちを向いた、大人のやうな顔だ、額に皺がある頬がこけてゐる。左の眼の上に小さな疣がある。

「馬鹿。」

赤ん坊は大きな赤い口を明いて、大人のやうな太い聲を出した。その黒い眼は、意識して侮蔑するやうに、俺の顔を見詰めて笑つた。

「坊や。」

俺はも一度斯う言つて見た。俺の聲は絓絲(すがいと)のやうに細く慄へた。

「馬鹿。」

赤ん坊は又大人のやうな太い強い聲を出したかと思ふと、ぷいと向うを向いて、母の胸に顔を伏せた。

母はやつぱり横を向いてゐる。

×

提灯が走る。暗闇の中を提灯が走る。

細長い提灯だ。黄いろく煤びた提灯だ。上の方に手拭で鉢巻がしてある。明りが手拭を透いて見える。汚點のある穢い古い手拭だ。

提灯が走る。古い穢ない汚點のある手拭と一緒に走る。

車の音がする。石の上を車が軋る音がする。提灯の明りの下で車の軋る音がする。

俺も走つてゐる。提灯と一緒に走つてゐる。明りの透いて見える古手拭と一緒に暗闇を走つてゐる。

提灯がふはふはと空を飛ぶ。俺もふはふはと空を飛ぶ。

「何處へ行くの。」

俺は息を切らしながら斯う聞いた。

女の青白い顔が提灯の上に見える。暗闇の中にぼんやり白く見える。

女は涙に濡れた限を落して、暗闇を走る提灯をぢつと見た。

俺も提灯をぢつと見た。

「……橋組合」

橋の上が見えない。手拭に隱れて見えない。明りは手拭を透かしても、字は手拭を透かさない。

提灯はますます走る。女の涙に濡れた眼と、男の悲しさうに光る限が、提灯の黄いろい明りを見詰めながら走る。

×

青い梅の實が鈴なりになつてゐる。

梅の木の下に乳母車がある。

乳母車の中に赤い着物を着た赤ん坊が、小さな手を輕く握つて、すや／＼と寐入つてゐる。

乳母車の向うに十四位のKがゐる。Kが笑つてゐる。

乳母車のこつちに俺がゐる。俺が笑つてゐる。

Kが手を俺の方へ出すので、俺もKの方へ手を出す。Kの手が俺に屆かない。俺の手もKに屆かない。

Kは一生懸命に前へ手を伸ばす。俺も倒れる程前へ手を伸ばす。それでもKの手が俺に屆かない。俺の手もKに屆かない。

梅の實がポツリと赤ん坊の額に落ちた。赤ん坊は火のつくやうに泣き出した。

×

ふとKの横顔が見える。

髮の毛が二筋三筋頰に垂れてゐる。頰が靑白くやつれてゐる。

「瘦せたねえ。」

女はなんにも言はない。なんにも言はないで、唯横を向いてゐる。

「どうしたの。」

女はやつぱり默つてゐる。默つてゐて、横を向いてゐる。

「いま何處にゐるの。」

女はやつぱり默つて、横を向いてゐる。

やがて暗闇へすうつと消えた。

×

俺は女と二人、小さな車へ重なり合つて乘つてゐる。女の身體が重い石のやうに俺の身體を壓す。

苦しい。苦しい。息が詰まりさうだ。

それでも俺は笑つてる。俺の笑つてる顏が俺によく見える。

三階だか四階だかの、宿屋のやうな家の前を通る。

三階だか四階だかの手摺につかまつて、往來を見おろしてるのは牧師のS先生だ。

「先生、御免なさあい。」

俺はなんだか非常に惡い事をしたやうな氣がした。俺は女の背中へ顏を押しつけて先生に詫まつた。

「先生御免なさあい。」

俺の聲は犬の遠吠のやうに響いた。女の背中は俺の涙に濡れた。

先生はやつぱりこつちを見てゐる。こつちをぢつと見詰めて、默つてゐる。

俺は先生が恐い。先生が恐い。

重い。重い。

恐い。恐い。

×

大きな手洗鉢の眞ん中から細い噴水が出てゐる。噴水はゴボゴボと閊へてはすうつと出、ゴボゴボと閊へてはすうつと出た。それを見てゐると、俺は胸が苦しくなつて來た。

楊子を使ひながらY君がこつちを向いた。Y君の額の皺がいつもより暗く見える。

「Kとかいふ人は今どうしてるんです。」

Y君の聲は噴水の閊へるやうに咳入つた。

「Kですつて。」

俺はKが思ひ出せなかつた。俺は唯ゴボゴボと咳入る噴水が悲しかつた。

俺はY君と列んで顏を洗つた。二人の後に一人宛汚い女が立つてゐた。二人はてんでに後から女に尻を壓されるやうな氣がした。

顏を洗つて了ふと、女が手拭を出した。汚點のある穢ない古い手拭だ。

噴水がゴボゴボと苦しさうに咳入る。

俺は又胸が苦しくなつた。

×

……亭のやうでもある。俺の家のやうでもある。俺の家のやうでもある。……亭のやうでもある。

染次が歌を唄つてゐる。細い絲を辿るやうな、悲しい。賴りない聲で唄つてゐる。爪彈の音が薄い硝子板を彈くやうに痛ましく響く。

歌の文句は分からないが、時々『身は浮き舟の』と張り上げる聲が聞える。張り上げた後は、消えるかと思ふ程調子が暗くなる。

連れはいつものY君だ。Y君はいつもの通り額に暗い皺を刻んで、默つて染次の歌を聞いてゐる。

川がある。川の向うに道がある。その暗い道を細長い提灯が黃いろく慄へながら走つてゐる。

俺はその提灯をぢつと見詰めてゐる內に、譯もなしに淚が出て來た。

女中が酒の代りを持つて來た。
髮の毛のほつれた、頬の靑白い影の薄い女だ。
女は始終横を向いてゐる。誰が何を言つても横を向いてゐる。
「Kさん。」
Y君が囁くやうな低い聲で、そつと斯う言ふと、女中は驚いたやうにこつちを向いた。
Kだ。

×

古びた白木の大きな机がある。
籐張りの粗末な椅子が五六脚ある。
一段高い壇のやうな所があつて、その上にも古びた机と粗末な椅子が列んでゐる。
あたりは薄暗くて壁も天井も、床も見えない、唯、机と椅子とが寂しさうに、ぢつと動かずにゐるのが見えるばかりだ。
警察のやうでもある。裁判所のやうでもある。併し、人は誰もゐない。

頬の青白い髪の毛のほつれた女が、首をうな垂れて、涙をぽろぽろ零しながら這入つて來た。
Kだ。
女は背中に座蒲團を丸めて負ぶつてゐる。女はその座蒲團の中に赤ん坊でもゐるやうに、兩手を柔かに背中へ廻してゐる。併し、座蒲團の中にはなんにもゐない。
俺はKの横顏をぢつと見詰めてゐる。俺はそこにゐるのではないが、何處からかぢつと見詰めてゐる。
女は俯向いて、泣いてゐる。
誰も人は出て來ない。
俺は女の負ぶつてゐる座蒲團を見ると、急に心が暗くなつた。
Y君が何處かで唄つてゐる。響のない嗄れた聲で、車が石の上を軋るやうに唄つてゐる。
『身は浮き舟の……』
やつぱり天井も、壁も、床も見えない。
人も出て來ない。
薄暗い机の前で、女は座蒲團を搖すりながら泣いてゐる。
俺は手足を縛られて小さな穴へ押し込まれでもしたやうに息苦しくなつて來た。心が見えなくなる

程暗くなつて來た。

『身は浮き舟の……』

染次が何處かで唄つてゐる。細い絲を辿るやうな、賴りない悲しい聲で唄つてゐる。

姉妹

一

歸省いたしました。

すると家内一同待ちに待ち居りし處なりとて、早々海水浴か山の溫泉に行かうと申します。皆は海に行きたいと申します。けれども私は海は厭だと申しました。それは此節この町では都に物學びに行き居る學生が歸省後は必ず海水浴に行くのを名譽のやうに思つて居ります故に、從つて海水浴場も俗人等のあつまりに違ひありません。今のダラクして居るフハイして居る學生等の集りに違ひありません。私はそんな處へ行く事はいやですから、無理に山へ行くと申しました處、皆も行くと定りました。そこで弟妹と父と女一人男一人を連れて、この町を去る事五里程の山の溫泉に參りました。處が學生などは一人も居らず、友となすは天然の美はしき山又山、川又谷にて、眞に美しく實に愛すべきであります。前を見ても山、後を見ても山、實に美しく淸くあります。私は天然を愛します、その淸き事、實に如何なるアクマも天女の樣になりますね、必ずなります。

ところ〴〵に山百合の花、ホワイトの百合花よ。實に淸き姿、天女の樣であります。それに名も知れぬ雜草の中にありて一人淸く美しくありながら、自分の姿を誇ることなく、たかぶらず、頭を垂れて謙遜なる姿、實に天女、天女、天女！

私もいろ〳〵家の事情がありまして苦しくあります。私一年程東京に居る内に、家庭に於て實に驚くべき事情が起つて居りました。私は少しも知りませんでした。何故知らせて吳れないと申しましたら、心配するから知らせないのだと申しました。私は此後如何しませう。

どんな家庭の中にありても、自分の心だけは常に淸く正しく高尙なるものでありたいのね。

家庭が亂れて風波絕え間なしなのよ。

事情は後便委しく御知らせ申上ます。書き立てる時は紙五六枚程かゝりますから。

私はこゝには一週間ばかり居る積りです。

山の溫泉にて

八月五日　　よし子

二

私は今朝今夕、前の山に行き、後の山に行きて、神に祈り、讃美して來ました。

私は今家庭の事情に苦められて居りますが、私は決してつぶやきは致しません、不平はありません。神樣は人間に堪へられない程の困難を下し給ひません。私はこの後不幸の上の不幸困難の上の困難が愈落來り、私をして無限の悲哀に沈ましめん時、私は謹んで感謝して忍びて之に堪へ、どうかして私の品性を高めたい。決して世の中は美服を着て美食して唯ぶら〳〵と醉生夢死すべき處にはあらざるなり。これより後……今も――この山にありても、實に家の事情のため苦しみつゝあります。併しこの困難この苦みは、決して他に得べからざる私の經驗と相成る事と信じて居ります。私の苦痛が願くは神に至るの道の躓く石とならずして、之に依りて私が益々神に近づくの道となりたい。これと共に生を通じ死を通じて神の前に忠實なる婢となりたい。

私の家の事情はあなたが許したら、委しく御知らせ申上ます。併しあなたに同情を求めるやうで書く事が出來ません。

山の溫泉にて

八月十日夜　　よし子

三

女！　女はアクマなり。登りては天女の如く、降りてはアクマなり。私は深く感じました。我が父

は不道德なり。神を恐れざる人なり。そは我が母あるにも係らず、四五年前、最も賤しき藝者を妾（めかけ）となしたるなり。私は其頃はまだ幼年にして何事もよくは分らず、それさへもよくは知らざりしなり。度々母の忍び泣を見ては何だか變だと思ひ居りしなり。母に尋ぬれば、母は私等には分らない事であると申して、少しも知らせて吳れませんでした。その內私は都に上りましたから、家內の事は少しも知らず、母も妹も私に知らしたら、心配するであらうとて、少しも知らして吳れないの。こんな事委しく書けば、紙十枚ありても足らず。大切な處だけ書きますよ。

その妾のため、家內に風波（ふうは）絕えずして、母の苦しみ――母はその爲に心配して肺病と云ふ恐しい病を起しました。それよりも尙忍びない事は妹であります。妹は私とは違ひまして、やさしい質（たち）で、口などは一日に二言か三言しかおしやべりしない神經質な、おとなし過ぎる子であります。この愛する妹が、家內風波に苦しみ惱みて、常にうつ〳〵として居りましたさうです。處があまりの家內の風波の爲、又或一つの事情のため、精神錯亂して、きちがひになりました。私は都に居りて少しも知りませんでした。夏休みに歸宅して、初めて聞いて驚きました。

私も……私の身には大祕密もあります。これ迄にはいろ〳〵困難もありました。不幸もありました。私は幼年なる身として、且風波無かりし平和の家庭に人となりながら、忽ちの變轉に浮世の荒波に出で、打離れたる北海道にまで行き、心中に非常なる悲憂を經驗して來ました。これにつきてはいろい

ろ事情もありますが、委しき事は御面晤に讓ります。私は苦しさの餘り神に賴り神を認める事が出來ましたのよ。

嗚呼私は神に賴らずして居りしなれば、妹の如く私も精神錯亂してキチガイとなりしならんも、幸にも私はいつも神と共にあるから、決して左樣な事はないと信じて居ります。けれども妹の病も今は少し落着いて居ります。故に海水浴よりも山の靜かな處にとて私がすゝめて山に來ましたのよ。

故に私は妹に同情を表します。私は妹のため身を犧牲となして私の出來得る限りは盡す決心であります。

私共は暫しなりとも、家内の風波の苦しみを山にて避けんと思ひ來りたるに、又こゝに一つの苦しみ……大なる〳〵苦しみのあるなり。そは妾の來りたるなり。私の苦しさは今筆紙に盡す能はず、御面晤にゆづるなり。あゝ私等を苦しめ惱まし、其上足らずして、こゝ迄つき來りて、我等を苦しめんとは……

私が北海道に行きましたのは、矢張妾の計略にて遣られました。――私は伯母の處に居りました。

私は九月よりは學校に入る事が出來ないかも知れません。父が如何しても上京させないと申して居りますもの、勉強は澤山だから家に居るやうにと申します。

私は妹が病氣全快するまでは、何が何でも上京しないと決心いたしました。妹の病もきつと全快し

ます。私が毎朝毎夕山で祈るのを神は知つて居られますから。

妹が病氣全快したなら、私は如何にしても上京する積りであります。私は神を恐れないだらくして居るふはいして居る人に全身の愛を捧げて、身を生涯犠牲となす事は、如何にしても出來ざる事であります、忍びない事であります。

書きぱなしで、讀み直しませんから御判讀下さいまし。

山の温泉にて

八月十三日　よし子

四

あの清い天然自然と別れて歸りました。

十日間程居りました。實は三週間の見込にて行きましたが、弟妹等の學校がはじまるので、山を降りました。弟妹等の學校は今日から開校いたしました。病氣の妹も歸宅いたしたいと申すにより、皆歸宅しました。妹の病氣は今は全く落着き居ります。

私は全くあなたの此度の御手紙にて悔いました。私は今迄製造的の愛を行つて居りました。妹を慰めると云ひ、又母に慰藉を與へるの何のと、誠らしく行ひつゝありました。始めて分りました。

私は妹が狂ひ、母が病にかゝりたる事を、不幸なものである、哀れなものである、神を知らないから、そんな事になつたのだと思つて居りました。私は神を信じて居るから、そんな病にかゝらないのだ、だから神をお信じなさいと母にも妹にも常に申して居りました。

あなたの御手紙にてわかりました。實に感謝いたします。なんと私はわからない女でありませう。私は是でも基督信者であるなどゝ云はれませうか。神樣の前にすまない。實に眞にあなたの淸い御手紙に對して恥かしい。私の如き人間が、人に同情を表したいの氣の毒だのと申されませうか、生意氣に。實に恥かしい。私は實に愚かだ。わからずやだ。今悔いました。

私の樣な輕薄な人間はない。私は家の事を心配して、狂ふ迄に至らなかつた、病氣になる迄に至らなかつた。眞(ほんと)にあなたの被仰る通り、輕薄な人間は狂氣にはなれません、思ひ惱んで肺病にはなれません。「同情を表す」とか「可哀さうだ」とか云ふ言語を冷淡な調子で云つてる自稱基督信者より、狂人の方が遙に神に近い、肺病患者の方が遙に基督に近い――ほんとです、ほんとです、眞に左樣です。私は良心に、恥ぢました、恥ぢました。

あまり遲くなりますから、もうやめます。妹はあなたの御手紙の初めの處を讀みまして泣きました、私も共に泣きました。妹は今全く落着いて居りますから、よくわかります。二人共に泣きました。

町にて

八月廿一日夜一時十五分すぎ頃　　よし子

五

私如き賤しきものゝ家庭の事につき色々御心配下さいまして誠に有難う存じます。父は少しはやさしくなりましたよ。妹はね、今は全く快くなりまして、落ちつき居ります。この頃は共に公園に行きましたり、家の内にて裁縫したり、本を見たりして居りますよ。母も快くあります。しかし私が少々あしくあります。腦が惡いのです。眼がわるいのです。近眼になりました。困ります。然し私は私の病氣について感謝して居ります。

あなた、喜んで下さい。私の妹はね、病氣のために惡しくあります、町中はね。それ故又いけなくなると惡いからね、村里に行くと申して居ります。私も嬉しくてね、それに贊成いたしました。そうして、如何でせう、實に嬉しいではありませんか。あのね、神聖な清い事業ね、養蠶に從事するのですと。實に私羨ましいのです。ます〳〵妹は清く、天國に近つくものです。私は私は……どうして神に救はれるでせう。これを考へると、私は、私――悲くて〳〵〳〵たまらないのです。私は實に今日苦しんで居ります。私一人哀れな者です。私は……如何したらこの罪人が神に救はれるでせうね。實に苦しい〳〵苦しくてたまらないのです。

私は腦はわるし、學校へ歸るのは地獄へでも行くやうな心持がしますから、どうしても厭でくたまらないのです。

學校へ行つて僞善者になる事は、私の忍びない所です。今の基督教の學校は、決して私共婦人として、日本の眞正な基督信者として、模範的婦人を養ふ所ではなく、西洋と日本との雜種……口には外國語をさもえらさうに操り、婦人の天職を忘れて、やれ社會改良だの、やれ何だの彼だのと云つて馳け廻り、むやみに男女同權だの女尊男卑だのと唱へ、勞働を賤しみ、指の白く美はしきを以て名譽となし居る貴き立派な貴婦人ばかりが養はれます。私はそれが厭なのです。私は何の爲に學問するのでせう。私は決して前に述べた貴婦人にはなりたくないのです。學校は私を僞善者にするのです。社會的物質的文明の貴婦人にするのです。ミッション、スクールは決して精神的貴婦人、日本婦人を出す處ではないと思はれます。自由のない處には決して眞理のある筈はないのですもの。私は僞善者になる爲に學問はしたくない。社會的貴婦人となるために學校に行きたくはないのです。キリストの母マリヤは如何なる婦人でありましたらう——私はいつも之を考へます。

私は今の女學生と云はれるのが厭なのです。私は女學生と云ふ（今の）名が厭なのです。私は二頭立の馬車を理想とするやうな事は厭なのです。故に私は上京は致しません。あなたからの御言葉も御座いますし、妹も私を放さないから。

私は親が許して呉れるなら、村里に行き、淸き靜かな處で精神を淸くしたいのです。妹は今その預ける好き家庭を求めて探して居るのであります。私も村里に行き、神聖なる事業に從事したく思ひます。然し親が許すか如何だかわかりません。これのみ心配なのです。それに私の身の上につき又少し事情が起りました——それは例の嫁入の話です。私は今實に苦しき場合に居ります。私はこの後如何なる方面に向ふのであるか、わかりません。神の聲に從ひます。

私は父が初めは上京して學校に復校せいと申しましたから、私はあなたの御言葉もあるし、又他に事情もありましたから、私は國に居つて妹について居るのだと申しましたら、そんなら妹に一生涯ついて居るのか、馬鹿者が、などゝ大に叱られました。またこの頃は私が上京しないものですから嫁入の話です。

私は今異母（妾——アクマ）のために非常に苦しみつゝあります。一家の事は皆私の身の上に來りました。しかし私は、これが私のため感謝すべき事であると思つて、嬉しく神に感謝して、忍んで受けて居ます。

アクマ……妾だとても、決して生れてのアクマではなかつたでせう。しかし年幼きより不幸にして賤しき境遇にありて、境遇が然らしめたのですから、實に憫むべき婦人であります、私は同情の念に堪へられないのです。

町　に　て　よ　し　子

九月九日

六

この下手な、わかりにくい字！　妹も私と同じく字が下手で、人樣に手紙差上げる事も出來ないのです。忍んで讀んで下さい。それは妹が私に、どうか私は大村さんと云ふ人に手紙を差上げたい、御禮を申上げたい、私の恩人だからと申して居ります。全くあなたの御手紙により、家の外にも出で運動散歩するやうになつたのです。これまでは人々が笑ふから厭だとか何とか申して、外に出る事は少しも致しませんでした。あなたが天國に近い者である。輕薄な者は狂ふ事は出來ないと申して下さいましたのを、妹は嬉しがつて居ります。この妹の手紙！　狂ひし者でも今は手紙など落着いて書くやうになつた事を思うて、忍んで讀んで下さい。

私の妹は家に居つて、家庭の風波の絕えないのを心配して狂うた位ですから、前々より氣が沈んで、學校にも行かず、唯人に顏を向けるのが厭で堪らないと申して、一室にばかり居りました故に、高等二年迄きり勉强はいたしません。

町　に　て

九月十日　　　　　　　　　　　　　　　よし子

＊　　　＊

まだ御目にかゝつた事もないのに、手紙差上るのは失禮と思はれますが、どうか許して下さい。またへたな字で、よくわからないでせうが、忍んでよんで下さい。

御前様の御手紙は姉さんが見せて下さいました。又話して下さいます。私は姉さんに神様の話をきかせられますが、私はまだよくわかりませんが、私は天國にゆかれるとのあなたの御手紙でうれしくてたまりません。

私が狂ひし時は、人々が皆笑つて又はあざけつた樣に思はれます（其當時はよくわからなかつたのですけれども、今になつて左樣に考へられます。）故に家の外に出ると、なんだか恥かしくて、人々が皆笑ふやうに見えましたから、私は少しも家の外には出た事はなかつたのです。然しあなたの御手紙で私は少しも恥かしくなくなりました。

あなたに御禮申上ます。有がたく思ひます。

私は町中はやかましくて厭ですから、靜かな〳〵村里に行きたく思ひますから、姉さんに話しました故に、村里のごく靜かな所に行くのです。うれしくてたまりません。

私はあなたに御禮申上ます。

下手なきたない字、許して下さい、たゞ私の心ばかりを御禮申上ます。

私は今年十五才であります。學校は少しばかりしか居りませんでしたから、字も書けません。どうか讀みにくいでしよが許して下さい。

狂ひし少女より

七

御手紙只今拜見いたしました。私は昨日村里に行き、只今歸宅いたしました。いよ〳〵村里に行くやうになりました。私昨日は村里に行きまして、山にのぼり、手を傷け、右の手の人さし指を痛めましたから、書くのに不自由です。

町を去る五里も山の中です。實に〳〵靜かな處であります。

山の下の處に小さな家の明いたのがありますけれども、妹と二人きりですから、大きな家の奥座しきを借り、二人で居る積りです。

すぐ養蠶に從事したいのですが、今は時節ではなく、來春三月頃より始まるとの事です。私の家には桑畑がありますから、妹と共に來春は養蠶に從事いたします。

村里に行つたら、山に行き、栗をひろうて、あなたに送ると、妹が申して居りますよ。

町にて
よし子

九月十八日夕

＊　　＊

御手紙有がたく拜見しました。

私のやうなものでも、あなたは妹として下さいますか。私は嬉しくて〳〵たまらないのです。どうか私を妹として下さい。私は實にあなたが有がたいのです。姉さんが神樣を有がたく云ふ程、私はあなたを有がたく思ふのです。私は何だか誠とは思はれない位です。實に嬉しい〳〵。私は世の中の人は大きらひなのです。私は嬉しい。私には兄さん、私をたすけて下さつた兄さんがあります。どうか私の兄さんとなつて下さい。

私は姉さんが頭痛がする〳〵と申しますから、心配なのです。きつと家の事や、父さんの事や、私の事で、心配してゐると思ふのです。けれども私が村里に行きたい〳〵と申すものですから、これについて色々と力を盡して下さるので、私は姉さんを有がたく思ひます。

いよ〳〵姉さんの力によつて、私は二十一日頃村里に行くのです。嬉しい〳〵。さぞ靜かで、鳥の聲だの、虫の音だの、川の流だの(兄さんはこれがあなたゞと申しましたね)が私の兄さんです。

私が村里にゆくにつきては御父さんははんたいいたしましたが、姉さんが父さんに色々なんだか話

して居りました。御父さん怒つて、姉さんの好きにせいと申しました。私は姉さん有がたく〳〵思ふのです。

妹より

八

其後は御不音に打すぎ御許し下さい。
いと水清き靜かなる村里で御座います。實に〳〵心持よく、靜かな〳〵處であります。
その內に山に栗ひろひに行きます。
なんだか淋しいやうであります。
先はたゞ御報迄。

村里にて

九月廿五日朝

よし子

ゆき子

九

兄さま、あなたもこんな靜かな村田舍に來たいとおつしやいますが、ほんたうによいのでありますよ。前も山、後も山で、朝早く床から起きて庭に出て見ると、きり一面で、實によい心持で、人の聲は姉さまと私の聲ばかりで、こんなよい所はないでしよ。東京よりもよいでしよ。町の友達は東京に行きたがつて〳〵居りまして、こんなよい所を田舍だと云つて居ります。

父さまは大へんおとなしくなりました。喜んで下さい。たゞ心配なのは姉さまばかりです。昨晩も泣いて居りました。姉さまが泣くから私もわけがわからないけれども泣きたくなりました。昨晩は姉さまより早く寢ました。今朝は米をとぎました。

栗をひろうて御送りいたしますよ。

これから村田舍の自然を兄樣だと思うて居りますよ。兄さまが自然が兄樣だとおつしやいましたから。

村里にて

九月三十日夜　　　　妹ゆき子

＊　　　＊

今日は失禮いたします。

すべてを、妹の手紙が語つて居ります。

私は別に何も書きません。

よし子

十

當地は雨ばかり降り居ります。この村はセキリ病流行致します。故に妹もつれて歸宅いたしました。私共の居つた邸内にもありましたから、村里は靜かで歸宅致したくもなかつたけれども、致し方なしに昨日六日歸宅致しました。しかし一週間もたゝば、又村里に行く積りであります。山にのぼり妹とひろうた栗、少々にて御送り申上るも恥かしき心地すれど、栗はともかく我等の志しを受けて下さい。奥山に行かずばあまり有りませんのです。

町にて

十月七日

よし子

* *

せつかく姉さまの御力で、私の行きたく〳〵思つて居つた村里に行く事が出來、やれ嬉しいと思ひましたら、村里はセキリ病大に流行致します故に、姉さまと家にかへつて來ました。母さまにも會ひました。家にかへるのは私いやで〳〵仕方がないのです（姉さまもきつとそうでありませう）。兄様の

御言葉もありますから、家の人にはよくする積りであります。
私家にかへると氣がめちやくちや致しますの。

妹より

十一

村里に下さつた御手紙、今朝町へ廻送して與れました。誠に有がたく存じます。神樣が許して下さるなら、私は妹と共に死んでしまひたい、どうか神樣、愛があるならば私共に永眠を與へて下さるやう、私は祈ります、私共の父は村里生活をして居れば反對いたします。しかし私は妹が可哀さうであります。私も今この家、私の家にあらば、私も狂ふでせう、必ず狂ふと思はれます。私は學校で勉强するのもいやになりました。家に居るのもいやになりました。どんな苦難すとも、私は妹と共に村里生活を致します。私は今、あなたに申上げませうか。私は妹と村里生活をせんために、私の……御察し下さい……私はほんたうに着物も帶も何もほしくない。私は神樣が許して下さるならば、私は死にたくなつて來ました。

町にて

十月九日　よし子

十二

昨日より又私ども村里生活を始めて居ります。相變らず田舍の田舍は靜かで御座います。自然はいつも美しくありますね。

村里にて
よし子

十月十六日

ゆき子

十三

俗界離れての山寺住、實に靜かで御座います。
あなた樣には御身體御大切に遊ばされ度願上候。

村里の寺にて
よし子

十月廿五日

ゆき子

十四

少しばかりの栗、皆様で召上つて下さつたのですとね。私嬉しくて〳〵堪りませんよ。

一昨晩はね、月がよくて、家の内に居る事が出來ずして、松の根に腰うちかけて、妹と共に眺めましたよ。

前の川の流れの水音のみが聞えましたのよ。いゝ心持でありました。

私も鼻血の出るのが直つたら、少しづゝ勉强致しませう。

村里の寺にて

十月廿八日　　よし子

十五

御送り物誠に有難う御座います。妹も大よろこびでありますよ。

實に美しい色糸でありますね。

當地方は雪降り居ります、大變寒くてよ。

昨夜は大變月がよくあつてよ、妹はあとで御手紙上げると申して居りました。

村里の寺にて

よし子

十一月廿七日

*　　　*

この頃は姉様は頭痛がする、頭痛がすると申し、鼻血も出ます。私が心配して居ります時、いつしよに死なゝいかなどゝ申すのです。御寺は靜かで靜かで、村里の家よりも、山と山との中にある寺で、朝三時頃かねの音がして、坊さまのおきやうの聲が聞えます。その時は、私も何だか死にたくなります。

毎日姉さまと御飯をたいてたべて居ります、夜はあんまり靜かで淋しくありますが、月がよく出ますから、姉さまと寺のそとの松の木の根にこしをかけて、月を見て居ります。

姉さまはいつも泣きます。

妹より

十六

男が來てむりに私を町へ連れて歸りました。

鼻血がとまりません……胸がむか〱します。

町にて
よし子

十二月一日

＊　＊

姉さん少し氣がへんになりました。
姉さん若し氣がちがつたら、私も又、もとの通りになります。
ふたり氣ちがひになつて、一しよに死ぬのでしよか。

妹より

手

午砲が打つと機械場で拍子木が鳴る。輪轉器の運轉が礑と止む。植字の字を歌ふ聲も直ぐ寂寞する――村井君は赤インキの筆を措いて、印刷所を出た。

非常な風だ。空ッ風が土砂を捲いて、青く澄んだ冬の空も、下から半分所まで黃色になつて居る……印刷所を出た村井君は、電車の線路を橫切つて直ぐ筋向ふの蕎麥屋へはひつた。――村井君は『交通月報』の校正掛で、毎月廿日から廿五日までは、印刷所に詰切りで、晝食は常もお蕎麥と定つて居る。

村井君は五目を誂へた。校正掛のお辨當としては贅澤である。けれども村井君は社から貰ふ一日廿五錢の日當を、電車と晝飯に費つて了はなければ氣が濟まないのだ。「月給は月給、日當は日當。」村井君の頭腦には劃然と區別が附いて居る。――五目の來ない內に、村井君は更にあんかけを誂へた。

五目とあんかけとは內容が同じである。蒲鉾と玉子燒と菜つ葉と麩と椎茸と――白と黃と綠と淡褐と深褐と――村井君はこの配合が甚く好きなのだ。

五目とあんかけは一緒に來た。村井君は直ぐ箸を取る。

腹の空つた村井君は夢中で五目を平らげて了ふ。さて第二のあんかけに移つた。村井君は箸にかゝる菜つ葉を見て、あゝ好い色だと思ふ。偶と箸を見る。汚い箸だ！　晴天の日にかう云つた蕎麥屋の前に手際巧く盛上げて乾してある彼の箸だ！　偶と箸を持つてる自分の手を見る。箸を汚いと思つたが自分の手は更に汚い。親指と中指には赤インキが附いて居る。食指には墨が附いて居る。手全體に活版のインキが沁み込んで居て、厭にどす黑い。

村井君は考へた。成程手を見ると人の商賣は分る――如何見たつて乃公の手は校正掛の手だ。汚い手だ。實に汚い手だ。

村井君は夫から夫と、種々手の事を考へた。

嘗て石版の下繪を書く友達の處で、和蘭の畫家が亞米利加の博覽會へ出品したとか云ふ、手ばかり澤山描いた畫の寫眞版を見た事がある。――餘程の大幅らしいが、何でも空の上の方に運命の神の顏だけが、苦り切つて、丸く太陽のやうに懸つて居る。すると下の方から數へても數へ切れない程澤山人間の手が出て居て、みんな何かを摑まうとして居る。鎖で縛られた手頸が出て居るかと思ふと、雨手に赤兒の手を持つて之を差上げてるのがある。鋤を翳してる手があるかと思ふと、十字架を突出してる手がある。血だらけの刃物を持つてる手があるかと思ふとペンを振り上げてる手がある。若い男の手が若い女の手と緊ぎ合つて出て居るのがある……乃公の手も始めて女の手を握つた時分は隨分綺

麗だつた！ と村井君は考へる。

村井君は微笑(にこつ)とした。――始めて女の手を握つた時の事を思ひ出したのだ。

乃公も彼の時分は年も若かつたし、戀として女に接するのは始めてではあつたし、隨分具合(きまり)が惡かつた。……乃公は突然女の手を摑んで、下を向いて、小さな聲で、「僕は……僕は……」を五六遍言つて、それから、思切つて、「君が好きなんです。」と單刀直入(たんたうちよくにふ)した。すると女は何も言はない、暫く何も言はない、どんな表情(かほつき)をして居るか見ようと云ふ勇氣がないから、下を向いた儘で居ると――女はやつぱり默つて居る。併し手を離さうとする樣子はない。

ものの十分間も經つたかと思ふと、乃公の手へハラ〳〵と熱いものが落ちて來た。涙だ！ 熱い涙だ！ 驚いて顏を振上げると、女は堅く乃公の手を握り緊めた――泣いて居る！

「どうして泣くのです。」と乃公は又單刀直入に遣つた。女は聞えるか聞えない位の聲で、「あんまり思ひがけない事だつたものですから。」と言ふ。「ぢや悲しいのですか。」と乃公は更に突貫した。この時聞いた「いんえ！」程好い心持のした「いんえ！」は無い。

ああ彼の清い涙の注(かか)つた美しい手も、今はこんなになつて了つた！ 可哀さうな手だ！ 憐れな手だ！ 氣の毒な手だ！

これから先は村井君自身にも何を考へてるのか分らない程呆然(ぼんやり)して了つた。と、八角時計が聲高に

ボォンと一つ鳴る。――村井君は眼が覺めた。見ると十二時半だ。

お蕎麥は二つとも空になつて居る。頭に繃帶をした蕎麥打の職人と蕎麥屋の細君とが株の話をして居る。

「お幾何です。」と村井君は寢呆けた聲で訊く。「十五錢頂きます。」と細君が答へる。「へイ。」と言つて、村井君が廿錢銀貨を投り出すと、繃帶の職人は立つて來て、その銀貨を拾ひ、帳場へ行つたかと思ふと、直ぐ引返して來て、五錢の白銅を「へイおつり。」と突出す。

村井君は殘餘を取らうとして、偶と其白銅の載つてる掌を見ると、眞白だ。蕎麥粉で眞白だ。指の間から爪の間まで蕎麥粉が一ぱい沁み込んで居る……「さうだ！　乃公も亦働かなけりやならん。」と村井君は思つた。「夢を喰つて生きてるのは、貘とかいふ獸ばかりだ。人間は夢を喰つて生きてる事は出來ない。さあ行つて働かう。働いて勞れて、寢て、起きて、又働かう！　夢を見て居る若い男の美しい手に注つた女の涙より、更に淸い更に貴い何者かの涙が、このインキだらけな汚い手に注らないとも言へない！」

村井君は蕎麥屋を出た。風は少し歇んだが、空はやつぱり凄い程黄色い。電車の線路を横切つて、筋向うの印刷所へはひると、輪轉機は既に轟々と運轉して居る。植字は既に字を歌つて居る。――村井君の借りてる机の上には何の表か罫組の校正が八ペェジ來て居た。

粘土

一

私の仲の好い友達に楠といふ男がゐます。私より五つも年上なんですが、私よりは餘つ程若く見えます。學校を卒業してからも二三年といふものは、錢がなくて不相變學校の制服を著て歩いてゐましたが、それでもちつとも可笑しくないんだから不思議です――別に落第生にも見えなかつたといふんですからね……

旣にさういふ怪物ですから、總てが變つてゐます。盆栽が素敵に好きで、苦しい中からも、これだけには惜氣もなく金を費ひました。毎晩寢る時には氣に入つた盆栽をきつと一つ枕元に置いて、それを眺めながら寢なければ寢られないんです。部屋の障子が破れても決して繕つたことのない男で――障子の穴がいろんなかくかうをしてゐるのを面白がつて見てゐるんです。「障子の穴を繕ふ人は、雲の形を塗り消す人だ。」始終こんな變つたことばかり言つてゐるんです。

この男はほんとに笑つたことがありません、ほんとに泣いたこともありません、ほんとに怒つたこ

ともありません。何を見ても、何を聞いても、どんな難事に遭遇しても、唯にやにやと笑ふばかりです。一度友人の借金の連帶責任か何かで、財産差押を食つた時にも、例のにやにや笑つてばかりゐるので、執達吏が飯焚の婆さんに、『お前んとこの旦那はキ印か。』と訊いたさうです。

そんな風ですから、この男は一體强いのか、弱いのか、神經が有るのか、無いのか、感情を抑へてゐるのか、或は感情が全くないのか、ちつとも分からない人間なんです。ですから、その言ふことだつて、噓なのか眞實なのかさつぱり分からないんです。噓にしてしまふと眞だつたことがあつたり、眞にしてしまふと噓だつたことがあつたり――私も隨分この楠にはおもちやにされました。

おもちやにされても、好きで好きで堪らないのはどつか好いところがあるのでせう。頼みがひのない捕へどこのない人のやうに見えてゐて、どつかに頼みがひもあれば、捕へどこもあるんでせう……

併し、楠の紹介はもうこの位にして置きませう――この話は私が主人公なんですから。

さて自分の紹介となると、少し困ります。他人のことは言へても、自分のことは言へないもんですからねえ。私はまあ薄つぺらな人間だと思つてゐて下されば、それで間違ひはありません。併し弱いのかと言ふと、始終弱い訣でもないんです。では强いのかと言へば、始終强いといふ訣でもありません。場合によつて、馬鹿に弱くなるかと思ふと、又場合によつて、素敵に强くなるんです。先づ一枚の半紙ですな。火を點けられればぼッぼと燃えます。燃え切つてしまへばそれでお終ひ――踏まれれ

ば默つて灰になつてしまひます。吹き飛ばされれば何處へでもふはふは飛んで行きます。
かういふ人間が楠のやうな人間と仲が好いんですから、時々奇談があるんです。

二

一昨年のことでした。

甚だ恐縮なお話ですが、私が或女に夢中になつてゐたことがありました……どんな女だと仰しやるんですか。それは申し上げますまい。女にさう變つたのはゐるもんぢやありません。女といふ奴あ丹波酸漿(たんばほうづき)を列べたやうなもんで大抵似たり寄つたりですからなあ。好く鳴るのと鳴らないのとはありますが……

まあ唯平凡な一人の女に惚れてゐたと思つてゐらして下さい。それで話は分かるんですから。そして每晩のやうに女のとこへ通つて行つたもんです——通つて行つたと申すと、大層色男じみますが、そんな氣の利いたんではないんです。唯御機嫌伺に伺候したんですな。語を換へて言へば、おべつかを使ひに行つたんですな。一體おべつかといふやつは商人(ちきんど)が客を得る道なんで、人間が戀を得る法ではないんです。おべつかで女の心を得ようとするのが旣に無理な話なんです——ところが大抵な男は女に對して、このおべつかを用ひますな……

おべつかとは何ぞやです。自分の心にもないこと――或は心にあるだけ以上――を言ふことです。つまり自分を全然暴露しないことなんです。出來るだけ自分の缺點を隱して、美點だけ見せようとするんです。ところが、その美點といふ奴が左樣一箇の人間に澤山あるもんぢやありませんから、つい作へ物の美點を列べて女の目を喜ばせようとするやうなことになるんです。そんなことをして女を喜ばして、それで女に惚れられてるなどと思ふのが、抑も愚劣の極です。欠伸をして、放屁をして、女に氣の多いとこを見せて、金錢に吝なとこを見せて、それでも惚れてるといふのでなければ、ほんとの惚れられたんではありません。この論法を以て見ますと、一體女といふ者は開闢以來一度でも男に惚れたことがあるかどうか、甚だ疑はしいんです……

之に反して男はやたらと女に惚れますな――私も惚れました。惚れて通ひました。そしておべつかを使ひました……甚だ恐縮なお話です。

三

女は初め私を歡迎しました。私は歡迎されて有頂天になりました。女の顏を見てゐなければ、きつと女に手紙を書いて居りました。女に手紙を書いてゐなければ、きつと女の顏を見てをりました。女の顏も見てゐず、女に手紙も書いてゐない時は、きつと女のことを考へながら、女の家へ向つて往來

を歩いてをりました。

私は先程自分のことを一枚の半紙だと申しました。その一枚の半紙は今女の手の内に揉まれて皺くちやになつてしまつたのです――皺くちやにならうと何にならうと、女の手の匂の自分の體に染み込むのを喜んでゐたんです。

ところが忽ち私は女に捨てられました――確に捨てられたと思つたんです。夜遊びに行つても、どうも前程に歡迎してくれないんです。

さあ堪らなく心配になりました。捨てられたと思ふと口惜しい。併しほんとに捨てられたんだかどうだかまだそれは分からない。うつかりそんなことを言ひ出して、若しさうでもなかつた日には氣まづい話になる。さうかと言つて、默つてゐるのも業腹だ。一つ怒つて見ようか。俺はとてもあの女に對してほんとに怒ることは出來ない。いんや捨てた訣ぢやあるまい。近頃機嫌が惡いのは躰の工合が惡いからだらう……と色々に考へました。

色々に考へ直しはしましたが、やつぱりゐても立つてもゐられません。それやさうでせう。私はこれまで每日每晩女のことばかり考へてゐたんです。戀を職業として、朝から晩までその職業に努めてゐたんです。ところがその職業を不意に奪はれてしまつたんです、途方に暮れるのは當然でさあ。私

は職を失つて路頭に迷ふ戀の乞食となつてしまつたんです。

早速楠のところへ相談に出かけました。

四

楠は私と女との關係をよく知つてゐるんです。知つてゐて、それで知らん顔をしてゐるんです――それは私知つてゐました。

案内も乞はずに二階へ上がると、楠は破れ障子の前に立膝をして坐つて、コップに一杯粘土を入れて、それを竹の箆で抄つては、小さな黒い鉢に移して、頻に何か小山のやうな岩のやうな形を作つてゐました。側にひろげた古新聞の上には小さな石が二三十と、小さな植木が五六本轉がつてゐました。

私が上がつて來ても、楠は泥弄りに夢中です。

「おい。」

と言ふと、

「うう。」

と氣のない返事をするぢやありませんか。こつちは重大な問題が起つてゐるのにと思ふと、もう氣が氣ぢやありません。全體戀に燃えてる人間の相談相手なら、鞴で火でもかつかと熾してゐて貰ひた

いぢやありませんか。それが竹つ篭の泥いぢりと來ては情ないにも程があります。

私はもう相談をする勇氣もなくなつてしまつて、がつかりして、首を垂れて、ぼんやりしてゐますと、楠はいきなり竹篭を投り出して、

「どうした。」

と言ひます。「どうした。」と言つた後が又例のにやにや笑ひです。私はその惡落著に落著いた顏がもう癪に觸つて癪に觸つてしやうがないので、默つて膨れてゐますと、

「どうした、錢でもないか。」

と横柄なことを言ふんです。

「錢はある。」

「ある。それは感心だ。酒でも買つて一緒に飮むか。」

「酒を飮んでもつまらない。」

「なぜ、つまらない。」

「俺の胸には苦痛がある。」

「酒を飮んだら癒つてしまふ。」

「酒なんかで取れるやうな、そんなけちな苦痛ぢやない。」

「そんなに深い苦痛を貴様は今その胸ん中に持つてゐると言ふのか。」

「ああ持つてゐるとも。」

「では屓けて見せろ。」

「屓けたつて見えやしない。」

「人に見えないやうな苦痛なら、きつと酒で取れる。酒を飲まう。」

「いやだ。」

「厭だ。厭だとか嫌ひだとか言へるのは、まだ貴様の苦痛に餘裕があるからだ。眞の苦痛にはひつて見ろ。そんなことを言つてる隙はないぞ。」

「さうかしら。」

「さうとも。」

「そりやさうかも知れないな。」

「かも知れないぢやない。さうだ。一体貴様、苦痛々々とさつきから言つてるが、そりや貴様荷物を間違へて擔いでゐるんだぞ。貴樣は自分の背負はないでも好い荷物を背負つて歩いて苦しんでゐるんだぞ。貴様は他人の荷物を背負てゐるんだ。貴様はステエションの赤帽だ。」

「失敬な……」

「決して失敬ぢやない――ぢや訣を言つて遣るからよく聞け。」
「うん聞く。」
「竹川町の一件だらう。」
「…………」
「言へ、言へ、さうだと言へ。」
「實はさうだ。」
「あれなら貴様が馬鹿だ。初から貴様が馬鹿なんだ。」
「なぜ。」
「おれは初から貴様が馬鹿だとは思つてゐたんだけれども、せつかく喜劇の序幕が明いたんだ、大詰まで謹んで拜見しないのは役者に對して失禮に當ると思つたから、それでけふまで默つて見てゐたんだ。」
「それは人が惡いぢやないか。」
「人が惡いんぢやない、人が好いんだ。貴様といふ役者の技藝に對して謹んで敬意を表してゐたんだ。」
「一體どうしたといふんだ。早く言つてくれ。」
「あの女には男があるんだ、初から男があるんだ。」

「嘘だらう。」

「嘘ぢやない。」

「では、その男の名を訊かう。」

「言ふとも。硝子屋の竹ちやん、俗にガラ竹といふ貴様よりは餘つ程好い男だ。」

「ふうん。」

「何のこたあない。貴様は竹川町とガラ竹の麵包になつたんだ。人間も麵包にまでなれば、先づ思ひ置く事はあるまい。」

「…………」

ああ果してさういふ女であつたかと、私は心臓が煮えくりかへるかと思ふやうに憤慨をしました。そして、さんざん惡態をつかれた楠に對して、淚を流して頭を下げて、そして禮を言つて歸りました。

私が歸る時、楠はにやにや笑ひながら又竹篦を手にして、又泥弄りを始めました。

五

私はすぐ家へ歸つて、それから夕方まで一室に閉ぢ籠つて、色々と怨みの文句を考へました。その

考へついた文句を今こゝで列べてもしやうがありません。唯自分が物心ついてから廿八歳のその時までに、自分が嘗て言つた怨みの文句、人から聞いた怨みの文句、芝居で覺えた怨みの文句、小說で覺えた怨みの文句を三四時間程の間に悉く思ひ出して、それを色々に綴り合して頭の中に一大怨みの文を作つたんです。

その怨みを躰中にすつかり納つて、日が暮れると家を出かけました。

家を出ると、すぐ辻車に乘つて、電車のあるところまで行きました。いつも十錢ときまつてゐるんです。ところがその日は十錢出しますと、生憎顏を知らない車夫で、道が惡かつたから、十五錢くれろと言ふんです。癪に障つて堪りませんから、廿錢銀貨を地べたへ叩きつけて、そして車夫の横つ面を拳固で一つ撲り飛ばしてやりました——私が人をぶつたのはこれが初めてです。

それから電車に乘りました。すると又生憎細いのがないので、五十錢銀貨を出して往復を一枚買ひますと、車掌は默つて銀貨を受取つて鞄の中で頻につりを勘定してるやうでしたが、やがて一錢銅貨を四十一枚出しました。私は覺えず手にとりましたが、重いのですぐと氣がついて、

「銀貨にして下さいな。」

と優しく言ひますと、

「銀貨はありません。」

と冷淡な言ひやうです。
「一つもないことはあるまい。」
「いんえ、ございません。」
私はもう赫となつてしまひました。手をぶるぶる震はせながら、自分の蝦蟇口を衣兜から引張り出して、車掌の目の前へ突きつけ、
「俺の錢入はこれだ。これへこんなに澤山銅貨がはひると思ふか。」
「だつて、それは致し方がございません。」
「致し方のないことはない。今の金を返せ。己はこのつりを返すから。俺は降りる。」
「でも、もう切符を切つてしまつたんですから。」
私は口惜しくつて地踏を踏みましたが、「こんな物が持つて歩けるか。」と、いきなり車掌の鞄の中へ一錢銅貨を四十一枚がちやあんと投り込んで、驚き呆れた車掌の肩を一つ小突いて、飛降りをしてしまひました。
電車を降りて、煉瓦通りを一人で歩いて行きますと、並木の柳が暗闇で動いてゐるんです。動く度に街燈の瓦斯の光で青い細長い葉が見えたり隱れたりするのに妙に氣をひかれて、目の縁が急に熱くなつて來たかと思ふと、ほたほたと溫い涙が頰ぺたを垂れて來るぢやありませんか。意氣地のない男

だ。と自分で自分を叱つて、暗闇でそつと涙を拭いて、又明かるいとこへ出ると、すぐ目の前に水菓子屋があるんです。夏蜜柑や唯の蜜柑や林檎や葡萄のうまさうな熟したのが、アセチリン瓦斯で光つてゐて如何にも綺麗です……

「あいつは蜜柑が好きだ。」

と思つたかと思ふと、私はもう水菓子屋へはひつて、蜜柑を一箱買つて、錢を拂つてゐました。如何してはひつたんだか、どうして買つたんだか、自分にも分からないんです。

怨みを言ひに來た筈の男は土産物を擔いで、竹川町の格子戸を明けました。

女はちやうど留守でした――水菓子屋で蜜柑を一目見て氣の挫けた私は、女が留守だと聞いてもう一遍氣が挫けました。

六

三四時間も待つた時分に、やうやく女は歸つて來ました――三四時間待つてる内に、三四時間考へて來た怨みの文句は大抵忘れてしまひました。

楠はあんなことを言つたけれども、あの男の言ふことだもの、なに當になるもんか。縱し果してさういふ者があらうとも、俺に盡してくれる心さへ誠であれば、それで十分ぢやないか。更に一歩を讓

つて俺に全然氣がないとしたところ、要するに虐待さへされなけりやそれで滿足ぢやないか……などと待つてる間に色々勝手な理窟をつけてゐたんです。

女は家へはひると、私の顏を冷かに一寸見て、

「あ、入らつしやい。」

と言つたきり、默つて帶を解きにかゝりました——他所行の著物を脫ぐのです。

私が蜜柑を出しますと、

「どうも。」

と言つたきりで、にこりともせずに、又著物に夢中なんです。

やがて女は火鉢の向うで居眠りをしてゐた小女に目をつけました。すると、きりきりつと目尻を釣るし上げて、

「畜生、又舟を漕いでやがるよ。」

と口汚く罵つたかと思ふと、いきなり其側へ行つて小女の尻を平手で音のする程一つ撲ちました。

私は始めて女のこんなとこを見たんですから、唯もうびつくりしてしまつて言句も出ずに默つて見てゐました。

それが始まりで、何が氣に入らないのか、口小言の言ひ通しで、そこら中の人間や物品に當り散ら

すのです。

帶の疊みやうが惡い、著物の簞笥へ入れやうが惡い、銅壺の湯がぬるい、臺所の燈がつけつ放しだ……それは、それは、聞くに堪へん程嚴しいことを言つて、二言目にはその小女に手をおろすんです――そして私には目もかけないんです。

そこで私は考へました。こりやあやつぱり楠の言ふのが眞だ。俺は嫌はれてゐるんだ。併し今までの關係上面と向つてあなたは厭だとも言へた義理ではないから、それで他の人に當り散らして、それで自分の俺に對する感情を見せるんだ。

よし、それなら俺も默つてはゐないぞといふ氣になりました。私は一緒になつて小女を叱りました、女に負けずに叱りました、女に負けずに罵りました、女に負けずに撲ちました――靴の直し方が惡いと言つて、帽子の掛け方が曲つてると言つて。

女は小女を通して自分の感情を私に告げたんです。ですから私も小女を通して私の感情を女に告げたんです。

小女は二人の道具にされて泣き倒れてしまひました――今思へば可哀さうなことをしたもんです。

私は尙飽き足らず、その泣き倒れた小女の耳に口を寄せて、電話でもかけるやうに、

「私はお前のやうな氣の利かない女のゐる家へはもう二度と來ないよ。」

と震へ聲で言つて、呆れて默つて見てゐた女には挨拶もしないで、「俺が勝つたぞ。」と言はぬばかりに息張つて格子戸を明けて外へ出ました――實際もう二度と來ないつもりで……

七

その明くる日楠を訪ねますと、又竹篦で粘土を弄つてゐるんです。私がゆうべの出來事をすつかり話して、

「もう二度と行くもんか。」

と震へ聲で言ひますと、

「それは好いことをした。」

と言ひながら又にやにやと笑ふんです。

そのにやにや笑ふのを見ると私は厭な氣持になりました。俺は楠に欺されて、あの女と別れてしまつたんぢやないかしらと思つたんです――俺はあの竹篦であの粘土のやうに楠の玩具にされてゐるんぢやなからうかと思つたんです。

その後は實際もう女のところへ參りは致しません――また參れも致しません――が今日でも楠は若しやあの時俺を欺したんぢやなかつたかしらと始終さう思つてるんです。楠は俺があんな女に關つて

ゐるのを心外に思つて、それで嘘をついて俺を怒らして、わざと別れさしたんぢやないかしらなどと始終さう思ふんです。

併し、それにしては女の怒つたのが訝しいとも思ふんです。と言つて、實はその後蔭ながら注目してゐるんですが、どうもその硝子屋の竹ちやんとかガラ竹とかいふやうな男もゐないらしいんです。事件は二年前に終つたんですが、私の胸ん中はいまだに納まらないんです。

若し今日只今にも楠の言つたことが嘘だと分かれば、すぐにも女のとこへ飛んで行つて詫びがしたいと思つてをります――併し、自分で直接女にぶつかつて眞僞を訊す程の勇氣もないんです。未練。確に未練です。私は粘土のやうな人なんです――粘土だから、時々楠の竹箆にかかるんです……

え。楠ですか。楠は例の事件が濟んで、私がまだぶつぶつ憤つてる最中に支那へ行つてしまひました。あゝいふ男ですから、支那へ行つてからも便りといふことをしたことがありません。

女ですか。女はやつぱり竹川町に一人でゐるんです。

たより。たよりは例の事件以來ないんです。

後悔

一

色々厄介になつた。

あれから半分夢中で家へ歸つた。歸ると、直ぐ床をとらして、夕方まで寐た。今起きて、湯へ這入つたが、まだ頭が重い。とても飯を食ふ氣になれない――胸の所に何か大きなものがつかへてゐるやうで、苦しくつて堪まらないんだ。

そこでこの手紙を書く、この長い――多分長くなるだらう――手紙を書いたら、少しは息が自由に出來るやうになるかも知れない。

總てを正直に言ふ。今朝、君の家を出る時、僕はまだ君の言葉に服してゐなかつたのだ。夜通し眠さうな顏一つしないで僕の爲に說いて吳れた君の熱心に對して、義理にも僕「分らない。」とは言へなかつた。そこで君の前では「分つた、分つた。」と、さも感心したやうに言つてはゐたものの、腹の中では少しも服してゐなかつたのだ。

併し、あれから歸り道によくよく考へて見た。歸つて、寐て、起きてから又考へて見た。やつぱり君の言つた事は本當だ。眞理だ。今になつて漸くそれが分つた。實を言ふと、ゆうべ僕が君を尋ねたのは、僕のたつた一人の友達に、自分の苦しい胸の中を打明けて、同情を寄せて貰ひ、一緒に泣いても貰ひたかつたからだ――僕は自分の「哀れさ」を訴へに行つたのだ。

君の內の、あの狹い階子段を上る時、僕はさう思つた。木原はきつとおれの荷物を半分背負つて呉れるだらう――ことによると全部背負つて呉れるかも知れない。この階子段を降りて歸る時、どんなにおれの肩は輕くなつてるだらう。

ところが、君はちッとも憫んで呉れなかつた。憫んで呉れぬのみか、僕はあべこべに罵られた、怒られた――頑固親爺にでも叱られるやうに叱られた。

行きなり君に罵倒された時は、僕、實際君を恨んだ。木原は無情な男だ、冷淡な男だ、殘酷な男だと思つた。僕があの時泣いたのは、自分の罪を悔いたからではない、君の言葉に感動したからではない。口惜しかつたからだ、腹が立つたからだ……腹の中が煮えかへる程口惜しかつたからだ。

何も僕が惡い事をした譯でない。惡い事をしたのは寧ろ先方ぢやないか。僕が捨てたのぢやない。女の方で總てを犧牲にするだけの勇氣がなかつたんだ。罵るなら女を罵るが好い。僕の罵られる譯は

少しもない——と、斯う思つたんだ。

僕は決して世間に恥るやうな行爲をしたのではない。あの人が氣に入つたから、氣に入つたと言つたんだ。すると向うからも、あなたが氣に入つたと言つて來たんだ。そこで、伯母に頼んで、先方の家へ正式に結婚の申込をして貰つたんだ。ところが、先方の親にそれを斷られたんだ。事件は斯くの如く簡單にして、しかも清潔だ。この間に何等の祕密も無ければ、何等の醜惡もない。

僕は生命を賭してもと思つてゐた事だ。女にもその位の覺悟はあると僕は信じてゐた。ところが女は一も二もなく親の意志に從つて了つたんだ。事件は餘り簡單に破れて了つた。

僕は世の中の事が餘り簡單に解決されるのを見て、悲しくなつた。悲しくなつて、堪まらなくなつた。

それから君の所へ訴へに行つたんだ。そして、君に罵られたんだ。

僕は未練らしく同じ事を幾度も言ふ。過つて瀨戸物を毀した人が、毀れた瀨戸物のかけらを、幾度も繼ぎ合はして見るやうに……僕は慰藉を得るだらうと思つて、君の所へ行つたんだ。ところが、餘計に苦痛を得て歸つて來た。僕は頭が輕くなるだらうと思つて、君の所へ行つたんだ。ところが、却つて頭を重くして歸つて來た。

君は戀を憧憬だと言ふ。憧憬が無くなるのだと言ふ。Kが他の人の妻になるのも、僕の妻になるの

も、僕が戀を失ふ點に於いては同じ結果だと言ふ。人の妻になれば戀が破れて、自分の妻になれば戀が成るやうに思ふのは大變な間違ひだ。人の妻になると戀が破れるやうに、自分の妻になつても戀は破れるのだ。結婚――この瞬間に戀は終局を告げるのだ。自分の物にならないのが戀だ、自分の物になつたら戀ぢやない。だから、女が獨身で一生を通さうとしない限り、戀する男はきつと一度は失戀の苦味を嘗めなければならないのだ。女を思つて、その女と一緒にならうとする男は、自分で自分の戀を破らうとしてゐるのだ――君はこんな事を言つた。

併し、戀は思想ぢやない、觀念ぢやないと言ふと、君は又言つた――では、君の信ずる神は思想かい、觀念かいと。そこで僕は答へた――無論、僕の信ずる神は、思想でもなければ觀念でもない。一個の存在だと。すると君は、そんなら君は神の手を握つた事があるか。神の唇を吸つた事があるか、神と一緒に寢た事があるかと聞いた。そんな經驗はないと僕が答へると、それ見給へ、戀は神と同じ物だ。觸れない所に値打があるのだ、摑めない所に深さがあるのだ。神は人の物になる憂がないから、信仰といふ憧憬は永久に破れる心配がないけれども、女は人の物になるのが當り前だから、戀といふ憧憬は破れるのが普通だ。虹はきつと消えるものだ。その消える筈の虹が消えたと言つて泣く奴があるか、べそをかく奴があるか。世間ではさういふ人間を詩人といふさうだが、僕には常識の足りない馬鹿者としか見えない、と君は散々に僕を罵倒した。

僕は口惜しかつた。實際口惜しかつた。僕は實際生活の上で苦痛を受けて君の所へ行つたのだ。精神にも肉體にも實際病を得て君の所へ行つたんだ。それを君は一場の議論で片づけて了はうとするのだ。唯ふらりと僕が君の所へ遊びに行つて、そこで君と僕との間に偶然湧いた議論か何ぞのやうに、君はこの實際的事件を取扱つてゐたのだ。さう思ふと僕は君が恨めしくつてならなかつた。

併し、段々考へて見ると、向うの理窟は本當らしい――いやらしいと言つては濟まぬ。確かに本當だ。僕の飽く事を知らない Sehnsucht は、たとへKを我物にしても滿足しない。Kの奥の奥の奥にある或物を摑むまでは決して滿足しないと思ふ。Kに果してそれ程の深さがあるかどうか、それも怪しい。よしそれ程の深さがあつたとしても、その深い深い底に僕が慕つてゐるやうな或物があるかどうか、それも怪しい。だが、議論は議論だ。議論が僕の實際上の慰藉にはならない。

僕の今の苦痛が、Kに對する單なる未練でないといふ事は君もよく知つてゐる筈だ。一も二もなく親の命令に盲從して、親の意志なら、自分の嫌ひな男の所へでも嫁に行かうとするやうな女に何で未練があるものか。僕の今の苦痛は、愛の目的が急に無くなつたので、その愛の重荷に壓れてゐる苦しみだ。注ぐ所のない愛情を背負つて歩いてゐる苦しみなんだ。目的が消えて、憧憬だけ殘つたのだ。この愛情をどうしよう、この憧憬をどうしよう。これが實際上の問題なんだ。

君はこれに對して實際上の方法を教へて吳れた。併し、君の教へて吳れた方法は、一層僕の胸を狹

く苦しくした。僕は非常な侮辱を受けたやうな氣がした。

僕が本當に口惜しくて泣いたのはこの慰藉の方法を君から與へられた時だ。君は僕の事を何でも知つてゐて、古い事から新しい事まで何でも知つてゐる。祕密な事でも公な事でも知らない事はない——殊に君は僕の舊惡を知つてゐる。

僕は二十一歳の今日までに、本能の衝動に驅られて幾人かの女を汚した。その間に戀もなければ何もなかつた、ただ本能が形にあらはれた丈だつた。それを君は知つてゐる。

僕が基督教へ這入つたのも、その舊惡に責められたからだ。或牧師の姦淫に關する說教を聞いて、地獄の火で心臟をジリジリ燒かれるやうな氣がしたのだ。そこで、僕は「悔い改め」をした。神の前に總ての舊惡を懺悔した。懺悔する時は、からだ中の汗を絞られるやうに苦しかつたが、それからの僕の生活は極めて幸福だつた、極めて輕快だつた——それでもう總ての罪は拭つたやうに思つてゐた。それも君は知つてゐる。

間もなく、僕は同じ敎會へ來るKを戀するやうになつた。生れて始めて戀をしたのだ。女の味は知つてゐても、戀の味は全く知らなかつたのだ——既に女の味を知つてゐる僕の戀は、まだ女の味を知らない人の戀よりも遙に神聖だつた。それも君は知つてゐる。

その戀が破れたので、僕は君の所へ訴へに行つたんだ。ところが君の僕に與へて吳れた慰藉の方法

は、僕の舊惡に關するものだつた。

君は僕が關係した女の內から、最も不幸な境遇にゐる者を拔いて、この際それを僕の妻にしろと言ふ。一人で自分の憂ひを消さうとするのは消極的だ。進んで人の憂ひを背負つて遣れ、然うすれば自分の憂ひが自然に無くなるからと言ふ。

何といふ難題だらう。僕は實際難題だと思つた。戀を失つた代りに、戀のない女を娶る――そんな不條理な事がどうして出來るものかと思つた。そんな事が何で慰藉になるものかと思つた……

僕は言つた。けれども、それはもう一度神の前で悔い改めた事だからどうか許して吳れ給へ、外の事なら何でもするからと。

すると君は言つた。神の前で口先ばかりの懺悔をした所で、それが何の「悔い改め」になるものか。君が犯した女の一人を救つてこそ、君の懺悔が懺悔になるのだ。それを實行して、初めて君は「雪よりも白く」なる事が出來るのだ。君の持つて行き所のない憧憬と愛情とは、宜しくその「神より與へられた妻」に向つて注ぐべしだと。

僕は再び過去の罪の呵責に逢ふやうな氣がした。一度責められて、それに對するだけの償ひをして、それで濟んだ積りでゐた罪の爲に、二度責められるやうな氣がした。僕は不當だと思つた。神は餘りに嚴し過ぎると思つた――

さう思つて僕は君の内を出たのだ。

併し、歸りながら、又歸つてから、段々考へて見ると、如何にも君の言ふ事は道理だ。君の與へて呉れた方法は、一寸實行がむづかしいやうだが、思ひ切つて實行さへすれば、僕は存外幸福な人間になれるかも知れない。

成程 Love には lost あるのみかも知れない。たとへ好いた女を自分の妻にし得たところで、そこに戀の滿足は涌いては來ない。して見れば、戀は愚なものだ。幾多の束縛があり、幾多の窮屈があらうとも、妻といふもの程神聖で樂しいものはあるまい。僕は今まで戀と妻とを一緒にして考へてゐた。君に說かれて、初めてそれが全く別の物であるのに氣がついた。僕は潔く戀を捨てよう、そして妻を取らう。ああ、妻、妻。これ程確實堅固な幸福が外にあらうか。

さて、妻には如何なる女が好いであらうとなると、君の說だ。僕が嘗て汚した人の内で最も不幸な境遇にゐる者を娶るといふ事だ。僕にとつて、これ程好い選み方はない。これ程立派な爲事はない。僕も決心をするまでには隨分躊躇した。父や母がどういふだらう。親類がどう思ふだらう。世間で何と言ふだらう。と、色々に考へた。併し、その社會的の「辛さ」を堪へてこそ、僕の懺悔にも意味が出て來るのだ。僕自身の革命と社會者とは何の關係もない筈だ、何の交渉もない筈だ。

女の學問をどうしよう。人格をどうしよう、一時はこんな事も考へた。併し、それは自分が全力を

擧けて教育すれば、どうにでもなる問題だ。却つて生じッか教育のある者より無い者の方が取扱ふには好いかも知れない。

僕はやつと決心がついた。

そこで、僕は君に、僕の娶らうとする女の事を告白しなければならない。君は概括的に僕の罪惡を知つてゐるけれども、特殊的にはまだ知つてゐない事が澤山ある。

僕の關係した三人の女の內で、僕が最も不幸な境遇に居ると思ふ女は、名を神山きたと言ふ。僕より四つ年上の女だ。

君は覺えてゐるか。僕の內がまだ瓶布にあつた時分、僕の家に半年程ゐた人だ。

盛岡の人だつたが、早く母に別れた。父はあるが、不治の病で腰が立たない。それでも自分は教育を受けて學問で父を養はうといふ健氣な志を立てて、父を伯父の家へ預けて一文無しで東京へ出た。

そして、あの五番町のS女學院へ學僕に這入つた。初めは大層深切にして吳れたさうだが、半月も立たない內にひどい取扱ひやうをされるやうになつた。院長のT女史の顏は君も番町にゐた時分見て知つてゐるだらう。薄痘痕のある、丈の低い、小さな女さ。十六の時から亞米利加で教育を受けたとかいふので、大した見識だ。あの先生に虐待されたんだ。

學問なんか少しだつて教へては吳れやしない。朝から晩までこき使つて、それで食ふ物も碌に食は

せないのださうだ。飯を食ふ時は一々あの洋服を著た薄痘痕が臨檢して、何杯以上喰べてはいけないとかいふ事まで干涉するんださうだ。まあ、給金なしの下女扱ひだつたんだね。

それを可哀さうに思つて僕の母へ世話をしたのは、麴町の卵屋の小僧だ。何でも仙公とか何とかいふ十八位の小僧だつた。S女學院にも僕の家にも出入だつたんだね。

僕の母はああいつた人間だから、話を聞くと涙をこぼさぬ許りに可哀さうがつて、あしたにも內へ引取つて遣らうと言ひ出した。子供の世話を見てさへ吳れれば學費位はどうにかするとまで言つたんだ。

仙公は直ぐ先方へ行つて、その話をすると、向うも涙をこぼさぬ許りに喜んで、早速S女學院の方は暇をとつた。

僕の內へ遣つて來たのは、何でも夏か秋かの晩だつた。初めて母から引き合はされた時、その女の人はラムプの火影に小さくなつてゐた。母が斯ういふ可哀さうな女を助けるのは、度々の事だから、僕は別に珍らしいとも何とも思はなかつた。極めて冷淡なものだつた。「ああ、さうですか。何分、宜しく。」と言つた丈で、その人の顏も碌に見ずに、自分の部屋へ歸つて了つた。

初めて顏を見たのは、その明くる朝だつたと思ふ。僕が起きて、湯殿で顏を洗つて、部屋へ歸ると、その人が朝飯を持つて來て吳れて、お給仕をして吳れた。

誠におとなしい、口數を利かぬ、深切らしい人だ。さういふ不幸な境遇にゐる人にも似合はず、顔は丸々と肥つて、色が白い。少さうな髮の毛を引ッつめて束髮にしてゐる所は何となく見すぼらしかつたが、眼には何とも言はれぬ女のやさしみがあつた。着物も粗末ではあるが、たしなみが好いかして、何となく身綺麗だつた。

神山さん――僕等はこの人を斯う呼べと母から命ぜられた――の僕に於ける第一印象は斯ういふ風で、誠に感じが好かつたんだ。

神山さんは主として女の同胞の方の世話をしてゐたので、僕はしみじみ話をした事も無かつた。顔を合す機會さへ少かつた。それに、その時分の僕は、中々貴族主義だつたから、家に居候をしてゐる女などと口を利くのは汚らはしい位にも思つてゐたのだらう。

（だから、神山さんについての僕の記憶――殊に精神上の記憶――は甚だ貧しい。）

それでゐて、僕は段々神山さんに近づいた。どういふ風に近づいたか、それは僕、全く覺えてゐない。食物に飢ゑてる者が食物に手を stretch out するやうに、僕は神山さんへ手を stretch out したのだ。兎に角、人間的でなかつた事は確だ。全く獸的だつたには違ひない。

前後の顧慮も無かつた。善惡の判斷も無かつた。責任の觀念も無かつた。本能が gushing out したんだ。智も情も意もない肉ばかりの僕になつたんだ。

或晩、夜中にフト眼が覺めた。
便所へ行かうと思つて、暗闇を手探りに茶の間を通り拔けようとした。
すると、僕の足の先が、…………………………
僕は立て續けに嚏を二つ三つした。
まあ、強ひて記憶を呼び起した所で、覺えてゐるのはこの位な事だ。
神山さんは實際苦しい境遇にゐた。こんだ僕の家を出されれば、もう行く所は何處にもなかつたんだ。だから、自分は厭だと思つても、少し位な事は我慢しなければならなかつた。それに、僕の母が殊の外やさしく、着物にも學費にも出來るだけの事はしてゐたから、その深切にほだされた所もあつたのだらう。僕は多少その虚に乘じたといふ所があつた。その恩を笠に着て、我意を通したといふ所があつた。
…………。…………………………。……………………。…
それを思ふと、僕はいつでも胸を掻き毟られるやうな氣がする。
……………………、……………………。……………………
僕はそれを好い事にして、思ふ樣自分勝手を働いた………神山さんの人權に對しては僕全く盲目だつたのだ。

斯くして僕等の――僕等のとは言へないかも知れない。先方の意志は全く分らなかつたのだから――關係は幾月か續いた。僕はあらゆる智慧をふるつた。巧に隱れた。だから、内の者でもこの事に氣のついた者は一人だつてありやしなかつた。

やがて神山さんの國の阿父さんが大層惡くなつた。これを預つてゐる伯父さんが病人を邪魔にして大層虐待をするといふ知らせが餘所からあつた。間もなく、危篤といふ電報が來た。

神山さんは取る物も取り敢ず、國へ歸つた。

神山さんは、もうそれッ切り東京へ出て來なかつた。

歸つて見たら、父の容體は左程でもなかつた。やッぱり伯父が面倒になつたので、そんな事を言つて寄越したのだらうといふやうな手紙が來た。

もう一度是非上京して御厄介になりたいのだが、前に申し上げたやうな事情で、父も伯父の家を出たし、又二人で家を持つやうになつたので、當分は上れさうもない。御厄介になつた事は死んでも忘れない。お子樣方の御成人を祈る――やがて又こんな手紙が來た。

それからも、度々母へは便りがあつたやうだが、ただ段々親父の病氣はよくなるばかりだから安心して異れといふやうな事ばかりだつたらしい。

やがて、その便りも全く絕えて了つた。

便りが絶えてから……もう三年になる。
僕の罪惡は無言に始まつて無言に終つて了つたんだ。闇黑裡に生れて闇黑裡に生を終つて了つたんだ。神と神山さんと僕との外、その罪惡を知る者は誰もないんだ。僕はもう濟んだ事だと思つてゐた。ところが、その古い罪惡を、神は君を通して責め給ふのだ。
僕は苦しい。堪らず苦しい。忘れてゐた古い傷をナイフでせせられるやうな氣がする。併し、僕は自己を救ふ爲に、この苦痛に勝たなければならない。この苦痛に勝つには、君の言ふ通り具體的の懺悔をしなければならない。
僕は「負ひ目」を負はなければならない。十字架につけられなければならない。手の甲と足の甲とを釘で打ちつけられなければならない。
僕は血だらけになつて、初めて救はれるのだ。僕は死んで初めて生きる事が出來るのだ。
僕は殉教者の心を以て、神山さんを救はう。神山さんの前に總ての罪を謝して、その罪の償をしよう。神山さんと一生を俱にして、神山さんの父をも幸福にしてやらう。
そして、神山さんを通じて、僕の汚した他の婦人達に罪を謝さう。
僕にして若しこの試練に堪へ通す事が出來たら、失戀の苦悶などは、風にごみの飛ぶやうに、何處かへ飛んで行つて了ふだらう。

ああ、君は好い事を教へて呉れた――いいや、君ではない、神が君を通じて教へ給うたのだ。僕はこれを君に謝すと同時に、君を通じて現はれ給うた天なる御神に謝す。

君は自ら常に「不信者」だと言ふ。基督は人物であつて神ではないと言ふ。併しながら、神はその「不信者」と稱する君をも捨て給はず、僕の唯一の友なるが故に、君を通じて僕に現はれ給うた。僕は今更に神の惠みの限りなきを感謝せずには居られない。

僕は暫く筆を置いて、默禱する……

あすとは言はぬ。今夜君へ出すこの手紙を書き終へると、僕は直ぐ神山さんへ謝罪の手紙を書く。神山さんはきつと聞いて呉れると思ふ。

父や母へは跡で話をすればよい。僕の兩親は決して僕のする事に異議は稱へない。それは君も知つてゐる。

この手紙を書いたら、頭がはツきりして來た。からだ中に何とも言へぬ力が籠つて來た。

最後に、も一度僕は君に感謝する。

四月二十五日夜　　三之助

繁次郎君

二

木原君。とんだ事が起つて來た。僕は今更君を恨みはしない。恨むなら自分を恨む。ただ世の中の事が分らなくなつて來た。

二月前に出した例の手紙の返事が漸く昨日來た。直ぐにもその趣を君の所へ知らせなければならなかつたのだが、あまり頭が亂れたので、今日になつて了つたのだ。どうか許して呉れ給へ。

僕の頭は今滅茶苦茶だ。この手紙にも嘸前後する所が多いだらう。それも許して呉れ給へ。

兎に角、先づ事件其者を書かう。

返事は神山さん自身から來たのではない。神山さんの阿父さんらしい人から來たんだ。表にも中にも、ただ「若翁(じやくをう)」としてあるだけで、名が書いてないのだ。

神山さんが元の通り不幸な境遇にゐてさへ呉れればこんな事にならなかつたのだ。神山さんは今非常に幸福な生活をしてゐるのだ。

或法學士の所へ片づいてゐるのだ。その法學士は今浦鹽須徳(ウラジホストツク)の〇〇〇にゐるのだ。役の名は分らないが、〇〇〇〇とでもいふ所らしい。神山さんはその夫人として、それも浦鹽に行つてゐるのださうだ。

僕の手紙は最初神山さんの故郷へ著いて、神山さんの阿父さんの手に這入つた。併し、表にはちやんと僕の名が書いてある。神山さんの阿父さんも當時の恩は覺えてゐるし、其恩ある家の息子から來た手紙だから、さういふ騷動を起しさうな手紙だとは夢にも氣がつかないで、その儘浦鹽へ廻送したのだ。ところが、不幸にしてそれが神山さんの良人の手に這入つた。神山さんの良人は神山さんの前半生については殆んど何も知らない人なのださうだ。

見馴れない聞き馴れない男の名の手紙が來たので、法學士は先づそれを不思議に思つた。やがて、それが疑惑となり、嫉妬となつた。

法學士は、自分の面前で、神山さんにその手紙を讀ました。

神山さんは微笑を含んで、何の汚らはしい事が書いてあるものかといふ風で、平氣で手紙の封を裂いたさうだ。神山さんは僕を信じてゐたんだね。

五六行讀むと、神山さんは顏色を變へた。もう手が震へて先を讀む事が出來ない。法學士も顏色を變へた。「讀め、讀め。先を讀め。」と頻に促したさうだ。

神山さんは全身わなわな震へながら、聲も絶え絶えに、それでも終まで、どうにか斯うにか讀んださうだ。

勿論、厭な手紙ぢやないのだから、法學士もさう不作法に怒りはしなかつた。神山さんは僕の涙に

滴染んだ手紙を、又自分の涙で浸す許りに泣いたさうだ。僕の心を汲んで呉れたのだらう、そして、その遲かつたのを悔んで呉れたのだらう。

併し、事件はそれだけでは濟まなかつた。法學士は今まで神山さんを純潔無垢なんだとばかり思つてゐたのだ——僕はさうに違ひないと思つてゐるが——それがさうでなかつたと言ふので、大層歎いたさうだ。

法學士は有名な潔癖家ださうだ。それでも二週間位は堪へに堪へたのだが、たうとう堪へきれないで、離緣話を持出した。さうなると、向うは法律家だ。言ふ事が一々事理に適つて居る。流石神山さんの阿父さんも返す言が無かつたさうだ。

併し、兎に角、本人から爲かけた事でない事は、僕の手紙を見ても分るし、それもあの當時の境遇上、是非の分別もつかずにした事でもあらうからといふので、百方神山さんの阿父さんが調停の勞をとつたさうだ。

神山さんも、豫めそれだけの事を斷つて置かなかつたのは私が惡かつた。併し、今更何の面目があつて故鄕へ歸れようと、泣いて良人に訴へたさうだ。

法學士は一角の紳士だ。この手紙も誠だ、妻の心も誠だ、妻の父の心も誠だ。誠に動かされない者

は誠の者だと言つて、綺麗に自分の持出した離縁話を引込めたさうだ。

「若翁」といふ人――恐らくは神山さんの阿父さん――は昔流の字で、事細かにこれらの事を僕の所へ報じて呉れたのだ。

「今では雨降つて地固まるで、却つて前より幸福に暮してゐるやうですから、その義は御安心下さい。」と書いてあつた。

「あなたも今が勉強ざかりです。もうきたの事などは忘れて、一生懸命に御勉學が肝心です。この後どんな事がきたの片づきました先で起りませうと、その責任は私が負ひますから、もう決して御心配には及びません。早く社會へ出て立派なお方におなりなさいまし。蔭ながら御出世を祈つてをります。」――こんな事も書いてあつた。

僕はこの手紙を讀み終ると、三度罪に責められるやうな氣がした。道を歩いてゐて、急にあたりが眞ツ暗になつたやうな氣がした。

もう、何が何だか分らなくなつた。

一體、人間はどうしたら好いのだ。

離縁をされたのなら、まだ好い。僕はその不幸な婦人を一生慰める事も出來る。

神山さんはもう一生法學士の所にゐるだらう。その法學士のこれからの家庭。神山さんの一生。そ

こに絕えず何等か gloomy なものが漂はずにはをるまい。

二人は果して今までの通りに信じあつて暮す事が出來るであらうか。果して今まで通り openly に語り合ひ微笑み合ふ事が出來るだらうか。

法學士の家庭には、もう拭いても拭いても拭きとれない汚點が出來て了つたのだ。

法學士の家庭の上には、永久に去來する一團の暗雲が懸つて了つたのだ。

その汚點は誰がつけたんだ。その暗黑は誰が懸けたんだ。

僕だ。僕だ。罪を悔いた僕だ。懺悔をした僕だ。十字架を負つた僕だ。

ああ、人間はどうしたら好いんだ。

自らをも人をも幸福にしようと思つて爲た事が人をも自らをも不幸にして了つた。

僕には世の中の事が分らなくなつた。

僕が悔いさへしなかつたら、懺悔さへしなかつたら、默つてさへゐたなら――法學士の家庭は永久に幸福だつたのだ。

僕が飽くまで無垢を裝つてゐたなら、親友の君に何事も隱してゐたなら、悔ゆべき罪は一つもないといふやうな顏をしてゐたなら――神山さんの家庭は永遠に明るかつたのだ。

神山さんの老人に非常な苦勞をかけたのも、思へば僕の懺悔故だ。

ああ、悔い改め。僕は疑はざるを得なくなつた。ああ、僕には神の教が分らなくなつた。

僕は「三度罪に責められるやうな氣がする」と前に書いたやうだ。併し、今の苦しみは、あの古い罪を悔いる苦しさではない。二月前の手紙を悔いる苦しさだ。懺悔を悔いるのだ。後悔した事を後悔するのだ。

ああ、僕には分らない。何もかも分らない。

これから僕はどうすれば好いんだ。

失戀の苦痛を救つて吳れる筈の唯一の手段は、斯くの如き滅茶苦茶な結果を生んで了つた。ああ、僕は君が羨ましい、「不信者」たる君が羨ましい。

ああ、僕はどうすれば好いんだ。

併し、決して君を恨むのではないよ。又君に訴へるのでもないよ。

僕はもう一人で、どうにでも成るやうに成る。

頭が凝結して了つたのか、もう涙も出ない。

今の感情は、寧ろ笑ひたい。ハハハハハ。

六月二十七日夕

日野三之助

木原繁次郎君

捕縛

手記の一。

お辰の兄が尋ねて來たと言はれた時、俺はヒヤリとした。

きつとあの一件に違ひない。さもなくてお辰の兄が俺を尋ねて來る譯がない。愈お辰の身體に何か變化が起つたに違ひない。若しや若しやと俺の心配してゐた事がたうとう事實になつたに相違ない。

俺は自分の顏色が青くなつたに違ひないと思つた。それでも俺は態と平氣な顏をして、書生の木村に「應接へ通して置け」と言つた。けれども、自分の聲は慄へてゐるのは、自分にもよく分かつた。

母は、「何だらうねえ」と心配さうに言つた。「なあに、金でも借りに來たんでせう。」と、極冷やかな調子で俺は言つた、勿論この返事には多少の暗示があつた。

いつも急いで食つて了ふ朝飯を、今日は勉めてゆつくり食つた。そして、食ひながらこんな事を考へた――

たうとう最後の科稅が來たんだ。俺はどつちにしても、これを逃れる事は出來まい。俺は子供の時

から、seduction といふやうな意味に於いて、隨分大勢の女に手をつけた。俺は偶とした事で、トルストイの『復活』といふ、小說を讀んだ事があるが、あの中で一番俺の同感したのは第十七章だつた。カチユシヤの部屋の窓から明りが外へ差してゐるのを、軍服を着て帽子を冠らないネフリユドフが覗いてゐる所を書いたパステルナックといふ人の挿繪も俺の胸を躍らした。あの章の終りの "It happens to everybody—everybody does it" といふ文句も、嬉しいやうな、恐いやうな心持で讀んだ。俺はネフリユドフの罪惡を幾度も重ねて犯したのだ。併し、今までにはまだ一度もその罪に對する刑罰が來なかつたのだ、科稅が來なかつたのだ。俺は罪を犯す度にあとでビクビクした。若し俺の罪惡が實を結んだらどう爲よう。若し俺の無形な行爲が形になつて現れたらどう爲よう。俺は始終ビクビクしながら、それでもやつぱり俺の罪惡を廢めなかつた。今度こそは刑罰が來るだらう、今度こそは科稅が來るだらうと、罪を犯す度にひやひやして來たが、幸にも今までにはまだ一度もそれが來なかつた。どの女もどの女も、俺の行爲を暗から暗へ葬つて、いつともなく俺の眼の前から消えて行つた。俺は生れつき卑怯な人間で、何事をも明らさまに爲る事が出來ない。腹が減れば飯を食ふとか、眠くなれば寢るとかいふ、人間自然の要求を充たすのさへ、俺は人に隱れて爲ようとするのだ。況んや性の慾望といふやうなものに於てをやだ。俺は女といふ者に對して、まだ一度も「買ふ」といふ公明正大な地位に立つた事はない。俺は常に「女」を「盜んだ」のだ。竊盜らしい事もした。强盜らしい事もした。甚

しきに至つては掏摸らしい事までした。これに對してまだ一度も「神」の警察が一人の刑事をも遣らなかつた事は、寧ろ不思議な現象である。俺は自分の卑怯な爲に罪を始め、その罪の罰せられない爲に益罪を廣げたのだ。

たうとう刑罰が來たのだ。俺はどうしてもこれを逃げる事は出來ない。今まで幾度となく重ねて來た罪惡が、最後の罪惡に對するだけの科税で濟めば寧ろ安いものだ。この科税はどんなに恐ろしい科税だか分からぬ。併し、たとひどんなに恐ろしい科税であらうと、罪の何十回に對する罰の唯一回なのだ。これをも逃げようとする程、それ程俺は卑怯ではない。好いから檢事の前へ出て、兎に角宣告を受けて見よう。

一時間程待たしてから、俺は應接間へ這入つた。お辰の兄は狼狽して椅子を立つた。いつものやうに、尖がつた赤黑い鼻の先に度の強い眼鏡が突き出てゐる。その眼鏡の上から、絶えず落ち着かない大きな眼が覗いてゐる。兩方の手は電氣でも掛けられたやうに、絶えず慄へてゐる。この不安な、ビクビクするやうな檢事の樣子を一目見ると、被告の俺は急に氣が落ち着いて了つた。

「どういふ御用です。」

お辰の兄は、絶えず何かに後から迫られるやうな樣子で話し出した。

「實はお辰でございやすが――」

きつとさう來るだらうと覺悟してゐる俺も、この一言を聞くと、背中から冷たい手で撫でられたやうな氣がした。

お辰は俺の家を出てから、下町の或商家へ奉公に行つた。二月三月そこに働いてゐる内に身體の樣子が變つて來た。それから兄の家へ歸つて來て、醫者の所へ行つて見て貰ふと、もう五月にもなつてゐると言はれた。お辰の兄が、月を繰つて見ると、どうしても俺の家にゐた間に起つた事に違ひないと言ふ事になつた。お辰の兄は每日のやうにお辰を責めたが、お辰は中々「父」の名を言はなかつた。散々責められた揚句、この頃になつて漸くお辰は俺の名を言つた。長い間の恩もあるし、俺の名譽にも關る事だから、堅く言ふまいと決心してゐたのだが、あまり兄に責められるので、苦しみながら實を吐いたのだ。

お辰の兄は斯ういふ風に話をした。そして事實を打明けたのはお辰の罪ではなくて、自分が餘り責めたので、已むを得ず白狀したのだと言ふ風に話した。併し、俺はそんな事はどうでも好いと思つた。平氣で直ぐしやべらうと、澁り澁り言はうと、言つて了つた以上は同じ結果を見るのだ。

お辰の兄は話をしてゐる内に、段々腰が据わつて來た、段々下の懷へが留まつて來た。始めは伏し目に人を狙ふやうな態度だつたのが、いつの間にか、眼を大きくして眞面に俺に襲ひ掛つて來た。

「あなた覺えがありますか。」

「そりや覺えはあります。」
「では、どうにかして下さるのでせうね。」
俺は非常な勇氣を振つて斯う言つた。
「無論どうにかします。併し、どうにかすると言つて、手段は二つしかありません。あれを私の妻にするか、さもなくばあれの身體に傷の附かないやうにして、何處かへ嫁に遣るのです。」
「さうです。その二つしかありません。」
「ところで、あれを私の妻にすると言ふ事は到底不可能です、あれが私の妻になる資格のない事は、あなただつて認めるでせう。器量の事は暫く言ひません。あんな教育の無い者が、どうして私の妻になれませう。」
「さうですとも。それは私も萬々お察し申してをります。併し、當人は非常にあなたを慕つてゐるのでございますから、どうにか――」
「私を慕つてゐますつて。」
俺は笑はずにはゐられなかつた。お辰は俺を憎んでゐようと決して俺を慕ふ筈がないのだ。俺に眞面目な心があつて爲た事でない事は、お辰だつて好く知つてる筈なのだ。第一俺をほんとに慕ふ者がどうして俺の名を身持の悪い兄などに打明けよう。お辰の兄は好い加減な事を言つてるのだ。と思ふ

と、俺は腹が立つて來た。

「そんな事はどうでも好うございます。兎に角、私はあれを妻にする事は出來ません。そこで、あれを引き取るより外に方法はありませんが、それではお氣に召しませんか。」

「お引き取り下されば、何も言ふ所はございません。併し、子供の始末は――」

「それは何とも只今は申し上げ兼ねます。あなたはあれをどういふ人間だと思つてゐらつしやるか知りませんが、私はあれを信用する事は出來ないのです。私は私として償はなければならない所があると信じますから、それを償はうとするだけで、生れたものが果して自分の物であるかどうかそれは疑つてゐます。無論斯うなる以上は決して不人情な事はしない積りですが、それらの事は私の方にお任せが願ひたいのです。」

俺は俺の罪を否定しようとは思はなかつたが、生れる子供を自分のだとは、どうしても信じたくなかつた。それだけはどうしても俺のではないと言ふ事にして置きたかつた。俺はあんな女との關係を、眼に見える物で見たくはないと思つたのだ。

「御存じでもございませうが、あれは私の家にゐる間も隨分自墮落な生活をしてをりました。勿論、遠縁の者だといふやうな所に多少の勝手もあつたのでせうが、兎に角その日にも差支へてゐるやうなのを、親父の所から引き取つて遣つたのぢやありませんか。それをあれは何とも思はずに、私の母に

は口答へばかりしますし、私の妹などは自分の家來か何ぞのやうに追ひ使ふのです。その上私共が夏避暑に出掛けました留守などには、毎晩のやうに何處かの男を引き入れたと言ふやうな噂さへあつたのです。」

俺はお辰の兄を捕まへて、お辰を罵倒し始めた。併し、俺の言つた事は決してみんな嘘ではなかつた。男を引き入れたといふ事だけはどうかと思ふが、その當時さう言ふ噂は確にあつたのだ。俺の思ふには、その時分もう一人家にゐた下女が厭に生つ白い奴で、事に依ると、こいつが引き入れたのではないかと思ふが、出入の八百屋の小僧などは、確にお辰だと言つてゐた。俺はこの際八百屋の小僧の方を信じた方が氣が強くなるから、八百屋の小僧の言つた事を本當だと思はう。

「いや分かりました。」

お辰の兄は、熱して來る俺の言葉を冷やかに遮つた。

「そこで、いつからお引き取り下さいませうか。」

「今直ぐでもと申し上げたいが、一應家の者にも相談しなければなりませんから、二三日お待ち下さい。」

「では明後日では如何でせう。日が好いのでございますが。」

俺は又むつとした。あんな奴をこんな譯で引き取るのに、日の好いも惡いもあつたもんかと思つた

のだ。

「明後日と言つて、今直ぐさうはッきり極める譯にも行きませんが、まあさうして置きませう。」

「そこで――」

お辰の兄は、鋭い鎌で草でも薙ぎ倒して來るやうに、どしどし俺の腹ん中へ切り込んで來るのだ――

「そこで、これは私共の勝手と言へば勝手ですが、お辰を引き取りましてから今までの掛りの所ですな、勿論、こんな事を願へた義理ではないのですが、この頃は周旋業の方も馬鹿に閑でしてな。何しろ御存じの通り子供は多いし、どうにも斯うにもアガキが附かないのです。そんなこんなで大分お辰の物も他所へ預けて貰つたやうな譯で、當人もこちらへ來るとなれば、さういふ風な物を持つても來たいだらうと思ひまして――」

「つまり金が入ると言ふのでせう。」

それは勿論覺悟してゐました、と言つて遣りたかつた。

「どの位入るのです。ざツくばらんに言つて貰はうぢやありませんか。」

「へえ。別にまだ精算をして見た譯でもございませんが、何や彼や五十圓程は掛らうと存じまして――」

「それで好いんですか。」

「それだけございませば。」

「ぢやあ、それだけの物をあなたの方へ上げて、當人をこちらへ引取れば、それでもうあなたの方に異存はないのですね。」

俺はもういつまでも話をしてゐるのが厭になつた。どうせ背負ひ込むなら、多くても少なくても同じ事だ。俺は唯一時も早くこの尖がつた赤黒い鼻と總ての關係が絶つて了ひたかつたのだ。

「さうして頂けば、もう異存はございません。」

「宜しい。そんなら今夜七時に又ここまで來て下さい、金を渡しますから。その時、いつ引取るか、しつかりした御返事をしませう。」

お辰の兄は俺のこの返事を聞くと、眼鏡の上でニコリとした。

「では、どうぞ宜しく願ひます。當人も嘸喜ぶ事でございませう。實はもう妻に一月も前から伺へ伺へと責められてゐたのですが、まあ出來る事ならこんな事で伺ひたくはないと存じまして、今日まで漸く宥めて來たのでございますが、實はあなた、或方面の宅地賣買で、近頃飛んだ手違ひを致しましてな、もうどうにも遣り繰りが附かなくなつて了ひましたものですから。」

そんな言ひ譯はどうでも好いと俺は思つた。どつちにしても俺は損をするだけの物を損をするのだ。取られるだけの物は取られるのだ。

「では、どうか今夜御出で下さい。」

俺は早く歸つて貰ひたいと思つて、斯う言つた。

「畏まりました。併し、この頃は中々お忙しくて結構ですな。新聞などで嚴ましい疑獄などには大抵御關係のやうですな。お大抵ぢやございますまい。」

「ええ、何ですか。辯護士も若くちやあ世間の信用がないから駄目です。では、どうぞ今晩。」

お辰の兄はやつと歸つた。

手記の二。

愈々金を渡す時、俺はお辰の兄に向つて斯う言つた。

「兎に角、これは親類の間に起つた事ですから、世間へ知れるとお互に恥ぢです。又當人の將來の爲にも非常な損だと思ひますから、どうか十分祕密はお守り下さい。私の妻にしない人間だとすれば、何れはどこかへ片附けて遣らなければならない事になります。若しこんな事が世間へ洩れた爲に、當人が一生不幸に暮さなければならないやうな事になると可哀さうですから、どうか誓つて他言しないで下さい。勿論、妻君にもお口止めがして頂きたい。」

併し、俺は決してお辰の身の上を心配して、こんな事を言つたのではなかつた。俺はどこまでも自分が大事だつたのだ。自分の社會に於ける地位が大事だつたのだ。こんな事の爲に俺の一生を草深い

田舍か何かで過ごさなければならないやうな事になるのは、如何にも堪へ難い。俺はこれッぱかりの事で社會的に滅されるには、餘りに偉い身體だ。俺には法曹界に於ける立派な使命がある。俺は十分その使命を果すだけの天分と素養と一刻も休まぬ勉強の精力とを持つてゐる。天は決してそんな事で俺といふ人間を根柢から覆へしては了ふまい。俺はそれに就いて決して天を疑ひはしなかつたが、それでもお辰の兄から證書だけは取つて置いた——必ず祕密を守ると言ふ證書を。

その晩、俺は母に向つて斯う言つた。

「こつちには丸で覺えのない事なんですけれど、事を荒立てると却て恥ぢになりますから、何でも向うの言ふ通りになつて遣りました。何しろ相手が惡いんですからねえ。そりやあ法廷へ出て爭へば、決して負ける筈はないのですが、そんな事をして費用を使つても詰りません。それにお辰の身體に變化が起つてる事は事實らしいのですから、そんな事をして疑ひを受けるだけでも損ですから、兎も角引取る事にして遣りました。なあに、身體の始末さへ附けば後はどうにでもなりますから、それまでどうか我慢して見て遣つて下さい。ほんとに飛んだ親類を持ちましたねえ。」

母は飽くまで俺を信じてる樣子で、

「あれは前から好くない奴だつたんだよ。太田の伯父さんなんかも、今までに幾度ゆすられたか知れやしないよ。だが、お辰もお辰だねえ、どこでそんな身體になつたんだらう。あの子も身持の好くな

い子だねえ。」

と、言つた。

俺は巧に母を欺して了つた。併し、俺は決して悪い意味で母を欺したのではない。俺は母に心配をかけるのが厭だからだつた。母に自分を不孝な子にするのが厭だからだつた。俺は社會に信用を得る基礎は、家庭に信用を得るにあると信じてゐるからだ。

手記の三。

今日は愈々お辰の來る日だ。

俺はお辰の顏を見るのが厭なので、朝早く家を出て了つた。あの眼の小さな、口の大きな、丈のチンチクリンな、醜惡極まる「女の變態」を見るのは、どうしても俺は厭だ。しかも、それが俺の關係者として現れるのだ。俺の子だといふ物の母として現れるのだ。俺は迚も堪へられない。

夕方、勤を果たしてからも、俺は家へ歸らなかつた。俺は這入りつけぬ料理屋といふものへ這入つて、飲みつけぬ酒といふものを飲んだ。「酒は憂ひの玉箒」などと、好く落語家が言ふが、あれは噓だ。俺は酒を飲んだ爲に却て頭が苦しくなつて來た。鐵の輪か何かで、肉の食ひ入る程頭を締めつけられて、今にも頭蓋骨が碎けて了ふのではないかと思はれる程、頭が痛んで來た。

俺は苦しみながら考へた。俺は何もこんなにしてまで酒を飲まなければならない程の憂ひがある譯ではない。俺は成程惡い事をした。併し、俺はその惡い事に對する償ひを立派にしてゐるのではないか。俺は酒を被つて逃げなければならないやうな、そんな重い苦痛を背負つてゐるのではない。一體、俺はどうして這入りつけぬ料理屋などへ這入つて、飲みつけぬ酒などを飲んだのであらうか。

俺の前へ現れた美しい女達も、少しも俺には美しく見えなかつた。俺は唯「女」といふ者を見た。常に俺を暗い所へ暗い所へと引きずり込む「女」といふ者を見た。いつも俺に卑怯な事をさせる「女」といふ者を見た。あの見るのも不愉快なお辰といふ奴と同じ種族の「女」といふ者を見た。俺が忘れようとしたお辰の顏は、一層深刻に、一層執拗に、俺の腦髓の內膜に食ひ入つて來た。

車で運ばれて家へ歸ると、家は思ひの外靜かだつた。母は俺の命令通り、お辰が來ると直ぐ、近所の產婆の所へ預けて了つたのだ。

母が「產婆」といふ事を言つた時、俺は堪らず厭な心持になつた。俺の物だか何だか分らない物を、俺の物として引き出す奴である。俺の罪だかどうだか知れない物を、俺の罪として世に示さうといふ奴である。併し、さういふ奴が、仕合せにもこの世界に家といふものを持つてゐて、お辰を俺の眼から隔てて吳れた事は、如何にも感謝しなければならぬ。腐つて行く人間の身體を、土の底で埋めて隱して吳れる墓掘といふ奴に、俺達が感謝しなければならないと同じやうに。

俺は同じ人を憎んだり愛したりしながら、痛い頭を抱へて寢た。

手記の四。

費用は段々にかさんで來た。出來ない事ではないから、始めは俺も默つて出してゐたが、終にはそれが厭になつて來た。俺はいろんな口實を設けて、成るべく自分の金を出すまいとした。

滋養分を喰べさせなければならないから、どれだけの金が入る。何とかいふ藥が入るから、それを買つて貰ひたい。やれ、蒲團が入る、布が入る。毎日のやうに樣々な事を言つて來るのだ。

餘り煩いから、何も彼もそつちで立て替へて置け、後で纒めて片を附けるからと言つて遣つた。小刻みに刻んで、毎日のやうに責任を問はれるのは、如何にも堪へ難い。俺の責任なら責任で、山のやうになつて、一度に俺に押し寄せて來るが好い。卑怯な魚が釣餌でも食ひ缺くやうに、俺の身體をチビチビ食ひ缺かなくても、俺は俺の責任だけの事はきつと果すのだ。

母は毎日のやうにお辰の消息を俺に傳へた。俺は一々それを聞くのが、如何にも苦痛だつたが、母は俺に罪はないと信じてゐるものだから、平氣で色々な話をするのだ。俺も母の前だけでは、苦痛を現はすまいとして、努めて冷淡に聞いてゐるやうな風をするのだが、元來我儘の俺の事だから、時々忘れて癇癪を起して了ふ事がある。すると、母はいつでも不思議な顏をして默つて了ふのだ。

手記の五。

たうとう生れたといふ知らせがあつた。

言ひ淀み、言ひ淀み、母の言ふのを聞けば、馬鹿に顔の長い、頭の大きな男の子だと言ふ。

「僕に似てゐましたか。」

俺は興奮する神經を無理に抑へて斯う聞いた――努めて冷淡に。

そして笑つた――努めて皮肉に。

「似てゐるものかね。」

母は捨てるやうに言つた。

その晩、俺は仙臺の方へ旅行に出た。表向きは職業上の出張だつたが、實は行つても行かないでも好い所へ行つたのだつた。

俺は若し家にゐて、赤んぼの聲でも聞いたら大變だと思つたのだ。產婆の家はつい五六町先だから、夜遲くまで起きてでもゐる時に、若し「自分の子」の泣き聲でも聞いたら、俺は迚も堪るまいと思つたのだ。俺はお辰の兒を追ひ歸してから、出來得る限りそれに關する事を見まいとしてゐるのだ。聞くまいとしてゐるのだ。俺の罪の結果だと言ふ物が、神經を突き破るやうな銳い赤子の聲になつて、

俺の耳の中へ襲ほつて來たら、俺は迚もぢつとしてゐられなくなるだらう。俺は俺の狼狽する樣子を家の者に見られて、家庭に於ける信用を失ひたくないのだ。

手記の六。

俺は今日歸つて來た。威張つて歸つて來た。俺はこなひだどうしてあんなにビクビクして家を逃げたんだらう。どうしてあんなに苦んだり恐れたりしたんだらう。俺は少しも苦しむ事はないのだ。少しも恐れる事はないのだ。俺は科稅を拂つてゐるのだ。俺は責任を果してゐるのだ。誰に聞かれたつて恥づる所はないのだ。誰の前へ出たつて恐い事はないのだ。だから、俺は歸つて來た。威張つて歸つて來た。

「子供が死んだよ。」

俺は家の閾を跨ぐと、直ぐ斯ういふ聲を聞いた。

俺は「それ見ろ」といふやうな心持になつた。やつぱり神は正しい者に味方をするのだ。俺の物だか何だか分らないやうなものを、いくら俺に押し附けようとしたつて、そんな物は自然と無くなるのだ。お辰やお辰の兄が俺に對する唯一の武器と賴んでゐた物は、見事に自然の手で叩き潰されて了つたのだ。憫れむべき犧牲となつた赤子は世にも不幸な運命を持つたものだ。俺はお辰やお辰の兄のや

うな奴に作り出された不幸共者の象徴とも言ひたい赤子の爲に泣く。俺は決して父の知れぬ赤子に對して、親のやうな感情を起して泣くのではない。悪い奴等が憎いから泣くのだ。義憤の涙だ。公憤の結晶だ。その晩、俺は斯ういふ話を聞いた。

産婆の所へ遊びに行つてゐた俺の小さい妹は、赤んぼの死骸を見ると大層泣いたさうだ。少しも濁りのない清い涙を、少しも曇りのない清い死骸の上に注いだのだ。死んだ子に少しも罪はない、泣く妹に少しも罪はない。俺の爲に死んで吳れたと言つて好い赤子の爲に、俺の小さい妹が泣いて吳れたといふ話を聞いた時は、思はず俺もホロリとした。

「でも好いわ。又今に出來るから。」

無心な妹は、斯う言つてお辰を慰めたさうだ。

「又今に出來る。」

無心で言つた妹の言葉は、百雷の一時に落ちるやうな響きで、俺の心臟を脅かした。俺は太い鐵の棒か何かで、身體の何處かを碎ける程に打たれたやうな氣がした。

「又今に出來る。」

恐ろしい言葉だ。氣味の悪い言葉だ。俺の運命を宣告するやうな言葉だ。俺は暫く慄へが止まなかつた。

『又今に出來る。』

手記の七。

顏を見るのも不愉快な女が、又俺の家へ來る事になつた。

産後の衰へは醜い女を更に醜くした。この醜い女の弛んだ皮膚の何處かに、醜い罪惡の痕跡があるかと思ふと、俺はもう指一本でもこの女の物を見るのが厭になつた。

家へ來た當座、お辰は人が變つたのかと思はれる程大人しかつた。何となく萎れたやうな風情で、母の命令にも好く服從して働いた。併し、それは本の十日許りだつた。お辰は段々元のお辰になつて來た。

お辰は朝誰よりも一番遲く起きた。夜誰よりも一番早く寐た。お辰は正しく坐る事をさへ知らぬ女だ。朝から晩まで、横坐りに坐つて、客がゐようが誰がゐようが、小楊枝で前齒を突つ突きながら、新聞許り讀んでゐた。

お辰は又誰よりも湯が長かつた。そして湯から上ると、いつも白粉をべたべたと附けた。醜い顏は下手に飾られて尚醜くなつた。

お辰は昔から金棒引であつたが、今度家へ來てから、更にそれが激しくなつた。お辰はどう言ふ手

段でか、忽ち町内に幾多の知り合ひを作つた。かの女はそれを一軒々々尋ねて步いて、やれ何處とかの奥樣の庇は出過ぎてゐるの、やれ何處とかの旦那樣の髭は贅カラだのと讒訴をして步いた。

俺はお辰がどんな風をしようと、どんな行狀だらうと、一口も干涉しなかつた。俺はお辰が恐いから默つてゐたのではない。一言でもお辰に口を利くのが厭だから、默つてゐたのだ。

お辰は益々增長して來た。自分の用を俺の母にさせる。俺の妹を自分のお供のやうにして連れて出る。貴族的な俺の家庭はこの醜い女の爲に甚だしい侮辱を受けた。

それでも俺は默つて見てゐた。決して女が怖いからでも恐ろしいからでもない。俺は女に口を利くのが厭だつたのだ。

母は俺に「お前が言はなければ駄目だ。」と言ふ。俺は又「言つたつて無駄だ。」と言ふ。こんな事で時々俺と母との間に小衝突があつた。

憎むべき女だ。毒汁のやうな女だ。

手記の八。

誘惑が來た。恐ろしい誘惑が來た。自然律を覆へすやうな矛盾した誘惑が來た。

俺に對する誘惑のシムボルは、俺の最も嫌つてゐる、俺の最も憎んでゐる女に、血と肉を借りよう

としてゐる。

打算。

これが又誘惑の火に油を注いだ。「あんな女の爲に俺は大分の金を費した。俺は自分の罪に對して當然拂ふべき科税以上の金を使つた。

向うが罪の償ひを求めたやうに、こつちも金の償ひを要求しなければならぬ……

手記の九。

俺はたうとう運命の手に玩ばれて了つた。俺の意志も、俺の感情も、俺の智識も、運命といふ暗闘の中へ吸ひ込まれて了つた。

矛盾とは何ぞや。卽ち「俺」である。

俺にはもう苦痛もない。煩悶もない。唯、「不思議」がある許りだ。

俺は頭に描いても戰慄するやうな事を、眼も塞がずに平氣でしてゐるのだ。

歷史は繰返す——罪は繰返す。

俺の生活は、見むと欲せざる者を見、聞かむと欲せざる者を聞き、食はむと欲せざる者を食つてゐるのだ。

醜いと思ふと同時に美しいと思ふ事が出來るのは今の俺の頭腦だ。

俺は今不愉快極まる事を笑ひながらしてゐるのだ。厭で厭で堪まらぬものを喜んで食べてゐるのだ。

俺は矛盾の具體化だ。矛盾の具體化は俺だ。

手記の十。

お辰は益々暴威を振ひ始めた。

俺の妹は屢々お辰に打たれた。

俺の母は或時お辰に足蹴にされた。

俺の家には日毎に爭鬪があつた。

併し、俺はやつぱり默つてゐる。いつまでも默つてゐる。俺は何を聞いても何を見ても、口を縫はれた人のやうに默つてゐた。

女は勝ち誇つて、家中大手を振つて歩いた。

手記の十一。

たうとうお辰と俺との事が新聞へ出た。

新聞屋は大きな聲で、その新聞を賣つて歩いた。俺は新聞を買ひ占めた。外の新聞屋が又大きな聲で賣りに來た。俺は又それを買ひ占めた。

俺は可なりな金を懐にして家を飛び出した。そしてお辰の兄の所へ助けを乞ひに行つた。

手記の十二。

逃げようとする手頸に、鎖は益々喰ひ込む……

（この跡拗切れて無し。）

堀田の話

私のよく知つてる新俳優の候補生に堀田靜といふ男があります。これが未だ役者にならぬ前の話だと言つてこなひだ話した話が、如何にも面白いと思ひましたから、今日は一つそのお話をいたしませう……話は面白いんですが、辯が下手ですから、どうか『言外の意味』とかいふものを十分お汲み取り下さいまし……と言つて、決してこの話の中から、へち嚴しい道德律を引き出せの、教訓を探し出せのと言ふのではありません――唯よく世間で一概に亂暴な話だとか、暢氣な話だとか、滑稽な話だとか言つて、「アハハ」と笑つて濟ましてしまふやうな話でも、一皮奧へ探り入つて考へて見ると、亂暴とはまるで反對な、暢氣とはまるで反對な、滑稽とはまるで反對な意味が伏在してるものだと言ふだけのことです……大層前置が長くなりました。

この堀田といふ男は橫須賀の人間です。御存じの通りあすこは軍港のことであり、土地の極狹い所ですから、隨分ごたごたしてをりますが――『船の者』と『地の者』――住んでる人種は先づこの二種類に大別が出來るんださうです。『船の者』は勿論船員のことで、この方の人は始終出たりはひつた

り忙しい生涯を送つてをります。

『地の者』は即ち横須賀根生ひの人間で、これが又盛にみんな働くんださうです。先づ子供などでも學校へ遣らなければ造船所へ遣るといつた風で、ただ遊ばして置くやうなことは決して致しません――内の人も外から來た人も一人として遊んでる人はないのです。みんなあの狹い港の中であつちへ揉まれこつちへ揉まれして働いてゐるのです……

その活動してゐる港町の中に若い道樂者の一團隊がありました。學校へも行かず、造船所へも行かずに、朝から晩まで遊んで歩いて居るといふ連中です。勿論あゝいふ土地の事ですから、寄席や芝居がありましたところで、氣の利いたものは滅多にかかりは致しません。ですから、この連中は「寄席でもねえ。」「芝居でもねえ。」で、多く稽古所ばひりをしたものださうです――そして怪しげな歌澤の一節でも唸つて大に粹がつてゐたといふものです……

堀田はこの連中の一人でした――なんでも當時十八か九だと聞きました。

堀田などはその仲間の内でも生意氣な方で、凡そ横須賀中で知らない人はないといふ位に顏の廣かつたものださうです。寄席藝人は勿論、踊や唄の師匠、職工から遊び人、さうかと思ふと友達の家の二階に下宿をしてゐる海軍の將校ともつきあふといふ風ですから、飛白の着物を着て小倉の袴を穿いてるかと思ふと、半纏着の尻つこけ帶で歩いてる事もあるといふ始末です。餘り風態の變化が激しい

ので、なんでも一時探偵に跟けられたことがあるさうです。するとその探偵とすぐ懇意になつてしまつて、その明くる日はもう探偵の家へ遊びに出かけるといつた風です――先達今堀田の出てる東京の或芝居へその探偵の弟の船員をしてる人が見物に來て、樂屋へ使ひものなどをしてくれたとかいひます――なんしろ、まあ、訣の分からない滅茶苦茶な男だつた のですねえ……自分でも さう言つてゐました。

その時分この堀田の連中が、よく「柏木田へ行く。」「柏木田へ行く。」といふ事を申したものださうです――柏木田といふのは、あすこの遊廓のあるところです。十七軒しかない小さなところなんださうですが、堀田の連中にとつては、そこがこよない極樂でも天國でもあつたのです。

堀田も金があると云ふ程の身分でも無かつたのですが、根が臆面無しですから、人に御馳走で連れて行かれても、決してぴよこぴよこなどはしないで、寧ろ尊大に構へてると云ふ風でしたから、どこへ行つても、好いとこの息子さんだらう位には思はれたものださうです――それに堀田の姉が藝者をしてたものですから、姉に勸めて姉の旦那を引つぱり出さしたりなどして、それに自分の兄貴と自分とが附いてつて、構はず大騷ぎを遣るといふやうな事が度々有つたんで、すつかり顏が好くなつてしまつたんです。

なんでも堀田の買つてた女とかいふのは、その當時もう三十位だつたとか言ひます――堀田は十八

か九ですよ――お職を張り通して居て、隨分金持な女だつたさうです。で、よく勘定が足りなくなると、堀田は女から金を借りたものださうです。けれども次に行く時は前に借りただけはきつと持つてつて返して來る、そして又新しく借りて來る、又それを返しに行つて又新しい借りを拵へて來るといふ風でしたから、割合に厭がられもせず、だんだんに近しくなつて參りました。

その內に女は躰が惡くなつて、入院をしました――なんでも一タ月ばかり入つて居たとか言ひます。すると、堀田のお袋が堀田に向つて、「始終行つて世話になつてゐながら、斯んな時に見舞に行つてやらない法はない。」ツて、五十錢銀貨を一つくれましたさうです。

堀田は早速見舞に出掛けました。女に會つて、さて訣を話して見舞金を出しますと、女は大層喜びましたが、「お志だけで澤山、お金は入りません。」と言つたさうです。すると堀田は「ぢやあ俺が貰つとくよ。」と言つて、お袋の志をお袋に內密で着服してしまひました――無論女には貰つたつもりにしといて貰つて。

それから色々話をして、さて歸る時に、女の枕元に手もつけずに置いてあつた見舞物の西洋菓子を一箱貰つて來たものださうです――見舞物を持つてつた奴がそれを置かずに、人の見舞物を貰つて歸つて來たんです――何でもゴム見たいな菓子だと言つて居ました、多分バナナかマシマロだつたんで

せう。

暫くすると、女は病氣が癒つて退院致しました。退院すると、堀田の家へ先達のお禮と云ふのでお赤飯を屆けてよこしたさうです。堀田のお袋は「感心な人だ。」と言つて、大層喜んださうですが、堀田は良心の呵責も受けず、平氣な顏をして、大きな茶碗に六杯とそれを喰べたさうです。

年が明けて、貯めたお金を持つて、女が廓を出て來たのは、それから間もなくだつたと言ひます。出て來ますと、女は直ぐ堀田の家を訪ねたものです。そして堀田のお袋に會つて、「どうか嫁にしてくれ。」と賴んださうです。けれども堀田には勿論それ程までの考はなかつたことだし、お袋は又年が餘り違ふからといふので、斷つてしまひました――尤も堀田の話に依ると、「べらんめえ、歲が違つたつて夫婦になれねえ訣があるもんか。」位なことは、確に言つたことがあるのです。女はそれを信じて來たのですねえ。

併し、然ういつた正直な女ですから、斷られても別に怒りはせずに、「御緣がないんでございませう、致し方がございません。」て、笑つて歸つたさうです。

女はそれから自分の田舍へ歸りました。

その女がゐなくなつてからも、堀田は相變らず柏木田へ出かけたさうです。そして前の女の妹女郎を買つてゐたさうですが、これが又ぢきに引かされて、ゐなくなつてしまひました。

それで暫くその家へ行かずにゐる内に、その家の直ぐ前の家へ行くやうになりました。

この第二の家でも堀田は餘程好いとこの息子と思はれたさうです。始めて上つた時は例の姉さんのお供でしたが、なにしろ姉を姉とも思はず、姉の旦那を旦那とも思はぬ奴ですから、側から見て居ると、なんのことはない、堀田が旦那で堀田が藝者や取卷を連れて來てゐるやうに見えたと言ひますからねえ。

二度目に行つた時は、友達大勢と一緒だつたさうですが、明くる朝になつて勘定が足りないんです。友達はみんな歸つてしまつて、堀田一人居殘りといふことになりました。

ところが、その日の晩になつても、誰も來てくれません。已むを得ず、もう一晩泊つて、その明くる朝になりましたが、やつぱり誰も來て呉れません――もう半分自棄になつて、天どんを食つちやあ寢、天どんを食つちやあ寢してゐたさうです。

ところが、その三日目の晩に、自分の寢てた隣の部屋で、大層全盛遊びをしてる奴があります。客の聲は聞こえませんが、どうも連れて來てる藝者や何かの聲に聞き覺えのあるやうな氣がします。「癪な奴だ。どこの野郎だらう。」といふやうな訣で、堀田がそつと襖の間から覗いて見ると、馬鹿馬鹿しいぢやありませんか、それが堀田の待ちに待つてる友達だと言ふんです――來てるながら知らん顏をして騷いでゐたんですねえ。そこで「この野郎。」といふやうなことを言つて、そこへ飛び込んで、又

どんちやん騷ぎになつたとか言ひます――さういふ風でしたから、「この人は金がなくともほんとにないんぢやない。」といふ風に、すつかり信用されてしまつたのです――飛んだ信用をされたものぢやありませんか。

ところが、この時この第二の家で堀田の買つてた女は、實は自分の友達が而も自分と一座で以前に買つたことのある女なんださうです。その友達は一度ぎりでぱつたり來なくなつてしまつたんだし、その時自分の買つた女は自分も覺えてない位だから向うでももう忘れてるだらう位な考へで、その友達のを自分のにしてしまつたんださうです――さ、それが今の騷ぎでせう、前の女にすつかり見つかつてしまひました。

或晩堀田がその第二の家の格子先へ立つと、その二人の女が兩方から烟管を持つて來たと言ひます。これには流石の堀田も閉口して、頭を抱へて押し上がり、兩方の女に玉をつけて、綺麗にこれからは後の女――つまり友達の女――といふことになりました。

こんな餘計な散財をしたので、堀田は始めてその晩その女から金を借りました。女は堀田を金持だと思つて居ますから、喜んで貸してくれました。

すると、そのことを前の女が知つて、明くる日後の女に逢つた時に「ゆんべは御散財でしたねえ。」と厭みを言つたものださうです。そこで後の女がむつとして、一日怒り通しに怒つてゐるところへ、

その晩堀田が借りた金を返しに參りました。

言はば巧い壺に塡つたので……これから女はすつかり熱くなつてしまひました。

それからといふもの、堀田は隨分女から金をとつたさうです。終には女も怒つてしまつて、態と堀田に馬を引かせるやうなことをしたさうです。然うなると、堀田の方も妙に反抗心を起して、金があつても馬を連れて出て、そして外で拂ふといふやうな事をしたものださうです――それでも何の彼のと女はやつぱり金を出してゐたのです。

ところが、この女の客で、或商船の船長が一人ありました。船が著いて、この船長が遣つて來ると、この女はもう一切他の客へは出ないことになつてゐました――その代り船長も金は隨分使つたさうです。

堀田はいつでもこの船長が歸つた後を狙つて行つては、女に金を出させたものださうです――ところが或時――もう餘程女を苦しめ拔いた時分です――又いつもの傳を遣つたところが、生憎その時に限つて船長は金を置いて行かなかつたといふので、どうにもならず、大失敗を遣つたとか言ひます。

その頃堀田はふと往來で、以前の第一の家にゐた女に會ひました。女は田舍から又出て來たのださうです。併し、

「相變らずだつてねえ。」

「なあに、その……」

といふ位な極簡單な挨拶で別れてしまつたさうです――間もなくこの女が又第一の家へ出ました。

堀田はそれでも第一の家へ行く氣にもならず、相變らず第二の家の女を苦しめてをりました。

或時、堀田が又「貸してくれ。」を遣りますと、そんなに虐められてゐながら、それでも女は自分の拴から妹女郎の扱帶まで質に置いてしまつて、「今夜持つて來れくれないと、もう店が張れないんだから頼むよ。」と呉々も言つて貸してくれたさうです。

堀田はさすがに氣の毒になつて、その日の夕方早速金を拵へて出かけたものださうです。ところが、これが例に依つて一杯機嫌か何かで出かけたんだから堪りません。計らず第一の家の直ぐ側を通りますとその又出たといふ以前の女が、大きな聲で「薄情だねえ。」とか何とか格子の中から叫つたものださうです。すると堀田はもう第二の家の方のことなんかはすつかり忘れてしまつて、「何言つてやがるんでえ。」などと言ひながら、その第一の家へ押し上がつてしまひました。

ところがもう第二の家でさんざ悪いことをしてるのが、第一の家へも知れてゐますから、さう優遇もされません。その一晩は眞につまらない思をして、入用な金を使つてしまつたさうです。

それやこれやで、もう土地にもゐられなくなつて、たうとう堀田は田舍廻りの書生役者の一座へ飛び込んで、諸所方々と流浪して歩くことになりました。

諸所方々と歩いた揚句、堀田の出て居る一座が又横須賀へ歸ることになりました。もう時も二年も立ちましたし、元々臆面のない男の事ですから、堀田は平氣で故鄕の芝居の舞臺を踏んだものださうです。

その時の芝居は、堀田も外題を忘れたと言つてゐましたが、なんでも北海道を舞臺にした芝居で、或年寄の易者が先生の娘を養つてると、そこへ金貸が催促に來て大層年寄を苦しめる。すると易者の隣家に住んでる相撲が出て來て金貸をとつて投げるといふやうなとこのある芝居ださうです――堀田はその相撲を扮つて居たのです。

或晩のこと、堀田はいつもの通り相撲で出て、因業な金貸を「やつ。」と投げて、きつと見えをしながら、ふと土間を見ると、自分の直ぐ目の下に色の眞つ黒な女が、目を光らして、一心に堀田の顏を見てゐました――それが又、大勢の客の中でも際立つて黑い顏をした女で、それが目を光らして一生懸命に見てゐるといふのですから、唯さへ好い氣味な筈はありませんのに……堀田は更に驚いた事があるのです。

この色の黑い女は堀田が柏木田へ行く時分、第一の家で買つた女でした――病氣見舞に行つて菓子を貰つて來た――嫁にしてくれと話のあつた――田舍へ行つた――それから又元の商賣になつた――あの女でした。

堀田はこの女に對しても、第二の女に對してと同樣、隨分酷いことがしてあつたさうです。
堀田はその黑い顏の、光つた眼で、ぢつと顏を見られた時は、實際慄へたさうです。
「この薄情野郎め。」か何かで、舞臺へ女が飛上つたといふやうなことはよくある話なんですから、堀田はもう氣も漫になつてしまつて、立廻りの手は間違へる、臺詞はとつちる、散々な舞臺をして、樂屋へ駈け込んだかと思ふと、靑くなつてぶつ倒れたさうです……なんでも色々後で調べて見ると、その後水夫に引かされて、それと暫く一緒になつてゐたのですが、その水夫が大の飮んだくれで、自分の持つてつた物はすつかりこれに飮まれてしまひ、結局別れ話になつたんださうで、もう田舍から取寄せる貯蓄もなし、今では土方の女房になつてるんださうです。その土方が又病身なんで、色々と糊口に困つた結果、たうとう女は『よいとまけ』になつてしまつたのです――その日はその『よいとまけ』が、月一回の骨休めに芝居見物に來てゐた訣なのです。
堀田はどうかして歸りに會ひたくないもんだと思ひまして、すつかり客の歸つてしまつた時分を見計らつて、樂屋口を出ると、路端にさつきの黑い女が立つて待つてゐて、
「役者になつたんだね……好いねえ……なんかお奢んな。」
と卑しげな口調で言つたさうです。堀田はぞつとして、
「今日はその……又今度……」

と曖昧なことを言つて、たうとう逃げてしまつたさうですが……

それつきり堀田は又この女のことを忘れてしまつてゐたさうです。

ところが或夏の夕方、堀田が潮染か何かの浴衣を著て、高慢な顏をして、錢湯から出て來た藝者に得意で話をしながら、芝居の方へぞろりぞろり遣つて來ますと、向うから、汚い手拭を姉さん冠りにして、尻を端折つて、脚絆に手甲をした、色の眞黑けな女が、大きな辨當箱を小脇に抱へて遣つて來たさうです……と見ると、それが例の女です――昔馴染みです。

堀田が路を避ける暇もなく、女はどんどん近寄つて來て、堀田の前へ立ち塞つたかと思ふと、

「今出かけんの。」

と一種異樣な目つきをしながら馴々しく詞をかけたさうです――この時ばかりは流石の堀田も頭から水をぶつかけられたやうにぞつとしたと言ひます。

「私はその時、ほんとの、あの悔悟とか後悔とかいふことをしたのですねえ。」と堀田は笑ひながら言ひましたつけ。

けれども、それは侍になつたものではありません――堀田は今でも大して異つた生涯はしてをりません。相變らず亂暴な暢氣な滑稽な生涯を送つてゐるのです。

お話はこれだけなんです――あんまり面白い話でもありませんでしたねえ……

逸話

新派の乙部俳優堀田ほど逸話に富んだ男はない。去年の正月も私は何かの雜誌にこの男の事を書いた。今年の正月も亦この男の話を書く事になつた。

これはつひ去年の夏から秋へかけてあつた事だ。

堀田が自分の先生の一座に附いて大阪へ行つたのは正月だつた。それから三四囘打つて、花々しく東京へ歸つて來た時は、もう若葉が薄綠に烟る頃だつた。

「どうだい、久しぶりでデン〳〵を淩ひに行かうぢやないか。」

「好からう。何處か近くにあるだらうから、訊いてそこへ行かうぢやないか。」

「好からう、好からう。」

久しぶりで東京で『金色夜叉』をやる事になつたその稽古場で、堀田とその友達の間に斯ういふ議が起つた。

その晩、堀田は川崎といふ同じ乙部俳優と山村といふ『同じく』と一緒に、新富町の或路次の奥にゐる玉榮といふ女義太夫の家を訪ねた。

三人は案内もなく格子戶を開けて、挨拶もせずに內へ押上つた。

後向で稽古をしてゐる女の師匠の姿を見て、堀田は國にゐた頃の幼馴染を思ひ出した。

「やア、然うか。やッぱり君だつたのか。」

「まア。この頃はどちら。」

「東京。」

「それは分つてゐますわ。」

「壯士役者。」

「へえ、あなたが。やッぱり新富の。」

「然う。これはみんなお友達。」

「でも結構ですわね。」

義太夫の師匠は果して堀田の思ひ出した人だつた。

堀田はその頃本願寺前の床屋の二階に下宿をしてゐた。その二階は五疊半といふ面白い形をした部屋で、こゝに堀田は木村といふ貧乏な學生と、權ちゃんといふ文選の職工と、三人で同宿してゐた。

木村と權ちやんとは大抵毎日晝間は留守だ。堀田は仕出し屋から安辨當をとつて、僅に飢を凌いでゐた。

或朝、堀田が錢湯へ行つて、湯の中で顏を洗つてると、近所の葉茶屋の息子とブリキ屋の職人とが頻に『新富町の玉榮さん』の噂をしてゐる。

「まだ新富町にゐますかい。」

「いえ、もう遠に越しちまツたんですが、つい口癖で、新富町が出るんですよ。」

「へえ、越しましたかい、何處へね。」

「入舟町に鳥辰つて鳥屋があるのを知つてますかい。」

「ええ。」

「あすこの隣の烟草屋の二階でさァ。」

「へえ、あの烟草屋の二階へね。」

堀田は何となく玉榮が戀しくなつた。

その日、稽古が濟む時分には、もう日が暮れかゝつてゐた。

堀田は川崎を誘つて、二人で入舟町の烟草屋の二階を訪ねた。玉榮は恰ど席へ出かける支度をして

ゐた。

「今夜は何處と何處だい。」

「本所と千住ですの。」

「どうだい、一つ拔いたら。」

「然うねえ。」

「本所を拔いちまへ。」

「ええ、もう末だから拔きませう。」

「よし、そんなら二人で千住まで行つて遣らう。」

二人は電車に乘つた。

千住の終點を降りると、堀田と川崎はもう直ぐだらうと思つた。所が女はいつまでも歩いて行く。

「おい、まだかい。」

「もうぢきですよ。」

女郎屋の外れまで來た。女はまだどん〳〵歩いて行く。

「おい、まだ餘ッ程あるのかい。」

「いゝえ、もう直ぐですよ。」

何といふ橋だか知らぬが、長い橋を渡つた。橋を渡ると乘合馬車がゐた。二人は女に勸められてこれに乘つた。

「恐ろしく遠いんだね。」

「いえ、もうそこなの。」

馬車の中で、同じ寄席へ出る眞打の女義太夫に會つた。只見ると驚いた。この女は福永といふ同じ新派の役者の細君で、堀田の舊知だつた。堀田は妙な氣がした。

間もなく寄席のある所へ來た。

玉榮はモクレを語つてゐたが、二人はこれを聽いて了ふと、玉榮と一緒に寄席を出た。

堀田も川崎も金が無かつた。玉榮に何か御馳走をしたいと思つたが、どうも爲方がないから、雷門で電車を降りると、並木の山吹うどんへ這入つて、三人でうどんを喰べた。

入舟町の烟草屋の二階まで送つて行くと、玉榮は隣の鳥辰から鳥をとつて呉れた。三人で馬鹿話をしながら鳥を喰べてゐると、次の席割の事で五厘が來た。五厘が歸ると雨が降つて來た。

二人は玉榮に勸められてこの二階に泊る事になつた。所が堀田も寢られない、川崎も寢られない。二人でもぢ〳〵してゐる内に、近所に火事が始まつたんで、とう〳〵皆起きて了つた。それからもう朝まで寢なかつた。

堀田と川崎は朝飯を御馳走になつて、玉榮の宿から稽古場へ行つた。二人は山村にその話をした。
「ふうん、そいつあ面白かつたな。」
「面白かつたよ。」
「時に堀田、御前あの女を貰つたらどうだい。」
「然うよなァ。俺も一人で實は不自由なんだ。」
「貰へ、貰へ。貰つた方が好いなァ、山村。」
山村も同意した。
「俺も實は内々思召があつたんだが、然ういふ事なら宜しい。俺は諦める。そして俺が談判に行つてやる。」
その晩、山村は玉榮の所へ談判に行つた。
烟草屋の二階へ上ると、二人の男が菓子折か何か持つて遣つて來てゐた。所謂『張り』に來てゐたのだ。
山村は『邪魔な奴がゐる。』と思つた。『どうして返して吳れよう。』と思つた。そして偶と何處かの

席で聞いた小さんの『睨み返へし』といふ話を思ひ出した。

山村は一言も口を利かずに、烟管で烟草をスパ〳〵遣りながら、上眼遣ひをして二人を睨んでゐた――總て小さんの型通りだつた。

二人は氣味が惡くなつたか、ぢきに歸つて了つた。

山村の談判は大分うまく運んだ。「兎に角、一應當人にも會つて。」といふので、山村は女を連れて烟草屋を出た。

山村は眼が惡い。本願寺邊を隨分探して歩いたが、堀田の宿はとう〳〵見つからなかつた。女は空しく烟草屋の二階へ歸つた。

明くる朝、山村は又烟草屋を訪問して、女を連れて出た。

今度は明るいので、堀田の宿は直ぐと分つた。併し堀田は留守だつた――堀田は山村の返事が待ち切れないで、行き違ひに自分で烟草屋を訪ねたのだつた。

女は又空しく烟草屋へ歸つた。

その日も稽古があつた。稽古場で山村は堀田に會つた。行き違ひの話も分つた。

「大分話は好ささうなんだから、今夜自分で行つて極めて來いよ。」
「自分でか。」
「然うよ。心配するない、もう大丈夫なんだから。」
「ぢやア、まア、行つて見ようか。」

その晩、堀田は自身で出かけた。併し、どうも話が出來ない。とう〳〵出來ず了ひに歸る事になつた。女は堀田を送つて出た。二人は暗い居留地から海岸の方をぶら〳〵歩いた。ぶら〳〵歩いてる内に、又入舟町の烟草屋の前へ出て了つた。堀田は女に勸められて、又二階へ上つた。世間話をしてゐる内にすつかり夜が更けて了つた。堀田は何といふ事なしに、その晩そこへ泊つて了つた。

それから堀田はもう床屋へ歸らなかつた。

やがて芝居が開いた。

併し、堀田はどうかして女に芝居を見せまいとした。芝の公園へ仕出しの兵隊で出るきりでは、如何な女でも愛想をつかさうと思つたからだ。

堀田は女に自分の映つてゐる活動寫眞を見せて歩いた。活動寫眞では堀田も『己が罪』の櫻戸子爵『不如歸』の千々岩位はしてゐるのだ。

女は堀田の立派になるのに驚いた。

堀田が來てから、玉榮を訪ねて來る男客は工合が惡くなつた。折角女の愛くるしい顏を見ても、長火鉢の向うにいつも横柄な顏をした生若い男がゐるので、厭な顏をして匆々に歸つて行く。

或日或小新聞の記者が玉榮を訪ねて來た。これはいつぞや女義太夫の投票に大層骨を折つた人だ。記者は堀田のゐるのを見て、不思議な顏をした。

「あれは。」

「内の旦那です。」

玉榮は平氣で答へた。これが禍の種となつて、一日二日經つと、その新聞に、『近頃玉榮のゐる入舟町の烟草屋の二階には、毎度淺草の活動寫眞で御紹介に預る堀田某といふ壯俳が御亭氣取りでゐる。』といふ記事が出た。

その後に、芝の方の席で研究會があつた時、玉榮はトリを語つてゐた。或晩、堀田がこれを聞きに行つてゐると、こなひだの新聞記者が來てゐた。

記者が樂屋へ這入つて行つて、玉榮に「來てるね。」と言つたら、「來てますよ。」と玉榮は平氣で答へた。

これが又その新聞へ出た。

この前の新聞とこの新聞とを一緒にして、玉榮の國へ送つた者があつた。

間もなく玉榮は横濱で十五日語る事になつた。

玉榮は横濱へ行く前に一寸國へ寄つた所が、國の母は新聞を突きつけて、もう何處へも出さぬと言ひだした。それを五厘が來て、無理に連れて行つた。

濱が濟むと、玉榮は又一寸國へ歸つた。すると又母はもう何處へも出さぬと言ひ出した。又五厘が來て更に十五日濱で遣らせるのだからと言つて、又無理に連れて行つた。

堀田は烟草屋の二階で寂しく留守居をしてゐた。その頃は芝居ももう無かつた。時々活動の役者になつて、小遣錢をとつてゐた。

或日、横濱の友人が訪ねて來た。

「こなひだ寄席へ行つて、玉榮さんに會つたんだ。もうぢき歸るつて言つてたぜ。」

堀田は樂しみにして待つてゐた。

三四日すると玉榮の姉妹弟子が濱から歸つて來た。

「堀田さん、玉榮さんは可哀さうよ。語つて下りると、國の阿母さんが下で待つてゐて、直ぐ連れて歸つて行つて了つたわ。祖父さんが病氣だつていふんだけれど、どうだかねえ。」

堀田は心配しながら、どうする事も出來ないので、やッぱり默つて寂しく留守居をしてゐた。

玉榮から手紙が來た、「連れて行かれて酷い目にあつてる。」と書いてある。

又手紙が來た。「若し國から誰か行つても品物を渡して下さるな。せめては寄席の物だけでも渡して下さるな。」と書いてある。

堀田は一人で餘り寂しいから、以前床屋の二階で一緒にゐた學生の木村を烟草屋の二階へ迎へた。

その頃、堀田は本郷へ出てゐた。本郷へ出てゐる留守は、恰ど夕方學校から歸つて來る木村が守る事になつてゐた。

木村は無口だ、ぼおッとした大男だ。その頃、耳の腫物を切開した後で、耳から頭へかけてぐる〳〵卷に繃帶をしてゐた。木村は色が黑いから、恰ど印度人のやうに見えた。

この木村が燻ぶつたラムプの前に胡坐をかいて、或晩立體幾何の教科書を讀んでゐた。すると、すうッと障子が開いたかと思ふと、六十位の髯だらけな爺さんが默つて顏を出した。木村は不氣味だつたが、譯が分らないから默つて爺さんの顏を見てゐた。すると爺さんの方でも木村の顏を見てゐたが、やがて「や、こりや座敷が違うたか。」と四國辯のやうな上方辯のやうな妙な調子で言つて、すまして障子をしめて、下へ降りて行つた。

木村は笑つて、床を敷いて寢た。

明くる朝、木村が學校へ行つて了つた後で、堀田が一人で寢てゐると、玉榮と同じ苗字の老人が荷物を取りに來た。

烟草屋では玉榮が下宿する時口入をした人を連れて來なければ駄目だと言つた。

堀田が火を起して、湯を沸して、飯を食はうとしてゐると、先刻の老人が口入の人を連れて、又遣つて來た。

そして、堀田がゐるのに、挨拶もなく、そこらの荷物を片づけ始めた。

「おい、おい、何をするんだ。」

「玉榮の荷物を片づけるんぢや。」

「それならそれで好いが、何とか一言挨拶位したら好からう。」
「挨拶する必要はない。」
老人は堀田の物まで片づけ始めた。
「おい。おい、そりや俺んだ。ふざけぢやない。」
「貴樣のものか知らんが、一應は片づけて行くんぢや。」
「ひどい奴だ。まァ、何でも好いから俺の不自由しないやうに片づけてつて呉れ。」
堀田の物は大抵女に買つて貰つたものだつた。それに、「今にどうせ叉歸つて來るんだから。」と思つてゐたから、餘り強い事も言はなかつた。
老人は酷い持つてきやうをした。茶呑茶碗から箸まで片づけた。それでも堀田は樂觀してゐた。「何しろ女は惚れてるんだから大丈夫だ。今に五厘の方から寄席の道具は來るし、あれさへ渡さなければ何でも出來るんだ。」
堀田は老人の歸るのを、店まで送つて出た。
二三日經つと、玉榮から手紙が來て、「頭の物や半襟を送つて下さい。」と言つて來た。
送らずにゐると、口入の人が取りに來た。堀田は、「ぢやァ、俺の方の物はどうして呉れるんだ。」と訊いた。「その方の事は何とも御話がありませんでした。」とばかりで、口入の人は自分の言ひつかつ

た丈の物を取つて、さッさと歸つて行つた。

いつまで經つても、寄席の方から道具が來ないので、堀田は少し心配になつて、五厘の所へ訊きに行くと、「もうあちらから手紙が參つたんで、すッかり送つて了ひました。」と言ふ。

その後玉榮からぱッたり便りが無くなつて了つた。

堀田は神經衰弱になつて、大な身體を持て扱つた。そして、木村を捕へては愚痴をこぼした。

間もなく男二人で本鄕元町の裏長屋に世帶を持つた。稼ぎ人に別れた堀田は甚い財政困難になつた。

それでもまだ堀田は、「どうも歸つて來さうな氣がする。」と言つてをる。

平氣

夏から秋になつたばかりの、寒い雨の降る晩。

新派の下廻り宮島綾夫は、汚なびた浴衣の上へ衣裳で借りた縕袍を着、お茶屋の家號の大きく書いてある番傘を擔いで、吉原へ素見に出掛けた——宮島は公園の宮戸座へ出て居た。宮戸座は其頃新派で打つて居た。

素より懷中に一文も錢があるではない——何處へ上りたいと云ふ目的があるでもない——芝居が被つてから汚い下宿へ歸つて寐る迄の、仕樣事なしの散歩である——宮島は寒い雨の降る吉原の、路と云ふ路を悉く歩いた。

最う歸らうと思つて、只ある狹い路次を歩いて居ると、

「おい〳〵。」

と呼び留める者がある。宮島は友達か何かだらうと思つて振返つて見ると、格子の中から女が手招ぎをして居た。

「おい〳〵。」とは驚いた、妙な女もあればあるものだと思ひながら、好奇心から宮島は、格子の傍へ歩み寄つた。

「御前俳優かい？」

御前！……宮島は更に驚いた。此奴餘ッ程強い奴だ、うッかりしてると負けるぞ、と思つたから、此方も一生懸命に強くなつて、

「惡いかい！」

「別に惡かないけども、一寸訊きたい事があるからさ。」

女の口調は少し柔和しくなつた。

そこで宮島も、

「何だい？」

と柔和しく言ふと、女は又元の樣な強い口の利きやうをして、

「御前宮戸かい？」

「あゝ。」

「秋村ッて俳優を取持つて呉れないか。」

「氣に入つたかい。」

「馬鹿に氣に入つたね。」

秋村は座長の次席に居る宮島の先生筋である――この時の狂言『江戸房』の池の端の場で、宮島が車夫になつて曳いて出る人力車の上に、秋村は書生になつて、乘つて出るのだ。

秋村とは大膽な者を狙つた――しかも座中で『仙人』と云はれて居る程の變り者だから――迚も駄目だとは思つたが、宮島も慾の無い男ではないから、

「そりや取持つても好いが、取持つたら俺にも女を當てがツて吳れるだらうね。」

と言ふと、

「モチでげさア。」

と女は言つた。モチとは勿論の意である。迚も女の口の利きやうではない。

その翌日宮島は秋村を說いた。けれども秋村は笑つて答へない。

またその翌日說いて見た。矢張ニヤ〳〵笑つて居るばかりだ。

五六日續けて說いたが、秋村はいつも笑つて居るばかりで、決して『行かう！』と云ふ事を言はぬ。

宮島は失望して、最う言ふのを止めて了つた。

その內に自分も其事を悉皆忘れて了つた。

處がそれから十日許り經つた或晩。

宮島は如何にかした拍子で、計らず又その小格子（こがうし）の前を通つた。

「おい〳〵。」

宮島が振返ると、例の女が又格子の處へ出て居た。惡い處を通つたもんだ、とは思つたが、もう逃げるにも逃げられないから、傍へ寄つて、

「え？」

と何氣ない樣子で言ふと、

「御前、約束は？」

「あれは變り者だから駄目だ。」

「ふうん……？」

と言つて、女は暫く考へて居たが、やがて、

「御前は宮戸で何をしてるね。」

「御前のなか惚れの書生を載せて出る車夫さ。」

「車夫と正直に言ふ所は嬉しいねえ……」

と言つて、又一寸默つて居たが、
「御前これから何處へ上るの。」
「何處へ上るッて……」
(宮島はこの晩少し金を有つて居た。)
「此家へお上りな。」
宮島はその唐突なのに、少し驚いて、
「だッて……相方は？」
「私が出らアね。」
宮島は吃驚した――苟にも自分の先生筋の人に惚れてる女だ！　その女を相手に……
「戲談言つちや不可ねえ。」
「構ふもんか。」
宮島は益〻驚いた――が、やがて氣を落着けて、
「ぢや相談してから、又來らァ。」
と言つて、格子を離れた。

「相談してから、又來らア。」と言つたのは、一時の間に合せだつた筈なんだが、何時の間にか宮島はほんとに相談する氣になつて居た。

秋村に話すと、秋村は、

「好いとも、好いとも、その代り俺に何か土産を貰つて來て呉れ。」

と笑つて言つた。

その翌晩宮島は――秋村に小遣を貰つて――早速出掛けた。

そして女から、秋村への贈物として正宗の小瓶を二本と敷島を五箱貰つて歸つて來た。

秋村は酒だけ自分の方へ取つて、煙草はみんな宮島に呉れた。

宮島はそれから二タ月許りこの女の處へ通ひ續けた。

やがて座蒲團が出來た、上草履が出來た――それ程の仲になつたが、宮島は一度地方へ出てから、ぱツたり消息をしなくなつて了つた。

その後東京へ歸つて來てからも、忘れたやうに斷然行かぬ……

旅役者

「去年の二月の事でした。」と、新派の俳優で當時都下の或一座に長たる藤山幸夫が話し出した。「正月の芝居が終つたので、千秋樂の翌日弟子共を三四人連れて成田へ參詣に參りました。

「兩國を出たのが何でも午後の三時か四時でしたから、先方へ着いた時は既う悉皆夜でした。提灯を點けて迎ひに來て吳れて居た行きつけの宿の若い者に案內されて直ぐと俥へ乘りました……

「丁度節分の混雜が濟んだ後でしたから、成田には珍らしく、宿も寂寞して居りました。晩飯を食べて、護摩は明朝の一番と云ふ事に賴みました……最う用はありません。

「さア今夜は何をして遊ばうと云ふ事になりました。御存じの通り私共の一派は至つて無藝の方ですから、一向に名案も浮びません。一同思案投首で居ますと、宿の若い者が這入つて參りまして『境內に田舍芝居が厶いますが御覽遊ばしては如何で。』と言ひます。そいつァ妙だ、直ぐ行きませう、狂言は何ですなと訊きますと、『今夜は蹙勝五郞で厶います。』有難いと云ふので直ぐ出掛けました。

「境內は眞闇でした。案內をする宿の若い者の提灯が一箇先の方でボツリと明るい限りでした。石段

を二つばかり登つて、まだ餘ッ程奥へ行きました。すると遠くの方に朦朧燈の點いてる大な建物があります。案内の若い者はその建物を指して、『あれが然うで厶います。』と申します。

「木戸は九錢と云ふ妙な勘定でした——尤も田舍はみんな然うですが、中へ這入ると觀客は豆を掴んで投げた程で、しかも土地の者の無料が多い様子です。私共は間狹の無い入込の土間の成るべく前の方へ陣取りました——こゝで又場代を幾らか取られたやうです。

「幕は丁度開いてる處でした。私は一體舊の方の知識が皆無ですし、當今餘り東京で演らぬ狂言でもありますから、行きなり飛び込んで行きなり觀た時は、何が何やら薩張解りませんでした。何でも路しるべの杭の立つた藪疊のある街道で、髮の亂れた躄勝五郎を箱車に載せて、その傍に初花が坐つて居ると、又その傍に奴見たいなもの——筆助とか云ひました——が居て、何だか言つて居りました。

「役者は一人として眞面目に演つてる者はありません。御互に話をしたり笑つたりしながら大投げに投げて演つて居るのです。誰だか一人臺詞を誤ちた時などは舞臺の上の人達が一齊に聲を上げて笑ふぢやありませんか。

「無論嬉しくて笑ふのぢやありません。もう半分自暴なのです。旅の芝居の『御難』は私共も多少經驗があります。知らぬ他國へ彷徨つて來て、客は來ず、知己は無し、小屋代を拂ふと一座の食ふ物にさへ差支へると云ふ苦痛——その苦痛を此一座も今嘗めて居るらしいのです。その苦痛を嘗めて居な

がら、笑はないでも好い處で笑つて居るのです……

「座頭は勝五郎を扮て居た役者です。名を中村駒藏とか申しました。初花を扮て居た役者は確に女役者です。頰の肥つた尻の大い名古屋訛でした。筆助は座頭に次での役者らしい樣子でした。顏の大な、眼の大な――しかもその一つが義眼ですから、眼を剝くと恐いの恐くないのッて……

「幕は直ぐと閉りました。

「すると弟子の中の吉村と云ふのが、『どうも見たやうだ見たやうだと思つて居ましたが、私はあの駒藏と云ふ役者を知つて居ますぜ。』と申します。『へえ？　それは不思議だ。』と云ふ譯で段々聞くと、子供の時東京で見た役者なのださうです。而もその當時は中々鳴らした役者ださうです――吉村は弟子の中でも一番年長者で舊の方にも中々通じて居るのです。

『『へえ？　そいつァ妙だ！　一つ樂屋訪問と出掛けようか。』と誰やらの發議に、眞逆知れる事もあるまいと思つて、私もつひ行つて見る氣になりました……

「幕を潜つて舞臺へ上ると、下手の御囃子の處から樂屋へ行けさうです。御囃子の處へ這入ると擂鉢に灰を入れて火がカンカン熾してありました。銅鑼の代りに石油の明鑵がぶら下げてありました。太鼓は子供の玩具のやうなのが置いてありました。御囃子――と云つても唯一人なのです――は火の傍に何か內職らしい事をして居ました。

「構はず奥へ這入つて行きますと、先刻の初花が鬘も脫らずに先刻の衣裳の儘で薄暗がりに一人立つて居ます。すると橫の暗闇から四歲位な汚い衣服を着た男の子が、チョコ〳〵と走けて出て來て、『母ちやん！』と言つて初花に縋りました……

「私は何だか氣の毒な感じがして、直ぐ大部屋らしい處へ行つて見ました。先刻出た役者は大抵此處に居ました。狹い部屋に多くの男や女が紛雜になつて居るのです。女は大抵子供を抱いてるか背負つてるかして居ました。部屋の周圍には衣裳や小道具が散らかり放題に散らかつて居ました。その臭い汚れた空氣の中に油の少ない釣ランプの光が朦朧赤く點いて居るのです。

「私共が覗き込みますと、旅の役者達も、チロ〳〵私共を見るのです――同情か、嘲弄か、と疑ふやうな眼つきをして……

「吉村は透かさず前へ出て、座頭の部屋を訊きました――義眼の筆助はそれでも深切に教へて吳れました。

「座頭の部屋は先刻共前を通つたのでしたが、眞逆斯んな處ではと思つて通り過ぎて了つたのです。這入つて見ますと四疊半位な部屋で、素より疊はありません――莚が敷いてあるのです。羽目は下足をぶら下げる細い板の古いので張つてありました――「いノ五」「はノ二」などと書いた古い紙が所々にまだ附いて居るのです。

「ビールの明箱の古いのを臥せた上に水銀の大きく剝がれた懷中鏡が一つ、石鹼の明箱の中にセメントのやうな色をした白粉、小さな汚い眉刷毛——部屋の財産は殆んどこれだけでした。こゝでも擂鉢に火を熾して居ました。
「その狹い中に人が一人汚い蒲團を着て臥て居るのです。座頭の駒藏はその枕元に呆然坐つて居ました。
「『御免下さいまし。』と言つて、私共は顏だけその狹い部屋に突込みました。流石は昔東京で鳴らした事もある人だけあつて、『これは〳〵斯樣な汚苦しい處へ……』と禮儀正しい挨拶でした。
「座頭は眞白に塗つては居ましたが、額や頰に喰ひ込んだ苦勞の皺は、少くとも五十以上の歲月を表して居りました——聲は咽喉へ引かゝるやうな調子で、それに大變嗄れて居ました。
「『どうも……暫くでした。』と吉村は思ひ入つたやうに言ひました。座頭は暫く吉村の顏を見詰めて居ましたが、やがて、『何處でお別れしたツきりでしたかなア。』と言ひました。
「座頭は早くも私共を同商賣と見て取つたのです……そして吉村を旅で別れた役者だと思つたのです……
「それも然うでせう、東京を出てから最う二十年以上にもなるのでせうから、『暫くだ。』と言つて呉れる人は、それからそれと渡り歩いて居る內に、その時々で或は加はつたり或は離れて行つたりする旅

の役者の他には無いでせう。座頭は吉村に『暫くでした。』と言はれた時、信州か、甲州か、何處かで、『鳥屋についた』時を偶と思ひ浮べたに相違ありません……
「吉村は頭を掻いて『いえ、實は子供の時分によく二長町で……』と申しました。『へえ？　古い事を御存じで。』と座頭も頭を掻いて寂しい笑ひを洩らしました。『えゝあの、以前、淨瑠璃座と云ふのが彼處に御座いましたな、彼座で與市をなすつた時分を知つて居ますんで。』と吉村は更に語を次いだのです。
「座頭は昔の事を言はれて、暫くは眼を瞑つて、何か回想に耽るやうでした。
「『こちらは如何で？』と利口な吉村は直ぐと話頭を轉じました。『いけませんな。』と座頭は眼を開いて言ひました。『でも節分には參りましたらう。』『えゝ！　節分にはあれでも二十パイは參りましたかな。』……と斯んなになつても未だ虚飾はあるものですねえ。
「『御邪魔をしました。』と挨拶をして出ようとすると、蒲團の中の人が嗄れた聲を出して「どうもお構ひも致しませんで。」と言ひます。立派な東京辯です。見ると髮を亂した瘠せこけた汚い中婆さんが、枕から頭を持上げて居ます。あゝ此最中で細君が病氣か！　と私はつく〴〵氣の毒になりました。『いえ如何致しまして。』と外へ出まして、餘り氣の毒ですから貳圓ばかり包んで、『ほんの御蕎麥です。皆さんへ。』と云ふ口上で、弟子の一人に座頭の處へ持たせて遣りました。決して名を言つては不可いと

申し聞かせまして……

「土間へ歸ると間もなく次の幕が開きました。今度は私も多少知つて居る瀧の段です。瀧は白い紙が細く切つてぶら下げてありました。今迄とは役者が異ふやうに一生懸命です。中にも三人上戸の乞食に身を扮して居る筆助などは巧いものでした。駒藏の勝五郎は殊に一生懸命で、立廻りをしながらも、臨時雇の下廻り共に叱言を言つてる餘裕のある處は、微ながらも昔の駒藏の面影を想像させるに足るものがありました。

「私共の果敢ない訪問が、世に捨てられた旅の一座に、縦ひ少しの間でも活氣を與へたものと思はれます――私共は心から喜びました。

「と、棧敷の上から大きなビラが下りました。

一金十圓也　東京　藤山幸夫先生より

中村駒藏へ

と大きな字で書いてあるぢやありませんか。

「私は顔が熱くなりました――直ぐと名を告げた弟子を叱りました。然し無理に訊かれたとあれば、それも仕方がありません。ただ驚いたのは金十圓也です。

「金二圓が金十圓程に有難いと云ふ心持か、十圓位は呉れても可からうと云ふ謎か、それとも此方の

名に干ると思つて額を大きくして呉れたのか、又は先方の虚飾で大きく書いたのか……

「何れにしても私共は何だか腋の下から手を入れられて、擽られるやうな氣がして、我慢にも座に居堪れず、直ぐと小屋を出て了ひました。

「翌る朝、私共は滯りなく護摩を上げて、商賣繁昌を祈りました。

「歸途の汽車の中は昨夜の話で持ち切りました。その時の吉村の話に依ると、昨夜の駒藏の細君はありや病氣ぢやないと言ふのです。もう衣服を悉皆無しにして了つたので、裸體で蒲團の中に愽へて居たのだと言ふのです……」

先の亭主

小いまは本名を西山そでといふ。神田の青物市場の八百龜(やほかめ)といふ八百屋の娘である。十六の時に、人形町の足袋屋へ、母と一緒に足袋を買ひに行つた。その時、足袋屋の主人が大層おそでの器量を褒めて、是非好い處へ世話がしたいからといふので、おそでの母に町處(ちやうところ)を書いて置いて行つて貰つた。間もなく足袋屋から手紙が來て、傳馬町の或有名な針問屋の次男へ世話がしたいと言つて寄越した。おそでの兩親は一も二もなく承知をして了つて、見合さへも碌々せずに、婚禮の支度に掛つた。おそでは兩親の言付に對して別に抗(さから)ひもせず、夢中で嫁(かたづ)いて了つた。

針問屋の次男は名を松村の金さんといふ。大層おそでを可愛がつた。處がおそでは亭主の金さんを嫌つた——餘り可愛がるから嫌つたのだ——可愛がるのは好かつたのだが、可愛がり過ぎて燒餅をやくから嫌つたのだ。

夜といふと斯うだ。

時間が來ると、亭主の金さんはどん／＼先へ寢間に這入つて了ふ。處が妻君のおそでは成るべく亭主の側にゐたくないものだから、何時までも二階へ上らずに、下で亭主の兄さんと話をしてゐる。然うすると、金さんは最う眞紅になつて怒る。

散々怒らしてから、おそでは漸く寢間へ這入る。

おそでは鶯餅が大好きだ。

おそでが寢間へ這入ると、必と好い色をした鶯餅が買つてある。然れどもおそでは亭主が氣に入らないのだから、その買つといて呉れた鶯餅まで喰べる氣にならない。

「さ、お喰べ。」

「好ござんす。」

「好ござんすぢやない。折角買つといたんだからお喰べなさい。」

「いゝえ、好いの。」

「お喰べッたら。」

「厭です。」

「なにい。」

金さんは怒つて、鶯餅をおそでの枕元へ叩きつける。白い敷布が靑い粉だらけになる。それでも、おそでは構はないで、平氣で小說本か何か讀出す。

金さんは又怒つて、今度は電氣を消して了ふ。

每晚斯うだ。

晝は如何かといふと、金さんはおそでを、日がな一日三階へ上げて置く――兄貴と話をさせない爲だ。そして時々見廻りに來る。

おそでは御飯時と手水へ行く時との外は、一步も三階から降りる事が出來ない。

仕立物をしたり、本を讀んだり、手習をしたりして、辛くも日の暮れるのを待つ。

中二階に居る嫂が、氣の毒に思つて、時々下から聲を掛ける――三階と二階とで話をする。

おそでは、斯かる晝を幾十日か送つた。

それでも金さんは安心がならなかつた。

とう〳〵店の直ぐ前の小さな家を一軒借りて、こゝにおそでと二人別居する事にした。

金さんは毎晩十時に、必と店から歸つて來る。歸つて來ると先づ長火鉢の灰の中を見る。これは卷煙草の吸殼が有るか如何かを見るのだ――おそでは煙草を好まなかつた。

一度おそでの實弟がおそでを訪ねて來た事があつた。その日は卷煙草の吸殼が大分灰の中に突刺さつてゐた。金さんは之を見ると、眞赤になつて怒つて、恐い顏をしておそでを詰問したさうである。

朝、自分が店へ行く時は、必と格子戸に錠を卸して行く。日に幾度となく、小僧を見に寄越す。小僧は格子戸に錠のおりてるのを見さへすれば、安心して默つて行く。

「おりてゐました。」といふ小僧の返事を日に幾度か聞いて、金さんは僅に安心をしてゐた。

おそでは最うつく〴〵亭主が厭になつた。

幾度か逃出さうとしたけれども、神田の實母に苦勞を掛けては濟まないと思ひ〳〵、とう〳〵斯かる月日を五年辛抱してゐた。

五年目に實母が死んだ。

それからは最う一時もゐる氣がしないで、幾度か逃げた。幾度か逃げたけれども、金さんの兩親や兄さん夫婦が親切な人達なので、これらに氣を引かされて、幾度か又引戻された。

五度逃げて、五度戻つたが、とう〳〵おそでの願が叶つて離縁になつた。

おそでは漸とのことで自分の望を遂げたが、最うのめ〳〵と里へ帰れる身の上でもなかつた――そこで我と我身を賣つて藝者になつて了つたのだ。

おそでが藝者になつてから間もなくの事である。

或晩、松村の金さんは町内の原田といふ世話好な男と、都鳥といふ老人とに誘ひ出されて、唯ある待合で酒を飲んだ。

原田が金さんを誘ひ出したのは、金さんと小いまとの仲を元々通りにしようといふ目的だつた。

そこで原田は、「一つ小いまさんを呼ばうぢやないか。」と言ひ出した。

すると金さんは驚いて、

「どうかそれだけは勘辨して呉れ給へ……君達が交際へと言ふなら、何處へでも今夜は交際ふから……どうかそれだけは、頼むから、廢して呉れ給へ。」

と言つた。堅造の金さんが「何處へでも交際ふから。」と言ふ位だから、全く困つたのだらう。

それでも原田は構はずに呼んで了つた。

小いまは何の氣なしに來て、ひよいと座敷を覗くと、驚いた。這入らずに、直ぐと帳場へ引返して、原田を小蔭に呼んだ。

「今夜私を呼んだのは一體本人の腹から出た事なんですか。え。原田さん。」

小いまは聲を震はせて斯う言つた。

「そりやその……」

「如何なんですよ。」

「僕達がその……」

「貴方方がなすつた事なんですか。へえ。隨分つまらない事をなさるわね。何も私を先の亭主の前へ引張り出さなくたつて、惡戯のなさりやうは外に幾らでも有るでせうにねえ。」

「なにも然ういふ……」

「餘り人を馬鹿になさるな……あの人の爲に私やどんなに苦勞してるとお思ひなさるの……もう世の中が何も彼も厭になつて了つたからこそ、こんな體にもなつて了つたんぢやありませんか……それを、また元の亭主の……」

小いまは口惜し泣きに泣き出して、物が言へなくなつて了つた。

「私は歸ります……いゝえ、歸ります。」

と歔欷をしながら言ふのを、無理にその家の女將に賴んで、原田は座敷へ戻つた。

座敷へ戻ると、今度は金さんが怒り出した。

「君は實に失敬な男だ。僕が彼程廢して呉れと賴んだのに、呼んで了つたんだね。解つた。何だね。君は僕の元の女房が今こんな商賣をしてるといふ事を僕に見せつけて、僕に恥をかゝせるんだね。いいえ、然うだ。きつと然うです。」

原田は困つて、

「いゝえ、決して然う言ふ譯ぢやないさ。君と小いまさんとの仲を元々通りにしたいからと思へばこそぢやないか。何も怒るには當らないさ。」

「怒りもしようぢやないか。恥をかゝせられて怒らないのは男ぢやない。」

「何も恥をかゝせはしないぢやないか。深切でした事ぢやないか。」

「へえ。深切。可笑しな深切もあつたものだ。」

「何を。」

今度は原田が金さんに掴み掛らうとした。

都鳥老人は、「まアノ\。」と二人の間へ割つて這入つた。

金さんはぷり〳〵怒つて、終にその家の物干へ一人で出て了つた。
都鳥老人は心配さうな顏をして、同じく物干へ附いて出た。
金さんは其處で色々と都鳥老人に宥められて、とう〳〵悲しくなつて、泣出して了つた。

やがて小いまは女將に連れられて、金さんは都鳥老人に引張られて、原田の一人茫然してゐる座敷へ戾つて來た——兎に角一寸でも一座をしないと、三方に角が立つからといふ事だつた。
金さんは座敷へ這入ると、直ぐ盃を手に取つて、雛妓の前へ突出した。雛妓は先刻から金さんの命で爲てゐたやうに、麥酒を注がうとした。すると、金さんは直ぐ眞紅な顏をして怒つて、
「酒だ〳〵。」
と叫つた。
原田はそれでもまだ懲りずに、小いまに向つて、
「小いまさん、一寸金さんの羽織を取つて上げたら如何です——大層皺になつてゐる。」
と言つた。
小いまは女將の手前もある。默つて唇を嚙みながら、金さんの後へ廻つて、羽織を脫がしたが、それを疊の上へ置くが早いか、突と立つて行つて了つた。

女將が後を追つて、帳場へ駈け降りて行つた時には、もう小いまの姿は見えなかつた……

一圓札の三枚這入つた祝儀袋が、揉みくちやにして、帳場格子に叩きつけてあつた。

やがて金さんも手水へ行く振りをして歸つて了つた。

金さんは午前二時頃店へ歸つた。

歸ると直ぐ、大きな聲で原田を罵り始めた。

「あんな奴が町内にゐるなア町內の名折れだ。俺はこれから一軒一軒掛合つて來る。」

と言つて、內の者が皆して留めるのも聽かずに、一人で家を飛出して、隣り近所から町內の取締の家まで叩き起して歩いた。

とう〳〵町內中の騷ぎになつて了つた。

その明る日、針問屋の嫂は小いまを訪ねて來て、昨夜の詫を述べ、その後の騷動を詳しく話して、こんな事になるのも畢竟金さんの方に未練があればこそだ。どうかもう一度歸つて呉れないか、と淚を流さんばかりにして頼んだ。

小いまは嫂の情には動かされて泣いたが、歸るのは如何しても厭だと斷つた。

それから半月ばかり經つて後の事である。松村の金さんは原田と仲直りをした。そこで都鳥老人と三人連で、濱町の或鳥屋で飲む事になつた。斯うなると小いまが一座でないのが何となく物足らない。といふので、今度は金さんの許可を得て、公然小いまを呼ぶ事になつた。

電話の掛つて來た時、小いまは妙に行きたくないやうな氣がした。

そこで自分の方から又電話を掛けて、女中に、

「一體御客様はどんな方。」

と訊いた。

女中は無頓着に、

「あの……都鳥さんと被仰る御年寄と、原田さんと被仰る面白い方と、それからもう御一方は御名前はよく分りませんけど、何だか御二方は金さん〳〵て呼んでゐらッしやいますわ。」

最う明かだ。

小いまは都鳥老人を電話口へ呼出して貰つて、斷りを言つた。

夢中

醉つた……泥のやうに醉つた。

夏帽子を冠つた九人の友達と褄をとつた二人の女の後に隨いて、料理屋の門の穴のやうな潜り戸を小さくなつて出た……肩を打つたと見えて痛い……

街燈のアセチリンの青白い光が灰色の石を敷いた凸凹な道を照らしてゐる……ガアンと一つ、高い處で時計が鳴つた。

眞黑な大きな山門のやうな門を這入る……地面の上へほツほと油煙の立つカンテラを置いて何か風呂敷包を作へてゐる老婆がある……小さな銀杏の樹が澤山並んで立つてる所を通つたやうな氣がする……振返つて見たが眞暗だつた。

九人の友達は二人の女に戯けながら、眞暗な公園を、開いたり蹲んだりして歩いて行く……

赤い丸い燈の出て居る交番の前の石橋を渡つて……左へ曲ると……

「左樣なら。」
「左樣なら。」
といふ甲走つた聲が暗闇に聞えて……女二人は暗闇へ消えて了ふ……
「氣をつけて入らつしやいよ。」
と餘程間を置いて、誰だか友達の一人が叫つた。

「好いのかい。」
「さあ。」
と、誰と誰とだか二人小聲に話してゐる……
「まあどうにかなりまさあ。」
と言つたのは、老婆じみた田島の聲だ。
「行け行け。」
「行け行け。」
と、若い聲がする……
「田島さんの御邸へ行くんだらう。」

「さうだ。さうだ。」

「ぢや構はねえ。行け行け。」

角に蕎麥屋の行燈がぼんやり見える……車の梶棒が前後左右から荊棘(いばら)のやうに搦んで來た……歩けない……耳の側で大勢の汗臭い車夫(くるまや)が何だか譯の分らない事をがあ／＼言ふ……

「一臺六百。

と友達の一人が叫つた……梶棒が皆下りる……提灯の數が九つしかない。

「一つ足りねえぢやねえか。」

「好いや。構はねえ。二人乘らあ。」

眞暗闇の一筋道をガラ／＼／＼／＼九つの提灯が續いて走る……體が前後左右へ振れる……自分の吹いた酒臭い息の中へ自分で自分の鼻を突込む……

恐ろしい物音がした……俥は皆止まつた。

暗闇に白い太い脚が二本と白い細い脚が二本、空を蹴つて踠いてゐる……

「おう痛え。」

と言ふのは胴間聲だ……

「あつつ。」

と言ふのは微な弱々しい聲だ……

一つの俥から重なり合つてる二人の友達を引張り出した……前へ轉(のめ)つた車夫は灯の點いた儘口のパクリと開いた提灯と梶棒の折れを持つて起上つた……俥は背中から二つに破(や)れてゐた……

友達はバラ〳〵と驅け出した……そして一人々々他の俥へ乘る——私も乘つた。

堤(どて)のやうな處へ上つて少し走ると、瓦斯で晝のやうに明るい西洋式の門の前へ出た……氷屋見たいな水菓子屋見たいな店の腰掛に友達は皆待ち合はしてゐた……友達の一人は頭を抱へて、横裂に裂けた絹の紋附を友達の一人に突き附けて泣き聲で何か言つてゐる。言つてるのは田島だ。言はれて居るのは大男の堀口だ。

「お前さんが私(わたし)の上に乘つちまつて動かないんだもの。」

「だつて私(わたし)だつて起きられねえんですもの。」

友達は皆又歩き出した……被布を着た六十許りの盲目の老爺が戸の閉つて居る軒下に立つて煙草を吸つてゐる。その傍に眼の開いた老婆が三味線を膝に載せて蹲踞(しゃが)んでゐる……誰だかおでん屋を覗く……私も覗く……主人は留守だ……大きな鍋に大きな木の蓋がしてあつた……

破れた絹の羽織で頭を抱へた友達は、兩側から倒れて來さうに高い家の建つた明るい明るい狹い狹い路を、傍目も振らずトットと先へ歩いて行く……あと八人の友達は離れたり密着いたり、右へ行つたり左へ行つたり、振向いて笑つたり、前を向いて叫つたりしながら歩く……白い顏や青赤の衣服が澤山眼に這入る……頭の上には三字か四字字の書いてある丸い曇硝子の燈が行儀よく列んでゐる……

「クシヤクシヤクシヤクシヤ。」

と女の聲がする……

「役者がどうしたい。」

と誰だか友達の一人が怒る……

「ここだ、ここだ。」

「上がれ、上がれ。」

「いやな女ばかりだなあ。」

「う、汚ねえ。」

「田島は死にかゝつてらあな。まあ今日は義理だ。兎に角上がれ。」

「上がれ、上がれ。」

田島は頭を抱へた儘直ぐ横になつて了つた……顏を顰めて眼を閉つてゐる……

「田島なあ入院だとよ。」

「下がる時あ下がるもんさ。」

などと囁き合ふ友達がある……

「六貫。六貫。」

といふ聲がする……金錢の音らしい音がチャラ〳〵する……私も金を出したやうな氣がする……

髮を大きく結つて、白いものを斑に塗つた、丈の低い女が八九人出て來た、何だか大きな聲で囀つてゐる……

女の一人が手の掌へ小さな紙を丸めたものを友達と私の數だけ載せて來て、友達に一人々々取らせる……私は二つ取つて開けて見たら、何だか字が書いてあつたが、一寸も分からない……

「あら、二つ取つちやいけないぢやないの。」

二つとも打捨つて了ふ……

友達が一人々々ゐなくなる……怪妖のやうな女も一人々々ゐなくなる……

「とても堪らねえ。」

まだ殘つてゐる友達の一人は身震ひをしてかう言つた……もう二人殘つてゐた友達も同じやうな事

を言ふ……

「辰巳へ行かう。起したら直ぐ準備をするんだよ。」

私はかう命令された。

間もなく起されて……三人の友達と一緒にそこを出た……柳が青く靡いてゐる……チン、チン、チン、チンと何處かの時計が鳴る。

空はもう明るい……昨夜は夜があつたのかしら、無かつたのかしらと思ふ……堤を降りると、薄暗い穴のやうな處に『孔雀』と書いてある灯の消えた行燈が白く見えて、車夫が六七人ゐる……直ぐと吾々を取卷いた……

四人は夢中で車へ乘つた……眼は開いてゐるが夢を見てゐるやうだ……走る、走る。

汚い衣服を着て赤兒を負つた女が小さな社の門の前の石段へ髮の亂れた頭を擦りつけて何か切に祈つてゐた。

菓子屋が一軒起きてゐた……寢亂れた女房が外を掃いてゐた……電信柱が飛ぶ……

眼が覺めると、車は鐵橋の上をガラ〳〵走つてゐる……廣い川だ。朝燒けの眞紅な空が川へ映つてゐる。川は空よりも明るい……眞黒な舟が唯二つ動いてゐる。岸に寄つてる舟は皆死んだもののやう

に凝としてゐる。川蒸汽が五六艘一ト處に集まつて四角な赤い扉を列べてゐる。煙突の一つから玉蜀黍の毛のやうな色をした煙が出てゐる……

電車の線路の上をガタ〳〵と行く……

ひよいと眼が開く……一番先へ行く車夫が遲いとか何とか言ふので、駈けながら他の三人が大聲で惡口を言つてる……

「何しろまだ二三日前に始めたんですからねえ。」

「さうか。」

と言つたのは、私の後に隨いて來る友達の眠さうな聲だ……

笑ひ聲で眼が覺める……俥は小さな反つた橋を渡る處だ……一人の車夫が自分の俥を曳きながら一番先の俥を押してゐる……

帽子が落ちかかつたので又眼が覺める……膝の上を見ると……毛の擦れ切れた呉絽のやうな薄い汚ない赤毛布だ……

駕籠から小袖を出した定式の葬式が僅二人の會葬者に送られて向うから來て擦れ交ふ……車夫は「今日は好い事があるぜ。」と飛んで喜ぶ……

木の匂がぷうんとする……路の兩側に材木が林のやうに列んでゐる……白い板に町の名が書いてあ

る……扇といふ字が見えた……橋を幾つも渡る……川に青い葦が生えてゐる……

二階だけ開いてる小さな家があつた……洗ひ晒しの浴衣を着た女房が汚い蚊帳を外してゐた……土鍋から白い煙の出てゐるのが見えた……

浴衣に絽の五つ紋を引掛けて和製のパナマを冠つた二人の男が、一人は月琴を胸に抱へて、一人は胡弓を手に提げて、青い顏をして默つて遣つて來る……

青い顏をした車夫が大勢、車に腰掛けて並んでゐる……松の樹がある……磯臭い風が吹く……櫻の樹がある……廣い道の中央を大きな髪の結ひ方をした醜い女が桃色の一身を着た赤兒を負つて歩いてゐる。

戸の閉つてゐる家を叩き起して、其家の色の黑い女に案內されて、直ぐ前の大きな家へ這入ると、三人の友達に別れて、直ぐ寢た……眠くて眠くて夢中で寢た……寢たと思つたが寢られない……腹が空いて來た。

けれども寢た……眼が覺めるともう午だ……

友達の一人と一緒に顏を洗ふ。ここも先刻ゐた所と同じやうに丈の高い建物だ。中庭の濁つた池に菖蒲の花が紫に咲いてゐる……

細い痩せた女の手が手拭を出す……

飯も食はずに二人で先へ出掛ける。歩きながら偶と自分の絽の羽織の肩先を見ると、一體に薄い埃が掛つてゐる……友達の……大男の堀口の顏を見ると眞つ黄色だ……

二人又車に乘る……大きな土色をしたペンキ塗りの鐵橋の傍で降りる……川蒸汽へ乘つて、蝦茶の天鵞絨の剝げた腰掛へ腰を下ろすと……そこらのものが朦朧して來る……友達に肩を突かれてはッとすると、川の水が銀色に見えたが……また朦朧して來る……

梅龍の話

著いた晩はどうもなかつたの。繪端書屋の女の子が、あたしのお煎餅を泥坊したのよ。それをあたしがめつけたんで大騒ぎだつたわ。でも姐さんが可哀さうだから勘辨してお遣りつて言ふから、勘辨してやつたの。(赤坂のお酌梅龍が去年箱根塔の澤の鈴木で大水に會つた時の話をするのである。姐さんといふのは一時は日本一とまで唄はれた程聞えた美人で、年は若いが極めて落ちついた何事にも襤褸を見せないといふ質の女である。これと同じ内の玉龍といふお酌と、新橋のお酌の若菜といふのと、それから梅龍の内の女中のお富といふのと、斯う五人で箱根へ湯治に行つてゐたのである。梅龍は眼の涼しい鼻の細い如何にも上品な可愛い子だが、食べる事に掛けては、今言つた新橋の若菜と大食のお酌の兩大關と言はれてゐる。梅龍の話に喰べ物の出て來ない事は決して無い。)水の出たのはその明くる日の晩よ。あたしお湯へ這入つて髮を洗つてゐたの。洗粉を忘れて行つたんでせう。爲方がないから玉子で洗つたのよ。臭くつて嫌ひだけど我慢して。さうすると、なんだか急にお湯が黑くなつて來て、杉つ葉や何かが下の方から浮いて來るのよ。妙だと思つてると、お富どんが飛んで來て、「水で

すから、逃げるんですから、水ですから、逃げるんですから。」ッて大慌てなの。何だか分らないから、よく聞くと、山つなみとかで大水が出たから逃げるんだつて言ふんでせう。それから大急ぎでお湯を出たの。髮がまだよく洗ひ切れないんでせう。氣持が惡いから香水をぶつかけたら、尙臭くなつちまつたの。爲方がないから洗ひ髮をタオルで向う鉢卷なの。好い着物は汚すといけないからつて、お富どんがみんな鞄の中へ納つてしまつたんでせう。あたし宿屋の貸浴衣の長いのをずるずる引き摺つて逃げ出したの。でも若し喰べ物が無くなると困ると思つたから、牛の罐詰と福神漬の罐詰の口の明けたのを懷に捩ぢ込んで出たの。ところが慌てて福神漬の口の方を下にしたもんだから、お露がお腹の中へこぼれてぐぢやぐぢやなの。氣味が惡いつたらなかつたわ。

外へ出ると、眞暗で雨がどしや降りなの。半鐘の音だの、人の騷ぐ聲だのは聞えるけど、一體どこにどの位水が出たんだか、まるで分らないのよ。兎に角向う側の春本つて藝者屋へ逃げるんだつて言ふから、あたしも附いて行くと、もうそこの家は人で一ぱいなの。鈴木のお客さんをみんなそこへ逃がしたんでせう。下駄なんか丸でどれが誰のだか分らないやうに澤山脫いであるの。

その內に向う川岸の藝者屋が川へ落ちたつて言ふのよ。なんだか少し恐いと思つてると、水力が切れて電氣がみんな消えてしまつたの。

蠟燭を上げますから一本宛お取りなさいつて言ふ人があるの。それからみんな手探りで一本宛貰ふ

のよ。あたしそつと二度手を出して二本取つてやつたわ。あたし達はそれから二階へ通されたの。貰つた蠟燭は、大根の輪切りにしてあるのを臺にして、それへ一本宛さして、みんな自分の前へ一つ宛置いてるのよ。姐さんはお守りをちやんと前へ置いて、お行儀よく坐つて兩手を合せて一生懸命に何か拜んでゐるの。

春本の藝者はあたし達を東京の藝者だと思つたらしいの。(梅龍は時々こんな物の言ひやうをする。自分は藝者といふ者と一向關係がないやうに言ふのである。それではお孃さんぶつてゐるのかと言ふと、さうでもないのである。要するに唯何でも構はず思つた通りをどしどししやべるのである。)だけど、聞くのも悪いと思つたんでせう。なんだかもぢもぢもぢもぢしてるのよ。「こんな所にゐては充りません。」だの何だのつて言ふの。なんだか愚痴見たいな心細い話ばかりするのよ。

その內に向うの山が崩れたッて噂なの。

すると何だか、轉がつて來たものがあるから、見ると、おむすびなの。一つ宛つきや奧れないのよ。それでもお腹が減つてたからおいしかつてよ。姐さんはどうしても喰べられないつて言ふから、あたし姐さんの分も喰べて上げたの。お數は懷の福神漬を出したんだけど、若菜さんは、そんなお腹ん中でこぼれた物なんか穢なくて喰べられないつて言ふの。だから、あたし一人で喰べたわ。

たうとうその晩は夜明かししよ。

朝の三時頃にお星樣が見えたの。その時のみんなの喜びやうつたら無かつたわ。

明くる朝は、又雨風がひどいのよ。いつまでそこの藝者屋にもゐられないし、それにもう塔の澤は一體に危くなつたから、今度は湯本の福住へ逃げるんだつて言ふのよ。

出ようと思ふと、床の間に紙入が一つ乘つてるのよ。あたし姐さんのだと思つたから、澄まして自分の懷に入れつちまつたの。すると、そこへどつかの奧さんが上つて來て、「あの、若しやこの床の間に紙入が乘つてはゐませんでしたかしら。」つて、あたしに聞くのよ。さあ、あたしどうしようかと思つちまつたわ。あたしは確に姐さんのだと思つてるけども、若し姐さんので無ければ、その方のに違ひないでせう。でもそこで自分の懷から出して聞いて見る譯にも行かないわ。自分の懷から出して見せて、若しその奧さんのだつたら、きまりが惡いでせう。だから、あたし目を白つ黑しながら、「いいえ。そんな物ありませんでしたよ。」つて云つたの。さうすると、「さうですか、どうも失禮しました。」つて、その方は直ぐ下へ降りておしまひなすつたの。

姐さんは恐い顏をしてよ。「梅ちやん。お前さん、知つてゐて隱してゐるんぢやあるまいねえ。人間てものは、かういふ時には妙な氣を起し易いもんだから、氣を附けなくちやいけないよ。お前さん若し持つてるなら、お願ひだから出してお吳れ。」つて言ふんでせう。あたし何だか氣味が惡くなつて來て。「だつて、これは姐さんのでせう。」つて、懷から紙入を出して見せたの。すると姐さんは倚と恐

い顔になつてよ。「ほら御覧。持つてるちやないか。よそ様の物を懐へ入れるといふ事がありますか。」つて言ふの。「だつてあたし姐さんのだと思つたんですもの。」つて言ふと、「直ぐ下へ持つてつてお返しして入らつしやい。」つて言ふのよ。それから、あたし下へ持つてつて、「今よく探しましたら、戸棚のわきにありました。」つてその奥さんに渡したの。奥さんは幾度も幾度もお禮を言ふのよ。ほんとに、あたしあんなに困つた事は無かつたわ。顔がほつほして、汗びつしよりなの。

それから仕度をして外へ出ると、ざあざあつて雨なの。橋を渡らうとすると、橋の板が一枚々々めくれさうにしてゐるのよ。姐さんは死んでも渡るのは厭だつていふの。でも逃げないと危いからつて、あたしとお富どんで、抱へるやうにしてやつと渡らせたの。あたしも若菜さんも平氣なものよ。あんな面白い事なかつたわ。(大抵な人は一度斯ういふ目に會ふと懲りるものだが、梅龍は一向平氣なものである。これから却つて水が好きになつたと言ふのだから驚く。こなひだも溜池に水が出て、梅龍の家の揚板の下まで水が這入つた時も、自分の荷物だけはちやんと二階の安全な所へ納つて置いてから、尻つぱしよりで下をはしやぎ廻つたといふ利己的な奴である。)

やつと湯本の福住へ着いて、やれ安心とお湯へ這入つてると、こゝも危くなつたから、又逃げるんだつて言ふの。大變な雨風で傘も何もさせやしないのよ。姐さんは、お金がないと困るつて、信玄袋だけ持つて逃げたの。

やつと別館へ着いたと思つたら、姐さんが日を廻してひつくり返つて了つたの。別館にはもう大勢お客が逃げて來てゐるのよ。するとそのお客の中から、大學生見たいな方がどういふ訣だか、マントで顏を隱して、コップに注いだ葡萄酒をマントの下から出して下すつたのよ。それを飲むと姐さんは直ぐ氣が附いたの。あんまり心配したり雨に濡れたりしたからなんでせう。(この事はその後都新聞へ文章面白く書かれた。その大學生は或博士の秘藏息子であつた。梅龍の姉は大學生の親切が元で思はぬ戀に落ちたといふ風な極古風な艷種であつたが、梅龍はいつも「まさか。」と言つて、否定するのである。)それからお醫者を呼ぶと、芝居のお醫者さん見たいなお醫者さんが來てよ。そりやあ、ほんとに芝居の通りよ。いやに勿體ぶつて。それで藪醫者なの。なんにも分りやあしないのよ。たうとう終に分らないものだから、家の方が水で危いからとか何とか言つて、逃げ出して行つてしまつたのよ。ほんとにあんなお醫者つて始めて見たわ。でも、姐さんは直ぐよくなつたの。

別館では大勢で焚き出しをしてるのよ。あたし前の晚におむすび二つ喰べたつきりでせう。お腹が減つてたから隨分喰べてよ。姐さんの分もお富どんの分も大抵あたしが喰べちまつたの。

明くる日お天氣になつたから、玉龍さんと三人で玉簾の瀧へ行つて見たの。方々、水が往來を流れてゐて面白かつたわ。玉簾の庭はめちやめちやなの。瀧はいつもの倍の倍位大きくなつてゐるのよ。あのお池の側の離れ見たいなものね、あれなんかも流れつちまつてゐるのよ。

なんにも喰べる物がないから、お茶屋で懐中じる粉を買つて、お湯で解いて飲んだの。そしたら小さい日の丸の旗が出てよ。旅順口なんて書いてあるの。餘つ程古い懐中じる粉なのねえ。(懐中じる粉は買つたのではないのである。お茶屋ではもう何處かへ逃げてしまつて誰もゐなかつたのである。梅龍達はそこらに落ちてゐた懐中じる粉を拾つて來て水で解いて飲んだのである。これはもうお富に聞いて、わたしはちやんと知つてゐる。)

それから歸り道に大きな石を拾つたの。それは隨分大きな石なのよ。三人で一生懸命に持ちやけたの。どうかしてこの石で姐さんを欺して遣らうと思つて、新聞屋へ寄つて、新聞紙を一枚貰つたの。それからその新聞紙で石を丁寧に包んで、おはぎの積りで持つて歸つたの。

家へ歸ると姐さんは一人で本を讀んでるのよ。「姐さん、おはぎをお土産に買つて來ましたよ。」つて、石を出すと、姐さんは本から眼を放さないで。「あいよ。」つて手を出したの。受けると馬鹿に重いもんでせう。きやあつて言つて驚いて庭へ投げ出しちまつたの。地響きがしてよ。姐さん隨分怒つたわ。

庭に穴があいたもんだから宿屋の人にも叱られてよ。でも隨分面白かつたわ。

水の時の話はそれつきりだけど、まだ跡で面白い事があつてよ。あたし達の泊つた箱根の春本の藝者で小玉とか何とかいふ人が、この頃赤坂へ來てゐるのよ。こなひだ三河屋で一緒になつたら、向う

の方で頻りに水の時の話をしてるるのよ。あの時は家へ來て泊つた鈴木のお客に餘所行の下駄を二足とも穿いて行かれてしまつて、あんな困つた事はなかつたつて言つてるのよ。水が濟んでから二三日してお座敷へ行かうと思ふと下駄が足駄も駒下駄も兩方とも無かつたんですつて。あたし、どきつとしてよ。あたしが穿いて出た下駄に違ひないんですもの。あたしあの時なんでも構はず出てるる下駄を突つかけて出た覺えがあるの。

それから、あたしその小玉さんとか言ふ人にあやまつたわ。あたし、あやまるの大嫌ひだけども、泥坊つて言はれるのは厭だからあやまつたの。そしたら、向うぢやもうあたしの顔よく覺えてるなかつたわ。損しちやつたわねえ。

羽織

澁り澁り旦那が埼玉へ立つて了ふと、小ひさは直ぐ龜山の所へ電話を掛けました。龜山は次狂言の稽古中で、丁度座の方にゐましたが、電話が掛かると巧に姿を晦まして、住吉町へ駈けつけました。貸本屋とメリヤス屋の間の細い路次を這入つて、右つ側の五軒目が小ひさの家です。その途中の左つ側に間口の馬鹿に廣い見番がお關所か何かのやうに控へてゐるのです。龜山は見番の前を如何にも極りが惡さうな樣子をして通りました、箱屋の仙さんと言ふのに聲を掛けられると「いや、どうも。」とさも狼狽したやうに頭を抱へて、逃げるやうに駈け拔けましたが、內心實は極りが惡いのでも、まごついたのでもないのです。龜山の顏には隱しても隱し切れぬ得意の色がありました。

小ひさの家の格子を明けて、籐表の雪駄を一足踏み込んだ瞬間に、龜山は得意の頂點に達して、思はずニヤリと獨り笑ひをしました。龜山がこの家へ來るのはこの日が始めてではないのですが、いつでもここへ來る度にきつと新しい得意を覺えるのです。

「先づ一座で自前の藝者を色に持つてるのは俺位なもんだらう。丸田がいくら威張つたつてあいつな

あ高が公園地のお茶屋の女中ぢやないか。花山がいくら色師がつたつて、丸抱への年期澤山と來ちやあ、ちよいと世帶染みたおつな遊びも出來まい。先づ俺だね。器量は好しよ、立派に一軒店も張つてるし、旦那は埼玉の歴とした財産家だ。先づ藝者として一點批の打ち所のない女だ。」さういふ女が、自分の爲に旦那を欺して返して、自分の來るのを首を長くして待つてるのかと思ふと、龜山はもう金にも寶にも換へ難い或物を摑んだやうな氣がするのでした。

小ひさの得意も龜山に劣らぬものがありました。小ひさは名古屋から『江戸』へ登つて來て、まだ十月とならない藝者でしたが、器量も龜山が思ふ程好くはありませんし、言葉に訛はありますし、まあ取柄と言へば柄が大きくて押し出しが立派だと言ふ位のものですが、何處に好い所があるのか、僅かの內に隨分好い客が附いて、丸抱へで來たのが忽ち叩き分けになり、分けになると間もなく今の埼玉のが附いて、たうとう自前で店を出すやうになり、お酌の一人二人は抱へる身分にもなつたのです。先づ藝者の方の成金とでも言ふべき女なんですね。そこでせめて役者の一人や二人は買はなければ、『江戸』の朋輩に對して幅が利かないとでも思つたのでせう。白羽の矢を立てたのが、中洲の芝居へ出てゐる新派の、乙部の三枚目で、大工か肴屋でも演ると、ちよいと大向うが唸らうといふ龜山太郎だつたのです。なぜ選りも選つて、鼻の低い、口の大きな、頭の毛の薄い、先づ男として普通以下の器量を持つた龜山に狙ひを附けたのか、それは分りません。併し、龜山が器量に似合はぬ色男である

事は事實で、現に今自分が息子分になつてゐる家の所謂『おつかさん』なる者も、以前は自分の客だつたのです。その關係も最う今は綺麗になつてゐるとか、いやまだ續いてゐるとか、始終仲間の問題になるのでした。小ひさの烱眼は一度か二度龜山を舞臺に見て、早くも彼が稀代の色男たる所以を看破したものと見えます。

龜山が金を使はずに藝者と遊ぶのを名譽としたやうに、小ひさも旦那の金で役者と遊ぶのを名譽としたのです。ですから二人が顔を合はしたら最後、近所にゐる者の當てられやうと言つたらありません。時と所とを選ばず、顔と顔とを合はした瞬間に、二人は社會に對して無上の權利を感ずるものと見えて人目も恥ぢずに痴態の極を盡すのです。

龜山が格子戸を明けて獨り笑ひをすると、小ひさも長火鉢の前で獨り笑ひをしました。龜山が障子へ手を掛けると、中から小ひさも障子へ手を掛けました。內と外との手は同時に右へ動いて、障子が勢よく明くと、小ひさの顔と龜山の顔とがぶつかりさうにしました。二人は顔を見合はして、同時に又ニヤリとしました。

小ひさは直ぐと龜山を二階へ上げました。旦那の喰べ荒した膳は早くも綺麗に片附けられて、そこにはもう又新しいお膳立がしてありました。膳の上の德利と盃と小皿にちよぼッと盛られたこのわたを見ると、一々それが自分の好みに適つてゐるので、龜山は又ニヤリとしました。

やがて小ひさが上つて來ました。二人は直ぐと盃の取り遣りを始めました。少し醉が廻つて來ると、いつもの癖で、小ひさは國の自慢を始めました。國の自慢と言ふよりは、國にゐた時分の自分の自慢と言つた方が好いでせう。つまり國にゐれば自分は凡そどの位な藝者だと言ふ事を自慢するのです。龜山は一々小ひさの言ふ事に跋を合はせて、自分が旅で名古屋へ行つた時に、一向客が來ないので、毎日茶屋の二階できしめんを喰べながら、花ばかり引いてゐた事などを話しました。そして、若しあの時分お前を知つてゐたら、きしめん許りの御厄介にもならないで濟んだらうなどと言ひました。女も、あなたがあたしの土地でそんなに困つてゐたのを、あたしがちつとも知らなかつたのは口惜しい、あたしがその時分あなたを知つてさへゐりやあ、どんな事でもして上げたのにと言ふやうな事を言ひました。

小ひさは龜山に向つて、でも名古屋ぢやあ浮氣をしたんでせうと言ひました。浮氣どころかい、きしめんで五厘花許り引いてゐたんだ。お前こそ向うにやあ好いのが澤山あるんだらう。龜山は斯う言ひました。これが始まりで、話は段々『痴話』といふのに落ちて來ました。二人は手の甲をぶちつこしたり、膝を抓り合つたりして、怪しい笑ひ聲を上げ始めました。

そこへ女中が顏色を變へて上つて來ました。

「大變ですよ、大變ですよ。旦那が歸つて入らつしやいましたよ。」

「旦那が歸つて來たつて。」
「ええ、汽車にお乘り遲れなすつたんですつて。」
「そりや大變だ。」
龜山は顏色を變へました。行きなり二階の窓をガラリと明けて飛び出すと屋根傳ひに隣の藝者屋の二階へ飛び込みました。そこは蔦助といふ龜山が知り合ひの老妓の家でした。
小ひさは手早くそこに脫いであつた鶴の丸の五つ紋の羽織を疊んで、簞笥の中へしまひました。女中は急いでお膳を戸棚の中へ隱しました。
そこへ旦那が上つて來ました。
「天の配劑だね。たうとう乘り遲れたよ。」
「嬉しいわねえ。でも今日急ぎの御用がおありなんでせう。」
「なあに、あすでも、あさつてでも構はんのさ。」
旦那は小ひさの顏色に氣が附きました。
「大層好い色だね。」
「今ちよいと一つ稼せいで來ましたの。」
「又例の壯俳の所ではあるまいね。」

「冗談言つちや厭ですよ。あんな怪物(ばけもの)見たいな奴。」
「さうか。そんなら好いさ。」
と言つて、丁度龜山の羽織の脱いであつた所へ、旦那が又五つ紋の羽織を脱ぎました。
龜山は蔦助の家へ飛び込むと、拜んだりお辭儀をしたりしました。蔦助は隣りのと龜山との關係を知つてゐますから、大方を推察して、巧に帽子や雪駄を取り寄せて呉れました。併し、羽織だけはどうしても取り寄せる事が出來ませんでした。
龜山は幾度も頭を下げて、蔦助の家の裏口から外へ出ました。電車の通る所へ出て、ほツと息をつくと、こんな危い目に會つた事が、なんだか又得意に思はれて來ました。
龜山はその儘家へ歸るのが、つくづく厭になつて來ました。家へ歸つて、萎(しな)びた「おつかさん」の顏を見る事が、甚だしく自分の今の身の上に釣り合はぬやうに思はれたのです。
何處へ行きましたか、龜山はその晩たうとう家へ歸りませんでした。

あくる朝、小ひさの旦那は愈々今日は歸ると言ひ出しました。小ひさはいそいそと着物を揃へたり足袋を出したりしました。そこへ女中が二階から羽織を持つて來ました。
旦那は肌襦袢から長襦袢、下着から着物と、順々に着て、田舍出來らしい恰好の惡い白足袋を穿い

て了ふと、立ち上つて後から小ひさに羽織を着せて貰ひました。

旦那は袖に手を通しながら、思はず羽織の紋を見ると、自分の紋の鷹の羽ではなくて、大きく羽根を廣げた鶴の丸なのです。

「これはなんだ。」

旦那は行きなり肩をゆすつて、羽織を脱ぎ落すと、その大きな白い紋を突き破る許りに人差指で差しました。

一緒の箪笥へ重ねて納つて置いたものですから、女中が忙てて龜山の羽織を出して了つたのです。さあ、それからの悶着と言つたらありませんでした。常から龜山の事を疑つてゐる人が斯う言ふ確な證據を握つたのですから堪りません。小ひさは泣いたり喚いたりした揚句、氣違ひのやうな體裁で家を飛び出して了ひました。淺草の馬道でランプ屋をさせてゐる實の母の所へ逃げて歸つたのです。

その日は丁度龜山の出てゐる芝居の帳元が、何かの義理で久松町の芝居に總見を催す日でした。龜山はなんにも知らずに、友達の所で羽織を借りて、そこへ來てゐましたが、丁度中幕の明いた時分に、茶屋から呼びに來たので、行つて見ると、馬道のお袋が迎ひに來てゐて、これこれ斯う斯うだといふ話なので、びつくりして、帳元に挨拶もせず、直ぐ車で一緒に出掛けて了ひました。

龜山の『おつかさん』は『おつかさん』で、ゆうべ一晩龜山が歸らなかつたので、もう氣が氣ではありません。今日は確に見物で久松町へ行つてる筈だから。一つ捕まへてうんと言つて遣らなきやあと言ふ譯で、丁度龜山が久松町を出た後へ駈けつけて參りました。

「龜山はをりますか。」

「龜山先生ですか。たつた今お歸りになりました。」

「宅へですか。」

「おつかさんが迎ひに入らして、一緒にお歸りになりました。」

「なに、おつかさん。」

「へい。」

茶屋の男は龜山の『おつかさん』を知らなかつたのです。

これはてつきり馬道だなと思ひましたから、龜山の『おつかさん』は直ぐその車で馬道へ駈けつけました。態とランプ屋の五六間手前で車を降りて、そッと店の前まで行つて見ますと、確に見覺えのある篠表の雪駄が土間に脱いであるのです。

障子の中では頻に若い女の啜り泣くやうな聲がします。それをなだめる年寄の聲もします。

「なあに、婆あさへくたばつちまへば、きつと一緒になれるんだから。」

と、幾度も繰返して言ふ太い聲は確に龜山でした。

龜山の「おつかさん」は「婆あ」と言ふ言葉を六遍か七遍聞くと、もう堪らなくなつて、「何が婆あだ。」と言ひながら、店の中へ躍り込みました。

それからの混雜は、丁度ランプ屋が地震にでも會つたやうな騷ぎでした。

草市の晩

三浦と佐久間が八官町の家を出たのは、もう十二時餘程過ぎだつた。

銀座の通りはもう大抵戸をおろして了つてゐたが、草市はまだ宵だつた。

造花のやうな蓮の花がある、磨いたやうな苧殻がある、大きいのや小さいのや様様の形をした切籠燈籠が柳と一緒に搖れてゐる。カンテラやランプで買ふ人賣る人の顏が赤く見える。

三浦と佐久間が元の日日新聞の前まで來ると、煉瓦道の暗がりにしやがんで話をしてゐる女が三四人あつた。

佐久間の顏を見ると一人の女は立ち上つて、側へ來た。

「まあ暫く、佐久間さん、あなた隨分ね。ちツとも會つて下さらないんですもの。こなひだも西條さんと一緒に緣家へ入らしつたつて言ふぢやありませんか。それだのに呼んで下さらないのねえ。隨分だわ。」

「あの時は外に連れがあつたからだよ。」

「お連れがあれば呼べないの。」
「だつて眞面目な人なんだからね。あとで又厳ましくなると面倒だと思つたからさ。」
「この頃は宇都宮ですつてね。あたし是非一度行きたいと思つてるの。」
「僕も一度行く約束になつてるんだ。」
「ぢやあ、あたしの行く時一緒に入らつしやいな。御馳走してよ。」
「ああ。」
「電話何處へ掛ければ好いの。」
「店へ掛けて呉れれば好い。芝の二百三十八番。」
「芝の二百三十八番ですね。ぢやあ、きつとよ。」
「ああ。」
女は又暗闇へ這入つて、外の女と一緒になつた。
佐久間と三浦は又歩き出した。
「糸丸だらう。」
「ああ。」
「どうしたんだい。」

「なあに、あん畜生、あの濱の西條ね、君知つてるだらう。あいつに惚れてやあがるんだ。僕の言ふ事は何でも西條が聞くもんだと思やがつて、人の顏さへ見りやあ、西條の事を頼みやあがるんだ。なあに、いつだつてあんな事を言つてやがつて後で電話を掛けた例やありやしないんだ。」

「西條君の方はどうなんだ。」

「駄目よ。西條は利口だからな。」

「僕もあの女ぢやあ驚いた事があるんだ。」

「へええ、そりやあ初耳だ。一體、君知つてるのかい、あの女を。」

「知つてるどこぢやない。まだ佛蘭西から歸つて來た許りの事だつたがね。まだ嗅は無かつたし、日本の女が戀しくて堪らないんだ。なんでもあいつを花月か何處かの宴會で見たと思ひ給へ。ちよいとあいつの面が毛唐臭いだらう。こりや好いと思つたんだ。それから直談判を遣ると宜しいといふ譯なんだ。併し今日といふ譯には行かないから、もう一篇出直して來て呉れろと斯う言ふんだ。それから二三日して築地の方の或家へ行つたと思ひ給へ。すると來は來たがね。そこの上さんを使者に立てやがつて、三百圓頂かなければと來やがつたんだ。なんでもその間に俺の家の事なんかすッかり調べやがつたんだね。」

「それからどうしたい。」

「馬鹿々々しいから廢したさ。誰が糞あんな奴に三百圓拂つて堪るもんか。歐羅巴へ行きやあ、あんななあ二フラン五十だ。」

「總てさういふ奴なんだ。だからあすこの家は身上が好いさうだよ。ここいらの藝者屋で金庫のあるのは先づあすこの家許りだらう。さう言へば、僕もこなひだ驚いた事があるんだ。ほら香雪軒（かうせつけん）の横町ね、あすこへこなひだ僕が行くとね、隣の座敷にあいつが來てやがるんだ。客は何でも新潟あたりの田舍ッぺいで大きな百姓だとか何だとか言つてゐたよ。こいつがあいつに掛つてもうデレ／＼トロトロなんだ。ところが何でもその晩糸の野郎は旦那の所へ行かなきやあならないんだ——旦那ッたッて澤山あるんだらうが、まあその内の幾らか大事な口なんだね——そこで自分の内の抱へを一人呼びやあがつてね、「浮氣をすると聞きませんよ。番兵を一人附けときますから、あたしの來るまで大人しくしてゐるんですよ。」か何かで、その抱へを番人にして自分は出て行つて了ふんだ。客は持てたと思ふから、愈々デレ／＼さ、それでゐて、たうとう夜通し待たして、明くる朝早く——何でもまだ七時頃だつたかなあ——旦那の方を濟ましてから遣つて來たもんだぜ。抱へも可愛さうさ、一晩その田舍爺の番人よ。一人で置けば外のを呼ぶと思つたんだね。捕へたら放さない所が凄いね。」

「豪い奴だ。西條君なんどもその手で遣らうと言ふんだね。」

「ところが、西條のはさうでないんだから面白いんだ。西條には奴の方で參つてゐるんだね。お店で

もお出しになるなら二千圓位は融通するなんて言つてやがるんだ。それが奴んとこの婆まで承知だと言ふんだから可笑しいぢやないか。」

尾張町の角まで來ると、三浦と佐久間は新橋の方へ引返した。

佐久間は蓮の花の刷つてある切籠燈籠を一つ買つた。

「そんなものを買つてどうするんだい。」

「應接へ下げて置かうと思つて。」

「常談ぢやない。毛唐ぢやあるまいし。」

「でも何だか、如何にも日本的で、面白いぢやないか。」

函館屋の前まで來ると、中から頓狂な聲で呼び留める者がある。見ると、さつきの糸丸が三四人の女と一緒にテエブルを圍んでゐるのである。

「お這入りなさいよ。」

「もう遲いから。」

「ちよいと這入つたつて好いぢやありませんか。」

「厭だ。」

「そんな事を言はずに。ちよいとで好いから。」

二人はたうとう引張り込まれた。
「何を召し上つて。」
と言ふ女の顔を佐久間は見ずに、店の男に、
「ジン、カクテルを二杯。」
と言ひつけた。
糸丸の隣に坐つてゐる肥つた年增は丁寧に二人に挨拶をして、
「毎度糸丸が。」と言つた。「姉です。」と側から糸丸が紹介する。あとの二人は抱へらしかつた。いづれも浴衣で、幅の狭い帶を締めてゐる。
糸丸は三浦の顔を暫く見詰めてゐたが、やがて急に何か思ひ出したやうに、
「まあ暫くですわね。」
と言つた。併しその調子は極めて器械的で一向言葉の內容に適つてゐなかつた。
「どうしたんだい、さツきは。みんなで暗闇にしやがんで。何を相談してゐたんだい、革命でも始めさうだつたね。」
「あんまり步いたんで草臥れちまツたから、休んでゐたんですよ。」
「僕は又伏勢をして、男でも待つてゐるのかと思つた。」

「當談でせう……それはさうと、ほんとに、宇都宮の事は頼みましたよ。行つたら三人で御飯でも食べに行きませう。」

「あいつ中々億劫がる奴だからね。多分行くだらうとは思ふがね。」

「決して口說きはしませんからつて言つて頂戴よ。」

「あゝ。」

表から「いよう。」と言ひながら這入つて來る若い男があつた。銀座の或唐物屋の一人息子で佐久間には親しい友達の一人である。

男はづかづかと來て糸丸の直ぐ隣へ坐つた。

「どうしたのよ。」

糸丸は恨めしさうに、男の顏を橫目で睨んだ。

「どうもしやしない。」

「どうもしやしないつて。あなた今朝から何處を步いてるの。」

「得意廻りよ。これでもおいらあ稼ぎ人だ。」

「馬鹿にしないねえ。女を稼いで步いてるんだらう。」

「女を稼いで、店が立ちますか。」

「絞り取りやあ好いぢやないの。」
「お前さんとは違ふよ。」
「あたしがいつ絞り取りました。」
「金庫に聞いて御覽。」
「だから厭になつちまふよ。しよつちう言つてるぢやないの。あん中には鑑札だの税の受取だのツきや這入つてやしないんですよ。」
「成程、そりやさうかも知れないね。僕の友達で寫眞の種板ばかり金庫の中へ納つとく奴があるからね。」
二人は肩を擦り合すやうにして、頻りに眼と肱の小競合をするのである。
「もうそこらにして戴きませうかな。」
と、佐久間はわざとらしく眉を顰めた。いつも見馴れてゐるので、別に驚きもしないのを、無理に驚いた眞似をするのである。
「佐久間さん、これよ。」
と言つて、女は片手を上げて、芝居で役者が拜むやうな形をした。
「馬鹿馬鹿しい。」

「でも、さツきの事は頼んでよ。」

と、女が佐久間の顔を見て、上眼を使ふと、

「また宇都宮かい、厭になつちまふなあ。器量の悪い癖に。」

と、唐物屋の小栗が言ふ。

「好いぢやありませんか。お前さんの關係したことぢやなくつてよ。」

「おい、ソオダ、ヰスケを一杯。」

と、男は女の言ふ事には構はず、店の者に言ひつける。

新しく來た、ソオダ、ヰスキィの杯一つと、飲み殘されたジン、カクテエルの杯二つとが、一緒に擧げられた。三人の男の眼は、互に物を言ひ交した。併しこの無言の談話は女には分らなかつた。内容が知れない許りではない、エクスプレッションが解らないのである。女は唯、笑つて見てゐた。佐久間が拂ふといふ勘定を、無理に糸丸が拂つた。みんな一緒に函館屋を出て、資生堂の角まで來ると、糸丸は佐久間のぶら下げてゐる切籠燈籠に眼をつけた。

「あなたはそんな物が好きねえ。どうするの、お佛壇も何にもありやしない家へそんな物を持つて歸つて。」

「女の魂を迎へるのさ。」

「來るのがあつて。」

「有り過ぎるよ。女といふ奴は生きてゐる間でさへあつちへ行つたりこつちへ行つたり隨分迷ふやうだから、死んだら尙迷ふだらうと思つて、お金の家の應接へ、これで燈明臺を拵へてやるんだ。」

「それ、あたしに下さいよ。」

「厭だ。折角形の好いのを探して來たんだ。」

「下さいよ。」

女は燈籠に手を掛けた。佐久間は勘定を拂はれた弱味があるので、手もなく大事な物を取られて了つた。

「宇都宮の抵當に取つて置きますよ。約束通りになつたら返して上げてよ。芝の二百三十八番ですね。」

「ああ。」

女の連れと唐物屋の小栗とは右の暗い横町へ曲つた。三浦と佐久間は二人になつて、新橋の方へ煉瓦道を歩いた。

「あれもかい。」

「ああ。目下夢中といふ所さ。だが、小栗の事だ。おひやらかしてゐるのさ。」

「だけど、兩方とも君の親友ぢやないか。」

「そんな事に驚く女かい。だが今んところぢやあ、銀座のより宇都宮の方が好いんだ。
銀座は宇都宮と新潟との中間に位する町なりかい。」
「ははは。宇都宮だつて出來て了へば、まだもつと好いのが涌いて來るに違ひないんだ。今に僕んとこへ來ないとも限らない。」
「僕はどうだらう。」
「君は三百兩で見放された人だ。だが、何とも知れないねえ。」
と言ひながら、佐久間は燈籠のやうに中から電氣のついてゐる博品館の時計臺を仰いだ。
「常談ぢやない、二時だぜ。」

手紙風呂

男も弱かつた。女も弱かつた。二人はとても今の世に生存の出來る人達ではなかつた。

或晩、男がかう言つた。

「いつまでこんな事をしてゐたつてしやうがありやしない。きいちやん、若し君に好きな人があるなら、僕が添はしてやるよ。」

その時分、男の背後にはのつぴきならぬ結婚問題が湧いてゐた。親に對する義理、兄弟に對する義理、親戚に對する義理、媒人に對する義理、世間に對する義理で、男の心は十重廿重に縛られてゐた。併し、男の心を何よりも近く、何よりも強く、何よりも苦しく縛るものは三年前の涼みから馴染んだ可愛い可愛い「小菊」であつた。男は女の返事一つで、地位をも名譽をも財産をも捨てる氣でかう言つたのである。

併し、男の心は弱かつた。男はどうしてもむきつけに「俺の女房になつてくれ」とは言へなかつた。

それはきまりかけてゐた嫁に未練があるからでもなく、親兄弟に後髪を引かれるからでもなかつた。若し女に少しでも好きな男があるなら、受け出してもそれと添はしてやらう。その方が自分と一緒になるより女にとつてどんなに幸福だか分からないと思つたからである。自分が女と一緒になる時は、自分も女も世の中から捨てられて、みじめな生活をする時だと思つたからである。

男の心より更に弱いのは女の心であつた。女には「臺さん」より外に「好きな人」は世界に一人もなかつた。併し、女もそれをむきつけに言ふ事は出來なかつた。女は男の周圍にさういつた問題の起りかけてゐる事も薄々知つてゐた。男が今のやうな事を言ひ出したのにも、さういふ意味のある事はよく分かつてゐた。併し、女は男を社會の外に置いてまでも自分のものにしようとは思はなかつた。

「あたしの好きな人はあなたより外にありません。あなたと一緒になれなければ、あたし誰とも一緒になりません。」かう言つてしまへばなんでもないものを、女はどうしてもさう言ふ勇氣がなかつた。

「あなたより外に」を心の內に念じながら、僅に一言かう返事をした。

「あたし好きな人なんかありませんわ。」

男は女のこの返事に言外の意味を汲みとることが出來ぬ程愚鈍ではなかつた。併し、女にかう言はれてしまふと、男はもうどうすることも出來なかつた。女のこの返事から女の本心をも釣り出し、自分の心の奧底をも繰り出す事は、然程むづかしいことではないのに、男はさういふ詞の綾を少しも知

らなかつたのである。

「きつとかい。」

男はやつとこれだけ言つた。

「きつとです。」

女もやつとそれだけ言つた。

この短い詞のやりとりで、二人の緣は永遠に切れてしまつた――緣談は容赦もなく進んだ。二人は運命の遠くへ遠くへと去つて行くのを、唯默つて、目をうるませておとなしく眺めてゐた。

男も弱かつた、女も弱かつた。二人はとても今の世に生存の出來る人達ではなかつた。さうなつてもやつぱり會つてゐた。緣の切れた二人が緣の切れたのを承知でゐながら、やはり會つてゐるのである。二人の心は世間に對して弱かつたと同時にお互同志に對しても弱かつた。二人は自分達の力で自分達の「命」を絕つ事が出來なかつたのである。二人は世間がまざまざと斧をおろすまで頸を延べて命を待つてゐた。

男は大家の次男であつた。緣談は日一日と步を進めたが、したくが大がかりなので、式まではまだ大分の月日があつた。その間にも相變らず男は商用で、月に二度は東京へ來た。東京へ著くと直ぐ男はステイションから女のところへ電話をかけた。そしてその夕方にはきつと何處かで會つてゐた――

男は女の爲に可なりの金を出してゐたのであるが、女の抱へ主が因業なので、二人はもう女の土地では會へなくなつてゐた。二人は赤坂の或家で會つてゐた。女は夜の十二時を聞くと、きつと差引で芳町へ歸つた。そして明くる朝早い電車で、きつと又山王下へ來た。

女の抱へ主は毎日のやうに女を責めた。

「お前ぐらゐ莫迦な女はないよ。全體、藝者をしてゐて、お客に惚れる間拔けがあるものかね。それも奧さんにでもなれるといふのならまだしものこと、もう近々よそから好いのが來るんだつて言ふぢやないか。そんな人に義理を立てる奴がどこ探したつてあるものかね。それよりか、こなひだから話のある大阪の「秋さん」ね、早くあの方のお世話におなりよ。「臺さん」のやうなしみつたれとは訣が違ふんだからね。」

女はなんと言はれても默つてゐた。

或晩、女は「秋さん」の座敷で、さんざんに醉はされた。女の抱へ主がその座敷へ出る他の抱へに旨を含めて置いて、無理から女を醉はしてしまつたのである。女は苦しい胸を悶えながら「秋さん」の泊る家へ泊つてしまつた。

その晩一座した藝者で「臺さん」に始終呼ばれるのは、小りきといふ、目の凉しい、口元の可愛い一人だけであつた

小りきは小菊と一緒に「臺さん」に會ひ始めた時分から「臺さん」を想つてゐるのである。「臺さん」が小菊と深い仲になつてからも、やつぱり「臺さん」を慕つてゐるのである——女はそれを知つてゐた。

ちやうど二三日すると、男が又商用で東京へ來た。女は飛び立つ思ひで赤坂へ驅けつけたが、その家の敷居を跨ぐ時、ふと「秋さん」のことを思ひ出して、消えも入りたい程「濟まないことをした」と思つた。

女は男の顏を見るが否や、疊に額をすりつけぬばかりにして、測らず犯した罪のなりゆきを一つ殘さず打ち明けた——

「濟みません。濟みません。濟みません。」

女は既に緣の切れた男を——よその誰かを妻にする男を——やがては顏さへ見られなくなる男を——操を立つべき夫かなんぞのやうに思つて、ひた謝りに謝るのである。

心の弱い男は、これを聞くと、忽ち自分の今の地位をも、女の今の地位をも忘れてしまつた。男も女を自分の妻かなんぞのやうに思つて、いつもになく強い詞を吐いた。

「よく話してくれた。併し、君は小りきにいひつけられるのが辛いので、自分から白狀したのかい。それとも僕をえらい人だと思つて白狀したのかい。」

「あなたをえらい人だと思つて白狀したんです。」

女は卽座にかう答へた。女の調子はいつもになく强かつた。

「よし。ぢやあ。君はその「秋さん」とかにした以上の事を僕にしなければならんね。」

男は更にかう言つた。

「以上の事つて、どうすれば好いんですの。」

女には男の心が讀めなかつた。

「證據だ。證據だ。證據を見せるんだ。」

男は息を跳ませて、靑い顏をしながら、かう言つた。女は慄へながら、ぢつと男の靑い顏を見詰めてゐたが、ふと或事を思ひつくと、

「分かりました。きつと見せますわ。きつと證據を見せますわ。」

と、かう言ひながら、男の膝を兩手でしつかり摑んだ。女はもう慄へてゐなかつた。

男はその晩直ぐ仙臺へ歸らなければならなかつた。二人は車を連ねて赤坂の家を出た。丸の內の暗い廣い道で、車が左右へ分かれる時、女は男の後から聲でかう叫んだ。

「きつと送りますよ。」

併し、それは男に聞えなかつたかして、男は唯「さやうなら」と何氣ない調子で答へただけであ

女はその足で直ぐうぶけ屋へ寄つて、剃刀と小刀を一挺宛買つて家へ歸つた――あすをも待たず、その晩直ぐ指を切つて、男に誓を立てようとしたのである。

今更誓を立てたところで、どうなるものでもないといふことは、女もよく知つてゐた。併し女は、男に嫁が來るからといつて、自分もよその男に乘り代へようといふ氣にはどうしてもなれなかつた。たとひ男がどうであらうと、自分が犯した罪は、自分の犯した罪である。女は自分自身の心に堪へられぬ負債を感じてゐるのであつた。

男に嫁がきまつたのも、考へて見れば自分が惡いからだと女は思つてゐる。あの時一言突つ込んで言ひさへすれば、たとひ男と一緒にはなれないまでも、かうまで縁談が無事に進みはしなかつたのである。自分の返事一つでかうなつたのだから、今更男に怨む筋は塵程もないと、女は正直一途にさう思つてゐる。心の負債を女に輕くするものは何一つ世の中になかつたのである――

女は重荷に背中を壓されるやうな氣持で、自分の家の敷居を跨いだ。自分の部屋へ倒れるやうにしてはひると、羽織もぬがず帶も解かずに、ぺたりと坐つて、人々の寢靜まるのを待つてゐた。

隣の部屋には下地つ子のふうちやんといふのが、既に可愛い寢息を立ててゐた。小菊と前後して歸

つて來た抱へ達の着物を脱いだり物を喰べたりする騷がしさも、ひとしきりで靜になつた。やがて下の方で女中のお友の表をしめる音がしたかと思ふと、あたりが急にひつそりして來た。

女はそつと立つて、壁に寄せかけてあつたちやぶ臺の足を開いて、部屋のまん中へ持ち出した。それから、さくら紙を二重と新しい手拭を二本用簞笥から出して、手のついた小さい化粧鏡と一緒に、それをちやぶ臺の上に置いた。それから羽織をぬいで、行儀よくちやぶ臺の前に坐ると、膝を深く臺の下へ突き入れた。それから、買つて來た剃刀と小刀を、帶の間から出して、ちやぶ臺の上に列べて置いた。

女は鏡をちやぶ臺の上に立てて、暫く鏡の中をぢつと見詰めたが、やがて鏡を倒してそれをちやぶ臺の下へ突つ込んだ。女は自分の顏色のいつもと少しも變つてゐないのを確めたのである。

女は剃刀にしようか小刀にしようかと暫く迷つた。剃刀がよく切れさうには見えたけれど刃がそつてゐるので、若しまつすぐに落し損ねたら見苦しいと思つた。そこで、小刀の方を使ふ事にした。

女は手拭を小さく疊んで口にくはへると、左の小指をちやぶ臺の上に平にのせて、ぐつと指に力を入れた。それから右の手に小刀の柄をしつかり持つて、あたりを一度見廻すかと思ふと、小指の爪の附け根と第一の關節のちやうどまん中あたりを目がけて、力任せにぶすりと突き立てた。一度突き立てた小刀は、骨につかへでもしたか、もういくら力を入れても深くはひらなかつた。三分の一程指へ

食ひ込んだのを、その儘にして置いて、女は小刀の柄から手を放した。そして前の方をぢつと見ながら「痛いかしら」と考へて見た。

少しも痛くなかつた――どう思つて見ても痛くなかつた。女はそれが不思議でならなかつた。女はもう平氣になつた。やがて、右の平手でとんとんと力任せに小刀の背を二三度打つと、刃のちやぶ臺にがちりと當る音がして、指の先がほつりと落ちた。

小刀の刃にべつたりついて落ちた自分の指の先を見ると、女は始めて安心したやうにほつと太息をついた。女は重荷をおろしたやうな氣がしたのである。胸のつかへが一時におりて、體中を風が吹き通すやうな氣がしたのである。

俄に、切つた指が痛み出して來た。女は直ぐ手拭をとつて指を卷きつけたが、片手業なので、とても堅くは縛れなかつた。血は忽ち手拭をにじんで流れ出した。女は血に濡れた手拭をとつて捨てると、血の出る指を口の中へ突つ込んだ。

血を吸ふと留まるものだといふ事をかねがね聞いてゐたので、女は一所懸命になつて吸つて見たが、血はなかなか留まらなかつた。その內に血が口の中に溢れて、女は嘔氣を催して來た。表へ吐かうと思つて、往來へ向つた小窓をがらりと明けると、その音で隣に寢てゐたふうちやんが目を覺ました。

「だあれ。」

ふうちやんは寢ぼけた聲を出してかう言つた。女は口を塞いだ儘ふうちやんの名を一二度呼んだ。ふうちやんが起きて來ると、女は指をくはへた儘、右の手でふうちやんを側へ呼び寄せて、切つた指の血でさくら紙へ「ウガイジヤワン」と書いた。

ふうちやんが眞鍮のうがひ茶碗を持つて來ると、女は飛びつくやうにして、その中へ血を吐いた。血は赤黑い鳥の肝のやうに、ほとりと丸く堅まつて出た。

女はそれからふうちやんに手傳はして、そこらの始末をすつかり綺麗にした。血を吐いたうがひ茶碗は、外の汚れ物と一緒に簞笥の一番下の抽斗へ隱してしまつた。落した指の先は紙に包んで、ふうちやんが敷いてくれた寢床の枕元に置いた。血の出る指は、新しい手拭を裂いて、もう一度堅く縛つて貰つた。

さうして、女は床へはひつたが、どうしてなかなか寢られるどころではなかつた。女は床の中で、縛つた小指を抱へるやうにしてゐたが、指はどきんどきんと大きな脈を打つて、血はいつまでも留まらなかつた。あたりに血のついたものはもう一つもないのであつたが、女の鼻はいつまでもいつまでも血の匂を嗅いでゐた。

女は夜の明けるまで、まんじりともしなかつた。

女は朝床を出ると、奈良人形の猩々のはひつてゐる桐の小箱を出して、その中へゆうべ切つた指の

先を綿にくるんで入れた。それを小包にして、郵便局へ持たしてやると、あまり小さ過ぎるからと言つて返された。それから、紙入のはひつてゐた桐の明き箱へいろいろ詰め物をして、そのまん中へ指を入れた。今度は郵便局で直ぐ取つてくれた――女はやつと役目を果したやうな氣がした。

女の祕密を知るものは、下地つ子のふうちやんと女中のお友だけであつた。女中だけは知らして置かないと、帶を締める時に困るからであつた。

その外の人々には誰にも知らせたくないと女は思つた。指の痛みはまだ止まなかつたが、女は眉一つ顰めることが出來なかつた。顏を洗ふ時も食事をする時も、女は始終ハンケチを左の手の上にかけてゐた。ハンケチの上から茶碗を持つのを、不思議さうに見てゐた主人は、「きいちやん、なんだい、その眞似は。」と言つた。女は「お茶碗が冷たいから。」と何氣ない態で言つたが、もう落ちついて喰べてはゐられなかつた。

朋輩の一人は、女が左の手を懷にしてゐるのを見て、心配さうに「どうしたの。」と聞いた。「あたし腕があつて、當分左の手だけないつもりにしてゐるの。」女はかう言つて笑つたが、今にも手を出されはしないかと思ふと、もうそこにぢつとしてゐることが出來なかつた。

女は生れて始めて、左の手のどれ程人間に入用であるかを知つた。わけてもその日は左の手を出さなければならないことが多いやうな氣がした。女はとても隱し切れなくなつて、その日はたうとう假

病を使つて寢てしまつた。

二日ばかり經つと、男から手紙が來た。手紙の字には甚しい驚愕と狼狽の色があつた。

「僕はこんなことをさせようと思つたのではなかつた。こんなことをしてくれなくても君の心はよく分かつてゐるのに、君は飛んだことをしてくれた。」こんな事が繰り返し繰り返し書いてあつた。それでも女は少しも男を怨まなかつた。男がどういふつもりでこなひだのやうなことを言つたにしろ、自分は自分でさうしなければならないと思つたことをしたのである。自分が男に誓を立てて、男からも誓を貰はうとしたのではない。自分の立てた誓は唯自分の心に立てた誓である。女はさういふ風に考へてゐたから、男の手紙にどういふ文句があらうと、ただ指の無事に向うへ著いたことだけを喜んだ。

手紙が來てからちやうど三日目に、男は又東京へ出て來た。來ると直ぐ、赤坂の家から女を呼んだ。

女は宙を飛ぶやうにして行つた。

男は女の指を小さな壜に漬けて持つてゐた。女の顏を見ると、いきなりそれを女の前に差しつけてひた謝りに謝つた。

「僕が惡かつた。僕が惡かつた。僕が惡かつた。」

男が女の指を貰つた時は、ちやうど男の婚禮の日がきまつた時であつた。男は女の清い誓をどうす

ることも出來なかつたのである。

「せめて婚禮の當日まで、僕と君と一緒に暮らすつもりで、かうやつてこの壜を始終持つて歩いてるんだ。當日になつたら、君はもう死んだものと思つて、これはどこかのお寺へ埋めようと思ふ。そして、そこへお墓を立てて、僕は一生お參りに行かうと思ふ。」

男のかう言ふのを聞くと、女は聲を立てて嬉し泣きに泣いた。

男も弱かつた。女も弱かつた。二人はとても今の世に生存の出來る人達ではなかつた。

男が女の指を埋める日が來た。その日を女は男の最後の手紙で知つた。

女はその日を男が死んだ日だと思はうとした。女は朝から夕方まで、自分の部屋に閉ぢ籠つたきりで、男から來た古い手紙を一つ一つ自分の手で裂いた。手紙は箱根細工の大きな箱にぎしぎしに詰まつてゐた。いくら裂いても、いくら裂いても手紙はまだ箱の底に殘つてゐた。女は讀むまい讀むまいと思ひながら、ついつい大抵な手紙は讀んでしまつた。

日の暮れに、女は女中のお友を呼んだ。お友が來ると、手紙の山を指さして、お風呂の焚きつけにでもして一字も殘さず燒いて貰ひたいと言つた。お友は悲しさうな顏をして、男の手紙を幾度にか下

へ運んだ。

女は電氣もつけずに暗い部屋の中に默つて坐つてゐた。暫くすると、お友が來て、

「お手紙でお風呂が立ちました。どうぞおはひり下さいまし。」

と、言つた。

女は短くなつた左の小指を抱くやうにして、男の手紙で沸いた風呂へ、雪のやうな體をしみじみと漬けた。そして立ち登る湯氣の中で心ゆくばかり涙を流した。

總てを失ふ話

西村太郎といふ新派の役者がありました。

西村は芝居は下手でしたが、女を取扱ふことと花札を弄ぶことが、大の上手でした。芝居は下手でしたが、女を取扱ふことと花札を弄ぶことが上手なので、仲間内から大層尊敬されてゐました。

西村が一寸でも舞臺へ顔を出すと、見物はきつと『色男』とか『女殺し』とか言つて騒ぎます。それ程、西村は新聞の艶種を豐富にしてゐる男でした。

樂屋にゐる時は、いつも西村の部屋で賭場が開かれました。舞臺の上では西村のずつと上に立つ役者でも、この部屋では西村の男衆か何かのやうに、へいへいしてゐました。

西村は自分の藝の下手なことなどは、まるで知りませんでした。舞臺へ出れば見物が騒ぎます。樂屋へ歸れば仲間がちやほやします。西村はそれが嬉しくて堪りませんでした。

「役者といふものは好いものだなあ」

西村の人生觀は唯これだけでした。

西村が愛されてゐる客の一人に、麻布の方の或金持の奥さんがありました。この奥さんの御亭主は貿易が商賣で、一年の内、日本にゐる時は、ほんの一ヶ月か二ヶ月でした。奥さんは年中好い着物を着て、好い食べ物を食べて、好きなところを遊んで歩いてゐました。

奥さんはよく西村の出てゐる芝居へ見物に來ました。大抵、一興行に十遍ぐらゐは來ました。西村もよく「今夜は麻布の奥さんのところへ行くのだ。」と言つて、芝居から自動車で行きました。麻布へ行くと、西村は大抵泊まつて來るやうでした。

奥さんは西村のどこが氣に入つてゐるのでせう。西村の色の白いところが氣に入つてゐるのでせうか。西村の目のぱつちりとしたところが氣に入つてゐるのでせうか。西村の口元の可愛いところが氣に入つてゐるのでせうか。勿論、さういふ點も氣に入つてゐるには違ひないのですが、そんなことよりもつともつと氣に入つてゐるのは、西村の花が上手なことでした。

教育のない奥さんは、花の勝負の外に道樂といふものを知りませんでした。奥さんが西村の出てゐる芝居へ來てゐない時は、きつとどつかで花合戰をしてゐる時でした。西村が麻布へ來ると、奥さんはいつも夜明かしで花を引くのです。勿論、奥さんは西村の敵ではありませんでした。西村は一晩麻布へ行くと、いつも纏つた金を持つて歸つて來ました。それでも、奥さんには西村が一番氣に入つた相手でした。

或晩、西村が麻布を訪ねますと、奥さんがいつもになく靑い顏をして、ふさいでゐました。

「奥さん。どうしたのです。」

と、西村が訊きますと、

「すつかり負けつちまつたの。」

と、奥さんが答へました。

「負けたつて好いぢやありませんか。」

と、西村が申しますと、

「それが唯の負け方ぢやないのだよ。」

と、奥さんが言ふのです。

「一體、どこでそんな負け方をしたのです。」

「濱町（はまちやう）の春日（かすが）でさ。」

「へえ。春日で、餘程大きいのでしたか。」

「何しろ來る人が、株成金だの大所（おほどこ）の旦那だのばかりなんだらう。十圓花のびんと來るやうなのさ。」

「好い氣持でせうな。あつしも一生の內に一度はそんなのを遣つて見たいな。」

「勝てば好い氣持だらうが、負けちやああんまり好い氣持はしないね。」
「負けた負けたつて、一體どの位負けたんです。」
「五つばかりさ。」
「五つといふと、大きい五つですか。」
「五百圓さ。」
「え。五百圓。そいつあ大變だ。」
流石の西村も、これには驚きました。
「一體、どの位の間に、そんなに負けたんです。」
「三日三晩、夜通しでやつたのさ。お結びを食べながら――一文なしになつて、外へ出ると、人の顏がみんな黄いろく見えたよ。」
「へえ。それは近頃での大合戰でしたね。で、初めつからずうつと惡かつたのですか。」
「初めから惡けりやあ、何ぼあたしだつて、そこまで深みへはひりやあしないよ。一時は二百圓から好かつたのだからね。それが、二日目の晩からがたがたと惡くなつたのさ。」
「なんしろ、それは大變でしたな。」
西村はかう言ひながら、急に失望したやうな顏をしました――いつも麻布へ來れば、相當な金が握

つて歸れるのに、奥さんがそんなに負けてゐるのでは、今夜はとても駄目だと思つたのです。

「ところで、西村さん、お前さんに相談があるんだがねえ。」

奥さんは、西村がそんな事を考へてゐるとは知らずに、何か賴みでもあるやうな顔をしました。

「何です。あつしの身に叶ふことなら、御相談に預からうぢやありませんか。」

西村は少しの責任をも感ぜずに、唯いつもの口癖でかう言ひました。

奥さんは暫く言ひにくさうに、もぢもぢしてゐましたが、やがて思ひ切つたといふ風に、膝を進めました。

「この頃は內の方も景氣が惡いやうだし、そこへ持つて來て、あたしがこんな大穴を明けてしまつたのだらう、一寸支那へも言つて遣りにくいのさ。」

「大きに。」

「そこで、お前さんに相談があるんだが、お前さん、あの赤坂のお常さんを知つてるだらう。」

「お常さん。」

「ほら、もと常吉と言つた春本の藝者さ。こなひだ、連中で芝居へ來てゐたらう。」

「ああ、あの今お妾になつてるといふ。知つてます。知つてます。ちよいと小意氣な人でせう。」

「さうさ。あの人がこの頃ちよくちよく內へ札を合せに來るんだがね。何でも、大層好い旦那をつか

まへてゐるらしいんだよ。」

「さうでせう。こなひだ、ちよいとお茶屋で見ただけですが、持物なんざあ大したものでした。」

「あの人が一度お前さんと手合せがしたいと言つてるんだよ。」

「へえ。そいつあ有難いな。」

「相談といふのはそこだがね。近い内に、芝浦かどつかへあの人を呼ぶから、お前さんそこへ來て、一つあたしの味方をして、根こそぎ取らしてくれないか。」

西村は少し考へました。別段それを惡いことだと思つたのではありません。唯、そんな事をして、自分にどれだけの利分があるのだらうと思つたのです。

「それはわけのない話ですが、少し罪なやうな氣がしますね。」

「なあに、向うはどうせ唯絞り取る金ぢやあないか。」

「さう言へばさうですが、現在あなただつて、有り餘る御身分でゐながら、こんな目に會やあ、やつぱり困るんですからね。」

奥さんもこれには一言もありませんでした。併し、奥さんは西村の腹をよく見拔いてゐました――西村がこんなことを言ふのは、何も奥さんに反對しようとしてゐるのではないのです。そんなことをするなら、そんなことをするだけのことがなければならないと思つてゐるのです。西村は報酬を求め

てゐるのです。返禮が欲しいのです――奥さんはそれをよく知つてゐました。

「その代り、お前さんがそれだけの事をしてくれれば、あたしもきつとそれだけのことはして上げる積りだよ。」

奥さんがかう言ひますと、西村は直ぐ膝を乘り出して來ました。

「さうですか。」

「さうともさ。誰が可愛いお前さんに唯働かせるものかね。」

「ぢやあ、どうしてくれるんです。」

「あのお常さんを取り持つて上げようぢやないか。」

「ほんとですか。」

「ほんとともさ。」

「何だか、あぶなつかしい話ですね。」

「大丈夫だよ。お常さんはお前さんに氣があるんだから。」

「へえ。さうですか。」

西村は急に希望を持ち始めました。

「どうだい。やつておくれかい。」

「やりませう。なあに、あんなものは一振りでさあ。」

「では、もう樂までは二日しきやないから、樂の明くる日あたりに、竹芝かどつかへ呼ぶからね。お前さん、きつと來ておくれよ。」

「ええ、きつと參ります。」

こんな事で、相談は直ぐ纏まつてしまひました。

世間から見れば、隨分恐ろしい相談なのですが、心の荒んだ二人には、それがまるで遊びに行く相談か何かのやうでした。

西村の出てゐる芝居が樂になりますと、直ぐその明くる日、奧さんは赤坂のお常さんを、芝浦の竹芝館へ呼びました。

かねて話もしてあつたことですから、お常さんは直ぐとやつて來ました。

「まあ。お常さん。よく來て下すつてねえ。」

奧さんは、お常さんの顏を見ますと、直ぐかうお愛想を言ひました。

「もつと早く上がるんでしたが、生憎、來る日でもないのに遣つて來たもんですから。」

「まあ。旦那が入らしてたの。それはお氣の毒だつたわねえ。」

奧さんはかう言つて、氣の毒さうな顏をしましたが、おなかの中ではしめたと思ひました。旦那が

來たのなら、きつと纏まつた小遣をねだつて來たに違ひないと思つたからです。

「あの、奥さん。西村さんはまだ見えませんの。」

お常さんは直ぐとかう訊きました。

「もう直き來るでせうよ。何だか一軒寄り道をして來るとか言つてましたつけ。」

奥さんは意味ありげににやりと笑ひながら、かう答へました。

「やつと、思ひが叶ひましたわねえ。どうか、今夜はみつしり敎へて頂かなくちやあ。」

「でも、お常さんは中々うまいから、西村の方がお弟子入りをすることになるかも分りやしなくつてよ。」

「あんな御冗談ばつかり。西村さんに敵ふ者は東京に一人だとか二人だとか言ふぢやありませんか。それに、失禮ですけど中々色師なんですつてね。」

「失禮なことはないわ。あたしもそれは承知の上よ。そこが又あの人の面白いところですわ。一苦勞して見ちやどう。」

「でも、奥さんのやうな方がおありなのに。」

「あたしのやうなのは幾人ゐるか知れやしないわ。そんなことを氣にするお前さんでもないでせう。」

「あら。奥さん隨分ですわ。」

こんな話をしてゐるところへ、西村が汗を拭き拭きやつて來ました。

「おや、大層お話が持ててゐますね。」

西村は顔に似合はない太い聲でかう言つて、いつもの癖の引き笑ひをしました。

「あら、お前さん、遲いぢやないの。さつきから、お常さんがお待ち兼ねぢやないか。」

「どうも濟みません。ちと野暮用でね。京橋の伯母さんのところへ寄つて來たものですから。」

「どこの伯母さんだか分つたもんぢやありやしないよ。」

かういふのが、いつもこの人達の挨拶なのです。さて、かういつた挨拶が濟みますと、奥さんは改めてお常さんを西村に引き合せました。

「始終奥さんからお噂は承つてをります。また毎度御見物を有難う存じます。」

西村はかう言ひながら、お常さんの前に兩手を突いて、丁寧にお辭儀をしました。

「およしよ。柄にもない。」

奥さんはいきなりかう言ふかと思ふと、疊の上に置いてゐる西村の手を、ぽんと上の方へはね上げました。そんな事をされても、西村は怒つた顔一つせずに、

「でも。これが地なんですもの。」

と言つて、平氣で笑つてゐました。

お常さんは、さつきからの二人の樣子を見て、この分ぢやあこの先どんなに當てられるか分からないと思ひました。それと同時に、こんな樣子を見せつけられて、ぼんやり默つて見てゐるのは、女の恥だと思ひました。お常さんは奥さんに對して、少し敵對の心を持ち始めたのです。

「兎も角、もう時分時だから、御飯をたべてから始めることにしようぢやないか。」

やがて、奥さんがかう言ひますと、西村は直ぐ贊成しました。

「さうですとも。兵糧を詰め込んでからでなくちや、戰は出來ませんや。實は、小生けさから一食もしないんで。」

「それが、丁寧に兩手を突いてお辭儀をした人の言ふ臺詞かい。」

「ほい。書拔が違つたか。」

西村は自分の扇子で自分の頭を、ぽんと一つぶちました。

誂へた料理の來る間に、西村は手水へ立ちました。すると、直ぐあとから奥さんが又二階を降りて來ました。

「お前さん、暢氣な事ばかり言つてゐて、あの一件は大丈夫なのかい。あたしや眞劍なんだよ。」

奥さんはかう言つて、今までとはまるで違つた恐い顏をしました。

「御心配にやあ及びませんよ。」

西村はだらけた聲でかう答へながら、やつぱり平氣な顔をして、笑つてゐるのです。

「なんだか賴りないねえ。」

「大丈夫ですつたら。安心して入らつしやいよ。」

「あぶないねえ。お前さんお常さんに惚れてるんだらう。氣が變ると承知しないよ。」

「御褒美が欲しいから、大丈夫ですよ。」

「ほんとに勝たしてくれるんだらうねえ。」

「ほんとに取り持つて下さるんでせうねえ。」

こんな話をしてゐる内に、西村は急に眞面目になつて來ました。さうして、自分がかうしたらかう自分があゝしたらあゝと、すつかり敵を欺す手順を奥さんに教へました。もう軍略はちやんと西村の胸中にあつたのです。それを聞くと、奥さんはやつと安心して、また二階へ上がつて行きました。

「宜いぢやありませんか。少しくつろいだらどう。そんなにお行儀をしてゐちや堪らないわ。」

奥さんは西村との立ち話が少し長過ぎたので、照れ隱しにこんなことを言ひました。

「まあ。御飯を頂いてから。」

お常さんはかう言つて、やつぱりきちんと坐つた儘、小さな銀の扇で、乳の下を煽いでゐました。

やがて、お膳が來ました。

お膳の上には、茄子の鴫燒だの、氷を入れた玉子豆腐だの、黑鯛の鹽燒だのが、段々に運ばれました。

お酒はお常さんも西村もいけませんでした。いける口は奥さん一人でしたが、奥さんもその晩は餘り盃を重ねませんでした。

お常さんは、お膳の上の物にも餘り箸をつけませんでしたが、胡瓜のかいやで御飯を一ぜん食べると急にお腹が痛くなつて來ました。

お常さんは、箸をお膳の上に置いて、暫く我慢をしてゐましたが、段々痛みが烈しくなるので、思はず「あつ」と聲を立てながら、兩手で下つ腹を抑さへました。

「あら。どうして。」

奥さんが心配して、かう訊きますと、お常さんは無理に笑ひ顔をしました。

「いいえ、少しお腹が痛いんです。」

「あら。それはいけないわねえ。何に當つたんでせう。」

奥さんがかう言ひますと、それを否定するやうに、西村が首を振りました。

「でも、あつし逹も同じものを頂いてるんですからねえ。」

西村はさう言ふかと思ふと、直ぐ座蒲團を立ちました。

「兎に角、何か藥を貰つて來ませう。」

「いいえ。それには及びませんですよ。」

お常さんが遠慮して、かう言ひました。併し、西村はそれには答へずに、どんどん下へ降りて行きました。

やがて、西村は自分で粉藥と白湯を盆の上にのせて來ました。さうして、それをお常さんに飮ませました。

「どうも濟みません。」

お常さんはさう言ひながら、西村の手につかまつて、西村の持つてゐる湯呑から白湯を飮みました。

併し、それでもお常さんのお腹は癒りませんでした。益々痛みが強くなつて來るばかりです。お常さんは兩手で帶の下を抑しながら、思はずそこへ突つ伏してしまひました。

「少し橫になつたらどう。」

奧さんがかう言ひますと、西村は廣いところへ手早く座蒲團を二つ繫げて、そこへお常さんを抱へるやうにして連れて來ました。そして、戸棚の中から括り枕を一つ探し出して來ると、それをお常さんの頭の下へ入れました。

お醫者を呼ばうとしましたが、お常さんはそれを斷りました。お常さんはお醫者に體を觸られるのが大嫌ひだと言ふのです。西村は奥さんと代り合つて、お常さんのお腹を摩つてやりました。

段々夜が更けて來ましたが、お常さんのお腹は中々癒りません。お常さんに聞くと、別に吐氣を催すのでもなければ、下痢を催すのでもないのです。唯、しくしくと針を刺されるやうに右の下つ腹が痛むのだと言ふのです。

「どうせ、今夜は夜明かしの覺悟だつたんだから、一つゆつくり寢て見たらどう。合戰はあしたのことにして。」

奥さんがかう言ひますと、お常さんは嬉しさうに笑ひました。

「さうさせて頂きませう。少し寢れば癒ると思ひますから。」

「ぢやあ、西村を看護婦につけときますからね、氣を落ちつけて、ゆつくりお休みなさい。」

奥さんは西村の顏を見ながらかう言ひました。西村を附けとくのは少し危險だとは思つたのですが、この際自分があんまり深切に看護するといふことは、何となく氣が咎めました。それに、どうせ一度は取り持つ仲なのだからとも思つたのでした。

奥さんの命令で、夜具が二組と蚊帳が二張り運ばれました。

お常さんの體が夜具の上に運ばれて、その上に白い蚊帳が釣られました。西村はその蚊帳の中へは

ひつて、お常さんの帶を解いてやつたり、足袋を脱がせてやつたりしました。
「西村さん。お前さんは起きてゐなけりやいけないよ。起きてゐてお常さんの面倒を見て上げなきやいけないよ。」
奥さんはお常さんのはひつてゐる蚊帳の外から、かう聲をかけると、自分は隣り座敷に釣られたもう一つの蚊帳の中へどんどんはひつて行つてしまひました。
「ぢやあ、お常さん。御免なさいよ。」
奥さんは自分の蚊帳の中でかう言ふかと思ふと、直ぐ横になつてしまひました。

奥さんが輕い鼾(いびき)を立てる時分になると、お常さんのお腹の痛みが急に留まつてしまひました。
「有難う。西村さん。お蔭樣でもうすつかりよくなりました。」
お常さんは心から感謝するやうに、西村の顏を見上げながら、かう言ひました。
「さうですか。それは好い鹽梅でした。では、ゆつくりお休みなさいまし。」
西村はかうは言ひましたが、今更お常さんの手前、奥さんの蚊帳の中へはひつて行くわけにも參りませんでした。
お常さんも、「では、あちらへ入らしてお休み下さいまし。」と言ふのも可笑しいし、さうかと言つて

「では、ここで休んで入らつしやいまし。」と言ふわけにも行かず、暫く困つて默つてゐました。併し、西村はいつまでもお常さんを困らせては置きませんでした。自分も決していつまでも困つてゐるやうなことはしませんでした。

花の方が後になつて、女の方が先きになつてしまつたのです。

お常さんの病氣が癒つたので、その明くる日は朝から三人で合戰を始めました。

併し、西村は人情にほだされて、もうお常さんを欺すことが出來なくなりました。

それでは奥さんに濟まない濟まないと思ひながらも、西村はお常さんが勝つやうに勝つやうにとしました。

奥さんは一生懸命に、きのふ西村が敎へたきつかけの來るのを待つてゐましたが、いつまで經つても、中々それが遣つて來ません。それでも、初めの三四度は、だまを出すのだと思つて、我慢をしてゐましたが、六番になつても、七番になつても、お常さんが勝つばかりです。

奥さんは自分のを出す上に、西村の元手まで出すのですから堪りません。忽ちの內に、百圓ばかり負けてしまひました。

「御覽なさい。お常さん。だから、あたしの言はないことぢやないでせう。ゆうべのお腹が當つたん

ですよ。」

奥さんは、強ひて笑ひながら、こんな冗談を言ひましたが、もうお腹ん中は煮えくり返るやうでした。奥さんは一勝負濟むたんびに、恐ろしい目をして西村を睨みつけました。

お常さんはなんにも知らずに、自分の運が好いのだとばかり思つてゐました。そして、男は奥さんの知らない内に自分のものになるし、花にはどんどん勝つし、やつとこれできのふ散々見せつけられた腹癒せが出來たと思ふのでした。

西村の腕は冴え過ぎる程冴えてゐました。奥さんがどんな好い手を出しても、西村は巧みにそれを切り破つて行きました。そして、いつも終はお常さんに勝を持つて行かせました。

日が暮れると奥さんが言ひました。

「けふは餘つ程どうかしてゐるんだよ。第一、西村さんのだらしなさつたらありやしないぢやないか。」

「全くさうですね。」

西村は平氣な顔をして、こんな事を言ひました。

「あんまりお常さんが憎らしいから、けふは御飯を食べたら、直ぐ寢て、あした又新規蒔き直しにやらうぢやないか。」

奥さんはこんな事を言つて、夜食の膳が來ると、ひとりでお酒をがぶがぶ呑みました。そして、散

散々西村に當り散らして、どんどんひとりで先きへ寢てしまひました。

西村はたうとうその晩、お常さんに總てのことを打ち明けてしまひました。奥さんの近頃濱町でひどく惡かつたこと。それから西村を語らつてお常さんを裸にしようと企んだこと。その禮にお常さんを西村に取り持たうとしたこと。何から何まで、すつかりしやべつてしまひました。

お常さんは話を聞いてゐる内に、寒氣がする程、この人と附き合つてゐるのが恐くなりました。

夜が明けると、お常さんは、けさ早く旦那の來る筈になつてゐるのをすつかり忘れてゐたと言つて、奥さんのまだ寢てゐる内に、急いで赤坂へ歸つて行つてしまひました。

奥さんが起きると、そこには西村が一人で卷煙草を吸つてゐました。

「お常さんは。」

奥さんがかう訊きますと、西村は平氣な顏をして答へました。

「もう歸りました。」

「卑怯ぢやないか。どうして。」

「旦那がけさ早く來る筈になつてゐたのを、すつかり忘れてゐたんですつて。」

「噓おつきよ。お前さんが歸したんだらう。」

奥さんは口を極めて西村を罵りましたが、西村は何を言はれても一向平氣な顔をしてゐました。

「あんな素張らしいのが俺のものになつたんだ。奥さんに毒づかれる位なんでもねえや。」

西村は腹の中でかう思つてゐたのです。

奥さんはぷりぷりしながら、厭だと言ふ西村を、無理に麻布へ連れて歸りました。奥さんは、もう一いぢめ西村をいぢめて遣らなければならないと思つたのです。

「只今、赤坂のお常さんのところからお使でございました。」

家へはひると、直ぐ女中がかう申しました。そして、一封の手紙を奥さんに渡しました。

手紙はお常さんから奥さんに宛てた絶交狀でした。手紙の中にはお常さんが西村から聞いた奥さんの惡企みが細々と認めてありました。

奥さんはそれを讀むと、眞つ青になりました。そして、直ぐ西村に出て行けと言ひました。

「もう一切あたしの家へは出入をさせないから。あたしもう一切お前さんには會はないから。どうか、さう思つてゐておくれよ。」

西村は奥さんのかう言ふのを後にしながら、平氣な顔をして、麻布の家の門を出ました。

そして、その足で直ぐ赤坂のお常さんを訪ねました――きつと歡待してくれるだらうと思ひまして。

ところが、お常さんの樣子はもうすつかり變つてゐました。

「あたしのとこは麻布さんなどと違つて、いつ何時旦那が見えるか知れないんですから、どうか家へ來るのはよして下さいよ。もうこれから先きお附き合ひも出來るかどうか分かりませんから。どうか惡からず思つて下さいよ。」

お常さんは氷のやうな冷かな調子で、かう言ひました。

「でも、それぢやあ、姐さん。あつしがあんまり可哀さうぢやありませんか。」

西村は泣き出しさうな聲を出して、嘆願するやうにかう言ひました。

併し、もうお常さんは裁判官のやうに冷靜でした。

「あたしは商賣こそして來ましたが、あなた方のやうな人と附き合つたのは今度が始めてです。あたしは世の中が恐ろしくなりました。奧さんも恐い方です。あなたも恐ろしい人です。」

お常さんはかう言ふかと思ふと、ついと立つて、二階へ上がつてしまひました。

流石の西村も、これには手のつけやうがありませんでした。

西村はすごすごとお常さんの家を出ました。

夜　鳥

シャアロッテンブルクの Cauer Strasse、そこに村井の部屋が村井を待つてゐた。

村井はもう三年も前からここに來てゐる舊友の林田に、露西亞のモスクワから手紙を出して、半月も前からこの部屋を借りて置いて貰つたのである——林田はつい近所の Lützow 消防署の前に住んでゐた。

村井は日曜の朝早く伯林のフリイトリツヒ、シュトラアセの停車場へ著いた。林田と他に二人の友達が、自働車を持つて迎ひに來てゐて呉れた。村井は何處をどう通つたのだか分からないで、林田の宿まで來て了つた。家の中はまだ暗かつた。林田は瓦斯に燈をつけた。光つたピアノがある。坐り心地の好ささうな長椅子がある。大きな食卓がある。窓の側には書きもの机がある。壁の側には寢臺がある。白い瀬戸作りの暖爐がある。暖爐の前には肱掛椅子がある。モスクワの宿屋の六階の隅の部屋に半月も籠城してゐた村井の目には、林田の部屋が殊の外立派に見えた。

「上等だなあ。君の部屋は。」

「初めは誰しもさう思ふが、もう少し經つて見給へ、汚なくて堪らなくなるから。」
「さうかねえ。」
「君の爲に借りてある部屋の方が餘つ程上等だ。第一こゝよりは廣い。ピアノも好いのぢやないが、兎に角一臺ある。それに便利なのは卓上電話がついてる事だ。」
「電話はもう露西亞で懲り懲りした。或劇場の支配人からかかつて來たんだがね、佛蘭西語で、しかも話しが遠いと來てるから、何の事だかちつとも分かりやしない。徹頭徹尾 Bien! Bien! で通したが、終に要領は得ずにしまつた。第一こつちから掛けるにしても、中々あの番號が早く言へるものぢやないよ。」
「なあに、少し馴れりやあ何でもないさ。君んとこの上さんなんか巧いもんだ。」
「上さんといふのは若いのか。」
「若いとも、まだ廿一か二だ。まるで娘さ。」
「それで、上さんなのか。」
「さうとも、子まである。」
「教育はあるのか。」
「ないね。“Geben Sie mich……” と來るんだからね。併し、ピアノはちよいと彈くよ。」

「それで部屋代はいくらなんだ。」
「こことおんなじさ。四十マアク。」
「朝飯つきでか。」
「勿論、朝飯つきだ。」
「伯林は安いなあ、露西亞に比べると。」
「そりやあ安いさ。露西亞の單位はルウブルだが、ここの單位はマアクだからね。先づ三分の一だ。」
「そこで、晝と晩はどうしたものだらう。」
「僕んところへ來て喰べ給へ。晝はここの家で賄なつて貰ふのだ。家中で一緒に食ふのだから、多少會話の稽古にもなるよ。これが一マアクさ。夜は二人で自炊をやらうぢやないか。今まで僕もさうして來てるのだ。自炊と言つたつて、なんにも拵へるんぢやない。Schinken か Wurst を町で買つて來て、それをパンと一緒に食ふのだ。茶だけ臺所で沸かせばそれで好いんだ。一人前八十プヘニツヒもあれば澤山なんだ。」
さう極まると、村井は一刻も早く自分の住む所へ行きたくなつた。かれは自分の部屋といふのが早く見たかつた。自分の部屋で、ゆるゆる手足を延ばしたかつた。
併し、林田は中々放さなかつた。他の二人の友達も頻に留めた。村井は故國の新しい消息を三人の

前に物語らなければならなかつた。誰はどうしてる、彼はどうしてるといふ話から、誰のやつてる爲事はどうだ、彼のやつてる爲事はどうだといふ話に移つて行つた。話が故國についての議論になると、村井は俄に活氣を帶びて來て、今まで無理に引き留められてゐたのが、今度は自分の方から腰を据ゑて了つた。かれは朝飯から晝飯を通つて、晩飯になるまで、林田の部屋にゐた。晩飯が濟んでもまだ一人で氣焔をあげてゐた。

　村井が林田に案内されて、自分の爲に借りてあつた部屋へ著いた時は、もう夜の十二時を過ぎてゐた。村井の部屋は、大戸をはひつて階子段を四つ上がつた上にあつた。林田は豫め預つてゐた三つの鍵の内の一番大きいので大戸をあけた。そして、マッチをとぼしながら、村井の手を引いて暗い階子段を登つた。マッチは階子段を一つ登るたんびに一本宛燃えきつた。村井の部屋のある appartement の前まで來ると、林田は中位の鍵で、そこの戸口を明けた。そして、暗い廊下へはひると、今度は右手の戸を一番小さい鍵で明けた。家はもう寢靜まつてゐた。

　林田は手探りで、瓦斯に火をつけた、村井は始めて「自分の部屋」の中にゐた。成程、林田の言つた通り、林田の部屋よりは廣かつた。家具も殆ど林田の部屋のと同じやうなのが、同じ數程あつた。唯、壁にかけてある石版刷の額が村井には氣に入らなかつた。それは色の眞つ黑なオセロが、帳をかかけて寢臺の上のデスデモナを窺つてゐる圖であつた。食卓の上に行儀よく置いてある二つの灰皿も

村井には氣に入らなかつた。それは何處かの汽船會社が廣告にでも配つたものと見えて、獨逸の國旗を揭げた船の浪を蹴立てて走つてゐる所が、皿の底に燒きつけてあつた。ピアノの上にのせてある譜本は、"Puppchen" だの "Kino Königin" だのといふ、村井が今まで聞いた事もない Operette らしい曲の拔萃であつた。

「惡趣味だね。」

村井は思はず罵るやうに言つたが、折角林田が探して置いて吳れたのに、それでは濟まないと思つて、

「併し、結構だ。」

と、直ぐ附け加へた。實際、モスクワの宿屋の事を思へば、少しも不足を言ふ所はなかつたのである。

「まあ我慢するさ。」

林田は三十分程話すと、"Adieu" を「チウ。」といふ風に言つて、歸つて行つた。

明くる朝、村井が目を覺ますと、部屋の內はもう隅々まで明かるかつた。往來の方へ向いてゐるらしい大きな二つの窓の白レェスが、寒さうに身を竦めてゐる。窓の側の書き物机の上には、ゆうべ氣

のつかなかつた卓上電話が、寂しさうに光つてゐる……

一體、村井は電話が大嫌ひなのである。日本にゐる時から嫌ひなのである。村井がかけた電話で、一度で素直にかかつたのは今までに一度もなかつた。交換手が出ない。「話中」を食ふ。自分が番號を間違へる。局が番號を間違へる。出て來た人にけんつくを食ふ。無事な事は一度もなかつた……

卓上電話は殊に村井の嫌ふところであつた。卓上電話が目の前にあると、村井は少しも落ちついて爲事をする事が出來なかつた。かれは始終誰かに、自分のしてゐる事を見てゐられるやうな氣がした。誰かが始終自分の側に立つてゐて、用を待つてゐるやうに感じた。誰か用のある人が始終部屋の外まで來てゐるやうな心持がした……

村井は一度日本で、「仲立業」をする人の事務所を訪ねた事があつた。そこには卓上電話と電話帳と、それの乘つてゐる机が一脚あつただけで、廣いガランとした部屋の中に、その他の物は何一つなかつた。そこに住んでゐる人は、唯卓上電話一つで生きてゐるのだと思ふと、村井は堪らなく不快になつた……

村井がこんな事を考へてゐると、寢臺の側の戸がトントンと輕く外から叩かれた。村井は"Ja!"と、答へて、寢床の中から手を延ばして、戸を明けた。

牡丹色の朝着を着た若い女が、目の覺めるやうに部屋の內へはひつて來た。女は"Morgen!"を「モ

オシェン。」といふ風に言ひながら、珈琲とパンを載せた大きな盆を食卓の上に置いて、横目で笑ひながら直ぐ部屋を出て行つた。

一瞬間ではあつたが、女の姿は頭の先から足の先まで村井の目に映つた。女は小柄であるが、可なり肥つてゐた。好い色をした頰の肉づきが滴るやうであつた。子供らしい可愛い目が、物を言ふやうであつた。横に揃へて撫でつけた黄いろい髪の毛が、憎らしくない程度に波を打つてゐた。腰に括りのない派手な朝着が、ひどく艶めかしかつた。

「はゝあ、あれが上さんかな。」

村井がかう思つてゐると、今度は戸を叩かずに、黒い汚ない着物を着た婆さんが、默つてはひつて來て、村井の方は見も返らずに、暖爐に火を入れて、直ぐまた部屋を出て行つた。

村井は暖爐の中に無烟炭のおこる音を暫く聞いてから、やつと床を離れた。日本から持つて來た白フランネルの寢間着の儘、暖爐の側の洗面臺で顏を洗つて、寢間着の儘食卓の前の肱掛椅子に腰をかけて、珈琲を飲みながら、バタを間に挾んだ小さいパンを喰べてゐると、又さつきの若い女が、牡丹色の朝着の儘ではひつて來た。そして、直ぐ書き物机の側へ行つて、卓上電話のベルを鳴らした。電話の話は、早口な伯林訛りで、村井には少しも分からなかつた。話は直ぐに終つた。

女が村井に目で會釋をしながら、部屋を出て行かうとする途端に、戸が音もなく中へ押されて、五

つか六つ位の汚ない女の子がはひつて來た。汚ない鼠色の短かい着物に、よごれた前掛を顎の下から懸けてゐる。裸の足に小さな赤皮の靴のひしやげたのを履いてゐる。髮の毛が少なくて、色が惡い。鼻が小さくて、口が大きい。手には古びた護謨鞠を持つてゐる。

女は叱るやうに、子供の名を呼んで、兩手で子供を部屋の外へ押し出した。そして、もう一度目で會釋をしながら、自分も部屋を出た。子供の名は何と言ふのだか村井には聞き取れなかつた。

村井は朝飯を濟ますと、露西亞以來着通しの背廣に着換へた。そして、窓の側へ行つて、白レエスの窓掛を揭げて、窓の外を見た。村井の部屋は可なり高い所にあつた。下の往來を通る人が、烏瞰圖のやうに短かく見えた。往來は狹かつた。併し、モスクワなどと違つて、工事もよく出來てゐたし、掃除もよく行き屆いてゐた。向う側に列んでゐる商店は、いづれも小さくて、場末らしい感じを與へた。

と、又戶を叩く音がするので、林田でも來たのかと思つて、村井はわざと日本語で「おはいり。」と言つた。すると、はひつて來たのはやつぱりさつきの若い女であつた。いつの間にか、きちんと着物を着換へて、觸ると音のしさうな洗ひ立ての前掛を、腰の所で堅く締めてゐた。

女は村井が皺くちやにした儘離れた寢床の側へ行つて、兩手で羽根蒲團を抱へるやうにしたが、やがて勢よく音をさせて、七八遍兩方から狹むやうにしてはたいたかと思ふと、蒲團は直ぐ延び延びと

平らになつた。

「ゆうべ著いたの。」

女は蒲團を直すと、直ぐ村井の側へ來て、頭を直しながらかう聞いた。口の利きやうのぞんざいな事は、きのふ著いたばかりの村井にも直ぐ知れた。

「きのふの朝著いたんですけれど、夜まで林田君のところにゐました。夜おそく林田君がここへ連れて來て吳れたのです。」

「ああ、林田さん。好い人ねえ。獨逸語がよく話せてねえ——あなたも獨逸語出來るの。」

「ほんの少しばかり。」

「どこで敎はつたの。」

「日本で。」

「まあ、日本で獨逸語敎へるの。どこで。」

「學校で。」

「へえ。」

と、目を丸くする。

「日本の大學では、誰でもみんな獨逸語を習ふのです。」

「さう。それで、あなた何しに來たの。やつぱり Klavier のお稽古。」
「いいえ。僕は芝居を見に來たのです。」
「芝居を。では遊びに來たのね。お父さんがお金持なんでせう。」
「いいえ。それが僕の學問なのです。」
「ぢやあ、詞を覺える爲でせう。そんなら Frau Mosse のところへ習ひに行く方が餘つ程好いわ。芝居は高い割につまらなくつてよ。Kientopp の方が餘つ程面白いわ。ビスマアク、シユトラアセに今面白いのが掛かつてゐるわ。」
「キントツプつて。」
村井にはキントツプが分からなかつた。
「Kientopp 知らないの。面白いわ。」
と、又音もなく入口の戸が中へ押されて、又さつきの小さい女の子がはひつて來た。やつぱりさつきの汚ない護謨鞠を大事さうに抱へてゐる。
「ギヤアダ。」
と、女は又叱るやうに女の子の名を呼んだ。併し、村井にはその「ギヤアダ」といふ綴りが分からなかつた。

女の子は、叱られても何でも平氣でずんずん部屋の中へはひつて來た。そして、汚ない手で女の裾を掴みながら、何か頻にしやべり出した。女の子の言ふ事はまるで村井には分からなかつたが、時々Mama とか Mam'chen とか呼びかけるので、二人が親子である事はやつと確められた。

女の子はいつまでも一人でしやべり續けた。母親は子供の頭を撫でながら、笑つてそれを聞いてゐた。村井はよく動く女の子の口を、感心して眺めてゐた。

突然、卓上電話のベルがけたたましく鳴つた。母は子供を突き放して、嬉しさうに受話器を耳にした。話は十分程續いた。話の要領は相變らず分からなかつたが、時々 Fritz, Fritz と向うを呼びかけるので、相手が男である事だけは村井にも分かつた。

林田が村井を晝飯の迎ひに來ると、村井の家の上さんは臺所から飛んで出て來ていきなり林田とふざけ始めた。林田は耳を引つ張られたり、折角綺麗に分けて來た髮の毛をめちやめちやに掻き廻されたりした。村井はわけが分からずに、唯呆れてそれを眺めてゐた。

外へ出ると、村井は直ぐかう言つた。

「まるで娘だね」

「あれでお母さんなんだから驚くよ。」

「あの女の子は本當の子かい。」

「本當の子とも。」
「ちつとも似てないぢやないか。」
「親父似さ。」
「親父はやつぱりあすこにゐるのか。」
「もうゐないんだ。」
「死んだのか。」
「離縁になつたんだ。」
「親父の方がか。」
「ああ。あれは家つきの娘だ……併し、ちよつとおつな女だらう。」
「可愛い事は可愛いね。」
「もう亭主はないんだし、一遍物にしてやらうと思つて、連れ出したが駄目だつた。一緒に Kientopp 見に行つたんだがね……」
村井は林田の詞を遮つた。
「そのキントツプが分からないんで、さつき困つたんだ。何だい、キントツプつていふのは。」
「活動寫眞さ。」

「なあんだ。さうか。露西亞ではイルジオンと言ふね。やつぱり初めは分からないで困つたよ。」

林田は構はず前の續きを話した。

「Kientoppを出ると、馬車を雇つて當てなしに乘り廻したんだ。五マイルか六マイルは確に乘り廻したね。幾度も可なり危ない所までは行つたんだが、結局やつぱり駄目だつた。上部は浮氣でも、しんは締まつてゐるんだね。あいつ中々の Kokett なんだ。」

「驚いたな。そんな關係があつたのか。それで、さつきあんなに戯けたんだね。」

「なあに、あいつは誰とでもふざけるんだ。今に君にもじやれついてしやうがなくなるぜ。」

かう言つて、林田は面白さうに聲を上げて笑つた。

その日は Kaiser の誕生日であつた。併し、國旗を出してゐる家はほんの二軒か三軒であつた。日本の天長節のやうな賑ひは、場末のせゐか何處にも見られなかつた。それに空も曇つてゐて、寒かつた……

林田の家の家族は、もうみんな食卓について、手を膝の上に置いて、二人の來るのを待つてゐた。

食事が濟むと、二人は又 Mackut の家の噂を續けた――マクウトといふのが、村井の部屋を借りた家の名であつた。

「一體どういふわけで、あすこの亭主は離縁になつたんだ。」

「悪い奴なんだ。よその女と食つついてばかりゐやがつてしやうがないんだ。あすこの家へ越して來てからも、二階に住んでる猶太人の妻君かなんかと食つついてね。上の窓と下の窓とで、毎日のやうに交通をしたんだ、それでお袋がたうとう怒つて、離縁して了つたんだ。」

「上さんは怒らなかつたのか。」

「無論、一時は泣いて口惜しがつたんだが、今ぢやあもう忘れてるらしいね。お袋に內しよで、相變らず亭主と交通を續けてるらしいんだ。」

「頻に電話をかけたり、電話が掛かつて來たりするが、して見るとあれが亭主なのかな。」

「さうだらうよ。」

「して見ると、亭主はやつぱり上さんに惚れてゐるんだね。」

「なあに、多少財產があるものだからね、それが目當なんだ。この頃は、叉外に女を拵へたといふ話だ。」

「上さんは惚れてるんだね。」

「あいつは子供の時分一緒になつたんで、なんしろ始めての男だから、いくら悪いと知つてゐても、やつぱり離れられないんだ。」

「一體、亭主といふ奴は商賣は何なんだ。」

「新聞記者ださうだがね、いづれくだらない新聞の探訪か何かなのだらう。」

Mackut の家のお袋は、朝早く起きて、村井の部屋の暖爐に火を入れると、小さいショオルを肩にかけて、近所の造花の工場へ勤めに出て行つた。そして、夜まで歸らなかつた。夜歸つて來ても、大抵は内へはひらずに、直ぐ二階上の寢室へ行つて寢て了つた――だから、家は殆ど上さんと子供ばかりで暮らしてゐるやうなものだつた。

マクウトの家には、村井の借りてゐる部屋と、その隣りにある狹い寢室と廊下を隔ててその筋向うにある臺所と、この三つより外部屋がなかつた。上さんは臺所で編物をしたり、寢室でみしんのペダルを踏んだりして日を暮らした。併しながら、彼女は少しもぢつとしてゐられる質(たち)の女でなかつた。彼女は暇さへあれば村井の部屋へはひつて來て、村井の勉強の邪魔をした。

村井は朝起きると、晝までは大抵内にゐて、本を讀んだり書き物をしたりした。林田の所で晝飯を食ふと、それからは大抵表へ出て、買物をしたり見物をしたりした。夕方、林田の所へ一旦歸つて、簡單な晩飯を濟ますと、直ぐ又芝居見物に出かけて、大抵は夜おそくマクウトの家へ歸つた――それ故、朝の三時間程は村井にとつて一番貴重な時間であつた。彼はこの三時間の間に、前の日に受けた諸種

の印象を書きしるしもし、前の日に受けた諸種の刺戟に對して自己の內界を反省するのでもあつた。

村井の思索は屢々卓上電話のけたたましいベルでぶつ毀された。彼はその都度机を離れて、戶口まで上さんを呼びに行かなければならなかつた。上さんの話は大抵十分か十五分續いた。

電話が濟んでも、上さんは中々部屋を出て行かなかつた。大抵はその儘机に腰を凭せて、くだらない話をするのである――

「Japan て國はどこら邊にあるの。きのふお向うの煙草屋のお上さんに聞かれたから、きつと亞弗利加近所でせうつて言つといたわ。」

「冗談言つちやいけない。」

「ぢやあ、印度のそばかしら、黑い人のゐる近所には違ひないわね。」

話は大抵こんな事であつた。村井は屢々國民的の侮辱を感じたが、相手が相手なので、いつも默つて笑つてゐた。

電話が掛かつて來ない時でも、朝の用が一しきり濟むと、上さんはきつと村井の部屋へはひつて來た。そして、ピアノを彈いたり、歌を唄つたり、手の甲を腰に當てて、一人で部屋中を踊り廻つたりした。

村井も初めはそれを珍らしがつてゐたが、每日々々の事なので、しまひにはもう煩さくなつて來

た。彼は上さんがはひつて來ても、知らん顏で、本を讀んだり物を書いたりしてゐた。すると、上さんはきつと村井の側へそつと寄つて來て、後から村井の脇の下を探ぐるのである。

小さな「ギヤアダ」も母に負けずに村井の部屋へ侵入して來た。そして、村井に鞠投げの相手になれの、人形の診察をしろのと言つた。

或朝の事、「ギヤアダ」が村井の手を引つ張つて、頻に來て見ろ、來て見ろと言ふので、一緒に臺所へ行つて見ると、そこの壁に誰かが手製で拵へたボォル箱の電話機が懸かつてゐた。「ギヤアダ」は丈延びをして、不完全なベルを廻すと、紙で出來た筒を耳に當てて、巧みに母の聲色を使ふのである

「Lieber Fritz! けふは何時に來て。三時。もつと早く來ない。何。何。何。聞こえないよ。何。何。何。」

村井はそれを笑ひながら、ふとそのおもちやの電話機をよく見ると、箱の下の方に、下手な字で大きく、Gerda と書いてあつた——村井はやつと「ギヤアダ」の綴りが分かつた。

村井が夜おそく歸ると、時々隣りの部屋で、男の聲と女の聲がした。靜かな調子でそれが夜明けまで續く事があつた。女がきやあきやあ言つて騷ぐのを、男が低い聲で叱るやうな晩もあつた。男が醉ひどれた聲で同じ事を繰り返すのを、女が泣き聲であやまるやうな晩もあつた。男は大抵夜明け前に歸

つた。村井は男の歸つて了ふまでは、いつも寢られないで、神經をいらいらさせた。黑い着物を着たお袋が、村井の部屋の暖爐へ火を入れに來る時分は、いつも隣りはしんと寢靜まつてゐた。

村井は亭主といふ男にも、二三度戶口で擦れ違つた。丈の高い、頑丈な體格をした、目の鋭い、鼻の肥つた男である。彼はいつでも村井の目を避けて、こそこそと隣りの部屋にはひつたり、こそこそと外へ出て行つたりした。村井はその都度、一種の不快な感じに打たれたが、直ぐ又それを忘れて了つた。

村井は外國にゐる間の一日をも無駄にしまいとした。村井は每日唯自分の事をのみ考へてゐた。マクウトの家に對しても、村井は傍觀者よりの外の者でなかつた。

或晚、見る筈になつてゐた芝居のプログラムが急に變つたので、村井は珍らしく宵の內に家へ歸つて來た。家には誰もゐない樣子で、どこにも燈がついてゐなかつた。

村井はいつもするやうに、帽子も外套も着た儘、土足で食卓の上へ乘つて、天井から下がつてゐる瓦斯に手探りで火をつけた。それから食卓を飛び降りて、帽子と外套を長椅子の上へ脫いだ。

書き物机の上を見ると、日本からの手紙が澤山にかたまつて來てゐた。いづれも Nippon Klub へ一度着いて、そこから廻されて來たものである。

村井は一つ一つの手紙を繰り返し繰り返し讀んだ。故國の新しい消息は、村井を愉快にしたり不愉快にしたりした。村井は暫くの間、生れた國の事ばかりを思つてゐた――やがて自分の歸る國である、歸らなければならない國である。彼はその國と今の自分とを比べて、一種の寂寞と悲哀とを感じた。

突然、表の戸口で訪問のベルが鳴つた、村井が出て見ると、一人の丈の高い、瘦せた娘が寂しさうに立つてゐた――

「お上さんもう歸りましたか。」

「まだ歸らないやうですよ。」

村井がかう言ふと、娘は困つたやうな顏をして、

「もう歸つてる筈だのにねえ。どうしたんだらう。」

と、獨語のやうに言つた。

「何か用があるんですか。ここへ來いと言はれたんですか。」

「ええ。今まであたしのところにゐたんです。直ぐ歸るから家へ來て呉れろつて言ふもんですから、それで來たんです。」

娘の物哀れな樣子は、何がなしに村井の同情を惹いた。村井は娘を素氣なく返すに忍びなかつた。

「ぢやあ、はひつて待つてゐたらどうです。僕の部屋で。」

「でも。」
「好いぢやありませんか。一向構はないんだから。」
「でも。」
「約束したなら、きつともう歸るに違ひないから、僕の部屋で待つてらつしやい。」
村井は無理に娘を自分の部屋へ引き入れた。この家の事情を知つてゐた村井は、この娘が何かこの家に特別な關係を持つてゐるやうに思つた。村井は多少好奇の心に驅られたのである。
娘は恐る恐る村井の部屋にはひつた。明かるい瓦斯の光は、娘の姿を遠慮なく照らした。娘は漬かつてゐた水の中から、たつた今救ひ出されて來たやうな装をしてゐた。薄い着物はよれよれになつてゐて、縞目も分からなかつた。鼠色に汚れてゐる前掛は、所々水にしめつてゐた。この冬空に、帽子も冠つてゐなければ、肩掛もしてゐず、外套も着てゐなかつた。肱から先を出した兩腕は、寒さに色を失なつてゐた。
「お掛け。」
村井は娘を食卓の側の肱掛椅子に腰かけさせた。そして、自分はそれと向ひ合つて、長椅子に腰をおろした。
「お前さんの家は何處。」

「あの、つひ筋向うの角のビイル店ですの。」
「へえ。それで、この家の上さんに何の用があるの。」
「さつきここのお上さんと旦那がビイルを飲みに來ましたの。その御勘定を貰ひに來ましたの。」
村井は一度失望した。娘は唯それだけの用で來たのである。併し、娘の如何にも世に虐たげられてゐるやうな樣子は、決して村井を全然冷淡にしなかつた。
「ここの上さんはよく旦那と君の家へ飲みに行くかい。」
「ええ。しよつちう來ますわ。大抵、毎晩來ますわ。」
「さう。それで、君はそのビイル店の娘さんなのかい。」
「いいえ。あすこは伯父さんの家ですわ。」
「伯父さんの家の手傳ひをしてゐるのかい。」
「ええ。」
「ぢやあ、伯父さんとこに泊つてゐるんだね。」
「いいえ。夜はここの家の一番下の部屋へ來て寢ますの。」
「一番下」といふのは、一階よりもも一つ下の部屋である。物置のやうな、暗い汚ない部屋である。掃除人や門番の住んでゐる所である。村井は一しほ娘が可哀さうになつた。

「伯父さんとこで月給か何か呉れるのかい。」
「なんにも呉れやしませんわ。」
「ぢやあ、唯喰べさして呉れるだけかい。」
「ええ。それも大抵ねばねばした黑パンに Kohl ぐらゐなもんですわ。」
「それで、君の爲事は忙しいのかい。」
「ええ。随分忙しいんですよ。朝は大抵七時に起きて、店へ行つて、お掃除をするんです。それから臺所の手傳ひをして、珈琲をこしらへたり、パンを切つたりしますの。それから子供の守をしながら、仕入れ物の使ひに行くんですよ。もうお晝からは、職人や何かが來ますから、そのお相手をさせられますの。」
「それで夜はおそいのかい。」
「大抵、二時か三時ですわ。」
「喧嘩や何かがある事はないかい。」
「大抵毎晩ありますわ。随分恐ござんすよ。いつかなんかピストルを打つんですもの。」
「ぢやあ。まるで命がけだね。」
「ええ。でも、あたし命なんか何とも思つてゐませんわ。」

「なぜ。」

「だつて、こんな生活をしてる位なら。死んで了ふ方が餘つ程増しですもの。」

「併し　たとひどんな生活でも、死ぬよりは生きてゐる方が好いぢやないか。」

「いいえ。あたしさうは思ひませんわ。少しでも面白い事や樂しい事があればこそ、死ぬより生きてゐる方が好いんでせう。あたしの生活なんかには、少しも面白い事や樂しい事はありませんわ。苦しい事や厭な事や悲しい事ばかりですわ。生きてゐれば生きてゐる程、その苦しい事や厭な事や悲しい事が殖えて來るばかりですわ。だから、生きてるより死んで了つた方が餘つ程よござんすわ。」

娘はかう言つて、自分の汚れた手をぢつと見詰めた。

村井はその晩始めてこの娘に會つたのである。彼はまだこの娘について何一つ委しい境遇を知つてゐるのではなかつた。しかも、この娘の單純な厭世觀は、不思議に村井の肺腑を抉つた。

村井は思はず、娘の汚ない手を執つて、娘の汚ない髮の毛を撫でた。

「けれども、世の中には友達といふものがある。君にだつて友達はあるだらう。」

「あたしの友達は伯父さんとこの三つになる男の子だけです。」

「ぢやあ、今夜から僕が友達になつて上げよう。」

「だつて。あなたは外國の方ですわ。」

「外國人は友達になれないのかい。」

「だつて、あなたは學生さんでせう。學校を出れば、直ぐ遠くへ歸つて了ふんでせう。」

「どうだか分からない。或は一生ここにゐるかも知れない。」

娘は少しも信じないやうな目つきをして、寂しく唇で笑つた。

「兎に角、あしたの晩一緒に芝居へ行かう。伯父さんにお金を拂へば出して吳れるだらう。」

「ええ。そりやあ出して吳れますけれど、あたし着てく着物がないわ。」

「構ふもんか。僕だつてこれで行くんだ。着物なんてものは、着てゐる人の心持で、錦も襤褸になるし、襤褸も錦になるものだよ。」

「そりやあさうねえ。」

「ぢやあ一緒に行くかい。」

「ええ。」

「ぢやあ切符を二枚買つとくよ。」

村井は立ち上がつて、書き物机の引き出しから、日本の藝者の繪端書を三四枚出した。そして、それを娘に與へた。

「みんな日本の女だよ。綺麗だらう。」

「綺麗ですわねえ。」

娘は貰つた繪端書に村井の署名を求めた。村井は他の繪端書を出して、娘に署名を賴んだ。娘の名はElsa Kawelkeといふのであつた。村井はそれを貰ふと、その下へ“L'Oiseau de la Nuit”と書いた。

「それは何の事。」

「夜の鳥といふ佛蘭西語だよ。」

「なぜ、そんな事をお書きなすつたの。」

「君が僕の部屋へ飛び込んで來たのは、まるで塒に迷つた鳥が、戶まどひをしてはひつて來たやうだつたもの。」

娘は始めて聲を上げて笑つた。

村井も誘はれて一緒に笑つた。

途端に、表の戶口の鍵で明く音がして、男と女の賑やかに笑ふ聲がした。

村井が部屋の戶口を明けると、歸つて來た上さんと亭主は、不遠慮に村井の部屋を覗き込んだ。二人は村井の部屋にエルザが坐つてゐるのを見ると、聲を上げて一緒に笑つた。さうして、二人で村井の部屋へどんどんはひつて來た。いつも村井を避けてゐる亭主も、どうしたのか平氣ではひつて來た。併し、不禮な亭主は、外套も脫がなかつたし、帽子も冠つた儘であつた。

眞面目に沈んでゐた村井の部屋は、忽ち野蠻に騷がしくなつた。
「Herr Doktor!エルザは中々好い女でせう。さうぢやありませんか。」
亭主は初對面の挨拶もせずに、いきなり村井にこんな事を言つた。
「エルザさん・お前さんこの旦那に惚れたんだらう。え、さうだらう。」
上さんは上さんで又こんな事を言つた。
亭主は外套の隱しから、白い紙の袋を出して、その中から葉卷を二本拔いた。そして、一本を自分の口に銜へながら、一本を村井の口へ突つ込んだ。村井は甚だしい侮辱を感じたが、相手を恥ぢさせるにはどういふ態度をとつたら好いか、それが分からないので、唯默つて堪へてゐた。
夫婦でない夫婦は村井の前で、抱き合つたり、Kuss をし合つたりした。そして、エルザにも村井を Kuss しろと言つた。

上さんが金を拂ふと、娘は禮を言つて直ぐ歸らうとした。併し、亭主は中々返さなかつた。
「泊つといで。泊つといで。村井さんの部屋へ泊つといで。俺も隣りの部屋へ泊つて行くんだから。」
さう言ひながら、亭主は上さんの手を引いて部屋の外へ出た。さうして又、Kuss, süsser Kuss!と叫びながら、戸口をバタンと締めて、外から鍵をかつて了つた。

村井と娘は思はず顔を見合つた。初めは二人も呆れたやうな目つきをしてゐた。やがて、二人は思ひもかけぬ「機會」を意識するやうな目つきをした。最後に、二人の目は總てを忘れた愛情に燃えて來た。

突然隣りの部屋で、怪しい笑ひ聲がした…………

その明くる日から、村井はもうマクウトの家の傍觀者である事が出來なくなつた。

（一九一五、三、二〇）

帽子の日記

——習作第一——

十月五日。

けふはひどい日に會つた——あぶなく命を落とすところだつた——

おれはけふ午後の三時頃、銀座の店でこの男に買はれた。おれは New york の Stetson 會社から遥遥やつて來た黑の中折帽だ。形は $6\frac{7}{8}$ だ。

この男は店で話をしてゐるのを聞いてゐると——日本語だから、よくは分からないが——なんでも筆を持つのが商賣らしい。おれ達の方で言ふと、Novelist とか Dramatist とかいふ奴らしい……洋服はあまり新式ぢやない。

この男は妙な男で、毎年冬になると、きつと黑い帽子を一つ買ふさうだ。「黑い帽子でなけりやあ、おれには似合はない。」と言つて、絕對にほかの色の帽子は買はないさうだ。さうかと思ふと、「黑い帽子は何を着てゐる時でも似合ふから好い。」などと言ふのだ。趣味なのか、實用なのか、おれには分か

らない。

裝はあまりよくないが、帽子だけはしつかりしたものを買ふやうだ。をととしは倫敦の Battersby の羅紗の毛の長い奴を買つたさうだ。これは中の滑り皮までが黑くて好いと言つて、ひどく喜んださうだ。だが緣が狹くて、廻りが上へ反つてゐるのと、リボンの巾の廣いのと、重さの重いのが氣に入らなかつたらしい。値段は日本で十六圓かそこいらのものだつた。

去年は、おれの City の Knox のを買つたらしい。やつぱり黑の中折だつたが、これは布地も形も大分おれに似てゐたらしい。ただ、やつぱりリボンが緣も帶も少し太過ぎのが氣に入らなかつたやうだ。「どうもリボンが太いと人を威嚇するやうでいけない。」なんて言つてゐた。よつ程氣の弱い男と見える――これは日本の値段で二十圓ぐらゐなものだつたらしい。

その次ぎがことし買はれたおれだ。

何と言つても、おれが前の二つの帽子に負けないことは確だ。緣が伸び伸びと廣くて、山もたつぷりあつて、布が柔かくて、重量が輕いのだ――かなり神經質な男の頭にのつても、帽子を冠つてゐるやうな氣はしないだらう。滑り皮にもわざわざ金字で FEATHER WEIGHT と入れてあるくらゐだ。

それに、第一おれはリボンが細い。緣でもバンドでも、出來るだけ細くしてある。しかも、それが特別に織らしたものだから、いくら細くても、しつかりしてゐる。決して毛ばだつたり、切れたりし

つこないんだ。

兎にも角にも、おれは Stetson 子だからな。Battersby つ子や Knox つ子に負けつこはないのだ。それは分かり切つた話なんだが、日本人は趣味が低いから、おれに目をつける奴はきのふまでなかつた――色の黒いといふのも、日本のしやれ者には不向きなんだな。その癖、自分達はみんな黒い顔をしてゐるくせに。

この男の注意をひいた時、さすがにおれも嬉しかつた。この男は單に黒い帽子といふので、おれに目をつけたのかも知れなかつた。リボンが細いので氣に入つたのかも知れなかつた。だが、そんなことはどうでも好い。大潟に一水だ。おれは嬉しかつた。

ところが、値段を聞いて、この男は目をまるくした――

「二十四圓……そいつはちつと贅澤だな。」

「贅澤」といふ詞を、自分で自分に叱るやうに言つて、一旦手に持つたおれを、また飾り棚の上に置いた。

おれは憤慨したな――何が贅澤なものか。日本の生活程度が低いから高く思はれるのだ。おれには立派にそれだけの値打があるのだ。いや、それ以上の値打があるのだ。デザインや材料は勿論のことだ。これだけのものを寫上げる職工の骨折は一通りや二通りではないのだ。針一本糸一筋ゆるかせに

通つてゐる體ぢやないのだ。第一、おれには命があるのだ。――世の中の帽子にやあ、命のないのが澤山あるが、おれには命があるのだ。しかも、それが少くとも三人の命なのだ。意匠をした人間と材料を作つた人間とおれをこれまでに作り上げてくれた人間の命なのだ。三人の命を二十四圓で買ふと思つたら、安いものぢやないか。一人前八圓だ。安過ぎるくらゐだ。勿體ないくらゐだ。禮を言つて買つてつて好いくらゐだ……

暫く考へてゐたつけ……おれを手にとつて見たり、そつと頭にのせて見たり、また元のところへ返して見たりして、暫く考へてゐたつけ……

たうとう思ひ切つて、買ふ氣になつた。

「ぢやあ、これ貰つてかう……少し贅澤だが……」

さう言ひながら、まだ自分で自分を責めてゐるのだ。意氣地のない奴だ。態度の不鮮明な奴だ――それでも、愈買つたとなると、さすがに嬉しいと見えて、直ぐ頭の上にのせた。鏡の前に立つた――誰にだつて似合ふやうに出來てゐるんだから、この男にもよく似合つた。やつ、ニヤリとした。

……頭は油つけのないオオルバックで、割合に形が好い。おれは好い工合に落ちついた。少し阿彌陀にかぶるのがこの頭の癖らしいが、それでも、ちつともぐらぐらするやうなことはなかつた……

「ぢやあ、これは置いてくから、あしたでも屆けて呉れ給へ。」

さう言つて、去年の Knox のを賣臺の上に置いた。惡い帽子ぢやないが、成程リボンが少し太過ぎる。それに日方がおれよりはかかるに違ひない――それに手入れが惡いと見えて埃が山の間に少し溜まつてゐる。

黒い帽子は絶えず丁寧にブラシで拂はないと、埃がすぐ目についていけないものだ。小さいブラシを始終ポケツトに入れて歩くぐらゐにしなけりや駄目だ――この男、まだそれを知らないのだらう。おれの代になつたら、敎へてやらなきやならないと思つた――懇意だと見えて金はそこで拂はなかつた。

尾張町へ出た……上野行や淺草行の電車の留まるところへ行つた……乘るのかと思ふと、暫く考へてゐたが、歩き出した。線路について京橋の方へ歩き出した……

すると、うしろから上野行のボギイ車が來て、直ぐ側を通つた……急にまた乘る氣になつたと見えて、先生そのあとを追つかけた。そして、飛び乘りをやつた――

といふと、體裁が好いが、實は乘りそこなつたのだ。

先生、あの後の乘降口のドアが二つに折つて留めてある――あのドアに斜についてゐる眞鍮の棒に手をかけたのだ。あのドアはぐらぐらしてゐるが、うしろでしつかり留めてあるんだから、その儘飛び乘つてしまへば好かつたのに……ドアがぐらぐらつとしたもんだから、危ないとでも思つたのか、

手をゆるめたんだ……

電車はもう交叉點を通り過ぎてゐるんだ。走る勢だからたまらないさ——先生、あほぬけに轉げ落ちてしまつた……

おれは逃げるひまがなかつた。往來の土と、あいつの後頭部との間に挾まつて、いやといふ程壓しつけられた……

途端に、おれは、どうしたはずみか、山の前の方に怪我をしてしまつた。後に怪我をするなら分かつてゐるが、壓された方でない、前の方に怪我をしてしまつたのだ。はずみといふものはをかしなものだ。

先生、背中ぢう泥だらけにして起き上がつた。先生の方はどこもひどくぶたなかつたと見えて、平氣な顏をしてゐる。尤も、頭はおれが保護してやつたんだからな……

だが、なにしろ、あの賑かなところだ。先生、さすがにきまりが惡かつたと見えて、あたりを見廻したものだ。だが、別に知つた人もゐなかつたと見えて、安心して、背中をはたいた……

それから、おれをぢつと見た。

見るも無殘な有樣だ。

泥だらけだ。皺だらけだ。形も何もめちやめちやだ——それがまだ店を出て、ものの十分と經たな

い内なんだから情ない。

さすがに先生泣きさうな顏をした。

何しろ今買つて來たばかりだ。

しかも、値段に驚いて、さんざ躊躇した揚句に買つて來たんだ。

自分では贅澤だ、贅澤だと思つてるんだ。

その帽子がこの體裁だ。

先生、暫く突つ立つた儘、ぼんやりしてゐた。

やがて、急に目でも覺めたやうに、おれをはたき始めた――布地(きれぢ)が好いから、泥は直ぐ落ちた。

それから、中から手を入れて皺を直し始めた――これも、どんどん直つた。あんなにめちやめちやになつたものが、よくこれだけに直るなあと思ふぐらゐ直つた。それはおれがやつぱり上等だからだ。こしらへ物でないからだ。中の中まで Genuine だからだ――

ところが、どうしても一箇所直らないところがあつた。それは、おれが怪我をしたところだ。ちよいと見ると、やはり外と同じやうに、急激な壓搾で出來た折れ目に過ぎないやうに見えるが、實はさうではないのだ。蟲目金か何かで見れば分かるが、おれはそこに長さ八分幅五厘ぐらゐな裂傷を受けたのだ。深さはほんの三厘ぐらゐなものだが、皮膚が切れたのだ――布地の表面が切れたのだ――毛

が切れたのだ。

先生には、それが分からないから、幾度もそこを兩方から平手で壓したものだ。いくら壓したつて直りつこはないのだから、いつまで經つても、そこに折れたあとが附いてるのだ……

先生、ひどく悲觀してしまつた。

暫くおれを冠つて見たり、とつて見たりしてゐた。

店へ行つて相談しようとも思つたらしいが――おれは人の頭にのると、大抵そいつの考へてゐることが分かるのだ――それも見つともないとも思つたらしかつた。

なんでも、丸善か何かへ本でも買ひに行くつもりだつたらしかつたが、ひどくがつかりして、その儘家へ歸る氣になつたらしかつた。

また尾張町の交叉點まで歸つて來ると、今度はカフエエ・ライオンの前から、新宿行の電車に乘つた。

さあ、これからが面白いところだ……だが、もう書きくたびれたから、あしたのことにしよう……

十月六日。

けふは、先生悲觀して、一日家に引つ込んでゐるから、日記を書くには甚だ都合が好い……

ところで、先づきのふの續きだ。

新宿行の電車に乘つたところからだ……

電車に乘ると、先生すつかり考へ込んでしまつた――その考へたことが餘程をかしいのだ。

先生は先づかう考へた――

……さつき電車から落つこちた時に、怪我をしなかつたのは不思議だ。下がしあはせにも敷石でもコンクリイトでもない土のところだつたせゐもあるだらうが、それにしても、よくどつこもぶたなかつたものだ……いや、ぶつた。頭はたしかにぶつた。併し、どうもなかつた。それは確に帽子のお蔭だ……さうだ、帽子のお蔭だ……

さう思ふと、先生、高い帽子を買つたのが惜しくなつて來た――なあに、どんな帽子を冠つてゐたつて、あの場合帽子が役に立つのは分かり切つた話だ。何もおれに限つたことはないのだ。第一、おれはそんなことの役に立つ爲に生れて來たのではないのだ。おれはそんな實用一方の帽子ぢやないのだ。つつかい棒でもなければ、救助網でもないのだ。おれはそんなことで有難がられたつて、ちつとも嬉しいことはありやしない――

だけど、先生はそれで滿足してゐるのだ。頭をぶたなかつただけでも二十四圓の値打はあると思つてゐるのだ……をかしな人間だ。隨分變つた男だ……

だが、その次ぎにこの男の考へたことは、もつとをかしな事なのだ――それは、なんでも三宅坂あたりから考へ始めたことだつた。それで、たうとう自分の降りる四谷見附まで、その事ばかり、繰り返し繰り返し考へてゐた――それはかういふことなのだ――

自分がけふ電車から落ちたのは、柄にもない贅澤をしたからだ。買つて買へない身分ではないが、自分並に自分の家族の生活や、自分並に自分の家族の着物などに較べて、たしかにこの帽子は贅澤だつた――電車から落ちて、買つたばかりの帽子がめちやめちやになつたのは、あれは神樣が自分に贅澤を戒めて下すつたのだ――

趣味は好い。美を慕ふのも好い……だが、贅澤はいけない……必要以上に贅澤をすることは確に罪惡だ……世間には、三度の食事も思ふやうに出來ないで困つてゐる人が澤山にある……それだのに、苟くも二十四圓といふ金を唯一箇の帽子に費すといふことは罪惡だ……罪惡には積極的なものと消極的なものと二種類あるが、消極的な罪惡の方が實は積極的の罪惡より惡いのだ……同胞を憎むといふことよりは同胞を愛さないといふことの方が罪は重いのだ……「憎み」の蔭には愛がある。併し愛の否定の蔭には愛はない……おれが平氣でこんな帽子を買つたといふことは、取りも直さず同胞に對する愛がないといふことだ……おれは同胞を憎んで、この帽子を買つたのではないのだ。同胞に對する愛がないから買つたのだ……おれは罪の中でも最も恐ろしい罪を犯したのだ……

どうも、この男の頭は餘つ程どうかしてゐる――どうもばかに氣が早い――そそつかしい――だから、電車から落つこちたりなんぞするんだ。罪惡問題の引合に出されるおれこそ好い迷惑だ――抑もおれは……と言ふと豪さうだが……人間に幸福を與へる爲に生れて來たんだ。冠つてゐる人間にも、それを見る人間にも、快適な感情を與へて、人生を幸福にしてやるつもりで生れて來たんだ……何が贅澤だ……何が愛の否定だ……何が罪惡だ……

先生さへあんな間拔けな「飛び落ち」なんぞをしなけりやあ、おれもあんな目に會ひはしなかつたのだ。何が神罰だ。自分が人に怪我をさせて置いて神罰もないものだ。この男は自分のした惡事を神様に塗りつけて置いて、それで好いと思つてゐるのだ……その方がよつ程罪惡だ……

それでも、先生のこの考へはなかなか先生の頭を去らなかつた。

電車を降りて、自分の家へ歸るまでも、そのことばかり考へてゐた。

……神の罰だ。贅澤の罰だ。

さう思ひ思ひ歩きながらも、やつぱり氣になるかして、時々おれを頭からとつては、例の負傷の箇所をさすつて見たり壓して見たりするのだ――どうしたつて直るものか。人間の傷と違つて、おれ達の傷は一度ついたら直りつこはないのだ――永遠の傷だ。

………書きくたびれた。けふはこれだけにして、又あしたあとを書かう。きのふの分がまだあるの

だ。家へ歸つてからの先生だ。それが愈出でて愈怪絶なのだ……

けふは先生たうとう一日外へ出なかつた。時々、おれを出して見ては、例の傷のところをさすつて見て、泣き出しさうな顏をしてゐる――やつぱり未練があるのだ。執着があるのだ――

十月七日。

けふもどうやら一日蟄居のやうだ。この間に日記の殘りをつけてしまはう。傷が時々ひりひりするが、たいしたことぢやないから、我慢して筆を取らう――

さて、五日の續きだ。

家へ歸つてからの先生だ――

先生家へ歸ると飯も食はないで考へ込んでしまつた――

「贅澤」といふ問題で頭が一ぱいなんだ。

抑も贅澤とは何だらう――自分の生活は。自分の家は。自分の衣食は。そんなことを考へてゐる內に、自分の職業その者が贅澤品のやうに考へられて來た――

藝術。

抑もこれが人生の必要品だらうか。人間が生きて行く爲には――幸福になる爲にはと言つても好い

——先づ第一に食はなければならない。それから、着なければならない。それから、住む場所がなければならない。これは確だ。古今東西を通じてあやまらない事實だ。

併し、藝術はどうだ。

腹の足しにはならない。着物の代りにはならない。雨露を凌ぐ屋根にはならない。

「魂の糧」だなどといふが、こんな糧がなくても、立派な精神をもつて、自分の爲事に努力してゐる人が世間には澤山ある……

どうも、藝術は贅澤品らしい。人生の必要品ではないらしい——して見ると、おれは贅物の製造をしてゐるのだ……

これはいけないと思つた。

誰かに說を聞かなければいけないと思つた。

先生、そこらの本をあつちこつちに引つくり返し始めた……

暫くすると、表紙の赤い小さな本を探し出した。

Emile De Laveleye といふ人の書いた "Luxury" といふ本だ。"Luxury" は日本語で言へば「贅澤」だ。

不思議な本を持つてゐる男だ。尤も、頭が變だから、持つてる本も變なのかも知れない。しかも、

それが列んでゐたところの隣りには、同じ叢書らしい裝釘で Wilson といふ人の「飲酒論」といふ本だの、著者不明の「愛蘭農民の社會學的研究」などといふ本が立つてゐるのだ――一體この男は、何が專門の研究で、どんなものを書いて生活してゐるのだらう……愈もつて不思議な男だ。

まだ、その上に不思議なことには、大分前に買つたものと見えて、本の表紙はもう赤い色が褪めてゐるのに、先生今までにまだ一度も目を通したことがないと見えて、袋になつたペエジが一つも切つてないのだ……

先生、まがひ象牙の紙切で、せつせとそれを切り始めた……やがて、しまひまで切つてしまふと、かぶりつくやうにして讀み始めた……

これはおれ達の方の詞だから、よく分かる――

相變らず、先生、氣が早い。

「最初の問題」とある第一章は直ぐに飛ばして、第二章の「贅澤とは何ぞや」といふところを讀み始めた――

「Baudrillart 氏は、その名著 "Histoire du Luxe" に於いて、贅澤の定義を求めようとはしなかつた。贅澤が何を意味するかは萬人が知つてゐると思つたからだ……」

ここまで讀むと、先生失望したやうに、あとを讀まないで、ペエジをめくつた……

「……舞踏室の女王が、ワルツの亂舞のなかで、一萬フランもするレエスのスカアトを破るとする。このレエスの價値は五萬時間の勞働に當つてゐる。しかも、極めて單調な、目に害のある勞働なのだ。それが僅一瞬間でめちやめちやにされてしまふのだ……」

おれはどうだらうと、先生思つた――

おれはそんなことはしない。おれはあの帽子を愛してゐる。あの帽子の作られた勞苦も認めてゐる。だから、あの傷をどうかして直してやりたいと思つてゐるのだ。おれはこの女のやうな勿體ないことはしてゐない――と思つた。

おれはこの男の蟲の好いのに呆れた。ダンスでレエスを切るのも、電車の「飛び落ち」で帽子に怪我をさせるのも同じことぢやないか……尤も、一萬フランと二十四圓ぢやあ、大分値段は違ふが……

先生、又ぱらぱらとペエジを飛ばした――

第三章だ。「贅澤を呼び起す感情」といふところだ――

「人間の感情で、贅澤を呼び起す原因になるものが三つある……」

これはやつぱり Baudrillart とかいふ人の說の引用らしい――

「虛榮と物慾と裝飾の本能とがそれだ……ここに高價な眞珠の首飾があるとする。或婦人がそれに四千磅拂つたとする。それは美しい物を持ちたい爲にしたことだらうか、或はそれをつけて自分自身を

美しくしたいと思つてしたことだらうか。いや、どつちでもない。立派な形が好いといふ點では、人造の眞珠の方が、こんな眞珠よりよつ程優つてゐるのだから。婦人がこれを買つたのは、さういふ高價な首飾を持つてゐるといふことが、自分の富のシムボルになるからだ……」

先生、ここまで讀むと、考へ込んでしまつた――自分には確にこの虚榮があると思つたのだ。二十四圓といふ値段のことが、自分の頭を離れないのは、やつぱり虚榮がする業だ。虚榮がなければ、値段のことなどは考へない筈だ……

馬鹿な男だ。二十四圓と四千磅が一緒になるものか。四千磅といへば、日本の金の四萬圓だ……二十四圓の――一千七百五十倍だ。

それを一緒に考へてゐるのだ――氣の弱い男だ、意氣地なしだ。

もう、その先きの說明も讀まなければ、「物慾」のくだりも讀まないで、先生、どんどんペエジをめくつた――今ので、讀むのが恐くなつたのだ――

裝飾本能のくだりでは、それが必ずしも悪いものでなく「趣味を淨化し、文化を進める」道具の一つになることが說かれてゐたので、ほつとした……やがて、贅澤と藝術との關係が出て來た……

先生、目を皿のやうにして讀み始めた――

「藝術は美の理想の實現或は或樣式の再現を目的とする。併し、贅澤は唯一つの目的を持つばかり

だ。それは、見せびらかすといふことだ。それ故、藝術の目的は、本質的に言つて、無私だ。贅澤の目的は本質的に利己的だ。眞の藝術家が熱烈に求めてやまない美その者は、贅澤の信仰家にとつて何を意味するか。それは唯光輝燦爛たるものより外のものでない。贅澤家は藝術をヤァドやポンドで支拂ふ。かれらは寶石や布に金を浪費するのと同じ心持で、藝術の傑作を買ふのだ……」

ここまで讀むと、氣の早いこの男はすつかり安心してしまつた――

藝術は贅澤品ではないのだ。兎に角おれの職業は贅澤ではないのだ――それが分かつたのは有難いと思つた……

まだ二十ペエジ讀むか讀まない内に、この男はもうこの本を閉ぢてしまつた――もうすつかり安心してしまつたのだ――どうもさうらしい。

飯を食ふと……間もなく寢てしまつた。

暢氣なのだか、心配屋なのだか、ちつとも分からない……

これで三日の日記はおしまひだ。

けふは、やつぱり時々おれを箱の中から出して――箱は Knox のがはひつて、きのふ屆いたのだ――撫でて見たり、壓して見たりするだけで、なんにもせずに一日暮らしてしまつた。

そして、やつぱり時々……贅澤だつたと思つたり……神罰だつたと思つたりする……それが強くな

つたり弱くなつたりする内に一日經つてしまつたと思へば好い……
夜になつて、雨が降つて來た。出不精な主人公はあしたも穴ごもりだらう。おれも箱の中で一日晝寢か——有難い。

十月八日。
朝方雨が晴れた。
……先生、服を着はじめた——例のあまり新式でないザムトの服を——
どつかへ出かけるのかと思つてゐると、おれを箱から出して、頭の上へのせた。一度のせたが、また脫いで、例の傷口をさすつた。それから又そつと頭の上へのせた——
家を出た——氣持の好い小春日和だ…………ゆうべ濕つた地面が乾きかけて、微に水蒸氣を上げてゐる……
家を出ると、先生は直ぐ又おれを脫いだ。傷をさすつた。又かぶつた。又とつた……
けさの先生の心持は大分また變つてゐる——
二十四圓もしたものをと、金のことばかりで胸が一ぱいになつてゐる……こんな高いものに傷をつけてしまつて、惜しいことをした……それはかり考へてゐる……

おれの傷ばかり氣にしてゐる――

さすつたり、撫でたり、壓して見たり――足元も見ずに歩いてゐる……

本村町の停留場へ出た。

電車を待つ間も……惜しいことをした……二十四圓もするものを……で、また撫でたり、さすつたりだ。

士官學校の坂の方から、爺さんが荷車を引いて來た。不思議なことに、爺さん草鞋をはかないで、足駄をはいてゐる……

そして、車の梶棒の外にゐて、紐を肩にかけて、それで車を引いてゐる……

車の上には長いものがのつてゐるのだ。

壁の骨になる梟竹(こまひだけ)といふ奴だ――おれが日本のことを知つてるのはをかしいと思ふかも知れないが、おれの持主が考へることは直ぐおれに分かつて來るのだから、どんなことだつて分からないことはないのだ。これもあとで分かつたことだ――細長い皮のついた儘の汚ない竹が山のやうに積んであるのだ……

爺さんは、おれの主人の前まで來ると、ぴたりと車を留めた――

「隨分したらうねえ、その帽子は。」

先生びつくりして首を上げた……まだ夢中になつておれをさすつてゐたのだ。

「けふ日は物が高いからねえ。」

人の好ささうな爺さんは、にこにこ笑ひながら、如何にも同情を寄せるやうに言つた。

「うむ。」

おれの主人は思はず溫顏を見せた。

「でも、旦那なんざあ金があるから好いが、おれ達はとても駄目だ。孫に學校帽子一つ買つてやるんだつて容易なことぢやあねえ。」

「なあに、僕だつて同じこつた。」

「じやうだん言つてらあ。そんな帽子が買へるだけだつてたいしたもんだ。」

「なあに、そんなこたあないよ。」

「いくらしたい。その帽子は……高いだらうなあ……三圓もしたかい。」

おれの主人はびつくりした……

爺さんは、高いだらう高いだらうと言ひながら、このおれを三圓に値踏したのだ……おれは腹が立たなかつた。こないだ、おれの主人に二十四圓では贅澤だと言はれた時の方が腹が立つた……なぜと言へば、うちの先生、それだけの金が拂はうと思へば拂へるのに贅澤だと思つたのだ。ところが、こ

の爺さんは、自分にはとても出せない高い金額でおれを評價してゐるからだ……

主人はおれの値段のことばかり考へてゐたところ、突然「三圓」と言はれて、度膽を拔かれた。度膽を拔かれると同時に、自分が恥づかしくなつて來た……爺さんが心からの敬畏を以て三圓と値をつけたものを、どうして二十四圓だなどと言ふことが出來よう……それはあまりの相違だ……聞いたら、爺さん目を廻すかも知れない……驚いて死ぬかも知れない……どうして、そんな殘酷なことが出來よう……

おれの主人が存外好い人間なことが、おれに始めて分かつた――おれはおれの主人に少し同情を持つて來た。そして、主人がどんな返事をするだらうと思つて、片唾を呑んで待つてゐた――

「もう少し高い……これは四圓した。」

主人はやさしくかう答へた。

「四圓……どうも、たいしたもんだね。」

さう言つて感心したやうに首を幾度も振つたが、やがてまた思ひ出したやうに、體を前の方へ屈めると、肩に力を入れて車を曳き出した……そして、挨拶もせずに、その儘がら〳〵行つてしまつた……

……これは四圓した。」

さう言つた瞬間に、おれの主人は救はれたやうな氣がした――

さうだ。四圓だと思へば好いんだ……物の値段などは意識次第でどうにもなるものだ……如何なるものに就いて言つても、本當の値段といふものが、神以外の誰に分かるだらう……

さうだ。これは四圓で好いのだ――それでも、さつきの爺さんが想像する最高の金額より一圓高いのだ……さうだ。四圓で好いのだ……

さう思ふと、何も彼も肩からおりた……

贅澤問題も、もうなくなつた……

おれの傷も、たいして氣にならなくなつた……

おれの主人は、輕い氣持になつて、おれを阿彌陀に頭へのせると、電車に乘らずに濠端を歩き出した……口笛を吹きながら……

（大正十二年五月十八日）

解説

谷崎潤一郎

私は故人が東京府立第一中學を卒業した年にその同じ中學の一年級に入學し、爾來一高、東京帝大文科と云ふ風に、いつも故人の出た跡を跡をと追つて行つた。茲に集めた短篇小說は故人としても青年時代の作品が多く、それらが發表された頃には私は一高や大學に在つて此の先輩の書いた物を愛讀したので、今回再び讀み返してみるとそぞろに懷舊の情に堪へない。のみならず、私が故人と相識つたのは故人二十九歲、私二十四歲の時ではあるけれども、同じ東京に生れ、同じ筋道を辿つて行つた一人として、此れ等の作品に描かれてゐる故人幼時の回想や、一高、大學時代の學生生活の記錄や、柳橋葭町邊の花柳界の情趣などは、私に取つても亦それぞれに思ひ出の種ならざるはなく、中にはそれと察し得られるモデルもあつて、讀みながら點頭せずにはゐられない。但し、かうして纏めてみると、發表當時氣が付かずにゐて今度始めて讀んだ物も中中多く、作品の由來、年代等に就き全く記憶のないものも相當にあるが、大體左の如く類別して、私に出來るだけの解說を試みることとした。

十三年。父の否定。騎兵士官。熊次の家族。ヂブラルタルの貝。

以上は主として故人の幼時の回想である。此れらの諸作が書かれた頃の文壇は作爲と云ふことを甚しく排斥する自然主義旺盛の時代であり、故人も兎角その影響を免れなかつた時であるから、扱はれてゐる題材には恐らく事實が多いのであらう。讀者は宜しく故人の傳記を參照せらるべきである。故人は山の手育ちであり、私は下町生れであり、四つ五つ歳も違ふので、此の頃の故人の生ひ立ちに就き何等知るところはないけれども、「十三年」の中に「一番町の武林」と云ふ寫眞屋の名が出てゐるのは、疑ひもなく後年小山内氏と共に「七人」の同人に加はつた武林無想庵氏の養父の家である。武林氏も恐らくは小學校から、中學、一高、帝大英文科卒業まで、始終小山内氏と一緒に來たので、私は故人の幼少年時代につき、故人自身よりも寧ろ武林氏からいろいろ聞いてゐることが多い。

しかしさう云ふ個人的興味を離れても、ここには明治年代の東京山の手の空氣がなつかしくも描かれてゐる。人力車、束髪、夜會髷の時代、軍人崇拜の時代、鹿鳴館のワルツ、ミニユエツトの時代、——昨今昭和年代に入つて明治文化の回想熱が頓に高まつて來たやうだが、此れらの作品が期せずして今の時好に合してゐるのも一奇である。而も豫めさう云ふ意圖で書かれたものでないのだから、尚面白いところもある。

私は此の中で「父の否定」を最も好む。此れは事實であるかも知れないが、甚だ小說的な「事實」である。

青泊君。病友。留任運動。追悼文。色の褪めた女。

「青泊君」と「病友」とは一高生活の記録である。當時の一高生は或る點に於いて大學生以上に多くの青年の羨望の的であり、全國秀才の集團であり、スクール・ライフ中の最も花花しいものであつた。此の青泊君の如きは一高的秀才のタイプであつて、當時かう云ふ人物がどの學年にも必ず一人はゐたものである。一高出身の作家にして一高のことを書かない者は恐らく一人もないだらうが、此の一篇は行文簡潔にして生彩に富み、「青泊君」の性格が躍如としてゐるばかりでなく、主人公を繞る寮生活の模様が鮮やかに寫し出されてゐる。誠に一高文學中の白眉であると云つてよい。私は學生時代に此れを讀んで故人の才筆に感服したものであつた。蓋し「青泊君」にはモデルがあるに違ひないので、故人も嘗てそんな話をしてゐたことがあつたやうに思ふ。

「病友」は作品としても好評だつたものであるが、私には別に忘れることの出來ない理由がある。たしか此の作が發表されたのは或る年の「新小說」の新年號で、令妹八千代女史の短篇と一緒に載つた筈である。當時私は大學か一高時代で、故大貫晶川の下宿で此れを讀んだ。晶川や私はその頃の文學青年に共通とも云ふべき世紀末的病的思想の影響で激しい神經衰弱に罹り、絕えざる強迫觀念、――「死の豫感」に惱まされ通したものであるが、此の作はさう云ふ私たちに異常な感銘を與へ、就中私よりも晶川の方が一層動かされて、「此れを讀むとどきッとする」と云つてゐた。然るにその後幾何も

なく、その語が讖を成したのかどうか品川は夭折してしまつた。私は品川の死を想ふ毎に此の「病友」を想ひ出すのである。

「留任運動」は大學生活の回顧である。作中の「先生」と云ふのは察するに小泉八雲のことで、教壇に於ける此の文豪の片影を傳へてゐる。今や小泉八雲二十五年祭の執行せられたる折柄、此の「留任運動」の作者亦亡し。まことに作者が引用してゐるツルゲネエフの語の如くである。

「色の褪めた女」。此れは初期の作中最も評判の高かつたものである。「病友」と同じ思想を取り扱ひ、自然主義の時代に早くもシムボリズムの先鞭を附けた作品で、メーテルリンクの影響が窺はれる。

空腹。巣鴨の鯉屋。沈默。風船賣。乞食。不思議。歸り道。近所。醉人。馭者。事業。蝙蝠傘。失明。軍醫の家。孫の巡禮。東京へ。掏摸。侮蔑。戰慄。消滅。秘密。眞空。祈禱。十分間演説。蚊。不男。夢。姉妹。手。粘土。後悔。捕縛。

正直のところ、私は此れ等の作品を餘り好まない。故人が文壇に打つて出た當初は、いかにも赤門出のチヤキチヤキの秀才らしい新鮮味があり、才氣煥發の趣があつたが、こゝへ來ると稍だれ氣味で、中にはほんのスケッチに過ぎない小品も多い。私の見る所では、故人は決して自然主義的傾向に適する人ではないのだが、元來器用な才人であるから、知らず識らず當時の風潮を迎へて書き飛ばしたものもあるであらう。兎に角此れらの中にはあの頃の自然主義作家、花袋、白鳥、風葉などの喜びさう

な題材が見出される。しかしキビキビした才能が却つて禍を成して沈痛味を缺き、白鳥氏程に成功してゐない。私がハツキリ記憶してゐるのは「文章世界」に出た「不思議」ぐらゐなものであるが、今度始めて讀んで見て「乞食」はちよつと面白いと思つた。乞食の子供を相手に氣輕に話をする、——故人にはたしかにさう云ふ飾り氣のない、無邪氣な半面があつた。

「孫の巡禮」には「十三年」や「父の否定」に呼應する自叙傳的事實が含まれてゐるやうに思ふ。凪葉の「生みの母」と孰方が先に出たか覺えてゐないが、あれから思ひついて書く氣になつたのかも知れない。

堀田の話。逸話。平氣。旅役者。先の亭主。夢中。梅龍の話。羽織。草市の晩。手紙風呂。總てを失ふ話。

これ等は嘗て赤木桁平君に攻撃された「遊蕩文學」の一種であるが、故人の才筆はかう云ふ世界の空氣や人物を活寫すること自由自在で、ここへ來ると又面白い。「夢中」に描かれてゐる夫子自身の醉態は、その道に於ても亦後輩の一人としてしばしば驥尾に附したことのある私の身には、何となく微笑を禁じ得ない。此の中の「三人の友達」とは誰々のことか、きつと今でも思ひあたる人があるであらう。「梅龍の話」の中の「姐さん」なる人は當時の名妓萬龍のことで、「大學生見たいな方」は後に萬龍の夫となつて新聞紙上に艶名を馳せた故恒川陽一郎であること明かである、故人は多少此の事實

なアテ込んで書いたのかも知れないが、それより寧ろ梅龍なる雛妓の口吻が輕妙に寫されてゐる。眞に待合の一室に坐して、可愛い朱唇から洩れて出る聲を聞くやうに感ずる。「草市の晩」は震災前の銀座の情景を甚だ巧みに摑まへてゐる。かう云ふ作品は故人の獨擅場で、ちよつと他に眞似手がない。氣の利いた好箇の短篇である。

　夜鳥。帽子の日記。

「夜鳥」は洋行土産である。「帽子の日記」については云ふべきことがない。

（昭和四年十二月記）

解題

水木京太

本全集編纂に從ふ者にとつて、本卷ほど安易に事に當たられたものはない。それは先生は生前短篇小說選集を出される豫定で、すでに作品の分類や序列をきめてゐられたから、これに從つて收錄すればよかつたのである。中でも十篇餘には夥しい添削が加へられてゐ、或は全部に亙つてこれを行ふ意圖だつたかと思はれるが、業半ばにして簀を易へられたのである。そこで〇印のある作品は新なる加筆に據り、然らざるものはすべて最終の發表に從つて校訂した。一卷を通じて措字假名遣ひの統一を得ないのはそれが爲である。

五十五篇の短篇中、Iは生生が假りに「少年と學校」と題されたものである。最初の發表年月は左の如くである。

十三年——明治四十一年十月「新小說」
〇父の否定——もと「否定」と題された。明治四十二年四月「文章世界」
〇騎兵士官——明治四十一年一月「新小說」
〇熊次の家族——明治四十一年十一月「太陽」
〇ヂブラルタルの貝——明治四十三年三月「早稻田文學」

○青泊君——明治三十九年七月「帝國文學」
○病友——明治四十年一月「帝國文學」
○留任運動——「留任」改題。明治三十七年十一月「帝國文學」（小泉八雲氏記念號）
○追悼文——明治四十年十一月「趣味」

IIは「醉人」までの「路上（の觀察）」と、「馭者」以下の「旅（の記念）」との二群から成つてゐる。

色の褪めた女——明治四十年六月「文章世界」
空腹——もと「飢渇」として明治四十年十月「新小説」
巣鴨の鯉屋——明治四十一年十一月「中學世界」
沈默——明治四十二年一月「新天地」
○風船賣——明治四十二年七月「秀才文壇」
乞食——明治四十二年九月「新潮」
不思議——明治四十三年七月「文章世界」
歸り道——
醉人——明治四十一年三月「東亞之光」
馭者——明治四十年七月「趣味」

事業――明治四十一年五月「文章世界」

蝙蝠傘――

失明――明治四十二年一月「帝國文學」

軍醫の家――

○孫の巡禮――明治四十二年十月「文章世界」（秋風號）

東京へ――明治四十三年二月「新小說」

III も「姉妹」までを「諷刺」、最後の四篇を「內（反）省」と假りに名づけられてゐる。

掏摸――明治四十一年一月「趣味」

侮蔑――明治四十一年三月「趣味」

消滅――明治四十二年三月「趣味」

秘密――明治四十二年十一月「趣味」

眞空――明治四十三年一月「趣味」

祈禱――明治四十二年八月「現代」

十分間演說――

鼓――明治四十一年九月「太陽」

不男――

夢――「枕」の改題。大正元年九月「文章世界」

姉妹――明治四十一年五月「新小說」

手――明治四十一年一月「文章世界」

粘土――明治四十一年六月「趣味」

後悔――明治四十三年九月「中央公論」

捕縛――明治四十五年六月「新潮」

IVに集められたものは「役者と藝者」と假の名が附されてゐる。

堀田の話――明治四十二年一月「新小說」

逸話――明治四十三年一月「文藝倶樂部」

平氣――

旅役者――明治四十一年九月「新潮」

先の亭主――明治四十二年一月「文章世界」

夢中――明治四十一年八月「趣味」

梅龍の話――明治四十四年十二月「中央公論」

羽織――明治四十五年五月「中央公論」

草市の晩――明治四十四年十月「新日本」

手紙風呂――大正四年一月「三田文學」

總てを失ふ話――大正六年八月「中央公論」

Vは「西洋」と題したものである。

夜鳥――大正四年四月「三田文學」

この外豫告の如く「Tokio の消印」(大正四年四月「中央公論」)を採録してすでに印刷に附すまでになつてゐたが、今日といへども猶檢閲當局の忌諱に觸れる惧あることを思ひ、遂に保留のやむなきに至つた。大正十年以後先生は主として戯曲の創作に從はれたので、娯樂雜誌に寄せられた作品以外には殆んど小説の著作がない。卷末に附した「帽子の日記」(大正十二年六月「新潮」)がその唯一のものである。しかし先生が斯種の新體の小説をなほ書き續ける計畫を持つて居られた一事は、この作に「習作第一」と傍題されたのと座右の手帳に「帽子の日記」とならべて四五の題名が心覺えとして記されてゐることに依つて知ることが出來る。

先生はこれまでに十二册の短篇選集を公にされたが、その二册が發賣禁止の厄に遭つてゐる上に、小説家としての活動が稍前期に屬した故とを以てそれらの著書は現在市上に多く流布してゐない。ここにはただその書名だ

けを舉げて、「年表」に詳述の機を得たいと思ふ。

「窓」——明治四十一年春陽堂刊。

「蝶」——明治四十二年水野書店刊。

「笛」——明治四十三年春陽堂刊。發賣禁止。

「霧積」——明治四十五年春陽堂刊。

「鷗」——大正二年籾山書店刊。

「一里塚」——大正四年植竹書院刊。

「手紙風呂」——大正五年通一舍刊。制限版。

「伯林夜話」——大正五年春陽堂刊。發賣禁止。

「英一蝶」——大正七年玄文社刊。

「手鏡」——大正七年春陽堂刊。

「足拍子」——大正十三年プラトン社刊。

「新選小山內薫集」——昭和二年改造社刊。

昭和四年十二月二十五日印刷
昭和四年十二月二十八日發行

小山内薫全集第一卷

第三回配本

非賣品

著作者　小山内薫

發行者　東京市日本橋區通三丁目八番地　和田利彦

印刷者　東京市日本橋區通三丁目八番地　島源四郎

印刷所　東京市小石川區諏訪町五六番地　常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通三丁目八番地　春陽堂
振替東京一六一七
電話日本橋五一・六四一　三七八八

